昭和四年十二月十日印刷
昭和四年十二月十五日發行
昭和十一年四月十日再版

不許複製

國譯一切經 經集部 一

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝（43）{三〇四〇番 二一一六番}

製本所 　南角製本所

索　引

（頁数は通頁を表す）

—ア—

—イ—

—ウ—

—エ—

—オ—

—カ—

—キ—

—ク—

—ス—

—セ—

—ソ—

—タ—

— 經集部—索引終 —

に在るが如し。視れども知るべからず、人之を見ず。又本の其の子、稍稍生長し、因て大樹となり、甚だ高くして巍巍たり。然る後大樹廣く、所覆あり、枝葉華實、遠近の衆人を饒益する所多きが如し。菩薩も是の如し。初發心より已來、少少の福を種へ、功を積み、德を累ねて、遂に無限諸度無極に至る。自ら成佛を致し、一切を度脱す。賢者阿難よ、[一五]受持諷誦して他人の爲に說け。將來の菩薩の奉行すべき所なり。若し千劫に於て、六度無極を行じて善權方便なくば、如ず、是の經典の要を聞くも福彼に多し。何ぞ況んや至心に受持諷誦して同學四輩に宣示して一心奉行すれば、福喩ふべからず。慇懃に書寫して一字を失ふこと勿れ。所以は何ぞ。去來今佛の由つて生ずる所なればなり。同學に宣示し、普く十方に流布せば、一切は慈を蒙つて、乃ち佛恩を報ぜん。』

阿難、佛に白さく、『唯奉じて當に受けて一切に宣布示語すべし。此を何經と名け、何を以て奉持せん?』

佛、阿難に告げたまはく、『「賢劫三昧千佛本末決諸法本三昧正定」と名く。當に受けて奉行し八[一六]極上下無極に宣布すべし。』と。佛說くこと是の如し。

喜王菩薩・一切開士・諸聲聞等・天・龍・鬼神・阿須倫・世間の人民、佛の所說を聞いて歡喜せざるなし。禮をなして去る。

賢劫經（終）

賢劫經は永康元年七月二十一日、月支菩薩竺法護、[一]罽賓沙門より、是の賢劫三昧を得、手に執り、口に宣ぶ。時に笠法友、洛より寄り來り、筆受者趙文龍、其の功德福をして十方に流れしむ。普く遂に恩を蒙り、罪蓋を離る。其れ是の經は次いで千佛を見、稽首道化し、菩薩の[二]決を受け、無生忍を致し、一切法に至る。十方亦爾り。

【一五】經典を受持し、諷誦し、書寫して、保存し、流布させる功德を說く。これは大乘思想であつて、之を說くは大乘經典囑類品の常である。

【一六】八方上下即ち十方をいふ。

【一】罽賓。月氏國を言ふ。現在の中央亞細亞に位す。迦膩色迦王前王に、勢を張つて、文化興つた。印度、支那交通には道はこゝを通つた。

【二】決（Vyākaraṇa）。記莂、別記を言ふ。

むべからず。痛みは言ふべからず。甚だ憐傷すべし。佛出世の間、皆斯の類と爲る。開示して之に語るも肯じて信受せず。放心蕩逸にして盲の冥に投ずるが如く、狂ふて水に溺るるが如し。猶ほ趣谷に迷ふて、衆難を見ず。佛は大慈を以て大道を顯揚し、諸度八萬四千を頒宣して、無量の法を以て、衆生を化す。八萬四千の衆結の患・四魔の難、皆爲に降伏す。吾我を計らず、無上正眞の道意を發さしめて菩薩法を行じ、生死の苦を濟ふて三惡趣なし。自ら度し彼を度脱して三界の患なし。然して後來世諸學の四輩、菩薩法を聞いて之を知つて快となし、諷誦して心の懷に抱著すること能はず、雜句説を喜び、深妙空法の義に志して、至深の慧、亘然として際なきを聞かず。又所習を興して以て第一となす。大道を聞くあれば、聽く可らずと謂ひ、易解し易きを得んと欲して其の罪福を說く。[一二]倚俗・神仙・世典・雜言を攀緣稱說して、之を至妙と謂ひ、咸共に學聽して、歡喜無量にして以て自ら忻慶す。宿功の福を荷ふて深法を講ずるを聞いて、反つて復た義を解し、各言ふて復重ねて知るべからず。便ち睡眠して寐ね、或は臥して聞かず。正法の滅盡すること、皆是に由る。』

佛言はく、『我、[一三]過去無數劫の時雜句說を喜んで妄想に倚り住し、六度無極に自ら達して大道に通致する能はず。定光佛に至つて乃ち了し、亘然として衆の妄想を捨てゝ、心に所著なく、乃ち能く無所從生法忍を逮得す。定光佛の爲に授決せられ所となる。三世の空を解するに無礙法を以てし、尋いで今の五濁の世を覩るに、多く逆ひ少しく順つて罪計るべからず。末世にあつて佛身を示現し、餘の濁俗を度して道法を行せしめ、三界の難を濟ふて悉く永安ならしむ。』

佛、阿難に告げたまはく『是の過去諸佛の學業を受け當來現在の諸度無極の八千四百を變じて八萬四千となす。及び其の賢劫千佛の本未宿命の所行、[一四]初發心より佛道を成ずるに至るまで、國土・壽命・父母・妻子・上尊の弟子、人を度するを得たる數、當に開化すべき所、猶ほ種樹の下、子、土

【一二】偏よつた風俗、神仙の說、世俗の文書、法則、經濟等の無駄な言說(即ち外道說)をなし、從ひ、說いて、それを最上となし、佛說の正道に從はぬをいふ。
【一三】過去世に於て釋迦佛梵童雲(megha)として波羅門の師に從つて外學を學び、後定光佛(Dīpaṃkara)に出會つて蓮華五莖供養し、佛道を修したのをいふ。
【一四】初發心、初めて求道心を起すこと。

て自然に消除せしめ、諸の學士をして恣意精修して、長へに安隱を得しめん。』と。佛曰く、『善い哉、天帝よ、吾、爾に代つて喜ぶ。乃ち無上大道を助衞せんと欲せば、去來今佛の由つて生ずる所にして、權方便・六度無極・三十七品を除き、一切諸法の逮ぶ能はざる所にして、其の斯の法を學ぶ者は生死を超越して、疾かに正覺を成ぜん。』と。

爾の時四天王、前んで佛に白して言く、『我等、世尊よ天上自然の樂を放捨し、法師に往詣して、而も之を擁護せん。百〔九〕由旬外伺求するも、其の便を得る者なからしめ、講ずる法師をして廣く道化を布かしめん。古の大聖教、永く久しく存するを得て、賢劫中の千佛の本末をして十方に周流せしめん。諸の當に來つて學ぶべき者、之を聞いて慕ひ及び、是に從つて成ずるを得。此の三昧をして斷絶せず、三寶を興立して一切濟を蒙らしめん。』と。

〔一〇〕囑累品第二十四

爾の時、世尊、賢者阿難に告げたまはく、『斯の本法を受くるは、古今諸佛の由つて生ずる所なり。人命は得難く、經道値ひ難く、佛世遇ひ難し。難きを知る所以は、千佛過ぎて已り、六十五劫にして世に佛あるなく、中間曠絶す。大稱劫を過ぎて、八十劫中に亦復た佛なし。星宿劫を過ぎて三百劫を經、玄に法教を斷ち、佛復た興らず。淨光劫に至つて乃ち當に佛あるべし。是の故に之を知る。佛世値ひ難く、世人傷むべし。盲冥に投在して道經を識らず、生死に流墮して輪轉際なし。若し地獄にあらば、燒炙毒痛、復た計るべからざること億載年歲なり。餓鬼は飢渴窮乏して甚だ困しみ、生死も得ず、苦惱燋然〔一三〕として計數すべからず。脫出するに期なし。畜生は禽獸轉た相食噉して、斯の毒害を受け、動もすれば劫數あり。冥より冥に入り、苦より苦に入り、地獄を出でては復た餓鬼に入り、餓鬼を出でては復た畜生に入り、地蟲・屎蟲・草蟲・螟・蟲、一一之を說くも、終に極

〔九〕由旬(Yojana)、又俞旬、揄旬ともいふ。新稱、踰繕那。里程を計る稱目である。帝王一日、行軍の里程であると。或ひは四十里、或ひは三十里といふ。異說多し。

〔一〇〕囑累品、本經の弘通を囑托することを明す品の名。法華經・普曜經等の大乘經典等には多く之が卷末にある。

〔一三〕燋然、燋、こがすこと。然、もやすこと。

一時是の三昧正定を聞いて、以て用ひて勸助するには如かず。昔。已來立つる所の福慶を斯の經典所建の功祚に比すれば、百倍千倍萬倍巨億萬倍も、以て喩を爲すなし、所以は何ぞや？斯の經の至要は去來今佛の由つて生ずる所にして、大目阿彌陀・阿閦如來より賢劫千佛に至るまで、三世限りなく、皆是の定に由つて自ら成佛を致す。猶ほ虛空が一切萬種の所有十方三界の有無の諸形を含受するが如し。斯の定は是の如し。無上正眞は大道を含苞し、黎庶を開化して皆法身に入らしむ。』

佛、是の經を說く時、不可計の菩薩、之を聞いて亘然皆、不退轉地に立つを得たり。無央數人は悉く無上正眞の道意を發し、十方の會する者は皆咸悉く恩を蒙る。八十億載の諸天人民、塵を遠ざけ垢を離れて諸法眼生ず。是の諸天人、佛の所說を聞いて善心生じ、道意明らかなり。華を散じて三千大千世界を周遍し、以て佛上を覆ふ。此の三千世界六反震動し、天、虛空に住して百千の伎を鼓し、以て佛及び諸大衆を娛樂す。喜王菩薩等三十億人、普く皆一時に是の三昧を得たり。

時に天帝釋、前んで佛に白して曰く、曰く、『快い哉、法化の其の義至れり。深妙なる哉、及び難し。古より今に至るまで未だ曾て是の如き眞義を見聞せず。諸度無極は種種別異にして、品品の所宣盡く暢べざるなし。內外表裏法教の開く所、三毒五陰十二牽連四大六衰の諸蔽睡眠[八]、忽ち除かざるなく、四等四恩六度無極・空・無相の願・大慈・大哀・善權方便を宣示して、道化を敷演して、以て衆生の八萬四千の衆結塵勞を消し尋いで輒ち四魔滅除して伏をなし、眞道の法藥は三界の病を療し、三達の船は十方を載度す。去來今佛の由つて生ずる所なり。諸の過去無央數佛を歎じ、元始諸尊の發意以來、行を積むこと至眞にして自ら成佛を致し・諸の當來の菩薩の所行を化す。千佛の本末・發意成佛・國土・父母・諸子・侍者・左右上首の衆・學教する所の弟子、吾等之を聞いて、冥に於て明を覩るが如し。若し是の賢劫三昧經典の要を學ぶ者あれば、吾官屬と與に往いて之を營護し、當に心安らかに意定まつて、忘れざらしむべし。其の左右にあつて、之を宿衞して、衆の邪鬼に敕し

【八】隨眠。小乘有部の宗義では煩惱の異名とり大乘唯識の宗義では煩惱障所知障の種子の名とする。有部では貪瞋等の煩惱が有情に隨逐して離れないので隨と言ひ、煩惱の狀體が幽微で了知し難い睡眠の狀體の如しであるので眠といふ。

念じて當に是の三昧定を求むべし。若し菩薩あつて速かに無上正眞の道を行じ、最正覺をなさんと欲するに至らば、當に勤精進して、斯の三昧定の意を學び、受持諷誦して一心に奉行し、他人の爲に說いて廣く其の義を解かしむべし。』佛、是に於て頌して曰く、

〔六〕道義を志求して　佛の正覺を逮得せんと欲せば、　慕ふて此の天中の天の〔七〕　尊業を勤學すべし。　其の餘の諸の學業は　斯の如き利あるなし。　唯當に正住に立つて　正誠の道行を修すべし。　若し此の德を信樂すれば、　所生の處、變らず　誓願する所斯の若く、其の福の報應を得。　是の故に和心を奉じて、　諛諂の意を懷かず、　專精に行を勤修して、中に言ふ所の教の如くせよ。　佛の咨嗟する所は斯の諸の勝なり　若し斯の神聖を覩んと欲する者あつて、　廣く教法の訓を布かんと欲せば、　當に斯の教を前の如く行ずるを習ふべし。　若し能く勸助し、德具足し、　若しは復た執持・諷誦して讀むも、　衆生は盡く際を思ふ能はず。　何ぞ況んや之を聞いて能く奉行せんや？　說を分別して他を化するの意あり、晃耀所志の道を御行して　相好諸佛の法を逮致すれば、　則ち當に是の三昧を逮得すべし。罪釁を消除して因つて魔を降し、　諸見を消滅して愛盡く然ゆ。　清淨なる諸佛土を娛樂して、　斯の三昧を行じて致すを難しとせず。　輒ち解脫成具の光を獲て、　一切所治の業を總持すれば、　則ち所願を成じて正覺に逮び、　斯の定意に住して皆能く辯ず。　佛已に此を嘆じて其の敎を說く。　汝等、是の餘法を造行して　來世の時恨を懷いて、　我、一切智を違失せりと言ふこと勿れ。　今咨嗟する所の度無極　若し慧印の道を慕求するあり、　若しくは遇ふも斯の義を行ずる能はず。　身に倚著するものは聖明なし。　將來の末俗返義の人、諸法長き惡趣を消滅す　大智の士は以て用ひて憂ふ。　常に衆塵を畏れて放逸するなし。』

佛、復た喜王に告げたまはく、『若し菩薩あり、千劫の中六度無極を奉じて、權方便を捨つるは、

【六】以下一句五字の偈文。
【七】天中天(denānām de-nah) 天の中の天、即ち普通帝釋天(Śakra)のことをいふ。此處では佛をいふ。

三昧定を學ぶならば、家に居るべからず。能く分別して斯の義を暢ぶること甚だ遠し。「時に轉輪王、此の至教を聞いて心に念言すらく、『國に在りては穢濁あり、出づれば乃ち清淨なり。寧ろ國を棄てて、鬚髮を除去し、家を捨て、業を捐て、袈裟[三]を服著して行じて沙門となり、濁れるを釋き、清きに就き、乃ち佛教に應じ、輒ち所計の如くすべし』と。國を棄て、城を捨てて四方を貪らず、鬚髮を除去して法の袈裟を被り、行じて沙門となる。及び千子・八萬の大臣・八萬四千の諸后婇女と皆從つて出家して悉く沙門となり、咸佛に往詣して足下に稽首し、長跪叉手して世尊に此の三昧定を諮問す。時に佛心性を知り、是の三昧を以て七日を具足して廣く爲に解說す。斯等之を聞いて展轉して相謂ふ。『是の三昧法は甚だ見聞し難し。我等寧ろ好諦に此の三昧定を書寫し、持諷誦學して人の爲に具に說くべし。』咸共に書寫し、供養奉事して各經卷を執つて、少しく能く諷誦し、壽終の後皆共に和同して、六十姟の諸佛の正覺を見るに、各諸佛の所にて是の三昧を聞き皆家を棄捐し、出でて沙門となり、普く斯の定を得たり。是の德本を以て悉く當に佛を得べし。』本所誓の如く正願に違はず。』佛言はく、『喜王よ、爾の時の普廣意轉輪聖王を知らんと欲せば、則ち定光如來是なり。其の佛の侍者、名けて無損智比丘と曰ふは維衞佛是なり。其の王の千子とは是の賢堅中の千佛を過ぎ已る。六十五劫は斷じて佛無るべし。然る後劫あり。大名稱と號す。皆斯の劫同じうして最正覺を成ず。彼の世の時の八萬の大臣は大名稱劫にあつて復た學ぶ。是の劫を過ぎ已つて、中間に斷絕して竟に八十劫、都て佛興るなし。然る後、劫あり、喩星宿[四]と名づく。其の八萬の大臣、斯の劫中に於て最正覺を成ず。星宿劫を過ぎて中間斷絕し、竟に三百劫中久しく佛興るなし。然る後劫あり、重清淨と名づく。此の轉輪聖王の后妃婇女八萬四千、其の劫に當つて最正覺を成じ、各各號を異にす。』佛言はく、『喜王よ、斯の三昧定の果報は無極にして巍巍たること是の如し。是の故に喜王よ、今佛は一切菩薩に囑累[五]す。若し菩薩あつて、志性仁和にして所慕なく。身命を貪らず。唯

【三】袈裟(Kāsāya)譯、不正、壞、濁、染、僧衣をいふ。(Kāsāya は赤褐色の意である。衣を赤褐色に染める故に袈裟(Kāsāya)といふ。

【四】星宿劫、過現未三大劫中、未來大劫の名。此の劫中千佛ありて其世し日光佛を始とし、須彌相佛を終りとす。佛の出興、天の星の如くであるので星宿劫と名つける。

【五】囑累。事を言いつけて彼を累はこと佛が經法を弟子に說いて流布せしめる場合にいふ。

の爲に是の定意を說く。時に國王あり、王德華と名づく。佛の所說に是の定意の義を聞き、其の八萬四千の諸后婇女及び其の千子に告ぐ。『是の深要は定めて分別すべきこと難く、斯の義の所趣は甚多巍巍として逮ぶべからず、既に了すべからず。行ずる能はずと雖も、當に開解を求むべし。唯口に誓願し、心に本行を思ふて、當に斯の定を勸むべし。佛の所演は甚快無量にして、一切等心して咸共に勸助す。世尊の講ずる所、甚だ善し。甚だ善し。是を以て勸助すれば、八十劫生死の難を超へ、居家にあつて總持を逮得す。名づけて事業と曰ふ。復た疑結するなく、皆共に篤信して佛所說の如くせよ。斯の德本を以て、三垓の諸佛・世尊に値見し、皆諸佛に從つて此の三昧に逮べば、惡趣、勤苦の路・三惱の患に墮せず、八難無閑の厄に遭はず、是の行業に因つて無上正眞の道を逮成して最正覺をなし、方に當に佛道を成ずべし。十方を度脫して濟度蒙らざるなからんと。喜王の意の所趣に於て云何？　爾の時の德華王は豈に異人ならんや。斯の觀を造す勿れ。所以は何ぞ。見今現今の[二]無量光如來是なり。其の王の千子とは、今賢劫中に千佛興る者是なり。斯の定を勸助し、神足滅德巍巍として是の如し。何ぞ況んや如上の法教を諷誦し奉行し習持するをや。』

佛復た喜王菩薩に告げたまはく、『乃往過去無央數劫に、時に佛あり、樂無量施と號す。十姟衆の眷屬と圍遶せられて說法をなす。其の紫金光照耀する所あり。斯の光の照す所、赤栴檀に入り、木櫁美香、展轉して相動じて、十方に普周す、己の精勤に因つて一切を慈愍し、淸白の行を奉じて、是の巧報を致すなり。時に轉輪王あり、名を擇明と曰ふ。是の比像供養の具を以て平等正覺に奉行して、普く悉く幷びに一切聖衆に周くし一一の精舍皆給使を與ふ。彼も亦咸是の三昧の定意を聞き、因つて斯の業を行じて皆な悉く普くす。一切正法は佛の宣布する所。亦共に一心に要義を咨受す。時に佛の侍者を名けて無損智と曰ふ。博聞最上にして佛意を失はず、隨時の宜うする所、繩墨に違はず。其の佛、時に應じて彼の侍者に告げたまはく、「佛、曉了して是の三昧定を解す。如し吾本此の

世尊(Bhagavat, Lokanātha)。

【二】 無量光如來。Amitābha-buddha(阿彌陀如來)の譯名。詳しくは Amitāyus-buddha, Amitābha-b.(無量壽無量光如來)。

つて最も佛道を尊ばば、世間に處すと雖も、永安の業にして　既に方俗に遊んで大財富をなし　所至倚るなく、無所繫屬なり、衆魔を降伏して甘露を逮得し、　七寶の業を以て衆厄を濟飽す。　願はくは世間にあつて必ず俗を過度せん。　猶ほ大雨普く天下を潤すが如し。　復た苦に遭ふこと無數百千なりと雖も、　久しからずして功勳威德を成ずべし　一切世間皆斯の無に歸す　是を以て道に行じて以て勞となす勿れ。　皆能く衆苦の患を含忍すべし　若し罪報を以て惡趣に墮するも、　功勳の德を承けて必ず天上に生る。　何ぞ明智する所愚と諍訟せん。　無明は迷惑し、智慧は志安らけし。　智は道果を致して癡は之を覺らず　是の故に道を行じて悉く以て之を忍べり。　愚は諍亂を喜び、智は訟ふ所なし。　斯に由つて衆の不應業を棄捐して、　其の精修智明の行を修せよ。　以て能く斯を捨てて利養に倚らず。　常に勤修して此の三昧を奉ずべし。　一一諸佛の道德を思念して、　無央數億姟劫の難を忍べ。　佛の功勳は不可思議にして、　衆苦を更ゆると雖も固より道慧を習ふ。　忍を以て鎧となし、及び定意を行じ、　精進の幢を立つて種の禁戒を樂しみ　智慧を藥となして力に等倫するものなく、衆魔を降伏して甘露の果に逮ぶ。　慈氏の徒黨道友を奉行し　度無極を勸めて毀壞する所なし。　行空の室宅は澹怕を食となし、　所習の行業は一切智德なり。　是の故に常に志して放逸の行なし。　如上の所敎を決解奉訓すること　猶ほ鷹鳴いて雲雨を毀散するが如し。　當に普智を得べし勢得て久しからず。』

歎古品第二十三

時に佛、復た喜王菩薩に告げたまはく、『乃往過去久遠世の時、佛あり、無量精進　如來・至眞等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上道法御天人師と號し、　佛・世尊と號す。百千億諸弟子衆・天龍・鬼神

【一】佛の十號擧げらる。但し應供外一、二を缺く。一、如來、多陀阿伽陀(Tathāgata)、如來の道に成じて來つて正覺を成ずるが故に如來と名くと。二、至信等正覺(Samyaksambuddha)、佛陀と同じ。正遍知とも言ふ。三藐三佛陀、正しく遍く一切の法を知るが故に言ふ。四、明行足、鞞多庶羅那三般那(Vidyā-caraṇasampanna)、三明の行が具足する故に言ふ。五、善逝、修伽陀(Sugata)、嫌去好去といふ。一切智を以て大車とし、八正道を行じて涅槃に入る故に言ふ。六、世間解、梵、路伽憊(Lokavid)、世間の有情非情の事を能く解する故に言ふ。七、無上道法は無上士の意か。梵に阿耨多羅(Anuttara)、諸法の中にて涅槃無上なる如く、一切衆生の中に於て佛も無上である故言ふ。八、御、調御丈夫の約か、梵、浮曇蘖婆羅提(Puruṣa-damya-sārathi)、佛ある時は柔軟語にて、或る時は苦切語にて能く丈夫を調御して善道に入らしめる故に言ふ。九、天人師、梵、舍多提婆魔嵬沙喃(Śāstā devamanuṣyāṇām)、佛は人及び天の導師で、能く作すべきと、作すべからざるとを敎示する故に言ふ。佛(Buddha)、

り三法衣を以て衆の眷屬と與に其の佛に貢上す、是に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。慧業如來は本宿命の時、善見佛の所に從つて初めて道心を發す。大衆と俱に大幢蓋を以て和心同・意して其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み自ら正覺を致して一切を度脫す。爾の時世尊粗千佛を擧げて都て本末を較べ、諸の一切大會集衆をして其の至要を知らしめ、其の德を嘆ぜんと欲す。因つて頌して曰く、

『諸佛の所にあつて福祚を建立し、　所修の功少くして言ふに足らざるも、　而も報應の果實を獲ること是の如し。　何ぞ明知する所に道心を發さざる？　虛空は尙ほ盡く其の際を度るべきも　其の大海水も亦計量すべきも　少少の信喜樂して佛所に向はば、　其の德の報は能く限量することなく、　八難に墮せず、蔽礙に値はず、　斯に緣つて乃ち無爲安樂を致す。　是の故に佛の最勝福田に遇ひて　恭恪奉事行じて放逸するなかれ。　今我現在若しくは滅度の後、佛舍利を取ること、猶ほ芥子の如きも、　信尊懷喜して若し供奉するものは、　其の福無底にして德思ふべからず。　虛空の界及び衆生界　一切智心の發して佛德に施せば、　斯の四法あり、誰か敢て邊底あらん、　唯佛獨り知つて能く盡限するものなし。　猶ほ貧匱虛乏窮厄して　大藏の周り四十里なるを得るを喜ぶが如し。　若し道心を發さば其の德是の如し。・所住に一切衆生を救濟す。　其の十力尊八娛樂を以てし、　斯を以て恩加して五百佛護る。　曾て八萬上首の諸佛を見る　佛以て四可悅の義を頒宣して　八十四義乃至　乃至六萬の諸法の門を曉了分別す。　七十六慧道地を敷演す。　佛以て十八の諸行を解暢す。　其の十吉祥意五萬便　斯の十行本變じて百一億なり　諸緣覺の等しく逮ぶ能はざる所なり。　何ぞ況や音に倚るの衆聲聞の黨をや。　其の餘の諸相衆好の八十　諸佛威儀功勳の逹する所にして窮極すべからず以て喩をなすなし。　是の故に佛不可思義と名く、　若し發心する者あ

養す。是に縁つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。有承樂如來は本宿命の時、善根佛の所に從つて初めに道心を發す。其の佛に貢上して服上尊を施し、下黑の良衣細氎を用ひず。斯に縁つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。無量覺如來は本宿命の時、威音佛の所に從つて初めて道心を發す。其の方面にあつて、其の佛に所可坐樹を貢上す。斯に縁つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。善顏如來は本宿命の時、光音佛の所に從つて初めて道心を發す。時に衆及び青蓮華五莖を採て、其の佛に貢上す。斯に縁つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。聖慧如來は本宿命の時、善住佛の所に從つて初めて道心を發す。時に比丘となつて閑居に處在し、其の佛所の經行處を淨除す。斯に縁つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。光明如來は本宿命の時、無量威佛の所に從つて初めて道心を發す。城市に居在して直百千價の坐具牀褥を其の佛に貢上す。斯に縁つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。堅誓如來は本宿命の時、縁思佛の所に從つて初めて道心を發す。華鬘師となり、華を以て其の佛に貢上す。斯に縁つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。吉祥如來は本宿命の時、閑稱佛の所に從つて初めて道心を發す。時に薪を負つて、道を行き、風雨に値ふ。因つて精舍に入つて佛弟子を見、殊勝華を以て其の佛に貢上す。斯に縁つて德を積み自ら正覺を致して一切を度脫す。誠英如來は本宿命の時、勳華如來の所に從つて初めて道心を發す。時に適洗浴し、以て已に發心して其佛に貢上するに好香手を以てし、自ら施與す。斯に縁つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。青蓮華如來は本宿命の時、妙華光如來の所に從つて初めて道心を發す。時に尊者の家に生れて子となり、聰明勇慧なり。紅蓮華を以て其の佛に貢上す。斯に縁つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。鉤鑠如來は本宿命の時、難勝佛の所に從つて初めて道心を發す、時に香市衆事販賣の主となり、赤栴檀を以て佛の經行地に塗る。斯に縁つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す、安氏如來は本宿命の時、輭擲佛の所に從つて初めて道心を發す。時に國王に遣行されて使者となり

宿命の時、善見佛の所に從つて初めて道心を發す。夜に夜精舍に臥し、其の佛に拭手手巾を貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。名聞如來本宿命の時、染家に子となり、善哉像佛の所に從つて初めて道心を發す。阿醯勒を盛りて滿手華を取り、佛上に供散す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。大稱如來は本宿命の時、意稱佛の所に從つて初めて道心を發す。時に其の國にあつて最も窮匱をなす。拘須摩好柔妙華を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。明珠髻如來は本宿命の時、寶淨佛の所に從つて初めて道心を發す。時に幼童となり、滿手雜香を以て其の佛に供散す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。堅强如來は本宿命の時熾盛光佛の所に從つて初めて道心を發す。時に天上の神妙天子となり、天好扇を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。師子步如來は本宿命の時、度超越佛の所に從つて初めて道心を發す。曾て蓋師となり、盛陽暑時に其の佛に蓋及び履屣を貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。神樹如來は本宿命の時、寶淨佛の所に從つて初めて道心を發す、時に牧羊人となり野に於て羊を牧す、塗路にあつて佛を見奉つて欣然たり。卽ち樹皮を取つて其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。輙勝如來は本宿命の時、決了覺佛の所に從つて初めて道心を發す。曾て牧羊人となつて以て、好鉢を取つて中乳を盛滿し、其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。智覺如來は本宿命の時、慧英佛の所に從つて初めて道心を發す。時に凡夫となり、法坐を布設し、一日佛と比丘衆を供養す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。善住如來は本宿命の時、動覺佛の所に從つて初めて道心を發す。曾皮治家の爲に子となり、其の佛に滿一抱毛を貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。虛空如來は本宿命の時、行意佛の所に從つて初めて道心を發す。時に客作人となり、美水漿を以て其の佛に貢上す。作務する所の已の所食の具を斷ちて其の佛に上つて供

將て田を耕し、一阿摩勒果を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み自ら正覺を致して一切を度脫す。勝知如來は本宿命の時、無能毀轉法輪佛の所に從つて初めて道心を發す。時に履緹師となり、呵犁勒果を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致し一切を度脫す。喜王如來は本宿命の時、降念佛の所に從つて初めて道心を發す。時に香師となり、好雜香を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致し、一切を度脫す。妙御如來は本宿命の時、神足威佛の所に從つて初めて道心を發す。時に幼童となり、三品の果を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。愛英如來は本宿命の時、功勳王佛の所に從つて初めて道心を發す。時に國王明智の太子となり、華を以て佛に貢す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す、妙天如來は本宿命の時、嘆度無極佛の所に從つて初めて道心を發す。時に賈客となり、甘美の蜜鉢を貢上す。斯に緣つて德を積んで、自ら正覺を致し、一切を度脫す。多勳如來は本宿命の時大力佛の所に從つて初めて道心を發す。時に國の貧人となり、其の佛一丈六尺經行の處に經行す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。衆香手如來は本宿命の時、曜妙淨佛の所に從つて初めて道心を發す。時に賣香家の子となり、因つて香水を其の世尊經行の處に灑ぐ。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。順觀如來本宿命の時見無罣礙佛の所に從つて初めて道心を發す。時に山居にあり、好繒氎作校飾蓋を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。雨音如來は本宿命の時、師子步佛に從つて初めて道心を發す。時に陶師となり、澡罐を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。善思如來は本宿命の時普觀佛の所に從つて初めて道心を發す。採華家の子となり、一蓮華を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。快意如來は本宿命の時、施超度佛の所に從つて初めて道心を發す。時に尊者の子となり、須曼華蓋を其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み自ら正覺を致して一切を度脫す。離垢如來本

道心を發す。時に尊者の子となり、好衣服を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて行を積み自ら正覺を致して一切を度脫す。梵氏如來は本宿命の時、頒宣尊佛の所に從つて初めて道心を發す。時に大官となり、石密甘庶餳を以て其の佛に貢上せしむ。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。無量耀如來は本宿命の時、淨光明佛の所に從つて初めて道心を發す。時に他の爲に賈作す。好蓋あるを以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。龍施如來は本宿命の時、師子頻申佛の所に從つて初めて道心を發す。時に髻華師の家の爲に子となり、華寶器を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。堅步如來は本宿命の時、離意勝佛の所に從つて初めて道心を發す。時に珠師の家の爲に生れて子となり、寶珠の瓔珞牀席坐具を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。不虛見如來は本宿命の時、善見佛の所に從つて初めて道心を發す。時に家は醫師をなし、生を療し、病を治む。好雜藥を以て聖衆に貢上し衆病を治せしむ。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致し、一切を度脫す。精進施如來本宿命の時、度無量佛の所に從つて初めて道心を發す。時に轉輪聖王となつて、精舍を興起す。樓閣房室其の數百千なり。赤栴檀を以て衆牀となし、好坐具を布いて其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致し、一切を度脫す。賢力如來は本宿命の時、名聞光佛の所に從つて初めて道心を發す。時に凡人となつて、百味の供を以て其の佛及び聖衆生に貢進し、常に十妓の弟子に飯食す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。欣樂如來は本宿命の時、弘稱佛の所に從つて初めて道心を發す。時に豪貴の長者梵志の爲に子となり、眞珠の校飾妙好粧及び琦異の扇を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み、自ら正覺を致して一切を度脫す。無退沒如來は本宿命の時、寂根佛の所に從つて初めて道心を發す。時に使者となり、五比羅果を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて德を積み自ら正覺を致して一切を度脫す。師子幢如來は本宿命の時、淸和音佛の所に從つて初めて道心を發す。時に凡人となり、犂を

初めて道心を發す。時に王太子たり王を娛樂と名づけ沙竭國にあり。佛正覺を成じて其の光明を振ひ普く十方を照す。緣つて菩薩を行じて自ら正覺を致し一切を度脫す。興光如來は本宿命の時威首光佛に從つて初めて道心を發す。時に轉輪聖王となり、好衣服琦珍異寶を以て其の佛に貢上し、一切に福施す。是に緣つて精進して自ら正覺無上の大道を致し一切を度脫す。大明山如來は本宿命の時往道佛の所に從つて初めて道心を發す。無憂華を以て其の佛に貢上し、功を積み德を累ね每生白赳し、大慈悲を以て一切を愍念して自ら正覺を致し一切を度脫す。金剛如來は本宿命の時堅固佛の所に從つて、忉利天に生れ天帝釋となり、天意華縵陀勒華を以て雨下し、紛紛として其の佛に貢散す。是に緣つて道を行じ自ら正覺を致し一切を度脫す。憶識如來は本宿命の時愛解脫佛に從つて初めて道心を發す。紫金寶珠の瓔珞蓋を用て佛に貢上す。佛身に供散して道意を發して自ら正覺を致し一切を度脫す。無畏如來は本宿命の時不恐佛の所に從つて初めて道心を發す。作性惱悷にして喜んで戲笑し以て妓樂をなし擊鼓歌歎供養して佛を樂しむ。自ら正覺を致して一切を度脫す。寶氏如來は本宿命の時無量音佛の所に從つて初めて道心を發す。時に大臣となり好華香を以て其の佛に貢上す。緣つて菩薩を行じて自ら正覺を致し一切を度脫す。蓮華目如來は本宿命の時普觀佛の所に從つて初めて道心を發す。自己身所著の寶帶牀臥を以て貢奉して用て如來に上り、一切衆生の功德をして自ら正覺を致し一切を度脫せしめんと欲す。力將如來は本宿命の時大御佛の所に從つて初めて道心を發す。時に醫王となり、阿摩勒果を以て其の佛に貢上す。其に緣つて行を成じ自ら正覺を致して一切を度脫す。華光如來は本宿命の時一切威佛の所に從つて初めて道心を發す、時に金師となり寶華飾を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて行を具し自ら正覺を致して一切を度脫す。愛伏如來は本宿命の時、誨供佛の所に從つて初めて道心を發す。曾て博戲家の子となつて好香鑪を以て其の佛に貢上す。斯に緣つて行を積み自ら正覺を致して一切を度脫す。大威如來は本宿命の時照曜首佛の所に從つて初めて

現佛に從つて初めて道心を發す。時に校飾瓔珞家の子となり其の佛に御來將護及び寶瓔珞を貢上して、供養奉事じ菩薩法を行じて精進して懈らず自ら正覺を致して一切を度脫す。堅固如來は本宿命の時莫能勝佛に從つて初めて道心を發す。時に轉輪聖王となり佛世尊を見奉り、八萬四千の七寶の牀席坐具机筵を其の佛に貢上す。因つて道意を興して菩薩法を行じ自ら正覺を致し一切を度脫す。首威如來は本宿命の時威王光佛の所に從つて初めて道心を發す。曾て賈客となつて大海の中に入り明月珠を以て其の佛に貢上す。斯の珠の光明四十里を照す。是に緣つて精進して自ら正覺無上大道を致し一切を度脫す。難勝如來は本宿命の時堅步越佛に從つて初めて道心を發す、時に財を主載し佛を見奉つて欣然たり。楊柳枝を以て其の佛に貢上し口及び齒を洗ふ、是に緣つて淨行自ら正覺を致し一切を度脫す、德幢如來は本宿命の時柔稱佛に從つて初めて道心を發す。其の佛に水器大釜を貢上し以て洗浴す。身垢消除して體汚をして清淨ならしむ、造立光明普く施德を行じ自ら正覺を致して一切を度脫す。閑靜如來は本宿命の時無上佛の所に從つて初めて道心を發す。其の人寶瓔珞師家の子となり、莊嚴瓔珞を其の佛に貢上す。紫金色の履屣牀香を以て布施し奉上す。願はくは一切衆生皆忠意を得んと、是に緣るの故に自ら正覺を致して一切を度脫す。堅重如來は本宿命の時大清悅佛に從つて道心を發す。其の佛に清白の細氎を供養し、其の浴室を溫めて聖衆を洗浴し、及び雜香を奉ず。緣道意を興して菩薩道を行じ、自ら正覺を致して十方を救濟す。梵音如來は本宿命の時柔音佛の所に從つて初めて道心を發す。時に國王の爲に放牧羊を監す。時に梵音佛始めて正覺を成じて野澤の中にあり。其の如來心に悅豫を懷くを見て所服の麨の半を分つて如來に奉ず、緣つて菩薩の無上大道を行じて精進して懈らず、自ら正覺を致し一切を度脫す。堅强如來は本宿命の時無動步佛の所に從ひ手を以て雜寶珍琦を撮取し其の佛に供散して、大導師の家の子となり施に因つて發意す。斯の功德に緣つて自ら正覺を致し一切を度脫す。極上欣如來は本宿命の時無量清淨佛の所に從つて

長者子となり身の好衣を以て乳を用て之を浣ぎ、好名香を燒きて其の佛に貢上す。功德をして十方に歸流し一切に濟を蒙らしめんと欲すと、是に緣るが故に自ら正覺を致し一切を度脫す、勳光佛如來本宿命の時不藏威佛の所に從つて初めて道心を發す。時に凡人となり佛を見奉つて悅豫し稽首歸命す、則ち明鏡衆珍琦寶を以て其の佛に貢上し菩薩法を行ず、是に緣るが故に自ら正覺を致し一切を度脫す。現義如來本宿命の時無量音佛の所に從つて初めて道心を發す。往昔世の時轉輪聖王となり、佛至尊無上大道を見て、若干の挍珞重閣精舍を以て其の佛に貢上し、衆生の德をして猶虛空の如くならしめんと願ず。緣つて正覺を致して一切を度脫す。錠耀如來は本宿命の時明娛樂佛の所に從つて初めて道心を發す。彼の世にある時香家に子となり衆の華香を採つて以て聖尊に上り、心を伏し意を制し其の家室六十億の眷屬と倶に其の佛を供養す、道法を諮受し菩薩法を行じて自ら正覺を致し一切を度脫す、光威如來は本宿命の時普稱佛の所に從つて初めて道心を發す、時に仙人となつて山中に居在し、好白氎を以て經行處に布き其の佛に貢上す。之甚だ尊しと知つて菩薩法を行じ自ら正覺を致し一切を度脫す。醫氏如來は本宿命の時離種佛に從つて初めて道心を發す、時に醫家の爲に子となり以て丸藥衆香の華物を持つて其の佛に貢上す。願はくは一切衆生三毒の病を除かんと。是に緣つて意を興して菩薩法を行じ自ら正覺を致して一切を度脫す、善樂如來は本宿命の時其の柔順佛に從つて初めて道心を發す。時に油家の子となり、油を以て燈を燃し、其の佛に貢上す。願はくは十方各道明を蒙らしめんと。是に緣るの故に自ら正覺を致し一切を救濟す。興盛如來は本宿命の時廣普稱佛の所に從つて初めて道心を發す、其の佛に細好白氎を經行處に布き所施を勸助し、是に因つて意を興して菩薩行を奉じ羣生を愍念し、自ら正覺を致し一切を度脫す、醫所如來は本宿命の時離垢佛に從つて初めて道心を發す。生れて醫家學醫の弟子にあり、佛を見奉つて欣喜し其の佛に若干の丸藥を貢上す。緣つて開士を行じ自ら正覺を致し一切を度脫す。頂髻施如來は本宿命の時普

如來本宿命の時梵音佛に從つて初めて道心を發す、時に皮師となり其の佛に妙好なる履屣を貢上す、願はくは一切近く車乘を致し、然る後皆五通の馳を成ぜしめんと。是の功德に由つて自ら成佛を致し一切を度脫す。照明如來本宿命の時離漫意佛に從つて初めて道心を發す。時に轉輪聖となり八萬四千の行樹を以て貢上して佛に施し、精舍を造らしめ、其の中に經行して精進懈らず自ら成佛を致して一切を度脫す。日藏如來本宿命の時無量成佛の所に從つて初めて道心を發す。時に大姓梵志の爲に子となり、拘翼華を以て其の佛に貢上す、是に因るの故に自ら正覺を致し一切を度脫す、月氏如來本宿命の時、名稱葉佛の所に從つて初めて道心を發す。時に金師家の爲に子となり好寶杖を以て其の佛に貢上す、是に因るの故に自ら正覺を致し一切を度脫す。光耀如來本宿命の時無量明佛に從つて初めて道心を發す。時に其の國に生れて最も貧匱の輩となる、草を負ふて行いて市賣せんと欲す、佛を見奉つて欣然たれども以て貢上するものなし。草を以て佛に奉ず。願はくは功德をして十方に歸流せしめんと。自ら成佛を致して一切を度脫す。善照如來本宿命の時悅意成佛の所に從つて初めて道心を發す。時に園監となり佛を見て欣然と思夷華を以て至尊に貢上し、菩薩法を行じて心に自ら念じて言く、『諸の衆生をして心輭かに華の如くならしめんと。因つて精進に從つて自ら成佛を致し一切を度脫す。無憂如來本宿命の時離意稱佛の所に從つて初めて道心を發す。時に尊者の家に生れて長者子となり最上華を取つて以て佛上に散じ大道無上正眞を慕求す。是に緣るが故に自ら正覺を致し一切を度脫す。威神如來本宿命の時德鎧佛の所に從つて初めて道心を發す。時に長者子となり明月珠及び紅蓮華を以て其の佛上に貢上し、精進して懈らず自ら正覺を致し三界五趣の患を度脫す、燄光如來本宿命の時善見佛の所に從つて初めて道心を發す。時に賈客となつて數大海に入り赤栴檀の好牀臥具を以て其の佛に貢上す、因つて菩薩道を行じて自ら成佛を致し三世生死の厄を度脫す、執華如來本宿命の時悅意威佛の所に從つて初めて道心を發す、彼の世にある時

切を度脫す。大多如來本宿命の時、供稱佛に從つて初めて道心を發す。時に城に入つて佛を見奉らんと欲し、城を出でて因つて稽首歸命して供養をなす。貢上至心して好竹を奉り、心に自ら念言すらく、「諸の衆生をして行直なること竹の如く邪志あるなからしめんと。是に由るが故に常に三寶に遇ひ、ら正覺を致して十方を救濟す。大力如來本宿命の時、師意佛の所に從つて初めて道心を發す。時に香家に生れて子となり、衆の好香を賣る。佛を見奉つて城に入り、心中大に悅び、其の佛に木檻澡鑪を貢上す。手に美香殊異なる雜熏を執り、尊に隨つて侍衞し、願はくは一切衆生悉く道門に入らんと。是に因つて自ら致して正覺を成ずるを得、一切を度脫す。星宿王如來本宿命の時施意佛に從つて初めて道心を發す。時に其の國にあつて貧して所有なし、人の爲に客作放牛使令す。佛を見奉つて欣然として時節の華を以て其の佛に貢上す。菩薩道を行じて精進して懈らず、自ら正覺を致して一切を度脫す。修藥如來本宿命の時、微妙香佛に從つて初めて道心を發し、時に御師となつて佛世尊を見奉る、無上大聖に供順し歸命し、卑遜の心を以て佛と談言す。是を以ての故に三界の難を除き、自ら成佛を致し、一切恩を蒙る。名稱英如來本宿命の時燃電佛に從つて初めて道心を發す。佛の說法を見て、則ち幢旛を以て其の如來に上り卽夜燈を燃して夙夜勤修して自ら成佛を致す。三界の難五趣の患を度脫して皆福慶を恃んで、安きを得ざるなし。英妙如來本宿命の時、蓮華佛に從つて初めて道心を發す。其の身爾の時適犂種を行ふ。佛を見奉つて歡喜し、犂牛を捨て去つて佛足を稽首し、解脫華を以て供養して佛に上る。願はくは衆生をして道德の田を犂し、自ら致して佛を得しめんと。是に由つて四等四恩三脫六度を遵行して、便ち正覺を成じ、一切を度脫す、大光如來本宿命の時、大錠光佛に從つて初めて道心を發す。時に其の國にあつて、最も貧厄をなす。行つて曠野に入りて佛僧の衆を見、錢を以て佛に上つて至尊を供養す。曠野の中にあつて、香を燒き燈を燃し、願はくは三界の衆生心空意淨なること猶ほ曠野の如く、三世普く明かにして三毒の冥なからんと。故に自ら致して佛を得、一切を度脫す。解陰

河沙劫の如きを以て劫となさず、自ら佛を致至して一切を度脱す。其の上壽人命八萬四千歳の時に値へり。師子如來本宿命の時初め發心してより佛を晃昱音と名く。其に因つて發心して五寸五の納衣を以て其の佛に上じ、世尊に供事して菩薩法を行じ、自ら成佛を致す。光餤如來本宿命の時、嘗て賈客となり海に入つて琦珍を獲致し、無量光佛の所に從つて初めて道心を發す。時に世尊を見たてまつて、心中忻然として明月珠を以て其の佛に貢上す。其の道心に因つて菩薩法を行じ、自ら成佛を致して一切を度脱す。牟尼如來本宿命の時悅意如來に從つて初めて道心を發す、時に凡人となつて財富無量なり、佛を見奉つて心開け、珠校華飾蓋を其の佛に貢上し、其の道心に因つて菩薩法を行じ、心中に願言すらく、「是の功德を以て十方に歸流し、皆覆護を見んと。精進懈らずして自ら正覺を致し、一切を度脱す。善目如來本宿命の時、琦妙佛に從つて初めて道心を發す。時に佛の心中燿然たるを見て華香を貢上す。其の道意に因つて菩薩法を行じ、四等心・四恩・四辯・六度無極を奉じ、一切を愍傷して最正覺を致し、一切を度脱す。危厄の衆生弘安を蒙濟せり。善宿如來本宿命の時、安悅如來に從つて初めて道心を發す、時に長者となり、佛を見奉つて歡悅し珓珞妙好の重閣を貢上し、其の佛を供養す、其の道意に因つて菩薩法を行じ、十方を度せんと欲して自ら成佛を致して一切を度脱す。華氏如來本宿命の時、導御佛を見奉つて、初めて道心を發す。時に本貧厄なり、其の發心に因つて三界空を知り、便ち死人の衣を脫して其の佛に貢上し菩薩法を奉じて衆生を度脱せんと欲す。富んで七財を以て諸の衆生の貧厄を致すなからしめ、十方を覆護して自ら成佛を致し、一切を度脱す。第二華氏如來眞等正覺に至る本宿命の時超越首佛に從つて初めて道心を發し、洗口の柳枝一枚を持して其の佛に貢上す。其の道意に因つて菩薩法を行じ、衆生を度脱して自ら正覺を致し、衆の危厄三界の難を救ふ。道師如來本宿命の時、至誠佛を見奉つて初めて道心を發す。時に凡人となつて、身所有の好牀坐具及び赤栴檀を以て其の佛に貢上す。其の道心に因つて菩薩法を行じ、十方を濟はんと欲し、自ら佛を得るを致し、一

卷の第八

千佛發意品第二十二

喜王菩薩復た佛に白して言く、『善い哉世尊唯愍哀を垂れて此の劫中千佛の本末を說きたまへ。昔行を作して菩薩となるを得るの時、何の佛所にあつて初めて道意を發し、功を積み、德を累ね、每生自尅して諸佛を供養し、自ら正覺を致して一切を度脫し給ふや』。佛、喜王菩薩に告げたまはく、「諦かに聽け、諦かに聽け、善思して之を念へ。汝の爲に發意の本末を說くべし。喜王菩薩、諸の大衆と敎を受けて聽く。佛言はく「拘留孫佛本の宿命の時、月意如來を見たてまつり、心中亘然として明の冥を覩るが如く、道無上三界の最尊を知つて、則ち寶蓋を求めて其の佛に貢上し、初めて道意を發して精進して懈らず。自ら正覺を致して一切を度脫す。鉤那含佛本宿命の時師子如來を見たてまつり、寶瓔及び須漫華を貢上して因つて初めて道心を發し、功を積み、德を累ねて、自ら正覺を致して一切を度脫す。其の迦葉佛本宿命の時、梵志の家に生れて幼童子となり、思夷最如來を見たてまつり、心中に解脫して、身の所著の妙好寶帶を脫いで其の佛に貢上し、初めて道意を發して菩薩の法を行じ、中ごろ懈廢せず。自ら正覺を致して一切を度脫す」。佛言はく「今我成佛して釋迦文と號す。本宿命の時、良醫師となり、人の病を主治して醫の功夫を得、寶物衣具して往古の佛を見たてまつるに、吾と同號にして亦能仁如來と名づく。之の至尊を知つて因つて衣物を持して、其の佛に貢上して、初めて道意を發し、四等心・四恩・六度・空無相の願を行じて中ごろ證を取らず。無所從生法忍を逮得して定光佛を見て示現受決して一切三界の衆生を濟はんと欲し、自ら正覺を致して一切を度脫す。慈氏如來本宿命の時、轉輪聖王となり、佛を見たてまつる。逮無極と名く、因つて道心を發し、佛聖衆を請ふて供するに甘饍を以てし、光寶を貢上し、以て一切に施す。所在仁慈にして諸の不逮を愍れみ、生死に周旋すること、恒

總持と名け、母を忻施と名け、子を功福と曰ふ。侍者を難勝と曰ひ、上首の智慧弟子を樂法と曰ひ、神足の弟子を藥氏と曰ふ、一會の說經には十萬の弟子集り、二會には九萬九千、三會には九萬八千にして、皆道證を得たり。佛在世の時人壽五百歲なり。正法存立すること萬五千歲にして舍利幷合して一大寺を興す。

鈎鎖如來所生の土地は城を集賢と名く。其の佛の光明三百里を照す。君子種にして愛目と名け、母を施善と名け、子を仁賢と曰ふ。侍者を明珠結と曰ひ、上首の智慧弟子を學友と曰ひ、神足の弟子を若干月と曰ふ。一會の說經には六十億の弟子集り、二會には五十億、三會には九十億にして、皆道證を得たり、正法存立すること三萬歲にして、舍利普流して十方に遍布す。

安氏如來所生の土地は城を意樂と名く。其の佛の光明百二十里を照す。梵志種にして父を無量寶と名け、母を豐盛氏と名け、子を地施尊と曰ふ。侍者を堅强と曰ひ、上首の智慧弟子を月耀と曰ひ、神足の弟子を師子と曰ふ。一會の說經には九十六億の弟子集り、二會には九十四億、三會には九十二億にして、皆道證を得たり。佛在世の時、人壽八萬四千歲なり。正法存立も亦八萬四千歲にして、舍利普流して十方に遍布す。

慧業如來所生の土地は城を福富と名く。其の佛の光明四百里を照す。君子種にして父を無憂と名け、母を愛海と名け、子を和善覺と曰ふ。侍者を善施と曰ひ、上首の智慧弟子を現在世と曰ひ、神足の弟子を福愛と曰ふ。一會の聖衆は不可計億なり。二會は八百億、三會には七百億にして、皆道證を得たり。其の佛在世の時は人壽八萬姟歲にして正法存立は五億なり、佛舍利を散ずること、醫藥を布くが如く、其の時安住巍巍として逮び難し。若し百一を聞く者あらば、斯等久しからずして成佛正覺せん。況んや復た是の千如來に供奉したてまつるをや。諸の弟子學ぶは言ふに足らざるなり。諸の菩薩等不退轉無所從生法忍一生補處に逮んで十方を度脫すること、不可稱計なり。』

父を愛敬と名け、母を意樂と名け、子を愛光と曰ふ。侍者を園觀と曰ひ、上首の智慧弟子を樂愛と曰ひ、神足の弟子を調友と曰ふ。一會の説經には八十二億の弟子集り、二會には八十七億、三會には八十六億にして、皆道證を得たり。佛在世の時、人壽萬歳なり。正法存立は三千歳にして、舍利普流して十方に遍布す。

堅誓如來所生の土地は城を日遊と名く。其の佛の光明は四十里を照す。梵志種にして父を天愛と名け、母を善意音と名け、子を尊寶と曰ふ。侍者を柔音と曰ひ、上首の智慧弟子を言施と曰ひ、神足の弟子を柔輭と曰ふ。一會の説經には百億の弟子集り、二會には九十七億、三會には九十五億にして皆道證を得たり。佛在世の時は人壽一億歳なり。正法存立すること、四十億歳にして舍利を幷合して一大寺を興す。

吉祥如來所生の土地は城を母愛と名く、其の佛の光明二百八十里を照す。梵志種にして父を錦王と名け、母を華元と名け、子を無量手と曰ふ。侍者を養友と曰ひ、上首の智慧弟子を法事と曰ひ、神足の弟子を勝友と曰ふ。一會の説經には五十億の弟子集り、二會には八十二億、三會には八十六億にして皆道證を得たり。佛在世の時は人壽五萬歳なり。正法存立すること億歳にして、舍利普流して十方に遍布す。

誠英如來所生の土地は城を愛響と名く。其の佛の光明四十里を照す。梵志種にして父を福外と名け、母を賢氏と名け、子を愛名稱と曰ふ。侍者を尊友と曰ひ、上首の智慧弟子を月賢と曰ひ、神足の弟子を樹目と曰ふ。一會の説經には八十億の弟子集り、二會には七十億、三會には六十億にして、皆道證を得たり。佛在世の時は人壽一億歳なり。正法存立は八億歳にして、舍利を幷合して一大寺を興す。

青蓮如來所生の土地は城を甚華威と名く。其の佛の光明四百八十里を照す。君子種にして父を

虚空如來所生の土地は城を愛居と名く。其の佛の光明百二十里を照す。君子種にして父を根施と名け、母を天豪と名け、子を水天と曰ふ。侍者を智結と曰ひ、上首の智慧弟子を上意と曰ひ、神足の弟子を法首と曰ふ。一會の說經には九十億の弟子集り、二會には八十億、三會には七十億にして皆道證を得たり。佛在世の時は人壽千歲なり。正法存立すること萬二千歲にして、舍利普流して十方に遍布す。

無量覺如來所生の土地は城を善蓋と名く。其の佛の光明は三百八十里を照す。梵志種にして父を生明眼と名け、母を龍施と名け、子を妙好と曰ふ。侍者を賢天と曰ひ、上首の智慧弟子を心音と曰ひ、神足の弟子を大枝歩と曰ふ。一會の說經には七十億の弟子集り、二會には五十億、三會には四十億にして皆道證を得たり。佛在世の時は人壽億歲なり。正法存立は六十億歲にして、舍利普流して十方に遍布す。

善顏如來所生の土地は城を威氏と名く。其の佛の光明五百二十里を照す。君子種にして父を樂音と名け、母を樂氏と名け、子を所在吉と曰ふ。侍者を上與と曰ひ、上首の智慧弟子を福慧と曰ひ、神足の弟子を無懼と曰ふ。一會の說經には七億の弟子集り、二會には九億、三會には十億にして皆道證を得たり。佛在世の時人壽三千歲なり。正法存立は萬六千歲にして舍利幷合して一大寺を興す。

聖慧如來所生の土地は城を善清白と名く。其の佛の光明五百六十里を照す。梵志種にして父を師檀と名け、母を離塵と名け、子を勇猛と曰ふ。侍者を阿難と名く。上首の智慧弟子を意行と曰ひ、神足の弟子を須達と曰ふ。一會の說經には二十二億の弟子集り、二會には二十一億、三會には二十億にして、皆道證を得たり。佛在世の時、人壽二萬八千歲なり。正法存立は六萬歲にして、舍利幷合して一大寺を興す。

光明如來所生の土地は城を瑠璃光と名く。其の佛の光明三千三百二十里を照す。君子種にして

神樹如來所生の土地は城を上閻浮と名く。其の佛の光明億里を照す。君子種にして父を樹王と名け、母を意英と名け、子を愛俗と曰ふ。侍者を施耀と曰ひ、上首の智慧弟子を藥解と曰ひ、神足の弟子を二財と曰ふ。一會の說經には四十八億の弟子集り、二會には三百五十億、三會には三百三十億にして、皆道證を得たり。佛在世の時人壽萬八千歲なり。正法存立すること七十萬歲にして、舍利幷合して一大寺を興す。

輒勝如來所生の土地は城を藥氏と名く。其の佛の光明三百六十里を照す。君子種にして父を見敬と名け、母を財施と名け、子を勇施と曰ふ。侍者を法與と曰ひ、上首の智慧弟子を了相と曰ひ、神足の弟子を大根名聞と曰ふ。一會の說經には七十六億の弟子集り、二會には七十四億、三會には七十二億にして皆道證を得たり。佛在世の時は人壽八萬歲なり。正法存立すること六百千歲にして舍利普流して十方に遍布す。

智慧如來所生の土地は城を賢施と名く。其の佛の光明四百四十里を照す。君子種にして父を釋施と名け、母を密威と名け、子を梵天と曰ふ。侍者を法稱と曰ひ、上首の智慧弟子を根意と曰ひ、神足の弟子を尊氏と曰ふ。一會の說經には四十億の弟子集り、二會には三十億、三會には二十億にして、皆道證を得たり。佛在世の時は人壽三千歲なり。正法存立すること一萬歲にして舍利幷合して一大寺を興す。

善住如來所生の土地は城を閑威と名け、其の佛の光明四百里を照す。梵志種にして父を護無害と名け、母を樂音と名け、子を具或と曰ふ。侍者を覺嫉と曰ひ、上首の智慧弟子を上與と曰ひ、神足の弟子を執鎧と曰ふ。一會の說經には四萬六千の弟子集り、二會には二萬五千、三會には四萬三千にして皆道證を得たり。佛在世の時人壽五百萬歲なり。正法存立すること八萬歲にして舍利幷合して一大寺を興す。

大稱如來所生の土地は城を好園と名く。其の佛の光明は八百八十里を照す。梵志種にして父を首積と名け、母を日施と名け、子を勝離意と曰ふ。侍者を聞義思と曰ひ、上首の智慧弟子を密郡と曰ひ、神足の弟子を斷施と曰ふ。一會の說經には五百億の弟子集り、二會には三百億、三會には二百億にして皆道證を得たり。佛在世の時は人壽八萬歲なり。正法存立は五萬歲にして舍利は普流して十方に遍布せり。

明珠髻如來所生の土地は城を照郡と名く。其の佛の光明百二十里を照す。君子種にして父を覺喜と名け、母を思夷氏と名け、子を思兵と曰ふ。侍者を無量寂と曰ひ、上首の智慧弟子を寶威と曰ひ、神足の弟子を逮致と曰ふ。一會の說經には九百億の弟子集り、二會には千億、三會には千二百億にして皆道證を得たり。佛在世の時は人壽九萬歲なり。正法存立すること億歲にして舍利の普流十方に遍布す。

堅强如來所生の土地は城を安思と名く。其の佛の光明千國土を照す。君子種にして父を神氏と名け、母を樹言と名け、子を歡樂と曰ふ。侍者を明珠味と曰ひ、上首の智慧弟子を樂諧と曰ひ、神足の弟子を甚調と曰ふ。一會の說經には千三億の弟子集り、二會には三十八億、三會には五億にして、皆道證を得たり。佛在世の時人壽三萬歲なり。正法存立すること九萬歲にして舍利を幷合して一大寺を興す。

師子步如來所生の土地は城を淸白氏と名く。其の佛の光明千三百二十里を照す。君子種にして父を若干塵と名け、母を妙藥と名け、子を不陀留と曰ふ。侍者を意行と曰ひ、上首の智慧弟子を多豐と曰ひ、神足の弟子を興護と曰ふ。一會の說經には百七十八萬の弟子集り、二會には百二十萬、三會には百四十萬にして皆道證を得たり。佛在世の時、人壽萬八千歲なり。正法存立すること七億歲にして舍利普流して十方に遍布す。

善思如來所生の土地は城を無量寶と名く。其の佛の光明二十里を照す。梵志種にして父を念堅と名け、母を福祇と名け、子を華施と曰ふ。侍者を力施と曰ひ、上首の智慧弟子を無喩と曰ひ、神足の弟子を捨嫉と曰ふ。一會の說經には百千萬の弟子集り、二會には八十萬、三會には七十萬にして皆道證を得たり。佛在世の時人壽千歲にして正法存立は八萬四千歲なり。舍利普流して十方に遍布す。

快意如來所生の土地は城を快見と名く。其の佛の光明は五百六十里を照す。君子種にして父を宿夫と名け、母を威氏と名け、子を華氏と曰ふ。侍者を倶退と曰ひ、上首の智慧弟子を普施と曰ひ、神足の弟子を超步と曰ふ。一會の說經には二十八億の弟子集り、二會には二十五億三會も亦二十五億にして皆道證を得たり。佛在世の時人壽三萬歲なり。正法存立すること六萬歲なり。舍利普流して十方に遍布す。

離垢如來所生の土地は城を城威と名く、其の佛の光明四十里を照す。梵志種にして父を首藏と名け、母を華辭と名け、子を智威と曰ふ。侍者を無限と曰ひ、上首の智慧弟子を有志と曰ひ、神足の弟子を郡氏と曰ふ。一會の說經には八十萬の弟子集り、二會には九十萬、三會には百萬にして皆道證を得たり。佛在世の時は人壽六萬五千歲なり。正法存立すること二萬歲にして、舍利は普流して十方に遍布せり。

名聞如來所生の土地は城を無憂と名く。其の佛の光明四千里を照す。君子種にして父を最上と名け、母を威施と名け、子を上首と曰ふ。侍者を法住と曰ひ、上首の智慧弟子を石氏と曰ひ、神足の弟子を愛垢と曰ふ。一會の說經には百億の弟子集り、二會には九十億、三會には八十億にして皆道證を得たり、佛在世の時の人壽は七萬歲なり。正法存立すること二十萬歲にして舍利普流して十方に遍布す。

多勳如來所生の土地は城を香氏と名く。其の佛の光明三百六十里を照す。君子種にして父を受施と名け母を威首と名け、子を威神と曰ふ。侍者を青蓮と曰ひ、上首の智慧弟子を無垢施と曰ひ、神足の弟子を施與忻樂と曰ふ。一會の說經には十四億の弟子集り、二會には十六億、三會には十八億にして皆道證を得たり。佛在世の時は人壽二萬五千歲にして正法存立すること五萬歲なり。舍利を并合して一大寺を興す。

衆香手如來所生の土地は城を福香と名く。其の佛の光明は千二百八十里は照す。君子種にして父を首樂と名け、母を妙華と名け、子を寶上光と曰ふ。侍者を誠英と曰ひ、上首の智慧弟子を愛月と曰ひ、神足の弟子を勝力と曰ふ。一會の說經には六十六億の弟子集り、二會には六十四億三會には六十二億にして皆道證を得たり。佛在世の時は人壽七萬歲にして正法存立することも亦七萬歲なり。舍利普流して十方に遍布す。

順觀如來所生の土地は城を度闍と名く。其の佛の光明四十里を照す。梵志種にして父を施顏と名け、母を寶趣と名け、子を所生と曰ふ。侍者を意悅と曰ひ、上首の智慧弟子を施明と曰ひ、神足の弟子を意錦と曰ふ。一會の說經には七十億の弟子集り、二會には六十八億三會には六十六億にして皆道證を得たり。佛在世の時は人壽九十億歲なり。正法存立すること九十億歲なり。舍利普流して十方に遍布す。

雨音如來所生の土地は城を宿愛と名く。其の佛の光明千七百六十里を照す。梵志種にして父を妙施と名け、母を威首と名け、子を其法と曰ふ。侍者を甚諦と曰ひ、上首の智慧弟子を月藏と曰ひ、神足の弟子を力步と曰ふ。一會の說經には七十億の弟子集り、二會には七十五億、三會には八十億あり。皆道證を得たり。佛在世の時人壽九萬歲にして正法存立すること百千歲なり。舍利を并合して一大寺を興す。

喜王如來所生の土地は城を所在吉と名く。其の佛の光明は三千二百里を照す。君子種にして父を最上と名け、母を首歸悅と名け、子を念閣吼と曰ふ。侍者を和安と曰ひ、上首の智慧弟子を寶上と曰ひ、神足の弟子を執人天と曰ふ。佛在世の時人壽五千歳なり。一會の說教には四十億の弟子集り、二會には三十八億、三會には三十七億にして皆道證を得たり。正法存立すること百千歳なり。舍利を幷合して一大寺を興す。

妙御如來所生の土地は城を寶藏と名く。其の佛の光明四十里を照す。君子種にして父を曰施と名け、母を寶氏と名け、子を德光と曰ふ。侍者を海身と曰ひ、上首の智慧弟子を行妙施と曰ひ、神足の弟子を上施と曰ふ。一會の說經には九十億の弟子集り、二會には九十八億、三會には百億にして皆道證を得たり。佛在世の時は人壽億歳にして正法存立すること三億歳なり。舍利普流すること十方に遍布す。

敬英如來所生の土地は城を世樂と名く。其の佛の光明二十里を照す。梵志種にして父を豐施と名け、母を欣樂と名け、子を外氏と曰ふ。侍者を尊鎧と曰ひ、上首の智慧弟子を安上と曰ひ、神足の弟子を退施と曰ふ。佛在世の時は人壽百千歳なり。一會の說經には五十億の弟子集り、二會には四十八億、三會には四十六億にして皆道證を得たり。正法存立すること一億歳なり。舍利を幷合して一大寺を興す。

妙天如來所生の土地は城を善意と名く。其の佛の光明千二百里を照す。梵志種にして父を眞末と名け、母を法意と名け、子を月上と曰ふ。侍者を威英と曰ひ、上首の智慧弟子を愛首と曰ひ、神足の弟子を無憂と曰ふ。一會の說經には七十億百千の弟子集り、二會には六十億百千、三會には五十億百千にして皆道證を得たり。正法存立すること二萬歳にして佛在世の時人壽四萬歳なり。舍利普流して十方に遍布す。

不退沒如來所生の土地は城を長威と名く。其の佛の光明は三千八百里を照らす。君子種にして父を醫王と名け、母を宿首と名け、子を華天と曰ふ。侍者を力勝と曰ひ、上首の智慧弟子を稱無量と曰ひ、神足の弟子を勇歩と曰ふ。佛在世の時は人壽二萬一千歳なり。一會の說經は六十億の弟子集り、二會には五十八億、三會には五十六億にして皆道證を得たり。正法存立すること九千歳なり。舍利并合して一大寺を興す。

師子幢如來所生の土地は城を烏扇迦と名く。其の佛の光明は三百六十里を照す。君子種にして父を法幢と名け、母を福友と名け、子を貴施と曰ふ。侍者を大神と曰ひ、上首の智慧弟子を愛施と曰ひ、神足の弟子を勤詣と曰ふ。佛在世の時人壽二萬八千歳なり。一會の說經に二十二億の弟子集り、二會には二十一億、三會には二十億にして皆道證を得たり。正法存立すること八千歳なり。舍利普流して十方に遍布す。

勝知如來所生の土地は城を寶飫と名く。其の佛の光明は四百里を照す。君子種にして父を日藏と名け、母を華目と名け、子を樂成と曰ふ。侍者を法氏と曰ひ、上首の智慧弟子を修成と曰ひ、神足の弟子を善法と曰ふ。佛在世の時に人壽八萬歳なり。一會の說經に三十六億の弟子集り、二會には三十七億、三會には三十八億にして皆道證を得たり。正法存立すること六百萬歳にして、舍利并合して一大寺を興す。

法氏如來所生の土地は城を愛天と名く。梵志種にして其の佛の光明二百八十里を照す。父を莫勝と名け、母を聞氏と名け、子を勝天根と曰ふ。侍者を日施と曰ひ、上首の智慧の弟子を大樂と曰ひ、神足の弟子を施藥と曰ふ。佛在世の時人壽億歳なり。一會の說經には八億の弟子集り、二會には七億三會には六億にして皆道證を得たり。正法存立すること一億歳なり。舍利普流して十方に遍布す。

億、三會には九十八億にして皆道證を得たり。正法存立すること五萬歲、舍利普流して十方に遍布す。

不虛見如來所生の土地は城を逮受と名く。其の佛の光明の圓七尺を照す。君子種にして父を淸施と名け、母を柔甘具と名け、子を饒味と曰ふ。侍者を閑吼と曰ひ、上首の智慧弟子を安明友と曰ひ、神足の弟子を伊沙羅と曰ふ。佛在世の時は人壽百歲なり。一會の說經には九十六億の弟子集り、二會には九十八億、三會には百億にして皆道證を得たり。正法存立すること千歲なり。舍利普流して十方に遍布す。

精進施如來所生の土地は城を治波と名く、其の佛の光明四十里を照す。梵志種にして父を賢吼と名け、母を首意と名け、子を無憂天と曰ふ。侍者を大神便と曰ひ、上首の智慧弟子を樂尊と曰ひ、神足の弟子を月首と曰ふ、佛在世の時人壽千歲なり。一會の說經に八十姟の弟子集り、皆道證を得たり。正法存立すること三千歲舍利幷合して一大寺を興す。

賢力如來所生の土地は城を得樂志と名く。其の佛の光明四百里を照す。君子種にして父を寶威と名け、母を福意と名け、子を常施と曰ふ。侍者を石樂と曰ひ、上首の智慧弟子を慧殊と曰ひ、神足の弟子を海意と曰ふ。佛在世の時は人壽六千歲なり。一會の說經に八百萬億の弟子集り、皆道證を得て由つて自在を得、正法存立すること二萬一千歲なり。舍利普流して十方に遍布す。

欣樂如來所生の土地は城を財富と名く。其の佛の光明百六十里を照す。梵志種にして父を梵天と名け、母を供首と名け、子を大威と曰ふ。侍者を行步安と曰ひ、上首の智慧弟子を多福と曰ひ、神足の弟子を樂目と曰ふ。佛在世の時人壽八萬四千歲なり。一會の說經に七十三億の弟子集り、二會には七十二億、三會には七十一億にして皆道證を得たり。正法存立すること九千歲なり。舍利普く流れて十方に遍布す。

弟子を紫藏と曰ふ。佛在世の時人壽五千歳なり。一會の說經には七萬の弟子集り、二會には七萬五千、三會には八萬人にして皆道證を得たり。正法存立すること二萬一千歳なり。舍利を并合して一大寺を興す。

梵氏如來所生の土地は城を上味と名く。其の佛の光明百二十里を照す。梵志種して父を愛無憂と名け、母を旃陀氏と名け、子を勝兵と曰ふ。侍者を甚調と曰ひ、上首の智慧弟子を進士と曰ひ、神足の弟子を金剛結と曰ふ。佛在世の時人壽萬二千歳なり。一會の說經に億弟子集れり。止是の一會のみあつて皆道證を得たり。正法存立すること萬四千歳なり。舍利を并合して一大寺を興す。

無量耀如來所生の土地は城を神祇と名く。其の佛の光明三千八百里を照す。君子種にして父を尊音と名け、母を月光と名け、子を欣善と曰ふ。侍者を善兵と曰ひ、上首の智慧弟子を樂響と曰ひ、神足の弟子を燄光と曰ふ。佛在世の時人壽八萬歳なり。一會の說經には二百億の弟子集り、二會には四百億、三會には六百億にして皆道證を得たり。正法存立すること亦八萬歳なり。舍利八方上下に普流す。

龍施如來所生の土地は城を寶錦と名く。其の佛の光明二十里を照す。君子種にして父を持勝と名け、母を法氏と名け、子を福力と曰ふ。侍者を寶城と曰ひ、上首の智慧弟子を燄最と曰ひ、神足の弟子を雄天と曰ふ。佛在世の時人壽七萬六千歳なり。一會の說經に八萬の弟子集り、二會には七萬八千三會には七萬五千人にして皆道證を得たり。正法存立すること千歳なり。舍利を并合して一大寺を興す。

堅歩如來所生の土地は城を上賢と名く、其の佛の光明二百里を照す。君子種にして父を師子髮と名け、母を那羅施と名け、子を法音と曰ふ。侍者を善應と曰ひ、上首の智慧弟子を寶施と曰ひ、神足の弟子を月施と曰ふ。佛在世の時人壽億歳なり。一會の說經には百億の弟子集り、二會には九十

ひ、神足の弟子を重施と曰ふ。佛在世の時人壽八千歳なり。一會の說經に七億の弟子集り、二會には三十四億、三會には四十億にして皆道證を得たり。正法存立すること五十六億歳舍利普流して十方に遍布す。

力將如來所生の土地は城を上賢と名く。其の佛の光明二百一十里を照す。君子種にして父を力天と名け、母を施安と名け、子を滿明と曰ふ。侍者を護法と曰ひ、上首の智慧弟子を勝王と曰ひ、神足の弟子を善安と曰ふ。佛在世の時は人壽滿六千歳なり。一會の說經に六十萬の弟子集り、二會には五十萬八千、三會には七十五萬二千にして皆道證を得たり。正法存立すること千歳舍利を幷合して一大寺を興す。

華光如來所生の土地は城を善月華と名け、其の佛の光明三千一百二十里を照す。梵志種にして父を愛見と名け、母を星宿と名け、子を堅證と曰ふ。侍者を覺氏と曰ひ、上首智慧の弟子を義氏と曰ひ、神足の弟子を祥幢と曰ふ。佛在世の時人壽二萬二千歳なり。一會の說經に三十億の弟子集り、二會には三十二億、三會も亦三十二億にして皆道證を得たり。正法存立すること五萬歳、舍利普流して十方に遍布す。

伏愛如來所生の土地は城を上財と名く。其の佛の光明三百二十里を照す。君子種にして父を時氏と名け、母を賢首と名け、子を訓寂と曰ふ。侍者を愍傷と曰ひ、上首智慧弟子を善宿と曰ひ、神足の弟子を思夷華と曰ふ。佛在世の時人壽百千歳なり。一會の說經には九百億の弟子集り、二會には八十億、三會には七十億にして皆道證を得たり。正法存立すること五十萬歳、舍利八方上下に普流す。

大威如來所生の土地は城を富祠と名く。其の佛の光明二百里を照す。梵志種にして父を寶藏と名け、母を威氏と名け、子を照上と曰ふ。侍者を善多と曰ひ、上首の智慧弟子を燄光と曰ひ、神足の

神足の弟子を尊友と曰ふ。佛在世の諸人壽百千歳なり。一會の說經に四十億の弟子集り、二會は三十億、三會には三十二億にして、皆道證を得たり。正法存立すること千歳舍利にして、普流して遍く十方に布く。

憶識如來所生の土地は城を栴陀氏と名く。其の佛の光明三千三百六十里を照す。梵志種にして父を華氏と名け、母を燄光と名け、子を寶捨と曰ふ。侍者を意樂と曰ひ、上首智慧弟子を無畏と曰ひ、神足の弟子を石王と曰ふ。佛在世の時人壽億歳なり、一會の說經に七十姟の弟子集り二會には六十六姟三會には五十姟にして皆道證を得たり、正法存立すること二億歳なり、舍利を幷合して一大寺を興す。

無畏如來所生の土地は城を甚和柔と名く、其の佛の光明三千六百里を照す、君子種にして父を施光と名け、母を善目と名け、子を思夷華と曰ふ。侍者を月氏と曰ひ、上首智慧弟子を重王と曰ひ、神足の弟子を天氏と曰ふ、佛在世の時人壽百千歳なり。一會の說經に八十姟の弟子集り二會には七十八姟三會には七十六姟にして皆道證を得たり。正法存立すること億歳舍利普流して遍く十方に布く。

寶氏如來所生の土地は城を次堅と名く。其の佛の光明百二十里を照す。梵志種にして父棄嫉と名け、母を福施供と名け、子を施供藥と曰ふ。侍者を進施と曰ひ、上首智慧の弟子を無能當と曰ひ、神足の弟子を强步と曰ふ。佛在世の時人壽萬八千歳なり。一會の說經に四十億の弟子集り、二會には三十八億、三會には十六億にして皆道證を得たり。正法存立すること七萬歳なり。舍利を幷合して一大寺を興す。

蓮華目如來所生の土地は城を華郡と名く。其の佛の光明千二百八十里を照す。君子種にして父を上華と名け、母を妙顏と名け、子を大愛と曰ふ。侍者を無憂華と曰ひ、上首智慧の弟子を智光と曰

神足の弟子を上金と曰ふ。其の佛在世の時人壽五十萬歳なり。一會の說經に七十億の弟子集り、二會には七十八億、三會には八十億なり。皆道證を得たり。正法存立すること四萬歳にして、舍利を并合して一大寺を興す。

無本如來所生の土地は城を俗所敬と名け、其の佛の光明四百里を照す、梵志種にして父を海氏と名け、母を棄垢と名け、子を四眼と曰ふ。侍者を降根と曰ひ、上首智慧の弟子を善思義と曰ひ、神足の弟子を響審と曰ふ。其の佛在世の時は人壽八萬歳なり。一會の說經に七萬二千五百人あり、皆羅漢を得たり。二會には七萬六千三百、三會には七萬五千人なり。皆道證を得たり。正法存立すること八萬歳にして、舍利普流して十方に周遍す。

光興如來所生の土地は城を金光と名く。其の佛の光明二千刹土を照す。君子種にして父を光燄と名け、母を寶施と名け、子を樂德と曰ふ。侍者を月華と曰ひ、上首智慧の弟子を極音と曰ひ、神足の弟子を自在と曰ふ。佛在世の時人壽五億歳なり。一會の說經に五十億百千の弟子集り、二會には四十億百千、三會には三十億百千なり。皆道證を得たり。正法存立すること七億百千歳にして、舍利を普流して遍く十方に布く。

大明山如來所生の土地は城を寶淨と名く。其の佛の光明三千二百里を照す。梵志種にして父を月盛と名け、母を日施と名け、子を善蓋と曰ふ。侍者を寶供と曰ひ上首智慧の弟子を若干覺と曰ひ、神足の弟子を智愛と曰ふ。佛在世の時人壽八十歳なり。一會の說經には七十億の弟子集り、二會には八十億、三會には九十億にして皆道證を得たり。正法存立すること九萬二千歳なり。舍利を并合して一大寺を興す。

金剛如來所生の土地は城を善行威と名く、其の佛の光明百四十里を照す。君子種にして父を明珠光と名け、母を靑蓮目と名け、子を壽命と曰ふ。侍者を海氏と曰ひ、上首智慧の弟子を堅施と曰ひ、

集り、二會には五十萬姟、三會には六十萬姟の弟子あり。皆道證を得たり。正法存立すること三億歳なり。舍利并合して一大寺を興す。

閑靜如來所生の土地は城を寶妙と名く。其の佛の光明三千四十里を照す。君子種にして父の名を趣歩と曰ひ、母を無所進と名け、子を月訓と曰ふ。侍者を瑠璃藏と曰ひ、上首智慧の弟子を力天と曰ひ、神足の弟子を喜愛と曰ふ。佛在世の時は人壽百千歳なり。前の諸如來所現の造業の如く、其の餘の諸佛も亦復た是の如し。所度等しうして異あるなし。是の故に斯の會の正法は存立すること五十萬歳なり、其の佛土の地は皆寶を以て合成し、悉く衆珍ありて、咸な寶樹を生ず。衣服樹ありて周流して國に遍し。國土人民の所生衆難・三惡の趣あるなし。舍利普く布いて十方に周流す。

堅重如來所生の土地は城を佳妙と名け、其の佛の光明二十里を照す。梵志種にして父を寶上と名け、母を寶光と名け、子を持地と曰ふ。侍者を寂意と曰ひ、上首智慧の弟子を音十里と曰ひ、神足の弟子を吉利と曰ふ。其の佛在世の時人壽三千歳なり。一會に經法を說いて百千の弟子集り、皆道證を得たり。一會にして二なく、正法存立すること七萬七千歳なり。舍利普流して遍く十方に布く。

梵音如來所生の土地は城を光威と名づく。其の佛の光明三千三百二十里を照す。梵志種にして父を上最と名け、母を至誠氏と名け、子を福威と曰ふ。侍者を蓮目と曰ひ、上首智慧の弟子を雪色と曰ひ、神足の弟子を施皦と曰ふ。佛在世の時人壽九萬歳なり。一會の說經に八十六億の弟子集り、二會には九十億三會には百億なり。皆道證を得たり。正法存立すること三千歳にして、舍利を并合して一大寺を興す。

次に賢如來所生の土地は城を華茂と名く。其の佛の光明二百四十里を照す。君子種にして父を福愛と名け、母を安養と名け、子を時節施と曰ふ。侍者を造義と曰ひ、上首智慧の弟子を日月と曰ひ、

重母を諮施と名け、子を正施と曰ふ。侍者を月天と曰ひ、上首智慧の弟子を慧施と曰ひ、神足の弟子を供柔と曰ふ。佛在世の時人壽五萬歲なり。一會の說經には六十二億の弟子集り、二會には六十一億、三會には六十億なり。正法存立すること七萬歲舍利を幷合して一大寺を興す。

堅固如來所生の土地は城を福音と名く。其の佛の光明四千里を照す。梵志種にして父を樹王と名け、母を施珊瑚と名け、子を施世と曰ふ。侍者を首力と曰ひ、上首智慧の弟子を月英と曰ひ、神足の弟子を動光と曰ふ。佛在世の時人壽萬二千歲なり。一會の說經に百千の弟子集り、二會には九萬、三會には八萬の弟子あり。皆道證を得たり。正法存立すること二萬八千歲なり。舍利遍く十方に普流す。

首威如來所生の土地は城を寶氏と名く。其の佛の光明四百里を照す。君子種にして、父を柔華と名け、母を法氏と名け、子を愛英と曰ふ。侍者を堅進と曰ひ、上首智慧の弟子を施斷と曰ひ、神足の弟子を人力と曰ふ。佛在世の時人壽百歲なり。一會の說經に百億の弟子集り、皆道證を得たり。正法存立すること億歲にして、舍利普流して十方に遍し。

難勝 如來所生 の土地は城を療吉と名け、王所治の處なり。其の佛の光明四十億里を照す。君子種にして父を清天と名け、母を福氏と名け、子を月寂と曰ふ。侍者を誠愛と曰ひ、上首智慧の弟子を寶上と曰ひ、神足の弟子を雷音と曰ふ。佛在世の時人壽八億歲なり。一會の說經に三十姟の弟子集り、二會には五十姟、三會には八十姟の弟子あり。皆道證を得たり。正法存立すること八十億歲にして舍利八方上下に普流す。

德幢如來所生の土地は城を善柔と名く。王の所治處なり。其の佛の光明二百里を照す。梵志種にして父を供友と名け、母を居世と名け、子を金剛集と曰ふ。侍者を寶愛と曰ひ、上首智慧の弟子を日藏と曰ひ、神足の弟子を承御と曰ふ。佛在世の時人壽億歲なり。一會の說經には三十萬姟の弟子

と名け母を快意と名け、子を勝友と曰ふ。侍者を師子力と曰ひ、上首智慧の弟子を光憂施と曰ひ、神足の弟子を山積と曰ふ。佛在世の時は人壽四萬歳なり。一會の說法に一億の弟子集り、二會には二億、三會には三億なり。皆道證を得たり。正法存立すること九萬歳にして、舍利普流して十方に遍し。

賢氏如來所生の土地は城を專吉と名く。王所治の處なり。其の佛の光明は三千八十里を照す。梵志種にして父を旃施を名け、母を閻上と名け、子を雄施と曰ふ。侍者を月愛と曰ひ、上首智慧の弟子を海氏と曰ひ、神足の弟子を龍力と曰ふ。佛在世の時人壽七萬歳なり。一會の說經には二百三十萬の弟子集り、二會には三百五十萬、三會には三百八十萬の弟子あり。皆道證を得たり。正法存立すること十萬歳なり。舍利并合して一大寺を興す。

善樂如來所生の土地は城を善富と名く。其の佛の光明四百里を照す。梵志種にして父を土尊と名け、母を月辭と名け、子を法自由と曰ふ。侍者を世愛と曰ひ、上首智慧の弟子を雷音と曰ひ、神足の弟子を施華と曰ふ。佛在世の時人壽三萬六千歳なり。一會の說經に三十億の弟子集り、二會には二萬八千、三會には二萬七千の弟子あり。皆道證を得たり。正法存立すること百千歳にして、舍利普流して十方に遍し。

頂髻施如來所生の土地は城を淸天と名づく。其の佛の光明四千里を照す。梵志種にして父を重王と名け、母を披其私と名け、子を山施と曰ふ。侍者を月天と曰ひ、上首智慧の弟子を樂慧と曰ひ、神足の弟子を雕所供と曰ふ。佛在世の時人壽五千歳なり。一會の說經に六十二億の弟子集り、二會には六十一億、三會には六十億の弟子あり。皆道證を得たり。正法存立すること七萬七千歳にして、舍利を并合して一大寺を興す。

眉間如來所生の土地は城を悅天と名く。其の佛の光明四千里を照す。梵志種にして、父の名は國

君子種にして父を白蓮華と名け、母を施德と名け、子を福首と曰ふ。侍者を好顏と曰ひ、上首智慧の弟子を無量士と名け、神足の弟子を重王と曰ふ。佛在世の時人壽七萬歲、一會の說經に九十億の弟子集り、二會には九十九億、三會には八十八億なり。皆道證を得たり。正法存立すること億歲にして、舍利八方上下に普流す。

勳光如來所生の土地は城を蓮華と名け、王の所治處なり。其の佛の光明二千四百里を照す。君子種にして父を光照と名け、母を德至と名け、子を法辯と曰ふ。侍者を福供と曰ひ、上首智慧の弟子を瑠璃藏と曰ひ、神足の弟子を極施と曰ふ。佛在世の時人壽三百歲なり。一會の說經には十六億の弟子集り、二會には十二億、三會には十八億なり。皆道證を得たり。正法存立すること億歲なり。舍利八方上下に普流す。

現義如來所生の土地は城を道御郡と名け、王所治の處なり。其の佛の光明二千四百八十里を照す。梵志種にして父を柔郡を名け、母を敬天と名け、子を德稱と曰ふ。侍者を梵音と曰ひ、上首智慧の弟子を訓戒意と曰ひ、神足の弟子を勝施と曰ふ。佛在世の時人壽百歲なり。一會の說經には六十二姟の弟子集り、二會には七十姟、三會には八十姟なり。皆道證を得たり。正法存立すること億歲にして、舍利普く八方上下に流る。

錠耀始來所生の土地は城を寶錦と名け、王所治の處なり。其の佛の光明は二千里を照す。君子種にして父を寶施と名け、母を鹹味と名け、子を寶藏と曰ふ。侍者を意悅と曰ひ、上首智慧の弟子を無能當と曰ひ、神足の弟子を大力と曰ふ。佛在世の時人壽五萬歲なり。一會の說經に七十萬の弟子集り、二會には九十萬、三會には百萬の弟子あり。皆道證を得たり。舍利を幷合して一大寺を興す。

興盛如來所生の土地は城を威光を名く。其の佛の光明四十里を照す。梵志種にして、父を善興

梵志種にして父を日輝と名け、母を月氏と名け、子を大神妙と曰ふ。侍者を多堅と曰ひ、上首の智慧の弟子を慧施と名け、神足の弟子を所在吉と名く。佛在世の時は人壽八萬五千歳なり。一會の說經には五百億の弟子集り、二會には四百億、三會には三百億にして皆道證を得たり。正法存立すること四萬五千歳にして、舍利普く八方上下に流る。

無憂如來所生の土地は城を智慧と名く。其の佛の光明四百里を照す。君子種にして父を執華と名け、母を法氏と名け、子を執光と曰ふ。侍者を樂音と曰ひ、上首智慧の弟子を雨積と曰ひ、神足の弟子を勝施と曰ふ。佛在世の時人壽百千歳なり。一會の說經には二姟の弟子集り、二會には一姟、三會には九十五億なり。皆道證を得たり。正法存立すること十三萬歳にして、舍利幷合して一大寺を興す。

威神如來所生の土地は城を閻浮上と名く。其の佛の光明三百二十里を照す、梵志種にして父を賢天と名け、母を愛施と名け、子を明燄と曰ふ。侍者を見敬と曰ひ上首智慧の弟子を取英と曰ひ、神足の弟子を度世と曰ふ。佛在世の時人壽三萬三千歳なり。一會の說經には八十億の弟子集り、二會には七十八億、三會には七十六億なり。皆道證を得たり。正法存立すること七十七億歳にして、舍利を幷合して一大寺を興す。

燄光如來所生の土地は城を鐙氏と名く。其の佛の光明千佛土を照す。梵志種にして父を敬法と名け、母を蓮華氏と名け、子を月行と曰ふ。侍者を通慕音と曰ひ、上首智慧の弟子を德首と曰ひ、神足の弟子を斯施と曰ふ。佛在世の時人壽滿四千歳なり。一會の說法に十六億の弟子集り、二會には十七億、三會には十八億なり。皆道證を得たり。正法存立すること二十一萬歳なり。舍利普く八方上下に流る。

執華如來所生の土地は城を造福と名け、王所治の處なり。其の佛の光明は三千二百里を照す。

稱と名け、母を善供と名け、子を奉行と曰ふ。侍者を上善郡と曰ひ、上首智慧の弟子を善賢と曰ひ、神足の弟子を流江と曰ふ。佛在世の時は人壽五百歳なり。一會の說經には六十二姟の弟子集り、二會には六十一姟、三會には六十姟の弟子あり。皆道證を得たり。正法存立すること四萬八千歳にして、舍利普く八方上下に流る。

日藏如來所生の土地は城を華主と名け、王所治の所なり。其の佛の光明八萬里を照す。梵志種にして父を富有と名け、母を妙華と名け、子を燄光と曰ふ。侍者を慧上と曰ひ、上首の智慧の弟子を智兵と名け、神足の弟子を剛兵と曰ふ。佛在世の時其の人壽七十億歳なり。一會の說經に百千の比丘集り、二會には百億、三會には塵の如し。皆道證を得たり。正法存立すること三十億歳にして、舍利を幷合して一大寺を興す。

月氏如來所生の土地は城を上寶と名け、王所治の處なり。其の佛の光明は三百二十里を照す。君子種にして父を淸部と名け、母を藥子と名け、子を滿宿と曰ふ。侍者を供味と曰ひ、上首智慧の弟子を智最と曰ひ、神足の弟子を因法供と曰ふ。佛在世の時は人壽六千歳なり。一會の說には二千二百億の弟子集り、二會には千四百億、三會には千八百億、四會には一千四百億にして、皆道證を得たり。正法存立すること萬一千歳にして、舍利を幷合して一大寺を興す。

光焰如來所生の土地は城を音乘と名く。其の佛の光明二千六百四十里を照す。君子種にして父を福施と名け、母を法主と名け、子を聞上と曰ふ。侍者を善辯と曰ひ、上首智慧の弟子を雨音と曰ひ、神足の弟子を慧上と曰ふ。佛在世の時、人壽百千歳なり。一會の說經には、七十萬の弟子集り、二會には八十萬、三會には九十萬にして、皆道證を得たり。正法存立すること十萬歳にして、舍利八方上下に普流す。

善照如來所生の土地は城を光燄と名け、王の所治の處なり。其の佛の光明八百四十里を照す。

一大寺を立つ。

宿王如來所生の土地は城を紫金と名け、王所治の處なり。梵志種にして、其の佛の光明は四千里を照す。父を施光と名け、母を善意と名け、子を供養と曰ふ。侍者を勤力といひ、上首智慧の弟子を熾盛音と名け、神足の弟子を建立と名く。一會の說經に弟子百億人集り、二會には九十億、三會には八十億にして、皆道證を得たり。正法存立すること千歲なり、舍利普く八方上下に流る。

修藥如來所生の土地は城を談主と名け、王所治の處なり。其の佛の光明四十里を照す。君子種にして父を善寂と名け、母を所樂と名け、子を須彌幢と曰ふ。侍者を華氏と曰ひ、上首智慧の弟子を尊法と曰ひ、神足の弟子を福力と曰ふ。佛在世の時人壽七萬七千歲なり。一會の說法には七十億の弟子集り、二會には六十九億、三會には六十八億にして、皆道證を得たり。正法存立すること六萬歲にして、舍利八方上下に普流す。

名稱英如來所生の土地は城を淸威と名け、君子種にして、其の佛の光明百二十里を照す。父を光談と名け、母を談言と名け、子を上華と名く。上首智慧の弟子を智力と名け、神足の弟子を師子力と曰ふ。一會の說經には三十三姟の弟子集り、二會には三十二姟、三會には三十三姟の弟子集りて、皆道證を得たり。正法存立すること二億歲なり。舍利を幷び合せて一大寺を興す。

大光如來所生の土地は城を安樂と名け、其の佛の光明千六百里を照す。君子主にして、父を金剛と名け、母を伏施と名け、子を良田と曰ふ。侍者は寂意にして上首智慧の弟子を道衆と名け、神足の弟子を堅刃と曰ふ。佛在世の時人壽百千歲なり。一會の說經には八十億三千萬の弟子集り、二會には復た倍し、三會には六姟にして、皆道證を得たり。正法存立すること三萬歲なり。舍利八萬上下に普流す。

照明如來所生の土地は城を安隱法と名く。其の佛の光明三百六十里を照す。君子種にして父を名

種にして、父を珍寶と名け、母を言談と名け、子を宿王と名く。侍者を世愛と曰ひ、上首神足の弟子を師子步と曰ひ、智慧の弟子を無量意と曰ふ。佛在世の時人壽七萬歲なり。一會の說法には三十姟の弟子共に集り、二會の說法には二十八姟、三會の說法には三十六姟にして皆道證を得たり。正法存立すること一億歲、是より巳來第一初興の諸の如來、斯を計すれば十一佛にして、其の衆生の所行純熟するに隨つて之を開化す。其の餘の諸佛も皆各々是の如く十一なり。廣く舍利を八方上下に布く。

其の導師如來所生の土地は城を最錦と名け、王所治の所なり。其の佛の光明は千三百六十里を照す。梵志種にして、父を無難と名け、母を愍傷と名け、子を愛光と曰ふ。侍者を大汎流と曰ひ、上首智慧の弟子を名け、上首と曰ひ、神足の弟子を是愍と曰ふ。佛在世の時、人壽千億歲なり。一會の說法には弟子七十姟集り、二會には六十姟、三會には五十姟にして皆道證を得たり。正法存立すること九萬二千歲にして、舍利普く八方上下に流る。

大多如來所生の土地は城を俗人と名け、王所治の處なり。其の佛の光明三千里を照す。君子種にして父を內進と名け、母を捨嫉と名け、子を照明と曰ふ。侍者を善思と曰ひ、上首智慧の弟子を無難音と名け、神足の弟子を歲無青と曰ふ。佛在世の時は人壽四十億歲なり、一會の說經には百千姟の諸弟子集まれり。是より巳後は復た計るべからず、正法存立すること億歲なり。舍利普く八方上下に流る。

大力如來所生の土地は城を賓威と名け、其の佛の光明千二百里を照す。梵志種にして父を所選と名け、母を甚威と名け、子を師子步と曰ふ。侍者を愛子と曰ひ、上首神足の弟子は善住にして、智慧の弟子を尊施と曰ふ。佛在世の時人壽四萬歲なり。一會の說經には弟子一姟人來集し、二會には二姟、三會には一姟なり。皆道證を得たり。正法存立すること八萬四千歲にして、舍利を合集して

光燄如來所生の土地は城を星宿主と名け、其の佛の光明二千里を照す君子種なり。父を善意と名け、母を妙華と名け、子を以時と名く。侍者を長喜と曰ひ、上首神足の弟子を雷吼と名け、智慧の弟子を尊教と曰ふ。其の佛在世の時人壽九萬歲なり。一會に百千億あり、二會には九十九億あり、三會には九十八億あり。皆道證を得たり。正法存立すること八萬五千歲、舍利普く八方上下に流る。

牟尼柔仁如來の所生の土地は城を名けて上華と曰ひ、王の所治の處なり。其の佛の光明四十里を照す。父の名は大山、母の名は須滿光、子を上寶と曰ふ。侍者を尊上と曰ひ、上首の神足の弟子を超施と曰ひ、智慧の弟子を快意と曰ふ。佛在世の時は人壽六萬歲なり。一會には八十姟、二會には七十億、三會には五十億、皆羅漢を得たり。正法存立すること一千歲舍利八方上下に普流す。

華氏如來所生の土地は城を名けて蓮華と曰ふ。王の所治の處なり、其の佛の光明三百二十里を照す。梵志種にして父の名は尊名、母は妙華と曰ひ、子を智根と曰ふ。侍者を樂道と曰ひ、上首神足の弟子を無害と名け、智慧の弟子を法力と名く。一會の說法の弟子は六百億、二會には三十五億、三會には三十四億なり。皆道證を得たり。佛在世の時は人壽五十萬歲にして正法存立し、具足すること千歲なり。舍利普流して遍く八方上下に布く。

次に復た佛あり。同じく華氏如來と號す。所生の土地の城を甚大廣と名く。其の佛の光明四十里を照す。梵志種にして父を華髮と名け、母を法主と名け、子を名けて鮮潔と曰ふ。侍者を心念と曰ひ、上首神足の弟子を忻樂と曰ひ、智慧の弟子を善忻喜と曰ふ。其の佛在世の時は人壽九億歲なり。一會の說法には十七億の弟子共に集り、二會には十五億、三會には十六億にして、皆道證を得たり。正法存立すること十億歲なり。舍利普く八方上下に流る。

善目如來所生の土地は城を造賢と名け、王の所治處なり。其の佛の光明四百八十里を照す。梵志

を興す。

五 迦葉如來所生の土地は城を神氏と名く。佛光十里を照す。梵志種なり。父を梵施と名け、母の名は經業にして、子を導師と曰ふ。侍者を普友と曰ひ、上首の智慧の弟子を開明と名け、神足を堪舍と名く。佛在世の時は人壽二萬歲なり。一會經を說く時は二萬の比丘あり、二會には二萬八千、三會には萬六千、皆道證を得たり。正法を存立する七萬歲、舍利を幷合して一大寺を興す。

喜王よ、之を聽け。今我が能仁所生の土地は城を迦維羅衞と名く。君子種にして、姓は瞿曇なり。其の光圓照すこと七尺なり。父を白淨と曰ひ、母の名は極妙、子を羅雲と曰ふ。侍者を阿難と曰ひ、智慧の上首の弟子を舍利弗と名け、神足の弟子を目連と曰ふ。今世の人壽は百歲にして、或は長く或は短かし。一會に經を說く時に千二百五十の比丘衆、皆道證を得たり。舍利を普く八方上下に布き、正法存立すること五百歲、像法存立すること亦五百歲なり。

七 慈氏如來所生の土地は城を妙意と名け、王者の所處なり。其の佛の威光は四十里を照し、梵志種なり。父を梵乎と名け、母を梵經と名け、子を德力と曰ふ。侍者を海氏と曰ひ、智慧の上首の弟子を慧光と號し、神足を堅精進と曰ふ。佛在世の時、人壽八萬四千歲なり。一會に經を說く時、九十六億、二會には九十四億、三會には九十二億なり。皆羅漢を得たり。舍利幷合して共に大寺を興す。正法存立すること八萬歲なり。

師子如來所生の土地は城を名けて華土と曰ふ。其の佛の光明四十里を照す。君子種なり。父を勇師子と名け、母を江音と名け、子を大力と名く。侍者を善樂と曰ひ、上首神足の弟子を雨氏と曰ひ、智慧の弟子を慧積と曰ふ。佛在世の時は人壽七萬歲なり。一會に法を說く時、百億の比丘あり、二會には九十億、三會には八十億の聲聞集り、皆道證を得たり。正法存立すること億歲、舍利普く八方上下に流る。

akamuni Tathāgata)、新稱、迦諾迦牟尼譯、金寂。過去七佛中の第五佛。人壽四萬歲の時に出生す。

【五】 迦葉如來 (Kāśyapa Tathāgata) 又迦攝、迦葉波。譯飮光、賢劫千佛の第三に位す。

【六】 能仁、(Śākya)、釋迦(Śākya)、の譯、śakya「出來得べきの意から「能仁」と云ふ。迦維羅衞 Kapilavastu 瞿曇 gotama 白淨、Śuddhodana 極妙 māyā 羅雲 Rahula 阿難 Ānanda 舍利弗 Śāriputra 目連 maudgalyāyana

【七】 慈氏如來 (maitreya) 舊稱彌勒。新稱梅怛麗耶(マイトレーヤ)慈と譯す。之が姓であるので、慈氏といふ。釋迦如來の次に出世する未來佛。

巻の第七

千佛興立品第二十一

爾時、喜王菩薩、復た佛に白して言く、『善い哉、世尊よ、願はくは賢劫の諸佛の名號及び佛の父母・佛の子と侍者・上首の聖尊の諸弟子と、舍利の光明・壽命の長短・比丘衆會・法立の年數・種性と佛教の經法の流布、度脱すべき所の諸天人民を說きたまひ、會者をして聞心開け、意悅んで、皆道心を發さしめば、哀念する所多く、安隱する所多し。諸天及び十方人一切衆生を愍傷し、又將來世の諸菩薩と以て是の經法を聽受するを得、已つて益々樂學を加へ、尊法を志願し、爲に大明を顯はさん。唯大哀を垂れて重ねて爲に意を散じて三界に蒙らしめよ。』

佛、喜王菩薩に告げたまはく、『今當に之を說くべし。諦らかに聽いて善思し、唯諾して啓受せよ。』喜王菩薩、諸の大衆と與に教を受けて專精一心して皆聽く。

[一]佛曰く、『[二]拘留孫如來、至眞等正覺所生の土地は城を仁賢と名け、王所治の處なり。姓を[三]迦葉と曰ひ、父を祠祀施と曰ふ。[四]梵志種の所生なり。母の名は惟耶妙勝にして、子を上勝と曰ふ。侍者の名は覺意にして智慧の弟子を維頭と曰ひ、神足を抄兒と曰ふ。其の佛身の光四十里を照し、一會經を說くに四萬の比丘あり。二會には七萬、三會には六萬、皆聲聞を成ず。佛在世の時、人壽四萬歲なり。正法世に住すること八萬歲なり。舍利を幷合して一大寺をなす。

*拘那含牟尼如來、至眞所生の土地は城を上被と名く。梵志種なり。父を施尊と名け、母の名は上妙にして、子を澤明集と曰ひ、侍者を吉善と曰ひ、智慧の弟子を是上と曰ひ、神足を不舍と曰ふ。佛在世の時人壽三萬歲なり。一會經を說く時、七萬の比丘あり、二會には六萬、三會には五萬、皆羅漢を得たり。其の佛の光明二十里を照し、正法存立すること千歲なり。舍利を幷合して一大寺

【一】佛の經歷を書く場合、常にかく城・姓・父母名・侍者・上首弟子・會等を形式的に記述す。原始佛典にても同じ、(Of Mahāpadānasuttanta in the Dighanikāgy 大本經)

【二】拘留孫如來(Krakucchanda Tathāgata)文、俱留孫、鳩樓孫等譯、所應斷已斷、滅累、成就美妙、過去七佛の第四佛であつて、現在の賢劫の千佛の第一に位する、賢劫の滅劫人壽六萬歲の時に出世した。

【三】迦葉(Kāśyapa)、譯飲光、婆羅門のよき姓の一。

【四】梵志種、婆羅門種をいふ、※拘那含牟尼如來(Kan-

ありて、皆かの像の如し。若し人ありて開いて受持し諷誦執學して、心に懷ひ、專精に了識して行じて放逸することなく、和同供養すれば、衆の惡趣勤苦の患を棄て、長く安隱を得て、禁戒に住し、諸の將信する所にて經道を順喜し、應行淸淨にして、具足果に値ふ。此の深妙忍の根元は法忍にして一切世を護り、若干億劫に諸の惡行を犯すも、罪福果の報應を知らず。諸佛の名を聞いて、一切の罪を除き、復た衆患なし。假使是の諸佛の名を持するあらば、一切の尊號は神足一心定意を致す。若し凡庶ありて逮得見聞自在にして此に値はゞ、斯の衆の導師は、經典を御行し、懷來すること億載なるも、無量の功祚・所解の說義は暢達して、音慧は因りて斯の三昧定に値見することを得ん。性行淸淨にして[二〇]心に猶豫なく、所興の發慧三界に著せず、以て總持に逮んで心懷に存在す。是等當さに此の三昧定を行ずべし。

【二〇】無猶豫。心に躊躇のないことである。問はれて、直ちに答へ得る如きをいふ。佛德の一である。

成智識　可悦意　暢音聲　見無業　好所樂　斷垢塵　行極邊　多化異　天布響　寶遊步　紅蓮
華　象香首　伏怨敵　富多聞　恨善郡　妙華光　師子響　月遊住　宝壞冥　無所動　忍細步
福燈度　囑累音　而最上　精進力　住術意　發寂然　妙善月　覺意華　吉祥善　所言快　慧勢
力　威方便　鐙火光　行步强　天音聲　順寂然　若干日　以隨時　安樂佛　威光明　修建立
無塵埃　安住和　有聖慧　轉增益　香光明　因順時　音輝耀　柔輭業　無罣礙　寂幢旛　趣最
道　行玄妙　愛敬寶　法所遊　而言天　無極慈　善知友　步寂然　無量土　明耀山　賢所歎
興發道　斯威神　所現光　報善行　逮極善　離憂慼　寶光明　所行道　功福行　德如海　若干
品　降伏魔　除害非　所宿止　入外學　無壞意　能思遠　因所誠　取重解　斯愛敬　道幢旛
聖慧響　號須深　斯梵天　樂隱佛　神足英　勝根地　所執持　日恭恪　月宮生　迦益華　賢所
施　持精明　福所哀　好樂力　善音說　法貴佛　梵天響　其快善　無缺漏　覺擧號　大弘廣
名聞稱　英妙意　暢神音　師音樹　棄愚癡　降甘露　仁賢月　辯無量　宣名稱　應性行　供養
度　而懷憂　愛樂安　虛俗志　樂所趣　歸所行　破衆業　青蓮華　調華佛　永無底　宣辯才
號光耀　斯逮致　有功勳　御精進　天竟域　最上行　謟好樂　功福意　亘明耀　德無量　集威
神・師子步　妙無動　行晃耀　龍音響　執持輪　尊勢象　樂哀世　法音佛　樂無底　號名稱
雨幢佛　雨德行　美好香　號虛空　音響辭　天帝王　弘明珠　善財業　燈火燄　斷根王　閑寂
靜　主安隱　師子音　流寶名　建立義　建示現　所有華　眉間光　無邊際　辯才王　邦伴慧
由自在　師子髮　遊晃煜　德燈燄　月輝耀　無所愁　郡土地　心覺解　殊勝法　安光敎　應美
香　其有力　智慧華　其音强　順安隱　善理氏　好愛喜　得致勝　執衣鉢　行寂然　人師子
有名稱　號樓由

是の賢劫中に斯の千佛ありて、興現出世して、十方の一切衆生を度脫す。是の千佛等、各々名號

威重帝　應如念　號稱法　解威神　尊化身　言柔輭　師子髮　捐重擔　拔衆根　敬師子　法伴
侶　遊安隱　無怒覺　顏色盛　威神王　號諸覺　善明佛　住立義　覺光明　神妙音　威悅衆
行不虛　消壞瞋　顏貌尊　善紫金　調和佛　解脫結　住於法　號往歸　棄自大　聖慧藏　梵天
遊　號栴檀　無愁慼　清淨身　號佛英　蓮華佛　威無量　天光耀　聖智華　號作斯　功德慧
梵天居　寶牽佛　帝王氏　無損佛　至尊教　水帝王　星明氏　無所害　琉瑠藏　號天華　揚名
稱　弓身光　極善明　一切勳　甚貴光　珍寶佛　元首氏　妙大夫　號月所　無量光　快意念
饒明佛　視無厭　師子佛　好樂慧　山根本　寂然德　積勢力　宜義帝　暢善聲　號快華　住於
義　威德王　慧無等　號無限　音響佛　名殊勝　善光明　安穩斯　解說佛　心思義　號極責
宣暢音　晃昱業　等虛空　身名聞、利寂然　無瑕穢　號清淨　意習行　蓮華佛　順品第　善光
耀　妙辯才　號盡極　善周遍　重根元　離怖畏　慧淸白　安住佛　宣辯才　最明目　覺名聞
常究佛　月寂然　無恐懼　大顯現　梵天氏　好音響　大聖慧　度邊際　普無邊　覺了意　樹根
元　行極順　淸除音　寂功德　有力勢　號強音　敬聖佛　以逮德　號明珠　雷震吼　雨音聲
眼愛敬　仁賢氏　明極快　極富有　合集德　而寂然　號悅豫　法幢旛　至聖響　心虛空　法祠
音　功德佛　分別音　德光明　有威神　達根元　有意念　有捷辯　寂然輪　仁善王　若干月
日潒聞　無垢塵　德至誠　殊妙華　德幢旛　群辯才　妙珍寶　懷悅豫　敬愛月　無卒暴　師子
力　自在王　悅無量　平等業　無瞋恚　滅垢穢　頒宣宜　慧無遇　玄妙佛　善仁賢　而應住
十慧寂　言談帝　號大夫　有深意　行無量　有法力　至供養　華光明　在三世　間靜供　日耀
藏　天奉事　幢旛佛　有解脫　至眞髮　演甘露　極殊異　堅雄心　眞珍寶　光明品　遊玄妙
言辭淨　震光明　積功德　演光耀　無損首　師子步　超出難　布施華　顏悅豫　紅蓮華　好愛
慧　淨玄珠　淸無虛　慧聖明　謙卑行　除幢旛　善思惟　好脫門　曉了明　聞如海　總持寶

住無畏　建立慈　至要藏　明珠行　威解脫　善光明　至味佛　善度脫　等威神　聖慧勝　梵以
生　至誠音　善覺佛　勢力施　師子步　號華英　慧事業　惠與華　功德藏　布名聞　除卑賤
無恐怖　意光明　於期梵　自望天　愛事業　眞誠天　明珠藏　功德室　積聖慧　莫能喩　喜悅
喜　堅固願　所施天　梵柔仁　意所趣　得消惡　火赫燄　大威神　恩夷華　鳴吼佛　善計數
根無憶　大愛敬　善安意　光重耀　弘微妙　主所生　精所至　善決義　有境界　善多佛　迦陀
願　救於世　福光氏　寶音佛　金剛將　號富有　師子力　離垢目　身解脫　覺淸徹　聖慧步
威堅固　大光明　日晃耀　體離垢　分別威　無損耗　柔輭業　月光氏　雷施佛　行寂然　號無
怒　多有鐙　晃耀田　淸淨國　超出上　蓮華上　光首佛　寶淸淨　號極賢　寶上氏　善安明
江海施　梵天英　善寶蓋　好妙燄　隨時義　明達想　功德輝　宣音佛　盛滿月　蓮華光　善專
精　錠明王　電燄英　光明王　號晃昱　稱無捐　蓮華藏　供養至　四禪業　無所得　强勢兵
功德藏　獨遊步　無礙佛　覺意靜　慧光明　號天聖　御光明　應所趣　華英佛　羅云氏　大篤
信　星宿王　醫王佛　功福平　所覆蓋　宣暢王　日光明　法藏氏　善意佛　德根念　捐兵刃
號智積　善住立　善了行　梵天音　龍雷電　和音佛　神通英　聖智品　吉安祥　梵平等　妙目
療　號布龍　至誠英　明了佛　無怯弱　寶音聲　柔輭響　號師子　號琦薩　若干辯　勇慧氏
蓮華積　號萃開　行步至　積功德　顏貌貴　主威耀　月鐙明　威神王　覺王佛　無盡氏　覺達
月　號悅豫　智郡上　號最上　逮威施　智慧氏　音柔音　導師元　聲無礙　施尊藏　豪慧佛
獨遊少　大晃耀　應根香　善光明　布威稱　好顏王　號吉利　師子兵　所止宿　名聞伏　和妙
藏　福光明　住良性　鐙明王　積聖慧　尊天王　大主元　解了行　號金結　閑靜敎　號難勝
悅喜人　安明氏　紫金光　號妙好　功勳根　法饒益　功德多　豐多氏　號虛空　微妙慧　覺解
微　一切威　如藥佛　解脫英　智藏佛　積聖慧　可敬畏　降伏流　解無礙　集至誠　善音響

上名聞 造光佛 無量威 以隨時 師子身 明意佛 離勝氏 功德體 名稱英 得力勢 遊無限 離垢月 普現義 勇猛佛 功福富 月燈光 至德耀 意離垢 善寂然 號善天 永捨垢以無勝 執殊供 無量氏 最好耀 無卑藏 無所住 以復覺 日尊重 俗之光 日善佛 福豐饒 興威氏 號無量 意吉祥 行帝王 消罷勞 施無熱 施名聞 施興華 施齊士 金剛佛將大施 號意寂 順香手 鉤巢氏 號善施 無所卑 廉恪佛 月晃昱 燄英佛 大吉祥 寂然慧 號吉義 甚山頂 甚調良 蓮華氏 無著稱 遊聖慧 離于冥 充滿佛 所在安 郡無損名稱天 勤現行 月氏佛 多功勳 寶月佛 師子幢 樂於慧 無所損 號不戲 樂功德 無著佛 名聞氏 蓮華葉 辦大藏 稱明珠 號金剛 無量壽 淨明珠 大根本 超衆惡 名稱月忻喜光 無所犯 寶意月 號寂然 明王施 妙道御 猶自在 寶結佛 以離畏 寶藏佛 若干月 離垢稱 號寂滅 天恭敬 閑淨天 善威佛 寶愛敬 寶品佛 寶遊步 師子黨 勝不淨善意佛 光照世 寶威神 離樂氏 號憶智 好清淨 化外業 以香手 意燄佛 山幢旛 善妙意 堅固燈 威神强 號珠鎧 仁堅佛 安住月 號梵音 師子月 威神首 號善生 莫能勝月氏佛 慈衆諸 日大趣 山光輝 至德頂 大名聞 號法稱 施光佛 燄曜施 作至誠 修命業 以善時 善甚重 決了意 志念行 明珠香 勝忻喜 師子光 號照明 上名聞 善山氏晃昱珠 號光勢 執無卑 勤修燄 明珠月 在世尊 吉祥手 寶忻樂 閑靜明 好寂道 光嚴哀 所到寂 世善樂 號無憂 順十所 忻樂力 勢力首 勢威王 大勢至 功勳藏 言至誠上安穩 燄明佛 大光氏 德光明 號寶首 光演香 造燈明 吉像手 善華業 珍寶佛 江海氏 執持地 意義理 意清徹 功德輪 寶舍宅 行至義 於世月 音柔和 梵英心 面威重意吉利 堅固施 號福光 大威耀 寶氏佛 號名聞 至重願 無量稱 光不虛 消天嫉 勝根元 衆金剛 英善品 妙華葉 意證明 無清行 善思稱 以照耀 神祇品 寂功勳 超越義

日藏佛　月光曜　善明佛　無憂佛　捻含耀　照執華　功勳光　同現義　定光施　興盛佛　好導
師　頂光明　威神首　難勝氏　德幢佛　靜閑居　梵音響　順次堅　無本氏　造光佛　大山氏
智金剛　億無畏　寶蓮華　力人將　華光氏　以棄愛　大威佛　梵氏佛　無量佛　龍施佛　龍施
進　堅固步　無虛見　施精佛　解縛佛　不退沒　師子幢　迦法勝　喜王佛　號妙御　受名稱
德豐多　衆香手　離垢光　師子頰　號寶稱　滅除穢　無量佛　號總持　雄人月　善見佛　逮嚴
佛　明珠光　山頂英　號法事　了義理　情性調　寶品佛　念勝根　樂欲度　住立覺　了別黨
超越尊　首最佛　雨音聲　善思惟　有善意　離垢稱　大名聞　明珠淨　堅師子　住長樹　捨思
惟　智慧頂　善住立　有志意　無量意　妙顏色　聖慧光　誓堅固　吉祥善　有妙英　人蓮華
所在安　慧造佛　功勳布　光輝佛　梵天施　寶事佛　妙好華　天神錠　善思義　治自在　名
聞意　積辯才　金剛幢　光耀燄　第十佛　諸佛號　各如是　無越樂　遊寂靜　有勢王　閑天佛
山幢佛　燄重聖　光亦然　寶藏佛　不樂越　勝大界　三世護　號德稱　月燄光　晃明照　臨以
時　行首藏　所奉行　而示現　燄照佛　光明尊　紫金山　師子施　莫能幢　人中王　光燄稱
堅精進　無損稱　離於畏　無著天　大燈明　饒益世　微夫香　特德尊　損於冥　第等倫　得自
在　師子誓　名寶稱　消滅穢　執甘露　意中月　日無畏　以莊嚴　意珠光　首英頂　造法本
第一義　決衆理　施所願　寶品身　重根劫　欲濟度　樂意住　分別部　師子音　號戲樂　柔男
子　清和佛　龍光佛　華山氏　龍忻豫　香甚豪　名稱佛　勢大天　功勳鑒　饒益龍　嚴飾目
善行道　至成佛　愍傷氏　了慧佛　無量氏　顯明佛　號至誠　日光耀　以決意　無限佛　顏貌
像　照明佛　寶英氏　決狐疑　師子願　至安穩　號柔殤　善脅佛　不虛覺　妙華英　帝石根
號大威　造作現　無量佛　名稱寶　天隨氏　解義矣　具足意　稱高藏　無憂佛　離垢氏　梵天
佛　總持豪　目華佛　離行體　號法光　無毀現　德喜悅　三界奉　名開葉　寶光氏　寶英佛

の八萬四千諸三昧門に入るを得る。但し此の諸開士のみならず、及び當來斯を學んで賢劫中に最正覺を成ずる一千の如來是なり。四如來を除き、前に無上正眞に逮び、最正覺を爲す者なり。亦た是の三昧に逮ぶ。喜王菩薩復た佛に白して言はく、善い哉、世尊唯だ以つて哀を加へ、此の諸菩薩の名字姓號を宣ぶべし。哀念するところ多く安隱する所多く、諸天及び十方人を愍傷して、正典を護り、道法をして久しく存するを得しむべし。將來學ぶ諸菩薩の爲めに施して光明を顯示し、無上正眞の道を行じて因を成就せしめん。佛、喜王菩薩に告げたまはく、『諦かに聽け、諦かに諦かに聽け。善く之を思念せよ。當さに汝の爲めに千佛の名號を說くべし』と。喜王菩薩、諸の大衆と欵を受けて聽く。爾時、世尊、便ち歎詠して諸佛の名字を說く。

[一九]善思議　諸佛音　唯念安　離垢稱　大名聞　門珠髻　堅師子　獨遊步　捨所念　及智積　意善住　無極像　無量覺　言妙顏　慧光耀　消强意　能擁護　至誠英　蓮華界　衆諸安　聖慧業將功勳　無思議　淨梵施　寶事業　處天華　善思惟　無限法　名聞音　以辦積　自在門　十種力　有十力　大聖德　無所越　遊寂然　在於彼　無數天　須彌光　極重藏　回越度　而獨步威神勝　大部界　以止護　將三界　有功勳　宣名稱　日光明　師子英　時節王　師子藏　示現有　光遠照　止師子　有所施　莫能勝　爲最幢　喜悅稱　堅精進　無損減　有名稱　無恐怖無著天　大燈明　世光耀　微妙音　執功勳　除闇冥　無等倫

佛、喜王菩薩に告げたまはく『當さに斯の諸菩薩を歎頌すべし。賢劫中當さに成佛すべきものに等し。』

所有の名號は

拘留孫　含牟尼　其迦葉　釋迦文　慈氏佛　師子燄　柔仁佛　及妙華　善星宿　及導師　大豐多　大力佛　星宿王　其藥氏　寂然英　大光明　牟尼佛　等過品　具足品　等二事　而照明

【一九】以下の千佛名號は書下さず。之の文と他の漢譯佛典を參照するのみにては、何れ迄が諸佛名のみにて、何れがその說明語なるや判じ難し。この內大半は判讀し得るも、强ひて讀み萬一、一佛を二、三に分ち、說明語を佛名とし、佛名を說明語とする等の誤りを度すは、後世に過を殘すことゝなる。淺學非才を今受けるにしても、寧ろ、佛名を誤り讀まないのに如かない。今は敢て書下さぬ所以である。思ふに、この千佛名の個所は世の碩學にしても梵本西藏語譯等を緻密に周到に參照し、與ふに長日月を以てするのでなければ、到底讀み得るものでないと信ずる。寧ろ之は數ヶ月を費す可き研究題目である。自分に後刻他の諸經を當國譯一切經に國譯する機會がある筈であるから、今後長日月、梵語經典、西藏語譯、他漢譯佛名經を參照して、國譯經釋を施すこととしたい。今は判讀し得る所と判讀し得ぬ所、加註し得る所と、加註し得ぬ所に拘らず、凡て國譯加註を共に爲さず。

德は猶ほ海の大山の如く、　衆きか故に覺船を放ちたり。　斯く、諸の[一七]沉流を度して、
外の險邪學を化す。　人は縛貪計身にして　邪見害の愛僕となり、
久獄を解くを得ず。　衆を導いて化脫せしむべし。　生れながら邪にして長く睡眠して
塵に隨つて道を樂はず。　定戒を得て願强し。　何ぞ法鼓を擊たざる？
人乏匱して獄に墮し、　五趣の世乞求するも　常に逮ばず、盡くるなし。
何の故に宣祠せざる？　無數の衆を信を懷き、　寂に在つて甘露を捨て、
炎哀して法雨を解く。　覺を執つて澤を降すべし。　三世の瘡病は
不覺心の塵勞なるを知り、　淨醫藥を了るを得て、　何ぞ濟ふて救療せざる？
衆生の闇昧を消して　大德の馬藏を成じ、　慧光は大千を照して
何ぞ佛國を耀かさざる？　唯、天・世人の　[一八]四駛瀆に墮在せるを愍れむ。
何ぞ此の厄を濟はずして　諸の大壙に墮するを護らん？　佛、諸の雜想を見るに、
天人は住し叉手す。　無詔にして非安を棄てたり。　何ぞ道寶を現ぜざる？
佛眼は三界を觀て　梵天は人尊に勸めて　唯衆の邪見を哀しみ、
法輪を轉じて熱を消す。　尊は師子座にあり、　諸天人は斯に集まれり。
是に立つて潤澤を求む。　唯爲に法輪を轉ぜられよ。』

千佛名號品第二十

喜王菩薩、復た佛に白して言く、『唯、然り、世尊、今此會中大士の此の定意を得るものありや？　斯の八千四百諸度無極に入るや？　及び八萬四千度無極の法、八萬四千の諸三昧門に入るや？

佛、喜王菩薩に告げたまはく、『今、此會中菩薩大士ありて、此の定意諸度無極を得たり。復た斯

[一七] 沉流。沉は沈と同じ。あまみづ、又湖水。

[一八] 四駛瀆。駛ははやきこと。瀆は大きな水流をいふ。四つの早き水流。

し、自ら靜り、默心にして此意を憶ふ。五濁惡世の九十六徑・六十二見の迷惑、卒に暴多にして反復なく、道教を受けず。默然として〔一〇〕般泥洹を取るに如かず。』と、佛、樹下に坐して光明巍巍として普く十方を照す。淨居身天、〔一一〕遙かに威光を見るに、顏貌功勳晃昱ならざるなく、道德〔一二〕灼灼として吉祥の業、應當に流布すべし。諸天衆會して皆共に悅豫し、大光を建立す。寂寞として正眞慧達無際にして、曜明〔一三〕煒煒として威德普く顯れ、無上清淨なること三世に最も尊く、一切十方佛界に周遍して、其の心解徹して三千の國を動かし、道慧廣遠にして見聞を得難く、超絕せること底なく、名稱通暢して、此の威神妙光、無量なる顏容の盛德を觀る。智は虛空の如く、殊特にして喩なし。時に梵王、重ねて便ち佛に啓す。悚息一心に恭恪自歸して、此頌を說いて曰く、

〔一四〕『道場に大光を演べ、　魔を降して塵勞を消し、　三千の國を震動して、
衆の惡趣の患を滅す。　正身安隱に坐して、　傾かざること、猶ほ〔一五〕須彌の如し。
振耀して佛土を照し　樹に處して蒙らざる者なし。　平然すれば、諸根寂として、
師子の無畏に據るが如し。　自ら覩て寂滅ならんと欲して、　勝牀、演暉を護る。
樹にあり、王威を顯して　廣く大道の安を布く。　世の無益の法を消して
三塗の厄を滅化す。　光顏を觀じて厭なく、　心念諦らかに愍傷す。
審かに思ふて尊議を說けば、　等しく法の平坦なるを演ぶ。　道は三世の業を選びて、
三品の諸法を耀かし、　時を以て意行を宣べて、　現道は猶ほ月の滿つるが如し。
〔一六〕色英は三十二にして　世上の大聖父なり。　世の無樂を捨てずして
神は無比に梵來り、　世を觀ずるは三火にあり、　俗を覺らずに法水を以てす。
常に護つて燒然を滅す。　是の時、甘露を雨ふらす。　精進を察して斷ゆるなく、
迷惑の者、正路を得たり。　明眼にして無二を敎へ、　唯愍哀して時に誨ゆ。

〔一〇〕般泥洹(Parinirvāṇa)。般涅槃と同じ。前出。
〔一一〕淨居身天(Śuddhādhivāsa-deva)、前出。
〔一二〕灼々。灼はあきらかなること。
〔一三〕煒々。煒、明かなること、盛んなること。
〔一四〕以下の偈文、一句五字。梵天轉法輪勸請の既出散文を韻文にす。
〔一五〕須彌(Sumeru)、妙高と譯す。前出。
〔一六〕色英三十二。三十二の妙相を言ふ。

を布施と曰ふ。無數の衆、悉く共に歡喜し、歸命作禮す。是を持戒と曰ふ。若し復た光明威神を示現し、遠近來觀して、轉相、心を化す、是を忍辱と曰ふ。諸天・人民咸共に踊躍し、其の至尊なるを知つて、緣つて道意を發す。是を精進と曰ふ。若し舍利を見れば、餘樂あるなく、佛道を思念すること能く喩ゆる者なし。是を一心と曰ふ。舍利を咲歎して妙辯才を得、而も罣礙なく、智慧に入るを致す。是を六となす。

爾の時、世尊、重散して喜王菩薩も告語したまふ。『是れ二千一百諸度無極なり。其の餘に復た九十の諸度無極あつて世の[八]九惱を消し、九十六の諸外邪學を化して正眞に入らしむ。』佛、喜王菩薩に告げたまはく、『是の二千一百諸度無極を以て說法して諸の貪婬種を開化し、二千一百諸度無極を以て說法して諸の瞋恚種を開化し、二千一百諸度無極を以て說法して諸の愚癡種を開覺し、二千一百諸度無極を以て說法して訓誨して等しく分種を化す。是を合して八千四百の諸度無極なり。一、變じて十となり、合して八萬四千諸度無極なり。佛は則ち醫王なり。法を衆生の爲にす、一切三界無上の良藥は三毒を療治し、陰蓋消すを得。等分に反逆も無反逆の人も因つて化導され解脫せざるなし。斯の八萬四千の諸度無極を奉行せずば、百千種人の爲に八萬四千の衆の苦塵勞を除かんと欲して、八萬四千の諸の三昧門に逮ぶも、終に成ずる能はず。是に由つて八萬四千の空行の法義を修立し、之を以て百千種人を化導して、八萬四千の衆の苦塵勞を消除し、八萬四千の諸三昧品に逮ぶ。是を佛道と謂ふ。深く無極に入つて、一切智を致すべし』と。佛、喜王に言はく、『[九]吾、是の法を以て佛樹下に坐し、魔官屬を降して最正覺を成ず。是に因つて法を解し、平等を建立し、地上に在つて結跏趺坐して、便ち巍巍神妙なるを致す。梵王、恭敬して忽ち下り、稽首歸命して哀を求む。往古の誓願は一切衆生の爲にす。今悉く集會して咸經を聞かんと欲す。梵王、涙を垂れて勸めて勸助し、只一切未度の迷惑を濟ひ、佛、斯の如き微妙の大聖を成じ、最正覺に逮んで寂然安坐

【八】九惱。九難とも九橫とも九罪報とも言ふ。佛が現生に受けた九種の災難を言ふ。

【九】佛成道後、難解の法なる故に說法を躊躇す。之を梵天等勸請して說法心を起さしむ。之を言ふ。

愁憂の感を離れ、以て心、至法に存して律教に順ず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか滅度無極に六事ありと謂ふや？　因つて空を曉了して以て妄想せず、其の滅度に至つて無所生を致す。是を布施と曰ふ。心建立する所、大道を立て、無處所に存す。是を持戒と曰ふ。身の安きを捨てて身命に倚らずして衆生を開化す。是を忍辱と曰ふ。神足力を以て三千界を動かし、一切天人驚怖する者なし。是を精進と曰ふ。其の心禪思して定意正受し、而も所著なく、爲に放逸をなさず。是を一心と曰ふ。滅度の後其の身骨を散じて遍く十方に布きて一切恩を蒙る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか變化度無極に六事ありと謂ふや？　[六]舍利を分布し、處處之を得て、天下に流布す、是を布施と曰ふ。舍利瑞を現じて威神光明あり、見て悅ばざるなし。是を持戒と曰ふ。衆生、變を見て、心に喜歡を抱き、因つて道心を發す。是を忍辱と曰ふ。諸天威を見て、功德巍巍たり。之を勸めて代つて喜ぶ。是を精進と曰ふ。若し[七]仙足を見れば、舍利、光を放ち其の衣毛起つて淚卽ち出づる者、是を一心と曰ふ。若し舍利を覩て、至誠の願を立て、光の威德、五色の晃曜を現ず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか流布法教度無極に六事ありと謂ふや？　若し衆人自ら歸し供養するを得て、衆の乏しき所を給す。是を布施と曰ふ。常に己心を守つて、所生なからしむ。其の所生なければ、則ち所滅なし。是を持戒と曰ふ。若し所有なくして其の三界を見、佛法人物一切自然なり。是を忍辱と曰ふ。經典・道法・訓教をして天上に流在し、天下に周遍せしむ。是を精進と曰ふ。諸魔官屬之を見て、驚縮して威顏に當るなし。是を一心と曰ふ。假使法教明顯に流布して十方愛敬して、各々悅豫を懷き、稍稍漸得して滅度の法に至る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか分舍利度無極に六事ありと謂ふや？　舍利の爲に衆の供養具を求め、夙夜敬事す。是

【六】舍利（Śarīraḥ）。荼毘後の佛骨を言ふ。單數主格の Śarīraḥ は佛身を言ひ、複數主格の Śarīraḥ は佛骨を言ふ。舍利と言ふ場合は佛骨を言ふ。舍利を分ち、起塔した事は佛滅後、直ちに印度八王間にあり、滅後百餘年、阿育王によつて之を更に分つて、多くの塔を各地に建立し、供養した。

【七】身毛樹立するのは喜ぶ場合か、恐れる場合の形容である。こゝでは、隨喜して悲泣するを言ふらし。

戒と曰ふ。所觀專精にして放逸ならず、唯大道に存す。是を忍辱と曰ふ。行來安徐にして卒暴ならず。是を精進と曰ふ。威儀缺けず、禮節備具す。是を一心と曰ふ。深遠の業を見るに、明曜として本なく、德行具足す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか愍傷度無極に六事ありと謂ふや？ 若し惡人あつて心に邪毒を懷けば、衣食を以て養ふて、之を救濟す。是を布施と曰ふ。兇害の人を見て、若し厄難に遭へば之を救護し、因つて經道を示す。是を持戒と曰ふ。若し外の異學志願する所あつて、而も自ら貢高なるも悉く能く之を忍ぶ。是を忍辱と曰ふ。若し衆人の爲に敷演する所あり、其の義理を宣べて、猶ほ池の蓮華の如し。是を精進と曰ふ。賢善の業を以て其の義理を講じ、自ら調伏せしむ。是を一心と曰ふ。若し祠祀あれば、其の所興に因つて往いて爲に說法し、言、審諦の如く、裸形子を化す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか行空度無極に六事ありと謂ふや？ 所施厭ふなく、以て倦をなさず、化して道に入らしめ、俗事をなさず。是を布施と曰ふ。所作自在にして已に由るを得て、他敎に從はず。是を持戒と曰ふ。所行專精にして迴還して小節に墮さず。是を忍辱と曰ふ。究竟行を以て中ごろに證を取らず。衆の祐德を畢る。是を精進と曰ふ。應に奉行すべき所は常に倚る所なく、純淑を奉修す。是を一心と曰ふ。其の好む所に隨つて行を造立し、一切を導利す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか捐捨度無極に六事ありと謂ふや？ 其の以て壽命の行を棄捐し、以て身を貪らず、所行自由にして罣礙する所なし、是を布施と曰ふ。若し現在を棄つること身口心にあり、五趣生死心に所著なし。是を持戒と曰ふ。若し境界を結んで安んじて法に奉行し、四等六度ありて所越なし、是を忍辱と曰ふ。放捨すべき所、婬怒癡を捨て、皆一切餘苦諸見六十二事を棄つ。是を精進と曰ふ。以て衆生の所行をして純淑ならしめ、以て貢高ならず、以て所行を捨つ。是を一心と曰ふ。衆生

【五】裸形子(Nigrantha)。裸形外道といふ。耆那(Jaina)敎徒をいふ。極端なる苦行を行ひ、裸形なる爲、この名あり。耆那敎は佛敎と同時に中印度に起つた宗敎であつて、耆那(Jaina)を敎祖とし、佛敎徒との間に論爭しばしばあり。

あるなし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか識念往古過去度無極に六事あり謂ふや？　過去所生に更歴せし所行の是非を見識す。是を布施と曰ふ。所作成就して以て無上正眞を勸助す。是を持戒と曰ふ。頻來するを用ひて皆滅盡して所生なからしむ。是を忍辱と曰ふ。是の名號を以て無所有となし、覩見する所あつて一切の本を見る。是を一心と曰ふ。若干品を以て經道を頒宣し、三界を開化して危厄を導利す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか神足飛行度無極に六事ありと謂ふや？　神足を得るを以て飛騰する所あつて十方に到る。是を布施と曰ふ。所行方便して常に法義に順じ、五陰は空なりと解して破壞する所なし。是を持戒と曰ふ。大哀を興造して衆生を愍傷し、之を度脫せんと欲す。是を忍辱と曰ふ。所行具足して猶ほ月の滿ちて衆星中に明らかにして漏失するなきが如し。是を精進と曰ふ。若し能く自ら五陰六衰十二緣起を制して其の志を抑伏す。是を一心と曰ふ。其の精進せざるを化して勸めて、無極聖に修入せしむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか漏盡度無極に六事ありと謂ふや？　彼を見て已に彼我を計らず、衆の漏あるなし。是を布施と曰ふ。以て諸漏を觀じて[四]習の所生なるを知り、所起なからしむ。是を持戒と曰ふ。一切漏は本悉く無根にして皆以て滅盡するを視る。是を忍辱と曰ふ。身逮得して諸漏盡き、盡きて盡くる所なきを察して生死の歸趣する所を見ず。是を精進と曰ふ。其の衆漏の根本をして自然に永く餘りあるなからしむ。是を一心と曰ふ。精進力を以て斯の衆漏を拔き、而も處所なく、見に所趣なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか威儀度無極に六事ありと謂ふや？　威儀を用ひて無數の人をして咸禮節を用ひ、和心歡喜せしむ。是を布施と曰ふ。普く悅ぶ所多く、一切衆生歡喜せざるなく、法訓を諮受す。是を持

【四】習。煩惱の餘氣を習氣又は習と云ふ。

學んで三寶を捨てず。是を一心と曰ふ。一切世間悉く其の法を聞き、輒ち受け奉行して邪心あるなし、是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか智眼度無極に六事ありと謂ふや？ 若し天眼を以て一切色を見て、心に所著なく、虛無を了す。是を布施と曰ふ。設ひ能く明かに了し、無色を觀、用ひて善權を行ずるも、欲界に墮せず。是を持戒と曰ふ。假使無像の色に解達し、之を心等に達するも、憎愛あるなし。是を忍辱と曰ふ。生死往來周旋する衆の難患を察するに、以て拘畏せず。是を精進と曰ふ。其の無念を觀て、一切思に等し、內外の無礙、所歸ある所となし。是を一心と曰ふ。若し寂然を視ては、其の心憺怕にして猶ほ虛空の限量すべからざるが如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか天耳度無極に六事ありと謂ふや？ 若し能く一切衆生の言語・音聲、天上の妓樂・歌舞の聲、地獄・餓鬼・畜生・啼哭の聲を聞くを得て、慈心を以て之に向ふ。是を布施と曰ふ。人をして細微の響を聽くを得しめ、一切の言は悉く空にして辭なきを了す。是を持戒と曰ふ。一切の所行は悉く道業に隨つて外學六十二見に隨はず。是を忍辱と曰ふ。若し口を以て宣べ、心に是の行を念じ、隨時の宜しき善權方便し、化するに智慧を以てす。是を精進と曰ふ。一切空にして悉く萬物なきを聞き、經道を諮受して執つて誦持す。是を一心と曰ふ。一切音は總て之が盡滅するを知り、寂然無上正眞に歸す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか心智自在他人心念度無極に六事ありと謂ふや？ 若し心、已に由つて、諸處所の三界の患を見て、之を救濟せんと欲す。是を布施と曰ふ。其の心普く善不善の義を見、其の心平等にして有爲に存せず。是を持戒と曰ふ。諸の因緣報應の業の本緣對なきを觀ず。是を忍辱と曰ふ。若し過去當來世の事を覩て、悉く豫め了し了して其の本末を見る。是を精進と曰ふ。平等を以て現在の事を見ること、皆幻化の如し。是を一心と曰ふ。普く一切衆行の本末を見るに、本末の何くも有要

之を開化す。是を持戒と曰ふ。等心を以て衆生に加へて、傷害をなさず。是を忍辱と曰ふ。若し以て深要の空法無上大道至眞の義を奉行して一切智を致す。是を精進と曰ふ。他音に倚つて復た還つて小節に墮するを作さず、正受平等にす。是を一心と曰ふ。生死を厭はず、慧を以て一切衆生を開導す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか盡慧度無極に六事ありと謂ふや？　其の盡慧を以て所應を修治し、短乏に墮せず。是を布施と曰ふ。若し善諦を用ひて衆行を療治し、身口意淨し。是を持戒と曰ふ。所行の穢を除き清淨光明にして想あるなし。是を精進と曰ふ。以て諸迷を斷じて正眞に樂在し、所當宜しきを宣べて、佛の法教に順ず。是を忍辱と曰ふ。悋惜する所なく、一切の所有皆能く厄を濟ふて正眞を勤修す、是を一心と曰ふ。能く不可の業、一切の無明を棄捐し、巍巍として聖達六通を逮致して、一切智に至る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無所生慧度無極に六事ありと謂ふや？　其の愛欲の本、新に起らんと欲すれば、悉く空なることを曉了し、慧に所生なし。是を布施と曰ふ。往形なからしめ、亦還反なく無所生を解す、是を持戒と曰ふ。世法と緣雜るあらず、唯純ら法を修す。是を忍辱と曰ふ。專ら脫門空無相願を修して忘失する所なし。是を精進と曰ふ。能く無所生慧を見る所以に用ひて一切を見る。悉く所有なし。是を一心と曰ふ。衆念一切の塵垢を斷ずるを以て妄想を懷かず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか建立度無極に六事ありと謂ふや？　若し正法住するも、設ひ正法沒するも、心、道を捨てず。衣食の養及び名聞を致す。是を布施と曰ふ。法訓に在つて倚求する所なく、心等しうして空の如し。是を持戒と曰ふ。其の能く[三]四種性人を歡悅して四に倚らず。是を忍辱と曰ふ。若し以て方便の果實を勤修して、正眞無上の道果を求む。是を精進と曰ふ。阿須倫にある時、常に經典を

【三】四種性人。四種死生の意か。然らば、一、從冥入冥、世人卑賤の家、旃陀羅王より下賤の家に生れ、貧窮の内に生活する。身口意に惡業を行ひ、死して惡趣に墮つ。二、從冥入明、前述の家に生活して、身口意に善業を行ひ、身滅し天に生る、三、從明入冥、富貴の家即ち婆羅門等の家に生れ、富貴に生活し、身口意に惡業を行し、死して惡趣に生る。四、從明入明前述の處にあつて、身口意に善業を行ひ、死して天に生る。こゝでは凡ての人の意。

是を六となす。
何を以てか不還度無極に六事ありと謂ふや？　以て能く欲界の著を遠離し、四恩の法を行じて四等厭くなし。是を布施と曰ふ。其の心、餘の勞穢の難なく、其の元を極盡して復た世に還らず。是を持戒と曰ふ。二十二善施諸天に生れて、上にあつて修行して道業を捨てずや。是を忍辱と曰ふ。夙夜勤修して心に存して法にあり、若し二十三善施性天に生る。是を精進と曰ふ。若し二十四無愛結天に生れて、上にあつて坦然として心に求むるなし。是を一心と曰ふ。若し以て六通に親近し、正士の路を正行して慧藏を致す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。
何を以てか無著度無極に六事ありと謂ふや？　盡く忽誤の法を忘失するを以て阿羅漢に至る。是を布施と曰ふ。復た無忘失の法を須持せず、自然に盡す。是を持戒と曰ふ。若し篤信を以て解脱を得、心に疑を懷かず。是を忍辱と曰ふ。其の慧解を以て生老病死を滅盡するに至る。是を精進と曰ふ。衆厄三塗の難を消盡して身自ら證明す。是を一心と曰ふ。倶に解勉を得て、周旋生死、永く盡きて餘なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。
何を以か緣覺度無極に六事ありと謂ふや？　少事を觀察して處山に寂靜にし、身命を貪らず、衆鬧をなさず。是を布施と曰ふ。正士の業を興して以て法を選擇し、正眞宜同、能く時宜を將す。是を持戒と曰ふ。獨處して志を守り、放逸をなさず。是を忍辱と曰ふ。以て解脱に逮んで、三界を度し、去つて復た結縛なし。是を精進と曰ふ。若し寂然を修して憺怕に至り、心に所著なし。是を一心と曰ふ。一品の業正眞の本を致して亘然として法の如く、二業あるなし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。
何を以てか菩薩度無極に六事ありと謂ふや？　所行の救濟は常に等心を以てし、諛諂あるなし。是を布施と曰ふ。和性を致すを得て、常に安隱を行じ、用ひて心を療治し、其の所生の如くにして

卷の第六

[一]八等品第十九

佛、喜王菩薩に告げ給はく、『何を以てか八等度無極に六事ありと謂ふや？ 若し八等を信じて篤樂執御して[二]八邪に墮せず。是を布施と曰ふ。八等の行に於て、道法を執持して俗榮をなさず。是を持戒と曰ふ。既に等行にあつて平等業を存し、自在を得て侵欺する者なし。是を忍辱と曰ふ。一坐して興らず、羅漢を逮成して三界を行度し、復た生死なし。是を精進と曰ふ。因つて八等に從つて道迹往來不還無著の眞人を致す。是を一心と曰ふ。以て衆流分別若干を越へ、斯義の無上正眞を懷來す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか懷道迹法度無極に六事ありと謂ふや？ 其の道迹に因つて次を以て明を致す。陰蓋淫怒癡の冥睡眠調戲を消盡す。是を布施と曰ふ。以て愛欲を盡し、復た衆穢不淨の行を盡す。是を持戒と曰ふ。七たび反つて天上の世間を往來し、乃ち衆の漏を盡す。是を忍辱と曰ふ。家家に行乞して、以て一切を福にし、世世安きを得る。是を精進と曰ふ。其の一行を以て身口心を守り、一切の業無益の元を捨つ。是を一心と曰ふ。其の無所著を以て一切空三界の本元を解す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか往來微塵度無極に六事ありと謂ふや？ 三界にありと雖も、其の色欲を覩、稍稍向滅す。是を布施と曰ふ。其の塵勞・愛欲の難を見て、未だ曾て犯さず。是を持戒と曰ふ。其の罪釁を察して轉じて薄少ならんと欲し、究竟して無からしむ。是を忍辱と曰ふ。明通利を以て罪業を觀察し、其に從つて行成る。是を精進と曰ふ。以て一切の愛欲を燒盡するを見て、餘りあるなからしむ。是を一心と曰ふ。一生生死の元を解暢し、以て愛著を去つて復た衆患なし。是を智慧と曰ふ。

【一】八等。詳しくは八等支、四靜慮四無色の八定をいふ。

【二】八邪。八正道の反對である。一、邪見。二、邪思惟。三、邪語。四、邪業。五、邪命。六、邪方便。七、邪念。八、邪定である。

を行ぜず。是を布施と曰ふ。其の所行五事の業を見る。戒・定・慧・解・度知見品なり。是を持戒と曰ふ。假使能く因縁の對を盡すも、禍福を生ぜず。是を忍辱と曰ふ。勤修の至行、悉く平等ならしめ、偏斜なし。是を精進と曰ふ。若し篤信を以て、其の行、精修して垢濁なし。是を一心と曰ふ。所見常に明かにして晝日に行くが如く、闇冥を見ず。破壞する所なく、濟はざる所なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[一〇四]觀淸白住度無極に六事ありと謂ふや？ 若し住の立つ處所・淸白慈地、覩見して、斯の住に逮ばんと欲す。是を布施と曰ふ。其の能く瑞應の業を獲致して、三事身口意の行を起さず。是を持戒と曰ふ。四恩の法を精進奉行して、斷絶することなし。是を忍辱と曰ふ。所觀亘然として道意巍巍として邊際なし、是を精進と曰ふ。積功累德して日日に聖明の行を增長す。是を一心と曰ふ。淸白を察して衆生の生死諸善惡の想及び諸法想を消除す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか法種度無極に六事ありと謂ふや？ 諸法の苦を覩て、達せざるを用ひての故に禍福を造る。是を布施と曰ふ。其の中間心無所處なきを見、有無あらず、是を持戒と曰ふ。若し愛欲を見て、疾く之を消し、生長せしめず。是を忍辱と曰ふ。其の正性を存して未だ曾て無上正眞を違失せず。是を精進と曰ふ。種性三十七品を具足して佛種を斷ぜず。是を一心と曰ふ。心に[一〇五]八等を成じて諸法を逮致し、證を取らず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【一〇四】菩薩十地中に觀淸白住、淸白慈地學見當らず。或ひは「淸白」は地、住に冠する形容詞か？

【一〇五】八等。後出。

何を以てか見自然度無極に六事ありと謂ふや？　所逮の功德虛にして所倚なし。亘然弘曜して猶ほ一心に定光佛に歸するが如し。是を布施と曰ふ。身、懈倦せず、貪惜する所なし。若し月光盛滿にして盛明に、〔一〇三〕星宿を照す時、明眼の人眞に審かに視了するが如し。是を持戒と曰ふ。若し能く一切諸法皆悉く空の如く覩見す。是を忍辱と曰ふ。禪思すべき所、皆諸法を見、這生尋滅、悉く此を了別す、是を精進と曰ふ。施者を見ずして而も救濟あり、自ら及ばざるを觀る。是を一心と曰ふ。身、心行を觀じて、口に法敎を宣べ、一切を益するあつて、而も二あるなし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか欲行界業因緣罪福度無極に六事ありと謂ふや？　所習の欲を見て、瑕穢の業となし、本悉く清淨にして已に罣礙を立つ。是を布施と曰ふ。一切法を覩る、皆自然に寂寞なり。達せざるを用ひての故に、自ら殃福をなす。是を持戒と曰ふ。所觀、玄遠にして極底無際なり。是を忍辱と曰ふ。自ら其の緣を視るに、罪福悉く盡きて、久存する者なし。是を精進と曰ふ。緣對滅すと雖も、當に行ずる所の方便の宜しきを見て、輒ち正眞に居る。是を一心と曰ふ。罪福既に盡きて、復た更に三界の難造らず、所生なきを見る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか色行緣業度無極に六事ありと謂ふや？　諸の色緣を見るに、皆身用心不了を作すに由つて、橫に是の報應の元を起す。是を布施と曰ふ。衆の色なる者を觀るに、皆因緣あり、未だ必ずしも橫に身心の迷ひを來さざる故なり。是を持戒と曰ふ。所生處は天上・人間若しくは三惡趣の罪福の應を察す。是を忍辱と曰ふ。若し所生を觀じて想處を念ず。是を精進と曰ふ。常に報應を視て、歡喜悅豫す。是を一心と曰ふ。護高寂然として、下る者憺怕にして悉く所著なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無色行業度無極に六事ありと謂ふや？　若し色に等しと欲地に墮在し、清淨の處妄想

【一〇三】星宿（Nakṣatra）。星座、星をいふ。印度には天文學占星術發達せり。從つて佛敎にも多く取り入れられる。（宿曜經等）。

何を以てか[九九]知現在不可限礙度無極に六事ありと謂ふや？　其の所造因緣の對を覩て、羣生を訓化し、功德を興立す。是を布施と曰ふ。其の所由を見て因て三脫を解し、六度無極を奉じて成就を致す。是を持戒と曰ふ。奉行する所、訓へて悉く貪欲を離れ、志、道法を慕ふて、法を以て樂となす。是を忍辱と曰ふ。一切形を觀るに、微妙にして麁細、悉く滅盡して常に存する者を觀ず。是を精進と曰ふ。證明を見るに、三界、幻の如く、一切本無にして違失する所なし。是を一心と曰ふ。若し生死無爲の元を觀じて有數無數、心、二に處らず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。』

方便品第十八

佛、喜王菩薩に告げたまはく、『何を以てか曉了方便度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く專精に善權方便して時に隨つて入る。是を布施と曰ふ。其の瑕穢に於て、因つて開化して悉く清淨ならしむ。是を持戒と曰ふ。所作の功德を以て則ち一切衆生を勸助す、是を忍辱と曰ふ。所遊至にあつて、傷害する所なし。而して失あるなし。是を精進と曰ふ。志、好喜を以て衆生を敎誨し、四恩を用ひて濟ふ。是を一心と曰ふ。無量の門を入つて總持の要を宣べて、之を導利し、三界を化して大道に入らしむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何き以てか純熟度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く方便して平等に一切諸法を誘進す。是を布施と曰ふ。懷來の法、誨へて正心無緣に玄微の妙慧・空無想の願、若し[一〇〇]八品を覩て、[一〇一]八難を除去し、志八正に存して[一〇二]諸法本無なるを覺了す、是を持戒と曰ふ。諸見を觀じて迷惑を分別して邪見に墮さず。是を忍辱と曰ふ。五趣、開化すべきを察して、因つて往いて之を救ふ。是を精進と曰ふ。若し御すべきを見て、尋ね往き、方便して之を度脫す。是を一心と曰ふ。若し有爲を見て、其の中に入り、諸の諸著を消して滅度を得しむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【九九】知現在不可限礙。十八、智慧知現在世無礙、佛智慧を以て未來世の所有一切、若くは衆生法、若くは非衆生法を照知し、悉く能く遍く知つて無礙である、之をいふ。

【一〇〇】八品。八正道をいふか。八正、八正道をいふ。

【一〇一】八難、見佛聞法に就て障難ある八處である。八無暇ともいふ。道業を修するに暇のない所である。一、地獄、二、餓鬼、三、畜生。四、鬱單越(北俱盧洲)、樂報殊勝にて凡て苦ない故に。五、長壽天、(色界無色界の長壽安穩な處)。六、聾盲瘖瘂。七、世智辯聰。八、佛前佛後、二佛の中間佛法なき處。

【一〇二】諸法本無。法(Dharma)には正法と狀態もの現象の二義あり。この法は後者の意である。

曰ふ。演ずる所の法訓、其の聲周遍して十方に徹す。是を精進と曰ふ。常に至行 憶ふて虚損をなさず、至眞に專精して篤信し思惟す。是を一心と曰ふ。宣すべき所、未だ曾て虚妄ならず、一切衆生を安隱する所多し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[九六]意行轉進度無極に六事ありと謂ふや？ 若し意心正思して邪にあらず、心存し、念を行じ、常に本淸淨なり、是を布施と曰ふ。其の聞法を以て愚冥を御導し、諸の所著を化す。是を持戒と曰ふ。其の能く有無の業を導利して平等の行を立つ。是を忍辱と曰ふ。假使、法を學び、吾我を棄捐し、以て自大ならず。是を精進と曰ふ。愚癡を釋離して、志、大明に存して暗蔽あるなし。是を一心と曰ふ。其の行深妙にして卓然として異あつて限量なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[九七]知過去世所見無礙度無極に六事ありと謂ふや？ 其の諸果衆種四大を觀じ、之が本と無なるを了す。是を布施と曰ふ。諸陰・入・色痛想行識は本は處所なきを察す。是を持戒と曰ふ。諸の六衰の根元甚だ微にして緣對して生ずるを視る。是を忍辱と曰ふ。其の善惡・禍福の所由は皆貪心に由ることを觀ず。是を精進と曰ふ。衆の塵勞を斷じて、常に淸淨を行じて諸垢あるなし。是を一心と曰ふ。衆生盡く十二牽連は本無所生なるを察す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[九八]見於當來本末所有無罣礙慧度無極に六事ありと謂ふや？ 其の過去五趣の合散を見る。猶ほ春秋の熾衰・成敗の如し。是を布施と曰ふ。若し能く諸所の邪見六十二事を分別して顚倒に墮さず。是を持戒と曰ふ。人の元を觀じて合散を分別し、本、本あるなし。是を忍辱と曰ふ。衆生を察して、何れかの藥を以て之を療治すべし。是を精進と曰ふ。其の所生を觀て、進退を邦畔し、各ゝ緣行あり。是を一心と曰ふ。報應を曉了して、目、化すべきを覩、往いて開度して道意を發さしむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【九六】意行轉進。十五、一切意業隨智慧行、佛淸淨の意業を以て智に隨つて衆生心に轉入し、爲に法を說いて無明癡惑の膜を除滅す。之をいふ。

【九七】知過去世所見無礙。十六。智慧知過去世無碍、佛、智慧を以て過去世の所有一切若くは衆生法、若くは非衆生法を照知し、悉く能く遍く知つて無礙であるをいふ。

【九八】見於當來本末所有無罣礙慧。十七、智慧知未來世無碍、佛智慧を以て未來世の所有一切、若くは衆生法、若くは非衆生法を照知し、悉く能く遍く知つて無碍なり。之をいふ。

何を以てか[九一]不失解脱度無極に六事ありと謂ふや？　身力堅固にして心金剛の若くにして至要を失はず。是を布施と曰ふ。大衆に處在して獨處に在るが若く、心常に一の如く、忘失する所なし。是を持戒と曰ふ。擾憒衆鬧の中に遊んで迷誤せず。是を忍辱と曰ふ。他人衆生の性行所念の善惡を解知す。是を精進と曰ふ。無上大道不滅盡の慧を安諦し建立す。是を一心と曰ふ。無生慧を以て處所を消去し、所存なからしめ、唯經典に志す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[九二]解度知見度無極に六事ありと謂ふや？　所行至實にして虛僞をなさず、輒ち如願を得。是を布施と曰ふ。其の觀覩する所、只無爲を見、衆の有爲生死の難を度す。是を持戒と曰ふ。欲の穢を察し、其の本末は因緣より起るを覩る。是を忍辱と曰ふ。[九三]地より地に至りて諸住を備具して果處を建立するは十住の業なり。是を精進と曰ふ。禪思行道心の所生は以て住處に逮ぶ。是を一心と曰ふ。若し衣被を著するに、之に加て臂にあり、方便して一切の衆惡を副除し、忘失する所なく、解脱に違はず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[九四]知身行慧明所轉度無極に六事ありと謂ふや？　身行勤修して一心に正行し、身口意を守つて、以て厭をなさず。是を布施と曰ふ。其の體を導化して殺盜婬せず、而も所犯なし。是を持戒と曰ふ。十住を奉修して所住に罣礙の業あらしめず。是を忍辱と曰ふ。專精一心に衆の德本を立て、以て一切に施す。是を精進と曰ふ。無數の人をして其の報應十方の福報を得しむ、是を一心と曰ふ。身を以て告敎して神足を顯はし、一切に飛到して諸佛の說を見る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[九五]口行轉進聖慧度無極に六事ありと謂ふや？　口班宣する所無上法を說き、曾て更歷する所、諸法を解決して未だ曾て厭倦せず。是を布施と曰ふ。其の音普く至つて一切心に入り、行をして淸徹ならしむ。是を持戒と曰ふ。衆會を開化して悉く無上正眞に通暢せしむ。是を忍辱と

【九一】不失解脱。十、解脱無滅、佛一切の執着を遠離し、二種の解脱を具す。一、有爲解脱、無漏の智慧の相應する解脱。二、無爲解脱、一切の煩惱淨盡して無餘なり。

【九二】解度知見。十二、解脱知見無滅。佛一切の解脱の中に於て知見明了分別無碍である。これをいふ。

【九三】第一地より第十地に至るをいふ。十住は十地と同じ。（前出）。

【九四】知身行慧明所轉。十三、一切身業隨智慧行、佛、諸の勝相を現じて衆生を調伏し、智に稱ひて一切諸法を演說し、各解脱證入せしむ。

【九五】口行轉進聖慧。十四、一切口業隨智慧行、佛微妙淸淨の語を以て智に隨つて轉じ、一切衆生を化導利益す。

若し法明を以て觀ずる所、一切を傷害する所なし。是を精進と曰ふ。一切の所講は乃ち其の本を說き、其の宿命を識つて乃ち無際を了す。是を一心と曰ふ。所解の義理限量すべからず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[八七]無有失意度無極に六事ありと謂ふや？　意の識念する所、乃ち前世無數億劫を知つて邊底なし。是を布施と曰ふ。憶する所迴遠無央數劫に功を積み德を累ぬ。是を持戒と曰ふ。若し以て察知して審かに清淨にして、永く垢濁なし。是を忍辱と曰ふ。所好を識了して初發意に從つて古今所行す。是を精進と曰ふ。心、所念に入つて一切法の進退本末を念ず。是を一心と曰ふ。一切の想を斷つて各各同じからず。宿世を憶念して曾て更歷する所を分別す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[八八]不失定意度無極衆行に六事ありと謂ふや？　四等心を受けて慈悲喜護定意正受す。是を布施と曰ふ。設ひ能く咸受して四意止を斷つるも、身痛想法なし。是を持戒と曰ふ。至德を奉行して四意斷を修し、斷じて所斷を無し。是を忍辱と曰ふ。以て神足に逮び、十方を飛倒して一切を教化す。是を精進と曰ふ。若し禪思を行じて威三昧行を受得す。是を一心と曰ふ。若し聖明を以て道慧を諮受して虛妄ならず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[八九]不失慧度無極に六事ありと謂ふや？　若し慧根を受けて知、量るべからず。衆生の元を知る。是を布施と曰ふ。力勢堅强にして慧力を獲致し、乃至佛の十力を得。是を持戒と曰ふ。覺意を逮得して諸の不覺者を悟化導示して達明を得しむ。是を忍辱と曰ふ。心を曉了して道義を啓受し行計るべからず。是を精進と曰ふ。分別解十二緣起に逮んで[九〇]牽連に因るを知る。不覺に由るが故に。是を一心と曰ふ。斯の聖明を以て十種力四無所畏十八不共諸佛の法を致す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【八七】　無有失意。九、念無減、佛三世諸佛の法、一切の智慧相應し滿足し、退轉あることなし。

【八八】　不失定意。或ひは五の無不定心に當るか？

【八九】　不失慧。十、慧無滅、佛の一切の智慧を具し、無量無際不可盡の故に言ふ。

【九〇】　牽連。緣起（十二）の舊釋。

す。是を精進と曰ふ。自ら其の心を攝して恩を以て人を濟ひ、之を開導す。是を一心と曰ふ。一切時に隨つて其の所願其の行無底にして、各〻悅豫せしむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか〔八二〕觀寂無畏無極に六事ありと謂ふや？　所願已に成吾して恬怕たる如し。是を布施と曰ふ。人に依仰して寂然として安らかなり。是を持戒と曰ふ。其の愍哀を行じて諸業を察護すること、猶ほ道場の如し。是を忍辱と曰ふ。一切普く三界の衆生を護り、示すに道心を以てして所行無邊なり。是を精進と曰ふ。將養すべき所一切愚惡の衆の爲に正法を宣暢す。是を一心と曰ふ。說法をなすと雖も、身口意を化して犯す所なからしめ、三界に著せず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか〔八三〕無有若干度無極に六事ありと謂ふや？　若し若干品の想を生ぜずして心に存して道にあり。是を布施と曰ふ。其の是の如き想は道德を興顯して正眞を離れず。是を持戒と曰ふ。若し無意を以て思想となさず、常に一定意なり。是を忍辱と曰ふ。未だ曾て彼の已性の行を毀犯せず、身一切を護る。是を精進と曰ふ。勤修應行して其の時を解知し、聖節を失はず。是を一心と曰ふ。皆能く五趣生死往來周旋する一切の根源に達暢す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか〔八四〕所樂度無極に六事ありと謂ふや、若し心念樂して自ら其の心を護り、他人を愍傷す。是を布施と曰ふ。設使心に往古今世を思ひ、己身を愍念して以て一切を哀む。是を持戒と曰ふ。若し復た喜樂して經典を講說して俗業をなさず。是を忍辱と曰ふ。常に用ひて時に隨ひ、一切、樂無上正眞に至樂す。是を精進と曰ふ。假使佛法の聖衆を好喜し、衆の愛欲不善の行を斷つ。是を一心と曰ふ。若し〔八五〕諸邪九十六種を除いて甘道の法に志す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか〔八六〕不失精進度無極に六事ありと謂ふや？　所造勤修して道法を奉行し、德、損耗せずして一切備悉す。是を布施と曰ふ。若し心悅を以て一切を哀念し、害心を以て他人に向はず、布施精進す。是を持戒と曰ふ。若し訓誨時に示すに道法を以てし、悉く能く堪受す。是を忍辱と曰ふ。

【八二】觀寂無畏。四、無畏想（佛一切衆生に於て平等に普く度し、心に簡礙なし）に當るか？

【八三】無有若干。六、無不知已捨、佛一切諸法に於て皆悉く照知して、方に捨て、一法として了知して之を捨てざる者あることなし。

【八四】所樂。七、欲無滅（佛、衆善を具して常に諸の衆生を度せんと欲し、心に厭足なし。）に當るか？

【八五】外道の九十六說をいふ。（前出）。

【八六】不失精進。八、精神無滅に當る、佛の心身精進滿足し、常に一切衆生を度し、休息することなし。

佛、喜王菩薩に告げたまはく、「何を以てか十八不共と謂ふや？　諸佛の法事に十八あり。何を以てか無毀滅[七八]度無極に六事ありと謂ふや？　時に應じて開導し、德行を具足し、缺失なからしむ。是を布施と曰ふ。若し伴黨を除きて所爲に偏せず、夫あるなきをなす。是を持戒と曰ふ。所說至要の言、失あるなく、身口心寂たり。是を忍辱と曰ふ。其の果報に應じて本旨に違はず、始め發意より道に至つて二なし。是を精進と曰ふ。其の誓願に從つて各ゝ所を得しめ、本要に違はず。是を一心と曰ふ。至心脫門に長く安隱に入るを獲て衆難あるなし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無著無虛言[七九]度無極に六事ありと謂ふや？　所說開化して皆純熟を宣べ、雜碎をなさず。是を布施と曰ふ。以て三達を得て去來を知見し、念常に清淨にして所行無穢なり。是を持戒と曰ふ。害心を懷ひて他人に向はず、恒に仁慈を抱く。是を忍辱と曰ふ。其の人心、所好あらんと欲するに隨つて而も解說を爲し、便ち喜悅せしむ。是を精進と曰ふ。無等倫をなして宣布すること微妙なり。猶ほ蜜甘露の如く之を人に加へて心悅豫せしむ。是を一心と曰ふ。若し爲に頒宣して衆結狐疑の羅網の以て自ら纒縛せるを消除す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[八〇]無脫志度無極に六事ありと謂ふや？　其の心放捨し、功德斷ゆることなく、自然に定まる。是を布施と曰ふ。一切の德を以て其を勸助し、道心を發さしむ。是を持戒と曰ふ。所行無邊にして至義を遵修し、永く罪殃なし。是を忍辱と曰ふ。一切衆德の行・正眞の法を逮得す。是を精進と曰ふ。常に三世去來今の事を識つて、未だ曾て忽忘せず。是を一心と曰ふ。其の樹の生ずるに因つて寂然として長大なり。道法を諦念して以て本を失はず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[八一]心定度無極に六事ありと謂ふや？　云ふ所の平等心は所生なく、道法を興立す。是を布施と曰ふ。宣揚すべき所、遊居に依因つて道法を失はず。是を持戒と曰ふ。其の依倚する所、法を以て開化し、喜悅する所多し。是を忍辱と曰ふ。其の所奉の六度無極正眞の道は皆他人の爲に

【七八】無毀滅。十八不共法中身無失に當るか。然らば、佛無量劫より以來、常に戒定慧智慧慈悲を用ひて、その身を修む。此の功德滿足する故に、一切の煩惱共に盡く。

【七九】無著無虛言。口無失か。佛の無量の智慧辯才を具し、所說の法衆の機宜に隨ひて皆證悟を得しむ。

【八〇】無脫志。念無失に當るか。佛、諸の甚深の禪定を修し、心散亂せず。諸法の中に於て心著する所なく、第一義の安穩を得るが故にかく名く。

【八一】心定。無不定心に當る。佛の行住坐臥、常に甚深の勝定を離れず、是を無不定心と名く。

何を以てか娯樂度無極に六事ありと謂ふや？ 施與する所、希望を離れて猶ほ虚空の如く、[六六]五百蓋を化して比丘衆を覆ふ。若し[六七]梵志聚、名けて頭那と曰ふ。井中の水泉自然に甘美なり。是を布施と曰ふ。若し城里に入れば、人民普く安らかに、[六八]箜篌樂器鼓せずして自ら鳴る。是を持戒と曰ふ。諸根具はらず、盲聾[六九]瘖瘂跛蹇疾病も其の光明を蒙つて悉く衆患を除く。是を忍辱と曰ふ。其の光曜を演べて十方無量佛土を照し、皆衆人に荷ふ。是を精進と曰ふ。[七〇]維耶離城にあつて、城中の内外各各に八萬四千の諸佛の身形を變化す。是を一心と曰ふ。彼の時に因つて隨つて八部衆の爲に經道を頌宣して各解を得しむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか難得自歸度無極に六事ありと謂ふや？ 威儀・禮節安然として庠序あり、功德甚だ廣くして、能く空を攝受す。是を布施と曰ふ。以て能く諸佛世尊の至德、玄遠として當るべからざるを曉了す。是を持戒と曰ふ。所行は堅强にして、方便して時に隨つて其の節を失はず。志願違ふなく、應病與藥して之を開化して、[七一]衆業を護らんとす。能く[七二]毒蚖を化して捉へて手中にあり、至誠を以ての故に永く畏るゝ所なし。神足の呪を以ての故に、以て難しとなさず。是を忍辱と曰ふ。[七三]目犍連が疾く魔を解化するが如く、佛、其と倶に彼の士を度す。衆は自ら覺らず、過つて[七四]祇樹にあり、鉢中の水を棄てて、且く佛地を汙す。是を精進と曰ふ。佛弟子舍利弗の言ふが如く、一時須臾に[七五]四十九心起るあつて、生死の業をなす。佛は計る可らずと曰ふ。是を一心と曰ふ。佛の言の如し。曰く、[七六]時に一城あり、其の中の衆人、重罪あつて道法を計らず、高德を誹謗す。如來の至眞、一夜半に於て爲に經典を說けば、其の重罪を棄て、精進暢達して六神通を得。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

十八不共品第十七[七七]

【六六】 蓋は煩惱の異名、但し、煩惱を五百數へず。
【六七】 梵志聚。梵志の村落をいふ。頭那(Droṇa?)。
【六八】 箜篌は、一種の絃器、くだらごと。二十三絃にて體曲りて長し。懷中に抱き、兩手にて齊しく奏するもの。
【六九】 瘖。病によりて言語を發する能はぬこと。瘂、跛、ちんば。蹇、偏足の不具なること。偏足の不具なる者。あしなへ、ちんば。
【七〇】 維耶離城(Vaiśāli)。離車(Licchavi)族の都城、詳しくは前出。
【七一】 又は衆生を將護す。
【七二】 毒蚖。蚖はゐもりの一種。
【七三】 目犍連(Maudgalyāyana)。前出。
【七四】 祇樹(Jetavana)。祇樹給孤獨園のことをいふか？
【七五】 四十九心。心の何々の分類なるや不明。
【七六】 出典不明。
【七七】 佛に限る十八種の功德法である。佛に限つて、他の二乘に共同しないので、不共法といふ。

是を持戒と曰ふ。既に所獲ありて其の心を建立し、道義に存す。是を忍辱と曰ふ。所致堅强にして建立普遍に、十方を觀じて悉く亦了了たり。是を精進と曰ふ。其の覩る所は猶ほ眞諦の如く、審かにして虚妄ならず。是を一心と曰ふ。志、悅豫を懷くも亦所生なり。罪患に墮せずして道意窮りなし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[六二]法眼清淨度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く諸佛の法十八不共を逮得する、是を布施と曰ふ。斯の佛の十八法を致して往いて[六三]惡趣の十八苦毒を濟ふ。是を持戒と曰ふ。因緣の品第高下・深淺・微細を覩る所、是を忍辱と曰ふ。以て一切三界の所有の本悉自然なるを觀ず。是を精進と曰ふ。本末を憶識し、應病與藥して以て[六四]三病を治する。是を一心と曰ふ。所見虛しからずして愚觀をなさず。亘然として一切衆人を開化す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[六五]佛眼清淨度無極に六事ありと謂ふや？　佛眼を以て見るに罣礙する所なく、不覺者を覺す。是を布施と曰ふ。所察して一切衆生三苦の惱を愍傷す。是を持戒と曰ふ。衆生を度脫して諸難に遭はず、永く久安を得る。是を忍辱と曰ふ。所視無量にして、玄遠にして底なく、喩を爲すべからず。是を精進と曰ふ。其の根本を觀て、若し枝葉果熟するを以て落ちんと欲して、就いて之を挽く。是を一心と曰ふ。本末然も緣に從つて起るを見て、以て本無を了すれば則ち所生なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか自在度無極に六事ありと謂ふや？　若し由已を得、究竟を作すを得て、中止せず。是を布施と曰ふ。所行到る處、輒ち所願を得て、要誓に違はず。是を持戒と曰ふ。自在に立行して無想を逮得し、諸の著する所を放つ。是を忍辱と曰ふ。仁和柔順にして分別するを以て、一切慧を解す。是を精進と曰ふ。一切皆盡くるも慧は盡すべからず。是を一心と曰ふ。一切法を解して明慧誓要にして諸の不逮を化す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【六二】　法眼(Dharmacakṣuḥ)。菩薩衆生を度する爲に、一切の法門を照見する智慧を言ふ。

【六三】　惡趣の十八苦。普通、苦を十八に分けず。十八地獄を言ふか。(十八地獄、前出)。

【六四】　三病。一、貪病、不淨觀を修して、治すべきもの。二、瞋病、慈悲觀を修して治すべきもの。三、癡病、因緣觀を修して治すべきもの。

【六五】　佛眼(Buddhacakṣuḥ)。佛陀の身中前の四眼を具備するもの。

何を以て大哀度無極に六事ありと謂ふや？　大悲を懐いて一切衆生の類を愍傷して、心に恨あらず。是を布施と曰ふ。其の心平等にして衆生の生老病死を度せんと欲して、未だ曾て偏黨せず。是を持戒と曰ふ、若し衆生に於て常に行じて法を守り、仁を以て之に報ひ、可悦して安きを得る、是を忍辱と曰ふ。往來周旋して每に衆生勤苦の患を濟ふ。是を精進と曰ふ。其の所好の上中下の行に隨つて之を開化す。是を一心と曰ふ。三界に遊んで終始無量に、生死の厄を度す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか眼清淨度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く清澄なる[五五]地種と[五六]水種とあり、心は地種の如くにして動かすべからず。心垢を洗除すること猶ほ水の如くす。是を布施と曰ふ。其の能く[五七]火種と[五八]風種とを建立して衆惡を燒盡する、是を持戒と曰ふ。設ひ生死を燒いて所餘なからしめ、瑕穢悉く消して瞋恨を抱かず。是を忍辱と曰ふ。目の覩る所、見ざる所なく、光明遠く照す。是を精進と曰ふ。所行慇懃にして一切の無心念の是非を見る。是を一心と曰ふ。觀ずる所の十方、亘然無邊にして、濟ふ所厭ふなし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[五九]天眼清淨度無極に六事ありと謂ふや？　其の天眼を以て諸の色身を見て、端正・好醜・長短・廣狹・白黑・肥瘦にして、往いて之を化す。是を布施と曰ふ。其の心行・名字・心性・身所生の土・見身往來周旋の所を知る。是を持戒と曰ふ。其の身行を覩て、是非合散成敗を分別す。是を忍辱と曰ふ。[六〇]天地壞れて、復た還り合成して天人物を生ずるを察す。是を精進と曰ふ。若し報應罪福善惡道俗明冥を見る。是を一心と曰ふ。諸の次第・遠近・深淺・空無相願度三脫門を見る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[六一]慧眼度無極に六事ありと謂ふや？　慧眼を成ずるを以て、普く一切の其の諸の衆生の根本始原の從生する所を見る。是を布施と曰ふ。以て能く解脫を成就し逮得して衆結あるなし。

【五五】　地種。四大種の一、地の大種である。事物の上の堅性を地と言ひ、此の堅性一切の物質に周遍して能道の因となるので、大種といふ。

【五六】　水種。四大種の一、水の大種である。事物の上の濕性を水といふ。

【五七】　火種。四大種の一、火の大種である。事物の上の溫熱性を地と言ふ。

【五八】　風種。四大種の一、風の大種である、事物の上の動性を風といふ。

【五九】　以下の度無極に五眼を擧ぐ。然し、人眼を缺く。天眼(Divyacakṣuḥ)、色界の天人所有の眼である。人中禪定を修して之を得る。遠近內外晝夜を問はず、能く見ることを得る。

【六〇】　劫滅のことをいふ。この世界は終りに劫火出で、壞れ滅し、又因和合して成立し、生物生長し、諸世界を形成す。(印度世界觀)。

【六一】　慧眼。二乘の人が眞空無相の理を照見する智慧を言ふ。

一切智の爲に三界諸天人民及び三惡路を暢化す。是を一心と曰ふ。[五〇]八部衆に遊んで道化を宣布し、各所を得しめて所畏なし。諸願以て成ず。是を智慧と曰ふ。是を六の第一無畏となす。

何を以てか[五一]平等了諸漏盡度無極に六事ありと謂ふや？　佛とは漏無く諸漏已に盡きて、一切無難なり。是を布施と曰ふ。處所有るなく、止處已に斷じて欲界・色界・無色界あるなし。是を持戒と曰ふ。所生無生、倶に所起なし。是を忍辱と曰ふ。所徑の名稱玄虛無際にして、元を得べからず。是を精進と曰ふ。志、誓願を懷いて、以て度世諸有の[五二]八法を越ゆ。是を一心と曰ふ。解脱に存して輒ち獲て失ふなく、無上眞に逮ぶ。是を智慧と曰ふ。是を六の第二無畏となす。

何を以てか[五三]佛所說法眞要無比威受奉行第三無畏度無極に六事ありと謂ふや？　遵修すべき所、一切空を了り、起れば則ち滅し、合會すれば別散するを知る。是を布施と曰ふ。以て三毒諸行の放逸を盡して、馳騁せず、是を持戒と曰ふ。云ふ所の滅とは所生處を盡して、永く所生なきなり。是を忍辱と曰ふ。以て衆失を消すを以て、眼耳鼻舌口身心に犯す所なく、能く便を得るなし。是を精進と曰ふ。以て道を建立して、衆生を度せんと欲し、衆の俗業無益の元を除く。是を一心と曰ふ。若し脫門に至つて生死已に盡きて、慧は盡すべからず。是を智慧と曰ふ。是を六の第三無畏となす。

何を以てか[五四]內應等法無能廢意第四無畏度無極に六事ありと謂ふや？　其の內の正法は三昧定を得て能く心を起すなく、不安の者をして自然に垢を盡させしむ。是を布施と曰ふ。其の無所生も亦能く盡すなく、智慧の法を持す。是を持戒と曰ふ。無常を消して、一切法空解道を常となす。是を忍辱と曰ふ。所謂內事は能く蔽ふ者なく、以て有罪の元を盡す。是を精進と曰ふ。能く罣礙するなく、不成就を盡して皆成辦せしむ。是を一心と曰ふ。聖明なる所以に一切自然にして能く蔽礙するなく、佛道深きに至つて、能く一切、軟劣中容を決し、決了して衆生の根元に明達す。是を智慧と曰ふ。是を六の第四無畏となす。

【五〇】八部衆。前出。

【五一】平等了諸漏盡。漏盡無所畏、世尊が大衆の中に於て我れ一切の煩惱を斷じ盡せりと師子吼して些の怖心のないのをいふ。

【五二】八法。八法とは地水火風を名けて四大となし、その四種、處として有らざることなきを以ての故なり。色香味觸を名けて四微となす。その四種體性微細なるを以ての故である。人の身は四大の假合に因つて有り。この四大亦、四微の所成に由るが故に總稱して八法となす。

【五三】佛所說法眞要無比威受奉行第三無畏。說障道無畏に當る。世尊、大衆の中に於て佛道を障害する法を師子吼して些の怖心なきを言ふ。

【五四】內應等法無能廢意第四無畏。說盡苦道無所畏、世尊、大衆の中に於て盡苦の道を師子吼して些の怖心なきを言ふ。

て人を誨ゆ。是を布施と曰ふ。天上人間地獄餓鬼畜生の五趣所歴にあるを知る。是を持戒と曰ふ。罪福善惡の所趣を分別して悉く其の心を伏す。是を忍辱と曰ふ。塵勞を曉了し、愛欲衆穢に所著なし。是を精進と曰ふ。其の心一切皆な空寂として想あるなきを體解す。是を一心と曰ふ。一切諸所有の業を消滅し、一切衆生の根原を覩見す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[44]天眼度無極に六事ありと謂ふや？　天眼は禍福善惡の所趣を覩見する所、是を布施と曰ふ。所應奉行して[45]殃釁を犯さず、常に道行に志す。是を持戒と曰ふ。覩る所廣遠にして邊際あることなく、衆生の根を見る。是を忍辱と曰ふ。若し一切を見るに惡を以て厭はず、盲冥を開化す。是を精進と曰ふ。衆の闇蔽有路無路是非の所趣を察す。是を一心と曰ふ。光曜を顯示して自歸を得しめ、是を緣として度を得る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[46]諸漏盡度無極に六事ありと謂ふや？　諸の穿漏瑕疵の無益を覩て、之を棄て道を習ふ。是を布施と曰ふ。諸漏・婬怒癡の念を樂しまず、志は道法に存す。是を持戒と曰ふ。諸垢を習はず、常に清淨を修す。是を忍辱と曰ふ。衆心を開化して諸想陰蓋[47]諸入を曉了し、放逸をなさず、是を精進と曰ふ。諸漏を體解して道教に習從し、通達する所多し。是を一心と曰ふ。生死に入つて勸めて諸漏にあり、衆生を開化して道意を發さしむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。』

[48]四無所畏品第十六

佛、喜王菩薩に告げたまはく、『何を以てか[49]以成正覺解了斯法第一無畏度無極に六事ありと謂ふや？　佛道を逮得して清淨に患たる生老病死を盡す。是を布施と曰ふ。心、無爲に存して、弘誓の願無上正眞を志す。是を持戒と曰ふ。眞諦を以て一切皆空を觀じ、邪見あるなし。是を忍辱と曰ふ。一切は悉く三界の所生にして悉く以て無根なることを解し、通達せざるなし。是を精進と曰ふ。

【四四】天眼。十力中智天眼無碍智力、天眼を以て衆生の生死、及び善惡の業緣を見るに、障碍なき智力である。

【四五】殃釁。釁、ひま。

【四六】諸漏盡。十力中の知永斷習氣智力に當るか？然らば、一切の妄惑の餘氣を永く斷じて生じしめざるに於て能く如實に知る智力である。

【四七】諸入。十二入、六根六境をいふ、前出。

【四八】以下の諸度無極に四無畏を擧ぐ。無畏は化他の心怯れざるをいふ。

【四九】一切智無所畏。世尊が大衆の中にて我は一切正智の人なりと師子吼して些の怖心なきをいふ。

人の根、諸殊異念なり。一切衆生の此の根を解了す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか [三八] 解世好不好若干行度無極に六事ありと謂ふや？ 好喜する所に隨つて、尋ねて開化をなし、病に應じて藥を與ふ。是を布施と曰ふ。所集勸誨して一切に慈心にし、傷害する所なし。是を持戒と曰ふ。其の所樂に從つて時に隨つて一切衆罪の犯す所の諸惡を消除す。是を忍辱と曰ふ。其の疑網を決して衆の懈廢を盡す。是を精進と曰ふ。諸の所生及び無所生を消して都て永く盡さしむ。是を一心と曰ふ。其の所好に順つて寂然ならしめ、權方便を以て之を消化す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか [三九] 智普入諸行欲縛解縛衆欲方便度無極に六事ありと謂ふや？ 若し能く衆苦の根原を解了して之を燒き盡し、道教を熾然たらしむ。是を布施と曰ふ。諸の惱原を知つて速かに衆患婬怒癡の垢を棄つ。是を持戒と曰ふ。道宜を體解して、施すに安隱を以て衆患を消除す。是を忍辱と曰ふ。[四〇] 孚疾暢達して無上道に至り、永く法樂を樂しむ。是を精進と曰ふ。諸行の罪福の所歸五趣の本末を分別す。是を一心と曰ふ。以て行趣有無の處生死 [四一] 泥洹を知る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか [四二] 根力覺意一切脫門定意正受度無極に六事ありと謂ふや？ 若し此の法を以て斯の安隱を惠み、衆惡を造らず、恩を以て人に加ふ。是を布施と曰ふ。若し平等に施して、貪と貴と二なく、而も偏黨するなし。是を持戒と曰ふ。他人を愍傷して法を以て勸助し、道宜に入る。是を忍辱と曰ふ。自ら愍傷して、己が神を其の中に寄すも、本我が身に非ず、有身を計さず。是を精進と曰ふ。一切空を解して名稱を消除し、愛、自大ならず。是を一心と曰ふ。以て無上苦空非身を解するを以て吾、我人なし。此を以て衆を化す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか [四三] 識念過世度無極に六事ありと謂ふや？ 若し往古宿世所更の無數劫の事を識り、以

【三七】五根。普通、信根・精進根・念根・定根・慧根をいふ。

【三八】解世好不好若干行。知種種界智力、世間の衆生の種々の境界同じからざるに於て如實によく知る智力である。

【三九】智普入諸行欲縛解縛衆欲方便。智一切至所道智力に當るか。然らば、五戒十善の行は人間天上に至り、八正道の無漏法は涅槃に至る等の如く各其の行因の至る所を知るのである。

【四〇】孚疾。孚、かへる、かへす、やしなふ。

【四一】泥洹(Nirvāṇa)。涅槃のこと。

【四二】根力覺意一切脫門定意正受。十力中智諸禪解脫三昧智力か。諸の禪定及び八解脫三昧を知る智力である。

【四三】識念過世。十力中知宿命無漏智力、衆生の宿命を知り、又無漏の涅槃を知る智力である。

を得る。是を忍辱と曰ふ。其の弘誓、至德の業を行じて強くして勢あり。是を精進と曰ふ。衆穢を毀壞して十二緣起異るあるなからしむ。是を一心と曰ふ。遵奉すべき所、以て時を知つて聖教を失はず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか知去來今度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く所作の衆業・眼耳鼻口身心の犯所を除盡す。是を布施と曰ふ。若し能く諸緣の報應生死禍福を消滅す。是を持戒と曰ふ。斷じて所因五陰六衰因緣の對を棄て、事業あるなし。是を忍辱と曰ふ。若し罪福を離れて自然三界の生死を消除す。是を精進と曰ふ。憺怕[三二]燿然として、[三三]色痛想行識を斷じて無所有を了す。是を一心と曰ふ。所遵奉行して無所生ならしめ、其の志坦然として道を以て元となす。是を智慧と曰ふ。是を六なす。

何を以てか[三四]知世若干種類度無極に六事ありと謂ふや？　假使衆生若干種衆雜の行を斷じて、以て恣意せず。是を布施と曰ふ。若干種の陰蓋諸入を斷じて六度無極を奉行し遵修す。是を持戒と曰ふ。諸の種ありと雖も、有人を計せず、諸の虛無を了す。是を忍辱と曰ふ。諸品に遊在して病に應じて藥を與へ、三界の衆生をして三毒を消除せしむ。是を精進と曰ふ。[三五]四大に處して貪を除いて計さず、衆迷を導御して諸の所有を消す。是を一心と曰ふ。諸種の思惟識念にあつて、一切空を解く。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[三六]知世諸根增減言各不同度無極に六事ありと謂ふや？　四大の合成と散壞を解知して自ら身を計らず。是を布施と曰ふ。其の眼耳鼻口身心の所行を覺空して、犯す所なし。是を持戒と曰ふ。心に自然に一切本無を解し、通ぜざる所なし。是を忍辱と曰ふ。若し能く男女壽命苦樂善惡を解了して、此の六根を觀じて本あるなきを了す。是を精進と曰ふ。其の能く[三七]信戒定慧此の五根なる者を分別して道の元を習ふ。是を一心と曰ふ。若し能く通暢するは分別する所にあり。是れ他

【三二】燿然、光り輝く貌。

【三三】色痛想行識。五蘊(陰)を言ふ。五蘊の說明前出。一、色蘊は五根五境等の有形の物質を總該する。二、受蘊、境に對して事物を受け込む心の作用。三、想蘊、境に對して事物を想像する心の作用。四、行蘊、其他境に對して瞋り貪る等の善惡に關する一切の心の作用。五、識蘊、境に對して事物を了別識知する心の本體。

【三四】智世若干種類。十力中智三世業報智力をいふか。一切衆生の三世の因果業報を知る智力である。

【三五】四大(Dhātu)。地水火風の四である。倶舍論によれば假實の二種あり。實の四を四界又は四大界と稱し、假の四を單に四大といふ。一、地大、堅を性とし、物を支持す。二、水大、濕を性とし、物を收攝す。三、火大、煖を性とし、物を調熟す。四、風大、動を性とし、物を生長す。この四以て一切の色法を造作すれば、能造の四大といふ。假の四大とは世間でいふ地水火風である。

【三六】知世諸根增減言各不同。知種種解智力に當るか。然らば、一切衆生の種々の知解を知る智力である。

て一切生死の衆厄を濟ふて道意を存せしむ。是を一心と曰ふ。其の心靜然として憺怕に入り、心に所生なく、其の自然を了かにす。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか解他度無極に六事ありと謂ふや？ 〔二七〕昔賈客あり、彼の利を離れ、身の所食を割いて、心清らかに行淨く、佛に上つて供養す、是を布施と曰ふ。〔二八〕文鄰龍王出現して身を遶り、心に所犯なくして、住立して侍す。是を持戒と曰ふ。〔二九〕釋梵來下して佛の寂然として道法を演ぜざるを見、説法を勸助す。是を忍辱と曰ふ。時に佛眼を以て普く十方を觀じ、進退、時に隨つて、羣黎を導利す。是を精進と曰ふ。一心をもつて七日に樹を觀じ、樹を思ひて一切をして反復の心あらしめんと欲す。是を一心と曰ふ。以て勸助を見て、便ち法輪を轉じ、八音暢達して十方に周遍す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか勸用意禪度無極に六事ありと謂ふや？ 佛の得道を曉見し、勤勞の者を念ふ。是を布施と曰ふ。往き到つて教化して五人を度し、變化を覩現して其の所說を聞いて、尋で輒ち啓受す。是を持戒と曰ふ。自大を棄離し、法律に順從して、以て不逮を化す。是を忍辱と曰ふ。而も甘露不死の藥を以て之を開化す。是を精進と曰ふ。十五人、時に應じて異想の念を除く。是を一心と曰ふ。道の甘露を以て貧道に灌飲せしめ、婬怒癡を消して五億の天人を度す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。』

〔三〇〕十種力品第十五

佛、喜王菩薩に告げたまはく、『何を以てか 〔三一〕有處無處深淺遠近度無極に六事ありと謂ふや？ 其の處所に從つて審諦を逮得して其の本末を了す。是を布施と曰ふ。識知すべき所、三界空を解して等して異あるなし。是を持戒と曰ふ。諸の曉了する所は悉く以て分別し、而も普く仁和の地に入る

【二七】跋利迦(Bhallika)等の二商をいふか。佛成道後、神の勸めに從つて、通りすがつた二商は佛に初飯を供養した。

【二八】文鄰龍王(Mucilinda)。佛が初轉法輪をなすため、迦尸に立つた途中、雨に降られ、腹痛を病んだ時、この龍王は身を以て雨を防ぎ、又ハリタキー(Haritaki)樹果を奉つて腹痛を醫した。

【二九】佛成道後、その法の解し難きを思つて説法を躊躇した折、梵天(Brahma)又は帝釋天(Sakra Devānām Indra)が來つて、佛の出世は稀れに、衆生は法を求めて迷つてゐるので、説法すべきをすゝめ、佛に轉法輪を決心せしめた。之をいふ。

【三〇】以下の度無極に佛の十力を擧ぐ。

【三一】有處無處深淺遠近。十力中の知覺處非處智力をいふか。處とは道理の義。物の道理非道理を知る智力である。

施と曰ふ。其の意曠然として猶虚空の如く限量すべからず、是を持戒と曰ふ。以て能く不退轉地を獲致して[二六]佛決を受くるを得て、十方佛を見る、是を忍辱と曰ふ。夙夜勤修して懈廢せず、力勢日に進む。是を精進と曰ふ。其の心常に專らにして定意亂れず、正一にして忘れず。是を一心と曰ふ。堅固にして難なく、一切の所作永く衆患なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無想度無極に六事ありと謂ふや？　若し常に時を以て危厄の諸窮乏者を救濟して、一切想なし。是を布施と曰ふ。諸行を謹愼して身口意の三を護り、犯す所なし。是を持戒と曰ふ。常に謙恪を修して輕慢を懷かず。是を忍辱と曰ふ。所作の功德、以て懈廢せず、用ひて諸の不逮なる者を勸助す。是を精進と曰ふ。出家して法に志し、諸學追慕し、道意日に進んで未だ曾て斷絶す。是を一心と曰ふ。已に三毒なく、復た他人婬怒癡の垢を斷じて三尊に歸命せしむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無願度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く疾かに無所願の本に逮び、惟だ三界の患を愍念するを垂る。是を布施と曰ふ。其の觀を離れて輕慢する所なく、無所得を得て、乃ち道に應じて化す。是を持戒と曰ふ。三界にありて所著なく、衆生の生老病死を誘化す。是を忍辱と曰ふ。其の內に行ありて常に身口心を護りて、犯負する所なく、違失する所なし。是を精進と曰ふ。所修方便して衆の瑕穢無益の行を去つて解脫に至る。是を一心と曰ふ。若し德の鎧を被て、志す所弘廣にして一切周旋の難を濟ふ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか行別異度無極に六事ありと謂ふや？　佛の道場に坐して日日常に一府一米を服し、窮乏を尋求し、以て惠濟を欲して以て勞となさず。是を布施と曰ふ。若し其の身にあつて精進靜定して放逸をなさず。是を持戒と曰ふ。逮得して佛を見、以て諸法を學んで衆行備悉す。是を忍辱と曰ふ。懷來すべき所、諸法一切本無を暢達し、解して分別なし。是を精進と曰ふ。解脫と倶に幷せ

【二六】受佛決。佛の記莂(Vyākaraṇa)をいふ。佛のある者に對する、その者が未來佛たるべしとの豫言である。

布施と曰ふ。其の奉禁する所の果、生天を致す。常に法行を思つて天安を慕はず。是を持戒と曰ふ。其の忍辱の果章句を恐れ無し。斯くれば則ち共れ誼なり。常に專精に思つて一切を度せんと欲す。是を精進と曰ふ。禪思すべき所、所生を勸助す。斯くれば則ち共れ誼なり。是を一心と曰ふ。若し智を合集して智慧を增益し、常に損耗せず。斯くれば則ち共れ誼なり。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか邦畔解度無極に六事ありと謂ふや？　所行精進して其の身を壞たず。是を布施と曰ふ。以て衆想希望の業を斷じ、解脫して喜ぶ。是を持戒と曰ふ。法忍を逮得して廢失するなし。是を忍辱と曰ふ。所行の吉祥は一切普く備はる。是を精進と曰ふ。禪思すべき所、滅度の果を致す。是を一心と曰ふ。所修の聖明勤めて諸受を得、金剛三昧を逮得す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか樂勸助度無極に六事ありと謂ふや？　假使布施するも睡眠に志さず、我想を起さず、大名稱の如く、九十六諸大叢林あり、一切諸大藏處にあり、王以て惠み與へて衆人を開化し、分衞の福を受く。猶ほ〔二三〕無罪國王の子の如し。所居を離れて終に妄語せず、身の本時の如く衆の危厄を救ふて惡罪をなさず。是を布施と曰ふ。以て父母師友を供養し、其の身を尊敬して究竟して懈らず。及び其の經典及び至佛を知つて諸の疑網なし。是を持戒と曰ふ。若し柔和を以て他人を護り、自ら身を棄つるが如く、血脈を利せず龍王の護る所、猶ほ曾て法師精進し、殷懃なること三萬二千歲、所作行を習ふて以て愁感せず。初めて未だ懈厭せず、以て一切を化するが如し。是を精進と曰ふ。禪思する所以は衆生を愍傷し、衆惡を棄捐し、閻浮利天下にあつて、衆生人民の〔二四〕五細滑を受くるを哀念し、慈念可愍する故に古喩を引いて、以て之を明解す。是を一心と曰ふ。其の至聖明は〔二五〕大六通の如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか空度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く空行三昧を逮得するも想願を起さず。是を布

【二三】無罪國王。事蹟出典不明。
【二四】五細滑？
【二五】大六通。大なる六神通の意か？六通は前出。

て親近し之を念つて已むなし。即ち二萬八千里を越えて往いて其の所に詣で、醫藥を致して其の病を療治するが如し。菩薩の一切を療治すること是の如し。是を精進と曰ふ。若し禪思を以て他人を愍れむこと、猶ほ[二〇]加賓黃色仙人の如く城郭を興立す。衆生を哀しむが故に。是を一心と曰ふ。若し智慧を以て普く天下を安んじ、諸[二一]念典を使はして、壽、天上にあり。若し十方にあつて其の天身を受くれば、怨賊を消し、河に隨つて流れ逝けば、乃ち龍所に至る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか愍已度無極に六事ありと謂ふや？ 己の所興有益の業をなし、幷びに衆人を安んじて能く成辦せしむ。是を布施と曰ふ。身自ら應に隨つて衆の德本を積み、禍害をなさず。是を持戒と曰ふ。其の體嚴莊にして上妙華の若く、其の色猶ほ然り。是を忍辱と曰ふ。其の已身の爲に夙に興きて夜に寐ねるを爲し、以て懈廢せず、衆の危厄を救ふ。是を精進と曰ふ。身常に精進し、已を念ふが故に、願はくは天上十方の佛前に生れんと、是を一心と曰ふ。七反劫燒け成じ已り、復た敗れ終つて復始むるも、此の世を往反して迷惑せざること[二二]加賓王の如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか法度無極に六事ありと謂ふや？ 若干色を以て瓔珞を莊嚴し、本施の致す所、是の功德の報を得。是を布施と曰ふ。法は顚倒に住せず、倚著する所なし。唯經典に志す。是を持戒と曰ふ。設へば能く婬怒癡垢衆生の想を消除す。是を忍辱と曰ふ。佛の經道を以て度無極を行じ、二行あるなし。其の方便に因る。是を精進と曰ふ。平等心を得て、永く所著を除き、心に所求なし。是を一心と曰ふ。光耀振明に十方一切諸法を照し、爲に暢べて上中下の法を分別して眞に二あらず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか宜度無極に六事ありと謂ふや？ 所施の報果、大富を致し、因つて經道を興す。是を

【二〇】加賓黃色仙人(Kapila)。迦毘羅仙をいふ。數論(Sāṃkhya)の傳說的始祖と稱せらる。Kapila には黃褐色の意あり。故に黃色仙といふ。迦毘羅城(Kapila-vastu)は迦毘羅の住所なる故に因んで名付けたといふも、事實は然らず、その地方が赤土なる故にかく名付けたといふ。(高楠博士說)。

【二一】念典は、Smṛti をいふか。然らば、奧義書以後の外道書をいふ。

【二二】加賓王。Kapila(vastu)王か？ 考ふ可し。

數の衆を及び其の言辭す所を同學に宣示す。是を忍辱と曰ふ。設使無限の慧を識念するも、人の爲に解說す。是を精進と曰ふ。其の鹹酢、舌の所習五味の所利を滅す。是を一心と曰ふ。舌、所說あり、常に道教を傳へ、廣く所曜あり。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか〔一三〕身報度無極に六事ありと謂ふや？　身に所豐の財業・經典あり、以て世間に惠む。是を布施と曰ふ。無數の衆人咸之を瞻仰し、以て言を奉受す。是を持戒と曰ふ。其の身、人と作つて尊貴される所以は佛に供順するを用つて、威德あり。是を忍辱と曰ふ。體强くして勢あつて、之に依らざるなく、一切衆生悉く共に荷を蒙る。是を精進と曰ふ。形柔輭にして好く、常に和悅を以て顏貌光澤あり、是を一心と曰ふ。淸白潔白にして堪任する所多く、衆生を開化す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか〔一四〕心報度無極に六事ありと謂ふや？　其の平等普順にして遍く一切衆生に入る。是を布施と曰ふ。若し意の所念悅豫する所多く、法として行ぜざるなし。是を持戒と曰ふ。度脫すべき所、現在の義を樂しんで非義をなさず。是を忍辱と曰ふ。其の意覺疾く、〔一五〕僉然通達して、心に所礙なし。是を精進と曰ふ。所遵奉行して常に道法に遊び、順從和雅なり、是を一心と曰ふ。其の稱ふる音響、遍く諸法に入り一切衆行して之の定法に校ぶ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか愍他人勸助度無極に六事ありと謂ふや？　他人を訓化して施與する所あり。猶ほ過去に人あり、其の人の名を〔一六〕是生子と號す。天下〔一七〕閻浮利地の一切衆生を救護して皆之を勸化し、佛の大道に入つて之を開導するが如し。是を布施と曰ふ。戒を以て勤修して咸他人を安んじ、斯の功勳を以て其の報應を致す。猶ほ〔一八〕飛鳥の衆輩集合して水を吐いて熾火を滅するが如し。是を持戒と曰ふ。人を和哀して以て生死を加へ、〔一九〕立つこと梵天の如く、黎庶を愍念して衆勞を忍ぶ。是を忍辱と曰ふ。精勤して人を教ふるに、若し病者兩命に遭値して其壽未だ盡きず、愍傷心を懷く。賢あつ

【一三】身根。身識を生ずるもの。

【一四】心根。心識を生づるもの。

【一五】僉然。みな。ことごとく。

【一六】是生子。事蹟出典不明。

【一七】閻浮利(Jambudvipa)？前出。

【一八】鳥が翼に水をつけて運び、火を消すこと、梵文學に屢〻出づ。平等譯「佛陀の生涯」第十章、甁沙王への太子告別の辭を見よ。

【一九】佛の立姿の形容に好んで用ひられるもの。隨相の一。

是を六となす。

何を以てか[九]眼報度無極に六事ありと謂ふや？　若し好眼を以て衆人を愛敬し、以て害を加へず。是を布施と曰ふ。若し其の眼を以て觀察する所あり、悉く無益を了し、唯法を恃むべし。是を持戒と曰ふ。見る所廣遠にして限量なく邊際を得ず、無盡すべからず。是を忍辱と曰ふ。其の眼寂靜にして所著なく、一切衆色は悉く空にして本無なり。是を精進と曰ふ。覩る所に悅豫して、見る者歡喜し、法を以て樂となす。是を一心と曰ふ。諸の來つて見る者、心身歸伏し、普く共に踊躍して能く究竟に至る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[一〇]耳報度無極に六事ありと謂ふや？　耳に所聽あつて違失する所なく、常に存して法にあつて俗想をなさず。是を布施と曰ふ。其の耳淸淨にして穢濁あることなく、一切音を解して本悉く寂然たり。是を持戒と曰ふ。若し所聽あり、其の音淸徹にして邪想なし。是を忍辱と曰ふ。耳、所存あり、其の微細を覩て、限量すべからず。是を精進と曰ふ。其の懸遠を察して耳悉く逮聞し、之を知るに皆空にして人を益するなし。是を一心と曰ふ。無所有を聞き、無堅固を聽き、猶ほ呼響の如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[一一]鼻報度無極に六事ありと謂ふや？　若し鼻淸徹にして一切空を了し、所齅あらず。是を布施と曰ふ。而して其の鼻根の息所念なく、惟だ道心に志して、損失する所なし。是を持戒と曰ふ。寂然惔怕にして止足を知る。是を忍辱と曰ふ。嗅ぐ所宜しきに順つて、犯負する所なく、情欲にあらず。是を精進と曰ふ。鼻所受なく、衆香を貪らず、放逸なし。是を一心と曰ふ。鼻、所嗅あり、其の瑕穢の一切を益するなく、學心を損耗するを知る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[一二]舌報度無極に六事ありと謂ふや？　舌に味を得ると雖も、貪樂を以てせず、喜悅を離れて戒義に甘んず。是を布施と曰ふ。語言は了了として唯法教を宣ぶ。是を持戒と曰ふ。若し無

【九】以下の度無極に六根を擧ぐ。眼根、眼識を生ずるもの。

【一〇】耳根。耳識を生ずるもの。

【一一】鼻根。鼻識を生ずるもの。

【一二】舌根。舌識を生ずるもの。

と曰ふ。生死長遠の難・本末の所在を求めて所奉を見ず。是を忍辱と曰ふ。常に和悦を抱いて方便を求め、以て懈廢せず。是を精進と曰ふ。衆生の諸の危厄者を愍傷して是を降伏す。是を一心と曰ふ。是の忍辱を以て常に仁和を行じ、心に害を懐かず、佛道を勸助す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか進度無極に六事ありと謂ふや？　俗を愍傷し、病に應じ藥を與へ、各〻所を得しむ。是を布施と曰ふ。志、方便にあつて加害する所なく、常に慈戒を行ず。是を持戒と曰ふ。諸の限礙を得て、而も解脱を致して惠施に應ず。是を忍辱と曰ふ。異處にあつて應節を失はず、一切、法の如くす。是を精進と曰ふ。若し勤修を以て晝夜に廢らず、毀損する所なし。是を一心と曰ふ。是の精進を以て佛の境界を勸め、道心を發さしめて正業を奉遵す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか寂度無極に六事ありと謂ふや？　若し慈心を以て諸人に向ひ衆生を愍傷す。是を布施と曰ふ。一切三界の衆生を憐念して之を降化して深法に入らしむ。是を持戒と曰ふ。世俗愚冥の衆を傷み、示すに道宜を以てし心に之を導御す。是を忍辱と曰ふ。若し出家して無上正眞を學び、志は寂然に存して放逸をなさず。是を精進と曰ふ。若し法施を諦思して、以て衆の諸の不達の者を開化し、法を頒宣す。是を一心と曰ふ。志性清淨にして垢濁なく、滅度に順從して中ごろ寂滅せず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか智慧度無極に六事ありと謂ふや？　若し經典を以て人に法施し、道心を發せしむ。是を布施と曰ふ。若し所說あれば、衣食を離れて利養を貪らず、是を持戒と曰ふ。若し法施を以てして、俗業に倚らず、懈倦を用ひず。是を忍辱と曰ふ。一切に入つて諸法を總持し、攝せざる所なく、各〻亙然たらしむ。是を精進と曰ふ。惟だ三世の大難を諦思するを以て、法施を敷演す。是を一心と曰ふ。若し本淨本無の義を以て道教を宣布し、導示する所あつて其の原を失はず。是を智慧と曰ふ。

衆を以てし、初めて亦厭かず。是を持戒と曰ふ。自ら精進を以て瞋恨を行はず。寧ろ身骨を破つて周遍し、普く平等の心を建立し、法を流布せしむ。是を忍辱と曰ふ。若し神足を以て飛行遍至し、用心慇懃にして、時に愚冥なるも諸の度すべき者を化す。是を精進と曰ふ。其の所欲に隨つて三昧正受して之を訓誨し、道行を存せしむ。是を一心と曰ふ。諸の聞かんと欲する經を其の人數に從ひ願樂する時、聽いて尋いて爲に說法す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか施度無極に六事ありと謂ふや？　若し法教あり、施與す可き所、以て用ひて勸助し、一切に普くして各ゝ所を得しむ。是を布施と曰ふ。施與すべき所、其の口身心、柔輭和悅にして法を以て人を化す。是を持戒と曰ふ。好樂惠與して求者に逆はず、和顏悅色なり、是を忍辱と曰ふ。所施調意して行方便を念じ、諸の不善を去つて功德を淨修す。是を精進と曰ふ。其の心清徹にして穢濁を懷かず、清志定意にして一切を愍む。是を一心と曰ふ。人に施すべき所、是の功德を以て佛道を勸助し、亦衆生を化して大意を發せしむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか戒度無極に六事ありと謂ふや？　奉ずる所の禁戒は慈心を以て本となし、常に無畏を以て一切に加ふ。是を布施と曰ふ。無畏にして瞋恨を懷かず、身口意の三事を護つて犯すをし。是を持戒と曰ふ。常に愍傷を抱いて一切を哀しみ、傷害の意なし。猶ほ慈母の其の赤子を育くむが如し。是を忍辱と曰ふ。以て方便を設けて禁戒を擁護し、慚恥無益の一切を寤因す。是を精進と曰ふ。慈を衆生に加へ、心に謹愼を學び、以て無となす。常に其の心志を専らにして放逸をなさず。是を一心と曰ふ。是の慈愍を以て、所奉禁戒して常に精進を行ひ、一切の諸の不達者を發起し、佛道を勸助す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか忍辱度無極に六事ありと謂ふや？　若し柔和を以て志は悅豫を存し、普く一切を安らかにす。是を布施と曰ふ。衆生の爲に諸の患難を忍び、無數劫中なるも以て勞となさず。是を持戒

【八】以下の度無極に、六度を擧ぐ。之に更に六事を配す。重復す。

何を以てか歸解法度無極に六事ありと謂ふや？　若し諸法に逮んで所失なく、道慧に順從して正法に達はず。是を布施と曰ふ。彼我の想を除いて有身を計さず、三界自然にして心に所著なし。是を持戒と曰ふ。言行相應して相違越せず、身口心の行、常に定つて相應す。是を忍辱と曰ふ。夙夜勤修して戒定智慧度知見法を斷絶せず。是を精進と曰ふ。常に道法に住して非義に順ぜず、化せるに四恩を以て衆生に加ふ。是を一心と曰ふ。常に至德を行じて等しく小節無益をなさず、一切、異念あるなし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか分別順理度無極に六事ありと謂ふや？　若し說を宣化して十二［六］隨順は惡の衆穢を壞つて［七］五濁を消す。是を布施と曰ふ。若し寂然を以て諸の迷惑を化し、滅度に至り、及び一切を度す。是を持戒と曰ふ。其の世俗の言談說事に隨つて因つて之を教へて、普く一切に至る。是を忍辱と曰ふ。若し能く婬怒癡の行を捨つるを以て、是の一切は衆想邪心にあらず。是を精進と曰ふ。靜思禪定三昧正受して衆念無益の思を發さず。是を一心と曰ふ。聖道の至慧を奉行する所以に、以て解脫に歸して無著無縛むり。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか辯才順理度無極に六事ありと曰ふや？　若し衆人の爲に若干品を宣ぶる辯才の慧あれば、是を布施と曰ふ。言辭至妙にして和柔潤澤、遠近之に歸せざるなし。是を持戒と曰ふ。能く一切の來聽者の意を可し、以て用ひて心に著す。是を忍辱と曰ふ。教言普遍にして邊際あるなく、十方に聞ゆ、是を精進と曰ふ。名德遠く著はれ、天上天下功德悉く足つて未だ曾て斷絶せず、是を一心と曰ふ。其の至法藏にして從生する所なく、三界に入り、乃ち滅度に達す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無厭度無極に六事ありと謂ふや？　諸の貪者の爲に經行道を說いて未だ曾て懈倦せず、一切の衆の貪嫉者を念度す。是を布施と曰ふ。衆生を愍傷して之を開導し、示すに三寶佛法聖

【六】隨順。他の教を信じ、他の意に從ふなり。

【七】五濁。住劫中の人壽二萬劫已向に於て渾濁不淨の法五種あり。一、劫濁、二万歲已後に至つて見等の四濁の起る時をいふ。二、見濁、身見邊見等の見惑である。三、煩惱濁、貪愼恚等の一切修惑の煩惱、四、衆生濁、煩惱濁の結果として人間の果報漸く衰へ、心鈍く體弱く、苦多く、福少きをいふ。五、命濁、前の二濁の結果として壽命漸く縮少し、乃至十歲に至る。

一切諸法[二]經典十二部藏を知る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか來解脫度無極に六事ありと謂ふや？　志解脫する所、柔輭安隱にして常に好んで衆生の苦患を救厄す。是を布施と曰ふ。一切所止の罣礙を除き、闇蔽なからしむ。是を持戒と曰ふ。若し所受あるも衆穢を棄捐して、常に梵行を修し、其の行業に因て恒に德を奉行す。是を忍辱と曰ふ。一切普く十方世界を愍み、歡悅澹怕にして心に所生なし。是を精進と曰ふ。常に能く時に隨つて忍辱を堪任し、一切の苦樂は以て增減せず。是を一心と曰ふ。常に法教を以て道法に違はず、所在に一切至眞にして虛しからず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか入比丘聖衆度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く一切諸願を化立して、志、道願に存す。是を布施と曰ふ。其の所樂に隨つて一切を建立し、之を化するに道を以てす。是を持戒と曰ふ。其の寂然を以て所願澹怕にして心[三]憒閙せず、之を化するに節限あり。是を忍辱と曰ふ。所行殊特にして衆と超異し、俗と同じからず。是を精進と曰ふ。心所受の法、常に眞正ならしめ、諸法を總持して放逸なし。是を一心と曰ふ。寂然として專ら行じて脫門に至り、空無想願は中ごろ證を取らず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。[四]八部の衆會あり、亦復是の如く等しくして異なるあることなし。

何を以てか八部義度無極に六事ありと謂ふや？　若し義を宣布して爲に非義を解し、心を用ゆべからずして正眞義を了す。是を布施と曰ふ。一切衆三界天人心の所好を可し、法を誨へて宣布す。是を持戒と曰ふ。若し義を敷演して瑕穢あるなく、常に清淨を修して慈心仁和なり。是を忍辱と曰ふ。所講至誠にして具足し廣布す。他人の爲に道教を頒宣して、[五]阿迦膩吒天宮に至り、悉く道宜を荷ふ。是を精進と曰ふ。義等しき意を以て一切を可悅す。是を一心と曰ふ。所住立の處、瞋恚の法なく、法を以て勸化す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【二】經典十二部藏。前出。

【三】憒閙。閙は鬧に同じ。さわがし、みだる。

【四】八部衆。一、天衆(Deva)、二、龍衆(Nāga)、三、夜叉(Yakṣa)、四、乾闥達(Gandharva)、五、阿修羅(Asura)、六、迦樓羅(Garuḍa)、七、緊那羅(Kinnara)、八、摩睺羅迦(Mahoraga)、各衆の說明は第一卷初に出す。

【五】阿迦膩吒天(Akaniṣṭha)。前出。

卷の第五

寂然度無極品第十四

何を以てか寂然度無極に六事ありと謂ふや？　假使能く諍訟の法を斷ずるも、性常に和調なり。是を布施と曰ふ。若し身口心に篤く信じ、悅豫して諸法を犯さず、道と合同す。是を持戒と曰ふ。陰蓋五陰六衰なきを以て受正無礙なり。是を忍辱と曰ふ。其の三昧定能く動異することなく、婬怒癡心も之を染むること能はず。是を精進と曰ふ。聖慧の所行、能く分別するなし。時に應じ、便に隨つて一切を度脫す。是を一心と曰ふ。所願普く至つて一切に周遍し、去來今の法三世礙なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか所觀度無極に六事ありと謂ふや？　未だ聞ざる所の法にして之を聞くを得。以て用ひて一切衆生を開化す。是を布施と曰ふ。諸見を得ず、本邪疑なし。以て一切瑕穢の衆罪を度す。是を持戒と曰ふ。能く無數の衆生を開化するを得て、道心を發さしめて危厄を愍念す。是を忍辱と曰ふ。口に宣布する所の佛の正眞行を常に成辦するを得、幷びに他人を化す。是を精進と曰ふ。若し能く次第に諸法【一】三十七品・十二緣起を暢達す。是を一心と曰ふ。其の智慧にあつて一切空不有想願を了し、無所有を解す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか樂明度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く時に應じて老病死衆患の難を離れ、道法無上の正眞を宣示す。是を布施と曰ふ。明を以て愛欲の惱みを消滅し、無上の大道は自然に伏をなす。是を持戒と曰ふ。聖慧の一切普く定まるを以て、等しく邪業なく、悉く菩薩を行ず。是を忍辱と曰ふ。一切普く安らかに晃昱なる明を以て、志、道地に存して周遍せざるなし。是を精進と曰ふ。若し明耀を以て普く一切諸法の根元を受け、無處所を了す。是を一心と曰ふ。其の聖慧を用ひて皆

【一】三十七品。詳しくは三十七道品、同分法、菩提分法。道は能通の意である。涅槃に到る道路の資糧三十七種あり。四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道である。

轉地に到る。是を忍辱と曰ふ。其の善快の報は限量すべからず。一切十方人民に念施す。是を精進と曰ふ。等しく一切諸法の根元を見るに、皆是の如く諦らかに本所有なし。是を一心と曰ふ。若し寂然を奉じて本末悉く空にして、忘失する所なく、能く侵す者なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか【六六】正受度無極に六事ありと謂ふや？ 若し正見を樂ふて邪疑に隨はず、斯の行の正見は邪業あるなし。是を布施と曰ふ。平等正眞の行を建立して菩薩の法を奉ず。是を持戒と曰ふ。若し正定を以て安隱脫を見て、邪業をなさず。是を忍辱と曰ふ。其の等寧を以て開士の本を奉じ、夙夜懈らずして受倚する所なし。是を精進と曰ふ。懷來安隱にして心の所願の如く、所作の善業諸受し、泰然たり。是を一心と曰ふ。三昧の行を以て伴黨を斷絕して是非の心なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【六六】 正受。八正道になし。

何を以てか[六二]正方便度無極に六事ありと謂ふや？　舌に惡言なく、善教を人に加へ、道法を開示して以て一切を救ふ。是を布施と曰ふ。所行清淨にして穢濁なく、菩薩法を宣ぶ。是を持戒と曰ふ。眞言を宣至して世俗無益の教を傳ふるなし。是を忍辱と曰ふ。世間に處在して常に語言を護り、俗談を樂まず。是を精進と曰ふ。常行專精にして、其の心に想なし。寂然惔怕にして其の行二なく、定意正受す。是を一心と曰ふ。所言至誠にして道を論じ、義を說いて、餘談を演べず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[六三]正業度無極に六事ありと謂ふや？　所修の正業に罪殃有るなく、德を以て自ら衞り、三寶に奉行す。是を布施と曰ふ。所願を逮得して衆德を具足し、非法無益の行なし。是を持戒と曰ふ。所應に隨順して顚倒あるなし。悉く無常苦空非身を解す。是を忍辱と曰ふ。一切の所趣に現在の不可の業を御せず。是を精進と曰ふ。十善六度を所受奉行して永く所著するなし。是を一心と曰ふ。所遵の正業は未だ曾て妄想せず、邪本を志さず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[六四]正命度無極に六事ありと謂ふや？　又時に隨つて宜しく方便して人を化す。時行可意を以て正命に立つ。是を布施と曰ふ。若し滅度の所習住命して其の身を貪らず。是を持戒と曰ふ。若し衆生の本、純淑無くして、愍哀を興して道に入らしめんと欲す。是を忍辱と曰ふ。若し諸法を以て之が歸盡を知らば、道、盡すべからず。是を精進と曰ふ。衆生にあつて所用の命なく、道を以て一切衆生を開化す。是を一心と曰ふ。衣食を以て自ら立命せず。唯道法を志す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[六五]正定度無極に六事ありと謂ふや？　意は普く有爲の事の本は悉く無爲なることを觀察して、無爲にありと雖も、而も證を取らず。是を布施と曰ふ。若し善惡を等して功勳・穢濁、二つあるなし。一切諸法も亦復た是の如し。是を持戒と曰ふ。德行は斷ぜずして日日に轉上して、不退

【六二】　正方便。八正道の中になし。

【六三】　正業(Samyakkarmanta)。眞智を以て身の一切の邪業を除き、清淨の身業に住するをいふ。無漏の戒を出て體とす。

【六四】　正命(Samyagājīva)。身口意の三業を清淨にして、正法に順ひて活命し、五種の邪活法を離れること。

【六五】　正定(Samyaksamādhi)。眞智を以て無漏清淨の禪定に入るをいふ。無漏の定を體とする。

何を以てか[五九]護覺意度無極に六事ありと謂ふや？　皆能く愛重すべき所を放捨して、貪惜する所なし。能く衆厄を救ふて道法を窮む。是を布施と曰ふ。身口心を護つて十事を犯さず、十徳を奉行す。是を持戒と曰ふ。衆生十二牽連を寂察す。無覺を用ゆるが故に。菩薩之を暢べて倚著する所なし。是を忍辱と曰ふ。諸の本末攀緣の稱說を遠ざけて所習なく、六度を習奉す。是を精進と曰ふ。心に衆生は穢行を犯すによつて、墮して惡趣にあるを思ひ、之が爲に愁悒愍傷して雨涙す。是を一心と曰ふ。諸の所生を斷つて無所生ならしめ、衆の患難を見て、一切諸法の本は所有なしとす。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[六〇]正見度無極に六事ありと謂ふや？　若し正見を解して衆の邪業は益なきの元と捨つ。是を布施と曰ふ。暢達し、以て至終に虛妄ならず、常に至信を行ず。是を持戒と曰ふ。行を體了し已り、清淨にして意を伏し、大道に歸して一切を度脫す。是を忍辱と曰ふ。以て能く自制して他人の一切三界の生死勤苦を愍念し、遵奉勤修す。是を精進と曰ふ。無上に志して三世を棄捨し、自大を離れて卑心に自ら伏す。是を一心と曰ふ。眞諦の報を得て、衆の邪見を捨て、開士の法を行じて通ぜざる所なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[六一]正念度無極に六事ありと謂ふや？　等思して一切の所作を斷除し、所作の功德善本なし。是を布施と曰ふ。正諦念を以て常に道法を思ひ、愛欲を捨てざること、猶ほ蓮華の如し。是を持戒と曰ふ。云ふ所の地とは謂く其の地主なり。其の因緣に從つて之に堪任し、佛法の教を受けて身空を分別す。是を忍辱と曰ふ。平等の念を以て衆相を棄捐し、一切諸所の合會にあつて、而も合會なく、功を積み德を累ぬ。是を精進と曰ふ。一切の諸善功德を勸助するに、悉く皆本と空にして分別すべからず。是を一心と曰ふ。所修正見して現世・後世・度世の法眞諦にして清淨なり。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【五九】　護覺意。七覺意になし。

【六〇】　以下の度無極に八正道をあぐ。八正道については前述。正見(Sŭmyagdṛṣṭi)。苦集滅道の理を見て分明であるのをいふ。無漏の慧を體とす。八正道の主體である。

【六一】　正念(Sŭmyaksmṛti)。眞智を以て正道を憶念し、邪念なきをいふ。

る所なきが如し。是を忍辱と曰ふ。自ら己心を調へて衆生を教化し、究暢せざるなく、各〻其の所を得。是を精進と曰ふ。所念禪思して諸の結著を斷じ、其の本末を求めて根原を見ず。是を一心と曰ふ。無所依を明かにして他受に從はず。一切諸術の音響を曉了して第七地に入る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[五四]喜覺意度無極に六事ありと謂ふや？　和顏悅色にして法を愛厭ふなし。是を布施と曰ふ。身の三事・口の四・意の三を護る。是を持戒と曰ふ。心柔輭にして好んで未だ曾て恚を起さず。是を忍辱と曰ふ。十方の佛を念じて邪想あるなし。是を精進と曰ふ。其の心寂安にして悉く生ずる所なし。是を一心と曰ふ。聖明了了として一切空を解す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[五五]信覺意度無極に六事ありと謂ふや？　身は篤信を行じて、表裏相應す。是を布施と曰ふ。心に篤信を懷いて、邪想あるなし。是を持戒と曰ふ。生死にあつて貪嫉を發さず。是を忍辱と曰ふ。所懷篤信にして未だ曾て斷絕せず、大理に通達して蔽礙する所なし。是を精進と曰ふ。諸信を合集して無上正眞を散ぜず、一切を度脫す。是を一心と曰ふ。諸盡を觀察して所滅なからしむ。正眞を好樂して三界を救濟する、是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[五六]定覺意度無極に六事ありと謂ふや？　所行精進して懈廢せず。若し定意を得て十方の佛を見る。是を布施と曰ふ。寂靜を逮得して衆の欲愛を離れ、榮好を貪らず、常に大道を志す。是を持戒と曰ふ。所止定意して諸の道品を受け、[五七]八正路菩薩の法を奉ずるも亦取る所なし。是を忍辱と曰ふ。其の意平等に一切空を了し、本來自然に破壞する所なし。是を精進と曰ふ。諸住見六十二事の羅網自ら纏ひ、[五八]陰衰蓋已り、以て本無を了せしめ、自然に銷盡す。是を一心と曰ふ。若し得て逮聞し、諸法は盡く本所生なきを以て、一切寂靜にして空無礙を解す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【五四】喜覺支。心に善法を得て、歡喜を生ずる。

【五五】信覺意。七覺意になし。

【五六】定覺意。心を一境に住して、散亂せしめぬこと。

【五七】八正路菩薩。不明。

【五八】陰衰蓋。陰は五陰即ち五蘊、衰は六衰即ち六塵（色聲香味觸）、蓋は煩惱皆解脫に障害となるもの。

是を持戒と曰ふ。昔は[五〇]菩薩、三たび反つて海に入り、諸難を脫せんと欲して、衆人をして安將して從つて家に歸らしむ。是を忍辱と曰ふ。所與を施與して其の處所を得、衆の河源を越へて、七度反つて海に入り、衆の財寶を致して以て貧匱を救ふ。是を精進と曰ふ。禪思度を以て其の心意を恣にし、何所か天上・人間・十方の佛前、生れんと欲す是を一心と曰ふ。聖明に遵ふ所、解いて野馬の如く、善く己を將護して、聖道に勸遵して道法を宣べしむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[五一]念覺度無極に六事ありと謂ふや？　不善の念を捨てて專精進念し、功德を思ふに因つて無上正眞を發す。是を布施と曰ふ。意の依りて念ずる所は法相を思惟し、自ら己を檢して馳騁せさらしむ。是を持戒と曰ふ。若し志惟だ念じて諸法を合集し、馳逸せしめず、柔輭和調なり。是を忍辱と曰ふ。志して勤修する所、望捨する所なし。道志を懷抱して、以て一切を愍み、一心定意す。是を精進と曰ふ。强くして勢あり、諸力を救攝して羸劣ならざらしむ。是を一心と曰ふ。已に意念を脫して義力に順從し、高德の義、聖明及び難し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[五二]法覺意度無極に六事ありと謂ふや？　諸法を選擇して淸淨の行を奉じ、衆の瑕穢を棄つ。是を布施と曰ふ。解脫を順求し、諸法を宣傳して、以て一切三界の患を化す。是を持戒と曰ふ。吾我を棄捐して戀慕する所なし。唯道法無上正眞を念ず。是を忍辱と曰ふ。所行の正義は經典六度無極・三乘の藏を選求す。是を精進と曰ふ。普く諸法を求めて色像あるなく、坦然玄虛として處所あるなし。是を一心と曰ふ。一切諸所有處を推すに、護事すべからず。本原自然なり。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[五三]精進覺意度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く一切財業を覺了して保つ可からずとなし、心に所著なく、世の所有を棄つ。是を布施と曰ふ。所行勤修して永く樂しむ所なく、道法を慕ふて無上眞に志す。是を持戒と曰ふ。所勤を修行して三界を了し、天上天下悉く幻化の依倚す

【五〇】この菩薩の出典、名知らず。本生話に出づるか？

【五一】以下の度無極に七覺意を擧ぐ。七覺意については前出。念覺支、常に定慧を明記して忘れず、之をして均等ならしむる。

【五二】法覺意。擇法覺意と同じ。智慧を以て法の眞僞を簡擇する。

【五三】精進覺意。勇猛の心を以て邪行を離れ、眞法を行ずる。

王夫人所行殊特に柔輭仁和にして歸伏せざるなきが如し。是を忍辱と曰ふ。所奉勤修して能く至眞を行じ、大通達を致して懈廢を樂はず。是を精進と曰ふ。所行の禪思にして普く入らざるなく、一切を救脫して放逸なし。是を一心と曰ふ。所生を因明して遂に成就を致し、時に隨つて義に順ふ。猶ほ往古の[四三]鬱多童子の諸の件黨を誘ふが如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[四四]意力度無極に六事ありと謂ふや？ 若し天界にあつて天上の五樂を斷除せず、心欲を犯さず、亦所顯なし。是を布施と曰ふ。若し諸天の天上の玉女を覩て、其の患難を見て、而も所著するなし。是を持戒と曰ふ。天宮にありと雖も、天上を貪らず、寶殿の自然の百味を樂しまず。是を忍辱と曰ふ。天人と作るを以て志解脫に在り、衆の甘樂を離れて法を以て樂となす。是を精進と曰ふ。其の心、定意志法を亂さず。是を一心と曰ふ。諸の天人の爲に、經典を頒宣し、志庠序として恐怖を懷かず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[四五]定力度無極に六事ありと謂ふや？ 一切所有を施して恪まず。寂然悅豫す。[四六]摩調王の國を棄て、王を捐てゝ、行じて沙門となるが如し。是を布施と曰ふ。身行を愼護して口過あるなく、其の意を將養して心に世を追はず。是を持戒と曰ふ。擧動作事隨順安隱にして非義に隨はず。是を忍辱と曰ふ。諸法を觀察して觀ること眞諦の如く、邪念なし。是を精進と曰ふ。其の一切法衆學四輩は無上正眞に志し、觀覩する所の諸法空にして所有なし。是を一心と曰ふ。世法に倚らず、其の心に誓願す。猶ほ陶家の衆器を成就するが如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[四七]慧力度無極に六事ありと謂ふや？ 有る者來つて頭を索むれば、即ち以て之を施し、其の心に逆はず。往昔[四八]迦夷國王敢て求むる者あれば、輒ち之を施與するが如し。是を布施と曰ふ。他人を救護して己身を貪らず、猶ほ[四九]閱叉、王路斷絕するが如し。菩薩、爾の時軀命を惜まず、鬼神と鬪つて之を降化し、一切の爲の故に王路を開通して衆の賈客をして安隱に往來せしむ。

【四三】 鬱多童子(Uttma? Uttara?)。事蹟出典不明？
【四四】 意力。念力と同じきか。念根增長して能く諸の邪念を破するもの。
【四五】 定力。定力增上して、よく諸の亂想を破するもの。
【四六】 摩調。前出、不明。
【四七】 慧力。慧根增長して能く三界の諸惑を破するもの。
【四八】 迦尸(Kāśi)。前出。
【四九】 閱叉の事蹟出典を知らず。

く、定意正受して一切を導利する。是を一心と曰ふ。強くして勢あり、志怯弱ならず、伏心自制して三昧定意を行ずる。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[三六]慧根度無極に六事ありと謂ふや？　志、聖明に存して一切所有にして悉く衆塵の行を消除す。是を布施と曰ふ。以て明達を致し、至遠玄妙にして心に倚る所なし。是を持戒と曰ふ。能く衆生の爲に一切の勞を忍び、生死周施して世世に廢せず。是を忍辱と曰ふ。道義を曉了し、至要を總攬して本清淨を解す。是を精進と曰ふ。上聖明を以て寂然惔怕たり。衆生の爲の故に、其の本元を宣ぶ。是を一心と曰ふ。慧解脫を以て無所行を奉じ、通達せざるなく、三界は恩を蒙る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[三七]信力度無極に六事ありと謂ふや？　若し所信あつて違失する所なし。[三八]師子王子の衆と共に約して未だ曾て信を失はざるが如し。是を布施と曰ふ。戒所立の處にして、所懈なし。猶ほ往昔象子の食するあつて、以て其の身を長ずるが如し。菩薩是の如く柔順法に服し、能く此を思惟して、以て佛道を成ず。是を持戒と曰ふ。正に人をして來つて骨髓を破碎せしむるも慈心を續習す。猶ほ[三九]蘇摩菩薩大士の諸の嬈動を救つて、害する者ありと雖も、其の心變らざるが如し。是を忍辱と曰ふ。勤行精進して未だ曾て退悔せず。其の根元を盡すこと大海を竭すが如し。所行、是の如くして、淫怒癡を消す。是を精進と曰ふ。若し禪思を以て法の如く悅豫し、行轉た增進して衆想を消除す。是を一心と曰ふ。所修の聖慧にして所受なく、所行、法の如く、道教に違せず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[四〇]精進力度無極に六事ありと謂ふや？　行甚しきも忍辱して、時に隨つて方便して一切を度脫す。是を布施と曰ふ。若し勢力を以て最勝を致し、然も所作すべし。猶ほ[四一]倶耶國王の子力めて怨敵を伏するが如し。是を持戒と曰ふ。若し虛無を聞いて隨順して之に可す、猶ほ[四二]須星國

【三六】慧根。眞理を思惟すること。以上の五法、よく善法を生ぜしめるので、五根と名ける。

【三七】以下五力を擧ぐ。五力とは三十七道品の一である。信・精進・勸念・定・慧の五根が增長して、五障を治する勢力があるので言ふ。信力、信根增長して、諸の邪信を破するもの。

【三八】師子王子(Siṃha-rāja-putra)。事蹟出典不明。

【三九】蘇摩菩薩(Soma-bodhi-sattva)。出典不明。

【四〇】精進力。精進根增長して能く身の懈怠を破するもの。

【四一】倶耶國王子(Yayāti?)。

【四二】須星國王夫人。事蹟出典不明。

いて顯道の元を爲す。是を布施と曰ふ。奉行篤信して一切法は衆德の元なることを樂んで悉く所生なし。是を持戒と曰ふ。至信を懷くを以て歡喜を得て悅び、瞋恚あるなし。是を忍辱と曰ふ。無所有に達して好眞有を以て究竟して一切諸法を執持す。是を精進と曰ふ。解脫根道德の元を以て信勤精進の衆根、寂定なり。是を一心と曰ふ。以て能く信を存して志は道品に存し、邪念を慕はず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[三三]精進根度無極に六事ありと謂ふや？　勤修すべき所の志御堅固に奉行方便して永く貪悋なし。是を布施と曰ふ。有爲に倚らず、顯明を捨てず、無爲に寂たり。是を持戒と曰ふ。身の行ずる所の一切形類都て犯害するなし。是を忍辱と曰ふ。志は玄迴に存し、大弘誓無極の哀を慕ふ。是を精進と曰ふ。聽くに時節に隨つて、聞いて輒ち奉行して懈廢せず。是を一心と曰ふ。所學の法、普く悉く現世後世の事度世の業を暢ぶ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[三四]意根度無極に六事ありと謂ふや？　若し眞諦を見て、家居の業・衆穢の患を覩て、所處を棄捐する。是を布施と曰ふ。有爲貪を觀じて、無爲を想はず、諸の所著を消す。是を持戒と曰ふ。其の逆順を察して衆苦を習はず、貪念する所なし。是を忍辱と曰ふ。若し能く一切諸法を總持して、永く至道の德本を忘失せざる、是を精進と曰ふ。寂然の義を行じて諸の所生に入りて、心に所生なし。是を一心と曰ふ。審諦に從つて虛妄に隨はず、諸法を思惟するに根本あるなし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[三五]定意根度無極に六事ありと謂ふや？　定意根を以て塵勞を消除し、雖及び玄虛に復た衆患なし。是を布施と曰ふ。諸亂を棄捨して三昧を得、定めて一切に開示す。是を持戒と曰ふ。若し心寂然として未だ曾て亂るゝあらず。定意正受の業に住するを得る。是を忍辱と曰ふ。若し諸の因緣事を樂しまず、法樂を甘樂するを無上法となす。是を精進と曰ふ。其の心專一にして二念な

【三三】精進根。又勤根と名ける。勇猛に善法を修すること。

【三四】意根。念根のことか。然らば、正法を憶念すること。

【三五】定根。心を一境に止めて、散失せしめぬこと。

む。何ぞ枝流あらんや？　是を智慧と曰ふ。是を六となす。
何をか習諦度無極に六事ありと謂ふや？　若し習行を以て、心に衆業・五陰・六衰を捨つる、是を布施と曰ふ。若し衆生[三一]五陰六衰十二諸入を見て、諸習を除去す。是を持戒と曰ふ。若し和同を以て度無極を生じ、諸法行無上道業を成ず。是を忍辱と曰ふ。若し愛欲を捐てて、道品の法を具し、一切法を觀じて其の無所因由生を覩見す。是を精進と曰ふ。若し衆結を斷じて一切受處にして所受なし。是を一心と曰ふ。其の衆難無益の法を觀じて、苦惱虛僞の患を消害す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか盡諦度無極に六事ありと謂ふや？　盡苦を逮得して道義を遵行し、無願を奉行す。是を布施と曰ふ。若し志樂滅盡の行を以て盡に所盡なく、以て都盡となす。是を持戒と曰ふ。衆想罣礙の本を除去して復た自然に所著なし。是を忍辱と曰ふ。本より以來更に勤苦する所、衆惱を滅して長く安穩を得る。是を精進と曰ふ。志、淸修に存して、燕坐獨處し、思惟三昧して自ら其の意を伏す。是を一心と曰ふ。若し證を取らずして志塵垢を盡し、愛欲あるなく、正受定竟して心懷亂せず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以つてか道度無極に六事ありと謂ふや？　若し眞行を獲至し、道と具にし、和同して慌てず、衆厄を救濟す。是を布施と曰ふ。其の道業を觀て、經典に從ひ、邪敎に反かず、因りて之を化す。是を持戒と曰ふ。其の念、其の法、若し念道を念はざれば、勸助して法に入つて正眞に存在す。是を忍辱と曰ふ。其の總持の法は三界の元を攬つて經典を宣布し、道敎に遵承す。是を精進と曰ふ。假ひ道業に在つて世俗に隨はず、其の正眞に隨つて虛妄ならず、是を一心と曰ふ。若し能く道を解して其の形類に隨ひ、一切悉く了して各々之を開化す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[三二]信根度無極に六事ありと謂ふや？　衆惡を信斷して、悉く本寂を爲し、不善行を除

【三一】五陰六衰、前出。十二入、新譯では十二處六根六境を合せて言ふ。

【三二】以下の度無根は五根を出す。依根、三寶四諦を信ずること。根は能生、增上の義である。草本の根が增上の力を有して能く幹枝を生ずる如くであるのに喩へていふ。信は他の善法を生ずる力があるから信根といふのである。

法を慕ひ、未だ曾て患あらず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか心意止度無極に六事ありと謂ふや？　諸の所樂・五欲の所思を斷じて自ら其の心を見て、法念を興發す。是を布施と曰ふ。彼の瑕穢を覩て、自ら其の心を調へ、柔順にして眞に隨ふ。是を持戒と曰ふ。諸法を觀察して、意念止をして六度を遵奉せしむ。是を忍辱と曰ふ。若し能く心の馳逸する所を禁制して邪行せざらしむ。是を精進と曰ふ。若し他人を想ふて心に愛欲を止め、本無を解悉す。是を一心と曰ふ。所見篤信して緣使に依り、空・無相・無願の法を奉ず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか法意止度無極に六事ありと謂ふや？　諸法實なるを覩て、爲に顯明を示し、各ゝ心を開かしむ。是を布施と曰ふ。一切の所觀は皆悉く本空なり。盡く諸法を察すること、猶ほ幻化の如く、衆本の無なるを見る。是を持戒と曰ふ。經典を遵奉して勤修報應し、以て一切を施して增損する所なし。是を忍辱と曰ふ。若し危他を見て、常に慈心を抱き、衆害を棄捐して、志、道法に存す。是を精進と曰ふ。諸法に遊ぶと雖も、一切法を了して著猗する所なく、其の志寂定なり。是を一心と曰ふ。其の上下の十二緣起に順つて、斯の元際を曉つて本來悉く寂なり。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか見其苦諦度無極に六事ありと謂ふや？　目に三世を覩、心に皆空を解し、衆の苦患を捨てて、希求する所なし。是を布施と曰ふ。諸の苦元、一として樂む可きなく、因つて生死を致して皆憂惱を爲すを見る。是を持戒と曰ふ。衆苦の事を察するに、己の緣對に從つて此難あり、悉く虛にして本なし。是を忍辱と曰ふ。諸の苦惱を觀るに、悉く微より、起つて分別する能はず、無覺を用ての故に。是を精進と曰ふ。其の諸苦は因習より生ずるを視て、自ら邪冥を將ゆるも、悉く本は清淨なり、是を一心と曰ふ。是の如く觀ずる者は邪行をなさず。一切苦を斷じて根元なからし

空不淨非身を察し、忘失する所なく、其の志を建立す。是を精進と曰ふ。其の意堅固にして達せざる所なく、行馳騁せず、是を一心と謂ふ。諸漏を盡すを以て復た報は應罪福の患・有無の業なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか第四禪度無極に六事ありと謂ふや？　若し[二九]四禪を以て一切の衆苦を斷ち、法樂に志して永く衆惱を除き、復た諸難なし。是を布施と曰ふ。悉く衆苦三界の終始を棄て、長く樂んで患なし。是を持戒と曰ふ。盡く一切周旋の三界の生死の危厄を察して本無を究竟す。是を忍辱と曰ふ。燕寂を得るを以て未だ曾て想求せず、存念逮得して所望なし。是を精進と曰ふ。致安を獲るを以て、禪思して慌てず、定意正受す。是を一心と曰ふ。清淨を成ずるを以て[三〇]甘露不死の藥を勸助す。名けて法訓と曰ふ。以て一切盲冥の達せざるを療す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか身意止度無極に六事ありと謂ふや？　云何ぞ身意止する身不淨・殺盜婬の業を盡して、身の淨行を奉じ、有我を計せず。是を布施と曰ふ。所有親親の宜しきを棄捐して、戀慕する所なし。是を持戒と曰ふ。若し以て好んで吾我の法無きを樂しんで、三界に貪せず。是を忍辱と曰ふ。一切所見は其の心を放逸にし、自在に非法に從はざるを得しむ。是を精進と曰ふ。若し一切の三世は自然にして、本無にして所有は猶ほ幻化の如しと觀る。是を一心と曰ふ。諸の所非法は自ら起滅して本所生なく、悉く亦處なく、緣對して興るを見る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか痛痒意止度無極に六事ありと曰ふや？　若し不顯をして心に所貪なからしめ、痛痒意止、自然に休息して衆緣を追はず。是を布施と曰ふ。若し苦痛を覩て禍福を造らず。復た衆患なし。是を持戒と曰ふ。篤く空の義を信じて、心に所生なく、一切の諸の不可行に堪任す。是を忍辱と曰ふ。痛痒善惡苦樂に倚らず、亦所著あるなし。是を精進と曰ふ。其の樂痛を以て三界に在り、三毒の苦を消して永く餘りあるなし。是を一心と曰ふ。若し能く一切の諸痛を斷ずるを以て志、道

【二九】第四禪。三禪の樂受を呵棄す。四支—不苦・不樂支・捨支・念支・一心支がある。

【三〇】甘露不死。Amṛta の譯語。この字には不死と甘露との兩譯がある。前出。

なし。是を布施と曰ふ。若し眞正に逮んで危諂をなさず。一切犯すなし。是を持戒と曰ふ。清淨を勸助して瑕穢なく、常に衆諍を愼しむ。是を忍辱と曰ふ。越度すべき所、普く一切に入つて衆生蒙荷す。是を精進と曰ふ。若し能く諸の罣礙する所は皆是損耗なりと覺知して、放逸をなさず。是を一心と曰ふ。以て蔽塞を棄てゝ、脫して罣礙なし。大辯を失はず、不逮を開導して咸深く入らしむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか第一禪度無極に六事ありと謂ふや？　所勤方便して功德を逮すること限量すべからず。是を布施と曰ふ。觀察する所の事、善權して時に隨つて一切を失はず。是を持戒と曰ふ。其の[二六]第一禪受攝方便して一心を失はず。志、定慧に存して、常に仁和を思ふ。是を忍辱と曰ふ。若し五陰を消して五通に成就し、遍く五趣に入つて往いて之を化す。是を精進と曰ふ。以て一定を致して專精にして心寂として所生なく、十方を覩見す。是を一心と曰ふ。五人至願して堅固なる能はずして、本誓に違ふ。稽首歸命して道敎に順從す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[二七]第二禪度無極に六事ありと謂ふや？　若し禪思を以て衆の妄想を斷ち、疾に堅固を得。是を布施と曰ふ。無限の不可計處を曉了し、戒法を導利し、因つて其の恩を荷ふ。是を持戒と曰ふ。衆生を覺寤して自ら能く分別し、一切悉く空にして心復た起らず。是を忍辱と曰ふ。若し靜かに燕居して自ら心を攝するを習ひ、而も放逸ならず。是を精進と曰ふ。若し解脫を樂んで不退轉に存し、小節に志さずして定意正受す。是を一心と曰ふ。所觀發明して己を愍み、彼を哀しみ、一切普く等しく偏黨をなさず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか第三禪度無極に六事ありと曰ふや？　[二八]第三禪を行じて忻樂順安し、衆惡不善の業を棄捐す。是を布施と曰ふ。方便勤修して諸の妓樂を捨て、志、禁戒に存す。是を持戒と曰ふ。其の心專精に所好を離れ、外の衆の邪欲に歡喜を以てせず。是を忍辱と曰 ふ、而も其の內に於て無常・苦

【二六】第一禪。四禪の內の第一。粗住、細住、欲界定を經て、未到定に入る。身心、豁虛として空寂である、內は身を見ず、外に物を見ない。此の如くして一日乃至一月一歲を經て定心壞れなければ、此の定中にて卽ち息の微微動搖するを覺し、或ひは微痒を感ず。卽ち動痒輕重冷暖、澁滑を發する。之を八觸と名ける。之が初禪に入つた、相である。此の時に十功德―空・明・定・智・善心・柔軟・喜・樂・解脫境界相應がある。十八支中覺支・觀支・喜支・樂支・一心支の五支がある。

【二七】第二禪。初禪の覺觀を呵棄して此の禪を得る。初禪に於て已に色界四大轉換し了つたので、二禪已上八觸十功德がない。二禪には內淨支・喜支・樂支・一心支の四支がある。

【二八】第三禪。第二禪の喜受を呵棄して三禪を得る。五支―捨支・念支・慧支・樂支・一心支がある。

を以て未だ會て忘失せず。是を布施と曰ふ。云何菩薩にして具足成就して、意樂ふ所に從つて好念する所なし。若し法義を以て喜んで施與して危厄を救濟する。是を持戒と曰ふ。其の樂堅固にして毀壞すべからず、心、恨を生ぜず。是を忍辱と曰ふ。若し出家を慕ふて世の榮樂を棄て、法を以て自ら樂しむ。是を精進と曰ふ。若し以て正觀して、一切は幻の如く、三界は化の若しとす。是を一心と曰ふ。設ば好く疑を決して餘の結網なく、深く微妙に入る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか四神足勤修精進度無極に六事ありと謂ふや？　若し神足を護つて十方に飛倒し、罣礙する所なく一切を開化す。是を布施と曰ふ。若し慇懃を以て大業に志し、心進んで願樂す。願樂輕擧して天下に遊行す。是を持戒と曰ふ。勤修發意して日日に增進し、懈廢せず、幷に衆生を化す。是を忍辱と曰ふ。方便を逮得して當に興爲すべき所、出家學道して邪行を好まず。是を精進と曰ふ。衆の狐疑を決して悉く開化せしめ、可意悅豫して因つて道心を發す。是を一心と曰ふ。勤助すべき所、普く一切の諸闇に蔽れし人に入り、正眞を識らしめ、十方、恩を蒙る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか心行神足度無極に六事ありと謂ふや？　其の心平等にして衆の垢塵を盡し、常に清淨を行ず。是を布施と曰ふ。若し愛欲不淨の行を離れ清白を奉修す。是を持戒と曰ふ。所生を曉了して是の如く滅盡す。久存するを得ず、唯道を恃むべし。是を忍辱と曰ふ。無想を逮得して逮ぶ所ありと雖も、逮に所逮なし。是を精進と曰ふ。心に建立する所、所拘を除去して而も所住なく、常に正眞に遵ふ。是を一心と曰ふ。衆の結著を斷ち、未だ會て縛あらず、心等しうして空の如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか所識神足度無極に六事ありと謂ふや？　所識の造行、愛欲を離れしめ、復た貪塵する

す。

何を以てか這起盡滅度無極に六事ありと謂ふや？　若し塵勞興つて親しく其の中に入り、菩薩の方便習眞を觀見す。是を布施と謂ふ。愛欲を患厭して之が不淨を數じ、淸明業を奉ず。是を持戒と曰ふ。彼に在つて穢を斷ち、淸白を遵修す。若し惡習非法の元を盡して功德未だ生ぜざれば、勸勸して興さしむ。是を忍辱と曰ふ。若し了慧を解して塵勞を分別し、衆の愛欲を消す。是を精進と曰ふ。常に［二三］燕居にあつて、專心禪思して定意三昧す。是を一心と曰ふ。篤く他人を信じて六度無極あり、善德を興發して一切を度脫す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか未興衆德因而興之度無極に六事ありと謂ふや？　若し諸善を發して虛乏を捨ず、功を積み、德を累ねて每生自剋す。是を布施と曰ふ。若し善德を致して益ゝ以て好樂し、增長せしめて以て一切に惠む。是を持戒と曰ふ。空無の事不盡の德本に遵つて衆惡不善の行を消すを以て、是を忍辱と曰ふ。身口立行し、方便無緣に因つて道德を興す。是を精進と曰ふ。若し法敎を奉じて衆の倚想を攝して忘失せず、定意正受す。是を一心と曰ふ。所造興るを得て發意を起すなく、道明を成就して一切を開化し、皆道慈を荷ふ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか以發立德度無極に六事ありと謂ふや？　衆善功德の元を起すを以て、惡行無益の義を生ぜず。是を布施と曰ふ。斯の欣樂を以て唯至眞に志し、小業の一切を益なきを念はず。是を持戒と曰ふ。諸の應宜を察して懷恨せず衆の不愼を除く。是を忍辱と曰ふ。將護す可き所、未だ曾て虛妄ならず。皆道に入る。是を精進と曰ふ。道力を奉遵して羸劣を爲さず、强くして勢あり。是を一心と曰ふ。習俗に順從して、一切は邪見［二四］六十二疑に墮せず。一切を勸助して妄想を抱かず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか［二五］神足度無極に六事ありと謂ふや？　衆の貪穢を斷ち、經典を思惟し、神足を成ずる

【二三】燕居、禪定の居處。

【二四】六十二の外道說をいふ。前出。

【二五】神足、神足通である。又神境智證通といふ、略して神境通。五通の一。

鼈身を殺すも、一心安慈にして忿念の意なきが如し。[一七]是を辱と曰ふ。[一八]猶ほ若し魚あり、水中にあつて人を牽掣し、其の身體を噉食し、及び諸の雜蟲來つて人身を危くすれば、中にあつて之を救ひ、慈心あらしむ。是を精進と曰ふ。假使諸獸來つて人を殺さんと欲するも、悉く能く含耐して惡を加へず。是を一心と曰ふ。若し億載の經卷妓數の譬喩を諷誦し學び、是の聖明を以て他人を度脫す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか爲異度無極に六事ありと曰ふや？ 若し所見あつて飢乏窮厄、時に隨つて是を與ふ。是を布施と曰ふ。名聞と號する[一九]梵志道士の如し。大祠に祀施して、我、中に在つて食す。因つて之を開化して道心を發す。是を持戒と曰ふ。又其の梵志勤めて醫藥を設け、以て衆病を治し、法藥を加示し至德を咨嗟して悉く衆生を天上に生ずるを得しむ。是を忍辱と曰ふ。身行を勤修して出家の業を解す。未だ成佛せずと雖も、勇銳なること斯の如し。是を精進と曰ふ。其の禪思を以て山頂に超在し、無上正眞受して[二〇]三達を以て去來今を知る。是を一心と曰ふ。若し[二一]十八不共諸佛の妙法を體解するを以て、道を頒宣し、[二二]十八地獄を化す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。」

三十七品第十三

佛、喜王菩薩に告げたまはく、『何を以てか四斷度無極に六事ありと謂ふや？ 諸惡不善未だ生ずるあらず。護つて起きざらしむ。是の六度無極合集の勢力によつて塵勞を消滅して常に淸淨ならしむ。是を布施と曰ふ。不善の報を求めて衆惡非宜の事業を消除す。是を持戒と曰ふ。自然非法の元を解して化して道に入らしむ。是を忍辱と曰ふ。未生の諸惡尋則ち盡滅して道法を興隆す。是を精進と曰ふ。他人を觀化して正眞に入らしめ、傳道の業を宣傳す。是を一心と曰ふ。自然の諸惡不善を究竟して復た生ぜざらしむ。是の心行に因つて長く道化を養ふ。是を智慧と曰ふ。是を六とな

【一七】 鼈が溺れた人を救つたが、反つて救つた人に殺されても恨まぬのを言ふのか。本生話に出づる話の如し。
【一八】 本生話にある話の如し。探すべし。
【一九】 梵志名聞（Yaśas?）。不明。
【二〇】 三達、羅漢にて三明といふを。佛にては三達といふ。天眼宿命漏盡である。天眼は未來の生死因果を知り、宿命は過去の生死因果を知り、漏盡は現在の煩惱を知りて、之を斷盡す。之を知ること明かなるを明といひ、之を知ること窮盡するを達といふ。
【二一】 十八不共法。後に詳しく說く。
【二二】 十八地獄（Naraka）、地下にあるを以て地獄といふ。一、光就居。二、居虛倅略。三、桑居都。四、樸。五、房卒。六、草烏卑次。七、都盧難且。八、不盧半呼。九、烏竟都。十、泥盧都。十一、烏略。十二、烏滿。十三、烏藉。十四、烏呼。十五、須健居。十六、末都乾直呼。十七、區逾途。十八、陳莫。

にあつて、則ち六事を以て其の意を調護し、道律を受けしむ。是れ持戒の報なり。仁和にありと雖も、猶は往昔一菩薩あるが如く、忍辱を行ずる時、羼提和と名く。迦夷國王其の手足及び耳鼻を斷ち、血は乳湩と化して心に瞋を起さず、蒼病あるなし、大哀を念懷して愍むこと赤子の如く、當時八十億天を開度す。是れ忍辱の報なり。己を勉めて勤修し、猶ほ五通菩薩の大志の如し。五百梵志の童子を勉出して歡び喜悅して悉く道教を受けしむ。是れ精進の報なり。若し經典を聞いて勢力轉增し、乃至無極定意を正受す。是れ一心の報なり。意を恣にし、力に任して法を頒宣す。其の所好に隨つて之を度脫す。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか愁慼度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施ありて心に憂思を懷き、常に慧明を以て大聖を供養し以て利を求めず。是れを布施と曰ふ。道乘を招致して一切を來し、道業を造立して成就具足す。是を持戒と曰ふ。猶ほ申日（晋に首寂と曰ふ。）の如し。外異學に因つて惡を興し、佛を請ず。是の受教によつて佛道に入る。是を忍辱と曰ふ。亦往昔虛羅龍王は心毒勇猛にして五槃に霜雹し、及び愚人を害す。佛化して開導するが如し。是を精進と曰ふ。本、佛道を成じて最正覺をなす。時に佛默然として禪思して倦まず、梵天來り下つて佛を請じて觀助し、唯說法を垂れて三界を救濟す。是を一心と曰ふ。猶ほ蛇蚖の毒を抱くこと甚だ盛にして、佛來つて火室に入り、開化すれば律に入り、降伏して自ら歸するが如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか開化眞陀度無極に六事ありと謂ふや？　夫れ自ら身を安んじ、他人を救護して一切所有を施して悋まず。是を布施と曰ふ。猶ほ菩薩あり、蓮華藏と曰ふ。金剛の行を以て心大いに堅強にして貪悋する所なし。一切衆生心に有身を計し、吾我有りと言ふ。吾我を用ひての故に等しく法を奉行す。彼の衆生の爲に寧ろ身を失つて命終するも戒を毀ざるが如し。是を自戒と曰ふ。猶ほ昔龍あり、衆の賈人を度して溺死せざらしむ。反つて惡心を懷き、抱くこと反復なく、還害を想ふて

【一四】迦尸（Kāśi）國王、前出。これ同人か。

【一五】虛羅龍王。事蹟出典不明。

【一六】蓮華藏菩薩。不明。

正を行じ、邪ならず。是れ布施の報なり。福報を悅可し、猶ほ〔八〕梵志字披羅陀罵詈誹謗するも、佛時に和顏して以て瞋恨せざるが如し。爾の時三億の天人悉く道心を發す。是れ持戒の報なり。〔九〕孫陀利と曰ふ者（晋に善妙と曰ふ。）如來を誹毀す。如來是に因つて外學萬二千人を開化して解脫を得しむ。是れ忍辱の報なり。勢力堅强にして心常に自ら現ず。猶ほ菩薩の正慈心を行ふが如し。若し獸中に墮して師子王となれば、假使侵剋さるるも默然として之を受け、用ひて畜生を化す。是れ精進の報なり。若し其の意を離れて之を不可なるに加へ、默して與に諍はず、靜然として之を受けて心に拘在せず。是れ一心の報なり。若し禪思を以て講宣道化し、所問に答へて、義、解を得ざるなし。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか諸佛度無極に六事ありと謂ふや？　若し說を頒宣して徧く佛國に告げ、悉く音を聞かしむ。乃ち上方一〔一〇〕究竟天阿迦尼吒に達す。是れ布施の報なり。若し光明を演じて三千界に遍し衆生を開化して普く安穩ならしむ。是れ持戒の報なり。其の法雨を以て弘寛に曠至し、諸の編髮梵志の等を化して大道に入らしむ。是れ忍辱の報なり。變化神足をもつて其の威神を顯し、優爲迦葉等の類悅豫し、服して弟子となる。是れ精進の報なり。心、梵天を念じて、其の心我を觀察して、以て虛しからず。志梵行に存して、諸梵を度せんと欲す。是れ一心の報なり。時を以て開導すること師子吼の如く、慈を蒙らざるなし。慈は虛空の若く、普く一切を覆ふ。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以つてか方便度無極に六事ありと謂ふや？　昔梵志あり、〔一一〕隨堅と名づく。廣く施す所あり、各〻八萬四千なり。皆以て勸助して佛道を建立す、〔一二〕比丘尼大愛道と名くるものの如し。佛勸喩して曰く、「金を以て織り成して聖衆に上れ」と。是の語を說く時、八百の比丘悉く法律に入る。是れ布施の報なり。諸の滅度の佛、猶ほ安隱に學す。以て外士の名けて〔一三〕須摩と曰ふあるを聞き、欲中

〔八〕梵志字披羅陀。事蹟・出典不明。

〔九〕孫陀利 Sundarī sundarī 美しきといふ形容詞を女姓名詞にしたもので、婬女の名。大衆の中で佛を誹謗した。是れ佛の十難の一である。佛、その往昔の因緣を說いたものを孫陀利宿緣經と名け、興起經上に攝む。

〔一〇〕究竟天。阿迦尼吒（Akaniṣṭha）前出。

〔一一〕梵志隨堅。事蹟不明。

〔一二〕比丘尼大愛道（Mahāprajāpatī Gotamī）。釋尊の生母摩耶夫人無き後の養母で、佛を養する所あつた。父淨飯王の死後、佛が父王の荼毘を終つて歸る後を追つて、夫人は宮女と共に、出家を佛に乞ひ、佛は中々許さずして、阿難の取りなしで漸く許された。比丘尼の僧團の出來た最初である。アハープラヂャーパテイーはその後修道よく努めて、佛に代つて比丘尼の高德者となり、比丘尼教團をよく指導した。

〔一三〕須摩。事蹟出典知らず。

何を以てか一切智度無極に六事ありと謂ふや？　諸の道慧にあつて目の覩る所、蔽礙なし。是れ布施の報なり。衆會の心・所念の本末を知つて、因つて說法をなして、心をして坦然ならしむ。是れ持戒の報なり。能く遠近を聞いて、所演は至要にして平等にして坦然なり。是れ忍辱の報なり。時に從つて說法し、一切の意に從つて各各解を得。是れ精進の報なり。其は經典を宣べて、次叙を失はず。各各其の所を得て、方便は宜しきあり。是れ一心の報なり。其の所樂に從つて正慧を講論し、受くる所なく、一切を發起して其の詩頌を成す。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか無餘度無極に六事ありと謂ふや？　若し心安隱にして道法を奉行し、至義を發起して餘難あるなきに至らしむ。是れ布施の報なり。若し道法を用ひて以て快樂となし、速に他人の爲に不逮を開化す。是れ持戒の報なり。諸佛所說の經法を篤信して、等しうして異あることなし。是れ忍辱の報なり。三世・去來今の事を等觀し、永く罣礙なし。是れ精進の報なり。若し禪思脫門三昧を以て斯く因つて之を正受して、其の所樂に隨ふ。其の所爲を恣にして定意を思惟す。是れ一心の報なり。各各爲に若干品の法を講說し、皆開解を得て無常法に志す。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか有餘度無極に六事ありと謂ふや？　滅度の後舍利を分布し、福を以て訓誨して無爲を得しむ。是れ布施の報なり。禁行を思惟して無爲に親近し、其の所樂を恣にす。是れ持戒の報なり。是れ如來の精舍神寺に於て、諸天一切皆來つて自歸して皆當に作禮すべし。是れ忍辱の報なり。佛滅度の後訓誨を勤行して精進して疲れず、聲聞の行を爲して罣礙せしめず。是れ精進の報なり。稍漸く進んで三昧正受して滅度に至るを得。是れ一心の報なり。聖明の根を以て度世の慧を修し、普く遊んで弘行す。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか可止度無極に六事ありと謂ふや？　佛世にありて衆生を敎化し、食を受けて利養して

こと能はず。

【七】優爲迦葉　（Uruvilvā-kāśyapa）詳しくは優樓頻螺迦葉、譯木瓜林。三兄弟迦葉の第一である。五百の弟子を有する有力な事火外道論師であつた。佛は成道後耶舍等六十人を敎化の後傳道に派遣し、自らは優爲迦葉を敎化する爲、その事火窟に赴いて宿泊を求めた。迦葉は毒蛇の棲む窟に導いた、毒蛇は火を吹き、窟に充すも、佛は自若として坐禪し、傷害されず。毒蛇、化に伏す。迦葉は佛の泊る窟に火滿ちしを見て、佛の死せしを信じたが、翌朝佛平然とし、蛇は化されてゐるのに驚駭した。然し尙佛に歸せぬのを、佛は火を喩として說法して、遂に歸佛せしめた迦葉の川に捨てた事火器具を下流にて見て、二弟那提迦葉（Nadīkāśyapa）伽耶迦葉（Gayā-kāśyapa）は驚き來り、長足の歸佛したのを見て、從つて弟子と共に凡て歸佛した、後佛は三迦葉とその弟子を伴ひ、王舍城に赴き缾沙王の出迎へを得て、之に說法し、同じく化した。

き淸淨の行を觀じ、頌宣の法、猶ほ梵天の如し。是れ一心の報なり。若し以て時を知り、誓願の聖慧は經法を講說して十方に通ずれば、是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか三昧度無極に六事ありと謂ふや？　坐禪思惟して、衣食の想なく、佛樹下にあつて道場に處す。是れ布施の報なり。其の篤く法を信じ、覺意は理に順つて精進を失はず。是れ持戒の報なり。覺意を喜悅して道義を樂んで、心俗に存せず。是れ忍辱の報なり。[五]經典十二部の業を分別して正覺の行以て一切を化す。是れ精進の報なり。憒鬧を棄てて邪心あるなく、其の三昧定にして正受を修す。是れ一心の報なり。其の覺意を護つて衆生を將養し、大安に至らしむ。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか訓誨度無極に六事ありと謂ふや？　若し佛道を得て、本末を觀察し、衆生を開化す。是れ布施の報なり。[六]正使、請ふなければ、經法を說いて爲に慧を頌宣するなし。是れ持戒の報なり。光耀解脫し、奉持して犯さず。志性愍傷にして變化巍巍たり。是れ忍辱の報なり。猶ほ憂爲迦葉の如く、兄弟の伴黨三人にて自ら專ら以て道眞をなす。佛勸化する所、皆道に至らしむ。是れ精進の報なり。衆生義を問へば、疑礙を以てせず、講說宣傳して各各解を得しむ。是れ一心の報なり。分別發遣して聖明を決了し、通達せざるなし。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか佛道度無極に六事ありと謂ふや？　其は無明を以て經典を頌宣し、示すに聖慧を以てす。是れ布施の報なり。佛の遣使する所は、無明を安穩にし、晃昱たる道德の光に至らしむ。是れ持戒の報なり。一切穢を滅して順從永慌にして辯才無量なり。是れ忍辱の報なり。其の法平正にして定を致して忘れず、常に十方を念ず。是れ精進の報なり。普く一切に入りて至德を奉行し、强くして勢あり。是れ一心の報なり。勇猛にして畏るゝなく、道元を曉了して無上心に志す。是を智慧の報と曰ふ。是を六となす。

【五】　經典十二部。一切經を十二種類に分けたのである。一、修多羅 Sūtra（契經。法義を說ける長行の文。理に契ひ、機に契ふ故かくいふ）。二、祇夜 Geya（應頌、又は重頌、前の長行の文に重ねて其の義を宣べて頌とするもの）。三、伽陀 Gāthā（諷誦又は孤起頌といふ。長行でなく單に偈頌）。四、尼陀那 Nidāna（因緣。經中見佛聞法の因緣、佛の說法敎化の因緣を說く）。五、伊帝目多 Itivuktaka（本事。佛弟子の過去世の因緣を說く）。六、闍多伽 Jātaka（本生。佛自身の過去世の因緣を說く）。七、阿浮達磨 Adbhutadharma（未曾有。佛の種々の神力不思議を現じ給ふを記す）。八、阿波陀那 Avadāna（譬喩。經中譬喩を說く）。九、優婆提舍 Upadeśa（論義。法理を論義問答する）。十、優陀那 Udāna（自說。問者なきに佛自ら說く經文）。十一、毗佛略 Vaipulya（方廣。方正廣大の眞理を說く）。十二、和伽羅 Vyākaraṇa（授記。菩薩に成佛の記を授く）。

【六】　正使。習氣に對するの稱。正しく現起する煩惱の正體を正使といひ、その煩惱の餘習を習氣といふ。阿羅漢は正使を斷ずるも習氣を亡ずる

治し、正覺を成ず。是れ布施の報なり。衆の塵勞を消し、一切の魔の諸の諍訟の業を滅す。是れ持戒の報なり。諸の天子の衆害惡鬼不和の難を化して、悉く永く安からしむ。是れ忍辱の報なり。其の諸の死魔官屬自然に降伏し、歸命して佛の聖教を奉ず。是れ精進の報なり、五陰あるなく身魔自ら解いて縛結なし。是れ一心の報なり。其の所願の如く最正覺を成じて一切智をなす。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか不退度無極に六事ありと謂ふや？　佛樹下に坐し一心精思して厭足せず。是れ布施の報なり。魔を見て所畏なく、自ら正覺を致して一切を度す。是れ持戒の報なり。其の身亂れず、本末寂然として心定りて永く安かなり。是れ忍辱の報なり。其の心忻然として寂定安隱にして衆魔あるなし。是れ精進の報なり。等惠施を用ひて所行平正にして等しく異あるなし。是れ一心の報なり。言行相副ひ、身口意定まつて佛道を逮得す。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか一時度無極に六事ありと謂ふや？　一時の頃智慧を勤修して無上正眞道を成じ、最正覺をなし、心、奉行する所導御して時に隨ふ。是れ布施の報なり。其の伴黨に從つて塵垢を消除し、常に奉じて清淨なり。是れ持戒の報なり。世尊意念して永く三毒を害し、三寶を興隆す。是れ忍辱の報なり。所度正受して諸の垢を滅盡し、三毒をなからしむ。是れ精進の報なり。十二緣起を曉了し、分別して諸の牽連を斷つ。是れ一心の報なり。能く以て逮得し、妄失する所なく、三世去來今現の一切諸法を知る。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか無所等度無極に六事ありと謂ふや？　肉眼を以て一切衆生苦惱の患にあるを見て、大安を立つ。是れ布施の報なり。若し天眼を以て諸の生死合散の善惡を見、化して度世せしむ。是れ持戒の報なり。他人を勸化して聲聞の處所に所著なからしむ。是れ忍辱の報なり。若し〔四〕神足變化の所爲を以て往來周旋して三界の厄を濟ふは、是精進の報なり。若し念ずる所あつて、心に是の如

〔四〕神足變化。神足前出。變化、舊形を轉換するを變と名け、無にして忽ち有なるを化といふ。佛、菩薩の通力は能く有情無情の一切を變化せしめる。

六となす。
何を以てか金剛度無極に六事ありと謂ふや？　若し金剛三昧心に逮致するあつて、傾動せず。是れ布施の報なり。若し方便を以て無明を棄捐し、至徳を奉行す是れ持戒の報なり。道義に趣いて所受なし。悉く衆穢を捨つ。是れ忍辱の報なり。一切に三界の衆生を將護して、俗に隨つて開化して一切を度脱す。是れ精進の報なり。己身の功徳止頓次第し、隨順發起して其の本元を盡す。是れ一心の報なり。一切衆生の心性を知つて、最正覺を成ず。是れ智慧の報なり。是を六となす。
何を以てか造救度無極に六事ありと謂ふや？　正覺を成ずるを以て諸天の所說、一心に衆惡の行を棄捐して、寂として以て、禪定し、世法を思惟して一切を救護す。是れ布施の報なり。惡趣地獄の苦惱・衆罪の患を消滅する。是れ持戒の報なり。諸根を曉了して德行成就し、諸の不具足は皆備悉せしむ。是れ忍辱の報なり。一切の諸の衆生類・塵勞の厄を消化し、永く以て餘すなし、是れ精進の報なり。諸の所妓樂、鼓せずして自ら鳴り、一切の意を悅ばして悉く道心を發す。是れ一心の報なり。三千世界の衆藏の財寶、常に造つて無央數億百千の天人に布施す。是れ智慧の報なり。是を六となす。
何を以てか自然度無極に六事ありと謂ふや？　三千世界の樹、華實を生じて冬夏恒に茂り、以て用ひて諸の窮乏する者に惠與す。是れ布施の報なり。一切の惱・不可計の勤苦の痛を除いて、長く安和ならしむ。是れ持戒の報なり。一切衆生の諸根は具足して究竟すること、自然なり。是れ忍辱の報なり。有所る自然にして、三千世界平かなること手掌の如し、是れ精進の報なり。諸色形像垢穢に入り、實にして虛妄ならず。諸天恩を蒙る。是れ一心の報なり。四魔を降伏し慧は等倫するものなく、最正覺を成ず。是れ智慧の報なり。是を六となす。
何を以てか伏魔力度無極に六事ありと謂ふや？　菩薩道を行じて一切三千世界の、三毒の病を療

の報なり。是を六となす。

何を以てか順世度無極に六事ありと謂ふや？　行き入つて分衞すれば各各に利を得、受くる者安隱なり。是れ布施の報なり。世意に順隨して饑饉の時其の虚乏を拔く。猶ほ羅摩子の遊ぶ所至る處、難を濟ふ所多きが如し。是れ持戒の報なり。諸の非法に逆つて解難して疑はず、此の道業を受く。是れ忍辱の報なり。若し六年に於て衆礙を超越して一蔽あるなし、是れ精進の報なり。堅固に行禪して一切所有は悉く無にして聚泡沫の如きを解す。是れ一心の報なり。法に違犯せず、飲食自然に、名を聞いて皆歸し、佛樹下に坐して衆魔を降伏す。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか邊際度無極に六事ありと謂ふや？　若し魔及び官屬を降伏して法輪を轉ずるに因つて、一切を度脱す。是れ布施の報なり。一切の三千世界の衆生の類を勸化し、永安を得て衆患を無からしむ。是れ持戒の報なり。衆生を誨訓して、其の鬪諍する者は是を和合せしめ、賢行を建立して犯す所なからしむ。是れ忍辱の報なり。若し三千界の興亂を和せしめ、其の道味を同じうす、是れ精進の報なり。是の四禪を行じて定意正受し、十善を奉行するに放逸を以てせず。是れ一心の報なり。斷じて無明を消し、衆冥盡索して永く餘すなからしめ、顯燿を逮致す。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか蠲除度無極に六事ありと謂ふや？　往昔迦夷羅衞國土に遊在して、止頓周流して七年敎化し、窮罪して悉く其の患難を滅除す。是れ布施の報なり。斯の垢を[二]芟滅して三界に遊び、著する所なし。是れ持戒の報なり。若し能く方便して三毒消滅し、心に所生なし。是れ忍辱の報なり。衆生の生死罪福を觀じて慈哀を等しくす。是れ精進の報なり。其は以て患厭して禪思を分別し、[三]八品に逮致して忘失せず。是れ一心の報なり。永く所安なく、貪欲を斷じ、無明を消害して道慧を興發し、一切法を除いて虚妄ならざらしむ。心奉行智慧度無極なり。是れ智慧の報なり。是を

【二】芟滅。芟はかると訓じ、絶ち除くことである。

【三】八品。八の集りとは何をいふか。禪思を八に分類することなし。八正道をいふか？

巻の第四

順時品第十二

佛、喜王菩薩に告げたまはく、『何を以てか順時度無極に六事ありと謂ふや？ 衆瘡消治して心に所著なく、行くこと蓮華の如し。是れ布施の報なり。遵修して春夏に百の草木を生じ、時節寒を除く。是れ持戒の報なり。其の身の妙好巍巍として、殊妙なること衆星の明らかなるが如し。是れ忍辱の報なり。平等に隨順して違失する所なし。是れ精進の報なり。皆以て一切悪趣を杜塞して其の和安を示す。是れ一心の報なり。假使衆生悪路に在るも各若干の光明を以て之を照し、解脱を得しむ。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何をか知時度無極に六時ありと謂ふや？ 若し臥寐に於て向曉も後夜も忽ち以て曉了して正法思惟す。是れ布施の報なり。身能く家を棄て、其の財業を捐て行じて沙門となる。是れ持戒の報なり。其を車匿に告げて、歸つて家の父王及び其の妻を解喩し、成佛して國に還らば、當に相度脱すべし。是れ忍辱の報なり。其の身修業して志性出家し、袈裟を受著す。是れ精進の報なり。若し解脱を慕ふて無上道を求むる、是れ一心の報なり。寂然に入つて分別頌音し、家居に還入して度脱する所あり。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか分別度無極に六事ありと謂ふや？ 衆生を愍傷して〔一〕羅閱祇に入り、分衞して人を福にす。是れ布施の報なり。上、天上にあつて、諸天人の爲に宣布道化す。是れ持戒の報なり。羅閱祇に入り、遊行已に訖り還つて天頂に上り、寂を以て衆を化す。是れ忍辱の報なり。直身して立ち、依倚する所なく、三昧正定あり。是れ精進の報なり。若し禪思して惟だ三界一無の眞諦を解念す、是れ一心の報なり。思惟して十二緣起を察視するに。根原の由る所皆因緣の對なり。是れ智慧

【一】羅閱祇(Rājagṛha)。又羅閱耆、羅閱、羅越と表音す。摩訶陀國 Magadha の王舍城のことである。之の事蹟は悉達が出家後、苦行仙及び阿羅藍仙等を訪問して滿足せず行いて、王舍城に入り、乞食したことがあつた。それを言ふのである。その折の王舍城王缾沙王 Śreṇya の訪問を受け、歸國をすゝめられたのも、この時のことである。王舍城は五山に圍まれる故に、五山城とも言はる。

なり。其の身清淨にして塵垢著せず。猶ほ蓮華の塵水に著せざるが如し。是れ忍辱の報なり。第三十二上下諸天、能く頂を覩る者なし。是れ精進の報なり。三界の衆生、樂見せざるなし。威德遠顯なり。是れ一心の報なり。言は天雨の如く、之を汚す能はず、淨きこと虚空の如く、音は雷震の如し。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか【一〇二】出遊步度無極に六事ありと謂ふや？　其れ獨步し出でて罣礙なし。是れ布施の報なり。若し捐非を棄てゝ能く一心なるもの、志行弘安にして乃ち佛子と名づく。是れ持戒の報なり。無央數の天往いて見て奉敬し、地に伏して自ら歸す。是れ忍辱の報なり。能く自ら己を守つて、目、著する所なし。是れ精進の報なり。勇高遊騰して神足無極なり。是れ一心の報なり。一切所有は能く惠んで悋まず、宣暢道訓す。是れ智慧の報なり。是を六となす。」

【一〇二】出遊步。三十二相中、之に適當するものなし。隨相一六、行相美妙、二六、行步正直に當るか。

れ忍辱の報なり。面に怯弱なく、光明澤潤なり。是れ精進の報なり。顏貌妙好にして身形平正なること、日の初めて出づるが如し、是れ一心の報なり。光は月の如く、八方を照し、上下闇冥にして能く逮明するものなし。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[九八]目紺青色度無極に六事ありと謂ふや？ 若し佛を見るあれば、心中に悅喜し、一心を以て歸して、敬眼を以て視る。是れ布施の報なり。眼の視る所、目寂定にして一の不正なし。是れ持戒の報なり。目微妙好にして能く訶する者なし。遠近皆伏す。是れ忍辱の報なり。眼の視る所も亦傷害なく、加益する所多し。是れ精進の報なり。遠思玄邈を見て一切の結を解く。是れ一心の報なり。見る所厭くなく、底を得べからず。所覩平等なり。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[九九]鼻如鸚鵡度無極に六事ありと謂ふや？ 鼻は鸚鵡の如く、隆平にして正妙なり。是れ布施の報なり。常に寂定を以て邪非あるなし。是れ持戒の報なり。鼻好潤澤にて燿として明珠の如し。是れ忍辱の報なり。柔輭諦忍仁和にして、威儀、奉仰せざるなし。是れ精進の報なり。衆人見る所敬愛して已むなく、而も厭足するなし。是れ一心の報なり。意、所念を捨て、受くるに倚るべからず。諸香を存せず、道を以て香となす。是れ智慧の報なり。此を六となす。

何を以てか[一〇〇]頂髻相度無極に六事ありと謂ふや？ 其の髻團圓にして自然に興起し、光明晃昱たり。是れ布施の報なり。髻髮金色にして煒煒として量り難く、各〻右旋す。是れ持戒の報なり。髻曜赫赫として光明の照す所際を得べからず。是れ忍辱の報なり。肉髻充滿して邪非あるなく、峙立して安し。是れ精進の報なり。滑澤迴旋し、安諦に相斷つて相雜錯せず。是れ一心の報なり。振燿光光として、照す所無限なり。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[一〇一]如來肉髻度無極に六事ありと謂ふや？ 髮は青色を生じて無上紺の如く、滑澤燿燿として琉璃光に踰ゆ。是れ布施の報なり。髮毛右旋して各〻本根に順ふて相倚らず。是れ持戒の報

【九八】前の梵天と共通す。（梵語では一であるのを賢劫經では二つの相に數へたのである）。

【九九】鼻如鸚鵡。普通の相好にも隨相にもなし。鼻の鸚鵡の嘴のやうに曲つてゐるのをいふのであらう。

【一〇〇】頂髻相（Uṣṇīṣaśiraskatā 頂上肉髻）。頂長に髻の如き肉塊があること。

【一〇一】如來肉髻。前と同じ。

佛言はく、『復た次に喜王よ、身心を將順して常に安和ならしむるは是布施の報なり。其の身行を以て身口心定まり、寂然として安和なるは、是れ持戒の報なり。若し十善を以て所生を興發し、志天人にあつて道業をなさしむ。是れ忍辱の報なり。一切に教告して衆會を開化し、犯負する所なし。是れ精進の報なり。悲和の音柔潤にして響哀にて衆生に告ぐ。是れ一心の報なり。普は法化を宣べて衆の孤疑を決し、解悦せざるなし。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[九五]味中上味度無極に六事ありと謂ふや？　若し食膳を以て一切に供する所、其の味殊特にして衆人の意によし。是を布施の報と曰ふ。其の施與する所を食する者安快を得て恚なし。是を持戒の報と曰ふ。受くる者和同して、檀越心と諍訟の意なし。是を忍辱の報と曰ふ。所施の供具多少を平らかならしめ、身に疾をなからしむ。是を精進の報と曰ふ。食膳極妙にして口に於て甘美、而も穢臭なし。是を一心の報と曰ふ。熱からず、冷やかならず、其の味和適にして濡く輭柔なり。是を智慧の報と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[九六]師子頰車度無極に六事ありと謂ふや？　其の背廣平にして師子形にて、三界を獨歩す。是れ布施の報なり。猶ほ蓮華の光澤色妙なるが如く行くこと師子の如し。是れ持戒の報なり。若し師子の轉進して前み、難を畏るる所なきが如し、是れ忍辱の報なり。大神巍巍として尊妙殊特を顯現する所以は、是れ精進の報なり。其の餘の所宣は一切を歡悅し、衆生の敬ふ所なり。是れ一心の報なり。其の目に見る者は自ら歸せざるなく、面色喜悅し、德を覩て奉敬して厭足するなし。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[九七]眼如牛如月懷來以度無極に六事の報ありと謂ふや？　其の眼細妙に引くこと長くして而も好く、月の初めて生ずるが如し。是れ布施の報なり。其の目分明にして善く諦らかに巍巍として一の短乏もなし。是れ持戒の報なり。其の目晃明柔輭にして鮮好殊絕なること比し難し。是

【九五】味中上味（Rasarasāgratā 咽中津液得上味）。如何なる粗食も食すれば唾液が出でて上味にすること。

【九六】師子頰車（Siṃhahanu 頰車如獅子相）。頰の骨が師子の如くに强いこと。

【九七】眼如牛如月懷（Abhinīlanetra gopakṣmā 眼色紺靑而眼睫如牛王）。牛王の如くに目睫が甘いこと。如月は隨相六十四眉如初月に當る。

何を以てか[九一]牙齒齊平度無極に六事ありと謂ふや？　下齒齊平にして以て邪傾せず。是れ布施の報なり。上下柔澤にして悉く以て缺なし。是れ持戒の報なり。次第合緻して間に所受なし。是れ忍辱の報なり。其の齒備平にして亦高下なし。是れ精進の報なり。齒毀損せず、堅固强好なり。是れ一心の報なり。下齒正上・上齒正下・安隱牢固として、見る者歡ばざるなし。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[九二]四十齒度無極報に六事ありと謂ふや。其の四十齒具足して悉く平正にして減ぜず。是れ布施の報なり。齒邪傾せず、正齊にして水の如し。是れ持戒の報なり。齒妙殊特にして衆と同じからず。是れ忍辱の報なり。其齒通利して、間に所礙なく、等しく定まつて踈ならず。是れ精進の報なり。齒、吉祥を生じて、見る者不利なし。是れ一心の報なり。齒甚だ堅固にして動搖すべからず、人意を悅ばすべし。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[九三]廣長舌報度無極に六事ありと謂ふや？　菩薩たりし時、耳に經典を聽き、擇んで至言を說く。是れ布施の報なり。舌上の垢を去つて、乃ち佛語を傳へ、淨口をもつて義を宣ぶ。是れ持戒の報なり。口に平均を說いて偏黨をなさず。是れ忍辱の報なり。舌極めて廣長にして色蓮華の如く、光明赫赫たり。是れ精進の報なり。其の相、生の妙にして各各別異なり。是れ一心の報なり。舌は百葉の如く、光色奇好にして、晃昱遠く燿く。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[九四]梵聲報度無極に六事ありと謂ふや？　菩薩道を行じて經典を頒宣し、高く唱音を擧げて衆人に聞かしむ。了了として疑なし。是れ布施の報なり。音響愛すべく、聞いて喜ばざるなし。是れ持戒の報なり。若干品音の宣ぶる所、各ゝ解を得る。是れ忍辱の報なり。未曾有の音和して逮ぶべからず。是れ精進の報なり。音常に和調に、言辭安隱にして斷絕せず。是れ一心の報なり。一切の音好哀合し和雅にして、衆の人心を動かす。是れ智慧の報なり。是を六となす。』

【九一】牙齒齊平（Samadanta 齒齊密）。齒並びの並つてゐること。

【九二】四十齒（Catvāriṃśad-danta 四十齒具足）。齒が四十本あること。

【九三】廣長舌（Prabhūtajihva 廣長舌、舌覆面至髮際）。舌の長きこと。之は佛の說法に關連して重要にされてゐる。

【九四】梵聲（Brahmasvara 聲如梵王）。梵天の如くに聲のいゝこと。

是れ布施の報なり。獨立端然として能く牽制するものなく、常に自在を得。是れ持戒の報なり。善く處所を分別し、安に至つて禍難なし。是れ忍辱の報なり。以て身齊正にして、肢體漸く膞なり。是れ精進の報なり。威光巍巍として頂相を見るなし。是れ一心の報なり。一切衆生目に觀る所仰いで愛敬せざるなし、是智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[八八]腦合充滿度無極に六事ありと謂ふや？　以て漸く覺滿ちて功德成就す。是れ布施の報なり。心諦らかに堅住して常に和安を懷く。是れ持戒の報なり。淨きこと明珠の如く、自ら焰なる者、是れ忍辱の報なり。若し平等を以て行を興治し、懈廢あるなし。是れ精進の報なり。身口柔和にして其の心も安隱なり。是れ一心の報なり。和潤にして毀つなく、能く壞る者なし。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[八九]鉤鎖度無極に六事ありと謂ふや？　衆の求者を見て、常に和して悅豫す。是れ布施の報なり。漸く覺悅を以て衆の不逵を消す、是持戒の報なり。其の德各各にして若干は普く同じ。善相依り道法に因つて行を成ず。是れ忍辱の報なり。若し所說あれば、皆共に默然として、悉く和し等受して、適ゝ奉行を見る。是れ精進の報なり。其の光紺青にして煌煌として遠きを照す。是れ一心の報なり。若し世間一切衆生を縛する所の衆厄を自ら解脫するを得しめ、厭き足るなきを見る。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[九〇]牙齒白淨度無極に六事ありと謂ふや？　齒極めて白淨に、編合して疏ならず。是れ布施の報なり。柔潤白好にして黠汚なし。是れ持戒の報なり。以て次第に順じて猶ほ白蓮華の如く、平等安隱なり。是れ忍辱の報なり。齒堅く白好にして雜黑なし。是れ精進の報なり。施す所、弘安を建立して危きことなし。是れ一心の報なり。身以て潤澤に柔輭光光として其の明曜を覩て、未だ曾て厭足せず。是れ智慧の報なり。是を六となす。

【八八】腦合充滿。之に相當する三十二相、普通なし。隨相中二十四、具足相に該當するか？

【八九】鉤鎖。之に相當するもの、普通三十二相の內になし。相好、隨相中に見當らず。

【九〇】牙齒白淨(Suśukladanta 齒白淨)。齒の白く淨きこと。

何を以てか[八三]紫金色度無極に六事ありと謂ふや？ 其の色、火中の金の如し。是れ布施の報なり。其は柔潤色にして塵穢をなさず。是れ持戒の報なり。淸淨にして瑕なく色日月を喩ゆ。是れ忍辱の報なり。其の光[八四]晃昱として遠近を照す。是れ精進の報なり。垢塵なくして以て淸明をなす。是れ一心の報なり。其の光柔く妙にて、色和燿として好し。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか師子胸臆度無極に六事ありと謂ふや？ 其の身漸く滿にして缺減せず。是れ布施の報なり。身盛んにして妙好に、巍巍たる德あり。是れ持戒の報なり。身、堅强を以て能く犯す者なし。是れを忍辱の報と曰ふ。衆の觀仰する所、視れども厭足するなし。是れ精進の報なり。其の身弘廣にして難逮の如し、是を一心の報と曰ふ。身能く壞つ者なく、堅きこと金剛の如し。是を智慧報と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[八五]常善次度無極に六事ありと謂ふや？ 其の身の所行具足し充滿す。是れを布施の報と曰ふ。尊きこと逮ぶべからず、吉祥を以て滿つ。是を持戒の報と曰ふ。端正絕好にして、見るものあれば樂喜す。是れ忍辱の報なり。其の行德の業、平等に滿つる者なり。是を精進の報と曰ふ。其の相好を計るに、色雜珍師工の作れる好畫の如し。是を一心の報と曰ふ。柔潤の光明、淸淨にして瑕なし。是れを智慧の報と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[八六]長臂報度無極に六事ありと謂ふや？ 其の身香勳じて斷絕なく、普く一切に聞ゆ。是を布施の報と曰ふ。直に正安に住して動かすべからず。是れ持戒の報なり。和順庠序にして堅固として起たず、其の心和調なり。是れ忍辱の報なり。若し自ら致すに其の臂長姝にして、衆と超異す。是れ精進の報なり。行步庠序として、臂長くして膝を出づ。天人の奉ずる所なり。是れ一心の報なり。現身柔潤にして光明赫赫として一切を照す。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[八七]膅髀度無極に六事ありと謂ふや？ 身の髀膅順雅にして好く、心慈に志和かなり。

【八三】紫金色。三十二相中になし。普通八十隨好に數へらる。

【八四】晃昱。晃、あきらか、光ること。昱、あきらか、ひかり。

【八五】常善次。普通の三十二相になし。その內容より考ふるに、隨相中、十六、行相美妙、十七、不正邪、二十六、行步正直に當るか。

【八六】長臂（Sthitānavanaṃpralambabahutā 正立不屈二手過膝）に當るか。普通長臂（dīrghabāhu）は臂長きこと、卽ち英雄にいふ。

【八七】膅髀。髀ひ、五臟の一、胃の下にある消化器。之に當る三十二相、普通なし。

是持戒の報なり。手足肅好にして進退せず、皆宜しく常あるべし。是れ忍辱の報なり。宜ければ則ち仁慈にして行歩に足を擧げ、安和庠序として亦卒暴ならず。是れ精進の報なり。蓋し修く平正にして亦偏邪なし、常に行じて寂然たり。是れ一心の報なり。覩る者悉く歡び、光像分明なり。是れ智慧の報なり。是れを六となす。

何を以てか〔八〇〕寂藏度無極に六事ありと謂ふや？ 其の寂藏安和にして、光色赫燿として、體を現さず。是れ布施の報なり。其の寂にして以て清く、一切を潤澤して皆蒙荷せしむ、是れ持戒の報なり。其の毛は右旋し、各齊正にして邪行せず。是れ忍辱の報なり。其の德は巍巍として至到する所にあつて化變して人を度す。是れ精進の報なり。其の光明を演じて照さゞる所なく、安隱する所多し。是れ一心の報なり。他人をして瑞應懷來し、無上の聖明を見せしむ。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか〔八一〕臍深度無極に六事ありと謂ふや？ 其の行日日に進んで稍ゝ玄深に至り、乃ち大道に志す。是れ布施の報なり。其の威神の德淡然として畏るゝことなく、心に難を懷かず。是れ持戒の報なり。其の柔潤を奉じて深く平和に至る。是れ忍辱の報なり。其の行具行して以て恐怖せず。是れ精進の報なり。亦好華の如く、柔輭和安にして精專に迷はず。是れ一心の報なり。其の臍毀つなく、一切を長益して、行じて損減せず。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか〔八二〕毛一一生度無極に六事ありと謂ふや？ 其の毛、上に向き、右旋して淸正にして順理にて獨立す。是れ布施の報なり。其の髮紺色にして光明好なり。見るもの喜ばざるなし。是れ持戒の報なり。毛柔輭にして細く、滑澤晃然たり。是れ忍辱の報なり。其の色潤澤にして垢塵を受けず、是れ精進の報なり。毛色柔好にして各各右旋す。是れ一心の報なり。各各跱立して卒暴ならず。相切靡せずして各各濟正なり。是れ智慧の報なり。是を六となす。

【八〇】寂藏（Kaśagatavasti-guhya 陰藏如馬王）。男子の陽根が馬象の陽根の如く腹中に隱れるのをいふ。之は彫刻にて希臘藝術の影響にて、薄物を身にまとふた佛像を彫んだ。その折男根の形が外部よりほのかに伺はれる、之を象馬の陽根の腹中に隱れるのに連想し、佛の相好に取り入れたか。（高楠博士說）。初め陰藏如象王で、後に馬王に用ひられるに至つたのは、支那等では馬しか目にふれない爲であらう。

【八一】臍深。梵語不明、俱舍論等の三十二相になし。隨相三十七、臍深圓好に當るか。

【八二】毛一一生（Ekaikaroma-pradakṣiṇā-varta 身毛上生、靑色柔軟）。毛が一毛根から一本づゝ出でゝ、上にのびること。

何を以てか[七四]足下平度無極に六事ありと謂ふや？　若し足下平らかにして至る所難なく、足下に蹈む所の蟲蟻永く安らかなり。是を布施の報と曰ふ。其の足を擧ぐる時、心に瘡病なく、行くに法を犯さず、其の心仁和なり。是を持戒の報と曰ふ。若し足を擧ぐる時庠序安隱にして、性[七五]卒慌ならず、亦[七六]惶懅せず。是を精進の報と曰ふ。其の足を擧ぐる時、福弘曠を致す。猶ほ虛空の如く用ひて衆生を救ふ。是を一心の報と曰ふ。其の足底滿ち、功福熾盛にして邊際なし。是を智慧の報と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[七七]長指度無極報に六事ありと謂ふや？　其の指長好なるは宿德の致す所、曲穢あるなし。是皆所施報應の功德なり。是を布施の報と曰ふ。其の指纖好にして漸く稍ゝ相應して邪亂ならず。宿命の行安らかなり。是を持戒の報と曰ふ。是の功德に應じて指長く順調にして、晃妙柔軟なり。是を忍辱の報と曰ふ。德行相應じて指長く微妙なり。漸く稍ゝ細滑にして麁なく、文理あり。是皆精進の報なり。指長く吉祥にして見る者悅然として吉利ならざるなし。此は皆一心の報なり。其の指光澤あり、隨次和順にして正齊にして亂れず。是智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[七八]手足縵中度無極に六事ありと謂ふや？　手足滿平にして縵中なるは、前世の時若し所施あれば滿足して之を與ふ。是れ布施の報なり。其の指平正にして建立安隱なり。不正あることなし。之を視れば心悅ぶ。是れ持戒の報なり。手足瑕なく、清淨にして極殊、本仁和を行へばなり。是れ忍辱の報なり。佛は手足紫金色にして塵土を受けず。往昔勤修して以て懈怠ならざればなり。是れ精進の報なり。手足柔軟にして麁惡なく、光澤甚だ好し。是れ一心の報なり。其の手足鮮かにして、赫赫として明好あり。衆と超異し、見て歡喜せざるなし。是れ智慧の報なり。是を六となす。

何を以てか[七九]膝平度無極に六事ありと謂ふや？　其の膝興正にして因つて稍ゝ轉上し、普く具さに異あり、德行殊絕にして、見るもの敬はざるなし。是布施の報なり。其の膝安和にして切摩せず。

【七四】第一に同じきか？

【七五】卒慌。慌、くらし。

【七六】惶懅。惶、おそる。懅、おそる、はづ。

【七七】長指（Dirghāṅguli 指纖長）。指、長く細し。

【七八】手足縵（Jālāvanaddha-hastapādatala 手足縵網）。手足の指間に水鳥の水搔きの如き薄膜のあるのをいふ。之は佛教美術より來り、佛像彫刻にて彫刻にて指の折れ落ちるのを防ぐ爲、材料を殘したのを、佛の相好に取り入れたらしいと。（高楠博士說）。

【七九】膝平？

より足を擧げ前行するも三昧を追慕す。是を布施の報と曰ふ。若し安らかなるを建立して衆人を勸化し、更に惱害せず、終始恚なし。是を持戒の報と曰ふ。一切の衆人は動搖する能はず。心に恨意を起さずして和顏悅色す。是を忍辱の報と曰ふ。立つ所、其の意開士の法を奉じ、以て勞あらずして徑を前んで退かず。是を精進の報と曰ふ。無上正眞を顯發し慕樂して、衆生をして安からしめ、敷演して禪思す。是を一心の報と曰ふ。其の報應所生の處を說いて、常に諸佛を見て大道を諮受す。是を智慧の報と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[七二]來千輪度無極に六事ありと謂ふや？　若し衆物の所有・若干種輪を致來し、布施を持用して千輻相の報を致す。是を布施の報と曰ふ。若し各各奇異殊特好妙の顏色を以て、身、其の中にあつて破壞する所なし。是を持戒の報と曰ふ。若し異品若干の種香を生じて、心は以て著せず、增減する意なし。是を忍辱の報と曰ふ。其の勤修する者は其の志を堅持す。術師あり、大瓶を執持し、若し浮筏に因つて輕浮して江を渡り、及び眷屬を安んずるが如し。是を精進の報と曰ふ。若し光明を演べて普く遠近を耀かし、十方に通じて由つて自在を得る。是を一心の報と曰ふ。若し大光を振つて一切に蒙荷し、悉く聖明を得て衆冥を消索する。是を智慧の報と曰ふ。是を六となす。

何を以てか[七三]肌輭細度無極に六事ありと謂ふや？　若し書文字斯く恬怕に非ず、以て用ひて一切衆上を開化し、示すに罪福を以てす。是を布施の報と曰ふ。其の言敎に依つて眞正を奉仰し、虛僞を爲さず、而も義を懷來す。是を持戒の報と曰ふ。衆德の本を具足するを以て、妙神明を來して心に滅を起さず、是を忍辱の報と曰ふ。若し諦らかに衆惡の瑕を超越して、衆の開士來つて相化道するを致す。是を精進の報と曰ふ。恚恨なく功勳を獲致し、和顏悅色して踊躍法に存し心に所著なし、是を一心の報と曰ふ。生死にあつて所生安和にして、衆の愚冥を化す。是を智慧の報と曰ふ。是を六となす。」

【七二】　來千輪（Cakravikita-hastapādatala 手足具千輻輪）。平足の掌に車輪の輪の印あること。

【七三】　肌輭細（Sūkṣmasuvarṇacchavih 皮膚細滑）。肌のきめのやわらかく、滑かなこと。

を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか眷屬親里度無極に六事ありと謂ふや？　若し所救を以て道の法を勸化し、出家を愛樂して志放捨に存す。是を布施と曰ふ。其れ謹愼を以て哀愍を奉順し、所有の子孫に義理を開示し、示敎を頒宣す。是を持戒と曰ふ。其の行仁和にして至る所惱熱し、計る可らざる衆を敎訓し開導す。是の如くして厭ふなし。是を忍辱と曰ふ。其れ勤めて修行し、志存して法を聞き、不逹の者を見ては而も爲に敷演して各〻心をして解かしむ。是を精進と曰ふ。禪思する所以に衆生を助合し、之に罪福を示し、化して亂れしめず。猶ほ往古　六八善目轉輪聖王の如し。是を一心と曰ふ。聖明を將護して、二俱に同黨す、若し能く自制して貪欲を犯さず、救護を以て說法を頒宣して衆人を建立す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか心無所亡度無極に六事ありと謂ふや？　自ら能く心を伏して邪見に隨はず、塹難を出で、貧危に隨はず。是を布施の報と曰ふ。遵行すべき所の衆禁を具足し、三寶を斷ぜず、道敎を興隆し、衆の不逮を化す。是を禁戒の報と曰ふ。云ふ所の仁和は安らかに柔心を行じて、身、苦に遭ふと雖も博聞に由るが故に能く衆患を忍ぶ。猶ほ　六九須賴人來り毒を加ふるも心恨みざるが如し。是を忍辱の報と曰ふ。若し勤修行を以て自ら其の心を伏し、懈中を超出して他人を將護し、危厄ならざらしめ、長く安隱を致す。是を精進の報と曰ふ。其の禪思を以て放恣を棄捨し、奉じて貪欲ならず、寂定を恨みず。是を一心の報と曰ふ。其れ聖明を以て威儀禮節の法を宿止し、心に依倚する所諸利を供養し加ふるに法施を以て衆の盲冥を度す、是を智慧の報と曰ふ。是を六となす。』

七〇 三十二相品第十一

佛、喜王菩薩に告げたまはく、『何を以てか　七一諦住安平止度無極に六事ありと謂ふや？　遍く平地

【六八】　善目（又は耳）轉輪聖王、出典事蹟見當らず。

【六九】　須賴人。前出。

【七〇】　三十二相（Dvātriṃśat-Lakṣaṇa）。相好については數回之を述べた。

三十二相は過去世に於て修業した果として得たものであると說明する。今夫々の三十二相の個々が如何なる修業によつて得られたかを說明す。

以下三十二相の項に擧げる術語は諸傳異るにより必ずしも後漢譯に適切なるものにあらず。こゝに出す梵語は俱舍論（Abhidharmakoṣa-vyākhyā）及び龍樹の法集（Dharma-saṃgraha p. 18 Oxford, 1885）本經に出づるものは普通の相好中の重大なるものを多く缺き、同じものを重複させ、普通隨相に數へるものを、三十二相中に採用すること多し。三十二一々について見られよ。要するに、本經の三十二相は一般のものと一致せぬもの多し。

【七一】　諦住安平止（Supratiṣṭhitapāda 足下安平）。足の平の安平なのをいふ。今の偏平足である。

何を以てか周施度無極に六事ありと謂ふや？　多く財業あり、加ふる所、慈を以てし、害を懷かず。是を布施と曰ふ。謹愼すべき所、諛諂を抱かず、自ら己を顯す。是を持戒と曰ふ。其の性仁和にして、所作の功德以て厭となさず、宮殿を放捨し、食愛する所なく、時に隨つて惠施す。是を忍辱と曰ふ。精勤する故に平等法を奉じて放逸ならず、是を精進と曰ふ。若し禪思を以て迴還して不可法に墮さず、默然として淡白なり。是を一心と曰ふ。若し聖明を以て一切法を立て、堅住して動かず、聲聞・緣覺の法を落さず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか滅度度無極に六事ありと謂ふや？　若し餓鬼となつて慳貪を行はず、苦の衆生を見て、之を愍傷す。是を布施と曰ふ。心に衆生罣礙の業を見、是を慈愛して、示すに無蔽を以てす。是を持戒と曰ふ。所行仁和にして地獄の苦を聞き、惡形色を覩、益々四等を用ひて之を哀愍す。是を忍辱と曰ふ。奉ずる所を謹修して諸の邪見を斷ち、多く慈哀を懷く。猶ほ昔、阿育王の子、名は[六五]鳩那羅が、諸婇女を棄てて、辱しめを受けて怨まざるが如し。是を精進と曰ふ。若し[六六]禪脫門に入つて此の寂靜を樂しむ。猶ほ昔菩薩、閻浮樹に坐して、道德巍巍として、影其の身を覆ふが如し。是を一心と曰ふ。若し聖明を以て淫怒癡を滅す。王、國を棄て、家を出で道をなし、衣毛爲に竪ち、衆黠啼哭して以て顧戀せざるが如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか豪貴度無極に六事ありと謂ふや？　其の所聞以て能く情を割き、珍ぶ所の愛寶を惠んで福を與ふると作す。是を布施と曰ふ。奉修謹愼して而も自大ならず。謙下供順して三寶の佛法聖衆を奉敬す。是を持戒と曰ふ。名稱を求めず、世榮を慕はず、唯法を上となす、是を忍辱と曰ふ。所遵勤修して尊長・父母・師友に奉事す。是を精進と曰ふ。禪思する所以に衆生を開化し、猶ほ往古の[六七]拘修摩王、太子あり、救濟する所多く、往來周施して至法を奉行し、本性淸淨にして、未だ曾て害を抱かざるが如し。是を一心と曰ふ。出家の學を以て智度無極を求め、精進して聖明あり。是

【六五】鳩那羅(Kunāla)、阿育王(Aśoka)の子、眼愛す可く、鳩那羅(好眼鳥)に似たるを以て名く。太子は正后の生む所で、容貌甚だ美であつた。正后沒して繼室憍染にて、私に太子に迫つた。太子は泣いて退けた。繼母は之を恨み、阿育王を說いて太子を出して咀叉始羅國(Takṣaśila)を鎭せしめた。繼母は後に王命をかたつて、太子を責め、兩眼を抉つて野に放たしめた。太子は既に明を失ひ、流離して父の都城に至り、夜箜篌を鼓して悲吟した。王は其の聲を聞いて太子たるを疑ひ、盲人を引具して之を問ふた。太子は悲泣して實を告げた。王はその繼室の所爲なるを知つて、之に嚴罪を加へ、太子を導いて、菩提樹伽藍の瞿沙阿羅漢(Ghoṣa)の下に詣り、其の法力を乞ふて盲を醫した。(阿育王經四、阿育王息壞目因緣經、西域記三、經律異相三十三)。

【六六】禪脫門。禪門の意か。然らば、禪定の法門のこと。三學の內の定學、六波羅蜜の中の禪波羅蜜をいふ。心を一に定めて妄念を除く法である。

【六七】拘修摩王とその太子の事蹟出典、匆々にして見當らず。

を布施と曰ふ。而も罣礙なく、陰蓋の心なく、心念を謹愼す。是を持戒と曰ふ。志性仁和にして諸の怨家を見、念ずること赤子の如く、毒害を懷かず。是を忍辱と曰ふ。神通を具足して內外蔽なく、十方を覩化して中ごろ懈廢せず。是を精進と曰ふ。若し淨修行して天眼を嚴治し、一切の五趣生死を見る。是を一心と曰ふ。若し無數世に其の心を柔和にし、言辭和雅にして聖慧を分別す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか宣誓度無極に六事ありと謂ふや？　報應の德を以て衆生を勸助し、功德を受くるを得しむ。是を布施と曰ふ。謹愼する所の行は諸の罣礙を消し、而も結滯なし。是を持戒と曰ふ。所著なく以て聞くを爲さず、響は悉く空なるを了し、仁和を興發す。是を忍辱と曰ふ。所志勤修して日日增進し、未曾有に至つて無上道に入る。是を精進と曰ふ。若し四等の慈悲喜護を以て一切迷惑の衆を護る、是を一心と曰ふ。聖明の衆生、不可を患厭し、柔順法を奉じて乃至賢和す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無放逸度無極に六事ありと謂ふや？　施與する所あり道德を勸助し、俗業を與へず。是を布施と曰ふ。若し眷屬贏くして奉行の業を護り、其れ人有つて來つて[六三]節節に之を解するも毒心を生ぜず、道法を慈勸し、射獵師の如く心に怨結を懷く。若し人あつて節節に之を解するに獵師心悅んで以て害を抱かず。是を持戒と曰ふ。若し仁和を以て善き義理を宣べ、之を火に投じて其の身を危くせんと欲するも、以て結を懷かず。是を忍辱と曰ふ。勤修する所以に滅度に竟至し、有爲を觀ずること火の熾然たるが如く、之を消すに法を以てす。是を精進と曰ふ。所謂禪思によつて一切塵を除き、獨り一處に樂しむ。若し戒法を以て衆人の愚を救ふ。是を一心と曰ふ。慧に所樂なく、其の心を等しくす。猶ほ國王子の土地を施し、得て、[六四]其を無罪ならしめて、勢力あるが如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【六三】支肢の節節を切り去るをいふ。

【六四】事蹟不明瞭。

水を能く受くるあり、所有究竟して始めより終りに至る。若し伴行する者あれば、井中の魚の如し。是を忍辱と曰ふ。所謂勤修して多く衆人を護り、婬怒癡を除く。猶ほ海中の明月珠藏、時に隨つて消水するが如し。是を精進と曰ふ。所行の禪思、阿離念の如く、外の異術を學んで、多く衆生を愍んで之を勸化して梵天に生ぜしむ。是を一心と曰ふ。聲明を遵修して愍傷する所多し。猶ほ須菩提の如し。異人鹿王を收捕するあるを見、五百の衆眷、窮厄に閉在せるも、悉く之を解脫す。乃ち天下を化して一切衆生に十善を建立せしむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか不壞眷屬度無極に六事ありと謂ふや？　若し兩舌を捨てゝ、言常に至誠にして福を鬪亂せず。是を布施と曰ふ。常に慈心を懷きて危害を抱かず、名遠く聞ゆるによつて敬愛せざるなし。是を持戒と曰ふ。云ふ所の仁和は常に〔六一〕等心あり、衆生を慈愍して偏黨せず。是を忍辱と曰ふ。精修する所以に衣食を以てせず、衆生を開化するに唯道法を以てす。是を精進と曰ふ。其の志、禪思にあつて、總持辯才無量を逮得する。是を一心と曰ふ。聖明の所以に執持解脫して、諸の〔六二〕結縛を解いて罣礙なからしむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか除塵來淨度無極に六事ありと謂ふや？　若し損耗あるも功德を增さしめ、諸の疾疫を療して普く安隱ならしむ。是を布施と曰ふ。若し蔽礙にあつて自ら濟ふこと能はざれば、救護を作さんが爲、心をして開化せしむ。是を持戒と曰ふ。若し師父尊長の罵詈あるも、恭敬歸命して瞋恨を抱かず。是を忍辱と曰ふ。其の勤修する所、胎にあつて心正しく、衆の病疾を治して、諸の比丘・比丘尼・淸信士・淸信女を開化す。是を精進と曰ふ。若し母疾病あれば、瞻視し給使し、諸の乏しかる可き醫藥・飮食を與ふ。是を一心と曰ふ。若し聖明を以て無數衆の爲に孤疑を決し、各開達を得て無上眞を奉ず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか觀土度無極に六事ありと謂ふや？　常に仁慈を抱いて害眼を以て衆人を加視せず。是

め、わざわひ。

〔六一〕等心。四等心と同じ、慈悲喜捨の四無量心をいふ。詳しくは前出。

〔六二〕結縛(Bandhana)。煩惱の異名。衆生を繋縛して解脫に向はせぬ故にかくいふ。

た衆難なし。是を布施と曰ふ。謹愼の所以に道法[五九]八正の業を慕求し、平等慧に到る。是を持戒と曰ふ。所念仁和にして道義を疑はす、羅網を決壞す。是を忍辱と曰ふ。所行勤修して現在の法に於て永く安隱を得る。是を精進と曰ふ。所謂禪思によつて本行を精進し、滅寂正受す。是を一心と曰ふ。其の聖明の所作に遵ひ、已に辯じて四意止を受く。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか淨俗度無極に六事ありと謂ふや？ 其の所行を以て三千世界を救ひ、始めより終りに至るまで異心有ることなし。是を布施と曰ふ。始生より來、普く一切の周旋往來の三界の衆生を安んず。是を持戒と曰ふ。發意以來羣黎を敎化して無所至に至り、處所なからしむ。是を忍辱と曰ふ。三千世界の一切の衆生をして、精進して滅度せしむ。猶ほ初發意の出家の學の如し。故に其の心當り難し。是を精進と曰ふ。所謂禪思とは諸の衆生をして其の意を攝するを得しめ、專ら經法を惟ふて放逸せず。是を一心と曰ふ。其の聖明を以て地獄に至り、危厄を救濟し、適〻生れて地に墮つ。口に宣ぶる所あり、經道を論講して法典を逮得す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか成種度無極に六事ありと謂ふや？ 其の所救の者眷屬を致し、和して無極の大財あり。是を布施と曰ふ。謹修する所の行により眷屬和を致して而も罪殃[六〇]なし。是を持戒と曰ふ。所修の仁和によつて若干眷屬、各各自ら安んじて能く壞る者なし。是を忍辱と曰ふ。若し勤修あれば、所有の眷屬をして自恣放逸の行あらしめず、各々業を辦へて意を用ひて廢せず。是を精進と曰ふ。所遵の禪思あつて若し瞋諍あるも皆和合せしめ、眷屬を致明にす。是を一心と曰ふ。所修の聖明により一切の眷屬皆智明あつて闇蔽なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか來成眷屬度無極に六事ありと謂ふや？ 五百歲に於て開化勸誨し、諸の大衆會に道心を起さしむ。是を布施と曰ふ。所奉謹愼して勸めて和し合同し、無數の衆人以て諍ひをなさず、佛の眷屬の如し。是を持戒と曰ふ。其の仁和する所無央數衆生の藏と爲る。猶ほ昔摩竭の一大魚の海

るのであらうが、人名其等なく、探索し得ず。

【五五】 迷憒。憒、心亂る。

【五六】 勢首太子。事蹟出典不明。

【五七】 六住地。菩薩十地の第六地。三乘三共十地では離欲地、欲界九品の修惑を斷盡せし位にて、卽ち藏敎の不還果である。大乘菩薩十地では現前地。慧波羅蜜を成就し、修惑を斷じて最勝智を發し、染淨の差別のないのを現前せしめる故に現前地といふ。

【五八】 柔順法忍。三忍中の柔順忍は慧心柔順にして能く眞理に隨順するものである。五忍中の順忍は四地より六地の間にて菩提の道に順じて無生の果に趣向する位に名ける。

【五九】 八正の業。八正とは八正道をいふ。具さには八正道支、八聖道支(俱舍論)、其の道偏邪を離るれば正道といひ、又聖者の道であるから、聖道といふ。一、正見(Samyakdṛṣṭi)・二、正思惟(Samyaksaṃkalpa)・三、正語(Samyagvāc)・四、正業(Samyakkarmānta)・五、正命(Samyagājīva)・六、正精進(Samyagvyāyāma)・七、正念(Samyaksmṛti)・八、正定(Samyaksamādhi)之である。

【六〇】 罪殃。殃、とが、とが

いて導師となり、五億人を護つて一心に宿衞するが如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか不迴還度無極に六事ありと謂ふや？ 既に所濟あつて聲聞・緣覺の業を樂まず、無上正眞の道を求むるを願ふ。是を布施と曰ふ。所奉謹愼して至義を觀じて懈廢せず。是を持戒と曰ふ。所遵の仁和能く暢べて究竟し、中ごろ懷恨せず。是を忍辱と曰ふ。所行遵修して權方便を執り、救濟する所あつて放逸ならしむ。是を精進と曰ふ。所修の禪定、章句を顯明にして[五五]迷憒せず。是を一心と曰ふ。所謂聖明、七住不退轉地に至るを得。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか爲、娛樂度無極に六事ありと謂ふや？ 給與する所あり以て化し難き衆を開いて道意を發さしむ。是を布施と曰ふ、以て將養を行ひ、佛興世の時、其の報應を說いて之を度脫す。猶ほ往古太子[五六]勢首の衆の危厄を救ふが如し。是を持戒と曰ふ。所修仁和にして功勳ある國王の萬民を安和するが如く、是の如く身を安んじ亦他人を安んず。一切適安にして我身も亦安し。是を忍辱と曰ふ。所進勤修して總持を逮得し、辯才無量なり。是を精進と曰ふ。所習の禪定を以て用ひて勸助し、是の功德の報として衆生を安からしむ。是を一心と曰ふ。其の聖明を以て[五七]六住地にあり、[五八]柔順法忍より不退轉に至る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか鮮潔度無極に六事ありと謂ふや？ 若し所與あつて依倚する所なく、亦相報を衆生に加へず。是を布施と曰ふ。所修謹愼して常に篤信を懷き、七覺を懷來して諸の不覺を覺る。是を持戒と曰ふ。所修仁和にして衆生を慈念し、其の身を貪らず、又命を惜しまず。是を忍辱と曰ふ。所志勤修して諸法を選擇し、至行を合會して諸の覺意を致す。是を精進と曰ふ。若し禪思を以て想念する所なく、而も放逸ならず。是を一心と曰ふ。聖明の所以に佛道を得て、一切を度するを致す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか成世法度無極に六事ありと謂ふや？ 若し所濟を以て報應無數にして永安を致し、復

惑を斷じて無相觀を作し、任運無功用に相續するが故に不動地といふ。三乘共十地に於ける八地は支佛地であつて、緣覺の位であつて、三界の見思二惑を斷じた上、更に其の二惑の習氣を侵害して空觀に入るのである。侵は斷ではない。斷とは炭を燒いて灰となし地上、尙その灰を吹いて之を散じ盡す如くである。是は第十地佛地の事であつて、今緣覺の習氣では炭を燒いて灰となす丈に止るので、侵といふのであると。緣覺は初地から此に至つて入證する。緣覺の梵語は辟支佛 (Pratyeka-buddha)であるので、支佛地といふのであると。

[四九] 兜術天(Tuṣita)。前出。

[五〇] 須賴太子。佛敎說話に多く出る著名な人名、須賴の事蹟を記する須賴經に二譯あり、一は曹魏の白延譯。一は前涼の支施倫譯。共に一卷(地帙十一)。

[五一] 黿。おほすつぽん(大鼈)。鼉、形蜥蜴に似、長さ丈餘、其の甲は鎧の如く、皮は堅厚にして鼓を張るべしと。海蛇。この說話の事蹟出典不明。

[五二] 人名なく、事蹟不明。

[五三] 閻浮提(Jambudvipa)。前出。

[五四] 何等かの譬喩譚に出づ

何を以てか光明度無極に六事ありと謂ふや？　若し華香を以て飾らず、諸佛菩薩に貢上す。是を布施と曰ふ。謹愼する所の行、他人を愍傷す、猶ほ飛鳥空に飛び去つて慕樂する所なきが如し。是を持戒と曰ふ。所志仁和にして一切空を解し、以て法藏に逮ぶ。是を忍辱と曰ふ。勤力の橋梁を以て危難を救濟する、是を精進と曰ふ。所思の禪定、[四五]往古の劫の如く、始初め菩薩の奉行する所、深く道行に入る。是を一心と曰ふ。所修の聖明、[四六]法忍を興發し、[四七]雨童子の如く心を執ること地の如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無量光度無極に六事ありと謂ふや？　善權方便して濟ふ所あり。因つて以て佛の大光明を報致して、無數の諸佛國土に周遍す。是を布施と曰ふ。所奉勤修して不起法忍を勸助し逮得す。是を持戒と曰ふ。其の仁和の者、法相を勸助して所著するなし。是を忍辱と曰ふ。精修すべき所、空法を奉行して大道を勸助し、此の空無に歸す。是を精進と曰ふ。禪定する所以は衆生を助化し、常に懈廢せず、不退轉ならしむるにあり。是を一心と曰ふ。所修の聖明は[四八]第八地に住し、勸化する所にあつて、蒙荷せざるなし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか報安光度無極に六事ありと謂ふや？　若し魔徑に至り、壽終る時に臨んで、其の功報應す。猶ほ[四九]兜術天忽ち沒して來り下り、餓鬼を開化して其の危厄を除くが如し。是を布施と曰ふ。魔徑を降服して所奉を愍哀し、身縛を放捨して又罪厄を脱す。猶ほ往古の國王太子、名を[五〇]須賴と曰ふものの、苦患を脱する所の如し。是を持戒と曰ふ。其の仁和を行じて魚中にあり、諸の[五一]黿鼉を安んじて隱樂して食を得。是を忍辱と曰ふ。所勤を修行して諸王女等、危厄・艱難を恐懼するあり。愍傷して之を濟ふ。是を精進と曰ふ。所修禪思して疾疫の劫にあつては藥を以て之を療す。猶ほ往古の[五二]童子の所作長く益し、五頭首を以て[五三]閻浮提諸非の邪惡を救ふが如し。是を一心と曰ふ。此の聖明を以て一切を救濟す。猶ほ[五四]往古の喩に五百の賈客、五百の玉女及び諸玉女を以つて、就

不明。

【四三】　迦維羅衞（Kapilavastu）。佛陀生國の釋迦族の都城。印度東北部にあり。今尼波國境内にある。

【四四】　菩薩が前世に龜であつた時、花園に遊んで花屋に捕へられた。龜は身が汚れて花を汚すと述べて花屋に流で洗はせ、勇を鼓して、水中に逃れ去つた。Kacchapa-jātaka（大事二・二四四―）、之と異るか？

【四五】　往古の劫。劫（Kalpa）、釋分別時節。通常の年月日時を以つて算し能はざる遠大の時節を分別する稱である。故に大時と譯す。靜かなることを往古のマヌ（manu）王の期の劫の如しといふ。平等通昭譯著「佛陀の生涯」二・一五、一九頁參照。

【四六】　法忍。二忍に於ける法忍に二あり。一、非心法の寒熱風雨飢渇老病死等に於て能く忍んで惱怨せざるをいふ。二、心法の瞋恚憂愁等の諸煩惱に於て能く忍んで厭棄しないのをいふ。前に詳述せり。

【四七】　雨童子（Varṣa?）。事蹟出典不明。

【四八】　第八地。菩薩十地の第八地をいふ。十地（住）については前述。第八地は不動地である。願波羅蜜を成就して修

棄て、三寶に供養す。是を精進と曰ふ。所修の禪定、[三八]佛樹下にあり、頌偈を宣歎して法觀を遵承するに、此の行護を以てす。是を一心と曰ふ。所遵の聖明は道慧を論ぜず、猶ほ海中の[三九]舍和樹葉香美にして病を療するが如し。菩薩も是の如く、道德の香を以て一切を化して大道心を起さしむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無樂度無極に六事ありと謂ふや？　所濟の衆生、猶ほ滅度あるが如し。譬へば賢者、名を[四〇]漢林と曰ふものの如し、衆の迷惑を度するが故に、當に菩薩の本行此の宿所の喩を曉知すべし。是を布施と曰ふ。其の禁無量にして衆難を患厭して無爲を志願す。猶ほ往古の菩薩の所行、精進して海に入つて、無量の寶を致すが如し。故に[四一]譬喩を引く。是を持戒と曰ふ。其の仁和の行たるや、昔[四二]迦夷王、其の頭及び鼻手足を截るも瞋恚を懷かざるが如し。是を忍辱と曰ふ。若し勤めて修行し、[四三]迦維羅衞を出づるも見る者あるなし。平等に山に入つて佛を得る所以なり。是を精進と曰ふ。禪思する所以に四品具足し、淨修梵行慈悲喜護あり。是を一心と曰ふ。猶ほ智慧度無極を以て其れを成ずるも、亦致し難く、世にあつて正受し、心常に等定す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか時進度無極に六事ありと謂ふや？　若し止處を得て次第に窮厄者を惠み救ふ。是を布施と曰ふ。所行謹愼すること[四四]生鼈中の如し。其の鼈王たりし時、已の身を將護し、又他人を濟ふ。是を持戒と曰ふ。所志に和にして衆行に親近し、身口を歸護す。猶ほ人の賢き所行の如く慈忍し、其の諸節を斷つて傷害を抱かず。是を忍辱と曰ふ。所修精勤す。佛の興世の時に所在に佛を見るに、如來平等に其の三昧印は一切行に於て三千歲、未だ曾て休懈せず。是を精進と曰ふ。曰ふ所の禪思とは、中宮の妓婇女間にあつて常に淸白を修して放逸ならず。是を一心と曰ふ。智慧に順ずる時、生死に在つて在在至る所に諸我を將護し、無我を了せしむ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【三八】佛樹。菩提樹のことである。佛が此の樹下に成佛したので、佛樹とも道樹とも菩提樹とも言ふ。

【三九】舍和樹。不明。

【四〇】漢林。事蹟、出典不明。

【四一】譬喩。梵語 Avadāna, 巴利語 Apadāna.「宗教的又は道德的大行爲」或ひは「大行爲」を意味する。佛又は高弟の逸事の物語であつて、かゝる「大行爲は」自己の生命を犠牲にし、又は單に芳香花卉香料黃金寶石を供養し、精舍を建立しても成ぜられる。此等は普通「黑業は黑果を、白業は白果をもたらす」ことを示す爲に、業物語をなす。即ち現在の行爲が過去並に未來の行爲と如何に密接に關係してゐるかを示さんとするものである。譬喩は多く現在物語過去物語並に道德より成立する。撰集百線經(Avadāna-śataka)、天業譬喩 (Divyāvadāna)、阿育王譬喩(Aśokāvadāna)等は之の集成である。

【四二】迦夷(Kāśi)王。迦尸は恒河中流にある國、小國であるが、富裕である。その首都は有名な婆羅㮈斯(Vārāṇasī)であつて、印度政敎の中心である。佛陀初轉法輪の地鹿野園も此處にある。本生譚に出る迦尸王は甚だ多く、何人か

すること亦復た是の如し。是を持戒と曰ふ。所聞柔和なること猶ほ梵志の如く、來つて王を害せんを欲すれば、其の頭を取つて卽ち之を惠與す。是を忍辱と曰ふ。所修精進すること梵志子、名けて[三〇]思義と曰ふものの如し。五所欲を棄てて他人を救護し、勸めて之を度す。是を精進と曰ふ。其の禪思する所、[三一]阿離念(彌)が異學に在りて、弟子及び他人を救護するが如し。是を一心と曰ふ。聖明の事を以て無數百千の衆人を開化すること、猶ほ[三二]鳥王の救ふて反復なきが如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか衆報應度無極に六事ありと謂ふや？　若し世人を愍みて救濟する所あり。猶ほ[三三]離垢の衆を化して淨を行ふが如し。是を布施と曰ふ、所奉の至行によりて梵天に住し、[三四]閻浮利の人の爲に德本を造立して、法に入るを得しむ。是を持戒と曰ふ。所行の仁和を衆生に加へて身命を措まず。猶ほ海にあつて其の船の壞るゝを見、自ら其の身を殺して以て衆人を度するが如し。是を忍辱と曰ふ。所行の精進にて開化すること無數にして、成就する所多し。猶ほ導師、名けて[三五]福事と曰ふものの如し。海の衆寶を採つて以て窮匱を濟ふ。是を精進と曰ふ。禪思する所以に、他人を愍傷して勸助を行ふ。猶ほ童子、名を意義と曰ふものの如し。八萬歲に於て慈心を奉行し、用ひて衆生を安んず。是を一心と曰ふ。若し聖明を以て現世度世の智慧を了解し、是の智慧を以て虛空無を覺了す。[三六]須菩提の如く空を解して喩を識る。衆塵の樹葉悉く能く分別し、其の勸助する者、報應是に過ぐ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無報度無極に六事ありと謂ふや？　其の救濟する所、報應を受けず、乃至滅度す。猶ほ大蓋覆護する所あるが如し。菩薩の所修、是の如く無極にして[三七]江河沙の如き衆生、度を得。是を布施と曰ふ。所奉の法行の諸漏已に盡き、不退轉に至つて攝受普護す。是を持戒と曰ふ。所志仁和にして未だ曾て恨あらず、佛道を逮致す。是を忍辱と曰ふ。勤修する所以に身命と一切萬物を捨

【三〇】梵子思義。事蹟、明確ならず。不明。

【三一】阿離念(又は彌)。事蹟不明。異學とは外道の學を言ふ。

【三二】鳥王が獵師の罠より鳥を救つた本生話多し。大事(Mahāvastu)の第一鳥本生話(二・二四一―)、第二鳥本生話(Śakuntaka Jātaka)(二・二五〇―)、獵師は小屋を造り、移動して、その中より矢を射て鳥を殺した。鳥王(佛)は小屋の移動するのを怪み、獵師の奸計を觀破した。

【三三】離垢(Vimala?)。出典不明。

【三四】閻浮利(Jambudvipa)。印度世界にて須彌山の南方に當る大洲をいふ。卽ちこの我々の住む世界をいふ。中央に大なる閻浮樹(Jambu)あるを以てこの名あり。

【三五】福事。出典不明。

【三六】須菩提(Subhūti)。又須浮帝、須扶提に作る。善現、善業と譯し、又空生と稱す。十大弟子中、解空第一の人。佛此の人をして般若の空理を說かしむ。

【三七】江河沙。江や河の沙の意にも、又恒河(Gaṅgā)の沙の意にも取れる。恐らく後者なるべし。何れにしても數の多きことにいふ。

所志柔和にして本際に達して、正眞を興す。是を忍辱と曰ふ。奉行勤修し、色想に通達して所想なし。是を精進と曰ふ。禪思する所以は寂然なる定竟、乃至脫門なり。是を一心と曰ふ。聖明を遵承して總持を修持し、正行を觀じて淡泊地に住す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか入欲度無極に六事ありと謂ふや？　所濟あり、勢力を合集して以て怨家に給す。是を布施と曰ふ。所行羸劣にして次第して力に順つて大勢を建立する。是を持戒と曰ふ。其の柔和を以て諸陰蓋を消し、道義を奉修する、是を忍辱と曰ふ。若し怨心を斷つこと王太子の如くし、淸白を樂しむ。是を精進と曰ふ。若し常に禪思し、心に放逸せず、專ら唯定意のみあり。是を一心と曰ふ。聖明なる所以は惡趣・地獄・生死の難を度脫する所にあり。勤修精進す。猶ほ往古學の所行の如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか立度無極に六事ありと謂ふや？　仁行ある者、惡趣を救ひ、生死に誘在して超出するを得しむること、頂相の報の如し。是を布施と曰ふ。所奉の行者若し世に佛なきも、衆人を開化して各〻所を得しむ。猶ほ往昔[二七]摩調聖王の天下を慈化するが如し。是を持戒と曰ふ。仁和の故に瞋恚を起さず。羼提和の手足耳鼻を截り、恚心を生ぜざるが如し。是を忍辱と曰ふ。其の精勤を以て制持し難きも、終に噎滯せず、猶ほ海中の如意明珠の其の所求に從つて、輒ち所願を得るが如し。是を精進と曰ふ。所修の禪思中宮にあるが如く、貴人を開化して道意を發さしめ、超へて等倫なし。猶ほ師子太子の如く自在にして敎敕する所あれば、風の草を靡かすが如し。是を一心と曰ふ。若し聖明衆智境界に入れば、一切を悉く捨つ。能く人に惠與して所倖を斷ぜず。猶ほ[二八]古王の頭首の布施の如し、是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか應進度無極に六事ありと謂ふや？　所持の衣物を衆生に惠施すること、猶ほ[二九]鼈王の海に在つて厄を救ふが如し。是を布施と曰ふ。所奉の持法猶ほ師子の如く眷屬圍遶す。賈客を救濟

【二七】摩調聖王。轉輪聖王の名らしきも、不明。

【二八】長壽王は敵王に侵入されて、退位し、山中にのがる。敵王、王の首に懸賞を掛けて求む。王に布施を求めて、貧婆羅門來る。王は自首して斬首され、懸賞金を婆羅門に與ふ。かゝる本生話を言ふか？

【二九】鼈王とは、魚王摩竭(Matsya)を言ふか。マッヤの厄を救ひし例多し。

匱に給す。是を布施と曰ふ。道法を奉受し、其の身命を捨てて貪愛する所なし。是を持戒と曰ふ。正しく仁和を以て正法沒せんと欲す。菩薩發心して其の時宜に順ひて、自ら其の身を沒し、正法を愛護す。是を忍辱と曰ふ。若し以て勤修して總持を逮得し、恒に識つて忘れず。是を精進と曰ふ。若し禪思を以てして其の心十二緣起を體解して、所起なし。是を一心と曰ふ。若し智慧を以て諸所更歷して寂靜を遵修す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか出家不斷戒度無極に六事ありと謂ふや？　他人を濟ふ所、意の所願の如く、法師の命を奉行す。是を布施と曰ふ。所行の禁戒大哀に遵ひ、微恨あるなし。是を持戒と曰ふ。所志仁和にして危害を懷はず。謙下恭順にして自大ならず。是を忍辱と曰ふ。所奉勤修して强くして勢あり、怯弱を度さず。是を精進と曰ふ。志す所の禪思に志して七覺意を行じ、遠近に通じて達せざる所なし。是を一心と曰ふ。所志の智慧に因つて能く不起法忍を具足す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。』

神通品第十

佛、喜王菩薩に告げたまはく、『何を以つてか住神通度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施あり、重財に至るも、貪悋を以てせず。道法を奉じて眞教を受く。是を布施と曰ふ。行に所著するなく、邪正に倚らず、大道に志す。是を持戒と曰ふ。其の仁和を以て狐疑を懷かず、永く猶豫するなし。是を忍辱と曰ふ。志、勤修にあつて弘聖を建立して、本願に違はず。是を精進と曰ふ。禪思する所以は光明を照す所、遠近に通ず。是を一心と曰ふ。聖明の遵ふ所、道地に應じ、事事緣あつて牢堅に受持す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか神通不斷度無極に六事ありと謂ふや？　若し所救あり、如來佛寺精舍を建立して、以て元首と爲す。是を布施と曰ふ。道業を求めて智慧根を致し、無明の源を拔く。是を持戒と曰ふ。

精進と曰ふ。若し禪思を以て心に常に念佛し、至眞を失はず。是れを一心と曰ふ。若し聖明を以て滅度を勸助する。佛の五人の身心を開化するが如し。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以つてか意不惱度無極に六事ありと謂ふや？　恩を行ずること意の如く、願誓道を奉じて以て他人を化す。是を布施と曰ふ。其の至行に遵つて他人を護り、身口意を御す。是を持戒と曰ふ。所修の仁和是れ深妙忍にして、正法沒する時に其の志を堅固にす。是を忍辱と曰ふ。所立を勤修し、道慧を懷來し、心迷惑せず。是を精進と曰ふ。假使禪思して空無を執持するも、想願有らず、心に冀ふ所なし。是を一心と曰ふ。其の聖明を以て思惟愁慼し、一切を慈念して是を救濟せんと欲す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか佛興立在家居度無極に六事ありと謂ふや？若し所施を以て五事を發す。何を謂つて五となす。一に曰く成座、二曰く說處、三に曰く眷屬を成ず、四に曰く法樂を成就す、五に曰く其の書疏を成ず。是を布施と曰ふ。施所す、行を立て、其の禁具足して所犯なし。是を持戒と曰ふ。其の仁和を以て人想を棄捐し、壽命を計らず。是を忍辱と曰ふ。若し勤修を以て平等の業を奉じ、道義を顯示す。是を精進と曰ふ。心禪思するを以て普く平等を修し、至德を奉行して心に所願なし、是を一心と曰ふ。慧明を以て諸の聖諦に歸し、通ぜざる所なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか出家來度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施あり、心と與に合し、無漏行を致す。是を布施と曰ふ。其の謹愼を以て身口を護らしめ、滅度に合す。是を持戒と曰ふ。若し仁和を以て三界を厭ふて著する所なし。是を忍辱と曰ふ。正行を勤修し、四意止に歸して道意を生ず。是を精進と曰ふ。禪思する所以、四等心に遵び、周旋生死の難を患厭す。是を一心と曰ふ。若し聖明を以て放遠して愁慼の思を捨て、至眞に遵修する。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか愍哀博聞來度無極に六事ありと謂ふや？　若し以て頒宣して精進の教を訓へ、衆の窮

を見知し、衆の苦患を斷つて好んで志願す。是を智慧と曰ふ。無餘度無極とは何を以て名づけて度無極と曰ふを得るや？ 曰く是れ菩薩從順化を得て、世の所好に隨ふ。然る後に名けて無餘六度無極と曰ふ。

何を以てか明度無極に六事ありと謂ふや？ 菩薩の所施は尊長に奉じて其の報を望まず、百千劫中服世飲食して身を以ての故に、心は憂を懷はず。是を布施と曰ふ。所修の法義によつて、佛樹下に詣り、一切法に於て狐疑を懷かず、是によつて乃至一切愍智す。是を持戒と曰ふ。其の禪思を以て所著の法なく、斯の一切智此に由從つて生ず。是を忍辱と曰ふ。若し奉勤修して道慧に住し、五陰蓋[二五]を化する。是を精進と曰ふ。禪定を以て最正覺を成じ、天眼を逮得して其の宿命を識り、更歷する所を觀る。是を一心と曰ふ。其の聖明を以て諸漏[二六]悉く盡きて、佛眼を逮得し、普く諸法に達して心猶豫せず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか住明持度無極に六事ありと謂ふや？ 正法に住して佛教を供養し、經典を存立する。是を布施と曰ふ。行所止處に如來に入り、身明かに口淨くして衆想あるなし。是を持戒と曰ふ。其の柔順行によつて俗法に近づかず、動轉する所なし。是を忍辱と曰ふ。聲聞・緣覺の業を曉了し、衆の塵勞を消し、乃至滅度す。是を精進と曰ふ。禪思する所以を衆生の心念諸行に求め、惠普を以て盡す。是を一心と曰ふ。以て得脫を知つて時節を失はず、聖明の慈を行ふ。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか興成就度無極に六事ありと謂ふや？ 佛興世の時に大財業を成じ、賢聖無量にして過去諸佛の敎を受く。是を布施と曰ふ。行を以て勸助して解脫を得、佛現世に興つて衆の塵勞を消す。是を持戒と曰ふ。仁和を以て世尊の敎を受け、又止足を知つて懈倦を懷はず、乃至大行す。是を忍辱と曰ふ。若し勤修を以て弘誓を建立し、其の人の功德若し王位にあるも心法に違はざれば、是を

【二五】五陰蓋（Skandha）。五陰は五蘊に同じ。舊には陰又は衆を稱し、新には蘊といふ。陰は積集の義。衆は衆多和聚の義にて、蘊の義と同じ。之は數多積集する有爲法の自性を顯してゐる。有爲法が用をなすには、純一の法がなく、或ひは同類、或ひは異類と、必ず數多の小集が相集りて、其の用を作すので、概して之を陰又は蘊を言ひ、之を大別して五法とする。色蘊・受蘊・想蘊・行蘊・識蘊が之である。

【二六】漏（Āsrava）。煩惱の異名である。漏は流注漏泄の義。三界の有情は眼耳等の六瘡門より日夜に煩惱現行して心をして連注漏泄して止まないので、漏と名ける。

共に之に倚る。是を布施と曰ふ。學ぶ所に精進して身口心を將いて權方便なし。土地に生死所あるを計る。是を持戒と曰ふ。所修の仁和、慕樂する所あつて、其の苦の本を求む。是を忍辱と曰ふ。精進する所あつて俗事を建立して道法に化入す。是を精進と曰ふ。若し禪定を修し、梵天の壽命の長短を感ずる。是を一心と曰ふ。所遵の聖明、未だ曾て言ふことあらず。猶ほ菩薩號して如來日と名くるは、其の衆生に隨つて一品の法を宣べ、其の餘の有身に、若干品を宣べ、寂然を造立して滅度の後、正法住立すること若干歲の後、乃ち滅盡す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか有餘度無極に六事ありと謂ふや？ 往古菩薩、定光佛の時、所奉を供養して以て道願を誓ふ。是を布施と曰ふ。身口餘りあり、依倚して禁に住す。多所不信にして己身を樂しむ。是を持戒と曰ふ。其の性仁和にして〔二三〕麁獷なく、燕坐の力に歸す。是を忍辱と曰ふ。假使勤修する中間に有所樂に倚るも正眞に至らず。是を精進と曰ふ。禪思慕樂して空無に恃行し、斯を以て樂となす。是を一心と曰ふ。若し聖明を聞いて心に所著あり、或ひは所著なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか住有餘度無極と謂ふや？ 眞に順ふ能はず、異門に向ふ。空處所に志すは聲聞・緣覺の報應する所にして、佛道に長ならず。〔二四〕十地の業に入つて復退轉す。當に其の意を知るべし。是を菩薩有餘所行度無極と曰ふ。

何を以てか無餘菩薩所施度無極と謂ふや？ 生死衆生の報應を勸助すること、能く聲聞・緣覺を忍ぶ所の如し、寂然として定めて隨つて退轉せず。是を布施と曰ふ。禁法の報、智慧を離れ、能く深入する。是を持戒と曰ふ。其の仁和を以て惡趣勤苦の處に至るを畏れて、心に犯す所なし。是を忍辱と曰ふ。若し以て勤修して魔業を求め、其の界を消さんと欲して邪元なからしむ。是を精進と曰ふ。正行禪思して壽命の限りを知り、根元を究竟す。是を一心と曰ふ。若し智慧を以て其の宿業

識深かつた。偶ゝ下山した折ディーパヴアティー城(Dipavati)は城の王子出身の燃燈佛を歡迎する爲に眺しかつた。雲は漸く乙女より蓮華五莖を買ひ受けて、佛に供養し、泥濘を行き惱む佛の爲に、頭髮を道の上に敷いた。未來世に燃燈佛の如くならんと願ふて、許され、佛に來世に釋迦佛となるであらうと受記された。後の迦毘羅城(Kapilavastu)の釋迦牟尼佛(Sākyamuni-buddha)之である。

【二三】麁獷。共にあらきこと。

【二四】十地(daśa-bhūmi)。又十住ともいふ。菩薩の修行して踏む可き十階をいふ。前出。

し。是を精進と曰ふ。夢中に於て衆の[一四]玉女を見るも、以て食をなさず。身の相好を具して顔貌清淨なり。是を一心と曰ふ。若し城中に入つても心に明智を懐き、設へば比丘を見るも篤心にて之を敬つて若干想なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか造業度無極に六事ありと謂ふや？　若し身自立して梵行を淨修し、勸助すべき所に利養を得るは多し。法滅盡するに臨んで纔に形を覆ふ。猶ほ餘華の如し。學志所行、佛身を現毀し、[一五]正法立つを得ること五百歳に至る。[一六]像法も亦爾り、是を布施と曰ふ。若し衆戒を以て他人の諸惡行業を消除し、其の乏しき所に隨つて、以て之を救濟す。是を持戒と曰ふ。所遵仁和にして若し罣礙あつて吉利なきも、必ず濟厄を得ること、賈客の大海に入つて[一七]摩竭魚に遇ふに、忽ち浴池あること數二十五、各白象ありて輒ち其の上に乘りて、大難を出づるを得るが如し。是を忍辱と曰ふ。假使天上世間の快樂安隱に遭ふとも、猶ほ往昔の無開導主の如く、精進せしめんと欲す。大梵天あり、名づけて[一八]英妙と曰ふ。天帝を勸化し、衆生を訓誨して天に生ずるを得しむ。是を精進と曰ふ。禪に所生なし。諸佛菩薩の講說する所なり。假使菩薩、衆生を勸喩し、梵天に生ぜしむるに、[一九]光音宮より[二〇]無想天に至る。是を一心と曰ふ。聖明の業は諸の世俗の爲に、現世の事に說き、世業を講度し、十善の行を修して、羣黎を利益す。猶ほ昔國主にて名けて[二一]得生と曰ふあり。王、好眼あつて道法を愛樂す。無數世の中に此の義を曉了す。諸王慈行あり、諸佛菩薩の開導する所なり。斯の言教を以て宣べて一切に示す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無所造業度無極に六事ありと謂ふや？　心中に好んで所樂の功勳を喜び、一切に著せず施を勸助す。勸助すべき所には則ち是に著をなす、[二二]昔菩薩、定光佛に見え、華五莖を以て散じて佛を供養す。殖る所の德本、皆此の功祚道德を得しめ、永く妄想なし。法の湊盡するに至つて皆

【一四】玉女。玉の如く美しき女。
【一五】正法。眞正の道法である。理に差ふことのないのを正と言ふ。三寶中の法寶、教理行果の四を以て體とする。正像末三時の一。
【一六】像法。正像末三時の一、像は似なり。佛滅後五百年の後一千年の間に行はれる正法に似たる佛法を言ふ。
【一七】摩竭魚(Matsya)。譯、鯨魚、巨鼇。神話的の魚王であつて、時に船をも呑み込むといふ。
【一八】英妙。本生話か、事蹟不明。
【一九】光音宮。光音天(Ābhāsvara)の宮、光音天は舊稱で、新稱は極光淨天。色界の第二禪の終天である。此の天、音聲を斷ち、語らうとする時は、口より淨光を發して言語の要をなす故に、光音と名けると。前出。
【二〇】無想天。無想有情の天處である。有部と經部は第四禪の廣果天の所攝として別處を立てず、上座部は廣果天の上に無想天の一處を立てる。
【二一】得生。不明。
【二二】雲本生話(Meghajātaka)である。菩薩は雲(Megha)定光佛とは燃燈佛のことである。雲は燃燈佛の折に梵童であつて、雪山に修行して、學

六度無極を勸む。是を精進と曰ふ。內外に於て悉く著する所なし。而も衆生の迷心塞つて解せず、有我の想を計して無我を了せず、爲に分別して說いて一切空を了かにす。是を一心と曰ふ。若し聲聞・緣覺を棄捨せず、聖明の法を以て、一切智に依る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか觀無倚度無極に六事ありと謂ふや？ 加恩を集めて一切三界は皆悅豫を得。猶ほ定光の如く所有を發起する所あり。是を布施と曰ふ。若し禁行を以てして所依なく、求むる所あらず、是を持戒と曰ふ。假使其の心、仁和柔輭なるも、未だ曾て一切諸法を妄想せざる、是を忍辱と曰ふ。衆行を勤修するも著する所なし。是を精進と曰ふ。禪定の所見、菩薩地に入り、顚倒に墮せず。是を一心と曰ふ。若し聖智を以て衆の塵勞を消し、大道に歸す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか勸意度無極に六事ありと謂ふや？ 意に自ら念言して、菩薩の濟ふ所、佛國を成じて因りて究竟を致さんと欲す。是を布施と曰ふ。其の自ら行を守つて三惡趣を斷じて罪業をなさず、是を持戒と曰ふ。慈仁和を以て相好を報得し、端政殊妙にして見て喜ばざるなし。是を忍辱と曰ふ。勤修行を以て大海に往入して[二]如意珠を致し、衆難を消竭して自在法を得る。是を精進と曰ふ。禪思して塵勞を蠲除し、其の志願の如く之を致得す。是を一心と曰ふ。聖明を以て衆魔を壞る、所立訓化して教へに從はざるなし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。何をか勸忍度無極に六事ありと曰ふ、所出の施與心、佛道にあつて未だ曾て忽忘せず。是を布施と曰ふ。地獄を救護するに寂靜思を以てす。魔犯す能はず、法迴轉せず。是を持戒と曰ふ。所向に順理し、正法を奉行して嫉妬を懷かず、王太子の如し。號して[三]德光と曰ふ。布施自在にして一日に悉く一切所有を捨て、佛弟子にして得んと欲する者に施す。車乘象馬四十里に滿ち、幡蓋鬱茂し、瓔珞衣寶・無數の華香と八萬四千の婇女を捨て、國を棄て、王を捐て、手足耳鼻頭目肌肉支體妻子に至るまで、人意に逆らはず、出家して沙門と作り、是の正法を奉ず。是を忍辱と曰ふ。奉ずる所の衆戒は勤修に處して所著な

【二】 如意珠(Cintāmaṇi)。意のまゝに求むるものを出す寶珠を言ふ。龍王又は摩竭魚の腦中より出ると。

【三】 德光？事跡はヴエツサンダラ本生話(Vessantara-jātaka)のヴエツサンタラ(Vissantara)の事跡と似る。

化せんと欲し、其の所順の行に隨つて之を訓誨す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか勸正見度無極に六事ありと謂ふや？　若し習俗に入つて爲に法教を設け、布施して福を得、持戒して天に生る。所作の善惡皆果報あり。此を以て之を濟ふ。是を布施と曰ふ。若し世に佛なくとも、菩薩未だ嘗て惡女の教に隨はず。是を持戒と曰ふ。菩薩清淨鮮白にして瑕なきこと、猶ほ雪山に好樹木を生じ、曾て諸天鬼神衆龍あつて中に遊樂するが如し。是を忍辱と曰ふ。奉ずる所を勤修し、彼我を除去すること、譬へば賈客の遠く遊行して成辯する所あるが如し。是を精進と曰ふ。智慧を以て四禪を修治するも亦所護なし。是を一心と曰ふ。若し聖明を以て愍傷する所多く、一切衆生、不逮を建立すること、猶ほ昔の學本の所教の如し。一頌偈を以て八萬四千の國邑を訓誨す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか勸住見度無極に六事ありと謂ふや？　菩薩假使夢中にあるも、心慳嫉ならず。佛興らずと雖も、異心あるなし。況んや現在をや。是を布施と曰ふ。若し惡罪に遇ひ、及び身命を失ふも、未だ嘗て禁を犯さず。是を持戒と曰ふ。所生の處、光明と倶にし、適生るれば、輒ち本清淨忍を聞き、乃ち佛道を得。是を忍辱と曰ふ。所生の處、常に見て頒宣して、衆生を開化し、此の道法を以て他人を訓誨す。是を精進と曰ふ。在在の所生に善く道を思念し、快く業を建立して覩見する所あり、本性自然なる故に、是の如きを致す。是を一心と曰ふ。若し以て世を度し、及び世事を覩るに師主なき者は、其の身獨立して他に從つて受けず、其の慧、是の如く常に至誠を宣べ、其の身口心未だ嘗て欺くあらず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何をか觀無住度無極に六事ありと謂ふや？　若し權惠を以て窮厄の士を救濟する所あり。是を布施と曰ふ。身心を謹愼して、心に犯す所なく、放逸するなし。是を持戒と曰ふ。不起法忍を退轉せざるに逮ぶ。是を忍辱と曰ふ。一切萬物に不可得を思ひ、勤修方便して所住なし。是の無住を以て

ふ。是を六となす。

何を以てか歡喜度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く恩を行ふて其の心悅豫して懷恨せず。是を布施と曰ふ。篤く信じて禁を守り、善德を致す。是を持戒と曰ふ。若し柔和を以て慚愧を成就し、[九]麁獷を報せず。是を忍辱と曰ふ。若し以て勤修して心に愼恨なく、自ら護つて彼を安んじ、善く思惟して湯火を懷はず。是を精進と曰ふ。若し寂然を樂んで其の心清淨に、建立成就して衆の貪欲を斷つ。是を一心と曰ふ。惠施する所あつて心倚る所なく、道法を奉行して望報を休息し、智慧を觀じて[一〇]覺意を受け、覺意を選び終つて無願を遵修して脫門を建立し、顚倒に處らず、傷害する所なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか勸護度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施あつて心に所著なく、平等法を奉じて妄想を懷かず。是を布施と曰ふ。謹愼を以て諸の覺意を觀じ、心に精進を受けて惱熱を懷かず。是を持戒と曰ふ。行に所想なく、心志顯明にして、其の內外安らかにして諸の貪羨を棄つ。是を忍辱と曰ふ。有爲を曉了して無爲を觀じ、心二に處らず。是を精進と曰ふ。若し禪思を以て勢力を觀察し、寂然として精進し、所遊至にあつて、一切の首となる。是を一心と曰ふ。若し聖明を信じて道義無極哀を遵修する故に餘人を開化す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。何を以てか勸邪見度無極に六事ありと謂ふや？　雜碎なる諸外異學にあつて、其の詞祀に入り、其の意に順從して之を開化す。猶ほ[一一]隨藍梵志の所興の福德の業の如し。是を布施と曰ふ。若し顚倒の戒あり、衆賊集り會し、賊の爲に牽かれ、其の行を顯はし、斯を緣として化度す。是を持戒と曰ふ。若し衆の雜れる若干の惱行にあつて、來つて是を犯すも以て患厭せず。是を忍辱と曰ふ。施與する所あり、若し世俗に入りて輿に同塵せず、而も爲に寂然の義を頒宣す。是を精進と曰ふ。若し禪思を興して冥中に遊在し、此を樂しむ。樂に所樂なく、法を以て是を樂しむ。是を一心と曰ふ。若し梵志の像、衆生を

【九】麁獷。獷はあらし、あし。

【一〇】覺意。七覺意、七覺分と同じ。七菩提分、七覺支と云ひ、七科道品中の第六である。覺了覺察の義。聖道の生じないのは定慧の調はないのに由る。故に心の定慧に據るを明かに見分けて偏に一方に片寄らしめず、定慧均等ならしむる法であるが故に等覺と名ける。修道に於て思惑を斷ずるのは、此の七覺支による。擇法覺支・精進覺支・喜覺支・輕安覺支・念覺支・定覺支・行捨覺支をいふ。

【一一】隨藍梵志。梵志は婆羅門をいふ。隨藍は何人か不明？

しきを慕ひ、倶に他行を校べ、巧術の施す所、人をして修徳せしむ。是を布施と曰ふ。後當に得べき報は無數の人愛樂して道に務めしむ。是を持戒と曰ふ。能く一切技術をして巧便して、皆達して餘なからしむ。通暢せざるなし。是を忍辱と曰ふ。其の速かに菩薩の法を奉行し、能く成就せしむ。是を精進と曰ふ。若し心以て好む、是を一心と曰ふ、道法を諮受する、是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか慈愍護養一切度無極に六事ありと謂ふや？　若し心を以て一切衆生を護り、慈心を以て施す。是を布施と曰ふ。衆生を用ひての故に已身を貪らず、是を以て戒を持ち、時を以て誓願す。因つて自在を得て、所生の處に衆生を訓化し、因つて善事を奉じて道を建立す。是を持戒と曰ふ。猶ほ過去王あり、名を　摩調と曰ふ。所興精進して愁思し、勤修して遵承して時に隨ふ。是を忍辱と曰ふ。若し國王と作つて、人求むれば、頭を截り、心、恚を發さず。無央數の人、天上に生るゝを得。是精進を以て能く堪任し、復た財業を致して以て開導を與ふ。是を精進と曰ふ。其の禪を逸せず、藏匿する所なくして　六情を消滅す。是を一心と曰ふ。設へば聖慧を用ひて無數の衆に示し、人皆啓受して報應大果あり、衆德の六事・諸所の塵垢・勇猛の所報にも侵されずとなし、過去を以て增損あらず、是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか行哀度無極に六事ありと謂ふや？　能く布施の心を自ら發念し、衆生をして一切普く安からしめんと欲す。是を布施と曰ふ。若し他人を棄てて自ら身を厭はず、悉く衆結を散ず。是を持戒と曰ふ。若し能く已を忍び、罵詈・杖捶悉く以て能く忍び、亦他人を化して忍ばしむ。是を忍辱と曰ふ。精進を以つて衆の德本を具し、以て患厭せず、無數の衆を度す。又以て專精に諸人衆を勸めて、出家して學ばしむ。是を精進と曰ふ。若し惡趣を厭ふて禪思を愛樂し、功勳究竟す。是を一心と曰ふ。一切の惡露を愍哀・淨除し　懈廢せず、所興の法施を以て衆生を訓化す。是を智慧と曰

【七】摩調？

【八】六情。舊譯の經典は多く六根を六情といふ、根に情識を有するからである。意の一は當體の名である。意根は心法である。他の五は情識を生ずれば所生の果に從つて情と名く。

何を以てか欲樂純熟度無極に六事ありと謂ふや？　一切の所有施して悋まず。是を布施と曰ふ。功勳を開化し、空脱門を見る、是を持戒と曰ふ。若し至德を以て教訓周化し、戒禁は行業にあつて心其の上に生ず。衆生を開度して顯すに斯の戒を以てし、忍順の意を以て而も殊特あり、仁和して能く受く、是を忍辱と曰ふ。其の以て法を用ふること時に隨ひ、若干品訓を開化す。是を精進と曰ふ。時宜を曉了し、慈心を奉行して、四等意[六]を行じて他の苦樂を斷ず。是を一心と曰ふ。訓誨せんと欲する所、衆生一切哀護して法に應じ、其の宜しきに至る所、時に隨つて失はず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか禪定度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施を建て、在在の所欲違ふ能はざる者、是を布施と曰ふ。心、謹愼を懷きて、衆の不可を棄つ。是を持戒と曰ふ。仁任和忍し、諸法自然に和同に入る。是を忍辱と曰ふ。一心に勤修して思惟建立し、處所悉く散毀して諸非を滅す。是を精進と曰ふ。若し禪思を以て棄捐する所を聞き、身口心安かにして、諸の智明を承く。是を一心と曰ふ。若し欲を蠲除し、聖明の德を以て諸の穢行を去る、是を智慧と曰ふ。是を六となす。何を以てか神通度無極に六事ありと謂ふや？　燈を施すを以て、因つて其の報、天眼徹視を得る。是を布施と曰ふ。禁戒を奉じて專精に經を聽き、毀犯する所なくして天耳聽を致す。是を持戒と曰ふ。仁和無二にして、以つて用ひて勸助し、因つて道意を發す。是を忍辱と曰ふ。成就逮得して宿命過去世の事を識念し、神通自然にて衆生の爲の故に世間に處在し、功を積み德を累ねて生每に自尅す。是を精進と曰ふ。神道・神足・變化の逮び難き無極を懷來し、諸の識著を捨てゝ平等禪を受く、是を一心と曰ふ。以て斯の恩因緣の報に逮び、慧神通を以て、衆垢を消滅し、其の三昧に因つて聖明を究暢す。是を智慧と曰ひ、諸漏盡す。是を六となす。

何を以てか世人巧便度無極に六事ありと謂ふや？　諸度無極を勸學する能はず、唯世俗巧術の宜

語意を策勵する中に於て此れ最勝なるが故に四正勝と名け、意中決定して之を斷行すれば四意斷と名けると。

【五】聖明。凡常でないのを聖と言ひ、智德を稱して明と言ふ。

【六】四等意。四等ともいふ。慈(Maitri)・悲(Karuna)・喜(Mudita)・捨(Upeksa)の四無量心である。所緣の境に從つて無量と言ひ、能起の心に從つて等といふ。平等に此の心を起すからである。

巻の第三

聞持品第九

佛、喜王菩薩に告げたまはく、『何を以てか聞持度無極に六事ありと謂ふや？ 衆の窮厄を見て自ら濟ふこと能はず。若し法施を宣べて、伏して已に寶を致し、衆人をして聞かしむ。是を布施と曰ふ。常に德本・衆善の行を以て、既に自身に行じ、復た他人に勸め、若し聞いて持たざれば大財富を致す。是を持戒と曰ふ。若し善說を聞き、能く衆苦を忍んで以て惱をなさず、假使菩薩若くして梵志となつて、悉く愚人に從つて所聞あるを得、修すること十二年にして無上の大道を興發建立し。所生を覺了す。是を忍辱と曰ふ。若し能く精進して家業を捐棄し、以て難となさず。是を精進と曰ふ。其の無常を解して因緣に聞いて以て、懈廢せず、是を一心と曰ふ。學ぶに師あるなく、方便して諸の憎愛を平等にす。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか生死長度無極に六事ありと謂ふや？ 若し施與主の無所從生法忍を得る。是を布施と曰ふ。其の能く無極大哀に依倚する、是を持戒と曰ふ。設へば柔和を以て弘誓を勸慕する、是を忍辱と曰ふ。寂然として無我を加ふ。是を一心と曰ふ。諸の下縱し、僕從し、忍和を敎誨し弘聖を禪思す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。何を以てか無斷度無極に六事ありと謂ふや？ 若し所施を以て四恩を興立し、危厄を救濟する、是を布施と曰ふ。[一]身口心を護つて常に三を謹愼する、是を持戒と曰ふ。其の仁の宜しきを以て身心和同し、志、[二]法忍に逮び、[三]四事和合す。是を忍辱と曰ふ。若し以て[四]四意斷を勤修し中傷する所なく、皆是學ぶところに由つて至眞を建立す。是を精進と曰ふ。其の寂靜を用ひて四意止に逮ぶ。是を一心と曰ふ。若し[五]聖明を以て四諦の事を修するも復た虛僞なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。」

【一】三業。身口意三處の所作をいふ。身の作す所、口の語る所、意の思ふ所である。

【二】法忍。二忍中の法忍には二あり、一は非心法の寒熱風雨飢渴老病死等に於て能く忍んで惱忍しないのをいふ。二は心法の瞋恚憂愁等の諸煩惱に於て能く忍んで厭棄しないのをいふ。六忍中の第二としての法忍は十行位中に於て假觀を修習し、一切法空無所有を知るも而も能く一切法を假立し、諸の衆生を化す。假法中に於て認可信證する故に修忍と名ける。

【三】四事。衣服、飲食、臥具、湯藥である。或ひは房舍、衣服、飲食、湯藥である。

【四】四意斷。四正勤と同じ。四正斷、四正勝ともいふ。三十七科の道品中、四念處に次いで修する所の行品である。「一に已生の惡に對して除斷の爲に勤めて精進す。二に未生の惡に對して更に生ぜざらしめんが爲に勤めて精進す。三に未生の善に對して生ぜんが爲に勤めて精進す。四に已生の善に對して增長せしめんために勤めて精進す」と(法界次第中之下)。一心に精進して此の四法を行ずる故に四正勤と名け、能く懈怠を斷ずるが故に四正斷と名け、正しく身

妄想を犯さず、勤修に至らんと欲す。是を精進と曰ふ。若し禪思を以て一切非法を棄捐するに至る。是を一心と曰ふ。若し苦惱を生じて三界にあり、己身の慧を說く。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか妙樂度無極に六事ありと謂ふや？　施せし所の福報を以て人間に來生し、一切の所欲皆豐富にして、而も自ら大ならず。是を布施と曰ふ。奉ぜし所の禁戒によつて天上に生れ、若し人間に於てすれば壽命常に長し。是を持戒と曰ふ。所謂人を得て、若し能く無所從生法忍に逮致す。是を忍辱と曰ふ。所進勤修して方便を虛しくせず、必ず至行の如くす。是を精進と曰ふ。云ふ所の禪思、內外の因緣の報を棄て、其の所生の處輒ち眞諦の如く、所行は願の如し。是を一心と曰ふ。其の智慧、妄想する所なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無樂度無極に六事ありと謂ふや？　之を救ふ所あつて妄に施す所なく、衆の見を捨てず。是を布施と曰ふ。家に禁を奉ずと雖も、而も家を捨てて、世榮を貪らず。是を持戒と曰ふ。其の行柔輭にして恨を懷かず。是を忍辱と曰ふ。所奉修行して苦を勤め、樂を棄つ。是を精進と曰ふ。禪に等分を棄て、苦惱を致し、衆の縛著を難と合會するを想ふ。是を一心と曰ふ。若し智慧に於て顚倒の想あり、諸苦をなすと雖も、[五〇]法行に從はず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。」と。

賢劫經卷第二

【五〇】法行に從はず。（不從法行）は少しく智慧波羅密の說明としては變である。如何？

何を以てか華度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施あり、六情を将愼して道法を迴さず。是を布施と曰ふ。常に恭恪を行じ、所施謙下して而も輕慢せず。是を持戒と曰ふ。若し能く堪任して諸の結縛を決し、衆の羅網を裂く。是を忍辱と曰ふ。其の勤めて修行し、病に應じ、藥を與へて、罪蓋に墮せず。是を精進と曰ふ。自大を捐棄して無蓋の慈を奉ず。是を一心と曰ふ。若し聖慧を以て頒宣する所あつて能く當る者なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無量度無極に六事ありと謂ふや？　若し所惠あり、常に智慧に合する、是を布施と曰ふ。無量の禁をもつて常に謹愼を行ひ、犯負する所なし。是を持戒と曰ふ。所行の仁和三脫門を致し、此を勸助して已に色想に墮せず。是を忍辱と曰ふ。若し勤修を以て四意斷を致す。是を精進と曰ふ。若し禪思を以て慈愍を奉行し、[四七]七覺意を致す。是を一心と曰ふ、若し聖慧を以て悲哀を修立し、八道の行を致す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか慕求度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く出家して鉢・衣服を求めて輒ち是を得る。是を布施と曰ふ。其の行止足功勳戒具、是を持戒と曰ふ。功德藏を致して、衆の患難・生死の厄を斷ち、若し國王・夫人・侍女を作して、施與する所あり。之を聞いて默然として懷恨を以てせず。是を忍辱と曰ふ。衆の利義を求め、功を積み德を累ね方便勤苦す。[四八]錠光佛よりこのかた若し所施あつて、乃至今に於ても懈惓せず。是を精進と曰ふ。若し人を勸歎して其の意に順ひ、衆の塵勞を曉る。是を一心と曰ふ。若し以て時に順つて無上慧を勸め、是の三昧を以て最正覺を致し、衆生を度せんと欲して、之に隨順す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか厭度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施あり、[四九]貧匱に致し、長者の寶に逮ぶ。是を布施と曰ふ。若し持戒を以て十善を遵修し、以て之を厭はず、乃ち人を勸化す。是を持戒と曰ふ。若し漸く禁を護て、道力を啓受し、獨り寂爾たる、是を忍辱と曰ふ。若し所想の恩德を遠捨して、

【四七】七覺支。七覺分、七菩提分とも言ふ。七科道品の第六である。覺とは覺了、覺察の義。聖道の生じないのは、定慧の調はないのに由る。故に定慧に據るを明かに見分けて偏に一方に片寄らしめず、定慧均等ならしむる法であるが故に等覺と名け、覺法七種に分れるので、支或ひは分と言ふ。修道にて思惑を斷ずるのは七覺支に依るのである。一、擇法覺支（智慧を以て法の眞僞を簡擇する）、二、精進覺支（勇猛の心を以て邪行を離れ、眞法を行ずる）、三、喜覺支（心に善法を得て歡喜を生ずる）、四、輕安覺支（身心麁重を斷除して身心を輕利安適ならしめる）、五、念覺支（常に定慧を明記して忘れず、之をして均等ならしめる）、六、定覺支（心を一境に住して散亂せしめぬ）、七、行捨覺支（諸の妄謬を捨て、一切の法を捨て、平心坦懷、更に追憶しないこと。この七事を以て無學果を證するを得る。

【四八】錠光佛。燃燈佛（Dipam-kara-buddha）と同じ。前出。

【四九】貧匱。乏しき米びつ。

得ざるも、和を含んで柔順なる、是を忍辱と曰ふ。所行寂然として妄想あるなし。是を精進と曰ふ。若し禪思を以て寂滅の地に住し、想念を生ぜず。是を一心と曰ふ。慧眼の觀ずる所滅盡せず、無所歸に歸す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか自然度無極に六事ありと謂ふや？　若し所興あつて心に所念なき、是を布施と曰ふ。若し其の心、報福を悕望せず、是を持戒と曰ふ。其の人無我にして自然に柔和なる、是を忍辱と曰ふ。諸の勤修する所二法を行じて因緣あるなし。是を精進と曰ふ。其の禪定にあつて內外に著せず、又中間なり。是を一心と曰ふ。解察する所あつて、永く一切諸法を分別せず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無所有度無極に六事ありと謂ふや？　其の心當來の事に於て、建立する所の福を念はず。是を布施と曰ふ。一切を解して三界に周旋し、幻の如く、化の如し。是を持戒と曰ふ。若しは衆善想、若しは無善想あり、常に仁和を抱いて心に恨を懷かず。是を忍辱と曰ふ。若し道を修行して所行なき、是を精進と曰ふ。三界にあつて希望する所なし。其の所在、普く歸して、一切衆生を將護す。是を一心と曰ふ。若し[四五]有爲を想はず、[四六]無爲を想はず、是の如きの行を造る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか廣普度無極に六事ありと謂ふや？　無數百千の衆生を勸化して慳悋を捨てしめ、給與を好む。是を布施と曰ふ。所禁の順業普く一切に同ず。是を持戒と曰ふ。所行方便して堪任せざるなし。是を忍辱と曰ふ。若し能く建立して四意止に住し、懈怠せざる、是を精進と曰ふ。若し慳悋ならずして六事を將護し、道法を存して迴還せず、能く懷來して八萬四千の諸三昧行を致す。是を一心と曰ふ。若し能く一切の塵勞結滯の業を覺了して誓願聖明なる、是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【四五】有爲。爲とは造作の義であつて、造作を有するを有爲といふ。卽ち因緣所生の事物は盡く有爲である。能生の因緣は所生の事物を造作するものである。所生の事物は必ず此の因緣の造作を有するので有爲法と言ひ、本來自爾にして因緣所生でないものを無爲法といふ。

【四六】無爲(asaṃskṛta)。爲は造作の義。因緣の造作なきを無爲といひ、又生住異滅の四相の造作なきを無爲といふ。此の卽ち眞理の異名である。三無無爲法に三種六種ある。三無爲中の擇滅無爲、六無爲中の眞如無爲は聖智所證の眞理なり。涅槃・法性・實相・法界といふのは、無爲の名である。

何を以てか攝持度無極に六事ありと謂ふや？　若し所願を勸めて功德を攝持する、是を布施と曰ふ。若し戒を興發して、衆生療治の至義を執取る。是を持戒と曰ふ。若し能く建立して仁和を攝取する、是を忍辱と曰ふ。若し時節を以て奉行勤修して中ごろに懈廢せず、是を精進と曰ふ。隨時禪定して無數百千の衆生を勸化する、是を一心と曰ふ。聖智を以て諸の蔽礙を消して所著するなし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無所攝度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施を以て辯才を逮得し、遭遇ずべき所、以て己身建立の若干の品類を增減せず。是を布施と曰ふ。[四四]家居を樂まずして菩薩道を慕ふ。是を持戒と曰ふ。若し能く深要の法に堪任し、而も疑結せざる、是を忍辱と曰ふ。精暢にして人を依仰せず、是を精進と曰ふ。若し禪思を以て空事を了奉し、人本を思惟して道法を遵承して、無所生を念ず。是を一心と曰ふ。若し義理に遭ひ及び更に滅度す。所學の經典の三昧定に入り、罪福を消滅す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか報應度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く所作の布施を備悉して缺漏せしめず、福慶を究暢す。是を布施と曰ふ。若し能く勤修して其の身を重將し、所應を具足する、是を持戒と曰ふ。其の仁和の行は所說の事にあり、究竟して義を成ず、是を忍辱と曰ふ。所行を勤修し、一切の吉利、違失する所なし。是を精進と曰ふ。其の禪定を以て往古前世の所處を識り、慧を以て證明す。是を一心と曰ふ。其の聖智を成じて至誠を頒宣し、通ぜざる所なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無報度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施あり、勤苦を建立し、諸の患難を見て、輒ち能く覺了す。獲致を念はず、希望する所なし。是を布施と曰ふ。若し中處に於て百千蓋を致し、滅度を建立し、種姓にあつて顚倒に住せず。是を持戒と曰ふ。若し所修あつて身口及び心念の行を

【四四】家居（Grhastha）。波羅門教の人生を四期に分ち、梵行期・家居期・林棲期・遊行期とする中に、家居期は梵行期を終り、家に歸つて家主となり、妻を迎へ、家業に勵み、人生目的中の法射愛中の射を主として目的とするものである。之を終へ、林棲期に入り、家督を子に讓つて妻と共に、又一人で森に入り、修行生活に入るを普通とする。

何を以てか不亂度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施あつて應法を勸助し、疾かに神通を得る。是を布施と曰ふ。奉ずる所の禁戒にして賢聖の法を毀斷せず、至道を成就して[四二]菩薩地に備ふ。是を持戒と曰ふ。若し能く一切の非法を[四三]蠲除し、功勳の法を奉ずる、是を忍辱と曰ふ。若し能く世を厭ひ、具足の典・諸佛所說善惡の義を奉じ、悉く信念する。是を精進と曰ふ。若し禪定智度無極に住し、而も愛欲に住して經道を勸察し、覺つて捨てざるも亦所著なし。是を一心と曰ふ。菩薩道法の根原を曉了し、是非瑕疵を悉く分別す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無怨度無極に六事ありと謂ふや？　所住處あり、常に能く將護して失あるなからしむ。是を布施と曰ふ。而も聲聞緣覺に退墮せず、中ごろに證を取らず。是を持戒と曰ふ。若し吾我を斷じて有身はこれ我所なりと計さざる者は、結礙因緣の事を除く。是を忍辱と曰ふ。世俗の第一愚惑を遠離し、智慧に歸して方便に順從す。是を精進と曰ふ。其の所見を刈つて諸法を聞念し、悉く永寂を得る。是を一心と曰ふ。若し孤疑を消し、智慧平等にして無想行に遵ひ、一心は道に在つて、一切智尊きを智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか怨敵度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施あり、望報を冀求して衆生に與へ、心に怨恨を懷ふて法寶に至る。是を布施と曰ふ。若し三惱勤苦の趣を斷ち、志、兜衆を願ふて乃ち滅度に至る。是を持戒と曰ふ。諸の菩薩眞正の衆生と怨恨を懷ふ、是を忍辱と曰ふ。若し仁和に遵つて開化する所多く、非時に勸助し、其の勤修に因つて、化を積むこと無數にして、先世の菩薩の所願の如し。度脫する所あつて恩愛に倚り、自ら調習して其の道を成ぜしむ。是を精進と曰ふ。若し說くこと無礙にして三昧定を成じ、菩薩正受して、一切人をして普く安隱を得しむ。是を一心と曰ふ。若し己身の爲に智慧を道德の根原に求め、道義を究竟して、自在に正覺し、若干の所好の義を解せさる者は、是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【四二】菩薩地。通教十地の第九。佛果の因行を修する位である。

【四三】蠲除。蠲、のぞく（除く）。

も、中ごろ證を取らず。是を智慧と曰ふ。是を六と爲す。

何を以てか爲世度無極に六事ありと謂ふや？ 其の所施あり、心遊んで俗に存し、道を勸めず、是を布施と曰ふ。若し放逸を以て謹愼する能はず、常に猶豫して行じ、直進する能はず。是を持戒と曰ふ。常に以て勤修して世俗の法を習ふ。是を精進と曰ふ。其の心に願あり、所生の處にして二念なし。是を一心と曰ふ。若し俗智を以て開化して人を敎へて世を出でざる、是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか度世度無極に六事ありと謂ふや？ 若し敎施及び衣食施を以て道意を宣解し、是の道を用ひての故に樹下に座し、而して自ら宣して曰く、「快い哉、福の報。所願必ず志の如く、疾かに最寂然に至り、乃ち滅度に歸趣す。」是を布施と曰ふ。聲聞・緣覺に入り轉進し、弘護して、諸の罣礙處を消除する、是を持戒と曰ふ。若し無漏の法、常に仁和を奉ずれば、是を忍辱と曰ふ。若し無所從生法を逮得するを以て、乃ち佛樹に座し、衆生を訓誨す。是を精進と曰ふ。若し菩薩に平等三昧あり、諸根具足して聖惠成就する、是を一心と曰ふ。若し專心を以て、道の正法を行じ、怨害の心なく、聲聞の意及び緣覺の行なく、一切智に屬す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無上度無極に六事ありと謂ふや？ 若し無數の淸淨佛土を信じ、衆生を愍念して、以て斷ぜず。不可計る可らざる刧にして度脫せんと欲す。是を布施と曰ふ。法想に住して三惡趣を棄てて、淨佛土を取る、是を持戒と曰ふ。若し佛道を成じ、皆衆の會をして紫磨金色ならしめ、章句を分別する、是を忍辱と曰ふ。若し等施を習ひて、無怒佛の菩薩たりし時、至眞を奉進せるが如くす。是を精進と曰ふ。若し家中に處して四禪を奉じ、定意を失はず。若し[四一]中宮の婇女の間に在りて、佛土淸淨にして小欲塵勞に、衆會報應す。是を一心と曰ふ。若し佛國を攝して、壽は計る可らずして嚴淨無限に衆中に存在して、辯才無量なり。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【四一】中宮の婇女。中宮は又内宮(Antar-pura)といふ。婇女は内宮に居る女官であつて、ある意味で王、太子等を護衞する任をなすといふ。

と曰ふ。若し禪定を以て所有を計らず、因緣を造らず、强いて勢あり。是を一心と曰ふ。又分別して一切の陰蓋を解し、以て疲勞せず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか堅强度無極に六事ありと謂ふや？　魔所化現して其の動搖させ、其の寂靜を毀つ能はず。菩薩所施の心に所生なく、一切所有皆能く放捨する。是を布施と曰ふ。若し禁戒を以て美樂する所あり、吉良に著せず、時節を擇ばず、惟道を勸助す。是を持戒と曰ふ。所懷柔輭にして能く毀つ者なく、衆結を消害す。是を忍辱と曰ふ。若し精勤を興して以て患と爲さず、土地を厭はず、周る所を教化す。是を精進と曰ふ。若し禪思を以て一切の爲の故にして廣く勸化し、正受自在にして遊居無礙なれば、是を一心と曰ふ。若し聖明の法を思惟し、忍辱して、一切の所行、荒亂せざれば、是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか興盛度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施あるも顚倒に墮せず、中正の法に住す。是を布施と曰ふ。所執の禁法永く所思なく、是を以て熾盛なり。是を持戒と曰ふ。仁和の心を以て所著なく、諸の危害の因緣の業を棄つる、是を忍辱と爲す。若し吾我諍訟の家業に於て、諸の苦患を斷つて、衆の所著を滅し、身の塵勞永く以て滅盡し、空教に順從す。是を精進と曰ふ。設へば無常を厭ふて、十二牽連[三九]の義を了し、心性堅住なる、是を一心と曰ふ。若し智慧及び無明を捨して、永く二有るなし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか充滿度無極に六事ありと謂ふや？　若し所與あり、勸めて解脱に至つて、生死を慕はず。是を布施と曰ふ。奉持し謹愼して他人を忘れず、又菩薩心を以て戒を念ずる時、終に聲聞・緣覺・怯弱の法を建立せず。是を持戒と曰ふ。若し仁和を以て無數の佛國を成就し嚴淨し、三事を滅して志願敎化す。是を忍辱と曰ふ。其は精進を用ひて常に懈倦せず、心、至義に進む。是を精進と曰ふ。反復して義を解し、心寂として亂れず。是を一心と曰ふ。設へば聖明を以て、三脱門[四〇]を攝する

【三九】十二牽連。十二因緣の異名。

【四〇】三脱門。空・無相・無願の三である。又三三昧門を言ふ。但し通別の差あり、解脱門の名は無漏に局り、三昧門の名は有漏無漏に通ずる。一、空三昧は苦諦の空・無我の二行相と相應する三昧である。諸法は因緣生にて我なく我所有なしと觀ずるのである。二、無相三昧、滅諦の滅・靜・妙・離の四行相と相應する三昧である。三、無願三昧、苦諦の苦・無常の二行相、集諦の因・集・生・緣の四行相と相應する三昧である。

持戒と曰ふ。仁和を遵修して、猶ほ虛空の如く增減の心なし。是を忍辱と曰ふ。若し窮危にあつて、志、衣食に存するも、身心を寂滅にす。是を精進と曰ふ。若し梵天に至つて、爲に禪定の業を講說せずして、道德を勸助する。是を一心と曰ふ。智慧を豐かにして衆塵にあつて財業甚だ多く、放逸の中に所在して穢を覺り、捨遠せず、之を患厭せず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか不迴還度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施あるも聲聞及び緣覺の法に著せず、道に退轉せざる、是を布施と曰ふ。迴還せずと雖も禁戒を毀たず、乃ち佛道を成ず。是を持戒と曰ふ。諸の聲聞及び緣覺地を越えて、中ごろに墮落して滅度を取らざる、是を忍辱と曰ふ。若し精進を以て權方便を執り、違失する所なく一切智に至る。是を精進と曰ふ。菩薩若し一切五樂にありて、方便禪思一心を以て、衆の塵勞を滅して智慧を遵承する、是を一心と曰ふ。若し智慧を執つて、諸の凡夫沙門梵志を化し、上は聲聞及び緣覺に至る、度世を正見にて度して大哀を建立す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか迴轉度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施あるも滅度を志さず、習俗を厭はず、是を布施と曰ふ。若し禁戒を學んで聞く所尠くして、廣博なること能はず、[三八]是を持戒と曰ふ。若し仁愛を習ふて遠離する能はず、瑕穢瞋恨の地に住す。是を忍辱と曰ふ。若し以て勤修するも、志、榮樂にあり、制限する能はず。是を精進と曰ふ。若し禪思を學んで、外にあつて忍辱して吾我を計せず、是を一心と曰ふ。所志の智慧を以て世業を度し、自ら拔く能はず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか嚴淨度無極に六事ありと謂ふや？　所施あるも其の報を求めず、福を一切に加ふ。是を布施と曰ふ。遵ふ所、禁法にして懈怠なく、恒に奉じて勤修す。是を持戒と曰ふ。又仁和を以て心に所倚なく、精進して道に合す。是を忍辱と曰ふ。我及び彼を捨てて、異るあるなし。是を精進

【三八】一考、この持戒・精進・智慧の說明は波羅蜜の意に反する如く思はる。如何？否定の ma を、梵本にて讀み違へたのであらうか？

何を以てか說處度無極に六事ありと謂ふや？　若し所施有つて二心有るなく、常に喜び平等にして偏黨するなし。是を布施と曰ふ。若し文飾有つて戒法を想ひ、誤諂犯禁あるも、是れを妄想と解して心に所著なく、諸犯を化する者、是を持戒と曰ふ。若し倒住するも、忍んで順從せず。是の處所にして報應あるを說く。是を忍辱と曰ふ。精進して報を求め、所有の方便をもつて處所を棄つる。是を精進と曰ふ。若し復た一切所有を棄捐して、所有にあつて所有なし、是れを一心と曰ふ。若し常に誤諂・諸報無益の業を觀ずるを以て、其の處所を見て、無處所を解す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無害度無極に六事ありと謂ふや？　若し衆祐及び凡夫に施して、等心を等しくして異るなき、是を布施と曰ふ。奉ずる所の禁法に所著なく、衆生を救はんと欲す。是を持戒と曰ふ。危害を懷はず、世の八法を越え、本際に堪任する、是を忍辱と曰ふ。若し能く魔所の建立を覺了し、篤信勤修して諸の罣礙を消す。是を精進と曰ふ。定めて所毀なく、無罣礙道德の門に入つて、平等果に逮ぶ。是を一心と曰ふ。若し智慧を以て周旋往返し、一切世俗度世の法にして所損なき、是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無敗度無極に六事ありと謂ふや？　志性專和にして色を存在せず、而も其の理に順ひ、若し法施及び衣食施を以てすれば、是を布施と曰ふ。禁解を奉ずと雖も、其の心質朴にして誤諂あるなし。是を持戒と曰ふ。心虛空の如く、和合して而も成る。是を忍辱と曰ふ。所修の勤力・一切の所說、財業所宜の妄言を用ひず、是を精進と曰ふ。其の禪思する所永く所著なし、是を一心と曰ふ。其の聖達を奉じて其の文字に順ひ、以て他人を益す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか貧度無極に六事ありと謂ふや？　若し色像を除いて德を興立する所、法を以て布施し、若しくは衣食を施す、是を布施と曰ふ。性雜碎ならず、奉ずる所諂ふなく、其の禁法に順ふ。是を

清徹ならしむ。是を持戒と曰ふ。所生の處、無常苦を解し、衆の想著を制し、仁和を慕樂す。是を忍辱と曰ふ。若し空・無想・無願を求めて、寂然の法に至る。是を精進と曰ふ。若し禪思を以て衆塵を消滅し、是の定意を受けて覺意を捨てざる、是を一心と曰ふ。若し智慧を以て寂然を樂ひ、惔怕光明にして[三五]八解門を得て、他人の爲に說き、聲聞[三六]緣覺の地に墮せず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか樂觀度無極に六事ありと謂ふや？ 若し妄想なく、人有るを計ざる、是を布施と曰ふ。往古及び當來の事を察して、心自ら思惟す。常に周旋する所、悉く之を識念し、無所得を獲る、是を持戒と曰ふ。若し心、罪にあつて、一切法に等し、衆生の壽命と人想を觀住し、悉く分別す。是を忍辱と曰ふ。所觀に堪住し、普く禪を興發し、永く倚る所なく、修行の善權方便を合集す。是を一心と曰ふ。若し欲を見ず、諸の瑕疵を棄て、瑕疵の法に於て犯負する所なく、道意を失はず、無漏淸淨にして、無哀を棄捨し、自ら心意を調へて、幷びに衆生を化す。本地にあつて而も動轉せざる、是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか一切所入度無極に六事ありと謂ふや？ 一切諸法を與へる者あるなくして自ら逮得し、是を以て勸助し、諸の[三七]窮匱を救ふ。是を布施と曰ふ。若し大哀を以て、衆生を勸助して、而も之を安立し、常に聖慧を具して、本懷恨なく、報應悅豫す。是を持戒と曰ふ。若し能く不退轉法を懷き來つて、執持するを堅固にして舒緩せず、是を忍辱と曰ふ。若し元首を信じて、智慧を執持し、方便を設計する、是を精進と曰ふ。若し禪定を以て究暢成就し、無數一切の黎庶を療治して、而も危害なく、順從し雜らざる、是を一心と曰ふ。若し智慧を以て種性の法に住し、篤く信じ精進し、其の念及び定所住疑ひなく有命を計らず、權方便を執つて世間の學と不學及び緣學慧に處するに堪え、若し無上正眞道法を成じて、一切智を成ず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【三五】八解門。八解は八解脫の略、八解脫は背捨ともいふ。三界の煩惱に違背し、之を捨離して其の繫縛を解脫する八種の禪定を言ふ。

【三六】緣覺（獨覺 Pratyeka-buddha）は、他の爲に說法せず。

【三七】窮せる匱、即ち貧者をいふ。

是を布施と曰ふ。若し禁戒を察して缺漏することなく、所行具足する。是を持戒と曰ふ。四禪に住在して、空事を奉行し、所著の想を消す。是を忍辱と曰ふ。若し空法に住して等方便を行じ、身口心に行じて犯す所なし。是を精進と曰ふ。若し禪定を修して、内に於ても外に於ても所著なき、是を一心と曰ふ。智慧無極を以て十二緣に住し、諸法を亂さず、聖明に順從す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか爲衆生厄故度無極に六事ありと謂ふや？　若し慈心を行じて、以て元首となり、志、悅豫を懷いて三境界を淨くす。是を布施と曰ふ。若し心專精にして清淨無垢なるを、是れを持戒と曰ふ。若し地獄を除いて、衆苦を堪任し、能く其の意を制す。是を忍辱と曰ふ。若し四等を攝して、惠施・仁愛し、人を利するに等しく利し、時に隨つて方便して危厄を救護す。是を精進と曰ふ。[三一]阿須倫を現じて修業清淨に、身自ら住して、現に衆生を安護す。奉じて怒法なく、他人を救護する、是を一心と曰ふ。若し心清淨にして念ずる所具足して、安諦に住して衆生を開化し、微かに分別して、說法を厭はず、塵勞を消化す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか法故度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く[三二]十八不共諸佛の法を逮得する、是を布施と曰ふ。經典を樂んで志願を建立し、脫門を成就して身口意を護る。是を持戒と曰ふ。若し大哀を興し、小慈を去り、衆生の爲の故に常に柔輭を懷ふ。是を忍辱と曰ふ。若し四神足をもつて、輕擧能く飛び、常に方便を行じて元首となる、是を精進と曰ふ。[三三]四意止に住して禪定を本となし、究暢して四分別辯を備悉す。是を一心と曰ふ。文字を識識し、總持に逮致し、敷演する所の法。一切意に入る。[三四]四無畏を攝して不退轉を宣す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか寂樂度無極に六事ありと謂ふや？　若し布施する時、能く其の心を攝す。已に其の心を攝して、願ふて獨處にあり、必ず勸助有り。是を布施と曰ふ。以て能く諸陰蓋を拔き去り、悉く

【三一】 阿須倫(Asura)。(阿修羅)か？意味通ぜず。

【三二】 十八不共法(Avenika-dharma)。十八不具法と同じ。佛に限る十八種の功德法なり。佛に限つて他の二乘菩薩に共同しないので、不共法といふ。一、身無失。二、口無失。三、念無失。四、無異想。五、無不定心。六、無不知已捨。七、欲無滅。八、精進無滅。九、念無滅。十、慧無滅。十一、解脫無滅。十二、解脫知見無滅。十三、一切身業隨智慧行。十四、一切口業隨智慧行。十五、一切意業隨智慧業。十六、智慧知過去世無碍。十七、智慧知未來世無碍、十八、智慧知現在世無碍。個々の名目の說明については佛教辭典を見よ。

【三三】 四意止。四分別辯？

【三四】 四無畏。前出。

婬怒癡盛んなるも、身其の中に處して而も心亂れず、是を一心と曰ふ。其の智慧を以て權方便を執りて遊入する所にあつて、未だ曾て虛妄ならず。依る所なくして深妙法を仰講す。是を智慧と曰ひ、是を六となす。

何を以てか清淨度無極に六事ありて謂ふや？　若し己心を以て自ら佛土を淨め、瑕穢あるなし。是を布施と曰ふ。設へば能く一切の衆會を恭敬して輕慢を被らず。是を持戒と曰ふ。設へば能く平等に佛土を成就し、平かなること手掌の如く、細軟柔和なること猶ほ天衣の如し。若干種の寶は其地に雜厠し、而も放逸なるなし。是を忍辱と曰ふ。若しは以て不可計の會を周施し、一切の國土は恭敬せざるなし。猶ほ渴仰の如し。是を精進と曰ふ。若し相好を以て悉く能く成就すれば、光明遠く照して、心の穢病を去り、衆の塵勞を消す。是を一心と曰ふ。若し衆生を解すること猶幻化の如く、而も爲に說法す。下禽獸に及ぶも妄に捨てず。是を智慧と曰ふ。是を六と爲す。

無際品第八

佛、喜王菩薩に告げたまはく、『何を以てか無際度無極に六事ありと謂ふや？　若し衆人の心、陰蓋を懷ふを見て、先づ布施し已つて、却つて爲に說法をして之を開化すれば、是を布施と曰ふ。若し塵勞を抱かば、訓誨消除して餘りあるなからしむ。是を持戒と曰ふ。若し世の愚人、人想を迷起し、怯弱を懷かず、心に所畏なし、爲めに分別して說いて邊際なからしむ。是を忍辱と曰ふ。若し設へば方便して罣礙を去り、慧に暗翳なからしむ。是を精進と曰ふ。無我忍に住し、衆の邪業を棄て、禪定は亂れず、是を一心と曰ふ。若し智慧を以て辯才を成就し、入る所平等にして說くこと無邊に、一切禪定・定意・脫門・正受は、毀害する所なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか信道度無極に六事ありと謂ふや？　若し能く決了して布施すべき所、道法を勸助す。

何を以てか行捷疾度無極に六事ありと謂ふや？　住して所逮なく、福施を造し、其の心[二八]坦然と歸する所なし。是を布施と曰ふ。若し禁戒を奉じて產業を求めず、想念する所なければ、是を持戒と曰ふ。一切法に遵つて顚倒に墮せず、時に隨つて仁を行ず。是を忍辱と曰ふ。其の所業に從つて、終に迴轉せず。日日勤修し乃至成就す。是を精進と曰ふ。若し智慧を執して禪思極りなし、是を一心と曰ふ。若し菩薩あり、聲聞に在つて[二九]無餘慧を行じ、緣覺地に於いて無餘に至り、欲及び凡夫の中に墮せず、亦缺漏なし。勸度あらんと欲するが故に、其の中にあつて志所著なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか深奧度無極に六事ありと謂ふや？　若し施す所あつて、我、一切に施すを得たりと念はず。これを布施と曰ふ。所持の禁戒、以て衆生に順つて生死に倚らず。斯は則ち聖明の敎ふる所の法なり。是を持戒と曰ふ。邪見の法を棄てゝ、初め大意を發し、仁和を建立す。是の深戒を以て、忍を用ふること無極にして、無我を遵解し、妄想を懷はず、榮を冀ふ所なく、亦冀はざる無く、亦冀はざるに非らず。是を無冀と云ふ。名けて忍辱となす。邪見法にあつて、勤修業を立て、而も三界に於て悉く所著なく、滅度を想はず。是を精進と曰ふ。[三〇]外學・諸邪見の業に有在つて、所行平等にして正眞の道あり。是を一心と曰ふ。智慧に處し、正眞の法を修して、而も惑亂せず。所在遊至して而も罣礙せず。其の心寂然として常に放逸なし。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか雜度無極に六事ありと謂ふや？　設へば所施あつて若干種味あり。品品各異るも受者の意たる可し、若干の福を殖へて、自ら身を貪らず、復た爲めに若干の章句を頌宜す。若し佛土を取つて所願を具足すれば、是を布施と曰ふ。禁戒を建立し、佛土を嚴淨して誓ふ所に違はず。是を持戒と曰ふ。若し彼の佛土に有る所の衆生は、諸穢薄少にして心に瞋害なく、是を以て勸助す。是を忍辱と曰ふ。若し能く聲聞・緣覺及び菩薩衆に獨步する、是を精進と曰ふ。設へば諸衆の會にて

【二八】坦然。心平かなること。

【二九】無餘慧。無餘は餘殘なく、餘蘊なきこと、事理の無極せるをいふ。

【三〇】佛敎以外の外道をいふ。

何を以てか爲意度無極に六事ありと謂ふや？　若し勸助を離れて報を想はざる、是を布施と曰ふ。奉ずる所の禁戒毀犯する所なく戒佛道を勸助す、是を持戒と曰ふ。所修平等にして柔輭を行ず。是を忍辱と曰ふ。勸修懈らず、進退已を制す。是を精進と曰ふ。若し能く奉行して諸の放逸を捨て憒亂するを懷はず。是を一心と曰ふ。若し所聞あり聖明の德を以て道を勸助す。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以つてか勸修度無極に六事ありと謂ふや？　一切の所有を愛惜する所なく、能く放捨す、大海に入るに由つて、諸の財寶を致して、以て衆生に濟す。是を布施と曰ふ。若し禁戒を護つて、自ら[25]所瞻を離れ、名色に著せず。是を持戒と曰ふ。毒意を懷くあつて害を加へんと欲し、乃至頭を截り、節節支解せられて、心に恨を懷かず。是を忍辱と曰ふ。若し能く一切の論議を越度し、其の心寬弘にして猶ほ大海の如し。一時枯竭して、意を恣にし過ぐるを得。是を精進と曰ふ。若し中宮の愛欲の中に在つて、[26]四禪を失はず。是を一心と曰ふ。設へば能く一切萬物を觀察して、猶ほ幻化の如く勤めて得る所なしと思ふ。深く微妙に入つて聖明を失はず。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何をか正眞度無極に六事ありと謂ふや？　施與する所あり、衆の罣礙を捨てゝ希求する所なし。是を布施と曰ふ。微妙を奉修して禁法に違はず、聖義を棄てず、既に所施あつて衆の放逸を釋て、諸の惡趣を離れて能く志を建立す。是を持戒と曰ふ。能く一切を忍んで善法を諍はず、常に仁慈を施す。是を忍辱と曰ふ。精學に普くして、而も怯弱ならず。是を精進と曰ふ。若し禪思に於て能く自ら勸修して三昧に入り、特殊の業を以て其の心を調護す。乃至所願は[27]大善見轉輪聖王の如く、國土に在りと雖も、貪想・瞋恚・害想を消除して、衆生を慈念す。是を一心と曰ふ。而して聖明に於て普く所著なく、盡く大哀無傷害心を觀る。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

【二五】所瞻。瞻、仰ぎ見ること。

【二六】四禪。詳しくは四禪定、新に四靜慮といふ。此の四禪定を修して色界の四禪天に生ずるのである。此の四禪は內道外道共に修し、因にあつては欲界の惑網を超へ、果に在つては色界に生じ、且つ諸の功德を生ずる依地根本となるので、本禪といふ。一、初禪。二、二禪。三、三禪。四、四禪。一々の禪の說明は佛教辭典を見よ。

【二七】大善見轉輪聖王（Mahāsudarśana-cakravartin-rājan）。過去に出でた轉輪王の一人である。又大妙見ともいふ。巴利語 Mahāsudassana 本生話一・九五に出る。

何を以てか應順度無極に六事有りと謂ふや？ 若し明施を成じて同心と倶に異念たし。是を布施と曰ふ。若し禁戒を以て勸めて欲を離れしめ、無穢の行清淨にして猶ほ水のごとし。是を持戒と曰ふ。若し和心を以て衆生を勸化し、恨心なからしむ。是を忍辱と曰ふ。設へば勤修方便寂然なるを以て、是を精進と曰ふ。其の用柔和にして、醫藥・法書能く天地を動かし、若し禪思を以て〔二三〕諸見六十二疑を消滅し、塵勞に遊んで、畏る所なし。是を一心と曰ふ。若し智度を以て天地を動かし、學問書疏慧通じて大哀を以て、善惡・苦樂の趣く所を曉解するを以つて、一切智に依仰し、恃怙す。開士是に由つて無所畏を見る。是を智慧と曰ふ。

何を以てか造作度無極に六事ありと謂ふや？ 既に自ら布施し、他に教へて施さしむ。復た他人に勸めて、以て衆生に惠み、愍哀して之を護る。是を布施と曰ふ。衆生を用ひての故に常に慈心に依つて放逸せず、衆の惡業を斷ず。是を持戒と曰ふ。其れ柔和・恩潤將護するを以て、瞋恨を起さず。是を忍辱と曰ふ。設へば功德善本の至要をして道化を興隆し、諸の不逮を濟はしむれば、是を精進と曰ふ。其の禪思・無常・苦空・非身の義を以て、悉く是の事を解し、〔二四〕四倒に墮せず。是を一心と曰ふ。若し智度を以て衆の善本をして漏失せざらしめ、現在を建立して諸の不善を消す。權方便を以て開化する所多く、一切を度脫する。是を智慧と曰ふ。是を六となす。

何を以てか無作度無極に六事ありと謂ふや？ 若し五欲功勳の德を以て衆生に教授すれば、是を布施と曰ふ。設へば無數の衆人を將護し、斯品次を用ひて、佛法の戒を奉じて所生處を護れば、是を持戒と曰ふ。是れ愛欲塵勞を寂滅するを以て、衆生を訓誨して、其をして殊特ならしむ。是を忍辱と曰ふ。世俗に在つて無窮に遊び、戲樂自在なり。斯の眷屬を以て衆生を開化する、是を精進と曰ふ。設へば禪定を以て覺意を志護し、逹せざる所なし。是を一心と曰ふ。若し智慧を信じて無極明を學び、斯の智慧を以て一切を度脫す。是を六となす。

〔二三〕諸見六十二疑。佛在世當時の外道說六十二派を言ふ。前出。

〔二四〕四倒。四種顚倒の妄見である。之に二種ある。一は生死の無常無樂無我無淨に於て常樂我淨を執するを凡夫四倒とする。一は涅槃の常樂我淨に於て、無常無樂無我無淨を執するを二乘の四倒とする。初を有爲の四倒と言ひ、後を無爲の四倒と言ふ。有爲の四倒を斷ずるを二乘とし、有無爲の八倒を斷ずるを菩薩とする。

設ひ所見有つて四恩の行を以て、加益する所有り、時に隨つて精進して、大慈無蓋の哀を奉遵し、以て衆生を化すること稱計すべからず。以て元首と爲つて、一切の斯心の所行を勸助す。所苦を見て三界を導利し、以て蒙り、普く覆ふ。是を精進と曰ふ。若し未だ智慧の元を修行せず、而も精勤を以て、一切諸法違失する所無し。解空を見る有つて、三脫門を了す。是を一心と曰ふ。若し一心に衆善・德法に志して、而も忽ち忘れず。衆想を無からしめて、悉く佛道に入り、其の所依に從つて、因つて之を教訓し、無想に至つて、脫門を願はず。是を智慧と曰ふ。是を六と爲す。

何を以てか休息道度無極に六事ありと謂ふ。斯の若き吉祥、意の好樂する所、世俗の業、布施する所を以て正見に入り、功德を合集して衆生を勸助す。是を布施と曰ふ。其の心休息し、志信し、道に慧く、施與する所を以て、正語・正命・正業・正方便す、是を持戒と曰ふ。菩薩の所作の休息道は戒の所度なり、其の無所從生法忍に報を望み想はず。是を忍辱と曰ふ。心得可らず身復た精進して所倚無し。是を精進と曰ふ。顚倒を捐去し、定意亂れず、專精に意を攝して放逸なからしむ。若し無想を執して智慧聖を執して、危厄・衆惱の患を度脫す。是を智慧と曰ふ。正見・正意を奉行して、一道を興發して乃ち不退轉となる。是を智慧休息道度無極六事と曰ふ。

何を以てか不置遠度無極にして六事有りと謂ふ。若し一切に施すに權方便を以てして道心を發す。是を布施と曰ふ。心、所害なく、無倒を道となす、長く安隱に至つて、到る所患なし。若し菩薩有つて兜術天より具足し來り、大千世界を動かして、淨深土を得る。是を持戒と曰ふ。若し忍辱を以て懷來をなし、建立道を興し、世の[三]八法に超ゆ。是を忍辱と曰ふ。精進して慈を勸めて衆生に加ふ。是を精進と曰ふ。若し一切正受禪定を致し、而して放逸なく四等心を受くる、是を一心と曰ふ。智慧度無極の願行を以て、勸助して一切法の方便宜しきを成じ、周濟せざるなし、是を智慧と曰ふ、是を六となす。

【三】八法。八風とも言ふ。世間の愛する所、憎む所、能く人心を扇動すれば八風と名く。利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂である。
又地水火風を名けて四大とし、その四種は處として有らざることなきを以て、かく言ふ。色香味觸を名けて四微とする。其の四種は體性微細であるからである。人の身は此の四大の假合によつてあり、此の四大も亦四微の所成に由る故に總稱して八法とする。

何を以てか念度無極に六事ありと謂ふや？　若し布施の徳奉行を得て、道を勸助し、衆生を濟度す。是を布施と曰ふ。其の身口心に獲る所の[17]功祚戒禁の報は、施を以て道に合す。是を持戒と曰ふ。設ひ諸法を受けて、合集して會に在るも、所顯審かなる如し。是を忍辱と云ふ。設ひ所決なきも方便奉行し、彼此慧有つて、精進に礙無し。是を精進と曰ふ。若し禪思を發し、所斷瑞應大徳に[18]諮受す、是を一心と曰ふ。智は彼岸を越え、聖は頂に超在し、以て道決を授けて、其の意を[19]將養す。將養するは、心行を守護し、道法を頒宣す。是を智慧と曰ふ、是を菩薩念度無極と曰ふなり。

何を以てか離世度無極に六事有りと謂ふ。若し方便を以て、諸の有爲を斷じ、勸めて無爲道果の徳に至らしむれば、是を布施と曰ふ。若し禁戒を求めて、道法の元を慕ひ、心に邪想せず。是を持戒と曰ふ。若し無常・苦空・非身を了し、內外の法を解し、斯の法樂を好む。是を忍辱と曰ふ。其の精修を以て傷害の意無く、所願往古の義を奉遵し、心に所著無し。是を精進と曰ふ。設ひ禪定を以て至觀を捨てず、是を以ての故に塵勞を滅除す。是を一心と曰ふ。假使十二緣起を亂さざるも、權方便を攝して塵勞を遠ざけず、其の衆人に從つて心に所好を懷ひて、時に隨つて開化す。是を智慧と曰ふ。是を六と爲す。

何を以てか造有所作業度無極に六事有りと謂ふや？　所施の業・四恩の祚を以て、衆生に加ふ。是を布施と曰ふ。若し禁戒を用ひて、無央數衆生の類の爲に、皆恩を蒙らしめて、濟度を得。是を持戒と曰ふ。猶ほ飛鳥禽獸新生の時に、火中に墮著するが如し。菩薩之を見て、火を滅して難を脫せしむ。彼、適安きを見て、救施恩義に因つて道心を發す。是を忍辱と曰ふ。設ひ復た無數國土の[20]黎庶を開化し、教訓するも、時に隨つて衆に降る。若し[21]八難に在るも、忍辱を造立す。假使頭を截り、衆の苦惱に遭ふも、悉く以て之を忍んで、一切諸危に心に恨を起さず。是れ亦忍辱なり。

【一七】功祚。祚はさいはひ、くらひ。

【一八】諮受。諮は咨に同じ。はかる、とふ。

【一九】將養。養ふこと。將も又やしなふなり。

【二〇】黎庶。衆生の意。

【二一】八難。見佛聞法に就いて障難ある八處である。又八無暇といふ。道業を修する間暇がないのである。一、地獄。二、餓鬼。三、畜生。四、鬱單越、(北拘盧洲、樂報殊勝にて總て苦なき故)。五、長壽天(色界無色界の長壽安穩なる處)。六、聾盲瘖瘂。七、世智辨聰。八、佛前佛後、(二佛の中間佛法なき處)。

を精進と云ふ。己を念じ、彼を愍み、則ち弘安を致す。猶ほ[13]箜篌の如し。然る後寂に會ふて其心堅固なること亦[14]師子・鹿獸の王の如し。復た導師の衆の賈人を度するが如し。是を精進と云ふ。若し一心を興し、色に所生なく、聲聞法を發し、緣覺法を起し、其の業に在りて而も滅度せず。是を一心と曰ふ。若し法に於いて衆生あるなく、我なく、人なく、壽命あらず、猶ほ六事の如きを以て、道を修し法を念じ、出家行學して[15]十惡を刈り去る、是を智慧と云ふ。是れ慧度無極の六事なり。

何を以てか爲己修立行智度無極に六事ありと謂ふや？ 若し大財を得て、己身を勸め、及び衆生を愍んで、救助して之に惠む。是を布施と云ふ。設ひ天上に在るも、又人間に在るも、來つて安隱を致して自然に飮食す。之を持戒と云ふ。若し忍辱に逮んで、忻豫寂然とし、顏色第一なること、猶ほ蓮華の如くして、豪高貴無極の報に至る。是を忍辱と云ふ。旣に佛道を行じて他人に仰がず。奉遵して修すと雖も、身自ら獨立す。是を精進と云ふ。若し禪定を受けて、常に[16]劫毀劫成の時の如くし、來つて是の國に到る。是を一心と云ふ。世間に處すと雖も、誠信の行を懷ひ、身口身を護る。是を智慧と云ふ。是を以て爲己勤修無極と曰ふ。

何を以てか逮得度無極に六事ありと謂ふや？ 若し布施を了し、大財富を致し、是の所施を以て、佛道を逮得し、一切を勸助す。是を布施と云ふ。心、所著無く、寂靜惔怕にして想を起さず。是の持戒を以て、衆生を勸濟す。是を持戒と云ふ。其の法を誹謗せず、傷害の心無く、佛道を成ずるに至つて、未だ曾て恨あらず。是を忍辱と云ふ。設ひ精進を奉ずるも、惱熱を抱かず、夙夜修業す。是を精進と曰ふ。身、至敎に遵ひ、一切犯す無く、三昧を逮得す。是を一心と曰ふ、若し一切諸法を奉行し、了せざる所なく、一切無に達す。是を智慧と曰ふ。是れを以て逮得度無極に六事ありと曰ふ。

【一三】 箜篌。一種の樂器。くだらごと。

【一四】 師子・鹿獸(Simhamr-garājun)。師子は獸王と稱せられる。mṛga は廣義では獸、狹義では鹿を意味する。

【一五】 十惡。殺生、偸盜 邪婬(己の妻妾以外の者と欲を行ずること)。妄語、兩舌(離は語)、惡口(麁惡語)、倚語(語に婬意を含むもの)、貪欲、瞋恚、邪見をいふ。

【一六】 劫毀劫成。印度世界觀では因緣滅すれば劫末にこの世界は劫火に燒かれて滅して、極微に歸する。更に暫くして、因緣熟して、世界が新劫に成立し、生物が生ずると考へる。

何を以てか益他人度無極に六事ありと謂ふや？　徳動を樂しむを以て衆生を開化す。是を布施と爲す。慈心に依倚して傷害を懷はず。是を持戒と曰ふ。所治の正法悉く能く之を忍んで穢厭せず。是を忍辱と曰ふ。若し彼の人の爲めに至行を勤修し、危厄を濟はんと欲し、悉く永安を得れば、是を精進と曰ふ。若し法を以て心懷に思惟し積徳して淸淨なるあれば、是を禪定と曰ふ。斯の因緣を以て一切衆生を充滿飽足して道意を顯揚す。是を智慧と曰ふ。是を益他人度無極と曰ふ。

何を以てか處所度無極の六事と謂ふや？　顚倒を棄るを以て、布施の所作、其の報を望まず。是を施與と曰ふ。所有の財業は、戒禁に因依して衆生に用ゆるが故に、忍辱・精進一切已身の所住を習ひ、經典を思惟して修行寂然たり。而して〔一〕憺怕に在つて、其の內に住す。是を智慧と曰ふ。是れ六處所度無極なり。

何をか道度無極の六事と謂ふ？　若し能く無所從生法忍を習行すれば堪任せざるなし。是を布施と曰ふ。若し身口心際を得ざるを以て、是を戒と曰ふ。法の眞諦に於て修順して、悉く諍ふ所なきを以て、是を忍辱と曰ふ。若し身口心、反逆に任せず、雜碎を思はず、勤修して懈らざる、是を精進と曰ふ。設ひ法を奉行し、心以て精專にして、志所著なく、一切智を好んで所了審かなる如し。是を一心と曰ふ。三界は空にして、幻化夢の如しと解し、道に三世去來今なきなり。塵勞を拔濟する、是を智慧と曰ふ。斯は是れ佛道の六度無極なり。』

佛、喜王に告げたまはく。『何をか慧度無極と謂ふや？　若し善權方便を毀斷せず、衆生を開化して慧を以て之を濟ふ、是を布施と曰ふ。若し〔二〕五百頌偈を造作して、九十六徑を棄捐し、衆の苦惱を消して正見を奉遵して、至善處永安之土を超ゆる、是を戒と曰ふ。若し苦患を除きて慧室寂然とし、婬欲を厭ふて勤修精進し、展轉相敎へて道を以て相度する、是を忍辱と曰ふ。奉行自制して、是の如き所有の國土人民象馬車乘に恬怕ならんと欲し、已に苦の元を求め了りて根本なしと識る、是

〔一〕憺怕。憺はしづかなること。怕はをそること。恬の方よし。

〔二〕五百頌偈とは、何人かが造つた外道攻擊の論書であらう。考ふべし。九十六經とは、外道の九十六說をいふ。

ず、一切智に至る。是れ精進度無極なり。一心を修奉して法想を志求して佛道を成ぜんと欲す。是れ禪度無極なり。道義に住し、一切法を暢べ、審かに至眞に最正覺を成じて、心異るあるなく、妄想を抱かず。是れ智度無極なり。是を住度無極に六事なりと云ふ。

何をか生死度無極に六事ありと謂ふ。施す所無量にして盡くべからず。佛道を得るに至つて生死を周旋し、所在の處大財富を致す。是れ施度無極なり。以て終始を勸め、諸惱の患悉く福慶を蒙り、壽命を具足して限量すべからず。生死の中に在りて而も中夭せず。是を戒度無極と云ふ。若し他對を得て、而も心起らず。是を忍辱と謂ふ。不可計の劫に禪定を厭はず、善本を奉行す。是を精進と曰ふ。所生の緣を以て禪定正受す。是を名けて禪と曰ふ。若し不捨諸度無極を以て、佛道を勸助し、一切諸業技術を建立して、其の至慧を從つて所を得しむ。是を智慧と曰ふ。是れ生死に在つて、六度無極なり。

何を以てか所著塵度無極に六事ありと謂ふ。立てんと欲する所の道、衆善德勳皆以て、衆生の類を勸化す。是を布施と曰ふ。師子の如く、猶ほ聖王の如く、八萬四千の諸宮婇女あり、婇女の佛道に達ふ所の者は、終に倶にせず、三寶に歸して三百塵を消除せしむ。衆勞も一の如く、疾かに道術を致す。是の戒禁を以て衆生を慈勸する、是を持戒と曰ふ。戒の度する所は塵勞を去らむが爲めなり。他心に順從して穢塵ならず。是れ忍辱と爲す。精進の著する所、何を以て精進所度無極と謂ふや？ 所著と云ふ故なり。故に精進を行じ、人を恐怖すること明王子の如く、施行を度知して、因つて之を安んず。所著を以ての故に精進を行ずるなり。何を謂つて禪と爲すや？ 有著の故に禪定を行ずるのみ。吾我を見るを以て、便ち之を攝息す。是を禪定と云ふ。何を謂つて所著の故智度無極を行ずるや？ 若し智度無極にして盡す可らざれば、愍傷光暉にして聖慧を樂得し、道德を勸助す。是を智慧と曰ふ。是れ所著の故に六度無極と曰ふ。

所多く、諸天及び十方人を愍傷して復た重ねて敎するを爲さん。』佛、喜王菩薩に告げ給はく、『諦に聽き、諦に聽き、善く之を思念せよ。今當さに汝、一切比丘諸菩薩等の爲めに重ねて之を解散すべし。』喜王菩薩、諸大衆と衆を受けて聽く。

佛言はく、『〔八〕何を以てか修習行法度無極に六事あると謂ふや？　古より已來未だ曾て發意せず。則ち平等・至眞菩薩心を發して、過去平等覺所に在り、及び衆生に於て、布施・持戒・忍辱・精進・〔九〕一心・智慧にて、佛道を志樂し、心、至眞を願ひ、未だ曾て忽忘せざる、之を修治習行而度無極と云ふ。是れ六となす。

何を以てか光曜度無極に六事あるとするや？、明智道心の法を發顯し、已に自ら戒を察し、菩薩心を發し、始め施より起き、戒・忍、精進・一心・智慧に至る。是を光曜度無極を謂ふ。

何を世度無極に六事ありと謂ふや？　佛を供養し、功を興し、德を立つる所は、皆衆生の爲なり。六度も亦然り。〔一〇〕六情を拘制し、六通を志慕し、往業に達して大道を進む。是れを世度無極と云ふ。

何をか衆生の爲めの故に行度無極に六事ありと謂ふや？　若し布施を以て衆生を攝し、心自ら念言して、諸衆生をして常に安穩を獲しむ。亦復た人に勸めて佛道に入ら志む。六度無極亦復た是の如し。戒を以て之を安じ、苦は空の如きを以つて、忍辱の法にて之を度脫し、精進にて之を濟ひ、一心を以つて衆生を攝護し、自ら顚倒の想を投げ棄てて智慧を逮し、道を勸助して衆生を安ぜんと欲して、正覺を成ずるを求めて、衆生を度せんと欲す。是を以て衆生の爲めの故の行度無極に六事ありと謂ふ。

何を以てか住度無極に六事ありと謂ふや？　若し堅固に志願を建立し、道心淸和にして諍訟なし。是れ施度無極なり。所立の遊土に無想戒を觀じ、志、道法に存して望報を求めず。是戒度無極なり。道法に住して一切苦を忍び、道要に堅住す。是れ忍度無極なり。所立の正行無央數劫精進を廢せ

〔八〕以下、前品諸度無極品第六に列擧した度無極に屬する六事を夫々說明する。就て大體人度無極の名に相應しいやうに、それに屬する六波羅蜜の性質、內容を說明してゐる。然し、中には類型的のもの多く、時には波羅蜜の善き性質に反するものの如きもある。概して特長のないものが多い。

〔九〕一心。禪定の意に用ひらる。禪定は一心に心を集中するからであらう。

〔一〇〕六情。六根のこと。舊譯では六根を六情といふ。根に情識を有するからであると。

度無極あり、法種度無極あり、八等度無極あり、道迹・往來・不還無著度無極あり、緣覺度無極あり、菩薩度無極あり、盡慧度無極あり、無所生慧度無極あり、建立慧度無極あり、天眼・天耳・心知・自在見過世事・知他人念・神足・漏盡の六通度無極あり、威儀度無極あり、愍傷度無極あり、行空度無極あり、捐捨度無極あり、滅度度無極あり、變化度無極あり、流布教度無極あり、分舍利度無極あり、是は諸比丘菩薩行ずる所の二千一百寂然度無極なり。

菩薩大士若し是を逮解せば、皆一切諸法殊特玄妙無際の行を致得せん。無等無倫懷來の聖哲、特仰する所なく、一切塵を消して至奏するところなく、諸の狐疑を斷ぜん。是の二千一百、其の中別に一百度無極は、主として[六]四大を除き、六衰を去り、餘あるなからしむ。三界に獨步して往來周旋して、遍く三世に入る。猶ほ日月の衆の冥を畏れず、萬物百穀草木を成就し、天の茂るを仰げば、皆地に因つて生ずるが如し。菩薩も是の如し。[七]二千一百の諸度無極及び是の百度無極とあり。其の二千一百の諸度無極を貪婬怒癡等に四事を分てば、各二千一百あり、合して八千四百なり。其の八千四百に各別に十事あり、合せて八萬四千となり、以て能く度無極を具足す。便ち已に八萬四千衆要の上業を備悉せば、八萬四千の諸總持門自然に達す。便ち諸佛五百の聖功品第各別に通ず。以て娛樂して一切衆生を化し、一切所行の境界を曉成し、時に隨つて發起して、濟安せざるなく、無極慧本際法身に至るべし。』と。

習行品第七

時に喜王菩薩、復た佛に白して言く。『我、世尊が粗ゝ要目を擧げ給ひ諸佛の境界說くを聞けり。本性不敏にして了義の歸する所を尋ぬる能はず。惟だ願はくは、大聖よ、意を垂れて愍念せられよ。善哉の德、當に廣く斯經の要典を歎演して、一切をして解さしむべし。哀念する所多く、安隱する

【六】　四大。地水火風の四をいふ。俱舍論では假實の二種の四大がある。假の四大を單に四大といふ。實の四大とは一、地大、堅を性とし、物を支持す。二、水大、濕を性とし、物を收攝す。三、火大、煖を性とし、物を調熟す。四、風大、動を性とし、物を生長する。この四は凡て一切の色法を造作するので、能造の四大といふ。四の四大とは世間の稱する所の地水火風である。

【七】　以下の數字的關係次の如し。

2,100（諸度無極）×4（事＝貪婬怒癡）×10（事）＝84,000（度無極）

愍哀博聞來度無極あり、出家不斷戒度無極あり、住神通度無極あり、神通意不斷無極あり、入欲度無極あり、立度無極あり、應度無極あり、衆報無報度無極あり、無樂度無極あり、時進度無極あり、光明無量光度無極あり、報安光度無極あり、不迴還度無極あり、娛樂度無極あり、鮮潔度無極あり、成世法度無極あり、淨世度無極あり、成種度無極あり、成眷屬度無極あり、不壞眷屬度無極あり、除塵來淨度無極あり、觀土度無極あり、宣誓度無極あり、無逸度無極あり、周旋度無極あり、滅度度無極あり、豪貴度無極あり、理眷屬度無極あり、無所忘失度無極あり、三十二相度無極あり、順時度無極あり、知時度無極あり、分別世度無極あり、順世度無極あり、邊際度無極あり、蠲除度無極あり、金剛度無極あり、造救度無極あり、自然度無極あり、伏魔度無極あり、無退度無極あり、一時度無極あり、無所著度無極あり、三昧度無極あり、訓誨度無極あり、佛道度無極あり、一切智度無極あり、無餘有餘度無極あり、可止度無極あり、諸佛度無極あり、方便度無極あり、愁感度無極あり、眞陀度無極あり、異度無極あり、四意斷度無極あり、四神足試神足度無極あり、四禪度無極あり、四意止度無極あり、四諦度無極あり、[五]信根・精進根・意根・智慧根・定根度無極あり、信力・精進力・意力・定力・智慧力度無極あり、七覺意・八品道行度無極あり、寂然度無極あり、觀度無極あり、樂明度無極あり、來解脫度無極あり、比丘聖衆度無極あり、八部會度無極あり、分別度無極あり、繫解法度無極あり、分別順理度無極あり、辯才度無極あり、無厭度無極あり、六度無極あり、眼耳鼻口身心度無極あり、愍他勸助度無極あり、愍已度無極あり、法度無極あり、宣度無極あり、邦伴度無極あり、勸樂度無極あり、三脫門度無極あり、異行度無極あり、解他度無極あり、勤用意度無極あり。十種力度無極あり、四無所畏度無極あり、大哀度無極あり、五眼・肉眼・天眼・慧眼・法眼・佛眼度無極あり、自在度無極あり、娛樂度無極あり、難得自歸度無極あり、十八不共諸佛之法度無極あり、曉了方便度無極あり、純熟度無極あり、自然度無極あり、三界行度無極あり、觀淸白行

【五】之等の名目は五根五力の内容である。

よ。』喜王菩薩、諸の大衆と教を受け聽く。佛言はく、『菩薩に[三]六事業あり。[四]習進行法修度無極に六事あり。光曜度無極と六事あり。世度無極に亦た六事あり。衆生の爲の故に行ふ度無極も亦た六事あり。住度無極に亦た六事あり。生死度無極に亦た六事あり。有所著度無極に亦た六事あり。益他人度無極に亦た六事あり。所處度無極に亦た六事あり。道度無極に亦た六事あり。慧度無極に亦た六事あり。已修立行度無に亦た六事あり。逮得度無極有りて、亦た六事あり。念度無極ありて亦た六事あり。離三世度無極ありて、亦た六事あり。所業度無極ありて、亦た六事あり。休息度無極に亦た六事あり。不置遠度無極に亦た六事あり。應愼度無極有り、亦た六事あり。造作度無極あり。亦た無作度無極あり。意度無極あり。勤修度無極あり。正眞度無極あり。健度無極あり。深奥度無極あり。雜度無極あり。淸淨度無極あり、無際度無極あり、信度無極あり、衆生の爲の故の行度無極あり、法の故の度無極あり、寂樂度無極あり、樂觀察度無極あり、一切所入度無極あり、說處度無極あり、無害度無極あり、無敗度無極あり、貧度無極あり、不迴還度無極あり、迴轉度無極あり、嚴淨度無極あり、堅强度無極あり、興成度無極あり、充滿度無極あり、爲世度無極あり、度世度無極あり、無上度無極あり、不亂度無極あり、無怨度無極あり、怨亂度無極あり、攝持度無極あり、無攝度無極あり、報應度無極あり、無報度無極あり、自然度無極あり、無所有度無極あり、廣普度無極あり、華度無極あり、無量度無極あり、慕求度無極あり、所厭度無極あり、妙樂度無極あり、無樂度無極あり、聞持度無極あり、生死長度無極あり、無斷度無極あり、樂純熟度無極あり、禪度無極あり、神通度無極あり、世巧便度無極あり、慈愍護度無極あり、行哀度無極あり、歡喜度無極あり、勸邪正見度無極あり、勸住無住見度無極あり、勸無倚度無極あり、勸意度無極あり、勸忍度無極あり、造無造業度無極あり、無餘度無極あり、佛興盛度無極あり、明度無極あり、時住明度無極あり、成就度無極あり、意不忽度無極あり、佛立家度無極あり、出家來度無極あり、

【三】六事。六波羅蜜を言ふ。檀(布施)、尸羅(戒)、羼提(忍辱)、毘利耶(精進)、禪(定)、般若(智慧)の六波羅蜜を言ふ。
【四】以下、諸の度無極に夫々六度(六波羅蜜)を宛てはめて分類す。各々の度無極とその六事は後品に詳しく出づる爲、その折に說明することとして、今は註釋を凡てならず。

卷の第二

諸度無極品第六

爾時喜王菩薩燕坐すること七日、他の異念なし。七日已りて後、試に自ら思惟して燕坐より起ち、高座に往詣し、稽首し佛を禮し、及び一切の現諸化佛并び衆菩薩に謁し、則ち佛前に往いて、叉手座を禮す。時に世尊寂然庠序として三昧より起ち、普く衆會を觀る。已に衆會を觀て默然として住し、稽首自歸す。

時に喜王菩薩前んで佛に白して言く、『道法玄妙にして[一]攀逮すべからず。無上正眞は譬喩すべからず。一切菩薩比丘聖衆諸尊神天皆來りて集會す。一切渴仰して法に飢虚す。會し來ること、甚だ久し。時以て過ぎんと欲す。願くは所問あらん。若し聽かるれば乃ち敢て言を發せん。』と。佛、喜王に告げ玉はく、『樂問する所あれ。狐疑し、衆結するを、如來悉く當に分別して之を說くべし。心解脫して餘の罣礙なからしめん。』と。喜王菩薩、復た佛に白して言く、『唯、然り、世尊よ、我向に斯の獨處に在りて燕坐し、心に自ら念じ言く、「斯の諸の諸菩薩、功を積み、德を累ね志を習はし調心を調へて佛道を好慕し、諸[二]度無極にて衆の德本を植ゑて以て至眞を求む。或は菩薩ありて衆生の爲めの故行度無極あり以て佛道を成ず。或は諸の菩薩を以ての故行度無極あり、或は生死衆漏を以ての故に、行度無極、或は無漏行度無極有り、此を合集し已る、其志す所の行度無極に隨つて、菩薩を長益して正覺を成ず。是の如く弘く普く以て因緣を成ず。初中至竟に法典目を習ひ、諸菩薩衆の善權方便を諦受し興發し、道法を顯隆し、惟其の意を說く。」』と。時に倍加して、喜王菩薩の言を咨歎し給ひ、『善い哉、善い哉、喜王菩薩、乃ち能く發意し、如來に是の如き異義殊特の慧を咨問す。仁昔、過去百千億佛に致す所を問ひ奉るを以てなり。』佛言ふはく、『諦に聽き、善く之を思念せ

【一】攀逮。攀、よぢる。

【二】度無極。波羅蜜と同じ。前出。

天、計數す可からざる諸天子等、一切心を同うして稽首して佛に歸し、尊を興さしめんと欲す。

なす故に光音と名ける。大火災にて色界の初禪天まで破壞する時は下界の衆生は盡く此の天處に集合して世界の再び成るを待つ。後に成劫の初に至つて、此の天から金色の雲を起して大洪雨を注ぎ、以て初禪天以下地獄に至るまでの世界を造り、世界の成り了るを待つて、此の天衆の福薄きものが次第に下生して、地獄に生るまでの衆生が生ずるといふ。

便ち是の法を見て執つて手にあり、　清和奉行して甚だ淸淨なり。
皆是れ我子にして化して際なく、　承佛の前後に慈仁を行ふ。』

爾の時世尊、是の三昧を說き已り、是の三昧を以て復た[一四三]正受す。喜王も亦三昧定を選擇して、因つて七十の正法に入る。適選擇し竟つて、『是の三昧は威神なり。』と。時に於て[一四四]維耶離城中に八萬四千人あり。城外にも亦復た八萬四千人あり、各〻心に念じて言く、『如來は至眞に甚だ値ふを得るは難く、久遠世に時にして乃ち佛あるのみ。希くば見聞すべし。哀念する所多く、安隱なる所多く、諸天及び十方人を愍傷す。今靜室にあつて而も三昧定す。我等方便して如來を勸助して三昧より起さん。時に於て維耶城中內外の衆人各八萬四千、先づ舍利弗に詣る。謂く『舍利弗よ、佛興ること希有にして、信ずるは甚だ難く、人命は得難し。今、[一四五]平等正覺者は、三昧正受す。誰か我等が爲に能く覺し興さんや?。是正覺者をして三昧より起たしめんや??。惟見て愍念して、一切護を施せ。』時に[一四六]舍利弗、維耶離の衆人の說く所を聞き、卽ち坐より起つて往いて、佛所に詣り、佛前に住して其の音を[一四七]謦揚し、力を極め指を彈き、手にて兩䏶を拍ち、如來をして三昧より覺さんと欲す。其の正受するに因つて如來三昧の所如を知らず。時に舍利弗、[一四八]目連所に詣り、是の本末を以て目連に語る。『維耶離城內外の衆人、如來の三昧より起つを願はんと欲す。時に目揵連は力神足を以て三千大千世界を動かし、梵天に住して其の大音を暢べ、如來をして三昧より覺さしめんと欲するも、起しむる能はず。時に舍利弗及び大目犍連輒ち賢者[一四九]阿若拘倫・及び波提・披破・大稱・憍恒・鉢・羅云・分耨・須菩提・迦旃延・迦葉・阿難・分那・餘大・劫賓奴・和利・彌勒菩薩に詣り、五千の菩薩俱に行いて佛所に詣り、世尊を圍遶す。各各己の常位に就立し、四大天王・天帝釋・[一五〇]䫌天・兜術天・化自在天、其の欲界中限計す可らざるの諸天人等、各各駕を嚴にし、皆佛所に詣り、佛足を稽首して退いて一面に住し、各自叉手して咸佛に歸命し、悲感戀慕す。梵天・光音天・淸淨天・離界天乃至淨身

波提。詳しくは憍梵波提（Gavāmpati）。譯牛呵。牛王。解律第一。

【一五〇】䫌天（Yāma）。䫌天、鹽天、炎天、夜摩天と同じ。譯妙善。善時分。欲界の第三重天である。

兜術天（Tuṣita）。天の名。舊に兜率、兜率多、新に都史多、覩史多等。譯、上足、妙足、知足。欲界の天處にして夜摩天と樂變化天との中間に在つて、下より第四重に當つてゐる。天處、內處の二に分れて、其の內院を彌勒菩薩の淨土とし、外院は則ち天衆の欲樂處なり。

化自在天。他化自在天、他化天のこと。梵名、婆沙跋提Paranirmitavaśavartinaḥ）。欲界六天の第六、依つて第六天と稱す。此の天快樂を受すに自ら樂具變現するを要せず、下天の化作せし他の樂事を假て自作に遊戲すれば、他化自在天といふ。此の天は欲界の主摩醯首羅天（Maheśvara）と共に、正法に害を爲す魔王なり。卽ち四魔の中の天魔である。

音音天。新稱、極光淨天。舊稱、光音天。色界の第二禪の終天である。此の天は音聲を絕ち、語らうと欲する者は口から淨光を發して言語の要を

皆衆生をして佛道を成ぜしめ、
其の發心あつて尊道にあれば、
若し諸の佛法を志求するあつて
如かず、是の四句の頌を取るには。
假使是の世の衆生類
苦し是の句を聞いて而も稽受し、
億百千劫に江沙の如く
常に以て諸菩薩を供養せん。
是の三昧は不可議なり。
其れを以て佛の功德を道護すれば、
命終の時に臨んで無數の佛は
十方佛土の諸佛尊は
壽終る時に臨んで無數の佛は
其の所欲に隨つて所生を受く。
身常に永く安かにして心以て和し、
苦痛を知らずして佛道に至り、
億百千無量の門に入り、
我勢力に住して斯を頒宣すれば、
諸佛此に於て能く頒宣し、
佛の現在するに曼べて勤め修行し、

其の所安に隨つて一劫に供し、
斯の福甚だ多くして喩ゆべからず。
發起して道意を興さざるも、
其の福は如順にして道心を護る。
皆之を建立して佛道に存し、
心恐畏せざれば、其の福超え、
一切の珍寶は諸[一四二]刹に滿ち、
一頌偈を護るも是殊特なり。
若し能く四句の頌を受護し、
一切盡く歎じて竟る能はず。
悉く自然に其の前に現在し、
四句の頌を將護して起ち、
來つて其の心を護つて忽ち忘せず、
用ひて其の三昧を喜ぶを以ての故なり。
夫上に往至して賢聖安かなり。
而も之を勸助するを勇猛と名く。
最勝の光藏明かなること限りなし。
當に是の三昧定を勤修すべし。
是故に斯に由つて奉じ精進す。
後世に復た恨を懷くことを得るなし。

を見て無常を感じ、屋外に出で狂亂してゐる時、佛の言葉によつて、歸佛した。友人五十余人も之に從つた。羅云(Rāhula)。佛、在家中の子。出家して十大弟子の一人となつた。
迦旃延(Kātyāyana)。佛の十大弟子の一人。論議第一と稱せられる。迦旃延は波羅門姓十姓中の一で良姓である。
迦葉(Kāśyapa)。又迦葉波。譯飲光。古代の姓氏。佛弟子の中に摩訶迦葉(Mahākāśyapa)、優樓頻螺迦葉(Uruvilvā-kāśyapa)、迦耶迦葉(Gayākāśyapa)、那提迦葉(Nadi-kāśyapa)、十力迦葉の五人あり。單に迦葉と言ふのは摩訶(大)迦葉をいふ。頭陀第一附法藏の第一祖である。波羅門の長者にて大學者であつて、佛に歸依して、人々に尊崇された。
阿難(Ānanda)。佛十大弟子の一人。聞法第一。釋迦族出身で、佛陀の血族である。入團后、暫くして佛の常隨弟子となり、よく佛に仕へて、愛された。滅後、結集に於て經を誦出した。
劫賓奴(Kupphina)。又劫賓那、劫比拏。譯房宿。憍薩羅國の人にて、世尊の弟子。能く星宿を知ること。衆僧第一なり。
彌勒菩薩(Maitreya)。前出。

時に世に王あり、使衆無憂悅音と名く。[一三八]轉輪聖王と爲り、往いて其の所に詣つて是の三昧を聽く。已に之を聞くを得て、法師を歡悅す。王、比丘に白す。『意を恣にして宣傳し、恐畏を懷く勿れ。吾自ら人を遣して共に相宿衞せん。三萬人を遣して左右にあり、今仁に此を與ふ。以て難を畏るゝ勿れ。吾當に護衞すべし。是の佛の所說にして、甚だ聞くを得難し。』と。時に轉輪王、其の千子の勇猛傑異にして一人千に當るものをして、之を衞護せしむ。三萬衆の人皆廿[一三九]讃を以て之を供養す。一切施は安らかにして其の所便に從ひ、常に和心を以てし、傷害の意なく、當に一切の乏しき所なるべき所を授く。其の彼の法師は威神の已の力勢を建立し、半劫中に於て是の三昧を演べ、是の德本を以て則ち悉く和同す。王諸太子及び衆の眷屬は更に八十劫にして六十億三那術姟諸佛世尊を見る。皆諸佛に從つて是の三昧に逮び、心の所願の如く佛國を受け取る。喜王よ、彼の時の法師を知らんと欲せば、豈に異人ならんや。斯の觀を造す勿れ。則ち今現在の阿彌陀佛是れなり。其の時の國王無憂悅音と名くるは[一四〇]阿閦佛是なり。』佛言はく、『喜王よ、爾の時の三萬人の王使にて彼の法師を宿衞するものは、今の喜王等菩薩三萬人是なり。彼の時に德を種へて、此に於て願の如く其の果報を獲て、是の三昧定・諸菩薩の業を致安し順供するなり。是の故に喜王菩薩よ、學ばんと欲して是の三昧に逮べば、當に恭恪を以て受持し書誦し分別して之を說き、至意に奉行すべし。』

佛、其の時此の頌を說いて曰く、

[一四一]『一切に施して衆生を安んぜんと欲せば、　諸藏滿億千を具足す。
其の發心有つて尊道に存する、　斯の功德の福喩ゆべからず。
假使十方衆生の類あるも、　皆緣覺道を成就せしむ。
一劫の中に備さに供養すれば、　其の福、比あらずして道心を發さん。

(欬)、又その聲をいふ。一本譬を磬に作る。磬は樂器にて、石にて作りたるもの。凡て打ち鳴らすもの。何れにしても大聲を發したのであらう。

【一四八】目連。大目揵連、目揵連と比丘の名。摩訶目揵連、目揵連とも言ふ。姓である。譯、大讃誦、大胡豆等。十大弟子の一人。神通第一と言はれる。初め舍利弗と共に六師外道の一人で、沙然に從つて敎學に精通してゐたが、心中不安あり、舍利弗と相致して先づ解脫したものが必ず之を他に香くべきを言ひ、共に競つて修行精進した。一日舍利弗王舍城に至り、五比丘の一人馬勝の儀容端正なのを見て、その理由を聞き、初めて佛陀の出現を知り、一偈の法門によつて忽ち開悟得脫し佛陀の說法を聞いて法眼淨を得、依て之を目連に告げて共に佛弟子となり、二人の弟子二百人も之に從つた。

【一四九】阿若拘倫、阿那律陀(Aniruddha)をいふか。然らば譯無滅、如意。佛十大弟子の一人。佛の從弟にて迦毘羅城の釋子である。大稱(Mahāyaśas)。耶舍をいふか。然らば王者城の長者子にて、快樂にふける內、宴會の夜ふと眼覺めて婦女の醜體

佛、此經を說く時、七十江河沙等の衆生・計ふ可らざる諸佛國より來る者、是の經典を聞いて皆不退轉を得、當に無上正眞の道を成ずべし。時に萬の菩薩、皆悉く是の三昧定を逮得し、其の自ら要誓して當來の末世法師に奉事して以て之を供養するを要ひ誓ふ。三十姟の諸天人、咸已に不退轉地に逮立して當に正覺を成ずべし。六十姟の諸天人は法眼淨を得、十八億人及び是の四輩は諸法眼生じ、三塗の惡は皆已に滅盡す。佛は光明を演べて十方の各江河沙等の諸佛世界を照し、無擇獄に遍く、上は極界三十三天に至る。一切衆生は皆安隱を得、復た衆患なし。其の光明より各〻自然に無量寶淨億姟百千の蓮華を化生す。一一の蓮華に皆如來坐す。其の眷屬衆諸來つて坐會すること、亦復是の如く等しくして、異あるなし。是の諸の佛の邊に各〻喜王菩薩あり、長跪叉手して諸の如來に勸め、是の三昧定を說かしむ。是の一切佛の化する無央數不可計の衆生は底なし。悉く衆人をして無邊際を了せしめ、罣礙する所なく、平等覺に至る。

法供養品第五

爾の時、佛喜王菩薩に告げたまはく、『勿かに衣食の施を以て如來に奉事するを用ひて第一となすなり。佛に供養せんと欲すれば、當に法供養を以て之に奉事すべし。所以は何ぞや?、乃往過去無央數劫の計へ稱載す可からざる時に佛有りて、金龍決光と號す。其の壽、限量すべからず。國を無量淨と名け、衆會稱計すべからず。法師あり、無限量寶音と名く。行じて末世にあり、最後に俗を窮めて是の三昧を學ぶ。其の餘の一切の諸比丘衆は皆共に之を擯す、時に彼の法師は怯弱を懷はず、身命を貪らず。故に復た勤精して斯の三昧を講ず。山中に入つて衆の果實を服す。時に四天王天上の諸天人、上は二十四 阿迦尼吒天人に至るまで、皆來つて經を聽く。時に無數衆は咸共に之を念じて、心に悉く戀恨し愁思して之を見んと欲し、聲名に服して其の法音を聞かんと欲す。

阿闍婆。譯、無動。不動。無瞋恚。往昔に此を去る東方、千佛刹、阿比羅提國に出現した大目如來の所に於て發願し、修行の後東方に成佛し、その國土を善快と名く。今現に其の土に於て說法す。又密教にては金剛界五智如來の中に、東方に住する如來。左手には拳、右手に梵函を持す。黃金色なり。

【一四一】一句五字より成る偈文。内容大體既述のもの。

【一四二】剎(Kṣaṇa)。譯一念。時の最少なるもの。

【一四三】正受。三昧(Samādhi)に入るをいふ。

【一四四】維耶離(Veśāli)。前出。

【一四五】平等正覺(Samyaksaṃbuddha)。等正覺者の意か。

【一四六】舍利弗(Śāriputra)。舍利弗羅、舍利弗多羅、舍利子と譯す。舍利(Śāri)は母の名、弗又は弗多羅(putra)等は子の意である。父の名を優婆提舍と言ひ、父に從つて優婆提舍(Upatiśya)とも稱す。初め外道の婆羅門で、目連と共に佛に歸依して、最も重要な一人になつた。道を求めつゝある途上、佛弟子馬勝比丘安庠として步くを見て、問ふて「因緣所生法」の偈を聞いて、

【一四七】聲揚。聲は「しはぶき」

し、種性を總持して魔の官屬を降し、一切智を解して所行に功勳あり。是の典を受持して竹帛に書著し、若し地獄にあれば、一切衆のために皆苦患を忍んで、以て厭をなさず。是の三昧を用ひての故に、三界・五趣の難を周旋し、以て倦となさず。四等心を行じて慈悲喜護し、四恩を慧施して仁愛にして人を利し、十方愚冥の輩を等利救濟して、以て道意を發す。地獄は休息し、餓鬼は飽滿し、畜生は脫するを得て、天・人の間に生る。天人は心開けて道法を樂しみ、五趣の心解けて三寶を信敬し、世榮を貪らず。三界を觀察して猶ほ[一三四]幻化・影響・野馬・芭蕉・見夢・水泡・水沫の如し。一切法を暢べて悉く無眞なるを知り、皆道意を發して十方の危厄の難を度せんと欲す。』と。是に於て喜王菩薩は心中に悲喜して、即ち頌を說いて曰く、

『我以て是の業を知り、　意に從つて道義を好む。　是の如き明を輕んぜず、
世護を咨嗟す。　其の身命を捐棄して　是の佛の至道を求む。
後の恐懼の世に於て　是の三昧定を持す。　若し無央數劫に
地獄の中にあつて　是の三昧を樂持すれば、　常に當に是の苦を忍ぶ。
一切衆生に請ふて、　說法して冀ふ所なし。　衆の財物を布施し、
行じて諸の羣生を愍み、　假使身命・肉　骨髓・血脈を斷つも、
終に懈怠を行はず。　後世所生の處、　空閑居に習在して、
一切所有を棄て、　慈は衆生の類に遍く、　疾む者には醫藥を給し、
曾て此の業を學ばざること　反邪の行の如し。　當に是の眞言を修すべし。
斯の經中の教に從ひ、　常に奉じて放逸なく、　佛の[一三五]所誨に隨ひ、
衆生の故に之を忍ぶ。　我等の伴類は　獨處し若しくは衆中にありて、
宿る所畏るゝ所なく、　利養を貪求せず、　尊佛道を頒宣す。』と。

【一三三】獨居獨遊を犀牛に喩へることは阿含聖典よりの習である。巴利經集 Sutta-nipāta の犀牛經 Khaggavisāṇasutta 大事犀牛經 Khaḍgaviṣāṇa-sutta（一、三五七以下）。
【一三四】之等は印度にて果敢きものの例に擧げらる。
【一三五】所誨。教ふる所。
【一三六】擯。儐に同じ。みちびく。又却く。
【一三七】阿迦尼吒天（Akaniṭṭha-deva）。天の名。舊稱、阿迦貳吒。阿迦尼吒。新稱、阿迦尼瑟吒。譯色究竟。此の天は色界十八天の最上天にして、形體を有する天處の究竟なれば、又質礙究竟と云ふ。故に色究竟天とも有頂天とも名く。之を越えれば無色界の天である。唯心識のみあつて、形體がない。
【一三八】轉輪聖王。轉輪王（Cakravartin-rājan）のこと。印度政治思想に於ける世界統一王。武器である輪（Cakra）を一度投げれば世界統一され、正法に基いて政治を行ふ。七寶千子あり。法界の統一王たる佛は之に對し、法輪を轉ずる故、轉法輪王（Dharmacakrapravartin-rājan）といふ。
【一三九】譄。譖と同じ。
【一四〇】阿閦佛（Akṣobhaya）。如來の名。具さには阿閦鞞佛。

是の道經を勤修して
斯の所行の業を聞いて
常に佛を誹謗すれば、
還つて自ら眞諦を謂ひ、
是等は見て敬ふと謂ふも
是に於て大勢を現じ、
總持・尊戒法を
習寂して閑居に在り。
後の將來・末世
復た見て怒る無く覺り、
佛悉く是に囑累し、
然る後共に將護す。
悉く咸之を咨嗟す。

詩、世に在り且盡く。
自ら知つて其の意を伏し、
其の言、眞にして眞ならず。
其は利養の業を貪つて、
解脱を去ること甚だ遠し。
皆以て禁法を護り、
行じて愚にて及ばざるが如し。
今佛斯を建立す。
是の經、其の所にあり。
六十二億の佛の
然して後に是の法を護る。
時に細微華を雨らし、
用ひて斯の法を聞くが故に』と。

今、喜王に告ぐ。
既に信奉し順行して、
四部衆にあつて
佛の正道を樂まず。
其れ吾は大神足あり、
奉行する故に道を得たり。
悉く貪利を捨て、
佛の所説虚りならず。
光明に値ふて無量なり。
衆會、咸共に見る。
是の經を以て印を見、
三千世の天人

爾の時喜王菩薩、三萬人と倶に佛の所説を聞いて、目爲めに涙を出し、恭恪悚慄して、衣毛、竪をなす。偏に右臂を出して坐より起ち　叉手同音して佛に白さく、我等は、世尊よ、將來の末俗五濁惡世に法師を輕んぜず。若し敬はず、普明一切智を毀たんと欲する者あらば、法盡きんと欲するに臨んで、學識少く、明多き能はず。清白の正法盡んと欲するに垂んとする時、法の無常を畏る。法亂れんと欲する時に、其の身壽を沒し、是の如來一切の智典を護つて永く弘安ならしめ、獨處・專學して一心なること【三三】犀の如し。當に受けて是の如きの像經・如來至道の若干品を將護し、其の諸辯才の印を學智するあつて、無量の衆の德の本を曉了す。當に之を勸化すべし、法印、之を印

三、無生忍である。本經では第一忍を擧げぬ。一般のものと傳承を少しく異にす。
【二四】名號。佛陀の名を言ふ。
【二五】本際智。佛陀は諸法の本際(窮極の始修)を照了す。本際智と名ける。
【二六】四瀆。瀆は大きな水流、又は汚濁。
【二七】炤。あきらか。
【二八】一句五字を以て成る偈文。既述のものを偈文を以てまとめる。
【二九】三毒。又三根、一、貪毒、引取の心を貪と名ける。迷心を以つて一切順情の境に對して取引して厭きないもの。二、瞋毒、恚忿の心を愼と名く。迷心を以て一切違情の境に對して忿怒を起すもの。三、痴毒、迷闇の心を痴と名く。心性闇鈍にて事理の法に迷ふもの。亦無名と名ける。これに二種あつて、痴毒の獨り起るのを獨頭無明と名け、貪毒と相應じて起るのを相應無明と名ける。貪毒等は必ず痴毒と相應じて起る。
【三〇】初發心である。看十住。
【三一】幢旛。共に「はた」。
【三二】須菩提(Subhūti)。須浮提等とも書く。善現、善吉等と譯す。十大弟子中、解空第一の人。佛此の人をして般若の空理を說かしむ。

と。

佛、爾の時頌して曰く、

[128]『菩薩、大慈を行じて、　常に自ら其の心を調へ、　幷びに他の衆生を化して、
開度する所常に安らかなり。　風寒熱を醫療して、　菩薩、[129]三毒を消し、
日出づれば衆冥盡くるが如く、　導化して、牽運を消す。　長者十重の闇、
十住轉進するも然り。　樹の漸く長茂するが如く　[130]初發より成道に至る如し。
愚は出でて沙門となつて　心、親里の眷に存し、　利物重擔を負ふて
心樂んで家中にあり、　以て淨法を聞かずして　出家せず、戒なし。
成就して佛道に至り、　是を學んで放逸するなし。　末世若し此を學んで
[131]斯の經典を聞くを得。　供養の利を以ての故に　名を求めて誹謗を行ず。
前にあつて稽首禮し、　歎じて言ふ。「甚だ善い哉」。　其と別れ去つて後
便ち其の惡を說くべし。　佯愁して雨淚し、　自ら歸して其の身を念ず。
因つて衆會の中にあつて　傳へて其の惡行を說く。　師を敬奉するを欲せず、
長聖の命に順せず、　己身は其の勝れるを求め、　家を亂して常に淨と謂ふ。
他の功德を毀たんと欲して　自ら勳を歎じて限りなし。　尊を知つては嫉を懷ひ、
他の供養を得るを妬む。　華香及び衣被　妓樂・[132]幢幡・蓋をもつて、
佛舍利を供養して　自ら謂ふ「已に佛を見たり」と。　若し斯の經典を聞けば、
乃ち眞供養をなし、　一切の樂を捐捨して、　常に是の要行を學ぶ。
用ひて己の身に奉ぜん爲、　能く斯の陰蓋を捨つ。　當に經を恭敬すべし。
猶ほ[133]須菩提の如し。　棄てて忽ち命に貪愛し、　常に習ふて閑居にあり。

もの。諸經によつて異說あり。實積經(四十二)では、信(正法を信受する)、戒(法律を持する)、聞(能く正敎を聞く)、慚(自分に恥づる)、愧(人に恥づる)、捨(一切を捨離して染着なきなり)、慧(智慧事理を照す)。涅槃經十七、信戒慚愧多聞智慧捨離を擧ぐ。

【一三〇】四等心。前出。

【一三一】柔順忍。三忍中の無量壽經の說によれば、忍第二に位し、慧心柔軟にして能く眞理に隨順するもの。五忍の仁王經の說によれば、四地より六地の間にて菩提の道に順じて無生の果に趣向する位にいふ。響忍は、三忍中の無量壽の說にては第一に位し、音響によつて眞理を悟解することあるもの。無所從生法忍は不明。無生法忍ならば、三忍中無量壽經の說によれば、第三で、無生の實性を證つて、諸相を離れるもの。悟道の至極である。五忍の仁王經說によれば、無生忍は七地より九地の間にて諸法無生の理に悟入する位に名く。本經の忍の順序は二、柔順忍、三、響忍、四、無所從生法忍なるも、無量壽經の三忍は一、音響忍、二、柔順忍、

猶ほ明人の其の目清徹にして、虚空に雲なく、夜は星宿を觀、東西南北に虚空を仰瞻して、星宿無根なるも、悉く其の處を知るが如し。菩薩も是の如し。現在定を得て、十方一切の諸佛を覩て、悉く處所・[一二四]名號・教訓を知つて、菩薩・弟子・眷屬の多少・説法・所度、悉く其の數を知り、三昧より起つて人の爲に説法して衆の空慧を行じ、其の所説を聞き、皆無上正眞の道意を發し、是に從つて行を積んで正に國土を領し、衆生を教訓して其の根本を見て、病に應じ藥を與へ、服行を得しむ、上中下の心にて之を開化し、各々所を得しむ。猶ほ聖王に子ありて衆多くして、才に隨つて叙用し、或は太子となつて後に國主に立ち、四天下を典り、或は大臣となつて其の左右に侍して自ら以て身を衞り、或は使者となつて帝の王命を暢ぶるが如し。菩薩是の如し。一切を教化して上中下に隨ひ、之を開導す。或は菩薩の無上正眞を顯はし、[一二五]本際一定の慧を解し、有佛無佛相住如の故に、心深きに入らず、是の教を了せず。或は緣覺を示して誘進して之に前み、聖明を達して本無二なるが故なり。猶ほ水の衆流に會して海に入つて合して一味なるが如し。生死三界の患・地獄・餓鬼・畜生の厄を見、苦を畏れ、身を厭ふて聲聞を求む。故に爲に生死の難・輪轉無際にして、五趣を展轉して竟に已なきを宣示し、泥洹の快を咨嗟し、讃歎す。不生・不老・不病・不死・不饑・不渴・不寒・不熱・無怨・無結・不閉・不閉・無憂・無喜・無尊・無卑・不連・不斷・無往・無反・無合・無散にして、衆難を長く離れて、道と通同す。因つて難易苦安の路を詠じて無爲を學ばしめ、稍稍牽き前んで乃ち大道に至る。猶ほ[一二六]四瀆の海に入れば、一味にして、若干の別なきが如し。三乘も是の如し。至竟窮達して、會すれば一を致し、無上正眞無際本淨に至り、十住に逮至するを名けて勇伏と曰ふ。名けて勇伏と曰ふ所以は何ぞ？ 猶ほ猛將・大軍の帥の諸兵衆を將ひて嚴敵を降伏するが如く、折伏せざるなし。菩薩も是の如くにして、勇伏の定に逮んで三界有無の上を周旋して、道を以て心を[一二七]炤して通徹せざるなし。各自之に歸して咸道心を發す。佛樹下に坐して、衆魔を降伏し、十方を度脫せり。』

妙心を以て履治して地となすをいふ)。三、修行住(前に地を涉知し、倶に明了なる故、十方に遊履して留礙なきを言ふ)。四、生貴住(佛と同じく佛の氣分を受け、彼此冥通して如來種に入る)、五、方便具足住(自利利他方便具足して相貌缺くる所なきをいふ)、六、正心住、相貌のみならず、心身佛と同じきをいふ。七、不退住(身心合成して日日增成するをいふ)、八、童眞住(佛の十身の靈相一時に具足するをいふ)、九、法王子住(初發心より第四生貴に至る迄を入聖胎と名け、第五より第八に至るまでを長養聖胎と名く。此の第九に於て相形具足して出胎するをいふ)、十、灌頂住(菩薩既に佛子となつて佛事を行ふに堪ふれば、佛、智水を以て灌頂す。刹利王子の受職灌頂の如きをいふ。

【一一七】無上正眞最正覺(Anuttara-samyaksambodhi)。上なき正覺の意。

【一一八】十住を十重。高閣に喩ふ。

【一一九】初發心。前出。十住を見よ。

【一二〇】匱。はこ。物を藏する器の大なるをいふ。

【一二一】財。七聖財を言ふ。見道以後の聖者を七種に分つた

菩薩も是の如し。法の[一一四]權智を以て大慈悲を行じ、愚冥を勸化して道心を發さしむ。[一一五]五戒・十善・四等・四恩・六度無極あり、權方便を行じて普く十方に至り、[一一六]十住・[一一七]一生補處・無上正眞成最正覺を具足して、一切の溺在する生死を度脫し、心をして坦然ならしめ、流れに反いて源に達す。猶ほ種樹漸く根芽・莖節・枝葉を生じて華實結茂するが如し。菩薩も是の如し。初發心より便ち喜意を得。身意休息して五陰三塗の患・八難の苦あることなく、悉く六度施戒・忍・進・禪思・智慧を備へ、從生する所なく、永く所倚なく、悉く衆計なし。復た我が人身の壽命の有無の元を觀ず。所に在りて示現じて生老病死を救濟する所多し。經に存して世にあり、六事の法住し、善權して時に隨つて衆生を導利し、迷惑して愚癡の冥を度して罪蓋の覆ふ所とならしめず。淨きこと虛空の如くして衆難を畏れず。殊勝の慧・不死の藥は以て一切往來の厄を療す。猶ほ長者の生子衆多くして各々爲に十重の[一一八]高閣を興起し、諸の太子をして閣上に遊戲して衆の妓樂をなし、以て上下諸遊觀の者を娛ましむるが如し。世尊も是の如し。無蓋の慈・無極の大哀を以て權方便を行じ、三界の衆生の類を化導して階路を開示す。十住の本末は[一一九]初發心より見る者喜悅して發意せざるはなし。一住より起つて菩薩道を行じ、布施して窮を救ふ。三界の[一二〇]匱にして、道に貧する者には、施すに[一二一]七財を以てし、一切智正眞の戒を以てす。菩薩無極の慧に堅住し、中ごろ證を取らず。仁和の意を學んで、篤く三寶を信じて無極慈に入る。無盡の哀を以て[一二二]四等心を具し、四等已に具して五通を成就し、五通已に成じて六度を備悉し、六度已に達して[一二三]柔順忍を得る。已に斯の忍に逮ぶを名けて、第二と曰ふ。第三は響忍なり。一切の響は本悉く空寂にして、三界の音、皆虛無實無一眞諦なるを解す、是の義を了するを以て、是に因つて漸く「無所從生法忍」に入る。悉く三界は皆根本なく、五趣は元なきを暢ぶ。斯の慧を了する者は乃ち無所從生法忍に逮び、諸の所生に入つて心に所生なし。猶ほ虛空の如く憎なく、愛なく、因つて便ち決を受け、已に受決を得て、現在定を致し、十方佛を見る。

し)。說盡苦道無所畏(盡苦の道を師子吼して怖なし)。菩薩の四無畏、總持不忘說法無畏、盡知法藥及衆生根欲性心說法無畏、三善能問答說法無畏、能斷物疑說法無畏。

【一一三】五陰(Skandha)。新譯に蘊、舊譯に陰。色受想行識の五法をいふ。六衰。色聲香味觸の六塵を言ふ。この六塵は能く人の眞性を衰耗せしむる爲に六衰といふ。十二牽連、十二因緣の異名である。十二因緣については前出。

【一一四】權智。諸法の實相に達するを如來の實智とし、諸の差別に達するを如來の權智とする。實智は體であり、權智は用である。如來成佛の本體は實智にあり、一代の敎化の妙用は權智に存する。

【一一五】五戒。殺生、偸盜、邪婬、妄語、飮酒の制戒をいふ。十善。不殺生、不偸盜、不邪婬、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見の十をいふ。十惡の反對。

【一一六】十住。既に信を得たので、進んで佛地に住する位である。一、發心住(眞方便を以て十住心を發起し、十信の用を涉入した圓成一心の位)、二、治地住(心の明淨瑠璃內に精金を現ずるが如く、前の

久しからず正覺を成じ、　阿彌陀を見る得を知る。　顚倒に依倚する者も
亦道を去ること[一〇八]迴遠なり。　若し本に順はざるあれば、　佛、彼に[一〇九]決を授けず、
斯の長者子を觀ずるに、　財寶藏を施與して　然る後出家を行ひ、
家家に行乞して、　定光如來に從ひ、　曾て斯の如き義を聞く。
斯の如き像三昧に　精勤し、敬つて奉行せよ。』と。

佛言はく、『菩薩の行道大慈悲を以て十方を護り、及び他人の諸の不逮者を化す。[一一〇]六度無極・四等・四恩・六通の善權を以て衆生の類を化し、度する所無底にして、長く安隱ならしむ。各家業を捨てて道法を興立し、爲に甘露を雨らして經典を宣傳す。猶ほ良醫の藥を以て衆を療し、風寒・熱病三合の病[一一一]悉く消除を爲す如し。心に四病あり。一に曰く貪婬なり。二に曰く瞋恚なり。三に曰く癡冥なり。四に曰く吾我なり。慧の正義を以て、斯の四病を刈り、悉く消して餘なく、十種力[一一二]四無所畏を致す。譬ば日出でて衆冥消滅して去る所を知らざるが如し。善權の慧を以て大聖曜を振ひて三界を照せば、[一一三]五陰・六衰・十二牽連は自然に爲に消して趣く所を知らず。猶ほ月冥にあれば夜の衆闇を消し、自然に明をなすが如し。菩薩是の如し。道の慧妙を以て生死界に處し、三垢の穢心に所著なく、終始無窮の患を開化して、三昧無所從生を逮得して一切を度脫す。猶ほ大海の諸の珍琦殊異の寶を出すが如し。其の入つて採る者充備せざるはなく、各々盈滿を得。菩薩も是の如し。大乘海に入つて開士玄妙の法を擇取し、道場・三脫の門を嚴治して三世を救濟す。猶ほ轉輪王の四域を典主して天下載き仰ぐが如し。菩薩も是の如し。一切の生老病死を周流して四等心を具し、此の四病を化して永く餘なからしむ。終始朽亡して忽然として沒し盡して、所處を知らず。譬へば船師の人を度して往反して窮極なきが如し。菩薩藏總持の筏を以て深要道法の眞を敷演し、無數劫を遊んで以て勞と爲さず。猶ほ二親其の子を生養して至つて長大ならしめ、成就して人となすが如し。

【一〇八】迴遠。はるかに遠し。
【一〇九】決（Vyākaraṇa）。授記又は記別とも言ふ。佛心ある人の善行に對し、その人が將來成佛すべきを豫言するを言ふ。
【一一〇】六度無極。六波羅蜜をいふ。前出。四等。慈（Maitrī）・悲（Karuṇā）・喜（Muditā）・捨（Upekṣā）の四無量心である。所緣の境に從つて無量といひ、能起の心に從つて等と言ふ。平等にこの心を起すからである。四恩。父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩、或ひは父母の恩、師長の恩、國王の恩、施主の恩。六通。六神通をいふ。前出。
【一一一】印度醫學では三のグナ（guṇa）卽ちサットヴア（Sattva）・ラヂヤス（Rajas）・タマス（Tamas）の三の要素が調和してゐる時、身體が健康で、その三が不調和になつた時、病になると考へる。
【一一二】十種力。前出。四無畏。之に佛と菩薩のと、二種あり。佛の四無畏は、一切智無所畏（我は一切正智の人なりと師子吼して怖れなし）漏盡無所畏（我一切の煩惱を斷じ盡せりと師子吼して怖れなし）。說障道無所畏（佛道を障害する法を師子吼し怖れな

長者子之を聞いて
是の三昧を奉進す。
斯の尊聖道に逮んで
亦恩愛を慕はず。
悉く諸の道業に入つて
其の名、人意を悅ばし、
將來の世に於て
出家して所貪なし。
各各法を聞知して
能く婬欲の難を忍び、
夢中に佛を見て、
我、佛道を疑はず。
自ら其の心を曉喩して
若干の事業を聞いて、
是に於て以て出家して
生心相誹謗し
反輕して他人に易へ、
大聖主に供養し、
其れ諛諂の者あらば、
因つて他人を輕んずるが故に、

敬尊して便ち出家し、
未だ曾て睡眠あらず、
用ひて聽受し聞くが故に、
計ふ可らざる佛を見奉つて
疾かに成佛道に逮ぶ。
逮ぶ時佛道を得たり。
是の慧印を聞き已つて
罵詈若くは撾打し
佛の所說を宣布し、
塵勞の患を觀察して
自ら我が正覺するを喜べり。
音響の利に倚り求めて
久しからずして佛道を成ず。
復た罣礙あるなく、
無數の[一〇七]利養を得たり。
厄を分つて患業を除き、
我以て佛道を成ず。
行步自ら驚喜して
道を離れること甚だ玄遠にして
若し此の經を聞く者あらば、

萬六千歲に於て
亦懈怠に住せず。
復た還つて家を樂します、
皆講に從つて諸受し、
諸願盡く具足して
誰か是の業を勸めざる?
財業も亦無安にして
誹謗をもつて、來つて之に加ふるも、
厄百千に遭つて惱むも、
自ら成佛道を說く。
而も斯れ及び法を樂ふて
以て斯の經典を聞き、
是の經の要理を聽き、
所止、虛空の如し。
以て親族の穢を用ひて
聞に依つて意を存す。
得て、成光を逮見して、
已は佛道を得たりと謂ふ。
數數愁憂を懷けり。
則ち佛道を得て

【一〇七】利を以て身を養ふこと。

雪いで道品を敷演し、在在の所生に無量門總持の行に逮び、發意して一時【一〇五】彈指の頃も佛法を離れず。』

佛言はく、『時に復た佛あり、號して面悅離垢月首藏威如來眞等正覺と曰ふ。出でて現に世に在つて是の三昧を講じ、長者子有り、曜淨廣心と名く。斯の法を說くを聞いて、家の信を以て居業を貪らず、出でて沙門となる。七萬の婇女を捨て、寶多くして斯の如く四寶藏あり。及び衆の珍琦布いて地に積み、各三十萬有千八百遊觀の處に遍し。未だ曾て足を擧げて妄に地を蹈まざるも、用つて心に繫けず、國を棄て、王を捐てて行じて沙門と作る。已に沙門と作ること萬六千歲、一心經行して常に修精進し、未だ曾て廢息せず、初より心念を生じて懈怠を爲さず、其の左右飯食し澡手洗口することを除いて未だ嘗て睡眠せず。恒に自ら覺悟して亦極坐せざること竟に萬六千歲なり。即時に悉く佛所說の法を受け、諷誦通利し、音響和雅にして總持を逮得す。「普入諸聲」と名く。皆稽首して佛の爲に禮を作さしむ。六十六姟諸天の衆は其に從つて諮受して之が給使となり、身心精進して隨時の安く、所養を失はずして如來に奉事す。今現に南方に正覺を成ずるを得たり。「一切德嚴」と名け、世界を德淨と曰ふ。彼の土地に於て最正覺を成ず。』と。

爾の時世尊此の頌を說いて曰く、

【一〇六】『我は憶ふ、宿命の時　無數の江沙劫に　佛あり、辯嚴淨
雷音吼如來と號す。　比丘あり、法を持す。　時に師子座にあつて
是の三昧を講說す。　王太子之を聞き、　好き究竟の衣被を
以て法師を供養す。　普く諸佛尊を見るに　佛阿彌陀を得たり。
其の前世に罪あり、　往昔の犯す所なり。　斯の慧味を說くを聞いて
皆盡きて餘あるなし。　佛あり、離垢月と曰ふ。　是の三昧定を說く。」

【一〇五】彈指の頃。壯夫が指をはぢく間、極めて短き時間を言ふ。

【一〇六】以下一句五字よりなる偈文。殆んど既述のことを繰返して偈文にて述ぶ。

最後世に　命、終に向ひ、　便ち他の佛國に　往生す。
若しくは江沙も　復た是に過ぐる　諸天、咸な　佛を供養し、
其の所に從つて　三昧を聞き、　三劫中に　佛道を成ず。
佛あり、　無厭寶と名づく。　定光佛[一〇〇]の　開化する所なり。
彼は是を聞いて　德果を得たり。　是の故に聞いて　懈怠する勿れ。
十方の爲に　常に救ふ所となる。　今我屬して　慇懃に累す。
仁賢者は　言柔和なり。　是の法道を增し　珍藏せよ。』と。

法師品第四

佛、喜王菩薩に語りたまはく、乃往過去無央數劫にして稱計すべからざる時なりき。爾の時、佛あり、[一〇一]辯嚴淨雷音吼[一〇二]如來至眞等正覺と號す。彼の佛世の時、一法師あり。[一〇一]無量德辯幢英變音と名く。曾て如來の是の三昧定を說くを聞き、是の三昧を學んで分別說用して衆生を化し、無數億百千諸天人民を濟ひ、以て一切を度す。王太子あり、淨福報衆音と名く。是の三昧を聞いて心中に欣然たり。則ち百千賈の妙好衣を以て法師を覆ひ、口に是の言を發す。普く三界の厄の一切衆生をして皆悉く興立して是の三昧を得しめ、是の德本を以て八十億江沙の諸佛を見奉り、衆行を造立して平等法を奉じ、諸佛の所に在つて是の三昧を聞き、皆以て頒宣して悉く能く堪任して是の定意を奉じ、所生の處常に宿命を識り、無量德淨佛刹に在つて最正覺を成ぜん。淨福報衆音王太子とは則ち今現在西方の[一〇三]阿彌陀佛是れ也。其の法師の衆生を敎化し度脱するとは則ち大月如來是れ也。其の王太子は供養して自ら無量德辯幢英變音法師に歸し、乃ち能く終竟に七萬劫に至つて衆の罪蓋を消す、是の三昧定を說くを聞くを用ての故なり。其の太子となつて衆の僧[一〇四]儐を除き、諸の罣礙を

【一〇〇】定光佛。梵名提洹羯佛。錠光佛又は然燈佛と譯す。足のあるのを錠といひ、足のないのを燈といふ。定に作るのは非。釋迦佛嘗て儒童と稱す。此の佛出世の時に五莖の蓮を買つて佛に奉る。その德によつて未來成佛の記別を得た。

【一〇一】此等の梵名、知り難し。

【一〇二】如來至眞等正覺は Tathāgata-Abhisambuddha の譯であらう。至眞等正覺は佛陀(覺者)の强勢に過ぎず。

【一〇三】阿彌陀佛(Amitāyus)。法藏菩薩として衆生を濟度せんとして四十八の願を建て、成佛し、西方に極樂淨土を成就した佛。

【一〇四】儐。導く、扶くこと。擯に同じ、却けること。敬ふこと。顰、しわむ、ひそむ。

生死の患を宣べ、[九五]無爲業を示す。或は復た之を顯して無上正眞にして各々安きを得しむ。是を四と爲す。菩薩復た四事あつて、疾かに斯の定に逮ぶ。何を謂つて四となす。一に曰く、[九六]佛の形像の蓮華の上に坐するを作り、若しくは壁繪氎布上に模畫して端正にして好からしめ、衆をして歡喜せしめ、由つて道福を得しむ。二に曰く是の經卷を取つて竹帛若しくは[九七]長妙素に書著し、其の文字をして上下齊正ならしむ。三に曰く是の經を諷誦して晝夜精進し、經文を捨てず、其を通利せしめて一の躓礙するものなく、聽く者をして解するを得しむ。四に曰く是の三昧を持し、諸佛の本末を一一分別して人の爲に義を暢べ、善く菩薩の無上正眞を開いて、一切衆をして咸共に諮受せしめ、疑心を生ぜずして各開達を得。是を四となす。』

佛、是に於て頌して曰く、

『是の經を聞いて　至德を樂ひ、　若し人あつて　此の道を求むれば、
善い哉、學べ。　斯の四句の故に　十種力を　獲致し、
八十億　人中の王　諸の六十の　[九八]姟安住し、
常に咸斯の　學人を護り、　能く是の三昧を　諷誦す。
若し是を聞いて　善利を獲、　已に聽くを得て、　能く信樂すれば、
是等は成じて　道を疑はず。　等しく皆　生死の無を見、
佛道を行じて　是を聞くを得。　功勳を樂んで　懈怠せずんば、
一切智は　掌を觀るが如し。　書寫して　是の經典を持し、
識念して百千劫に　住すれば、　辯才英でて　佛に至るを得。
彼、斯の　最定意を說いて、　[九九]王子月は　祥らかに聞くを得て、
國土を棄てて　沙門と作り、　晝夜勤めて　法を聽受し、

【九五】無爲。爲は造作の義である。因緣の造作なきを無爲といふ。又生住異滅の四相の造作のないのを無爲といふ。卽ち眞理の異名である。

【九六】佛像を彫刻し、又布紙等に畫くをいふ。この經成立當時、旣にこの事行はれてゐたことを語る。

【九七】素。白色の生帛、しろきぬ。

【九八】姟。數の名、兆を百倍したもの。

【九九】王子月(Candra?)不明。月光童子のことらしい。其父德護、摩竭陀國王舍城の長者にして佛を信ぜず、六師の言を聽いて、火坑を作つて佛を害せんとしたのを、其子月光童子之を諫止したが聽かず、後に佛が到るに及んで、火坑變じて涼池となるのを見て、心大に悔責し、佛に歸して須陀洹果を得た。佛は月光童子に成佛の記を與へ、且つ佛滅後支那國の王となつて三寶を興隆すべきを說く。

若し常に斯の　總持を奉ずれば、　精進して　是の三昧を行ぜよ。
若し速かに成道せんと、欲する者あらば、　第一功德田を　樂しめ。
當に是の　經典の本を學べば、　一切は寂然として　無を致す。』

四事品第三

菩薩、四事あつて、疾かに斯の定に逮ぶ。何をか四と謂ふ。一には曰く布施なり。妄想を懷かず、一切に福施す。二には曰く持戒なり。諸禁を犯さずして以て大道に志す。三には曰く常に慈心を抱いて、怨憎も親友も二心あるなし。四には曰く三界の衆生の類は悉く我が親族なりと察して、未だ曾て之を外にせず。是を四となす。菩薩に復た四事あり、疾かに斯の定に逮ぶ。何を謂つて四となす。一には曰く常に大慈を行じて衆生に加ふ。二には曰く常に大悲を行じて、三塗衆生の苦惱を見、之が爲に雨涙して之を拔濟せんと欲す。三に曰く衆生の迷惑して五趣に展轉して自ら免るること能はざるを視て正路を顯示して光德自ら出づ。四に曰く衆の三流往反して、終始曾て斷絕することなく、身苦しみ心惱むを察して、故ら之を愍念して爲に罪福生死の本、無爲の根を宣ぶ。是を四となす。菩薩に復た四事あつて、斯の定意を得。何を謂つて四となす、一に曰く、衆の邪迷を觀ずるに、六十二見あり、猶豫沈吟して[九二]羅網に墮すること、鳥の自ら投ずるが如し。小小の利を貪つて自害を覺えず。二に曰く九十六種迷惑の徑自ら癡迷を造し、猶ほ飛蛾の自ら燃火に投ずるが如し。已に三塗に溺れ、五趣周旋輪轉して際なく、身を脫する能はず。惟諸佛衆大菩薩あつて、乃ち能く之を濟ふ。三に曰く外の衆の[九三]蓋業・符呪は人を害す。菩薩之を愍む。狂の水に溺るるが如し。然る後乃ち悔ゆるも當に何ぞ及ぶ所あるべき？四に曰く射獵師の如く衆鳥を彈射し、羅網を以て魚を捕へ、其の罪蓋を積み、無數億載の間[九四]三惡趣に墮つるを、身の安きを捨て往いて之を救ひ、爲に罪福

【九二】羅網。寶珠を連綴して網となし、以て莊嚴の具となすもの。
【九三】蓋業。煩惱業と同じ。
【九四】三惡趣。三惡道と同じ」惡業によつて往來する三の所である。一は地獄道で、上品の十惡業を成ぜしものが之に趣く。二に餓鬼道で、中品の十惡業を成ぜしものが之に趣く。三は畜生道で下品の十惡業を成ぜしものが之に趣く。

化して無數の　人を建立し、　是の慧を習ふこと　猶ほ海の如し。
吾我塵勞の　厄を消し、　佛道の　諸滅度を說き、
以て穢を斷じて　三世を化す。　疾く修行して　是れ寂然たり。
身命及び　他人を識つて、　志は諸佛の　道に存念し、
立ちて　一切の業を存念し、　及び是の　妙三昧に逮び、
多く開導して　本際を御す。　常に講安して　苦惱を滅し、
化し、甘露味を　布施して、　斯の佛種性を　奉行し、
妙にして至つて明かに　顯耀の辭あり、　名稱は流布して　普く功祚し、
衆中に在り　甚だ巍巍として、　月滿ちて秋の　盛明なるが如し。
諸の眷屬の　財・名・德は　生死にあつて　佛の知る所なり。
其の辯才は　猶ほ水王の如く、　三昧を習ふて　斯の功に逮ぶ。
法は自然にして　無・無我なり。　久しからずして達して　義を敷演し、
是の如く周くすること、　三千世なり。　眞諦、行はれ、　是の三昧
思惟して計すること　三千世なり。　衆生滿つること　[九〇]江沙の如し。
若し學んで歸すれば、　甘露の道にして　所獲の慧は　此に過ぐ。
毒は行はれず、　及び刀火も　蟲蛇も無く、　杖畏なく、
王も　[九一]羅刹も　害すること能はず。　和心を以て　是を精修すれば、
財を失はず、　家を亡さず、　病憂なく、　罪患もなし。
若し此の四句の法を　持すれば、　目は盲せず、　重聽せず、
六十二億の　佛勸む。　設ひ學ぶ者あれば、　是を思惟せよ。

【九〇】江沙。川の砂をいふ。多きことの喩。

【九一】羅刹(Rakṣasa)。惡鬼にて、好んで家畜人間を夜襲つて、食ひ殺し、血を好むと傳へられる。

の垢を生じて自ら其の形を葬るが如し。愚闇閉塞して心開解せず、菩薩・法師の恩を念はず、反つて害心を生じて其の師父に逆ふて之を危滅せんと欲し、貪妬・懷嫉は一時自ら可なるも、放心自大にして大難を顧みざるは、甚だ憐傷すべし。諸天の鬼神・虚空の天人・阿須倫・迦留羅・眞陀羅・摩休勒、悉く往いて作禮し、稽首歸命して、見んと欲して厭くなく、數數奉迎して經典を聽受して義を問ひ、解を受け、思惟奉行して曾て懈倦なし。諸神愛敬し、奉事供養して、道德を尊重すること孝子の父母と別れ、積年彌久しくして飢虚して已なきが如し、諸天・神明・人と非人と至德を愛重して窮意して已むなし。皆是菩薩精進し、至心にして是の三昧を學び、慈愍の致す所なり。故に是の德あり。』と。

佛、喜王菩薩に告げたまはく、『若し菩薩あつて功を積み德を累ねて、無數百千の衆生を開化し、歡悅・踊躍して、適等にして異るなく、以て戲笑せず。斯れに因つて殊特の功勳を逮得し、名德遠く十方に著れて咨嗟され、行は須彌の如く安然として動かず。明かなること日月の如く、普く天下を曜かし、德重きこと地の如く萬物を主生す。道尊く位高くして諸の道品を生じ、六度無極なり。菩薩の[八五]法藏心は虚空の如くして所著なく、三界を獨步して罣礙する所無きこと、猶ほ飛鳥の虚空を飛行して足跡あるなきが如し。猶ほ蓮華の塵水に著せざるが如し。十方の諸佛は悉く菩薩をして斯の定意を行ぜしむ。今佛も故に宣べたり。汝等精進して疑惑を得る勿れ。若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷あり、及び諸の凡庶[八六]九十六術・[八七]六十二見・[八八]蜎蜚蠕動蚑行喘息、人と非人と是の三昧を學び、若し聞いて歡喜すれば、各々願の如く得る。然る後當に是の三昧に逮ぶべし。』是に於て頌に曰く、

『常に佛の正法を　光顯するに、　[八九]信根樂は　第一の慧なり。
行は犀の如くして　吾我なく、　是の寂妙　三昧を持して、
自在を得て、　忍辱を覺り、　三世を覆ふこと　猶ほ蓋の如し。

【八五】法藏。又佛法藏とも、如來藏とも言ふ。法性の理を言ふ。法性無量の性德を含藏すれば、法藏といふ。
【八六】九十六術。九十六種の外道を言ふ。
【八七】六十二見。佛當時の印度の六十二の外道說を言ふ。詳しくは梵網經(Brahmajāla suttanta Dīghanikāya 1)を見よ。
【八八】蜎蜚。蜎、ぼうふり。蜚、あぶらむし。いなむし。或ひは獸の名。形牛に似て、白首一目蛇尾なりと。(山海經)蚑ははひ歩くこと。
【八九】信根樂。信根は五根の一である。信根は三寶四諦を信ずること。

亦至眞の行を宣べ、　是の行業を奉修して　常に甘露の法を樂しむ。
以て魔力を降伏して　仁和を以て之を安立す。　衆の苦趣を超度して
佛の正路に歸止し　到る所極めて善處にして　周旋の徑を棄捐し、
勇猛の方便を以て　執持の德を成就す。』

佛言はく、『若し菩薩有つて斯の定意を學べば、十方の諸佛皆之を擁護せん、慧を以て心を照して開明を得しめ、陰蓋の爲に所見覆蔽されず。神通を逮得して諸度無極なり。諸の菩薩衆は悉く共に將養し、一生補處を成就するを得しむ。衆の聲聞黨は普く來つて嗟嘆し、早く成ぜしめんと欲して、十方、度を崇る。上の第七天梵其足王、諸梵天を典して身自ら遙護し、諸の天衆を遣して悉く來つて將順す。〔八一〕忉利天上の天〔八二〕帝釋王は宿命、德有り、其の至心して斯の定を學ぶ者を識つて、諸の天人を遣して悉く下つて宿衞せしめ、行をして安隱ならしめ、妄に犯す者無らしむ。其の四天王は身自ら之に臨み、亦官屬を遣はして法師を護り、四千里外伺求して其の便を得る者無からしめ、其の正法をして安徐として講誦せしめ、一切生死の五趣を開化す。四輩之を宗とし、供養厭くことなく、聽受して倦むことなし。人の爲に經を説いて同學の意を得て坦然たらざるはなし。各々其の所を得て、怨望する者なし。嫉心を懷いて所亂あらんと欲すれども、之を辨ずる能はず。又是の菩薩常に自ら忍辱し心に仁和を懷き、若し瞋者に向つてならば其の惡を念はず。若し逆人あつて、來つて危害せんと欲するも、與に共に諍はず、惟避け捨去して與に相見ず、既に路に相見るも相覩ざるが如し。十方を慈念して皆降つて佛に歸し、惡心をもつて法師を誹謗することあること勿れ。法を念ふに惡なく、惟其の人を愍んで用ひて毒心を懷いて惡趣〔八三〕三塗の難に墮し、之を傷んで愚者は惑し、横に毒害を生じ、還つて自ら身を危くす。猶ほ樹木風起つて相〔八四〕揩り、忽然として火を生じて還つて自ら形を燒き、毒蛇は毒を含むこと日日に增すこと多ければ、還つて自ら身を害し、鐵の衆

〔八一〕忉利天(Trāyastriṃśa)。譯三十三天。欲界六天中の第二、須彌山の頂、閻浮提の上、八萬由旬の處にあり。この天の有情、身長一由旬、壽千歲である。城廓は八萬由旬、喜見城と名く。帝釋天が此處に住する。四方の嶺に三十三天住す。
〔八二〕帝釋天(Sakra)は、因陀羅天のこと。インドラは嵐の神で、ヴリトラと戰ひ、之を滅して、衆生に雨を與へ、豐饒を來らす威神である。この神が佛教に取り入れられて、守護神とされるに至つた。
〔八三〕三塗。塗は道の意。一に火途、地獄趣の猛火に燒かる處。二に血途、畜生趣の互に相食む處。三に邊途、餓鬼趣の刀劍杖を以て逼迫せらるる處。
〔八四〕揩。する。

心には恚・衆の垢塵あり。
勝遵無著の勳にて
建立して十方に在り。
天人の重敬する所にして、
勇猛にして德を宣べ、
雜難往來を捐てて、
衆人を開化す。
斯を以て眼明を施し、
人を視ること赤子の如し。
永く破壞する所なくして
衆の等倫有ることなし。
勸樂人無底にして
興法は甘露の如し。
多く功勳を積累して
終に久しく戲逸せず。
好和にして衆人を安んずるは
月猶ほ塵なきが如し。
名稱普く流勝して
疾かに佛道を致得し、
頒宣して當に說くべき所、

人中の上は喜眞にして
所生の冥を損捨し、
曉り了り過ぎて解脫し
所施は救濟の第一なり。
修むる所、章句を奉じて、
乃ち能く本無を致し、
行を得て正路に遊んで、
所行遊は無行なり。
人尊の諸所至には
衆中に暢吼す。
十方及び
長く永く閑定を修す。
是の經典を奉持して
無數の人に訓講す。
六趣を諦解して
此の功德行に在り。
天人衆を度脫して
殊妙の甘露を施す。
應に住すべき所に立つて
以て諸の天人を化す。

言辭甚だ流利なり。
是の法目を總持して
勸樂して彼岸に度す。
諸行度無極あり、
八〇十力種に至る。
心の好む所に隨つて
所宿止は無垢なり。
意强く、多く、愍愛し
衆の邪業を勸敎し、
是に於て行を造立して
他の諸の不逮を護るを得て、
仁は其の家業を捨て、
最勝の德に歸す。
衆愚等を勸悅して
寂勝れて覺善し。
殊特の名勳を得、
居前に所畏なく
此の所當行に遊んで
十方の佛所に在り。
所講甚だ微妙にして

へたものをいふ。
【七二】總持は、陀羅尼(Dhāraṇī)の譯、前出。
【七三】結網。結は煩惱の異名。煩惱は衆生を網の如く捕へる故に、かく言ふ。
【七四】咨嗟。嘆くこと。
【七五】擿去。擿、投げる、なげうつ。
【七六】甘露(Amṛta)。美味なるを言ふ場合と、不死なるを言ふ場合あり。元來 Amṛta は不死の意味にて、Amṛta は天神の食である。それ故に兩義があるのであらう。
【七七】一生補處。一とは一實の理にして初地菩薩の位に於て淨菩提心を得、此の一實より無量の三昧總持門を出生し、乃至第十地に至り、更に第十一地卽ち佛地の法あつて轉生し、以つて佛處を補ふので一生補處といふ。釋迦如來を補處する故に、一般に彌勒菩薩のことを指す。
【七八】以下一句五字の偈文。
【七九】景模。景慕か？然らば、あふぎしたふこと。
【八〇】十力。如來の十力をいふ。知覺處非處智力、智三世業報智力、知諸禪解脫三昧智力、知種種解智力、知種種界智力、智一切至所道智力、知天眼無碍智力、知宿命無漏智力、知永斷習氣智力をいふ。

大勢力を受けて眞法に暢達し、黎庶を度脫して開化導利す。其の音和雅にして猶ほ哀鸞の如く、普住平等の地を逮得し、師子吼を爲して妙巍巍を致す。忍度無極にて大哀を具足し、魔の境界を越えて哀音至眞の聲を備通し、自大を去つて忍辱を得。深奧の義を了して禪定に非なく、至到する所の處に無上法を宣べ、一切の衆要經典を攝取して力勢及び難し。一切諸法の道門を分別して衆生行の歸趣する所を知り、無數の更歷する所の劫を識念して常に諸法を持して一切病を滅す。[七三]結網を淨除し、狐疑を逮斷し、速かに正覺を成じて、[七四]咨嗟光顯す。普く一切諸法の聖慧に入つて能く方便を以て惱熱を[七五]擿去す、諸法を講說して己身に奉行し、[七六]甘露の食を服して衆の猶豫を裂く。居る所の土を捨てて無蓋哀を顯して以て衆生を覆ふ。宿命の更生する所處を念じ、泥洹の德に志して、衆の愚騃諸行の所趣を曉つて尊慧を獲至す。一切想を攝して諸住を建立し、道地を失はずして若干變を超へ、諸の言聲に達して、一切結解の所在を却け、佛土に周滿す。遠く五陰を離れて而も自大ならず、疾く言辭を了す。是を用ての故に、便ち魔を降伏し、諸の外學を棄てて不可計を見る。十方國土の現在の諸佛の說法する所を聞いて、受持して忘れず。其の所願の如く、是の三昧を得て、自ら娛樂す。若し菩薩有つて是の三昧を得れば、則ち之は一切智に逮ぶと謂ふべし。所以は何ぞ。此の定を致すを以てなり。發意の頃、[七七]一生補處に最正覺を成じ、一の本より二を起し、二より三に至り、三より四に至り、其の發意に從つて輒ち佛道を得。所以は如何ぞ。又斯の定は則ち一切智なればなり。」

爾の時世尊、此の頌を說いて曰く、

[七八]『無量無訓の漏にして　而も等倫する者あるなし。　所出に所歸なくして
以て諸の所趣を脫し、　降化して所著なく、　殊勝に興つて限りなし。
斯く[七九]景模し、　十方の妙行を執持せよ。　靜を棄てて以て娛樂し、

たゞし、おごそか。
【六四】　以下一句三字より成る偈文。
【六五】　名稱。梵語 Yaśas 又は Kīrti の譯。好き評判。
【六六】　本際。窮極の始修をいふ。
【六七】　三達。羅漢にて三明といふを佛では三達といふ。天眼・宿命・漏盡である。天眼は未來の生死因果を知り、宿命は過去の生死因果を知り、漏盡は現在の煩惱を知りて、之を斷盡する。之を知ること明かである故、明といひ、之を知ること窮盡する故達といふ。
【六八】　三衣。三種の袈裟をいふ。一、僧伽梨(Saṅghāti)で、衆聚時衣と譯し、大衆集會して、授戒說戒等の嚴議を爲す時着す。二、鬱多羅僧(Uttarāsaṅga)、上衣と譯す。安陀會の上に着す。三、安陀會(Antarvāsaka)、中着衣と譯す。體に襯して着するもの。三衣は何れも方形で、數多の小片を縫綴つたもので、その條數にて三衣を分つ。
【六九】　陰蓋。煩惱の異名。覆蓋の義。行者の心を覆ひて善心を開發せざらしむるもの。
【七〇】　三十二相。相好(Lakṣaṇa)の種目である。相好に就いては前出。
【七二】　六根。五根に意根を加

倶に此の　無益の路を捨つれば、　志は平等にして　道は眞實なり。
無生に立つて　法義を覩れば、　是を行ずる者を　佛は哀念す。』と。

行品第二

佛言はく、『是の喜王菩薩は是の「了諸法本三昧」を逮得するを以て一切法を解して顚倒有ることなし。諸法無動にして傾く可からざるが故に、所行志慕して五趣を救脱し、衆魔を降伏して自然に伏を爲す。天下の人と爲り、衆生は愛敬し、智者は欽仰す。諸法及び非法を求暢して、其の德明慧なること、猶ほ月の盛滿して衆星中に明かなるが如し。生死にあつて久しく衆生の知る所なり。一切を勸化して志性淸淨に諸の所受を捨れば則ち三千大千世界の救護する所となる。道地を成致して無我を分別し、所歸なきを覺る、三界の難を見ては之を化導して衆生の護となり、恭恪を逮得するも以て自ら大ならず、諸の[69]陰蓋を越ゆ。諸佛を曉了して其の須宣する所、滅度應時の宜しきを分別し、以て復た[70]三十二相を逮致す。有利・無利、若しくは苦、若しくは樂、有名・無名・歎・毀の事、以て是の世の所有の八法を解して、悉く所著する無し。諸の衆生を救ふて慰むるに甘露を以てし、滅度を顯示して一切を開悟す。其の惱熱を去り、斯の罣礙を斷じ、未だ曾て[71]六根に倚著迷惑せず、十六文字[72]總持の門に入り、其の所至を識り、能く斯を頒宣して便ち總持を逮べり。何をか十六と謂ふ。一に曰く無、二に曰く度なり。三に曰く行なり。四に曰く不なり。五に曰く持なり。六に曰く礙なり。七に曰く作なり。八に曰く堅なり。九に曰く勢なり。十に曰く生なり。十一に曰く攝なり。十二に曰く盡なり。十三に曰く蓋なり。十四に曰く已なり。十五に曰く住なり。十六に曰く燒なり。是れ十六事の文字の敎なり。若し是の十六文字の敎を解行すれば、無量總持の門地を逮得し、一切法を解して自在を得、一切衆生の慧意を擇求して衆の塵勞を消し、悉く佛道を宣ぶ。

らる。無明(Avidyā)、過去世の無始の煩惱を言ふ。行(Saṃskāra)、過去世の煩惱に依て作りし善惡の行業をいふ。識(Vijñāna)、過去世の業に依て受けし現在の受胎の一念を言ふ。名色(Nāmarūpa)、胎中にて心身の發育する位をいふ。名とは心法、色は眼等の肉體をいふ。六處(入)(Saḍāyatana)とは六根をいふ。觸(Sparśa)は感覺をいふ。受(Vedana)は感受するをいふ。愛(Tṛṣṇā)は愛欲をいふ。取(Upadāna)は所欲に執着するを言ふ。有(Bhava)は愛取の煩惱によりて種々の業を作り、將來の果を定むる位をいふ。生(Jāti)は現在の業によりて未來に生を受ける位を言ふ。老死(Janāmaraṇa)は老死する位をいふ。

【五九】蠲除。蠲は「除く」意。

【六〇】權方便。佛菩薩の一時衆生を濟度する權謀を權といひ、其の方法能く便宜に適する故方便といふ。

【六一】結。結集の義。繋縛の義。煩惱の異名である。煩惱が因となつて生死を結集すれば結と言ひ、衆生を繋縛して解脱せしめないので結と言ふ。三結、五結等種々あり。

【六二】恭恪。恪、敬ふ意。

【六三】皐平。皐、うつくし、

微妙なる　本際の門に入り、　以て覺了すれば、　瞋恨なし。
苦惱を斷じて　永安に入る。　是の三昧は　諸佛の行なり。
心中に解すれば、　覺意は華なり。　聖文を受けて　善權を攝すれば、
諸は安住し　覺念は覺なり。　是の勝を說く。　三昧定
覺意は華にして　脫照門なり。　猶ほ月の盛んにして　衆星を燿すが如し。
道の照す所　三界に遍く、　是の法超ゆるを　歎じて月に喩ふ。
三達の療　清淨ならしめ、　閑居に在り、　靜樹の下
利養乃ち　諛諂を棄てて、　行を積んで　是の三昧を求む。
他の非を捐て、　善を蔽はず。　利を以て　身の德を歎ぜず、
三衣を被りて　常に乞食して　親しく是の行　三昧を求む。
純ら禁戒を行じて　賢聖を習ひ、　明智を問ふて　常に獨り歎じ、
以て諸講して　要を奉行し、　疾かに　是の三昧定に逮び、
衆生等　諸味に勞するも　衆會に遠かつて　寂然を樂しみ、
常に是の　妙三昧を求めて、　諛諂する勿れ。　斯の藏を慕ひ、
慚愧に依つて　食して味ひを解し、　禪牀に臥して　居觀寂たり。
無我を樂んで　常に歡悅し、　明喆を講じて　心永く安かなり。
他の罵りを忍ぶこと　猶ほ空響の如く　眞業に在り、　心に怨まず、
是の三昧を　逮得せんと欲すれば、　當に罪福の報を　信知すべし。
惡趣の業を　習倒する勿れ。　常に空を修するは　賢聖の元なり。
夙夜勤めて　精進して力めよ　三昧に逮んで、　慧門に至り、

(Kāmaloka)・色界(Rūpaloka)と名ける。欲界とは婬欲と食欲との二欲を有する有情の住所で、上は六欲天から中は人界の四大洲、下は無間地獄までを言ふ。色界は欲界の上にあり、婬食の二欲を離れた有情の住所で、身體宮殿等物質的のものは凡て殊妙精巧である。禪定の深淺妙麁によつて四禪天に分つ。無色界は色卽ち物質的のものは一もなく、身體も宮殿國土もなく、唯心識を以て深妙な禪定に住する。方位はないが、果報が勝れてゐる故色界の上にあるとし、之に四天がある。

【五六】 法施。布施の一、財施に對し、法(精神的の財)を施すことをいふ。

【五七】 十二緣起(Dvādaśāṅga-pratītyasamutpāda)。衆生が三世に涉つて六道に輪廻する次第緣起を說いたものである。無明(Avidyā)・行(Saṃskāra)・識(Vijñāna)・名色(Nāmarūpa)・六處(Ṣaḍāyatana)・觸(Sparśa)・受(Vedanā)・愛(Tṛṣṇā)・取(Upadāna)・有(Bhava)・生(Jāti)・老死(Jarāmaraṇa)の輪廻の因果關係を言ふ。一々の說明は佛教辭典について見られよ。

【五八】 十二因緣の各項目擧げ

じて貪婬を散じ、懈倦を捨つ。吾我を將護して衆生を先導し、在命を立てず、法を貪り求めず。語る所多からず、言辭清和にして、常に諦かに思惟して、宣じては當に速かに行ふべし。仁明の道業は用ひずして心に生じ、閑居に喜樂して衆の中を行く。怯弱を懷かず、他の短を求めず。自ら身行を惟ふて常に佛道を奉じ、平等に應遵す。久しく遊行して一の土地に在らず、諸の所貪を釋して所在[六三]皇平なり。身の衆の冥を滅して、心羸劣ならず、所修方便して意念を將養するも、亦所思なし。識著を以てせずして解脫を求め、心常に專ら惟ひ、梵行を興發し、慈心に等遵し、悲哀して恩を布き、常に以て喜びを行ひ、和顏悅色にして法を以て之を樂みとす。依蒙觀護して衆の墮害するを救ひ、常に戒禁を以て人を因濟して三昧定に入り、是の智慧を以て諸法に暢入し、文字を曉了して思惟し究暢す。諸の結縛を解いて恐畏せざらしめ、諸の音聲に入つて利義を獲致し、恒に好んで道法の所施を敷演し、佛法の衆を樂んで燕處するを厭はず。志は道に存して上下有ることなし。諸法を缺かず、顯揚隨順して衆生を欺かず。志願堅强にして以て具足を爲し、夙夜精進して休懈せず。是は則ち名づけて了諸法本三昧正定と曰ふ。菩薩是を行じて遍く一切衆生の境界に入り、一切智を奉ず。

佛爾の時、是の頌を說いて曰く。

[六四]「行は清淨なり。　大聖の道に　心信樂して　惑業なし。
自覺意　辯才要あり。　是の三昧は　安住施なり。
諸魔を降して　諸垢を除き、　因緣生死の　欲を斷ず。
智　名稱[六五]　富德の勳　三界を護つて　度無極なり。
增慧の聖　道の方便　賢明の種は　恩情を消し、
衆患を度して　佛の歎ずる所なり。　是の三昧は　安住施なり。

---

ka)の譯、佛の小乘法中の弟子にして、佛の聲敎を聞いて四諦の理を悟り、見思の惑を斷じて涅槃に入るものである。佛道中の最下根とされる。辟支佛(Pratyekabuddha)、緣覺とは十二因緣の理を觀じて斷惑證理し、佛の說法を聞かず、飛花落葉の外緣に因て自ら無常を覺悟して斷惑證理するをいふ。說法して敎化せぬのを常とする。

【六一】五根。感覺器官である眼耳鼻舌身を言ふ。之を媒介として外境は認識される。

【六二】不退轉。阿毘跋致(avaivartin)の譯。所修の功德善根愈々增進し、更に退失し、轉變せぬことをいふ。

【六三】生從生忍といふ忍なし。無生忍か。然らば二忍にては無生の法理に安住して、心を動かさざるを言ふ。又三忍にては無生の實性を證りて諸相を離るるもの。五忍(仁王經說)では七地より九地の間にて諸法無生の理に悟入する位に名ける。十忍にては眞諦の境、之れ無爲法なりと觀じて諸念生ぜざるを言ふ。

【六四】惡趣(durgati)。餓鬼・畜生・地獄・修羅等の卑しき境界を言ふ。

【六五】三界。凡夫の生死往來する世界を三つに分ち、欲界

諸識を[五九]蠲除し、名色を刈り、六入を寂滅し、衆受を斷去し、痛痒を截り、恩愛を消化して而も所受を捨つ。所有を盡し、所生を拔害し、老病死を度して永く苦惱を散じて、衆難あるなく、已に苦罪を離れて心に所著なし。所行究暢して長へに三厄を濟ひ、所觀無穢にして法典を宣布す。獨步して、男子は衆垢を洗浴し、貧身を消去し、聞法し執持して諸法を攝御し、道を學んで倦まず、衆德の元に入りて未だ曾て迴旋せず。不可計の功勳の眞義を積んで、佛道を懷來して法目を光顯し、聖衆を諮嗟して外學を降伏す。法訓を歎詠して菩薩の業を行じ、戲樂せずして用ひて消化し、日に利し、罪福を遠からしめ、行猶ほ日の如し。國王を恭敬して衆聖を開導し、淸白の因を積んで不死の果を致す。所行の威儀は其の宿命を識り、所生の處は常に念ふて忘れず。愚法を患厭して、諸如來の功德の眞正を好んで之を建立す。無量の道動・所執の法教は一切智に歸す。若し以て頒宣して安住典を致し、經文を書寫すれば、皆恐畏を棄てゝ邊際に墮さず。堅住不動にして講說する所あれば、一切の世間は咸共に諷誦し、過去の諸佛悉く是の法を說き、常に親近するを得。現在の諸佛・當來の諸佛も所願具足して無上の功祚あり、一切衆生の所行に入り、聲聞來を燿し、緣覺來を現じ、佛法を奉持して一切行門を忘失せず。況んや生佛をや。眞正を宣暢し、速かに正慧を成じ、佛德を諮問して三世を覆護し、危害の難を開化し寂然たらしむ。[六〇]權方便に逮んで地種を分別し、水種・火種三昧に入つて風種を建立す。又空種を以て脫道門に至り、淨空種慧を以て三界を導利す。衆患を含まず、諸[六一]結を消除して餘り有ることなからしむ。諸著を棄捐し、衆の陰蓋を沒して心をして憺怕ならしめ、身行を曉修して遊居して永く安かなり。亦他人の所行・存沒所立の處を了り、若しは文字を演ずるも、言辭に倚らず、吾我を棄捐す。心已に此の諸の所依の欲を離れ、其の中に在りと雖も、察すること臭犬の如し。微妙に入るも、稍稍開寤して衆勞を懈廢し、諸流を越度して他黨を壞らず。道法を善進して而も所著なく、善師を[六二]恭恪し、睡眠を捨てて諸の礙垢を過ぐ。狐疑を斷

波羅蜜(Dhyāna-pāramitā)。禪は禪那の略で、惟修と譯し、新に靜慮又は三昧と名け、定と略す。眞理を思惟して散亂の心を定止する要法である。四禪八定乃至百八三昧等の別がある。六、般若波羅蜜(Prajñā-pāramitā)、般若は智慧と譯す。諸法に通達する智及び斷惑證理する慧である。菩薩はこの六法を修し、自利利他の大行を究竟して涅槃の彼岸に到るので、六波羅蜜と言ふ。

【三七】沾汚。ひたし汚すこと。

【三八】麤言。荒き言葉をいふ。

【三九】獨燕。燕座は禪定の座をいふか。

【四〇】以下六度の名目を擧ぐ。

【四一】泥洹。涅槃(nirvāṇa)を言ふ。

【四二】慍色。怒りの顏色。

【四三】嬈害。嬈は弄ぶこと。

【四四】惔怕。惔はやくこと、怕は恐ること。

【四五】敵も友も等しき心にて相對するをいふ。

【四六】總持は、陀羅尼(Dhāraṇī)の譯、前出。

【四七】校飾。校はきそふ、又はならぶ意。

【四八】熠燿。光り照ること。

【四九】痂痏。痂は「かさぶた」。痏は打ち傷。

【五〇】聲聞。舍羅婆迦(Śrāva-

して瘡痛を消除す。常に好んで思惟して大精進に通じ、無畏を造建す。師子吼せんと欲して分別辯に入つて、義理を敷演し、神足變化にして衆法を樂聞す。其の道眼を淨くして泥洹を照至し、衆の[五四]惡趣を棄てて[五五]欲界・色界・無色界を度して諸佛土を建つ。是の如き如幻三昧を興發して師子牀に坐す。具足成就して阿惟顏に至るも、未だ曾て衆德の本を忘失せず。化悅懈廢して諸の欲僻を拔き、建立勤修して懶墮を念濟し、衆生を將導して等しく三乘を化す。居業一切の所有を棄捐し、一切智を具足して無量の門を得て、第一義を御す。其の法律に於て空行を解通し、則ち諍訟を斷ち、佛道無上の誓願を好信す。衆念在りと雖も、邪想を懷かず、等しく三世を見て、邪觀に墮せず、善權方便して普く一切に入り、大道を興顯して得度を轉んぜず。法師を樂ぶこと猶ほ犢子の其の母を厭はざるが如し。法師に從ふと雖も、利養を貪らず、說法を觀察して衆會を慢らず。[五六]法施を斷ぜず、所問仁和にし三寶の本を敬つて衆の疑網を決し、奉行慇懃にして休廢せず。終に聖明の業を違失せず、攝脫門に依つて和悅調定し、塵垢を消化して心に所著なし。當所念を思ふて三事の諸菩薩の業を興隆す。此の三事を以て衆會に顯示して、道味を甘美す。若し變化して道業を頒宣せんと欲すれば、音雷鳴の如し。生死[五七]十二緣起を訓誘して止門を開通し、泥洹門に向はしむ。愍んで弘路に入れば、其の身安隱にして心永く患なし。衆聖愛する所、未だ曾て違失せず、堅固平等にして、如來の功勳は能く迴轉することなし。恩德の本を習つて、無福を消滅し、衆善の元を示して聖慧を學ぶ。畢竟鮮明の業を恃怙し、所行相好んで自ら侵欺せず。佛道を遵修して慧品を顯燿し、佛土を講說して、諸問答報し、所難無際にして淸白の法を生ず。佛道を厭はず、少智を棄てず、勤學と俱に愛敬和同し、勇猛の寶に趣いて心存して行にあり。所說あらんと欲して將護都講好喜すること若干、一切の報應を以て衆生に示し、所犯なからしむ。諸法を曉了して善方便を行じ、心念吉祥にして所見を審に諦き、常に自ら己に省みて他人を悅ばすべし。[五八]羅網を裂壞して無明を消去し、諸行を離れ、

乘と名く。三乘に四種あり。大乘の三乘は第一、聲聞乘又は小乘、第二は緣覺乘、又は中乘、辟支佛乘、第三は大乘又は菩薩乘である。第一は速きは三生、遲きは六十劫間空法を修し、現世に於て、如來の聲教を聞いて四諦の理を悟り、阿羅漢となるもの。第二は速きは四生、遲きは百劫の間空法を修し、最後生にて如來の聲教に依らず、外緣に感じて自ら十二因緣の理を悟り、辟支佛果を證する。第三は三無數劫の間六度を行じ、百劫の間三十二相の福因を植ゑ、以て無上菩提を證するものである。

【三五】馳騁。共に「はす」こと。

【三六】六度。六波羅蜜を言ふ。一、檀波羅蜜(Dāna-pāramitā)、檀は檀那の略、布施と譯す。財施・無畏施・法施の大行を言ふ。二、尸羅波羅蜜(Śīla-pāramitā)、尸羅は戒と譯す。在家出家・小乘大乘の一切の戒行を指す。三、羼提波羅蜜(Kṣānti-pāramitā)、羼提は忍辱と譯す、一切有情の罵辱・擊打等、及び非情の寒熱飢渴等を忍受する大行なり。四、毘梨耶波羅蜜(Vīrya-pāramitā)、毘梨耶は精進と譯す。身心を精勵して前後の五波羅蜜を修行するのである。五、禪

を解明にし、正行を毀たずして衆生を度脫し、如來所宣の經典を奉受して、將護隨順して衆の瑕穢を淨くす、諸の佛子を導いて衆の菩薩・諸の佛の遊居に施し、衆の明智を修して仁和の行に從ひ、正眞を樂奉して一切を勸化し、志をして好導せしむ。多く道義を樂んで三世を覩護し、惟淨業國土報應嚴淨の元を好む。常樂[四九]痂痏、二親を敬するが如く、以て總持に逮んで、用ひて遊觀を爲す。得て三昧を致せば、則ち是れ浴池なり。淸白の法を所生の母となし、以て一切の無爲、專心なる定意に堅住することを得。所度有りと雖も所度無しと爲し、無縛・無脫・相不相なく、遵ふ所を導化して、亦衆好なし。佛土を建立して以て總持を得、諸覺に剖伴して所說は淸明なり。魔の境界を度して戰鬪は勇猛にして、衆塵を殺害して不善を刈除し、志願淨光して魔は壞つこと能はず。宣ぶる所の道慧は窮盡するなく、世能く稱するなし。外衆邪業の知る能はざる所なり。[五〇]聲聞法・緣覺の等を過ぎて、歸仰すべき所一切智を立て、衆生の趣く所を解して、眞諦に導き、喜樂の法を好んでは衆生を開かんと欲し、衆垢を樂しむ者は無爲を慕はしむ。道法の船を以て彼の岸に度して、載筏相濟ふ。諸天を愍傷して一法を頒宣し、所立の處侵欺する所なし。布施の淨きを欲して、其の心化悅を解して、諸の好戲を解し、道徑を務めしむ。若し博聞ならんと欲すれば恭敬謙順にして放恣を爲さず。三昧定を得て、志行高妙なること須彌山を超ゆ。[五一]五根を樂んで衆無を觀察し、心精進を好んで、[五二]不退轉に遊ぶ。是を卽ち名づけて[五三]無從生忍と曰ふ。新學の菩薩の奉行すべき所なり。衆の正士等は慧幢を執持して務めて尊聖を求む。勇力士を以て無吾我を了し、一切智に住し、普く衆生の度脫すべき所を解す。諸天の咨嗟する所、龍神の奉仰する所、人民承事する所なり。疾く若干品業を造立するを得て、諸の不學者咸共に歸命し、諸の菩薩僉共に讚歎し、一切法主悉く共に宣暢す。諸根寂定し、以て城郭を爲す。善權方便して一切を導利す。精思を逮得して衆の孤疑を決し、諸の猶豫を斷じて塵勞を去り、無數の衆生を過度し濟脫す。若し病ある者は爲に衆藥を設け、諸法を療治

【二七】攝取(Parigraha)。

【二八】顚倒。物事を凡て反對に逆に考へるを云ふ。

【二九】相好(Lakṣaṇa)。佛陀の身體上の好ましき特異なる特徵を言ふ。普通三十二相・八十隨好を數ふ。之等は佛陀が過去世に於て佛菩薩として修行中に獲得せし功德の結果として得たものであると言ふ。轉輪王・阿羅漢等も之を有するも、不完全なりと言ふ。

【三〇】須彌(Sumeru)。妙高と譯す。娑婆世界の中心をなす高山にして、日月星辰凡て、之を中心として廻る。雪山を理想化せるもの。この山腹に諸天居住す。

【三一】人中の尊とは、佛陀を言ふ。

【三二】山の高き貌。顏容の氣高きことをいふ。

【三三】度無極。波羅蜜多(Pāramitā)を言ひ、度無極は舊譯である。新譯は到彼岸。定說に近き考は、Pārami 彼岸の單數目的格に、ita 行きたる(√i「行く」の過受分)が附き、之を女性にして、Pāramitā とした と解す。度無極の度は到彼岸の義、無極は其の行法の際限なきを言ふ。

【三四】三乘。人を乘せて各々其の果地に到らしむる教法を

得て衆行を休息す[四〇]。施に悕望なく、戒に所念なく、忍に所想なく、精進失はず、禪に所生なく、智慧に導なし。正眞の法を奉じて諸度無極にして平等の住に入る。己の徳を稱さず、他の功を毀たず、生死に依らず、[四一]泥洹を得ず。是れ解脫となす。情愛を消雪して眞諦を建立し、而常に和悅して其の[四二]慍色を捨て、先づ問訊す。長幼中年の士を恭敬して、心常に諮讃し、仁恩の宜を懷きて[四三]嬈害する所なく、言說在らずして、常に寂然[四四]惔怕の行を歎じ、所在和同し、合集別離して心を[四五]怨友に等うして、憎愛なし[四六]。總持を求めて衆生を哀愍すること父の如く、母の如く、身の如く、子の如く、師・和上の如く、尊長に異なし。佛・菩薩を奉ずること充滿順風し、如來に供事すること好樂嚴淨に、怯弱を挾まずして三寶に敬重し、所在遊居して畜積する所なし。衣を度し、食を限じて身命を貪らず、性常に清淨にして恒に乞食を行ふ。止足を捨てずして、衆會を棄て、家業を慕はず、俗居を樂まず、[四七]校飾にあらずして虛僞あるなし。言辭愛すべく、聞く者歡ばざるなし。衆人を勸助して道意を發さしめ、惑の所行なくして行入して教に順ふ。數數諸佛の至眞を諮歎して、心に道法を習ふて聖衆を敬重す。慧明を尊順して智達に習從し、衆の禪思を護つて開化精進し、常に道德を宣べて恒に法を遵行し、功德の本を信じて衆生を開化し、好樂篤信して衆苦を講導し、威儀清淨にして常に弘仁を立つ。而も慚愧・畏歎・羞恥あり、惡人不賢の黨を棄捐して究竟の業を習ひ、志して脫門を行じ、賢聖の行を求め、四意止を奉じて平等斷を習ひ、諸根を興發して諸力を遵修し、覺意を觀察して道行を捨てず。寂滅を度して[四八]熠燿として所觀の心に妄想なし。法典を欣び樂んで精舍を犯さず、所羞なく、所慚なく、顚倒せず、欲想なくして菩薩行を慕ふ。佛道曠然として邊際なく、邪行を患厭して往古無數劫の時習ふ所の邪業を消滅して、身を修むる自ら淨うして沾汚なし。志、寂として律を行じ、重教を尊承して瑕疵なし。所行は時に隨つて非時を捐棄し、曉了して宜しきに從つて往來し、周旋して、二親に孝順なり。又衣食・供具を節限することを知つて、神通に暢達して定意

の意あり、慈氏は之を譯す。賢劫第五番の未來佛である。以下の諸菩薩、考證せず。

【三五】 四大天王。帝釋天の外將である。須彌山の半腹に一山あり、由揵陀羅と名ける。この山に四頭あり、四王各〻之に居り、各一天下を護る。依つて護世四天王と云ふ。其の所居を四王天と云ふ。是六欲天の第一であつて、天處の最初である。四天王天(Catur-mahārāja-kāyikā)と稱し、東は持國天(Dhritarāṣṭra)、南は增長天(Virūḍhaka)、西は廣目天(Virūpākṣa)、北は多聞天(Dhanada)(Vaiśramaṇa)と言ふ。

大梵天王。大梵天は初禪天の王なので、大梵天王と言ふ。略して大梵王とも梵王とも言ふ。

諸龍王以下は、夫々龍・鬼神・阿須倫(Asura)・迦留羅(Garuḍa)・眞陀羅(Kinnari)・摩休勒(Mahoraga)の王を言ふ。夫々の說明は第一頁の八部衆の註を見よ。

揵沓和。揵達婆(Gandharva)を言ふ。雪山山頂のアラカー宮殿にて、富神クヴェーラに仕ふる音樂神を言ふ。天女アプサラスの夫。

【三六】 泥洹。涅槃を言ひ、nirvāṇa の音表である。漢譯、

法藏無上の慧を修して想を人に立てず、心に蔽礙なし。所有を計らずして諸の根本を拔き、家業を斷除して心定まつて無爲に諸想を剖判して悕望する所なし。正受を捨ずして常に智慧を求め、俗の言談を離れて志惟逮住す。世の業を講度して俗計の念なく、意忽ち忘せずして蔭蔽を消除し、常に經法を思ふて心慌がず、所應の宜しきに入つて節を失はずして所行の法を立つ。世を曉知して犯負する所なし。諸業を具するに[三六]六度の行を以てし、無心を棄てて多く誠信を懷く。佛道に篤くして常に佛法を念じ、悔過を勤めて功德を樂しみ助く。衆生に施して因つて諸佛を勸めて法輪を轉ず。聖を嗟歎すべくして諛諂せず。功を積み德を累ねて常に精進し、心懈廢せず、習ふて勤修す。道業菩薩の法に遵行して布施を好んで衆念憐傷し、常に弘意を抱く。止業を求めて止度を缺かず、順ふて教の如くす。身口心淨くして[三七]沾汚なし。是の如く至誠にして、所依の言敎を奉じて違廢せず。欲界に住せず、色界に倚らず、無色界に寂たり。其の所行の怙ふ可き果報に從つて之を信樂す。大乘に堅住して而も退轉せず、愚冥の處に入る。若し慳恪にあるの心は習はずして此等の心を供養して衆生を教化し、諛諂するなからしむ。諸佛を欺かず、害心を抱かず、衆の菩薩に向つて聖業を亂さず、虛妄の言は諸の精進を見て、若し懈怠ある者にして二心なし。他供を嫉まず、弘聖を具足し、憍慢・瞋恚の想・愚顚・邪行を棄捐し、以て無明を消す。常に己の身を省みて彼の短を訟へず、慚愧して自ら佛法に如かざるを責む。身を支へ、道を行じ、又止足を知る。親族を棄捨し、衰耗を厭ふて利養を務めず、若し所得あれば以て分けて人に與ふ。戒は所犯なく、衆人睡眠の尤を習はず。適、[三八]麁言を被むるも常に能く忍を含み、恒に口言を愼んで常に道化を立て、歎詠精進して常に悅和する心と諸の解脫と親近して相習ひ、勤數諸問して閑居に修學し、[三九]獨燕を捨てず、常に節限を行ふ。功勳の德は空義を樂習し、有爲を慕はず、陰身に倚らず、諸種を樂まず、衰入を受けず。財利に志さず、境界に住せず、顚倒を去り、心行は堅强に、聖賢の行を修して心本を觀明し、衆の枯地を

理を信じ惑の出ぬやうになるのを言ふ。卽ち所觀の法に施して忍許するのである。此の忍許によつて愈〻惑を離れ、理を照明する智が決定するのを法智といふ。從つて忍は斷惑の位で、因に屬し、智は證智の位にて果に屬する、無生法忍とは大地の菩薩初地の見道にて無生の理を信忍するを言ふ。

【二七】 師子吼(Sinhanāda)。佛の說法を言ふ。人中の王の佛陀の說法を獸中の王の師子の吼聲に喩へたのである。

【二八】 陰蓋。蓋は煩惱の異名。覆蓋の義。行者の心を覆ひて善心を開發せしめざるもの。

【二九】 先に言葉を掛くるは相手を尊敬することを意味する。

【三〇】 庠序。普通學校の意に用ふるも、此處では靜かなる意に用ふ。

【三一】 この法は「現象を意味す。」法の意に「正法」と「現象」の二義あり。

【三二】 水中の月・泡沫・芭蕉等は果なきものの例に好んで引用さる。

【三三】 五處。五趣の意に用ひたるか。然らば、天人・畜生・餓鬼・地獄を言ふ。

【三四】 慈氏菩薩。彌勒菩薩(Maitreya Bodhisattva)を言ふ。Maitreya は「慈ある」

等倫するものなく諂なく、　我ならず、三垢なし。　最も寂にして、衆の數ずる所なり。
(一一)人中の尊に行を問ふに　意堅く言和妙にして　所說闕漏せず。
聖正士は塵を燒き、　佛道の如く、我に告ぐ。　歸命して佛道に入り、
晝夜に勤めて異るなし。　此の順法の最なるものを聞き、　常に正して道訓の如し。
若し常に定意を持すれば、　神足と辯・智慧にて　十方の諸佛を見奉らん。
聖致を問へば寂然として　講慧に等倫するものなし。　無數の定門を曉り、
所說、懈倦せず。　故に十方の行を問ひ、　入りて樂む處を問はず。
境界の限を諮らず、　妙勝なる大聖頂は　惟十方の行を宣ぶ。』

佛、喜王菩薩に告げたまはく、『善い哉、善い哉、所問甚深にして一切を愍念す。三昧あり、了諸法本と名く。菩薩若し此の三昧定を行じて、是の功勳を得、輒ち此の行に逮んで、(一二)威神巍巍として二千一百諸(一三)度無極の事を具足し成就し、八萬四千の諸三昧も八萬四千の諸總持門を致し、衆生を體解して遍く諸行に入り、疾に無上正眞の道に逮んで最正覺を成ず。』と。佛、喜王に言ひたまはく、『何をか了諸法本三昧と謂ふや？若し菩薩有つて六の堅法を行ずれば、身口心慈くして言行相應し、(一四)三乘に違せず、要誓を失はず、三乘の行を知つて所造の業の如くし人民を開示す。言も亦是の如し。身淸く、行淨らかに、口言柔和なること、猶ほ甘露の如し。心念解明なること猶ほ日光の如し。常に愍哀を行じ、恒に慈心を懷き、害意あることなくして大悲を捨てず。一切を戀ふるなく、貪婬を慕はず、身行淸明にして志樂み法宜しく、篤心を失はずして尙至誠なり。巳願及び一切を廢せずして寂滅を分別して永く寂滅せず、衆生を度脫して其の本行に隨ひ、罪福を曉了して世俗を亂さず、未だ曾て身を貪らずして(一五)馳騁を務めず、衆の苦惱を愍んで之を度脫せんと欲す。衆に勸めて安を施し、危殆を造らず、諸の自大を化し、自大消伏し、懈る者は勸めしめて轉た道教を進め、

義。念と定と慧とを體とする。菩薩の修める念定慧に此の功德を具するといふ。
【一三】三昧(Samādhi)。三摩地とも表音し、定、正受等とも譯す。一定の形式に從つて、心の散亂を抑へて、一處に定めて、冥想に入るをいふ。
【一四】五通。第一は神境智證通、又は身如意通(Ṛddhivi-dhi-jñāna)といひ、身通・神足通とも言ふ。不思議に境界を變現し、游涉往來・變現自在を得る通力である。第二は天眼智證通(Divyacakṣus)で、色界の眼根を以て天界を見拔く通力をいふ。第三は天耳智證通(Divya-śrotra)で、色界の耳根を以て聽聞無碍であるもの。第四は他心智證通(Para-citta-jñāna)で、他人の心念を知るのに無碍であるもの。第五は宿命智證通(Pūrva-ni-vāsānusmṛtijñāna)で、自己及び六道の衆生の宿世の生涯を知るのに無碍であるものをいふ。第五通は有漏の禪定又は呪力等により外道の仙士も得ることが出來るといふ。
【一五】善權。善巧なる權謀。方便と同じ。
【一六】深法忍。甚深の法忍のこと。法忍に三忍・五忍・十忍等種々淺深差別あり。忍は忍許の義で、今迄信じ難かつた

何の謂にてか菩薩成就具足して、曉かに衆生の心性所行を知り、言常に至誠にして諸佛業に入りて諍訟を論せず、其の衆生の音聲・言辭に隨つて誠諦慧に入やと、今現在世に十方の一切諸佛を覩見し、而も罣礙なし。眞妙法を見て乃ち諸佛至聖の誓願を致し、俗法を愍念して世俗に遊ぶと雖も、永く著する所なし。禪定一心三昧を修行して、此の致に從つて而も所生あらず、[二六]泥洹の法に從つて滅度を取らず、諸佛の至願を具せずして而も中に懈廢せず、乃ち復た現に緣覺の法を求めて、此の乘を以て退轉墮落して滅度を取らざるなり。意は無量不可限の慧を修し、心は未だ曾て亂れず、若干の諸種の境界に入りて無限の業を造る。若し所問あらば辯才慧を以て悉く爲めに宣暢して、無量の清淨なる佛土を[二七]攝取し、無餘を逮得して智慧聖達し、衆生を開化して心に著する所なく、人想を有せずして經典を頌宣し、[二八]顚倒に任せずして滅度を顯示し、永く寂滅せず、修行得道するも亦た所倚なし、如し所好あれば、內行を慕つて、以て有無を棄つ。今天中の天、惟愍念せられよ。性不敏なりと雖も敢へて重ねて啓せず、哀を垂れて宣布し給へ。』と。

爾時喜王菩薩歎じて此の頌を歌ふ。

『諸問す、殊妙の月　世を救ふの光明を演ず。　諸菩薩の所行
漸く行じて成就に至り、　無量限の衆に入る。　諸天人、法を樂ひ、
聞いて最も道行を得、　無數の人は意を發し、　微妙の勳を信樂して
問ふて普く名聞度し、　無量の稱智心あり、　勝を見て餘證なし。
十方の散說の行は、　尊き解脫の功德あり、　佛勳は最も倫なし。
大聖の訓慧の行は　俗結の黑冥を念じて　速かに道の光曜を演ず。
疾く三千界を覩て、　行道を講ずること是の如く、　[二九]相好は猶ほ衆華のごとし。
道の無量音を持して　[三〇]三昧は須彌に等しく、　菩薩の行は是の如し。

【九】 天(deva)・龍(nāga)・鬼神(Devatā?)。阿須倫(Asura)、普通阿修羅と表音す。六趣の一にて、戰を好み、之を事とするもの。迦留羅(Garuḍa)、又迦樓羅、迦樓荼等と表音し、金翅鳥・妙翅鳥と譯す。神話的の大鳥王。四天下の大樹に在り、龍を取つて食とするといふ。八部衆の一。眞陀羅(Kimnara)、又緊捺羅・緊陀羅等に表音する。意は「人か?」である。人に極めて似る故に、この疑ひを起させる故、この名があると。音樂を好む神話的生物。譯、人非人。歌神。樂神のこと。八部衆の一。摩休勒(Mahoraga)、普通摩呼洛伽・休勒・摩睺羅伽、大なる蛇の意。大蟒神をいふ。八部衆の一。人(Manuṣya)、非人は人にあらざるもの。人非人即ち「人でなし」と考へてはならない。

【一〇】 會。佛の聽衆の集團を言ふ。過去佛には夫々數會あり。

【一一】 神智暢達 (Abhijñānābhijñāta)。神智(Abhijñāna)神通を言ふ。この句は佛弟子の高德を說明する場合好んで用ひらる。

【一二】 總持。梵語陀羅尼(dhāraṇī) の譯語。善を持して失はず、惡を持して起たしめぬ

して、金剛の如く入らざる所なし。至到する所、處して未だ曾て難あらず。無數劫周遊して歷る所を識り、所說方便して、[二二]一切諸法は猶ほ幻化・野馬・影響の如く、夢に見る所・[二三]水中の月・芭蕉・泡沫の如く、衆變無數にして、黎庶沒溺し、歸依する所なし。[二三]五處に往反して之を救濟し、衆生所趣の善惡に明達して、心の所喜に隨つて眞功勳を演べ、常に愍傷を懷きて麁害の心なし。無量の德を積んで佛土を莊嚴し、無限の弘誓成就し、無際の諸佛の境界の覺意常に定まつて、未だ曾つて忽ち忘れず。歸りて十方の現在の諸佛を歎じ、衆の結塵積んで自から大なるを體解し、志は聖慧を樂んで神通に自ら娛み、善權の業を以つて億百千恒沙佛土に遊び、十方の所講皆遙かに聞見し、明智の所修悉く能く之を履む。法の甘露を雨らして一切を潤澤し、道意無量にして一切普く備はれるもの、其の名を[二四]慈氏菩薩・溥首菩薩・光勢音菩薩・雨音菩薩・善德百千菩薩・華嚴菩薩・自大菩薩・明焰成菩薩・暢音菩薩・奉無數億劫行菩薩・覺意雷音王菩薩・見正邪菩薩・淨紫金菩薩・其心堅重菩薩・威光王菩薩・照四千里菩薩・越所見菩薩・辯積菩薩・慧王菩薩・不虛見菩薩と曰ふ。颰陀和等八大正士あり、又衆香手菩薩・無量眞寶菩薩・智積菩薩・大淨菩薩・師子吼菩薩・音王菩薩・淨珠嚴行菩薩・師子步暢音菩薩・無量辯無畏菩薩あり、是の如き等の菩薩八十億と俱なりき。是に於て三千大千世界、天下の正主たる[二五]四大天王・釋梵自在天王・大梵天王・諸龍王・諸鬼神王・諸阿須倫王・諸迦留羅王・諸眞陀羅王・諸摩休勒王・諸揵沓惒王、皆佛所に往詣し、各〻華香を以て供養し、佛上に散らし、還つて一面に座し、或ひは坐し、或は住す。爾の時喜王菩薩、衆の會集を覩、卽ち坐より起つて更に衣服を正し、長跪叉手して佛に白す。『願くは問ふ所あり、聽きて乃ち敢へて宣陳せられよ。』佛言はく、『汝の啓問する所を恣にせよ。佛當に事々分別して之を宣ぶべし。』と。喜王卽ち問ふ。『何の謂にてか菩薩常に道心を備へ、非法を斷除し、等業を奉行し、衆結を消除して、三品を修し、一には經行、二には住立、三には坐定し、諸の不調を化して是より超越し、其をして精進して瑕穢なからしむるや？

Sudatta(孤獨者に施しをなせしを以て「給孤獨」の異名を得)が歸佛後鄕國舍衞城に佛陀の爲め精舍を建立せんとし、祇太子祇(Jeta)の園を撰び、祇太子の惜むのを、地に黃金を敷ひて、之を償つた。祇太子は奇篤に嘆じ、自らは樹林を寄附して、舍利弗の都督の下に大精舍を建立した。佛、好んで此處に住し給ふ。

【六】維耶離(Vaiśālī)。普通毘舍離と書く。譯廣嚴。中印度の聯邦組織の國の都城にして、跋闍族の離車(Licchavi)等居住す。佛、又好んでこの地に遊歷さる。佛晚年、王舍城の阿闍世王(Ajātaśatru)はその南下を防ぐ爲、恒河南岸の要地に華氏城(Pāṭaliputra)を築くこと、巴利語大般涅槃經(Mahāparinibbānasuttanta-Dīgha-nikāya 16)。

【七】燕室。坐禪する室をいふ。

【八】四輩とは、比丘・比丘尼・清信士・清信女の四種の佛弟子をいふ。比丘(Bhikṣu)は入團受戒せし男子の佛弟子、比丘尼(Bhikṣuṇī)はその女性。清信士は優婆塞(Upāsaka)の譯にて、在家にて佛に歸依せし佛男子の佛弟子をいひ、清信女とは優婆夷(Upāsikā)の譯にて、その女性をいふ。

賢[一]劫經（亦[二]颰陀劫三昧と名く。晉に賢劫定意經と曰ふ。）

卷の第一

問[三]三昧品第一

聞く是の如し。一時佛、[四]舍衛國[五]祇樹給孤獨園に在しき。終竟三歲、始初三年、悉く衣服を具し、所化已に周く、衣を著け、鉢を執て[六]維耶離に遊び、大聖衆無數百千諸比丘と俱なりき。菩薩は八十億なり、爾の時世尊處閑居に在り、安然庠序として[七]燕室より興り、慧王菩薩、喜王開士、精專に獨處せしも、亦尋で起ち出で如來を奉迎し、嚴に場地を治め、衆座を敷設せり。彼の時[八]四輩諸比丘・比丘尼・淸信士・淸信女、[九]天龍・鬼神・阿須倫・迦留羅・眞陀羅・摩休勒及び人非人、皆來りて雲の如く集る。一切の諸[一〇]會は衆の菩薩の光明の所照を蒙り、皆安和を得たり、諸會の菩薩は一切大聖にて、[一一]神智暢達して、[一二]總持を逮得し、已に[一三]三昧を成じ、[一四]五通を具足し、目のあたり衆生の一切心念を覩、悉く分別して道俗を思ふ所を知り、忘想を懷かず、普く弘訓・布施・和意を布いて、自ら戒を持し、忍辱精進して一心智慧[一五]善權して開化せざるなし。道法を頒宣して衆生を慈愍し、瞋害を抱かず、利養を慕はず、演ぶる所の經句、衣食を冀はず、著する所なき故に、[一六]深法忍無生從生に逮び、諸の所生を度して、皆一切の無請の友と爲し、[一七]師子吼を爲して十方啓受し、諸の終始を濟ふて彼岸に度す。勇猛無畏なること衆の魔事を越え、諸[一八]陰蓋を消して罣礙の業なし。本淸淨を了して諸法を疑はず。功を積み、德を累ぬること稱載すべからず。深く玄妙無極の道元に入りて、意和し、面悅び、[一九]先づ問訊を發し言談、[二〇]庠序として慍色を除去し、僞諂を棄捐して正眞を歌頌し、無際心に行じて正忍を逮致し、辯才不斷にして無限會に遊び、强ひて勢有つて心虛空の如し、功勳普く流行

【一】賢劫經の梵名は Bhadrakalpasūtra であらう。賢劫とは又善劫とも言ひ、過去の住劫を莊嚴劫と名け、未來の住劫を星宿劫と名けるのに對し、現在の住劫をかく言ふ。現在の住劫二十增減中には千佛の出世があるので、之を稱讚して賢劫といふのであると。Bhadra は「善き」、「賢き」といふ形容詞、Kalpa は劫の意である。

【二】颰陀劫三昧は、Bhadrakalpa-samādhi の表音。颰陀劫(Bhadrakalpa) は賢劫の意、三昧(samādhi)は定の意。晉の賢劫定意經は之を譯したのである。

【三】問三昧品とは、「三昧を問ふ品」の意。

【四】舍衞國(Śrāvasti)。もと城の名であつて、引いてその城を首都とする憍薩羅(Kosala) 國の國名にも轉用されるに至つた。印度北方雪山山麓の大國であつて、迦毘羅城の西に位し、佛在世の當時波斯匿王(Prasenajit)に支配されてゐた。聞者、聞物の意。「室羅伐」、「室羅伐悉底」にても當つ。

【五】祇樹給孤獨園(Jetavana-Anāthapiṇḍadasyārāma)。卽ち祇が樹を給孤獨が園を寄附せし精舍の意。長者須達

時賢劫經及びその類經が輩出し、流行した眞因であらう。

唯、惜むらくは、本經に梵語原典が存在しないことである。梵典さへ存在したならば、漢譯の不明瞭な個所・術語・佛名の原語が判明して、發明了解する所多く、研究の價値も興味も數段增すであらう。梵典あるならば、佛名・佛教術語・法數の原語を探求し、優に學者の數年の好研究題目となるべきものである。然し、現在に於ても、西藏語譯、他の類經の梵典漢譯を參照することによつて、尙好資料たるを逸しない。

第八、賢劫經の譯註に當つて

有體に申せば、譯者は大乘の學識極めて淺く、殊に賢劫經の專門研究家ではない。然も、與へられた日月も少かつたが爲に、譯註に當つて、自分ながら不滿不十分な點が多いのである。行文が簡潔難解にして、大乘の術語多く、且未だ本經を閱覽した人少く、研究註釋は皆無であり、梵本なき爲、手かゞりも極めて少くあつたが爲に、誤謬も多々あることであらう。怱々の間の不用意の誤・術語の誤解誤譯も多いことと思ふ。世の識者の御示教を乞ふ次第である。殊に第六卷佛名の個所は大體見當はつき得るのであるが、何分にも佛名と說明（共に抽象名詞よりなる）とが區別つかず、大過を避ける爲に、其のまゝ出すこととした。一時の表面を糊塗するよりも、佛名を二つ三つに斷ち切り、佛名を說明語に、說明語を佛名に解し、後世に嘲笑と汚名と、過去諸佛に對する不遜の罪咎を負はぬをよしとした爲である。然しながら、之の卷の解釋は梵典西藏譯を周到なる注意を以て長日月を費して對照せぬ限り、如何なる碩學にも完璧を期し得ぬ難業なりと揚言して憚らない。

本經國譯譯註の不備誤謬は何れ別の後の機會に補ふあるを期したい。

本書譯註に於て小野玄妙先生の御示教を受くる所最も多かつた。此處に記して感謝する次第であります。叉賢劫經譯讀に於て父信之の助教を受くる所多く、殆んどその共力によつたと言つても過言でない。法數の說明に於ては、自らの知識の不確實を補ふ爲、織田得能氏佛教大辭典其他に依る所も少くなかつた。讀者諒之。

昭和五年十一月二十四日

譯者　平等通昭　識

紀元百五十年頃の成立である。恐らく之をさして動かぬであらう。然らば、賢劫經の成立は大略一五〇—三〇〇年といふ事になる。然し、前の一五〇—二〇〇年は先づ除外されなければならない。而して、此の說は竺法護の手には罽賓國沙門の手から渡つたのである（賢劫經跋文參照）から、經成立後比較的早かつたとは思はれるが、其にしても、二、三十年は除却するのがよからう。故に本經の成立は先づ二〇〇—二七、八〇年、大體二五〇年前後成立が妥當と考へられる。三世紀成立であることは確實であつて、殆んど動す可らざるものである。

　何れにしても、本經は內容の性質上何れの宗部の所依の經ともされず、從つて研究もされないが、成立當初に於ては民間信仰に於ては定めし珍重された經であらうと思ふ。

第七、賢劫經の價値と研究

　賢劫經は何れの教派宗派論部からも、所依の經典としては採用されてゐない。其故に識者の注意も餘り引かず、從つて研究も殆んど全く試みられてゐない。然し、本經はその成立當時に於ては、諸類書の輩出した點、佛教美術に千佛の現れる點からも、流行珍重されたものに相違ない。之は大乘經典としては極めて早く漢譯されたことでも頷かれる。蓋し民間信仰としては、極めて有力な經典であつて、論師達よりむしろ一般佛教家、修道者に尊重されたものであらう。この經の研究の興味も、價値も實に此處に存しよう。

　本經にて最も注意すべきは、何と言つても波羅蜜思想である。三百五十度無極に六事（波羅蜜）・四事・十事（十地）を配した八萬四千の諸度無極思想は佛教倫理修道觀の上からは、その體系について、內容について、必ず目を通し、討究すべき重要資料である。殊にこの諸度無極中に四無畏・六通・十八不共法・八品道・十力等を配するに於てをやである。

　賢劫思想・千佛思想も亦、佛教倫理・佛身論の立場から研究すべき好資料と思ふ。千佛名としては研究の中心資料とすべきものであらう。過去修行思想・佛名發達經過・異同を、賢劫經を中心とし、之等の諸類經を參照して、他の論經をも辿り、討究することは有意義のことであらう。

　諸三昧・本生話・譬喩譚・法數、其他の大乘思想の研究も又注意を向ける價値がある。

　一方又本經は、——行文難解ではあるが——一般人の修養書として、求道信仰書として、極めて尊重すべき經典である。諸度無極の說明の個所に於ては、辭句は極めて簡潔ではあるが、修養求道の金言佳句、好教訓・示教のみである。之こそ當

元魏(三八六—五三四)の菩提流支(Bodhiruci—五三五) が譯出した。佛陀は諸佛・菩薩・獨覺一萬一千九十三を數へてゐる。

七、佛說佛名經(三十卷)

大部な經であつて、數多くの佛名を列擧してゐる。

八、佛說百佛名經(一卷)隋那連提耶舍譯

那連提耶舍(Narendrayaśas)、 五八二年譯出

百佛の名を、偈文を混ぜて簡單に記述してゐる小經。

九、佛說不思議功德諸佛所護念經 (二卷) 失譯

(Buddhabhāṣita-acintyaguṇa- sarvabuddha-sūtra)

曹魏(二二〇—二六五)に譯され、譯者の名が不明であるといふ說と隋 (五八九—六一八)の闍那崛多(Jñānagupta)が譯したといふ說とがある。千百二十の佛名が列擧されてゐる。

十、過去莊嚴劫千佛名經(一卷)

(Atīta-vyūhakalpa-sahasrbvddhanāma-sūtra)

梁(五〇二—五五七)代の譯であるが、譯者の名は不明である。附加部分と古い部分 (Trikalpa-trisahasra-buddha-nidāna) と題し、宋(四二〇—四七九)の畺良耶舍 (Kālayaśa 時稱に譯出されたもの) とがある。過去世莊嚴劫の千佛の名を列擧してゐる。

十一、未來星宿劫千佛名經(一卷) 闕譯

(Anāgata-nakṣatratārākalpa- sahasrabuddhanāma-sūtra)

梁(五〇二—五五七)代に譯されたが、譯者は不明である。未來世星宿劫の千佛名を列擧してゐる。

而して之等の諸經中直接賢劫經に關係するのは、現在賢劫千佛名經一卷のみである。

第六、賢劫經成立經過並に年代

前節に擧げた諸經は、直接賢劫經と關係ないにしても、一類をなす可き同一系統の經典である。その多くは成立年代を知り得ないものであるが、賢劫經と相前後して、何れかの影響によつて成立したのであらう。賢劫經も前々から記したやうに、之等の諸經と同一の諸佛崇拜過去修道思想の氣運に乘じてか促がされて、製作されたものに相違ない。勿論その成立は大乘が興立し、然もその內容から考へる時、敎理が相當整つた時期であると思はれる。賢劫期に千佛を數へ、度無極に八萬四千を考へる如きは、大乘初期のものとは到底考へられないのである。然し、漢譯は紀元三百年竺法護によつて譯出されてゐる。從つて之れ以後には下れない。小乘阿毘達磨論書の代表的著作大毘婆沙論は故木村博士の說によれば、「

法　數

　賢劫經には大乘的術語が多いのであるが、殊に法數に富んでゐる。分けて諸度無極の中には、既に觸れた通り、極めて多いのである。例へば六度・三十二相・四神足・四意斷・四意止・四禪・四諦・五根五力・八品道・八部會・六根・三脫門・十種力・四無所畏・五根・十八不共法・八等心・六通等は之である。又この外にも十二索連・三業・菩薩の四事・三界・四天・十住・三忍・三惡趣・五趣・五衰・十六總持等枚擧に暇なく、皆夫々に賢劫經特有の說明が附いてゐる。

　この外大乘思想は種々雜多に出でてゐる。詳について見られたく、又讀者の探索をも待つ次第である。

第五、賢劫經の類經

　賢劫千佛思想の流行を示して、賢劫經類經が相當多く現存してゐる。現在賢劫千佛名經・佛說千佛因緣經・十方千五百佛名經・五千五百佛名神呪除障滅罪經・佛說諸佛經・佛說佛名經・佛說佛名經・佛說不思議功德諸佛所護念經・佛說百佛名經等であり、過去莊嚴劫の千佛に對しては過去莊嚴劫佛名經あり、未來の星宿劫千佛に對しては未來星宿劫千佛名經である。之等について簡單に解說を試み、賢劫經との關係を辿つて見やう。

一、現在賢劫千佛名經（一卷）　闕譯
(Pratyutpanna-bhadrakalpa-sahasrabuddhanāma-sūtra)

　梁代（紀元五〇二―五五七）に譯出された。譯者は不名である。現在の賢劫に出世する千佛の名を列ねてゐる。之を比較するならば、賢劫經第六卷の千佛名を解讀するに役立つ所多からう。

二、佛說千佛因緣經（一卷）

　後秦鳩摩羅什（四〇二―四一二）譯

　現在賢劫千佛の因緣を說いてゐる。佛名は多く出でない。

三、十方千五百佛名經（一卷）　失譯

　十方に於ける千五百佛の名が列擧してある。

四、五千五百佛名神呪除障滅罪經（八卷）

　大隋北印度三藏闍那崛多譯

　闍那崛多（Jñānagupta）が法護（Dharmagupta）等と共に紀元五九三年隋（五八九―六一八）代に譯した。西藏譯とやゝ一致する。然し Buddhanāma-sahasra-pañca-śatacatus-tripañcadaśa（又はtripañcāśat）の西藏譯即ち五千四百五十三佛に比較すべきものである。五千五百佛名神呪除障滅罪經は五千佛の佛名と之の功德を記述するものであるが、事實の佛名は四千七百三しか無い。

五、佛說諸佛經　施護譯

　多少の佛名を出す一、二頁の小經である。

六、佛說佛名經（十二卷）元魏菩提流支譯
(Buddhabhāṣita-buddhanāma-sūtra)

尸羅波羅蜜　Śīla Pāramitā
羼提波羅蜜　Kṣānti Pāramitā
毗離耶波羅蜜　Vīrya Pāramitā
禪那波羅蜜　Dhyāna Pāramitā
般若波羅蜜　Prajñā Pāramitā

である。之は諸論書に一般に採用されるものである。

十波羅蜜は因緣譚(Nidāna-kathā)、小阿含の行藏(Cariyā-piṭaka)にあるものは、次の如くである。

布施
持戒
無我　Nekkhamma Pāramitā
智慧
精進
忍辱
諦　Sacca Pāramitā
決定　Adhiṭṭhāna Pāramitā
慈悲　Mettā Pāramitā
捨　Upekkhā Pāramitā

唯識論では

布施　持戒　忍辱　精進　禪定　智慧(Prajñāna)
方便善巧　Upāya　＜迴向方便／救濟方便
願　Praṇidāna
力　Bala
智　Jñānam

としてゐる。十波羅蜜は多く本生話に出で、むしろ十波羅蜜が古く、それを六波羅蜜に整理したと解す可きであらう。元來波羅蜜は雜多の菩薩の修業德目をまとめて六又は十とし、類似のものは之に包含せしめたのである。大乘佛教が更に進むに從つて、波羅蜜は各個の夫が更に分れ分類され、數多くなつて來た。例へば布施が分れて、小乘ではあるが、動機からは隨至施・布畏施・報恩施・求報施・習先施・布天施・要名施(俱舍論・婆沙論)に分け、對照からは趣・苦・恩と分類する如くで、縱の分類である。賢劫經の如くに、横に八萬四千に分類する如きは、一つの特異な實大乘的一系統をなすやうに思ふ。

三、本生話・譬喩譚

賢劫經が波羅蜜過去佛修業に多く關連してゐる爲に、本經の中には譬喩譚(Avadāna)殊に本生譚(Jātaka)は簡潔ながら、相當多く出でてゐる。本生話は多く第三卷乃至第五卷に波羅蜜の實例として又比喩として引用されてゐる。然し、本生話には自分は興味は有してゐるのであるが、巴利語漢譯本生話について共に知識淺く、且本經の說話が多く簡單であり、人名が不明瞭である爲に、本生話との異同を對校し得なかつた。今後の討究に待つこととする。その中には巴利語漢譯本生話に散見したいものもあるやうである。

四、其他の大乘思想

諸三昧

賢劫經は禪定を重じ、第一卷全部が了諸法本三昧に就いて說明し、兼ねて無從生忍に觸れてゐる。之は特異のものであつて、本經特有の說明が附してある。此處に說明することは、結極本文を引用することになるので、略すこととする。本文を參照されたい。

に六事あり）の二千一百諸度無極である。然してその諸度無極の名たるや、特異のものでなく、極めてありふれた佛敎名目であつて、例へば習進行法修度無極・光曜度無極・世度無極・爲衆生故行度無極等の如きものであつて、この中に重要な法數（例へば三十二相度無極・四諦度無極・十種力度無極等）を含んでゐる。然して各度無極に六事があるとしてゐるので、諸度無極の名目の實數は

$2,100 \div 6 = 350$

三百五十なければならない。之丈の實數はないが、法數例へば四神足度無數・四禪度無極・四意斷度無極・三十二相度無極・五根五力度無極・十種力度無極・四無所畏度無極・十八不共度無極・八等度無極等は夫々各法數中の一つ一つをも一度無極に數へて説明してゐる。卽ち四禪度無極ならば、第一禪度無極・第二禪度無極・第三禪度無極・第四禪度無極の類である。

この基本的二千一百度無極は貪・婬怒癡等の四事に分れ、合して八千四百度無極あり。別に十事あり、八萬四千度無極となるのである。この關係を圖表に示せば、次の如くである。

350度無極×6（波羅蜜）×4（貪婬怒癡）×10（地）＝84,000度無極

この八萬四千の諸度無極には大乘的の擴大があつて、實數は三百五十度無極に過ぎないのである。

一々の諸度無極の內容については到底此處に説明する餘裕はなく、國譯を見て吟味していただく外はないのであるが、修習行法度無極等であれば、之を六波羅蜜に分つて、かく修習行法度無極を六波羅蜜に於て修行することによつて如何なる果があるかを、大乘的用語を以て、極めて簡潔に説明してゐる。或ひは三十二相度無極・四無所畏度無極等であるならば、既に三十二相四無畏の佛德佛相は六度を踏み行つて得た結果であるが故に、そはかゝる諸度を修業せし報なりと説明してゐるのである、要するに賢劫經の諸度無極思想は成覺の位が如何なる修道によつて得られたか、或ひは如何なる修業の報であるかを、波羅蜜を中心として説明せんとするものである。

惟ふに、波羅蜜思想は大乘佛敎の先驅的思想であつて、佛陀の現在の偉大なる人格は過去遙遠なる修道の結果に基くものであり、佛陀は過去に於て種々なる、生物の姿にて各種の道德的德目を行つたと考へ、本生話が生じた。之は前述の通りである。その德目は波羅蜜が中心をなすが、之は恐らく原始佛敎の三學（戒定慧）から出發したものであらう。而して數の小さいものから擧げれば、四波羅蜜・六波羅蜜・十波羅蜜等が擧げられる。普通考へられるものは六波羅蜜であつて、

檀那波羅蜜　Dāna Pāramitā

中の『佛陀系譜』(Buddhavaṃsa 佛種姓)は過去十二劫間に瞿曇佛に先立つて出世した二十四佛を擧げて、類型的に形式的に各佛の生涯の重大出來事を記述してゐる。恐らく之等は過去佛思想の代表的な先驅的なものと思はれる。小乘阿毘達磨論師は之等の過去佛思想を整理し、繁煩哲學的に註解論究した。大乘に至れば、佛陀讃嘆崇拜は更に濃厚深遠となり、諸佛崇拜の功德を過大に考へるに至り、之等は大乘佛敎の一大特色と目される迄となつた。殊に大乘佛敎は進步的、進取的であり、數・記述を大きく誇張的に考へ、述べ、時間・空間を無限に延長して考へるが故に、過去佛の數も著しく增加したに相違ないのである。殊に賢劫に千佛を數へるに至つたのは、敎團佛敎以外に、民間信仰に於て佛陀讃嘆・念佛の功德が尊び信ぜられ、一方に未來佛彌勒の待望となり、一方に過去佛崇拜・讃嘆となり、その功德を求むることになつたと思はれる。少くとも賢劫千佛を思索し出したのは佛敎敎家達であつたとしても、之の信仰を流布し、盛大ならしめたのは民間の信徒であつたに相違ない。又之には佛敎美術も相關的に發達を促し、進めたと思はれる。佛敎美術に千佛が取題とされた痕跡は今も多く殘存してゐるのである。この賢劫千佛思想が如何に生々と活氣を以て迎へられたかは、一方佛敎美術等に好んで取題されたことから伺はれると同時に、又賢劫經に相類する千佛經等が多く存在することからも十分推測される。

二、諸度無極思想

賢劫經の大部分を占めるものは諸度無極思想であり、之は亦中心思想をなしてゐる如くである。實に第二卷諸度無極品第六から第六卷八等品第十九まで三十四頁はこの諸度無極の說明である。

度無極とは波羅蜜多（Pāramitā）の舊譯で、新譯では「到彼岸」と譯してゐる。度は到彼岸の意で、無極は其の行法の際限のないのを言ふのである。Pāramitā を普通解釋して、Pāram は Pāra の單數目的格「最高へ又は彼岸へ」、ita は √i (行く)の過去受動分詞(Past Participle Passive)で「行きたる」、即ち Pāramita で「彼岸に行きたる」で、之を女性名詞として Pāramitā となしたのである。即ち彼岸即ち成佛に達するに行ふ可き道德德目を指して言ふのである。普通波羅蜜は大乘でも六乃至十を數へてゐる。本經も六事と言ふ場合は普通の六波羅蜜(布施・持戒・忍辱・禪定・精進・智慧）を數へてゐるが、本經の建て前である諸度無極に於ては實に八萬四千の多數の諸度無數を數へてゐる。（參照第二卷諸度無極品第六）

八萬四千の諸度無極は先づ二千一百の諸度無極を基本としてゐる。習進行法修諸度無極乃至分舍利度無極（各諸度無極

千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼身經は觀世音菩薩の化身としてゐる。

『我亦曾て過去毘婆尸佛を見るに、この千手千眼の大降魔身を現ず。世尊我今亦この千手千眼の大降魔身を現ず。千臂の中に於て各一轉輪王を現出して、賢劫の千代轉輪聖王となし、千手千眼中に於て各一佛を現出し、賢劫の千佛に同ず。故に菩薩の降魔身の中には此の身を最となす。』

之に類するものは千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼經上である。

『過去毘婆尸佛、降魔の身を化現し、千眼より各一佛を出して賢劫の千佛となし、千臂亦各一輪王を化出して千代の輪王となす。』

藥王經では

『釋迦牟尼佛、大衆に告げて曰く。「我曾て往昔無數劫の時、妙光佛末法の中に於て是の五十三師の名を聞き、信心歡喜し、復た他をして聞持せしむ。他人復た展轉して相敎へ、三千人に至る。其の千人は華光佛を首とし、毘沙浮佛を終とす。過去の莊嚴劫に於て成道せる千佛是なり。其の千人は拘留孫佛を首とし、樓至佛を終とす。現在の賢劫中に於て成道せる千佛是なり。其の千人は日光佛を首とし、須彌相佛を終とす。未來の星宿劫に於て當に成佛すべし。」』

此の千佛の名は傳承によつて多少異つて居り、又佛名を表音する場合と漢譯する場合で異る。千佛名の代表的のものは賢劫經第六卷及び現在賢劫千佛經に出で、賢劫經第七卷には一々の佛の父母・生所・弟子・佛壽等を說き、第八卷千佛發意品には一々其の發心の因緣を說いてゐる。

惟ふに、賢劫の千佛思想に至るには、決して短歷史を經たのでない。佛陀の偉大な人格を尊崇する餘り、佛陀の偉大は實に過去遙遠の修道に基くものであると解釋するに至り、前世修業の思想が發生し、之に印度の諸偶話童話物語が採用されて、本生話(Jātaka)說話が考へられるに至つた。之と同時に同樣にして釋迦佛以前に數多の佛陀が出現し、釋迦佛はその佛陀の記莂を受け、その許に修道したと考へるに至り、釋迦佛も亦其等の佛陀と類を同じうして出世し、在家生活し、出家修道し、成道轉法輪し、傳道したのであると考へるに至つた。巴利長阿含(Dīghanikāya) 中の第十四經『大本經』(Mahāpadāna-suttanta) は釋迦佛の前に拘留孫佛以下燃燈佛等過去六佛を擧げ、極めて類型的に各佛の在天・父母名・種姓名・城名・在家出家・成道・菩提樹名・初輪法輪・諸會・上首及び常隨弟子・人壽を擧げてゐる。(賢劫經第七卷は之に極めてよく似る。) 小阿含 (Khuddhaka-nikāya)

い。

一、賢劫思想と千佛

賢劫(Bhadrakalpa)は現在の住劫を言ひ、過去の住劫を莊嚴劫と名け、未來の住劫を星宿劫と名けるのに相對する。現在の住劫二十增減には千佛の出世があるので、之を稱讚して賢劫と言ひ、亦善劫と名けるとする。賢劫は颰陀劫(Bhadr-akalpa)の譯であつて、颰陀(Bhadra)は「賢き」又は「善き」の意である。

過去・現在・未來の三住劫には各一千佛の出世があるとされてゐる。この內過去の千佛に就いては、諸經論に異說が多いのであるが、佛祖統紀三十は諸經論を勘考して、次の如く記してゐる。

住劫に二十增減ある中、初の八增減の中は佛の出世なし。第九の減劫に於て初めて佛あり、拘留孫佛と名く。是れ千佛の第一なり。次に拘那含牟尼佛、次に迦葉佛、次は今の釋迦牟尼佛なり、それより第十增減の減劫に於て彌勒の出世あり、次に第十增減の減劫中に師子佛等の九百九十四佛あり、次に第二增減の增劫に於て樓至佛出世し、合計一千佛なり。

この千佛の出生に就いては、或ひは一轉輪王の千子とし、或ひは千手觀音の化出とし、或ひは千佛各別の出生とし、經論の所說は種々あるが、賢劫經第八卷は

過去久遠の世に無量精進如來あり。時に國王あり、德華と名く。王、千子あり、佛の所說を聞いて發心修行し、遂に皆最正覺を成ず。是れ今の賢劫中出興の千佛なり。

と言つて、德華王の千子なりとしてゐる。千佛因緣經の記述は賢劫經の千佛出興と似てゐる。

『過去大寶劫の時に寶燈焰王如來あり。其の像法中に一大王あり、光德と名く。王の學堂に千子あり、年各十五、諸比丘の三寶を稱讚するを聞き、比丘に隨つて像前に詣り、各無上道心を發し、遂に最正覺を成ず。今の拘留秦佛乃至最後の樓至佛是なり。』

寶積經九では

過去に佛あり。無量動寶飾淨王如來と曰ふ。其の時、轉輪聖王あり、淸淨大城に住す。勇郡王と名く。王に千子あり、第一は淨意と名け、第千子を意無量と名く。後に又二子を生む。一を法意と名け、二を法念と名く。父王及び千子、共に如來の所に詣つて無上道心を發す。千子賢劫に於て次第に正覺を成ず。其の第一子淨意は卽ち拘留孫佛是なり。乃至第千子意無量は樓至佛是なり。而して後の二弟法意は言く、「諸兄成佛せば、我當に金剛力士となつて、佛法を護衞せん。」法念は言く、「我は當に梵王となつて、佛の轉法輪を請ずべし。」と。』

十四は他の大乘經典の顰に傚つて此の經の傳承の功德を述べてゐる。

二、文　體

賢劫經は原典が未だ發見されない爲に、漢譯によつてのみ、文體を考へねばならないが、本經は大體散文より成り、之に時々韻文を混へてゐる。散文は概して簡潔・難澁・難解なものであつて、且從來賢劫經の閱讀・加經・研究等は殆んど皆無であつた爲に、閱讀に困難を感ずる場合も屢ゝである。文體は大乘經典特有の冗長・冗語がなく、極めて簡枯であつて、法數、大乘の術語も極めて多く入つてゐる。之は第一卷に於て甚しい。唯、諸度無極の說明の個所は形式は甚だ類型である。然し、文體は依然難澁である。但し、千佛興立品第二十一、千佛發意品第二十二は全く類型的に、規則的・形式的に諸佛の生所・父母名・弟子・諸會・記莂等を記述して居り、極めて平易であつて、原始經典長阿含(Dīghanikāya)の第十四大本經(Mahāpadāna-suttanta)の過去六佛說明と類を同じうしてゐる。

韻文は散文の中に時々出づるものである。多く韻文は事新しい事を記述するのでなくて、從前に記述したと同じ事を簡潔に偈文にまとめるものであつて、其の內容は散文と軌を一にしてゐる。蓋して韻文は多く一句五字より成り、時に一句三字の事もあり、散文より譯讀し難い。之は原語・漢文共に韻律・語數の關係上措辭に極めて無理をしてゐることに原因してゐよう。韻文は多く第一卷第六卷に出で、諸度無極を說明する第二乃至五卷には皆無であつて、此の諸卷は終始類型的に簡枯に記述されてゐる。第六卷は殆んど全部一句三字より成る偈文であつて、千佛名が記されてゐる。然しながら、佛名の外に短い說明が入り、佛名も抽象的名詞が多いので、偈文の難解と搗て加へて、何處までが佛名で、何處までが說明やら、殆んど不明である。

蓋して本經の文體は簡枯で、難解であると言へよう。

第四、賢劫經の思想

賢劫經は明かに大乘佛敎思想書であつて、內容極めて豐富、大乘敎理にして修道に關係あるものは殆んど網羅してゐる。その內賢劫思想・過去千佛思想・諸度無極(波羅蜜思想)・諸三昧思想・本生話譬喩譚はその雄なるものであつて、其他多くの大乘思想を含み、極めて多くの法數が諸度無極思想の中に擧げられてゐる。然して之等の中には普通の大乘經典に出づる者と特色を異にするものもあり、優に一つの研究題目をなしてゐる。此處には之等について詳述し、又討究する暇も餘白もないので、唯之を指示して、解說し、今後の研究と機會を待つこととした

は次に千佛を見、稽首して道にて化し、菩薩の決を受け、無生忍を致し、一切法に至る、十方も亦た爾り。』とあるやうに、法護が月支國の沙門から手に入れたものを、口述し、其を筆受者が文にしたのであらう。而して譯經の動機には求道傳法の念がしきりに溢れてゐるのが伺はれる。

第三、賢劫經の構造及び文體

一、賢劫經の巻品と記述內容

賢劫經は八巻二十四品より成り、各巻は數品から成り立つてゐる。卽ち次の如くである。

第一巻　問三昧品第一。行品第二。四事品第三。法師品第四。法供養品第五。
第二巻　諸度無極品第六。習行品第七。無際品第八。
第三巻　聞持品第九。神通品第十。三十二相品第十一。
第四巻　順時品第十二。三十七道品第十三。
第五巻　寂然度品第十四。十種力品第十五。四無所畏品第十六。十八不共品第十七。方便品第十八。
第六巻　八等品第十九。千佛名號品第二十。
第七巻　千佛興立品第二十一。
第八巻　千佛發意品第二十二。歎古品第二十三。囑累品第二十四。

先づ第一巻に於ては、釋尊が維耶離(ヴァイシャリー)(Vaiśālī)の會に於て、大乘經典一樣の法式に則り、諸弟子菩薩八部衆の中にて、喜王菩薩に菩薩の行ふ可き三昧(Samādhi)を問はれて、「了諸法本三昧」の內容功德を說明し、二千一百の諸度無極、八萬四千の諸三昧內八萬四千の諸總持門を致すと述べ、「無從生忍」を說明してゐる。第一巻第二品にてその修行、第三品にて菩薩の四事を說明し、第四品にて是の三昧を行つた諸法師の行事を述べ、第五品ではこの三昧の功德に對する諸人の讃嘆を記してゐる。

第二巻にては諸度無極(Pāramitā)の名目を全部擧げ、結局八萬四千を數へてゐる。而して第二巻習行品第七以下第六巻八等品第十九迄は諸度無極に夫々六事(六波羅蜜—布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧)を宛てはめて極めて類型的に說明してゐる。特に右の內神通品第十には神通を、三十二相品第十一には相好三十二相を、十種力品第十五には十種力を、四無所畏品には四無畏を、十八不共法に基いて、諸度無極を說明してゐる。

第六巻千佛名號品第二十には偈文の形にて千佛の名が擧げられ、簡單な說明が附き、第七巻の千佛興立品第二十一には拘留孫(Krarucchanda)如來以來以下の諸佛の所生城名・種姓・父母名・子名・侍者・上首・弟子・諸會・人壽・正法年歲・舍利に就いて全く類型的に記述し、第八巻千佛發意品第二十二には諸佛の師佛と發意の因緣を記してゐる。歎古品第二十三では賢劫中の千佛が德華轉輪王(Cakrapr-avartan-rājan)の千子であるとし、その修道を述べてゐる。且最後の囑累品第二

ろ繁煩な位である。西藏語譯が又存する點からも、梵典があったに相違ない。

二、漢譯年代と譯者

賢劫經は西晉(二六五―三一六)の竺法護(Dharmarakṣa)によつて紀元三〇〇年頃譯された。この事から原典は恐らく紀元二〇〇―二五〇年に成立したと想像される。

漢譯者竺法護(Dharmarakṣa)は竺曇摩羅察(又は剎)即ち Dharmarakṣa と言ひ、法護はその漢譯である。沙門であつて、其の一家は永く西北部支那の燉煌に住んでゐた。彼は月支國の人の子孫である爲に、彼の元の姓は月支の第二番の文字の支であつた。然し、彼は外國沙門竺高座の弟子になつたので、天竺(印度)の第二字を取つて姓とし、竺法護と名乘つてゐた。彼は師と共に西國に赴いて、三十六個國語又は方言に通曉した。紀元二六六年西晉の首都に來て、其處で紀元三一三年又は三一七年まで譯經に從つて、七十八歲で死んだ。彼は最初に方等部(Vaipulya)の數經を譯した人である。二百拾部三百九十四卷譯したとも、又百七十五部三百五十四卷譯し、紀元七三〇年に九十一部二百八卷現存してゐたとも言はれてゐる。現在は九十部殘存して居り、其の中には光讚般若波羅蜜經(Pañcaviṃśati-sāhasrikā-Prajñāpāramitāsūtra)・正法華經(Saddharmapuṇḍarīka-sūtra)・普曜經(Lalitavistara)・漸備一切智德經(Daśabhūmika-sūtra)等の重要な大乘經典も含まれてゐる。約五十問譯經に從ひ、二百部前後を譯出したことは、彼が譯經家として才能秀いで、貢獻する所多かつたことを證明してゐる。

然しながら、彼の賢劫經の譯文は必ずしも優秀卓越ではない。勿論原典が難澁な佛教梵語で、文體も難解であつたらうことは想像するに難くないが、如何にもこなれてゐない逐語譯であつて、原文の格(case)をも餘りに忠實に譯し過ぎて、了解し難く、漢文としては如何かと思はれる。然し、彼が外國人であつて、未だ譯語例も餘り定らぬ舊譯の時代であることを考へれば、玄奘・義淨と比肩し得ないことは、蓋し止むを得ないことであらう。尤も法護 Dharmarakṣa の他の譯經は比較的解り易い文體なので、この經の原典が特に難解、難澁であるのか、筆受者趙文龍が文が拙かつたかも知れない。(恐らく竺法護以外の譯人の作ではなからう。)

賢劫經の跋文には次の如くである。

「賢劫經は永康元年七月二十一日、月支菩薩竺法護が罽賓沙門より是の「賢劫三昧」を得、手に執り、口に宣ぶ。時に竺法支、洛より寄り來り、筆受者趙文龍は其の功德福をして十方に流れ、普く遂に恩を蒙り、罪蓋を離れしむ。其れ是の經

賢劫經解題

第一、賢劫經の概觀

賢劫經（Bhadrakalpika sūtra?）は又颰陀劫三昧經（Bhadrakalpa-samādhi-sūtra）とも名け、賢劫定意經と譯してゐる。大乘の經典であつて、八卷から成り、大正新脩大藏經で六十五頁位の中大の經典である。西晋（二六五―三一六）の竺法護によつて紀元三〇〇年に譯された。文體は難解な舊譯であつて、初めに諸の三昧（Samādhi）及び其の功德を說き、次いで八萬四千の大乘的な諸度無極（Pāramitā）、佛の神通功德を說き、之が中心思想をなし、末に賢劫期の千佛の名及び經歷を記してゐる。可成發達した大乘の經典であつて、從來は餘り注意もされず、研究は勿論されてゐなかつたが、佛教倫理修道觀の立場からは、極めて重要な興味深き思想書である。

第二、賢劫經の原典と飜譯

一、原　典

賢劫經の原典は未だ發見されない。大乘經典であるから梵語であるには相違ない。支那撰述でなく、印度撰述であることは、種々の理由から*確かであるが、諸寫本を探索しても、其らしいものは見當らない。東京帝大圖書館所藏の梵夾の中にもある賢劫譬喩譚（Bhadrakalpa-avadāna 東京帝大寫本第一五四號）は賢劫經の原典ではなく、內容を異にしてゐる。卽ち賢劫譬喩譚は撰集百緣經 Avadānaśataka. 天業譬喩譚 Divyāvadāna の類であつて、殊に譬喩鬘論 Avadānamālā に似て全然韻文より成り、優波笈多（ウパグプタ）（Upagupta）が阿育王（Aśoka）に物語つた三十四の傳說集である。其の結構と內容とは幾分律の大品（Mahāvagga）に似て居り、賢劫經が純然たる大乘經典の性質を帶びるになし、稍ゝ原始的である。

然しながら、漢譯賢劫經が梵典からの譯であることは確かであるから、今後原典が見出されるかも知れない。原典が發見されるならば、漢譯の思想內容を闡明する上にも、又本經中の大乘佛教術語、固有名詞の梵語等が知り得、益される所は極めて多からう。本典の本當の研究は原典發見後でなくては試み得られないと言つても過言でない。

先輩阿部文雄學士の示教によれば、賢劫經は西藏語譯の該經と極めてよく一致するとのことである。

*特に文體が梵文の甚しい直譯體で、原文の痕跡が歷然と殘つてゐる。例へば具體（Instrumerital Case）を必ず「以」を譯し、事

退轉を得、無量衆生辟支佛心を發し、無量の衆生[五二]三果を證し、復た此の三千大千世界、六種に震動し、天妙香を雨らし天花を灑散し、百千萬種の諸天の音樂を擊作し、虛空中より諸の天衣を雨らし、旋轉して下る。是の如き言を作すや、是の諸の衆生此の法を聞くが故に大善利を獲、是の諸の衆生無量の佛所に於て、宿し善本を殖ゆるが故に此の法を聞いて歡喜し、受持讀誦書寫して人の爲めに解說し、一切衆生の與めに上福田となり、一切衆生を成就し利益し佛種を斷ぜざらしむ、是の諸の衆生、決定して能く菩提の先道と爲り、是の法門を聞いて如實行を起せり。

爾の時佛阿難に告げたまはく、汝當に是の如き法門を受持すべし、讀誦受持書寫して人の爲めに廣く說け。阿難佛に白して言さく、「當に何とか斯經に名け、云何んが奉持すべき。」佛阿難に告げたまはく、是經を名づけて入於大悲[五三]大方等大集說と爲して汝當に受持すべし。名づけて一切諸法體性平等無戲論三昧と爲して汝當に受持すべし。阿難佛に白して言さく、佛の勅旨の如く我れ當に此の法門を受持すべしと、此の經を說き已るや、[五四]爾の時月光童子歡喜し踊躍す、阿逸多菩薩等八十億那由他の菩薩、長老阿難及諸の四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・淨居天子・娑婆世界主梵天王・及び天帝釋四天王等諸大世人阿修羅衆、佛の所說を聞いて歡喜して奉行しき。

月燈三昧經（終）

卷の第十

【五二】三果とは、小乘四果中の前三果。

【五三】大方等云々。六字底本に缺く、今は三本及宮本による。

【五四】爾の時。の次に三本并に宮本「十方より來集し會せる無量無邊阿僧祇の菩薩摩訶薩と」の一句あり。

が名づけて如來住持と爲すや。謂はく諸の功德を出生し、智慧壞す可らざるが故なり。云何んが名づけて方便善巧の導師と爲すや。謂く他をして安隱快樂の大城に趣向せしむるが故なり。云何んが名づけて微細智猶し毛端の如しと爲すや。謂はく測知すべきこと難きが故なり。云何んが知り難く相應す可きこと難きや。謂はく、昔未だ曾て得ざる所なるが故なり。云何んが文字を遠離せるや。謂はく、言語にて道ふこと得べからざるが故なり。云何んが名づけて音聲知り難しと爲すや。謂はく、一切法不可思議なるが故なり。云何んが名づけて智人能く知ると爲すや。謂はく、法は是れ無價の寶なりと知るが故なり。云何んが名づけて已に調伏智の所知を知ると爲すや。謂はく言の如く作すが故なり。云何んが名づけて少欲を知ると爲すや。謂はく、多欲の過を知るが故なり。云何んが名づけて勇猛精進となすや。謂はく、要期を捨せざることを知るが故なり。云何んが名づけて總持を憶念すと爲すや。謂はく爲作する所に隨つて失せざるが故なり。云何んが名づけて苦を窮盡すとなすや。謂はく貪恚癡を斷除するが故なり。云何んが名づけて一切法無生となすや。謂はく一切識一切願を滅するが故なり。云何んが名づけて一言演說して能く一切生死諸趣を知ると爲すや。謂はく、一切法は猶し夢幻の如くなりと觀じて以て取著せざるが故なり。

童子よ、是を三百句の法門の義を解釋し了れと名づく、童子よ、[五〇]是を一切諸法體性平等無戲論三昧と爲すなり。爾の時に世尊偈を說いて言はく、

佛法智無量なり、　演說窮り盡くること無し、　廣く諸法を說き已つて　普く諸の功德を獲。　廣大なること虛空の如し、　是の法の相是の如し、　此を究竟の寶と爲す故に名づけて[五一]方廣と爲すなり。　衆生行無邊なり、　爲めに說法することも亦た廣し、　無盡の阿含義、故に號して方廣と爲す。

此の法を說き玉ひし時、無量の衆生悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無量の衆生菩提に於て不

【五〇】是を。宋、元、明、一本幷に宮本は此の次に、下の十四字を加ふ。大方等大集一切諸佛說月燈正行。

【五一】方廣(Vaipulya)。一切大乘經の通名なり。嘉祥釋して曰く、理正しきを方と爲し、文富めるを廣と爲すと。又一乘は德として包ねざる無きが故に廣と曰ひ、偏を離るる無きが故に方と稱す。云々と。

道を降伏するが故なり。云何んが無所畏を得るや。謂はく一切法に於いて能善く觀察し溫習するが故なり。云何んが如實力を求むるや。所謂不顚倒の法力を求むるが故なり。云何んが名づけて十八不共法の初相と爲すや。所謂一切善法を作すが故なり。云何んが法身を莊嚴するや。所謂三十二相の莊嚴を得るが故なり。云何んが解脫を樂ふや。所謂初中後善を得るが故なり。云何んが名づけて所愛の長子と爲すや。謂はく、諸佛父の餘財を獲るが故なり。云何んが名づけて佛智を滿足すと爲すや。所謂惟だ一切白法を長養するが故なり。云何んが名づけて辟支佛地に非ずと爲すや。所謂能く最上無邊の佛法を獲るが故なり。云何んが名づけて清淨心と爲すや。謂はく能く一切垢穢を斷除するが故なり。云何んが名づけて身清淨と爲すや。所謂一切の病患を滅するが故なり。云何んが解脫門を成就するや。無常、苦、空、無我寂滅と觀察するが故なり。云何んが名づけて諸の雜欲を離ると爲すや。所謂能く甘露の法句を得るが故なり。云何んが瞋恚を離ると名づくるや。所謂大慈大悲を獲得するが故に。云何んが名づけて愚癡地に非ずと爲すや。所謂如實明を得るが故なり。云何んが名づけて阿含智と爲すや。所謂一切世間出世間所作の業を知る智なるが故に。云何んが名づけて明を發起すと名づくるや。所謂惟だ一切善道に趣くことを憶念するが故なり。云何んが名づけて無明を斷除すと爲すや。謂はく一切非善趣の憶想を滅するが故なり。云何んが名づけて滿足なる解脫と爲すや。所謂大聖法を得るが故なり。云何んが名づけて修禪者の猗悅と爲すや。所謂能く喜樂一心を得るが故なり。云何んが名づけて眼見者と爲すや。所謂實義を見、無所見なるが故なり。云何んが名づけて神通變現と爲すや。所謂善く無障法を修するが故なり。云何んが名づけて神足現前となすや。謂く能く一切法[四九]無分別智を獲て障礙有ること無きが故なり。云何んが名づけて陀羅尼を聞くことを樂ふと爲すや。所謂一切法を了知し、一切法に於いて能く涅槃平等に趣向するが故なり。云何んが念持して忘ぜざるや。謂はく、一切の攀緣自性滅するが故なり。云何ん

【四九】無分別智。一切の情念分別を離れ眞如を契證せし智。

なり。云何んが舟筏彼岸に渡すと名づくるや。所謂般涅槃に入ることを信樂し無常苦空無我智を修するが故なり。云何んが四流を渡る舡と名づくるや。所謂速かに涅槃を得るが故なり。云何んが稱譽を求むる者と名づくるや。所謂能く廣大なる法を獲るが故なり。云何んが如來の功德を讃じ顯はすと名づくるや。稱言よく無量の功德法藥を施すが故なり。云何んが如來の名稱を美め歎ずと名づくるや。謂はく、言は一切功德解脫の樂を施す施主なるが故なり。云何んが十力を讃歎するや。謂はく稱言能く難得の法を施す是れ大法寶主なるが故なり。云何んが菩薩の功德と名づくるや。所謂此の經の三昧法を學ぶが故なり。云何んが慈は瞋恚を滅すと名づくるや。所謂瞋恚を對治するが故なり。云何んが名づけて悲となすや。謂はく一切衆生の苦惱を滅除するが故なり。云何んが名づけて喜と爲すや。謂はく一切衆生所に於て歡喜を生ずるが故なり。云何んが名づけて捨と爲すや。謂はく、無緣の悲、能く佛の所作を作すが故なり。云何んが名づけて大乘の人を安慰すと爲すや。隨所に一切佛法を樂求し悉皆能く與めに充足するが故なり。云何んが名づけて行を發し師子吼すと爲すや。所謂能く最上法を致すが故なり。云何んが名づけて佛の智慧道と爲すや。所謂一切の善法に於いて取著する所無く而も善法を得るが故なり。云何んが名づけて一切衆生を解脫せしむと爲すや。所謂能く此岸到彼岸を知るが故なり。云何んが名づけて[四八]一切智智を獲得すと爲すや。所謂一切不善法を斷除するが故に、一切善法を集め及び一切解脫するが故なり。云何んが菩薩の園苑と名づくるや。能く喜悅を得て自身安樂にして亦た一切衆生をして安樂ならしむるが故なり。云何んが魔軍を降伏すと名づくるや。所謂能く一切力を獲能く一切の煩惱を滅するが故なり。云何んが安隱にして呪術を行ずと名づくるや。所謂能く一切の苦難を盡すが故なり。云何んが吉祥の事を成就するや。所謂能く一切の果報を獲るが故なり。云何んが名づけて怨敵を防捍すと爲すや。所謂一切邪見及び取著見を斷除するが故なり。云何んが名づけて怨家を降伏すと爲すや。所謂正法を以て諸の外

【四八】一切智智とは、諸法を如實に了知せる佛智のこと。一切智、道相智、一切相智を總じて一切智智と名づくとの釋あり。

境界と名づくるや。所謂[四四]六波羅蜜を行ずるが故なり。云何んが善人に親近するや。所謂諸佛に近づくが故なり。云何んが惡人を遠離するや。所謂外道の見取を離るるが故なり。云何んが如來の所說と名づくるや。謂はく、如來の力智に住し自性解脫の故なり。云何んが佛地と名づくるや。謂はく一切善法を得るが故なり。云何んが智者は隨喜さると名づくるや。所謂過去未來現在の諸佛聲聞辟支佛は隨喜さるるが故なり。云何んが愚者は謗らるると名づくるや。所謂一切愚者は知ること能はざるが故なり。云何んが聲聞は知ること能はずと名づくるや。謂はく、佛法は不可思議なるが故なり。云何んが外道地と名づくるや。謂はく外道は見慢の方便なるが故なり。云何んが如來の所攝とすと名づくるや。所謂大醫王となること得べきこと難きが故なり。云何んが速かに十力を得と名づくるや。所謂勤めて方便を修するが故なり。云何んが名づけて一切諸天供養と爲すや。所謂善能く一切の樂を出生するが故なり。云何んが梵王禮拜すると名づくるや。所謂彼より出生し解脫するが故なり。云何んが龍禮拜すと名づくるや。所謂能く一切惡道及び諸見を斷ずるが故なり。云何んが[四五]夜叉隨喜すと名づくるや。所謂諸の惡道を蔽ふが故なり。云何んが[四六]甄陀羅讚歎すと名づくるや。所謂能く歡喜を致し解脫するが故なり。云何んが[四七]羅睺羅歎美すと名づくるや。所謂生死を斷除する故なり。云何んが菩薩の所修と名づくるや。所謂能く一切智を獲るが故なり。云何んが智者の求むる所と名づくるや。謂はく不退轉地を得るが爲めの故なり。云何んが無上財を得と名づくるや。所謂能く人天の果報及び解脫を得るが故なり。云何んが非財施と名づくるや。所謂能く一切の煩惱の病を除くが故なり。云何んが病患の良藥と名づくるや。所謂貪瞋癡の患を滅するが故なり。云何んが智藏と名づくるや。所謂常に樂ふて智を修習するが故なり。云何んが無盡の辯と名づくるや。所謂見如實智の故なり。云何んが憂愁を遠離すと名づくるや。所謂虛妄の苦を知つて之を棄捐し無我を悟るが故なり。云何んが三界を知ると名づくるや。所謂三界は夢幻の如しと了知するが故

【四四】六波羅蜜。本經第六卷に詳說されし所なり。

【四五】夜。底本野に作る、今は三本、宮本による。

【四六】甄陀羅(Kiṃnara)。歌神、人非人等と譯す、八部衆の一、樂神の名なり。

【四七】羅睺羅(Rāhula)。障月と譯す、即ち月蝕なり、月明と月蝕との明暗を生死に譬へ、今は生死を脫せしが故に月蝕神が歎美すとの意なり。

くるや。所謂能く[四一]譬喩[四二]本事善非善の法を顯示するが故なり。云何んが諦を分別すと名づくるや。無明を滅し已つて名色起らざるが故なり。云何んが解脱を證すと名づくるや。所謂金剛三昧を得て不動無分別なるが故なり。云何んが但た一言を說くと名づくるや。所謂外道を厭惡し無生智を證するが故なり。云何んが無畏を得と名づくるや。所謂佛法の力を知るが故なり。云何んが戒に安住すと名づくるや。所謂身口を禁防し波羅提木叉戒の故なり。云何んが三昧に入ると名づくるや。所謂三界に染せざるが故なり。云何んが智慧を得と名づくるや。所謂善く無功用智を得るが故なり。云何んが獨り靜を樂ふと名づくるや。所謂憒鬧の過を遠離し常に空閑を捨せざるが故なり。云何んが少親知を憙ぶと名づくるや。所謂少欲知足の故なり。云何んが不濁心と名づくるや。所謂禪定に入つて諸蓋を除くが故なり。云何んが諸見を棄捨すと名づくるや。所謂取著の見を遠離するが故なり。云何んが陀羅尼を得と名づくるや。所謂所見の法に隨つて如實にして忘れず顯示するが故なり。云何んが智照明を得と名づくるや。所謂自性入を知るが故なり。云何んが處と名づくるや。所謂心處所の故なり。云何んが安住と名づくるや。所謂信心所住の故なり。云何んが行と名づくるや。所謂心に住して法を行ずるが故なり。云何んが辯智と名づくるや。所謂辯道を知るが故なり。云何んが因と名づくるや。所謂無明因によつて諸行生ずるが故なり。云何んが相應と名づくるや。所謂應に解脱すべき法なるが故なり。云何んが法と名づくるや。所謂渴愛を斷除するが故なり。云何んが門と名づくるや。所謂諸の過を斷除するが故なり。云何んが道と名づくるや。所謂無常苦空無我智の故なり。云何んが地と名づくるや。所謂十種の無願地の故なり。云何んが生を遠離するや。所謂生法を斷除するが故なり。云何んが智地と名づくるや。所謂不忘智の故に。云何んが無知を捨離すといふや。所謂愚を斷除するが故なり。云何んが智に安住するや。所謂智は無所住なるが故なり。云何んが方便地と名づくるや。所謂[四三]三十七助菩提法を修するが故なり。云何んが菩薩の

【四一】譬喩。譬を借り來つて教說を明にするをいふ。十二分教中の一なり。
【四二】本事。Itivṛtaka の譯語にして、佛が他人の過去世の因緣を說かれしを云ふ。十二分教中の一。
【四三】三十七助菩提法とは、先きに散說せし四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺、八正道を云ふ。

何んが財を以て速かに貧苦に施すや。所謂[三九]乞求者有らば卽ち財を施し法を施さしむるが故なり。云何んが貧窮所に於て能く施を礙ふること無きや。所謂彼の衆生に於て悲愍を起し乞求するものの意に任せて內外の物を捨するが故なり。云何んが破戒を救濟するや。所謂戒業を犯すを除き、淨戒中に安置するが故なり。云何んが利益の事を爲すと名づくるや。謂はく能く衆生を長養するが故なり。云何んが悲智と名づくるや。[四〇]謂はく能く衆生の未來の苦惱を見るが故なり。云何んが法を攝受すと名づくるや。謂はく能く衆生をして如實法に入らしむるが故なり。云何んが資財を棄捨するや。所謂諸陰を捨離し財を以て彼に惠むが故なり。云何んが積聚を營まざるや。所謂資生を厭離し過を守護することを見るが故なり。云何んが持戒を讃述するや。所謂善く戒を持つ果報を知るが故なり。云何んが毀戒を訶責するや。所謂善く犯戒の過を解するが故なり。云何んが無諂心を以て持戒[者]に事へ奉るや。所謂持戒者には遭ひ難き想を生ずるが故なり。云何んが一切棄捨と名づくるや。所謂善く信樂するが故なり。云何んが信を增上し誠心もて勸請すと名づくるや。所謂他の爲めに衆生を利せんことを求め樂ふが故なり。云何んが說の如く能く行ずるや。所謂善信を具足して聞き卽ち受行するが故なり。云何んが比丘智人に事へ奉るや。所謂善事を請問するが故なり。云何んが共に他の言論において能く愛樂を生ずるや。所謂證智敎智有るが故なり。云何んが譬喩智と名づくるや。所謂喩を以て法相の本末を曉知するが故なり。云何んが前際善巧と名づくるや。所謂自ら宿命を識り多聞なるが故なり。云何んが善根を以て首と爲すと名づくるや。所謂菩提に於て增上信を起し復た他に勸むるが故なり。云何んが善巧方便と名づくるや。所謂懺悔隨喜し勸請し所作の善根悉く善く廻向するが故なり。云何んが有相を斷除すと名づくるや。所謂諸事を觀察し諸法は夢の如しと見るが故なり。云何んが想を斷除すと名づくるや。所謂顚倒の想を遠離せるが故なり。云何んが善く事相を觀ずと名づくるや。所謂無相智を得るが故なり。云何んが善く諸經を說くと名づ

【三九】乞求者。比丘、僧のこと在家より財施を受けて法施をなすが故に此の語あるなり。
【四〇】謂。底本に無し今は三本、宮本による。

所謂名は究竟ならずと了知するが故なり。云何んが言說施設を了すと名づくるや。所謂世俗の名數文字を知るが故なり。云何んが假名を出過すと名づくるや。謂はく無言說智を了知するが故なり。云何んが離世間と名づくるや。所謂先づ世間の過惡を觀ずるが故なり。云何んが名利を欣ばざるや。所謂自性少欲なるが故なり。云何んが利養に著せざるや。所謂諸の貪求なく惡欲を離るるが故なり。云何んが人の譏罵を聞いて瞋嫌を生ぜざるや。所謂諸陰界を體知するが故なり。云何んが實德を歎ずるを聞いて欣悅を生ぜざるや。所謂善法功德を隱覆し利養の過を知るが故なり。云何んが恭敬を悕はざるや。因果を體り知るが故なり。云何んが恭敬を得ざるも心嫌恨せざるや。所謂禪定心を捨てざるが故なり。云何んが毀辱せらるるも恚らざるや。所謂世法を觀察し因果を悟るが故なり。云何んが讃譽を聞いて高ぶらざるや。善法を求めんが爲めに出家せしが故なり。云何んが諸の利養無きも心憂慼せざるや。所謂昔作りし所の業を觀察するが故なり。云何んが俗人と交通せざるや。所謂資生を悕はざるが故なり。云何んが非法を樂はず出家人と同止すと名づくるや。所謂如法の人に親近し非法の人に近づかざるが故なり。云何んが非境界處を遠離するや。所謂五蓋を棄捨するが故なり。云何んが所行の境界に住すと名づくるや。謂く四念處を修するが故なり。云何んが法式を成就するや。所謂將に彼を護らんとするが故なり。云何んが非法を遠離するや、自ら善法を護らんが爲めの故なり。云何んが他家を汚さざるや。所謂親を離れ過を知るが故なり。云何んが護法と名づくるや。所謂具足して法を求め如法に作すが故なり。云何んが宴默少言なりや。所謂寂滅智を得るが故なり。云何んが善巧問答と名づくるや。所謂問に隨つて能く答ふる智の故なり。云何んが怨讎を降伏すと名づくるや。所謂如實の法を分別顯示し取著を遠離するが故なり。云何んが時を知るや。所謂能く歲月の時を知るが故なり。云何んが凡愚に親しまざるや。所謂愚法の過を見るが故なり。云何んが貧賤者を輕凌せざるや。所謂一切衆生に於いて平等心を起すが故なり。云

【三八】五蓋とは、一、貪欲二、瞋恚三、睡眠四、掉悔五、疑を云ふ。色聲香味觸の五境に染愛するを貪と名づけ、忿怒を瞋と名づけ、心重くして眠を欲するを睡と云ひ、覺なきを眠と名づけ、心跨動し追戀するを掉悔と名づけ、法に於いて猶豫するを疑と名づく。此の五は有情の心を覆ふて覺の花を生ぜざらしむるが故に蓋と云ふ。大乘義章第五本を見よ。

て盡く施すが故なり。云何んが慚と名づくるや。所謂諸の暴惡を恥づるが故なり。云何んが愧と名づくるや。所謂諸の愚害を羞づるが故なり。云何んが惡心を憎み棄つと名づくるや。所謂愚癡の法を知り之を棄てて共倶ならざるが故なり。云何んが頭陀を捨せずと名づくるや。所謂堅固を要期して退轉すること無きが故なり。云何んが信義を受くと名づくるや。所謂言の如く所作するが故なり。云何んが喜行を起すと名づくるや。所謂善法を思念し利益するが故なり。云何んが尊長に近づき住すと名づくるや。所謂憍慢を棄捨し懈怠の事を離るるが故なり。云何んが憍慢を降伏すと名づくるや、所謂我は不可得にして攀緣無きが故なり。云何んが心を攝伏すと名づくるや。所謂一切の白法を思念し利益を失せざる智なるが故なり。云何んが心智を策擧すと名づくるや。所謂精進の果を知り失せざる智なるが故なり。云何んが義辯を知る智と名づくるや。所謂如實に通達する智なるが故なり。云何んが智を了知すと名づくるや。所謂世間法出世法を知るが故なり。云何んが非智を遠離する智と名づくるや。所謂如實法に於て取執を遠離するが故なり。云何んが入心智と名づくるや。所謂不生滅智の故なり。云何んが部分別巧便智と名づくるや。所謂明利なる差別智の故なり。云何んが諸の言音を知る智と名づくるや。所謂如實法を示す智なるが故なり。云何んが知處所智と名づくるや。所謂如實智に入るが故なり。云何んが名義決定方便智と名づくるや。所謂一切諸佛菩薩聲聞に觀へ奉るが故なり。云何んが非義を棄捨すと名づくるや。所謂善く彼の諸有を入過するが故なり。云何んが善人に親近し共に事を同うすと名づくるや。所謂諸佛菩薩聲聞に親覲するが故なり。云何んが惡を遠離せる人と名づくるや。所謂取我懈怠を遠離せるが故なり。云何んが禪を修し通を發すと名づくるや。所謂欲刺を離れ禪喜を捨せざるが故なり。云何んが、[三七]禪味に著せずと名づくるや。所謂三界を出でんと欲するが故なり。云何んが神通自在と名づくるや。謂はく、五通に住して佛法の知り難きを而も能く他の爲めに顯示するが故なり。云何んが假名を解すと名づくるや。

【三七】禪味に著すとは、色界の四禪定無色界の四無色定の境地に執著して、其の禪定に伴ふ愉悅を弄びて無漏定を修せざるをいふ。今は是に反するなり。

が故なり。云何んが律方便を知ると名づくるや。所謂自性犯不犯と知り、[三五]性罪犯不犯と知るが故なり。云何んが諸の違諍を滅すと名づくるや。所謂衆鬧を棄捨するが故なり。云何んが相ひ違返せずと名づくるや。所謂一切世間の語言を意ばざるが故なり。云何んが忍地と名づくるや。所謂身心の逼惱を忍ぶが故なり。云何んが忍を攝受すと名づくるや。所謂他の所說の麁惡なる語言に於て、悉く能く棄捨し忍辱して滅すること無きが故なり。云何んが法を選擇すと名づくるや。所謂陰界入の差別を知り、有漏助道、淸淨助道を知り、彼の法に於いて無所得なるが故なり。云何んが決定せる巧便と名づくるや。所謂一切法に於て言說する所無きが故なり。云何んが句義を知る差別智と名づくるや。所謂一切諸法に通達するが故なり。云何んが法句出生善巧智と名づくるや。所謂如實の法を說くが故なり。云何んが義と非義を知る差別智と名づくるや。所謂法性は增無く減無しと知るが故なり。云何んが前際智と名づくるや。所謂因智の故なり。云何んが後際智と名づくるや。所謂緣智の故なり。云何んが三世平等智と名づくるや。所謂一切事法に於て差別有ること無しと了知し、事法無きに安住するが故なり。云何んが三世を知る差別智と名づくるや。所謂三世法に於て無所得にして亦た思念無きが故なり。云何んが心住と名づくるや。所謂心を得ざるが故なり。云何んが身住と名づくるや。所謂[三六]身念處是を身住と名づく。云何んが威儀を護ると名づくるや。所謂威儀錯亂有ること無きが故なり。云何んが威儀を壞せずと名づくるや。所謂善事を覆藏するが故なり。云何んが不分別威儀と名づくるや。所謂惡を樂欲する心を離るるが故なり。云何んが諸根端嚴と名づくるや。所謂法趣を思量し、所說相應し、能く時節を知り、如實法に於いて如實に演說するが故なり。云何んが世諦智と名づくるや。善く去來の法を知るが故に、是を世智と名づく。云何んが解脫捨と名づくるや。所謂所有の財に隨つて隱藏せず慳嫉ならざるが故なり。云何んが施手を舒ぶと名づくるや。所謂善く戒に共同するが故なり。云何んが悋心有ること無しと名づくるや。所謂信心も

【三五】性罪とは、遮罪に竸べる語なり。殺生偸盜等は殺生そのこと、偸盜そのことが自性惡なるが故に性罪と云ふ。然るに飲酒は酒を飲むそのことは自性惡に非らざれども、飲酒の曉に綺語、惡口、瞋恚等を發するが故に、其の意味に於いて惡業となる、故に是を遮罪と云ふ。今は是を簡びて性罪と言へるなり。

【三六】身念處とは、四念處觀の第一にして、父母所生の身は內外汚穢充滿して不淨なりと觀ずる觀法を云ふ。別相念處總相念處の兩種の觀法あれども今は前者に就て略釋せり。俱舍論第二十三卷を看よ。

何んが智を樂欲すと名づくるや。所謂常に智慧を習ふが故なり。云何んが通達せる智慧と名づくるや。所謂阿耨多羅三藐三菩提を起すが故なり。云何んが調伏を得る地と名づくるや。謂はく、菩薩の修する所の學處なるが故なり。云何んが譬へば山の如しと名づくるや。所謂菩提心を捨てざるが故なり。云何んが不動なりや。所謂無分別にして煩惱の爲めに奪はれざるが故なり。云何んが躁動せずと名づくるや。所謂一切相に於いて緣念無きが故なり。云何んが不退の相と名づくるや。謂はく、六波羅蜜に於て減じ缺くる所無く恒常に他刹の諸佛を見ることを得るが故なり。云何んが善法を出生すと名づくるや。謂はく、阿耨多羅三藐三菩提に親近するが故なり。云何んが惡業を厭離すと名づくるや。所謂禁戒を堅持し更に惡を起さざるが故なり。云何んが煩惱を行ぜずと名づくるや。所謂無明有愛及び瞋を起さざるが故なり。云何んが戒を捨せずと名づくるや。所謂因果を信じ如來を恭敬するが故なり。云何んが諸禪を分別すと名づくるや。所謂心を知り、及び數善巧方便して一心を得るが故なり。云何んが一切衆生の樂欲を知ると名づくるや。所謂〔三三〕根の差別を知るが故なり。云何んが善く生處を分別する智と名づくるや。所謂五趣の差別を知るが故なり。云何んが無邊智と名づくるや。所謂自然に世間出世間を知るが故なり。云何んが言語次第智と名づくるや。所謂能く如來權密の言說を知るが故なり。云何んが俗緣を棄捨すと名づくるや。所謂身心遠離して出家するが故なり。云何んが三界を樂はずと名づくるや。所謂三界に於て如實に過を見るが故なり。云何んが下劣ならざる心と名づくるや。所謂心を捨てず、若し〔三四〕正受に入らば亦た復た捨てざるが故なり。云何んが諸法に於いて執著無しと名づくるや。所謂一切法に於て愛を棄捨するが故なり。云何んが正法を攝受すと名づくるや。所謂佛の是の如き修多羅を護るが故なり、是を正法を攝受すと名づく。云何んが正法を守護すと名づくるや。所謂一切謗法の衆生を法を以て降伏する是を法を護ると名づく。云何んが業報を信ずと名づくるや。所謂諸惡業に於いて羞恥し厭離し善法を修習する

【三三】根とは、所化の衆生の上中下萬差の機根をいふ。

【三四】正受とは、三昧の譯語なること前の三昧の所に註せしが如し。

て得る所に便ち知足を生ず、若し足ることを知らずんば便ち諂曲を生じ、誇談誑誘し他人を激發し利を以て利を求む、是の事悉く捨するが故なり。云何んが阿蘭若處に住することを捨てずと名づくるや。所謂策勤を棄てず、邊閑及び叢林、巖穴、澗谷を樂ひ、法を愛樂し、在家出家と交遊せず、利養に著せず渇愛を斷除し、禪定を受くることを喜ぶが故なり。云何んが地地住處智と名づくるや。謂はく、聲聞果處智、辟支佛果處智、菩薩地住處智なるが故なり。云何んが憶念不忘と名づくるや。謂はく、無常、苦、空、無我を念ずるが故なり。云何んが陰巧便智を得と名づくるや。謂はく、陰界入の差別を知つて無所得なるが故なり。云何んが神通を證すと名づくるや。謂はく、四神足を獲て能く變現を爲すが故なり。云何んが諸の煩惱を滅すと名づくるや。謂はく、貪瞋癡を斷除するが故なり。云何んが習氣を斷除すと名づくるや。謂はく、昔の愚なる行を厭ひ、聲聞辟支佛地を樂はざるが故なり。云何んが名づけて轉た勝行なりと爲すや。謂はく、能く如來力、無畏四無礙辯を起すが故なり。云何んが修習因と名づくるや。謂はく、憎愛を斷除するが故なり。云何んが犯方便を知ると名づくるや。謂はく、〔三〇〕波羅提木叉を知り、〔三一〕毘尼に知り、戒を知るが故なり。云何んが諸の悔惱を斷ずと名づくるや。諸の罪過に於いて、至誠に懺悔し更に重ねて造せず、諸の善法を修するが故なり。云何んが愛戀を斷除すと名づくるや。三界の渇愛の枝條を拔き、未起の善を發生し、已生の善を壞失せざらしむるが故なり。云何んが諸有を越過すと名づくるや。謂はく、諸の三界に於て無所得にして又た顧念せざる、是を諸有を過ぐと名づく。云何んが宿命に明達すと名づくるや。謂はく、過去世の事を憶知するが故なり。云何んが業果に於て疑無しと名づくるや。謂はく、諸の〔三二〕斷常を離るるが故なり。云何んが法を思惟すと名づくるや。謂はく、如實の法を思念するが故なり。云何んが多聞を習ふと名づくるや。謂はく、聲聞藏、辟支佛藏、菩薩藏を修習するが故なり。云何んが得捷利智と名づくるや。謂はく、觀無生智なり「諸法は」猶し夢の如し「と知るが」故に。云

【三〇】波羅提木叉(Pratimokṣa)。處處解脱又は別解脱と譯す、定共戒、道共戒に簡別して五戒、八戒、十戒、具足戒等を波羅提木叉と云ふなり、戒法を受くる時は、受くるに隨つて防非止惡の無表色を別別に發得するが故に身三口四の惡を解脱する意味にて別々解脱と云ふなり。而して身三口四四七支の惡に就て前記五戒に於ては未だ缺くる所あれども具足戒にては滿足に解脱するなり。大乘義章第十二卷に詳説さる就て見よ。

【三一】毘尼(Vinaya)。新譯にては毘奈耶と云ふ。佛の説かれたる戒律を云ふ。戒律は諸の過非を滅除するが故に意譯して調伏、又は單に滅等とも云ふ、即ち經律論三藏の隨一なり。

【三二】斷常。斷見と常見とのこと。有情の身心は一期限りにして、如何なる善惡業を作るも、身の死すると同時に斷絶すると妄執するを斷見と云ひ、是に反して身心は如何なる善惡業を作るに關らず常住に續くものなりと妄執するを常見と云ふ。此の二見を五見中の邊見と云ふなり。

が故なり。云何んが道を修[二六]習すと名づくるや。謂はく、一切法に於いて無所修なるが故なり。云何んが諸佛に値遇すと名づくるや。[二七]謂はく、一切諸佛の戒行を具するが故なり。云何んが智慧明利なりと名づくるや。謂はく、一切法に於いて無生忍を獲るが故なり。云何んが諸の衆生の樂欲に入ると名づくるや。謂はく、諸の衆生の前後の根差別を知るが故なり。云何んが法智を得と名づくるや。謂はく、一切法に於いて無所得なるが故なり。云何んが無礙辯智と名づくるや。謂はく、如實に能く法式に達するが故なり。云何んが善く文字を知る差別智と名づくるや。謂はく三種の語言差別を知るが故なり。云何んが諸事を過ぐと名づくるや。謂はく事無しと悟解するが故なり。云何んが音聲を知ると名づくるや。謂はく、[二八]入音聲は響の如しと[二九]知るが故なり。云何んが歡喜を得と名づくるや。謂はく、一切法に於いて無所得にして苦惱を遠離し、重擔を棄捨して出離するが故なり。云何んが愛喜を得と名づくるや。謂はく、乞求する者に於いて歡喜を得しめ、施時を知り、見に利益するが故なり。云何んが心調ひ正直なりと名づくるや。謂はく、能く四眞諦が了知するが故なり。云何んが正直なる威儀と名づくるや。謂はく、身を調均するが故なり。云何んが忿色を遠離するや。謂はく、諸の瞋の過を斷ずるが故なり。云何んが面常に怡悅すと名づくるや。謂はく、善戒共住して安隱なるが故なり。云何んが美妙なる言と名づくるや。謂はく、他人の與めに利益の事を說くが故なり。云何んが先づ慰喩を言ふと名づくるや。謂はく、先づ善來と言つて速かに起つて迎接するが故なり。云何んが不懈怠と名づくるや。謂はく、策勤を捨てざるが故なり。云何んが尊長を恭敬すと名づくるや。謂はく、尊長を敬し懼ること善知識の如く想ふが故なり。云何んが尊長を供養すと名づくるや。謂はく隨所に侍養し敎に從ふが故なり。云何んが便ち知足を生ずと名づくるや。謂はく、一切の資生に於て樂著せざるが故なり。云何んが白法を求めて厭ふこと無しと名づくるや。謂はく、諸の善法を集むるが故なり。云何んが命淸淨と名づくるや。謂はく、宜に隨つ

【二六】習。底本集に作る、今は元明本による。
【二七】謂の字底本に無し、今は三本及び宮本による。
【二八】入音聲とは、聲處のこと、耳根の對象としての音聲のことなり。
【二九】知。底本智に作る、今は三本による。

捨てず、信心決定して終に不壞なり、是に則ち已に勝れたる意戒を說けり。智者若し意戒を具せば、所有一切の諸の過惡、皆悉く遠離して與に居らず、是に則ち已に勝れたる意戒を說けり。心能く如幻の法に入れり、猶し睡夢陽焰等の如く、亦た光影呼聲の響の如し　是に則ち已に勝れたる意戒を說けり。苦惱の事は猶し夢の如く、及び無常空無我と知り、心意能く是の如く知れば是れ則ち已に勝れたる意戒を說けるなり。衆生無く壽命無しと知り、諸の因緣は輪の轉ずるが如く、從來する所無く去處無しと悟る、是れ則ち已に勝れたる意戒を說けり。彼の意を推求するに得可き無く、亦た分別なく滯著無く、攀緣有ること無く取執無し、是れ則ち已に勝れたる意戒を說けり。第一義諦は猶ほし夢の如く、涅槃を觀知するも亦た復た然なり、智者若し意の如く了せば、是れ則ち已に勝れたる意戒を說けるなり。

[二三]童子よ、彼れ云何んが業淸淨と名づくるやとならば、三有は猶し夢想の如しと見、彼に於て厭離して貪愛を起さず、是を業淸淨と名づく。云何んが攀緣を過ぐと名づくるや。謂はく、陰界入は如幻と知りて遠離するが故なり。云何んが諸陰を了知すと名づくるや。謂はく、諸陰は猶し陽焰の如しと悟るが故に。云何んが諸界平等を得るや。謂はく、界等は如化と知つて棄捨するが故に。云何んが諸入を遣除するや、謂はく、[二四]入は光影の如くなりとして而も棄捐するが故なり。云何んが渴愛を斷除すと名づくるや。謂はく、一切法に於いて諸の攀緣無きが故なり。云何んが無生忍を證すと名づくるや。[二五][謂はく]一切法に於いて無所得なるが故なり。云何んが諸業を知ると名づくるや。謂はく精進を發起して諸苦を除くが故なり。云何んが諸因を顯示すと名づくるや。謂はく、陰は響の如く生有ること無きが故に。云何んが果を壞せずと名づくるや。謂はく業果は夢の如くにして無所壞なるが故なり。云何んが諸法を現見すと名づくるや。謂はく、諸法中において無生忍を得る

【二三】童子よ。以下三百句の法門の意義を解釋す。

【二四】入とは、新譯に處と云ふ六根六境の十二處のこと。

【二五】謂の字脫落せし歟。

意戒法を具足せば、便ち一切の諸難を遠離し、不可思議なる一切諸佛の法を得、一切諸佛の神通を得、心解脱を得て動ぜず、童子よ、是を具足意戒と名づく。爾の時世尊頌を說いて曰はく、
一心に諦聽して亂想なること勿れ、所說の意戒は淨にして無垢なり、法を聞くことを得已つて諸行を起さば、便ち能く速かに菩提を悟らん。智者若し意戒を持たば、第一寂靜にして廣うして動ぜず、佛法は難思にして未曾有なり、是を則ち名づけて意戒淨と爲す。
智者若し意戒を持たば、心解脱を得て常に不動なり、金剛の如くなる最勝定を得、是を則ち名づけて意戒淨と爲す。智者若し能く此を發起し、稱へて敷演し廣く利益せんと欲せば、六十の微妙なる聲を獲得す、是を則ち名づけて意戒淨と爲す。智者は意戒を最も上と爲す、三十二大人相を得、佛十力諸功德を得、是を則ち名けて勝れたる意戒と說く。智者若し意戒を持たば、辯才及び無畏を獲得し、勝れたる希有難思の法を得、是を則ち名づけて勝れたる意戒と爲す。智者若し意戒を持たば、四念處及び神足を得、復た正勤及び根力を獲、是を已に勝れたる意戒を說けりと名づく。智者若し意戒を持たば、能く淸淨なる七覺支を得、亦た能く八聖道を獲得す、是れ則ち已に勝れたる意戒を說けるなり。智者若し意戒を持たば、最勝なる大捨住、及び大悲住淨無垢なるを獲得す、是を已に勝れたる意戒を說くと名づく。智者若し意戒を持たば、安隱覺淨無垢なるを得、遠離覺の諸功德を得、是を則ち勝れたる意戒を說くと名づく。智者若し意戒を持たば、與に一切の邪見と居らず、恒常に無明の恚を起さず、是を則ち名づけて意戒淨と爲す。若し能く意戒を具足せば、乃至少時も諂曲ならず、父母師所において諂僞無し、是に則ち已に意戒淨を說けり。智者若し意戒を具せば、貪瞋等の事悉く永離す、愚癡の法も亦た皆斷ず、是に則ち已に勝れたる意戒を說けり。智者若し意戒を具せば、恒常に菩提心を

戒成就と名づくるなり。

復た次に具足意戒の菩薩摩訶薩は熾然たる光明を得、是を具足意戒と名づく、若し具足意戒の菩薩摩訶薩は六十種の美妙なる音聲相應を得、是を具足意戒と名づく。

復た次に童子よ、若の具足意戒の菩薩摩訶薩は三十二大人相、十力、四無畏、四無礙智、十八不共法を得るなり、是を具足意戒と名づく。

復た次に童子よ、具足意戒の菩薩摩訶薩は三解脫門を得、謂はく空、無相、無願なり、是を具足意戒と名づく。

復た次に童子よ、具足意戒の菩薩摩訶薩は、四梵住を得、謂はく、大慈、大悲、大喜、大捨、是を具足意戒と名づく。

復た次に童子よ、具足意戒の菩薩摩訶薩は、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分を得、是れ具足意戒と名づく。

復た次に童子よ、若し具足意戒の菩薩摩訶薩は大悲に住することを得、大捨に住することを得、安隱覺を得、寂滅覺を得、利益を得、威儀を得、勝行を得、是を具足意戒と名づく。

復た次に、若し菩薩摩訶薩は邪見を棄捨し邪見と倶ならず、瞋恚を斷除し瞋恚と倶ならず、慳貪を斷除し慳貪と倶ならず、懈怠を棄捨し懈怠と倶ならず、父母師長所に於いて諂曲心貪瞋癡心を起さず、亦た與に倶ならず、菩提心を捨てず、信樂心を捨てず、諸餘の過惡なる覺觀心悉く皆捨離し、亦た與に倶ならず、是を具足意戒と名づく。善く諸法は如幻、如夢、如化、如焰、如響、如光影、無去、無來なりと知り、亦た復た苦なること夢の如しと知り、無我なること夢の如しと知り、無常なること夢の如しと知り、衆生無きこと夢の如しと知り、空なること夢の如しと知り、意所得無く、分別無く、滯著無く、攀緣無く、取執無し。是を菩薩の具足意戒と名づく。若し菩薩清淨なる

得。爾の時世尊、頌を說いて曰はく、

若し口戒と相應せば、是の諸菩薩は必ず、一切諸法無礙智を獲得す、是を口戒を具足すと名づく。若し口戒と相應せば、三十二大人相を獲、佛十力不共法を得、是を口戒を具足すと名づく。若し口戒と相應せば、能く梵住及び辯才を獲、不思議希有の法に逮ぶ、是を口戒を具足すと名づく。若し口戒と相應せば、四念處及び正勤を得、四神足根力等を具す、是を口戒を具足すと名づく。若し口戒と相應せば、大捨無所畏を得、大悲愍淸淨住を得、是を口戒を具足すと名づく。若し口戒と相應せば、能く淸淨なる安隱覺を得、及び寂靜なる覺觀等を得、是を口戒を具足すと名づく。若し口戒と相應せば、妄語及び兩舌を遠離し、復た惡口及び綺語を離る、是を口戒を具足すと名づく。若し口戒と相應せば、終に正法を誹謗せず、亦た如來を毀呰せず、是を口戒を具足すと名づく。若し口戒と相應せば、其の父母師長の所に於いて、非法麁惡言を作さず、是を口戒を具足すと名づく。若し口戒と相應せば、終ひに口の一切の過を起さず、彼れ能く悉く離れて餘あること無し、是を口戒を具足すと名づく。若し口戒と相應せば、能く語言は猶し響の如しと知り、音聲は猶し夢の如しと覺了す、是を口戒を具足せりと名づく。我及び壽命無しと了知し、緣起虛妄猶し夢の如し、能く語言是くの如しと知らば、是を口戒を具足すと名づく。滅諦不實なること猶夢の如く、涅槃の體も夢性の如し、菩薩言是の如しと知らば、是を口戒を具足すと名づく。諸の餘の語言不可得なり、分別有ること無く滯著無く、攀緣有ること無く取執無し、是を口戒を具足すと名づく。

〔二一〕童子よ。云何んが意戒と名くるやとならば、若し具足意戒の菩薩摩訶薩は、一切佛法を得、一切神通を得、心不動解脫を得るなり。若し具足意戒の菩薩摩訶薩は〔二二〕金剛三昧定を得るなり、是を意

滅門なり。

【一九】童子よ。以下梵本第三十九口戒品、Vākṣaṃvara.

【二〇】妄語等の四は口の四惡業なり。

【二一】童子よ。以下梵本第四十意戒品、Manaḥsaṃvara.

【二二】金剛三昧定は、喩を借りて德に名づけたり。金剛に十四義あり、暫らく一義を擧げんに、世の金剛の自體は堅固にして物の能く阻むに非らざるが如く、三昧能く一切の煩惱業苦、外道魔怨の爲めに能く阻壞せられざるが故に金剛三昧定と云ふ。而して此の三昧の現ずる位地に就ては諸種の階位あり釋義あれども、通常小乘に有りては無色界の非想地の修道治の中の末後の一治を金剛三昧定と名づけ、大乘にては菩薩の最後窮終の一念を金剛三昧定と云ふなり。詳くは大乘義章第九卷を見よ。

[一九]童子よ、云何んが口戒なりや。菩薩摩訶薩、若し口戒を成就すれば、則ち佛の六十種の無礙清淨にして美妙なる音聲不可思議を得、是を口戒と名づく。復た次に童子よ、若し具足口戒の菩薩摩訶薩、言說する所あらば、人皆信受す、是を口戒と名づく。

復た次に童子よ、具足口戒の菩薩摩訶薩は三十二大人相を得、如來十力を得るなり、所謂、是處非處智力と、知諸衆生過去未來現在業處因果智力と、知諸禪定解脫三昧正受有煩惱無煩惱智力と、知他壽命知他衆生根差別智力と、知衆生種種無量欲智力と、知諸衆生種種無量性智力と、知一切至處道智力と、知宿命智力と、知一切衆生生死智力と、知漏盡智力となり。

復た次に童子よ、若し口戒を具足せる菩薩摩訶薩は、能く四無畏、十八不共法を得、是を具足口戒と名づく。

復た次に童子よ、若し口戒を具足せる菩薩摩訶薩は、三解脫門を得、四梵住を得、是を具足口戒と名づく。

復た次に童子よ、口戒を具足せる菩薩摩訶薩は略して之を言ふに、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分を得、是を菩薩具足口戒と名づく。

復た次に童子よ、若し具足口戒の菩薩摩訶薩は大悲梵住を得、大捨梵住を得、安隱覺を得、寂滅覺を得、是を菩薩具足口戒と名づく。

復た次に童子よ、若し菩薩摩訶薩口戒を具足せば、[二〇]妄語と、兩舌と、惡口と、綺語とを遠離することを得、父母師長所に於いて、麁言一切の過惡の言を出さず、菩薩は悉く皆彼の言說を遠離し、如實に響の如く、夢の如く、幻の如く、化の如く、陽焰の如く、光影の如くなりと了知し、此の響聲乃至光影に於いて、悉く所得無く、分別無く、取無く、緣無く、執著無し、是を菩薩具足口戒と名づく。童子よ、淸淨口戒の菩薩摩訶薩は、一切の佛語を得、一切佛の神足を得、一切佛の神通を

を總稱して無明と云ふ。
二、行、宿生の業を云ふ。
三、識、母胎等に正しく結生する時の一刹那の位の五蘊を云ふ。
四、名色、六處具足して生ずるまでの胎內の五位を總稱して名色と云ふ。
五、六處とは眼耳鼻舌身意の六根圓滿する位を云ふ。
六、觸、已に根境識三和合するも未だ苦樂捨の三受を差別せざる位。
七、受、四五歲に至り已に苦樂捨の三受の差別を了して未だ婬貪を起さざる位。
八、愛、妙なる資具を貪つて婬愛の心あれども未だ廣く追求せざる位。
九、取、妙なる生活の資具を得んが爲めに周ねく馳求する位を云ふ。
十、有、馳求するに因るが故に能く未來の果を牽く業を積集する位。
十一、生、此の業力によつて此生より命を捨てて、正しく當有を結する位を云ふ。
十二、老死、當有の生支は、今生の初一刹那の識の生ぜしより漸く增して當來の受の位を總じて老死と名づく。俱舍論第九卷を見よ。成唯識論第八卷參照。
【一八】無明滅す云々。以下還

と人眼に過ぐと名づく。諸の衆生の生死に往來するを見、若しは好色、若しは惡色、若しは[一五]善道に趣き、若しは[一六]惡道に趣き、若しは善道に住し、若しは惡道に住し、若しは苦、若しは樂、若しは勝、若しは劣なることを、自己の業の如くに皆悉く了知するなり、是を天眼通と名づく。

復た次に童子よ、若し清淨なる身行を修行する菩薩摩訶薩は一念三世相應の智慧を以て、所有若しは知、若しは見、若しは得、若しは證、應當に了知すべし、彼は一切悉く知り、悉く見、悉く得、悉く證し、悉皆了達す。彼の法とは如何。[一七]所謂無明は行に緣たり、行は識に緣たり、識は名色に緣たり、名色は六入に緣たり、六入は觸に緣たり、觸は受に緣たり、受は愛に緣たり、愛は取に緣たり、取は有に緣たり、有は生に緣たり、生は老死憂悲苦惱に緣たり、是の如き十二因緣、應に知るべく、應に見るべく、應に得べく、應に證すべく、應當に覺了すべし、是の如く、[一八]無明滅するが故に行滅し、行滅するが故に識滅し、識滅するが故に名色滅し、名色滅するが故に六入滅し、六入滅するが故に觸滅し、觸滅するが故に受滅し、受滅するが故に愛滅し、愛滅するが故に取滅し、取滅するが故に有滅し、有滅するが故に生滅し、生滅するが故に老死滅し、憂悲苦惱一切皆滅す。如實に知見し、如實に證を得、如實に覺了し、四聖諦に於ても亦た如實に了知する、是を漏盡通と名づく。

爾の時に世尊、偈を說いて言はく、

菩薩已でに、　神通の次第を顯示せり、　三昧中に安住して、　悉く能く意に隨つて到る。
善く其の耳根を修め、　難思の天耳を得、　其の耳能く聞くことを得、　導師の說く所の法を。
能く衆生心の、　有欲及び離欲、　有瞋及び無瞋、　有癡及び無癡を知る。
宿世の事、　本昔所居の處を了知し、　其の千億劫に於いて、　智藏能く照達す。
善く眼根を修し、　難思の天眼を得、　眼を以て衆生の、　此に死し彼に生ずるを見る。
一念に能く悉く、　一切衆生の念を知り、　是の如く悉く了知す、　彼の智は不思議なり。

[一三] 劫壞とは、劫盡滅壞の項に註せり。俱舍論第十一卷幷に瑜伽論第二卷を見よ。

[一四] 是の如き長壽云々。世間の有情は壽量無限なりしも漸く減じて八萬歲を定命とするに至り、復た不善業を行じて壽量轉た減じて十歲に至る。十歲に至るに及んで始めて厭離心を起して壽量を增長すべき善業を行じ、不善法を捨て、是の因緣力によつて漸次壽量、色力、富樂增長して八萬歲に至るなり。今は此の增と減との長壽短壽の凡ての生死輪廻する期間の悉くを知る意なり。瑜伽論第二卷を看よ。

[一五] 善道とは、上品の十善を行ぜし者は天上に生れ中品の十善を行ぜし者は人間に生れ下品の十善を行ぜし者は修羅道に生る、此の三道を善道と云ふ。

[一六] 惡道とは、上品の十惡業を行ぜし者は地獄道に、中品の十惡業を行ぜし者は餓鬼道に生を受け、下品の十惡業を行ぜし者は畜生道に生を受く、是を三惡道と云ふ。

[一七] 所謂。以下十二因緣を說く、初めに流轉門を明す。以下暫らく有部の說に基いて略釋す。

一、無明、宿生中の諸の煩惱

有量心と知り、總心を如實に總心と知り、無總心を如實に無總心と知り、[一〇]亂心を如實に亂心と知り、無亂心を如實に無亂心と知り、定心を如實に定心と知り、非定心を如實に非定心と知り、上心を如實に上心と知り、無上心を如實に無上心と知り、解脫心を如實に解脫心と知り、非解脫心を如實に非解脫心と知り、[一一]無學心を如實に無學心と知り、學心を如實に學心を知る、童子よ、是を菩薩、他の衆生の心を如實に了知すと名づくるなり。

復た次に童子よ、菩薩は應當に清淨なる身行を修學すべし。何者か菩薩の清淨なる身行なりや。所謂種種なる宿命の事を念知するなり、若しは一生、二生、三生、乃し十生、二十生、三十生、百生、千生、萬生、十萬生、百萬生、千萬生、萬萬生に至る、復た一劫百劫乃至千萬劫の事を念知す、[一二]劫成を知り、[一三]劫壞を知り、及び劫の成壞を知り、乃至無量劫成壞の事を知り、及び劫中彼に曾て有りし衆生の是の如き名、是の如き姓、是の如き生處、是の如き飮食、[一四]是の如き長壽、是の如き短壽、是の如き久住、是の如き壽盡を知り、是の如き受苦、是の如き受樂を知る、若しは此處に死し彼處に生じ、彼處に死し、此處に生ず、是の如き狀貌、是の如き國土、是の如き往事悉く皆憶知するなり、是を菩薩の宿命智通と名づく。

復た次に童子よ、菩薩は應當に清淨なる身行を修習すべし。何者か菩薩の清淨なる身行なりや。所謂天眼界清淨なること人眼に過ぎ、諸の衆生の生死に往來するを見る、若しは好色、若しは惡色、若しは善道に趣き、若しは惡道に趣き、若しは善道に住し、若しは惡道に住し、若しは苦、若しは樂、若しは勝、若しは劣なることを、自の作業の如く皆悉く了知す、是の諸の衆生身の惡行を成就し、口の惡行を成就し、意の惡行を成就し、賢聖を毀謗する邪見業の因緣の故に、身壞命終して地獄に墮す、是の諸の衆生、若し身善行を成就し口善行を成就し、意善行を成就し、賢聖を謗らざる正見の因緣の故に、身壞命終して善處に趣き天上に生ず。童子よ、是を菩薩天眼界清淨なるこ

【一〇】亂心とは、正理論によれば善惡無記の三心中にて惡心と無記心とを亂心と說く。

【一一】無學心。無學とは小乘の四果の聖者中、預流果、一來果、不還果の聖者を有學と言ひ、第四阿羅漢果の聖者を無學と云ふ。今は阿羅漢の心の意なり。從て次の學心とは前三果の聖者の心なること知るべし。

【一二】劫成とは、此の有情の住する世界の成立する期間を云ふ。空劫の時は此の三千大千世界には何物も無き虛空なり。然るに有情の業力によつて先づ虛空に依止して風輪生じ、其の體堅密にして碎くること無く、厚さ十六億由旬なり。又諸の有情の業力によつて大雲雨を起し、風輪の上に澍ぎ、滴車軸の如くにして積れる水輪と成る、深さ十一億二萬由旬なり。次に此の水風の爲めに搏擊されて上方凝結して金と成る。水輪は減じて厚さ八洛叉と成り、餘は轉じて金と成り厚さ三億二萬なり、金輪の上に須彌山を中心として八山ありて是を周匝して遶り、八海之に交はる、斯の如く世界の成立するに二十中劫を要す。是を成劫と云ふ。今は此の文字を倒置せるなり。倶舍論第十一卷を見よ。

神通自在に十方に遊び、諸石壁及び諸山を、隨意に徹過して礙有ること無きこと、猶し飛鳥の順風に行くが如し。大地を履むこと猶し水の如く、出沒自在にして礙ふる所無し、水に遊行して沈沒せず、猶し堅[九]鞕の地を履むが若し。一身能く千身を現じ、無量の多身能く一と爲り、隨意に能く種種の色を現ずるは、智者衆生を渡せんが爲めの故なり。空中を遊行すること飛鳥の如く、身より煙焰を出すこと火聚の如く、復た能く己が身より悉く、清淨涼冷なる香美水を流出す。智者は此の地に端坐して、而も能く手を以て日月を摩し、一念に能く梵天の所に往き、而も梵衆の爲めに勝法を演ぶ。千億の梵衆法を聞き已つて、無上を樂求して勝利を獲、復た能く餘の勝れたる天處に往き、而も爲めに最勝の法を演說す。若し其の意法を說かんと欲する時、便ち能く大千界を震動し、又た無量億の佛刹をして、微妙の音聲を悉く充滿せしむ。

童子よ。是の故に菩薩應當に清淨なる身行を修學すべし。何を以ての故に。清淨なる身行を修行する菩薩摩訶薩は、天耳界清淨にして人に過ぎて音聲を聞く、若しは地獄、畜生、閻魔羅處、天上、人中、若しは近、若しは遠、是を天耳通と名づく。

童子よ、菩薩は復た應に清淨なる身行を修學すべし。何を以ての故に。清淨なる身行を修行する菩薩摩訶薩は、常に能く他心を知るなり、有欲心を如實に有欲心なりと知り、無欲心を如實に無欲心と知り、有瞋心を如實に有瞋心と知り、無瞋心は如實に無瞋心と知り、有癡心は如實に有癡心と知り、無癡心は如實に無癡心なりと知り、有取心は如實に有取心と知り、有顚倒心を如實に有顚倒心なりと知り、無顚倒心を如實に無顚倒心と知り、有小心を如實に有小心と知り、無小心を如實に無小心と知り、有大心を如實に有大心と知り、無大心を如實に無大心と知り、有光潔心を如實に有光潔心と知り、無光潔心を如實に無光潔心と知り、無量心を如實に無量心と知り、有量心を如實に

【九】鞕。底本鞹に作る、今は元本による。

瑕穢無し、所謂聖戒無漏戒なり、當に知るべし聖戒は是れ常住なりと。童子よ我れ昔菩提を修せしとき、爾の時化して勝思王と作りたり、汝疑を致して異人と爲すこと勿れ、當に知るべし卽ち是れ我身なり。童子よ汝應に隨順して學び、是の如き勝れたる身戒に安住すべし 當に億衆の爲めに廣く宣說せば、久しからずして亦た當に我の如くなることを得べし。

童子よ、是の故に菩薩當に淸淨なる身業を修行すべし、何を以ての故とならば、淨業を修行する菩薩摩訶薩は、地獄、畜生、餓鬼、閻魔羅等に墮することを畏れず、亦た八難五趣の苦厄を畏れず、又水、火、[七]刀兵、毒藥、王、賊、師子、虎、豹、豺、狼、犀、象、熊、羆、一切の惡獸、毒蟲、食肉の屬を畏れず、亦た復た人非人の難を畏れず、童子よ、淸淨なる身行を修行せる菩薩摩訶薩は手掌を以て此の三千大千世界を擧ぐること若しは高さ一多羅乃至、十多羅ならんと欲するに、其の欲する所に隨つて悉く能く之を擧ぐ。童子よ、淨身行の菩薩摩訶薩は、能く究竟せる神通の彼岸に達す、彼れ神足福德力を報得せるを以ての故に、遠離隨順の無染なる寂滅の定を攝取し、悉く皆能く入るは是の定に依るが故なり、無漏にして一切世間の無礙の眼を成就し得す。云何んが神足なりや。謂はく念に隨つて能く威力自在たり、解了滯ること無く欲に隨つて能く成ずるが故に神足と名づく。

復た次に童子よ、神足に住する菩薩摩訶薩は、能く種種なる神變の事を爲す、所謂一を能く多と爲し、多を能く一と爲し、隱顯自在にして、石壁諸山を徹過し、無礙なること、風の空を行くが如し、空中に在つて　加趺して坐すること猶し飛鳥の如く水を履むこと地の如く、地中に出沒すること水の如くにして異無し、身より煙焰を出すこと大火聚の如く、日月をも大威德有つて能く捫摸し、大身たらんと欲せば自在無礙にして乃し梵天に至る。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言はく。

【七】刀。底本五に作る、今は三本、宮本による。

【八】加趺とは、結加趺坐の略にして、坐禪思惟說法の時の坐法なり、閑靜處に坐物を敷き、其の上に先づ右の足を以て左の髀の上に安き、左の足を右の髀の上に安き、次に右の手を左の足上に安き、左の掌を右掌の上に安き、兩手の大拇指の面を相拄へ正身端坐するを云ふなり。半加趺坐は是の略なり、但だ左の足を以て右の足を壓するのみ、尼の坐法なりといふ。

れしが故に、離想を以ての故に怖畏無し。怖畏及び恐懼を遠離し、怖畏無きを以て心動ぜず、心動轉せずして怖畏無し、億の諸魔衆も能く怖れず。若し菩薩身戒所に於いて、演說し開曉し及び顯示せんに、若し是の身戒を學ぶこと有らば、諸の億の魔衆も擾すこと能はず。若し諸佛の法を知らんと欲すること有らば、當に知るべし其の限齊有ること無しと、若し身戒を修學すること有る者、是の人は能く三界の塔たり。若し是の佛法を知らんと欲すること有る、不可思議寂滅衆、若し是の如き身戒を學ばば、其の行堅固にして速かに成佛せん。若し大仙の法、不可思議佛十力を得んと欲する有るもの、若し是の如き身戒を學ばば、佛力を修習し得ること難からず。十八最勝不共法、諸佛如來の安住する所、若し是の身戒を修學すること有らば、彼れ此の法を得ること難しと爲さず。若し七覺支寶所、及び[六]神足辯才等に於いて、若し身戒を修學すること有らば、彼の妙果を獲ること難しと爲さず。其の梵住及び四禪、及び三種の解脫門、安隱なる覺觀及び寂滅に於いて、身戒に住する者は得ること難からず。四念處等及び正勤、大仙の五根及び五力、亦た聖賢の八正道、身戒に住する者は得ること難からず。餘の諸佛の所有法、不可思議無限量に於いて、彼れ此の法を得ること悉く難からず、是の如き身戒を學べるを以ての故なり。是の如き身戒を聞くことを得已つて、是の王最勝なる刹を獲得し、歡喜踊躍して愛樂し、彼の佛法に於いて便ち出家せり。出家し已つて十億歲を經、最勝なる淨梵行を修行し、恒常に四梵住を修行し、世間諸天人を利益す。善く清淨なる梵住を修し已つて、便ち是の如き勝れたる身戒を得、復た十方億千佛に見へ、是の如き菩提行を修行せり。彼の勝法に於いて出家し已つて、最勝なる淨梵行を修行し、多聞妙辯才を具足せり、是を聰慧なる大法師と名づく。禁戒を堅持して缺漏無く、戒身清淨にして

【六】神足とは、四如意足のこと。辯才は四無礙辯のこと。

相を取る者は、我想を存し心執著す、若し色相を取る執著の人は、愛欲を起こし律儀無し。若し常に實際を修學せば、是の人眞妙空を究竟し、彼れ更に愛欲を起さず、無戒の爲めに惡道に墮せず。蟻子能く虚空を動ずるに堪へ、須彌の安固なる復た動ぜしむべくとも、若し善く實法を學ぶこと有る者を諸天の妙色もなを動ずること能はず。彩色以て虚空に畫く可く、亦た手太虚を執る可くとも、一切諸魔愛欲等の、能く動搖することを得る者有ること無し。呼響音聲猶ほ捉ふべく、大石の水に沈むを亦浮ぶ可くとも、是の如く身戒を學ぶ者の、能く彼の心念を知ること有ること無し。所有一切の諸音聲、悉く皆盛つて篋中に內るることあるも、若し是の如き身戒に住する者の、能く彼の住所を知ること有るもの無し。所有雲雷及び電光、日月の明等悉く執ふべくとも、若し身戒に住すること有る者の、能く彼の身の自性を知るもの無し。四方の所有諸の風輪を、羅網鉤羂もて繫縛すべくとも、若し身戒に住すること有る者、能く彼の身量を知るもの有ること無し。其の制心に住すること有る者は、諸の衆生の境界に非ず、能善く身戒を修習する者は、猶し虚空の能く染むるもの無きが如し。其の四方の風行道に於いて、虚空の鳥迹猶ほ見る可くとも、彼の身量は測る可らず、及び心の所行思ふ可きこと難し。若し是の如き身戒に住する者は、彼れ一切の諸の過惡無く、一切煩惱聚を遠離す、是の如き身戒を學ぶに由るが故なり。清淨寂滅定に住せば、刀火の爲めに害せられず、彼の身能く執捉する者無し、常に身戒を修學するに由るが故なり。是の如く住せば怖畏無く、心紛動無く嫉妬無く、一切の諸の厄難を遠離するは、是の如き身戒を修學するが故なり。刀杖及び毒藥を畏れず、亦た水火災を怖畏せず、一切の諸厄難を遠離するは、是の如き身戒を修學するが故なり。雨雹及び盜賊、所有一切の毒害等を畏れず、彼れ一切の我想を離

時に王有り號して勝思惟と曰ふ、其の眷屬八萬億人と倶に、智光如來の所に往き、佛足を頂禮し右に遶ること三匝し退いて一面に坐せり、爾の時智光如來、即ち偈頌を以て [四]身律儀を說き玉はく、

猶し虛空の垢穢無く、　自性光潔にして畢竟淨きが如く、　斯の如く身戒も亦た是の如く、音聲もて演說すべからず。　音聲と空と知る可らず、　是の如き二種同一相なり、　虛空相貌無きを說く、　彼の相便ち身戒に同じ。　若し其の戒惟だ一相なりと知れば、　彼便ち戒律儀を具足す、　智性無生の境も亦た寂なり、　眞無漏中妄想盡く。　亦た貪著及び愛欲無く、財色に於て渴愛を起さず、　若し諸有に於いて過を見ずば、　終に是の身戒を知ること能はず。　若し能く [五]無漏戒を知ること有れば、　彼れ便ち復た一切生無し、　當に知るべし羅漢法も是の如し、　諸の外道の知る所に非ず。　諸の三界に於いて心怖畏し、　欲資產に於いて貪愛無く、　王位及び資財を悕はず、　彼れ能く此の身戒を具足す。　我れ今此の身戒の義を說かん、　此の義聲敎說くこと能はず、　若し能く是の法母を知らば、　是の人常に能く身戒に住するなり。　智者は是の義母を愛樂す、　是の義を信樂するが故に我れ說く、　非義を遠離し應に眞義なるを　斯を則ち常に身戒に住すと名づく。　諸佛法中何の義をか說く、　云何んが善能く是の義を知るや、　若し能く相應の義を知れば、　是を即ち名づけて身戒に住すと爲す。　若し無相、　一切無我悉く空無なりと觀察すること有らば、　彼の人を無戒者と名づけず、　是の人實際を修學するが故に。　一切有を觀じて非有なりと知れば、　是の人は恒に非有際に住するなり、　一切有に於いて所著無し、　是の人は能く無相定を證せるなり。　若し人無我法を知り、　自體空無にして性非有なり、「と知れば」　是の人を無戒者と名づけず、已に決定眞實を覺せるが故なり。　若し人能く五陰は空にして、　諸法寂滅にして神我無しと知れば、　彼を便ち名づけて持戒者と爲す、　其の身復た惡業を行ぜず。　律儀有ること無く

【四】　身律儀とは、不殺生、不偸盜、不邪婬なり。

【五】　無漏戒。無漏とは煩惱無きを云ふ。此の無漏法に住すれば、自性旣に淸淨なるが故に自ら防非止惡の功能あるが故に無漏戒と云ふ。

卷の第十

[一]童子よ、是の故に菩薩應當に身戒を具足し修學すべし。云何んが菩薩身戒を具足するや。若し菩薩身戒を具足せば、一切法に於て無礙智を得、謂はく身善く修行す、若し身善く修行する者、一切法に於いて無礙智を得るなり、是を菩薩身戒を具足すと名づく。復た次に童子よ、若し身戒を具足せる菩薩は能く三十二大人の相を獲、如來十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を得るなり、童子よ、是を菩薩身戒を具足せりと名づく。復た次に童子よ、身戒を具足せる菩薩は、能く三解脫門を獲るなり。何等を三となすや。謂く空解脫門、無相解脫門、無願解脫門なり、是を身戒を具足すと名づく。復た次に、若し身戒を具足せる菩薩は能く[二]四梵住を具足することを得。何等をか四となすや。謂はく一切衆生を慈念す、悲喜捨心も亦た復た是の如し、童子よ、是を菩薩身戒を具足すと名づく。復た次に童子よ、云何んが菩薩身善行を修するや。謂はく[三]四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、是を菩薩身戒を具足せりと名づく。復た次に童子よ、身戒を具足せる菩薩は、能く四禪及び四正受を得、能く大悲に住し、善の覺觀を得、寂滅の覺觀を得、是を菩薩身戒を具足せりと名づく。復た次に童子よ、若し菩薩身戒を具足せば、殺生、偸盜、邪婬、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪、瞋、邪見の十不善業を遠離し、鬪秤の欺誑、語言の欺誑、衣服の欺誑、因官形勢割截破壞凌押繫縛邪曲虛妄、貪と共行する一切の惡業悉皆遠離す、自ら禁じ防制し無貪無取にして悉皆斷除すること、猶し多羅樹頭を斷截するが如くにして、未來世に復た更に起らず、生法有ること無し、童子よ、應に知るべし、此の法を是れ菩薩身戒を具足すと名づく、童子よ、乃し往昔、過阿僧祇阿僧祇廣大無量無邊不可思議劫に於いて、爾の時に佛有り號して智光如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と曰ふ、時に世に住すること六十億歲なり、爾の

【一】童子よ。宋、元、明三本幷に宮本は以下第十一卷となす。梵本は以下第三十八身戒品、Kāyasaṃvara.

【二】四梵住とは、先に註せる慈悲喜捨の四無量心のこと。梵とは大涅槃を指す、菩薩利他の行、能く一切の煩惱を斷じて涅槃に住せしむるが故に梵住といふなり。

【三】四念處。以下三十七科の道品を擧ぐ、四正勤を除く他の法相に就ては先に旣に註せり。四正勤とは一には已生の惡は斷除せんが爲めに精進し、二には未生の惡は生ぜざらしむるが爲めに精進し、三には未生の善は生ぜしめんが爲めに精進し、四には已生の善を增長せんが爲めに精進するを云ふ。大乘義章第十卷を看よ。

こと莫れ。常に樂ふて空及び解脫を觀じ、諸趣中に於て願樂すること勿れ、一切相を捨てて悉く餘無く、心恒に無相に安住す。常に能く[四二]二邊を遠離し、有に於て無に於て分別すること莫れ、諸の衆生但だ因緣なりと觀ず、若し能く知るを此を大師と爲す。一切の愛欲行を棄捨し、悉皆穢濁心を斷離し、一切愚癡の闇を剪除せば、寂滅人師子と爲ることを得。恒に樂ふて無常を觀察し、諸有中の苦樂等を離れ、穢汚不淨なり及び無我と、是の如く修する者人尊たり。佛は世間に於て燈明となり、而も能く此の勝れたる正法を說き、彼れ亦た魔力を降伏し、已に無上なる勝菩提に到る。我れ向きに說く所の諸の功德、及び無量の百千の過を示せり、應當に過を離れて功德を修すべし、童子よ是の如くせば必ず佛を得ん。

【四二】二邊。茲にては有と無とを二邊と云ふ。諸法は因緣によつて生ずる所なるが故に假有にして實有にあらず、故に實有と執するは有邊なり。諸法は實有には非ずと雖も而も全く諸法無きに非ず、故に實に無なりと執するは又無邊にして眞實の見にあらず。

ならば、久しからずして大悲者と成らん。[四二]不淨觀を以て貪染を除き、慈力もて能く瞋恚を治め、因緣の法もて愚癡を破り、便ち最上無上道を得。身を觀ずるに猶し水の聚沫の如く、一切皆空にして堅實無く、五陰悉く空無なりと觀察せば、速かに最勝智を成ずることを得ん。一切の諸の惡見を取することを離れ、壽命及び我人に依らず、一切諸法空なりと了知せば、速かに彼の牟尼王と成ることを得ん。諸の利養に於いて貪著せず、利養を得ざるも憂を生ずること勿く、他の讃じ毀るを聞くも心異莫く、猶し須彌山の動ぜざるが如し。求法の爲めの故に恭敬を起し、聞くことを得已つて執著すること勿く、一切佛行處に安住して、速かに能く百世界に遊ぶ。諸世間に於いて悉く平等にして、憎愛差別の心を起すこと莫く、愼で利及び名聞を求むること勿れ、速かに天人師と成ることを得ん。恒常に佛の功德を讃說し、言辭句を以て如實に歎ず、衆生是の讃歎を聞く者、佛の功德に於いて愛樂を生ず。父母師長及び衆生、是の如き一切悉く恭敬す、而も魔力に隨順せずして、便ち三十二種相を獲。常に一切諸の憒鬧を離れ、寂靜なる空閑林に住し、既に能く自利亦利他す、解脫を求めんが爲めに速かに施作す。常に樂つて慈悲心を修習す、乃ち喜捨するも亦た復た然なり、調伏寂滅應に讃歎すべく、速かに世間を利することを成ずることを得、若し寂滅定を得、無上菩提に趣向せんと欲すること有る者は、愼で惡知識に習近すること勿く、恒常に善人に親近せよ。又聲聞地を願欲すること莫れ、亦た彼の所修行を愛すること勿れ、勇猛に佛の功德を志樂し、速に成佛を得ること當に我の如くすべし。、恒に眞實なる清淨語を說き、愼で妄言及び惡口なること勿れ、常に可愛美妙なる言を說かば、能く最勝なる佛菩提を得ん。其の身命を顧戀すること莫く、愼で自譽し他を輕毀すること勿く、但だ自ら己が功德を思念し、他人の所行を觀る

【四二】不淨觀云々。玆に五停心の中不淨觀と慈悲觀と因緣觀の三觀のみを掲ぐ、暫らく不淨觀には二種ありて貪染を除くなり、一には他身を厭ふて他の不淨なることを觀ず、一、死相、二、脹相、三、青瘀相、四、膿爛相、五、壞相、六、血塗相、七、虫噉相、八、骨鏁相、九、離壞相。二には自身の五不淨を觀ず、一、種子不淨、二、住處不淨、三、自相不淨、四、自體不淨、五、終竟不淨なり。と觀ず、瞋恚多き有情は慈悲觀、愚癡多き有情は因緣觀、我見多き者は界差別觀、散亂心多き者は數息觀を修して過失を停止するなり、是を五停心觀といふ。

の昔自在佛を供養し、爲めに勝妙なる塔寺を造れる者、時に彼の出家善花王、佛たることを得て名づけて蓮花上と爲す。我れも亦た無量百千劫、如來最勝法を受持し、我れ已に忍力を積集せり、童子よ汝應に隨順して學ぶべし。吾般涅槃し世を去り已つて、後の正法滅盡の時に於て、比丘[等]外典籍を樂び、彼れ便ち我が勝法を毀謗せん。輕躁調戲して慚恥無く、飮食を貪嗜して罪を護らず、乃ち衣鉢に戀著す、彼の人我が最勝法を謗る。常に(三九)鬪諍を樂ふて反復無く、其の貧窮下劣性より、我が法中に在つて出家し、彼れ空寂滅を樂はず。其の魔意に順ふ癡なる衆生、魔自在に隨つて執著す、貪欲自縱の凡愚者、彼れ空寂滅を樂はず。在家出家四衆等、讒佞愚癡にして惡心を起し、是の如き惡黨に隨順する者、彼の人末世に空法を謗る。童子よ汝我が敎を聞き已つて、應に常に蘭若僧に給し奉るべし、所謂空寂を樂ふ者、是の如き輩の人佛法を持てり。我が佛法中彼の人　出家受戒し及び(四〇)布薩し、諸の過染を離れ信施を消す、是の如き人能く菩提を持すべし。乃至身命を棄捨し、空法を修習して寂滅を樂ひ、其の空法に於いて心相應し、樂ふて蘭若に住すること野鹿の如し。幢幡蓋及び花香を以て、諸佛の所に於いて供養を設け、無等勝なる支提を供養し、速かに能く是の三昧を獲得す。無比なる勝れたる塔廟を建立し、諸の金銀を以て塗飾し、諸形像無量種を造り、菩提の爲めに慈心を起す。所有一切の供養の具、天上人中の淨妙なるもの、汝應に悉く求めて佛を供養すべし、無上佛智を求めんが爲の故に。應當に如法に諸佛を觀ずべし、謂はく十方に住する諸如來、現前無量の法に住する者を、一切の佛子能く證知すべし。心常に利益し布施を悳び、持戒淸淨にして忍力に住し、樂ふて忍辱及び遠離を行じ、能く一切諸法空なることを知る。精進勇猛にして懈退無く、務めて禪定を修し戒多聞にして、智慧了達して常に淸淨

【三九】鬪諍云々。大集月藏經第十に、佛滅後第五の五百年中卽ち末法に於いては鬪諍堅固にして白法隱沒し去ることを說けり。此の月藏經は本經の譯者の譯出なること開題中に記せるが如し。

【四〇】布薩。善宿、淨住等と譯す。出家は半月毎に衆僧を集めて戒經を說き、出家者をして淸く戒に住せしめ、犯せし所の罪を懺悔す。在家は六齋日に八戒を持ちて善法を一日一夜增長するを布薩と云ふなり。

其の我ありと計し執著有る者、彼の法師の說を喜樂せず。空法を信ぜざる比丘衆、尋いで時に卽ち起ちて手に刀を持ち、此の妄を言ひ非法を說く、之を殺せば便ち大福德を獲と。法師力を見て怖畏せず、其は空法を思念せるを以ての故なり、衆生の殺すべき有ること無く、空にして我人無きこと石壁の如し。法師比丘卽ち合掌し、言を發し南無佛を稱ふ、若し其の空法審かにして虛ならずば、刀をして願はくは曼陀花と爲さん。護持戒者の願欲の故に、言を發するや空中に便ち花を雨らし、大地諸山皆震動し、刀卽ち變じて妙香花となる。爾の時〔三七〕見を取し刀を持せる者、彼の衆の比丘咸く恥ぢ悔ゆ、手に刀を執れる者をして動くこと能はず、驚懼恐怕大怖畏せしむ。其の佛に於いて信を得ること有る者、所有空法を愛樂せる衆は、大音聲を發して號泣し、一切の衣服を悉く散じ奉れり、法師比丘慈心を起し、大衆前に於いて是の言を作さく、若し人我に於いて瞋を起す者あらば、我れ彼が爲めの故に菩提を行ぜん。其の法に朋黨する者甚だ微少にして、法師恒に彼が爲めに侵陵せられ、一切不喜の言を聞き、忍辱の力轉た增上す。時に彼の法師八十年、如來の空法藏を演說す、無量百千の惡比丘、彼の王力の故に退散せしむ。是の彼の法師餘時に於いて、無量百千衆を利益し、戒行を思量して缺漏無く、卽便ち福慧の所に往詣せり。王法師を見て甚だ恭敬し、便卽ち彼の比丘に問ふて言はく、我が大師の所に於いて、其の心を惱亂せしめざるや喜悅ならざる[なきや]。彼れ便ち王に答へていはく願はくば聽き賜へ、諸佛の忍力の所起は、若し我が所に於いて惡言を興さば、便ち增上なる勝れたる忍辱を起す。已に無量百千劫、過去世中に於いて忍辱を修せし、稱光比丘とは我が身是なり、釋迦如來是の說を作し玉ふ。彼の昔福慧の王子、稱光法師を擁護せる者、其の千生に於いて我が友たり、我れ已に彼は〔三八〕慈尊たることを記せり。其

〔三七〕見を取しとは、茲にて我見を執せること。我ありと執著せる惡比丘衆を指す。

〔三八〕慈尊とは、彌勒佛のこと。

法を聞き、王及び眷屬悉く受戒せり。勝王斯の三昧を聞き已つて、歡喜踊躍して是の言を作さく、善哉能く此の三昧を說き玉へり、是の故に佛世尊に歸依す。彼の時人衆具に八萬、是の最勝法の體性を聞き、眞實第一義を演說し、悉皆無生忍を獲得す。衆生其の生滅有ること無く、諸法は無生にして恒に空寂なり、王及び眷屬是の如く知り、咸各無生忍を獲たり。爾の時善花王位を棄て、彼を投てて佛法にて出家せり、其の王の所有五百子、悉皆王に從て出家す。王及び諸子出家せし時、餘人乃ち無數量有つて、一切佛法を求めんが爲めの故に、亦た彼の法に於て皆出家せり。自在如來爲めに法を說くこと、具足して二千歲に滿ちたり、王及び其の子幷に眷屬、二千年中法を修し行ぜり。

是の如き年數を過ごし已つて、彼の佛世尊涅槃に入る、時に諸の聲聞悉く滅度し、正法後に於て甚だ衰微せり。彼の王善花に勝子有り、號して福慧と曰ひ正信を具せり、王に法師の師導と爲る有りて、是の如き勝寂定を受持せり。聰明黠慧にして念力あり、無量百千人供養し、諸天百億倶に侍從し、處處に往詣して讃歎す。言語柔軟にして麁獷ならず、調伏戒を樂つて善く防護し、其の音和雅にして語愛すべく、智力總持悉く具足す。勝れたる袈裟百億數を得、比丘號して名を稱光と曰ふ、彼の人の福力敵對するもの無きをもて、無量の比丘妬嫉を起せり。福德及び色力を具足し、亦た智慧と神通とを具せり、淨戒禪定力を護持す、比丘法力の起す所なり。在家出家[三六]四衆等、衆人戀仰し愛樂す、若し佛法に於て信を得し者、愛重し敬心にて供養す。其の昔善花王の勝子、號して福慧と曰ふ淨信者、彼の比丘[等]惡心を起せるを知つて、己が師所に於いて便ち守護す。時に五十萬の軍衆あり、悉く鎧甲を被手に刀を持ちて、常に是の法師を擁護し、菩提寂滅行を演說せしむ。大衆中に於いて是の法を說く、謂はく空無我無壽命と、

【三六】四衆とは、出家の比丘比丘尼と、在家の淸信士淸信女とを云ふ。

の法を說けり、一切法に於いて無盡なり、法は無所得なるが故に無盡なり。若し人他の爲めに法を演說し、而も文字に執著せず、法は本我無く衆生無し、彼れ能く無盡を演說す。智者は一切言もて演說し、語言を以て彼の心を易へず、諸の言音は谷響の如しと知る、是の故に言に於て取著無し。諸の言音を以て是の法を說く、是の言念頃に卽ち壞滅す、斯の諸の言音の是の相の如く、一切諸法の相も亦然なり。諸法は相無く亦た相を離る、恒常に相無く相空寂なり、空寂無欲にして取捨無し、是を以て寂定不可得なり。

有爲無爲悉く遠離す、是の如き大仙は無分別なり、一切惡見の道を遠離し、諸趣悉く無爲なりと了達す。恒常に染無く瞋癡無し、是れ心體恒に寂滅なるを以てのゆへに、此を以て三昧力最上なり、是の故に能く斯の法空を知る。空なる山河及び溪谷に、勝妙なる響音聲を聞くが如く、有爲流轉は因緣によつて起る、一切世の空なることは猶し幻の如し。智力によつて功德法を愛樂し、智慧神通に安住せる仙、語言を發すること能く善巧にして、能く是の如き寂滅定を說く。言ふ所の覺觀は但だ妄想なり、世間其の邊を得べからず、本際本より相有ること無く、而かも未來の爲めに因緣道と爲る。業を造るに所起有りと爲さず、上中下に隨つて所生有り、此の法の自性知覺無し、法空無我なること應當に知るべし。黑白の業壞滅せず、[三四]自の所作は還自ら受く、[三五]業は果所に到ること能はず、而も業能く彼が爲めに因となる。諸佛は世諦法を演說す、有爲無爲是の如く觀ずるに、眞實及び我人有ること無く、一切世間の相も是の如し。一切の諸有皆虛妄なり、猶し幻化水中の月の如く、空無なること亦た水の聚沫の如く、聲を以て恒に寂滅を顯說す。

一切悉く捨して所取無し、持戒威儀も亦た依無く、忍力諸衆生に著せず、是の如き行者寂定を得。其の王の意の樂欲する所に隨ひ、如來機に稱ふて演說す、王世尊所說の

【三四】自の所作云々。善惡の業は自ら作して自ら受く可く、自作他受、他作自受等有る可きに非らざることを說く。
【三五】業は果所云々とは、業其のものは表業は爲された時に生滅變化して消ゆれども善惡の業種は藏識中に熏ぜられて後に果を生ず。

五百に滿ち足りて念慧を具せり、爾の時勝王佛所に於て、彼の六百萬園林を捨せり。妙果果樹にて莊嚴し、佛具足大悲者に奉り、寺を造ること備に六百萬に滿つ、〔三二〕經行床座亦復た然なり。袈裟衣服億百千を、經行止息處に敷置す、是の如き無量百千種、沙門の一切の所須の具を、彼の時勝王信敬心もて、悉皆善逝に施し奉り、一切の福德力を成就して、形色端嚴にして甚だ愛すべし。彼の王常に十善道を以てし、自己及び他悉く安住し、衆人百千那由他、王に隨從して佛所に詣る。手に妙花及び塗香、勝蓋幢幡並に音樂を執り、最勝なる佛世尊を供養し、合掌頂に在つて住立す。千比丘衆默然として住し、人天修羅龍夜叉、一切恭敬して佛を觀奉り、善哉自然に何の法を說き玉ふや。牟尼世尊彼の欲を知り、亦た勝王の最上心を知り、佛能く彼の信樂を了達し、而も爲めに此の三昧を宣說し玉ふ。善逝是の語を說く時、大地諸山皆震動し、〔三三〕念頃に虛空衆花を雨らし、百千の蓮花地より出ず。已に善く妙句義を了知し、佛彼の欲を知つて爲めに記說し、王の爲めに是の寂滅定を說かん、汝聽け往昔分別せし所を。一切有無の妄想起るも、空にして野馬の如く亦た沫の如く、雲電動の如く皆空無なり、一切我無く衆生無し。過去未來法も亦た空、去無く住無く處所を離れ、常に堅實無く幻性の如く、一切勝淨にして虛空の如し。靑に非ず黃に非ず赤白に非ず、名字は空無にして但だ聲性のみ、其の心心を離れ無心の性なり、諸の音聲を離れて空無なり。演說句味而も住せず、不說の時字不空なりと雖も、文字も亦た諸方に往かず、亦た復た餘處より來らず。其の字無盡斯れ盡藏、若しは說不說恒に無盡、常に句味を說くも而も盡きず、是の如く知る者無盡を得。若し此の法無盡を知る者、彼常に能く無盡の法を說く、千種の修多羅を說くと雖も、恒に諸法は文字を離れたることを知る。諸佛百千已に過去に、亦曾て百千

【三二】經行とは、坐禪の中間に立ちて一定時步行するをいふ。今は經行處を佛に奉るを示すなり。

【三三】念頃とは、一念頃のこと。一念とは時刻の最短の單位なり。一刹那のことなりと言ひ、又九十刹那を一念頃となすとも言ふ。

の欲を了知し、衆生の心所行を觀察し、心の所行の如く決定して知る。其の彼の智慧の言を聞くこと有る、那由の衆[生]をして淨眼を得しめ、禪定解脫の岸に度り、能く眞實道に安住せしむ。億那由他の諸の魔衆、能く其の心行を測知するもの莫し、猶し虛空中の鳥跡の如く、衆人悉く能く測知せず。調伏寂滅智慧力、最上聖法中に安住し、自在に諸の魔力を摧壞し、最上勝菩提を悟解す。常に彼の神通の岸に達することを得、能く速かに百千界に往詣し、彼の那由多億佛に見ゆ、其の數亦た恒河沙の如し。淨眼にして諸の障礙有ること無く、悉く十方の衆の導師を覩、諸根[27]を守護して染する所無く、自在に無量刹に往く。設令十方の諸の衆生、一時に悉く導師と爲り、彼の那由他劫數に於て、恒常に讃說するも斷絕せじ。無礙辯才而も盡きず、所歎の德も亦た窮はまりなし、此の無等離垢定に於いて、心を持在者能く是の如し。

[28]爾の時世尊、復た此の三昧の功德利益を顯示せんと欲し、其の菩薩の本昔の所行を說き、亦た月光童子の力を顯現し增長せんが爲めに己が本緣を說き偈頌を以て曰く、

童子よ汝今當に善く聽くべし、我れ百千劫の所行に於て、百千の諸如來を供養するは、是の如き勝れたる寂定を求めんが爲なり。過去不可思議劫、所有百刹塵沙數に、汝當に是の所說の事を知るべし、佛有り號して衆自在と曰ふ。彼の佛如來に眷屬あり、六十億千數に滿足す、一切の漏盡き煩惱無く、八解脫[29]に於て善決定せり。是の時一切の諸大地、安隱豐樂にして濁亂無く、一切の衆人悉く安樂にして、遊行往來し適悅滿てり[30]。大富饒にして財悉く充滿し、備さに一切の諸天の樂を受け、戒を持ちて煩惱を調伏し、色貌端正にして忍力を樂しむ。猶し天宮の諸天子の如く、智者戒行の功德具さなり、彼の時世に一王有り、名聞廣大にして善華[31]と號す。是の時彼の王に諸子あり、

【二七】諸根とは、眼耳鼻舌身の五根を云ふ、五境に對して五欲を起すが故に、是に着せざる樣守護す云々と云ふなり。

【二八】爾の時。宋、元、明三本并に宮本は以下を本因品第五となせり。以下梵本第三十七美稱品、Yaśas.

【二九】八解脫。八背捨とも言ふ、五欲に背き著心を捨離するが故に背捨と名づく、又煩惱の羈縛を免絕するが故に解脫と云ふなり。一には內有色相觀外色、二には內無色相觀外色、三には淨色解脫、四には空處解脫、五には識處解脫、六には無處有處解脫、七には非想解脫、八には滅盡解脫を云ふ。詳しくは大乘義章第十三卷を看よ。

【三〇】適悅滿てり。の次に宋、元、明三本并に宮本、聖本には次の二句あり。一切福德力を成就し、形色端嚴にして甚だ愛す可し。

【三一】華。底本化に作る、今は三本、宮本、聖本による。

畏なる諸の世間を濟渡す。[二四]道品を觀空の鎧甲と爲し、勇健なる大船師たることを得、[二五]彼岸は怖を離れ常に安樂なり、衆生を彼の勝處に安置す。彼彼咒を持し威儀行にして、一切苦逼迫を解脫し、明術智彼岸に到る、智者は能く衆生の欲を知る。煩惱の病歸する所無く、諸惡の過患世間を惱ますを覩、其の法藥を以て轉瀉せしめ、如法に彼が爲めに而も療治す。彼彼の勝說異論を摧き、言辭上妙にして自在なり、諸の言音を知つて法義に達し、勇健にして勝智地に住す。忍辱の力智の戰具、慈愍の堅鎧甲を被、聖者は慧を以て智人を悅ばしめ、法中に安住して諂曲無し。彼彼の三有の最勝尊は、諸の衆生に於て自在を得、諸の群生魔道に依りて遊行し、正眞路に迷へるを見る。彼の道は最上にして聖無垢なり、能く無所畏を顯示す、無量百千那由衆、此の道に往詣して憂ふる處無し。彼彼世の爲めに燈明と作り、救となり歸となり洲宅となり、怖畏の衆生に無畏を施し、一切の諸の群生を安慰す。斯の百苦の所惱を見るに、猶し生盲の覩る所無きが如し、最勝の大法炬を然し、眞實義を演說し顯示す。彼工巧を學び衆生を利し、能く名聞功德樂を獲、如法の技藝に住し、諸の衆生をして安樂を得しむ。一切皆彼岸に到ることを得、能く最勝の大導師と爲り、世間を愍むが爲めに菩提に趣き、其をして無畏處に安住せしむ。牟尼は恒常に厭足無く、所謂智慧及び福德、已に戒忍禪定の岸に到り、甚深微妙法に安住す。其の他所に於て厭ふこと有ること無く、最勝なる寂滅法を演說すること、猶し天の遍く大地に雨らすが如し、法雨の充滿することも亦た復た然なり。若し衆生有つて其の所に往き、深法及名義を解せんことを求めなば、其の彼の所聞の法寶に於て、能く無量無邊の苦を除く。彼の廣大の諸の疑惑、速かに法刀を以て斷截し、戒忍三昧の岸に到り、能く衆生の[二六]諸の信樂を知る。大士彼の究竟智に至り、已に善く群生

【二四】 道品とは、前項八正道を始めとして、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺等の三十七道品を云ふ。
【二五】 彼岸とは、迷の此岸に對して悟の彼の岸を云ふ。
【二六】 諸。底本多に作る、今は三本、宮本、聖本による。

出離を樂ふ、是を大地法山王と爲す、世間に導師無きを觀て、彼の趣の爲めに佛菩提に詣る。彼彼に調伏して心寂滅なるをえ、是の人一切智に趣向し、不調の衆生を調伏せしむ、是は一切智最勝の子なり。自ら解脫を證して他をして到らしめ、愛の枝條を脫することを得て、常に放逸に睡る衆生を、便能く彼をして覺悟を得しむ。彼彼恒に善調伏を樂ひ、亦常に法施を喜び樂ひ、一切の妬嫉と俱ならず、好で惠施を行ひて愛悋無し。彼の貧に逼切せらるる衆生を見て、常に資生の具を充足せしむ、是れ功德を滿ずる第一道、智者一切恒に修習す。彼彼の勝妙なる大法鼓、歡喜心を以て之を擊ち、疑網を斷除して妙法を解し、智慧堅固にして金剛の如し。勝れたる聖法に住し衆中に處し、能く衆生の心樂欲を知り、最上なる甘露法、所謂勝要の修多羅を演說す。彼彼自ら勝神通に住し、能く世間の最勝眼を施し、癡闇を遣除すること猶日の如く、能く智慧を生ずることと亦た礦の如し。眞實を顯示し怖畏を除き、智慧を增上し禪定を修し、彼最妙微細の法を說く、是を寂滅勝出離と名づく。彼彼に聞持して智人に敬さる、信義增上の福を建立し、能く世間勝法藏を知り、恒常に美妙の言を宣說す。善く言語に巧にして儀式に達す、是は法燈明の所依なり、常に善心を以て衆生を利し、最上微妙の法を修行す。彼法道に住し塵染を離れ、及び寂靜信を潤益し、法を以て諸の世間を敎化し、最勝なる大法王たることを得。能く無上の法尊となり、第一上恭敬に住し、恒常に妙正覺を護持し、隨順して勝法輪を轉ず。彼彼愚癡自ら縱にする者、是の如き惡衆生を覩見するに、心惑亂して嶮道に趣き、惡趣門に臨み越度し難きを見る。大慈悲淸淨心を興し、起し已つて能く世間の苦を除き、最勝微妙の道、謂く彼の〔三〕八正の勝路を演說す。是は爲れ彼の法廣うして堅固なり、無上の勝れたる法船を造作し、能く生死の煩惱海に於て、怖

【三】八正の勝路とは、八正道のことなり。一、正見、二、正思惟、三、正語、四、正業、五、正命、六、正精進、七、正念、八、正定を云ふ。道とは菩提の義にして此の八種は菩提のために因となるが故に通じて道と名づくるなり。右の八の中正語正業正命は戒學にして、正念正定は是れ定學、正見正思は慧學なり。瞋と癡を離れて起す所の口業を正語と爲し、瞋と癡を離れて起す所の身業を正業となし、貪欲を離れて起す所の身口二業を正命となし、貪瞋癡の三毒を離れて起す口業を正語となし、三毒を離れて起す身業を正業となし、常乞食の生活を正命と名づく。詳細は大乘義章第十六卷を見よ。

能く[二〇]四種辯才の岸に到る。　諸の三千大千界に於いて、　其の下際より有頂に至るまで、　下大地より有頂に至るまで、　閻浮提金皆充滿す、　悉く此の寶を以て牟尼に奉る。　一切世間の所有寶、　無量劫を經て用て布施し、　如來に施し奉りて恒に絕へざるは、　深く信じて菩提を求むるが爲めの故なり。　若し比丘有つて空を愛樂し、　一念合掌して佛を禮するを、　前の廣施の福德聚に比すれば、　施福は[二一]迦羅分にも及ばず。　若し人彼の廣多の物を得、　信心福の爲めの故に施を行じ、　無等なる佛菩提を求めんが爲めにす、　我れ世間を知つて已に校量するに、　若し人此の三昧所に於て、　聞き已つて四句偈を受持せば、　是の人の集むる所の功德に[比せば]、　前の福は百分の一にも及ばず。　最勝なる菩薩布施を行じ、　未だ無上道を速かに得ること能はざるも、　若し是の勝寶定を聞くこと有らば、　彼れ速かに上菩提を得ん。　假使珍寶藏を得、　遍く無量恒沙刹に滿つる、　種種の寶物悉く充滿するも、　菩薩は以て富み足れりと爲さず。　若し渴愛を斷じ功德を修し、　又能く是の三昧を得ば、　便ち具さに一切諸の資生、　庫藏盈滿して大財備はらん。　設令四天下を獲るも、　智者は此を喜と爲さず、　若し斯の如き離垢定を得ば、　歡喜踊躍して衆生を利す。

[二二]爾の時彌勒菩薩摩訶薩甲冑を被て、　便ち此の三昧の利益を讚歎し、　亦當來の菩薩をして受持し讀誦し、　歡喜を得しめんが爲めの故に其の勢力を助けて、　偈を說いて言はく、

彼彼能く智人の法を持つ、　功德威勢救護者、　亦た諸佛[の法]を能く受持す、　廣大勝妙の法眼なり。　末世惡時には多貪[多]瞋にして、　不放逸を捨てて常に放逸なり、　實義滿足の勝れたる經典、　誰か能く受持することを得る者有らんや。　彼彼の戒定忍聞財、　善く學んで威儀而も莊嚴し、　法智解脫樹を愛樂し、　能く慚愧の勝上の服を被る。　大智慧を持つて

【二〇】　四種辯才とは、四無礙辯のこと。一、法無礙辯、二、義無礙辯、三、辭無礙辯、四、樂說無礙辯なり。

【二一】　迦羅分(Kalā)。分量の名にして譯して力勝と言へり。一毛を析いて百分となせし一分を迦羅分と云ふなり。力勝とは無漏の善法の一迦羅分は有漏の千分に勝るが故なり。

【二二】　爾の時。以下宋、元、明三本及び宮本は讚歎品第四となせり。

の言音は知る可らず。　過去無量億劫中の、　所有一切の諸衆生、　其身の塵數算す可きも、彼の所説の經は知ること能はず。　十方一切の諸衆生の、　彼の音聲は算知すべきも、　其の演説する所は斷絶せず、　彼の修多羅を知ること能はず。　言詞句義已に善く學び、　復た能く一切法を演説し、　廣大捷利の智慧もて、　實法を了知し幷に問答す。　智慧もて深廣の義に通達し、　應に常に心不思議を知り、　悉く音聲の自體性を知る、　是の故に言説罣礙無し。　名づけて無礙の大法師と爲す、　世の爲めに法を説いて所著無く、　問答解釋已に善く習へり、　第一義諦に了達せるが故なり。　一句中に於て億の論釋をなし、　不思議に説きて滯著無し、　無礙の句義を學びて、　衆に處して演説して擁滯無し。　若し常に此の三昧に住すること有らば、　無畏不動轉を成就し、　已に法力を得て勝行を行じ、　能く無量億の衆生を利す。　猶し須彌の安じて動ぜず、　諸有猛風も能く壞すること莫きが如く、　法師比丘も亦是の如く、　一切の諸論能く異ること無し。　三千大千世界の刹、　其の中の所有諸山等、　一切風吹き或は動搖するも、　比丘は空に住して能く動ずること莫し。　若し能く空と恒に相應せば、　是の佛の決定所住の處なり、　若し人定で諸法空なりと知らば、　一切の異論能く勝る無し。　諸餘の邪説に傾動せず、　一切の外論能く壞する無く、　侵凌[一九]し毀蔑する者有ること無きは、　是の如き寂定を説くに由るが故なり。　彼の人空法を窮盡し、　恒常に無量智に安住す、　一切法に於いて疑有ること無きは、　是の最勝なる三昧を持するが故なり。　諸力道品得ること難からず、　神足無礙辯才等、　及び勝通を獲ることも亦復た然なるは、　是の經を受持し讀誦するが故なり。　此に死して彼に生ずるを難とせず、　能く最勝なる無量智、　不思議億那由佛に見ゆ、　是の經を持する者は悉く見ゆることを得るなり。　斯の一切諸佛所に於て、　是の如き離垢定を聞くことを得て、　最勝なる相應智を成就し、

【一九】 凌。底本陵に作る、今は三本による。

す、[一六]惟だ世師調御士、大悲自然智を具足せるを除く。能く無量の諸功德を獲、福德轉た增上なるを成就し、其の三千大千界に於て、能く是れと比する者有ること無し。餘人の福德與に等しきもの無く、[一七]智の讃ずる所の智も亦た復た然なり、若し人是の三昧を聞く者、有るは能く受持して讀誦せん。諸佛の勝菩提を求めんが爲めにせば、是の如き輩人乃與に等しく、多聞を出生すること猶し海の如く、彼の人の福德量る可らず。此の三昧を受持し讀誦すれば、是の如きの人は福の所攝なり、童子よ若福是れ色ならば、一切世界能く容るること莫し。是の故に童子若し菩薩、若し一切佛、過現未來の淸淨者を供養せんと欲せば、應當に是の三昧を受持すべし。此は是れ諸佛の勝菩提なり、童子よ汝當に我が言を信ずべし、如來の所說異有ること無く、我等諸佛の言は虛ならず。昔難思百劫中に於て、我是が爲めの故に身を消渴し、常に最妙なる菩提行を修せしは、是の如き勝定を求めんが爲めの故なり。是の故に汝應に法藏を受くべし、那由他の經斯より出ず、此の福聚廣うして不思議なり、能く諸佛智を獲得せるを以てのゆへに。一切衆經此を首と爲す、無量の諸善業を出生す、恒常に畏無うして是の經を說く、彼の法の邊際は不可得なり。[一八]三千を碎壞して以て末と爲して、或は能く諸の塵數を知る可くとも、常に說ける難思の百千經は、能く測量することを得る者有ること無し。此の佛刹中の諸の衆生の、出入の氣息は猶知る可くとも、菩薩の常に演說せし經は、能く其の畔際を知るもの有ること無し。若し佛刹土恒沙の如く、其の中の六趣の諸の群生、能く其の心數を測量すること有るも、彼の所說の經を知ること有ること無し。無量の諸億世界刹の、彼の界の大海河池の沙、此の諸の沙數算へ知る可くとも、能く彼の所說の法を知るものなし。一毛端を析いて百分と爲し、渧を以て多億刹の、所有一切の諸の水聚を數ふ可くとも、彼の諸

【一六】惟た世師云々。佛智は不增不減なるが故に斯く言ふなり。

【一七】智。一切智者なる佛を云ふ、下の智は無漏の智慧を指す。

【一八】三千とは、三千大千世界のこと。

れ昔無量劫、離垢無惱佛に見ゆることを得、勝上なる菩提行を修し、往昔尙ほ是の如き苦を受く。若し菩薩總持に住し、善く慈行を修し安じて動ぜざる有らば、彼れ終に諸惡處に墮せず、離垢無惱佛を供養す。若し佛を得法王と爲り、三十二相にて莊嚴せんと欲せば、應當に戒を護りて穢動無く、說法不斷にして總持に住すべし。

〔一五〕是の故に童子よ、若しは菩薩是の念を作す、我れ今云何が安樂にして阿耨多羅三藐三菩提を得るや、彼の諸菩薩應當に淨戒の聚に安住し、一切の菩薩所に於いて師の想を起すべし。爾の時世尊偈を說いて言はく、

若し菩薩戒聚に住し、利益心を以て菩提を行ずること有らば、彼の人速かに樂ふ可き刹に往き、能く上忍を獲て法王と爲らん。是れ心和安不動にして、恒常に可愛業を造作し、然る後多くの佛日に見ることを得て、速かに菩提を得て疑網を離れん。我れ是の如き最勝の敎を聞き、諸比丘淨戒を持つを見て、諂曲心無うして奉事し、然る後久しからずして是の定を得。若し恒沙の諸伏藏を以てするに、悉く七寶を以て其の中に滿て、彼の藏是の如く極めて廣大なること、猶し無量恒沙刹の如し。若し菩薩有つて惠施を樂ひ、其の日夜に於て常に無間に、勇猛に布施して暫くも停らず、無量恒沙劫を經。若し此の三昧を聞くこと有る者、便ち一切牟尼藏を持つを、此を無量福德聚となす、前の施に過ぎて思議すること難し。此の如く福德廣く無邊にして、能く世間の苦を滅せしむ、是を最上の功德聚と爲す、施の福に比して廣きこと量り難し。菩提第一藏に隨順し、智慧菩薩能く受持す、若し是の三昧を持つこと有る者を、大財を具せる勝れたる菩薩と名づく。是は爲れ佛法多聞海において、彼の人の福德盡邊し難し、此の勝妙難思の法に於て、便ち菩薩眞に護持すと名づく。若し能く寂滅定を說くこと有らば、彼の人の菩提便ち增長

【一五】是の故。宋元明三本宮本は此の上に校量功德品第三の品目を擧げたり。是より以下梵本第三十六顯示戒聚品、(Śīlaskandhanirdeśa.)

幢蓋を懸け、妃后宮人幷に子孫、此より城を出で丶彼に往く。王一日に三たび供養し、然る後乃塔所より還り、勝妙なる花鬘以て供養し、寶幢幡蓋にて莊嚴せり。正に癡を以ての故に衆罪を造り、彼の塔所に於て悉く懺悔し、乃し九十五億歳を經て、恒常に懺悔して疲倦せず。智慧の所攝にして勝清淨、禁戒を堅持して缺漏無く、日夜に長く八戒齊を受け、清淨に護持して毀犯せず。王愛欲の爲めに纒蔽せられ、自身不善業を造作し、身壞命終して地獄に墮し、極苦阿鼻中に在り。昔より以來、[一二]九十五億の諸如來に、其の九十五億劫に於て値遇せず、爾所世中常に生盲となりき。六十二億那由劫、眼根を得と雖も還た復壞し、又一億那由[一三]劫に於て、設令眼を得るも還た復た失ふ。亦た復た恒に手足、及び耳鼻脣舌等を截らる、人中億那由劫を經、諸の餘の生處にても亦是の如し。其の王造作せし無量の惡によつて、諸の世間に於て恒に苦を受く、若し安樂を得んと欲すること有る者は、念じ已つて少惡業をも作すこと莫れ、其の王復た先罪を懺すと雖も、昔の所作を免るることを得ず、斯く是の如き惡業を造り已つて、死して後ち當に阿鼻獄に墮すべし。身首及び四支を斬截し、亦た復た耳を割き鼻を劓り、其の兩目を挑ること算すべからず、無量億劫欲の爲めの故なり。廣く惡業を造りし酬ひ盡き已つて、後自ら身を剜りて他人に施す、所謂頭幷に手足を斬り、王[位]及び子を捨て丶菩提の爲めにす。愛する所の妻多くの財產、宮人婇女象馬等、車乘船舫衆くの妙寶、無量億生道の爲めに施す。勇健得王は我身是なり、彼の昔の千子は[一四]賢劫佛なり、蓮花上佛は花月是、魁膾は即是れ寂王佛なり。宮人妃后及び城民、親戚知友幷に僕使、勝妙なる刹利と城主、爾許衆人は我が眷屬なり。若し彼の禁戒を持つものに於て、信敬心を以て供養する者有らば、一切悉く皆般涅槃す、好心を以ての故に菩提を證せん。童子よ我

【一二】九十五億の諸如來。佛には難値難遇なることを示す。

【一三】劫。底本生に作る、今は三本による。

【一四】賢劫佛。過去の住劫を莊嚴劫と云ひ、未來世の住劫を善劫と云ひ、現在の住劫を賢劫と云ふ。而して現在の二十增減劫中に千佛ありて出世し、過去未來に於ても亦各々千佛出世す。賢劫佛とは現在住劫の千佛を云ふ。

惡阿鼻獄に趣き、彼れに於て能く救ふこと有る者無し、不愛果の業既に自ら造れり、正に勝法師を殺害せしに由る。咄哉惡心にて苦業を造れり、咄哉王位自ら傲慢なりき、此處究竟して堅實無し、當に一切を捨して獨り去るべし。初より欲染無うして淨業を修し、悲心にて愛語せる眞の佛子、獨り世親と爲つて諸の過を離れたる、我が善花月は何處に去りし。嗚呼聖者[六]忍財を具せり、嗚呼妙色德相應せり、諂戲論無き功德聚、汝今我を捨てゝ何處に去りし。我今始めて大仙の言を知れり、世間は欲の爲めに壞せらる、身心熱惱するは惡道の因なり、是の如く知り已つて欲行を捨す。此に死して惡地獄中に趣き、能く救濟者を得ること有ること無し、極重の惡業を造れり、正に彼の比丘を害せしに由るが故なり。怖れと疲勞の王位處を捨て、禁戒を奉持して梵行を修し、我れ今彼の自在の爲めに、歡喜し淨心もて大塔を造らん。惱みなき智慧人、智慧の藏慚愧者を供せんが爲めにす、我をして三惡趣に墮せしむること勿れ、亦た惡名及び譏毀を離れしめよ。

妃后宮人諸の親[七]戚、最勝なる輔相及び僮僕、刹利長者幷に諸官、王時に哀泣して彼に向つて言はく、汝等我が爲めに速かに、具さに種種の勝妙なる諸香木、名衣上服及び[八]蘇油を辦じて、俟用て此の比丘の身を燒け。汝今斯に於て速かに、一切の勝妙なる衆くの香薪、隨時の栴檀沈香汁、[九]蘇卑力迦及び[一〇]龍腦を積集せよ。百千の衣服蘇油塗、悉く皆彼の尊者の身に纒へ、我れ增上信重心を以て、種種の供具にて供養す。彼の大王の教勅を聞き已つて、第一輔相城中の民、諸の香油塗香木、種種勝妙なる衆香末を以てす。諸末香水にて之を洗ひ、復た衆香を用つて其の身に塗り、蘇油を以てし衣を彼の體に纒ひ、此の身を香積上に置けり。古昔牟尼尊の妙軀、舍利三斛有六㪷ありき、彼の王勝妙なる塔を造作し、種種供養して恒に禮拜す。[一一]塗末香鬘百種に讚じ、諸の妙鈴及び

【六】忍財とは、忍辱のこと、六度中の隨一なり。

【七】戚。底本感に作る、今は三本、宮本、聖本による。

【八】蘇油とは、蘇摩那の花汁を以て作れる香油。

【九】蘇卑力迦。蘇とは前に註せる蘇摩那の木を指せるなるべし。卑力迦は譯して丁香といふ。熱帶地に產する高さ一丈位の肉桂の如き樹にして果實を香料藥品に用ふ。

【一〇】龍腦とは、樟腦のことなりと云ふ。

【一一】塗末香云々。塗香、末香、花鬘を以て佛に供養し種々に讚歎するをいふ。

を聞き、即ち奴に勅して言く旃陀を喚べと、速かに[三]魁膾を呼んで比丘を殺さん、我が宮人の前に在つて立てる者を。尋いで時に殺者を將ひて來れり、號して難提と曰ふ極めて暴惡なり、手に利刀の而も鑒治せるを執り、此の比丘を截つて[四]八分と爲せり。比丘身を斬られて血無く、割處より千種光を流出し、亦た功德吉祥輪ありて、是の文肉裏より炳然として現ず。斯の[五]尤も重き惡業を作し已つて、我れ時に戯の爲めに園林に詣りしも、一切の歌舞都て樂しまず、花月法師を思念せるが故なり。時に忽速に彼の園を出で、還り來つて珍寶城に歸入し、是に於て車に乘つて其の所に詣り、彼の比丘を割截せし處に到る。即ち時に空中に惡聲、無量那由天の號叫を聞けり、咸言へり惡王重業を造れり、死して阿鼻に墮して極苦を受くと。王時に彼の諸天の音を聞き、心に憂惱を懷き大いに怖畏す、我れ無量の重罪過を爲くれり、善花比丘を殺せしを以ての故に。如來は無量智を具足せり、是は彼の最勝なる眞の佛子なり、諸根調柔にして心寂滅なりき、我れ愛欲の爲めの故に彼を殺せり。若し能く如來の法を持する有らば、正法藏滅壞の時に於いて、能く世間に於て智燈を然す、我欲の爲めの故に是の人を殺せり。諸の世間のために大醫となり、衆生の煩惱の病を療治し、復た甘露を以て轉下せしめしを、愛欲の爲めの故に彼を殺せり。導師は勝れたる法藏を受持し、黑闇の衆生の燈明と爲る、陀羅尼を持せる法王者を、我れ欲の爲めの故に彼を殺せり。世の爲めに勝妙の法を演說し、甚深微細にして見る可きこと難し、道場に趣く路を顯說せるを、我れ愛の爲めの故に彼の人を殺せり。其の智清淨にして穢雜無く、凝靜寂滅にして恒に定に在り、愛の爲めに盲せられて遂に便ち[彼を]殺せり、欲は是れ苦の因なり應に棄捨すべし。過去未來の所有佛、及び今現在人中の尊、功德無量にして大海の如く、一切合掌して彼を歸命す。此に死して

【三】魁膾とは、殺人を司る役人を云ふ。

【四】八分。八分十六分等とは印度に於ける數の單位、日本に於ける十、二十と云ふが如し。

【五】尤も重き惡業。父を殺し、母を殺し、佛身血を出し、和合僧を破り、阿羅漢を殺すものは五無間業と稱し、無間地獄に墮する尤も重き惡業とせり。今は其の第五に當る。

卷の第九

[一]爾の時世尊即ち偈を說いて言はく、

我れ往昔修行せし時、王と爲りて號して勇健得と曰へり、爾の時城有り珍寶と名づく、彼の王城を出でて園林に詣る。寶車に乘駕して比丘に遇ふ、端正殊特にして甚だ微妙、三十二相以て莊嚴し、光明普く十方を照らす。善花月の名諸城に遍く、慈悲に安住して能く利益し、衆生を救はんが爲の故に城に入る、功德威勢極めて端嚴なり。我れ時に顏貌彼に如かず、遂に增上の妬嫉心を起し、愛欲耽荒にして纏結せられ、彼の比丘王位を奪はんことを恐る。昔千子を具して眷屬と爲す、寶車に乘駕して我が後に從ふ、種種の寶冠もて自ら莊嚴し、行[恰も]忉利の諸天子の如し。彼の子中に於て五百の子は、悉く妙寶摩尼の履を著け、寶冠瓔珞もて自ら嚴飾し、金網もて車上を彌覆せり。婇女眷屬八萬有りて、一切端妙にして悉く嚴麗なり、寶輿に昇りて比丘を見るに、端正なること猶し須彌山の如し。彼[等]見て悉く皆父の如く想ひ、各無上菩提心を發し、彼に從つて淨梵行を受け、勝瓔珞を脫ぎて比丘に散ぜり。我れ尋いで[二]上の嫉妬の意を起し、便ち瞋怒を生じ心を穢濁し、豪富[を恃み]惑亂して子に勅して言はく、我が前に立てる比丘を殺すべしと。諸子父の敎勅を聞き已つて、深く憂惱を懷き父に白して曰く、願はくば王是の如き語を作すこと勿れ、我れ終に此の人を殺すこと能はず。若し我が身分を割截さるること有ること、恒沙多億劫を經とも、終に是の法師を殺すこと能はず、彼に從つて道心を發せしを以ての故なり。彼の尊所に於て是の心を發せり、願はくば我佛たるを得人中の勝たらん、菩提に趣く者惡を爲さず、我等悉く是れ佛日の子なりと。王諸子の是の如き語

【一】爾の時。以下宋本、元本、明本、宮本、聖本は第十卷にして懺悔品第二とあり。

【二】上の嫉妬。煩惱を上中下三品に分ち、更に是を細分して上上品、上中品、上下品、中上品、中中品、中下品、下上品、下中品、下下品となす、上上品を最も强き煩惱となす、今は大別して上品を指す。

妙の歌音衆の伎樂を供養す。諸有中に於て願想を離る、三界悉く空なりと了知するが故に、是を以て十力相莊嚴し、光明遍く十方を照らす。色欲二界に而も著せず、及び無色にも亦た復然なり、若し菩薩總持に住せば、三界を脫し捨すること蛇皮の如し。我想衆生想有ること無く、亦た男想及び女想無し、彼梵行を修して穢雜無し、菩薩總持に安住するが故なり。有事無事想悉く無く、安不安想も亦た復た然なり、非數想に非らず數想に非ず、菩薩總持に住するを以ての故なり。有想有るに非ず悉く皆無なり、命想衆生想有るに非ず、村想及び城想有るに非ず、菩薩總持に安住するが故なり。非貪想に非ず貪想に非ず、非瞋想に非ず瞋想に[三三]非ず、非癡想に非ず癡想に非ず、菩薩總持に住するを以ての故なり。其の諸根及び力、禪定道品に於て皆著せず、悉く三有を棄捨す、菩薩總持に安住するが故なり。貪瞋の爲めに染せられず、亦癡亂諂曲心無く、佛十力に見へて供養を設け、智者は天處に生ずることを悕はず。他より深妙の法を聞き、一切諸の疑惑を起さず、譬へば器に淸淨なる油を盛るが如し。[三四]盡と無盡相の理も亦た然なり。正に貪戀を以ての故に愛を生ず、此を則ち名づけて大煩惱と爲す、亦た瞋嫌を以ての故に憎を起す、斯を則ち名づけて惡恐怖と爲す。智者は此の二邊を遠離す、是を能く勝菩提に趣くと謂ふ、十力人牛王となることを得、一切諸世間を出過す。悉く一切內外の事を捨し、[三五]實際法性中に安住し、禁戒を護持し善く淸淨にして、穿無く缺無く穢濁無し。彼淨戒に於て間雜無く、亦た復た其[三六]羯磨法無し、智人二邊を棄捨し、能く無上大菩提を悟る。

【三三】非。底本無に作る、今は元本、明本による。

【三四】盡。三本、聖本、宮本は晝に作る、今は底本による。

【三五】實際法性とは、眞如海、正覺等と言ふに同じ悟りの境界を云ふ。

【三六】羯磨法(Karma)。作業、辨事と譯す。受戒懺悔等の業事を爲す宣告式を言へども、今は懺悔すべき犯罪の事なきを言ふ。

亦た其の壽命を顧戀せず、彼の普賢林中より出でて、今王城に在つて殺せらる。彼の林の大衆王城に入り、高聲に悲叫し悉く號泣し、此の比丘の身數段となれるを見て、一切悶絶して地に擗る、是の諸比丘王に啓して言く、大王よ法師に何の過有りし、彼れ總持に於て究竟を得、戒を持つこと無缺にして大名稱あり、能く宿世無邊の事を知れり。過去宿世の事を善く世間は悉く〔三一〕空寂なることを解し、諸の衆生の爲めに無相を顯〔示〕し、一切諸願の想を棄捨す。演說の微妙の音愛す可く、諸根寂靜にして善く調柔なり、彼の世間に於いて最も希有なり、淨眼明に見暗障無し、是を慈心の照曯する所と謂ふ。當に佛自然智なることを得て、一切諸世間を超出せり。貪愛婬欲は甚だ鄙穢にして、能く苦惱を生じ天趣を喪ふ、習欲の人は多聞を離る、名づけて智慧を損滅する者となす。愛欲に〔三二〕耽著せば盲人となり、便ち能く父母を傷害し、亦た復た能く持戒者を害す、是の故に應當に欲を棄捨すべし。大王若し愛欲を習はば、便ち威德勝自在を失ひ、尤も惡なる地獄中に趣向し、大怖極苦處に生ず。聰慧の勝れたる法師を殺害せば、是の如き重惡業を造作す、若し菩提に志求せんと欲する者は、應當に是の如き惡を遠離すべし。勝妙なる色聲香味觸、其の心勇猛にして能く棄捨し、身意皆空にして猶し幻の如し、眼耳鼻舌も亦た復た然なり。施戒を修習すること倫匹なく、忍辱精進も亦是の如し、已に禪定智彼岸に到り、衆生を利益するに堪能なり。一切世間の諸の天人、能く慈心を以て如來を觀る、彼の眼能く大闇冥を除き、最勝上なる菩提を悟解す。歡喜信心もて樓閣、象馬車乘及び床敷、一切輦輿牛羊等、國界城邑諸村落を捨す。王位幷に金銀、眞珠頗梨及び珊瑚を棄捨し、頭目妻子悉く能く施す、無上菩提を求めんが爲めの故なり。歡喜して比有ること無き、妙花塗香及び末香、種種の諸の幡勝れたる幢蓋、美

〔三一〕空寂。以下三解脫門を成就せしことを明す。

〔三二〕耽。底本媅に作る、今は三本、宮本による。

惱せしむるを見て、我彼の人に惡教勅を爲し、此の比丘を截ること花鬘の如くせしむ。普賢林處は甚だ端妙なり、衆仙臻り華香芬馥たり、彼の諸大衆法師を失へること、猶一子の其の母を失へるが如し。比丘起つて賢林に詣るべし、廣く諸人衆を利益せるを以て、汝今既に此の王城に入るに、彼の衆將に大悲泣至らんとす。妙花幢幡列ねて右に在り、左廂端嚴なること亦た復た然なり、諸の妙衣を以て道路に布き、比丘速かに起つて妙法を說く。汝王城に入つて已に久を經、彼の衆必ず當に大いに悲哀すべし、彼の佛法未だ盡きざる時、汝が命根をして斷ぜしめず。假使人大威神有りて、廣く名遍く諸方に流布し、勢力大地を廻らすことを具足し、悉く皆三千界を映蔽する有るも。苦箭を解脫し憂患を離れ、聖を得たる歡喜相應法を、彼若し見聞せば尙惱を生ぜん、況や諸の世間荒迷せざらんや。花月法師は山王の如く、三十二相以て莊嚴せるを、喩へば衆女の花鬘を爭ふて、俄爾に分折して異段と作すが若し。我れ尤重の不善業を造れり、彼の阿鼻に墮して能く救ふ無し、諸佛所に極めて遠離せり、其は比丘を割截せしを以ての故なり。子諸親能く我を救ふに非ず、輔相諸の貴[族]及び僮僕[も亦然り]、我れ既に重惡業を造れり、是等の衆人能く救ふこと莫し。過去未來の一切佛、及び今現在の十方者、十力の導師煩惱を離れ、心金剛の如くなるを我歸依す。彼比丘異分と作るを見て、諸天悲泣して悉く號叫し、往いて彼の諸の菩薩衆に告げたり、花月比丘王の爲めに殺せられたりと。聰明利智の法師、大威德を具し名遍く聞ふ、陀羅尼に安住せし菩薩、今王城に在つて殺さる。

無量劫を經て廣く施を行じ、戒を護ること不動にして穢雜無く、能く忍辱を修すること比する者なし、今王城に在つて殺さる。無量劫來常に精進し、增上なる勝心もて四禪を修し、智を起して能く煩惱を斷ぜし者、今王城に在つて殺さる。一切の身愛を棄捨し、

と無し、爾の時勇健王便ち是の念を作さく、比丘死してより來七日を經て身色異ならず、阿耨多羅三藐三菩提に於いて定で不退轉を得しこと疑有ること無きなり、我れ惡業を造れり、必ず地獄に墮ち苦を受くること久しからじ、是の念を作せし時、八萬四千の諸天有り、空中に在つて一時に同聲に「是の如し大王、汝が念ずる所の如く、汝が言へる所の如し、此の比丘は眞に是れ阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せず、」と。王是の語を聞き驚怖戰悚し、身毛皆竪ち心悔恨を生ぜり、爾の時勇健得王、憂愁苦惱し心悔恨し已つて偈を說いて言く、

吾れ王位及び城邑、　金銀眞珠摩尼寶を捨てん、　愚癡無智なる惡業者なる、　我れ利刀を持つて當に自殺すべし。　昔時善花月法師、　三十二相にて莊嚴し、　王城に入るに光普く照らし、　猶し滿月の星中の王なるが如し。　我れ愛欲の爲めに惑亂せられ、　婇女に圍遶せられて城を出でて遊ぶに、　寶車に昇り刹利を從はしめ、　端正妙眼にして來至せり。　女比丘を見て皆欣悅し、　咸な喜心を以て金の鬘を散ぜり、　一切の女人皆合掌し、　偈歌を說き彼の比丘を歎ぜり。　我れ時に娛樂し出でて遊觀す、　刹利に圍遶せられ寶車に乘り、　端正妙眼の人に遇ひ値へり、　是れ大威德如來の子なり。　吾れ時に彼を見て惡意を起し、　嫉妬し瞋恚して害心を生ぜり、　比丘王城に入るを見るを以て、　衆女之を覩て欣喜せしが故なり。光明遍く四方を照らすこと、　[三〇]月の修羅の口を出づることを得しが如く、　衆人皆大聲を發し、　婇女は之を見て悉く歡喜せり。　我れ昔麁惡の言を出し、　普く皆其の千子に告勅し、　速かに比丘を殺し異段と爲せ、　斯は是れ我が大怨家なるがゆへに。　一切の童子悉く戒を持ち、　是の法師を憐愍愛念し、　咸く皆我が敎勅を受けず、　吾時に心に極めて憂惱を懷けり。　是の比丘淨戒を持ち、　智慧相應して慈父の如くなるを見て、　我れ時に瞋心もて遣はして殺さしめんとして、　阿鼻及び後悔を慮らず。　時に難提の王路に住し、　人を毒害し苦

【三〇】月の修羅の口を出づ。羅什三藏の譯によれば、阿修羅の月を食する時を羅睺羅と云ふ。譯して覆障と爲すと云ふが故に月明を障ふる月蝕を云ひしものなり。今は月蝕より出づるを云ふ。

直百億なるを、彼の比丘に施して菩提の爲めにす。

爾の時勇健得王是の念を作さく、此の諸の宮人、心皆變異し我れに違叛せり。云何んが知るや。悉く臂印及び珠の瓔珞を脫ぎ、偏へに右肩を袒ぬぎ右膝を地に著け、此の比丘に合掌作禮すればなり。時に勇健王、善花月の顏容端正なるを見、自ら形貌の比丘に如かざるを顧み、尋いで卽ち王位を奪はれんことを驚怖し恐れ、極めて大いに瞋恚せり、時に彼の比丘王道に住し、吹塵目に入り視て瞬す、瞼を動ずるや、時に勇健王是の如き念を作さく、比丘染心にして我が宮人に著し、眼を瞬き會せんことを期せり、誰か能く是の比丘を殺す者有りやと。爾の時勇健得王千子を具足し其の後に侍從せしめたり、便ち兒に詔して言はく、「汝[等]是の比丘の命を斷ずべし、」と。其の王の千子、比丘の爲めの故に王の敎を受けず、王是の念を作さく、兒等すら尙ほ我が敎勅を受けず、我れ今獨一にして伴侶無し、誰か復た能く是の比丘を殺すものぞ、時に勇健王に[二九]旃陀羅有り、名を難提と曰ふ、常に殺戮毒害をなさしめ兇暴にして顧惜する所無し、王難提を見、歡喜踊躍し、必ず我が爲めに是の比丘を殺さんと、尋いで時に勅して喚べり、時に彼の難提卽ち王所に詣る、王之に語つて曰く、汝今能く是の比丘を殺すや不や、若し能く殺さば當に重く封賞すべし。唯だ然り大王よ、我當に勅を奉じ王の所遣に隨つて我れ能く之を殺さん、卽ち是の日に於て便ち其の命を斷てり。王難提に告ぐ、汝應當に知るべし今は正に是の時なり、宜しく利刀を執つて彼の比丘の手足耳鼻を截るべし、其が染心を以て我が宮人を看たり、當に鐵鉤を以て其の目を挑出すべし。爾の時難提、卽ち王勅を受けて手に利刀を執つて比丘の手足耳鼻を割截し、幷に兩目を挑る、王比丘を殺し已つて尋いで園林に詣る。是の時、衆人悲號懊惱して還た復た珍寶王城に入る、爾の時勇健王、七日の中園苑に在つて心悅樂無く、都て喜戲せず、亦た娛樂せず、七日を過ぎ已つて園より出て還た城に來入す、其王路に於て此の比丘を見るに、死して七日を經て之を道に棄てしに七日の中形色變るこ

を求め祭祠を司るもの。二、刹帝利王族にして國家を統治し他の三姓を治む。三、吠舍、商人なり、四、首陀農民又は奴を云ふ。

【二九】旃陀羅(Caṇḍāla)。屠殺者、惡人、執暴惡人等と譯す。四姓の外にして屠殺を業とし、又獄卒を職とす。

身は莊嚴せる眞金の像の如く、復た工匠の加へし所瑩飾のごとく、猶し樹王の妙花敷けるが若く、比丘の端嚴なることも亦是の如し。又帝釋の大威德あり、[二〇]千眼天主空に遊昇し、須彌山頂[二一]忉利王の如く、比丘城に入りて妙なることも亦た然なり。譬ば[二二]梵王の梵衆に處するが如く、又た[二三]化樂天王主、欲界の[二四]夜摩甚だ端嚴なるに似たり、比丘の入城して妙なることも斯の若し。日の虛空を照耀して、千種の焰光幽冥を除き、一切諸の十方を遍照するが如く、比丘入城して妙なることも亦然なり。無量劫來廣く施を行じ、恒常に戒を護つて穢雜なく、忍辱を修すること世に倫無く、相嚴身妙なること是の如し。能く精進を起して聖に讚ぜられ、勇猛勝心にて[二五]四禪を修し、智を起して煩惱網を斷ず、是の故に比丘世間を照らす。佛雄は無比にして人中の上なり、過去已に勝法雨を澍ぎ、未來現在も亦た復た然なり、是れ彼の法王の眞子なり。願はくば此の比丘常に變ること無く、其の色光一切世を照らし、汝の威德を見及び聲を聞き、王威を映蔽して都て見ざることを。汝自ら已身に法を證し、佛敎を受行して世間に遊び、我等願はくば此の女身を捨し、亦當に彼の比丘の如くなることを得べきことを。彼女一切皆合掌して、偈を說いて以て嚴身の具、勝妙なる金鬘珠の瓔珞、[二六]耳璫及び頸の金鎖を散ず。勢[二七]輪王の大地を觀るが如く、四天下に遊んで子想を起し、國王刹利[二八]四姓等、彼に於いて心を均うして憎愛無し。比丘已に陀羅尼を學び、根力を分別して正道を覺る、猶ほ彼の滿月の衆星に處するがごとく、亦日輪の光照耀するが如し。十力調伏者に歸命す、若し人百劫に讚ずれども盡きず、無量千億多劫に說くも、其の一毛の德をも盡すこと能はず。若し法輪を轉ずる智慧句は、微細無垢にして難見の法なり、沙門魔梵婆羅門、[二九]醫王無比子を敬禮す。女偈を說き已つて皆歡喜し、地に珠と金とを散じ妙衣を布き、髻珠瓔珞

【二〇】千眼天主とは、帝釋天のことなり。帝釋本人たりし時、智慧聰明にして一度び坐する間に千種の義を思ひ觀察せしを以て千眼と名づけらる。

【二一】忉利王とは、前註の帝釋天のこと。須彌山頂の周圍に四面各々八天あり其の中央の頂は帝釋天所居の天なり卽ち三十三天の主なるが故に忉利王と云ふ。

【二二】梵王。梵王は色界初禪天中の最高なる位置なり。初禪天は梵天、梵衆天、梵輔天、大梵天と次第す卽ち梵輔天以下の三天は大梵天に從屬せるが故に今譬喩として引けるなり。

【二三】化樂天は、欲界の第五天なり。

【二四】夜摩は、欲界六天中の第三天なり。第二卷註(六五)に圖表せり、是等の諸天の關係右圖に就て看よ。

【二五】四禪。色界四禪天に生ずべき四種の靜慮をいふ。

【二六】耳璫。みみかざり。

【二七】輪王。轉輪王の略なり。此の王位に卽く時天に輪寶を感得し其の輪寶(武器)を以て四天下を制伏し統治するが故に轉輪王と言ふ。空中を飛行するが故に飛行皇帝とも云ふ。

【二八】四姓とは、一、婆羅門種、出家、淨行者にして涅槃

の大王の宮內及び彼の城邑聚落人民を安置して、佛法中に於て不退轉ならしむ、第五日不食已つて復た王城を出で、佛爪塔所に詣り、日夜竚立し夜盡きて明に至る、第六日に到つて仍ほ故のごとく未だ食せず、王の千子をして阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉に住せしむ、第六日不食已つて還た復た彼の珍寶王城を出で、佛爪塔所に詣り、其の日夜竚立し恭敬し、夜盡きて明に到る、第七日に至つて猶故のごとく食せず、王城門に詣る、爾の時王有り勇健得と名づく、時に王後宮より出でて金車に昇る、白銀の欄楯 勝妙なる栴檀之を以て轅と爲し、毘琉璃をもて輪と爲し、上に幡蓋を張り、寶幢にて莊飾し寶樹嚴列し、諸の繒羅網を車上に[一九]張覆し、衆の絹疊を垂れ、八百の童女有りて寶繩を執持して寶車を牽けり、其の女端正にして衆の妙色を具す、愚者は愛樂す、智人には非らざるなり、八萬四千の刹利豪族後へに侍衞す、復た八萬四千の婆羅門豪族、及び八萬四千の長者豪族悉皆侍從す、亦五百の玉女有り、種種の寶莊嚴の輿に昇りて王前に在つて行く、彼の女倶時に是の比丘を見、阿耨多羅三藐三菩提に於いて不退轉を獲、六百八十萬の宮人悉く是の比丘を見、皆阿耨多羅三藐三菩提に於いて不退轉を得たり、爾の時に衆人皆瓔珞及び寶革屣を脫ぎ、偏へに右の肩を袒ぬぎ右膝を地に著け、咸く皆合掌して彼の比丘に向ひ禮を作し恭敬して前に在つて立てり、爾の時の女人は宿殖へし善根の熏資する所なり、即ち寶輿を下り、偏へに右の肩を袒ぬぎ衣服を整理し、右膝を地に著け、合掌して彼の比丘を敬禮し已つて偈を說いて言はく、

今日威光遍く照耀し、　斯の珍寶王都城に、　是の比丘入城するに由るが故に、　衆人咸な各住して瞻仰し。　一切愛欲の過を斷除し、　亦た瞋恚及び愚癡、　嫉妬妄想衆の結縛を離れ、一切悉皆能く盡く滅せり。　是の時勇健得大王、　爾出遊に當つて人の觀るもの無し、　兒等及び餘の諸の眷屬、　咸く皆王者に從ふ者有ること無し。　比丘彼の大王衆に處して、　端嚴殊特にして比有ること無く、　猶し十五圓滿月の、　一切の衆星に圍遶せらるるが如し。

【一九】張。底本彌に作る、今は三本、宮本による。

り。菩提を求めんが爲めに勝因を修し、福德及び智慧を積集し、彼を習學する故に常に修行す、衆生を救濟せんと欲するが爲めの故なり。一切右遶せる智神仙、頭頂を足に接して敬禮し、戀仰歎息し皆呼嗟し、高聲に悲叫し悉く號切す。或は高より墜墮し、悶絕すること猶し大樹の倒るるが如くなる有り、彼の言を以て便ち退轉せず、福仙諸の衆生を利せんが爲めなり。仙衣鉢を持して辭去せんと欲す、猶し雄猛なる師子王の如し、都て得失を顧眄せず、其が法性に安住するを以ての故なり。我をして山林中に止まり、衆生の諸の善根を損減せしむること勿れ、彼便ち勝城邑に往詣す、衆生を利益せんと欲するが爲めの故なり。

阿難よ、爾の時善花月法師卽便城邑村落に往詣し諸の衆生の爲めに應に說法すべし、是の比丘淸旦時に、九億の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉に住し、然る後次第に遊行して彼の珍寶王城に至り、畢鉢羅樹下に坐せり、時に彼の比丘夜坐して明に到り其の城内に入り、三十六億の衆生をして佛法中に於いて不退轉に住することを得しめたり。爾の時比丘一日食はず、不食已つて遂に王城を出で[一八]佛爪塔所に詣り一日一夜竚立して恭敬せり、時に彼の比丘復た明旦に至り、第二日に到るも猶故のごとく、未だ食はず、還て復た珍寶王城に入り、二十三億の衆生をして佛法に安住して不退轉を得しむ、第二日に於て不食已つて復た王城を出で佛爪塔所に詣り日夜竚立し、夜分盡き已つて淸旦に暨ぶ。第三日に到つて仍ほ故のごとく未だ食せず、還王城に入り、九億百千の衆生を安置して佛法中に於て不退轉に住せしむ、第三日不食已つて復た王城を出で、佛爪塔所に至り日夜竚立して夜盡きて明に到る。第四日に至るも猶ほ故の如く未だ食はず、還復彼の珍寶王城に入り九十百千の衆生を安置して佛法に於て不退轉に住し、第四日斷食して城を出で佛爪塔所に詣り、日夜竚立し夜盡きて曉に至る、第五日に到りて猶ほ故のごとく未だ食せず、還王城に入り、一切

【一八】佛爪塔所。佛の遺されし爪を安置して塔を造りしものなり。玄奘の旅行記西域記には隨所に佛爪塔の記事見ゆ。

於いて能く顯示す。若し一切の我想を取すことを離れ、亦た衆生「想」及び壽命「想」を離れ、諸の色聲香味觸、能く速かに離るる者は佛法を護るなり。若しは百億那由佛に供し、清淨信心をもて餚饍を施し、亦た燈蔓及び幡蓋を施すこと、恒沙多億劫に至るも。若し正法衰へたる末世に於て、是の如く佛法滅せんと欲する時、一日夜に於て能く法を護らば、是の如き功德彼に勝さる。我は人中の聖師子なり、正法滅する時置いて護らずんば、名づけて佛を供養すと爲すことを得ず、又亦導師を敬ふと名づけず。汝等安樂にして自ら利益し、善く自ら將に己身を護らんとす、正法律に於て放逸なること莫れ、

　應に常に慈行を修することに安住すべし。正戒を護持して雜ならず、清淨皎然にして垢穢無く、便ち一切佛、所有過現の諸如來に供養を爲す。勝れたる法寶を施して恒に忍を修し、靜處に定を習して善く調柔なり、諸の鬪諍を離れて妙因を行じ、城邑に往詣して衆生を救ふ。大智勝仙將に下らんと欲して、或は悲泣するあり或は頂禮し、林樹の香愛す可きを觀んことを願ふ、智者は去ること莫うして我等を救ふ。往昔導師十力を具し、

　諸根寂靜にして善調柔なり、彼の山林閑寂處に詣りて、無上勝菩提に趣く。又能善く菩提の因を行じ、福德及び智慧を修集し、林に住して隨順して彼を學ぶ、大聖威德願はくば下ること勿れ。汝が身の相好特に微妙にして、頭髮紺靑にして甚だ愛すべく、皮膚光麗にして金色の如く、輝き赫きて大地に照曜せり。眉間の毫相殊に愛す可く、猶し珂貝の如く鮮白光なり、餘人をして妬嫉を起し、國主大臣をして或は奪命せしむること勿れ。

阿難よ、爾の時善花月法師卽ち彼の菩薩衆に偈を說いて言はく、

　所有過去の諸の如來、一切種智漏盡者、悉く皆三有を利益し、無上なる勝菩提を證せ

祇劫廣大無量不可思議不可稱不可量分齊有ること無きに、彼の時に佛有り、號して寶蓮花月淨起王佛如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と曰ふ、阿難よ、彼の時寶蓮花月淨起王佛、壽命九十九億那由他百千劫なりき彼一切日月時中に於て九十億百千の衆生をして佛法に安住して退轉せざらしむ、阿難よ、彼の時、寶蓮花月淨起王如來應正遍知、般涅槃し已つて正法滅後末法の中、此の修多羅に於て、無量の衆生之を厭惡し、無量の衆生之を遠離し、無量の衆生之に違背し、無量の衆生之を棄捨し、大いに怖畏すべき時、大厄難の時、不雨の時、若しは多雨の時、非時雨の時、飢饉の時、邪見の時、外道の語言を求むる時、惡獸夜叉の時、雷電霹靂の時、佛菩提を壞する時に、七千の菩薩有つて城邑王都聚落の人民に於て此より出で、普賢林中に至り彼に依て住し、善花月法師と倶なりき、時に彼の比丘、彼の衆の爲めに陀羅尼法門を說けり、阿難よ、是の善花月法師、一時中に於て獨り靜かなる坐に處し、天眼を以て界淸淨なること人に過ぐ、多億の菩薩に見え諸の善根を殖へ、餘佛の世界に於て沒して此に來生せり、彼若し是の陀羅尼法門を聞くことを得ば、便ち阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得、若し此の陀羅尼法門を聞くことを得ずんば、卽便ち阿耨多羅三藐三菩提を退失せん、是に於て善花月法師、是念を作し已つて卽ち三昧より起ち、彼の大菩薩衆の所に往詣し、彼の衆に到り已つて是の言を作さく、善男子よ、我れ今城邑聚落に詣り衆生の爲めに法要を演說せんと欲すと。爾の時大菩薩衆、善花月法師に白して言く、我等一切諸菩薩衆は、仁者の此の林より彼の王都城邑聚落に出向することを樂はず、何を以ての故とならば、無量の我慢の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・有りて、(一七)像法時に於いて人の命を奪ふことを憙ぶがゆへなり、爾の時善花月法師菩薩衆に白して言く、若し我れ其の身命を護惜せば則ち去來現在の諸佛の法を護ること能はざるなり、爾の時に法師、卽ち偈を說いて言はく、

恒常に我想に住せず、　乃ち能く如來の法を護持す、　諸佛廣大の勝れた菩提を、　惡世中に

【一七】像法時とは、正像末の三時中の第二時にして證は無けれども教と行と尙ほ存する時期を云ふ、通途に正法千年像法千年末法萬年と云ふ。

じ、[一二]蘭若禪等も能く救ふ莫し。

[一三]爾の時長老阿難、座より起ちて偏へに右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して佛に向つて是の言を作さく、世尊よ、我れ、如來應正遍知所に於いて少しく諮問あり、願はくば佛聽許して問に隨つて爲めに說き玉へ。爾の時佛阿難に告げ玉はく、汝本坐に歸れ、如來應正遍知、汝の問ふ所を恣にせしむ、我汝が爲めに說かん、汝が心をして喜ばしめん。爾の時長老阿難、佛に白して言く、世尊よ、唯だ然り、教を受け奉らん、[一四]修伽多、唯だ然り、教を受け奉らん、[一五]婆伽婆、已に聽許を蒙れり、是に於て阿難、卽便謦欬して是の言を作す、世尊よ、何の因緣の故に餘の一一の菩薩、菩薩行を行じ、手足及び耳鼻を截るに遇ひ、或は兩目を挑り、其の身分を割き、種種の苦に於て悉皆忍受し、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉なるや。是の問を作し已るや、佛言はく、阿難よ、汝若し我れ阿耨多羅三藐三菩提の爲めの故に備に苦を受けし者を知らば、汝尙意を興こし言はんと欲するに堪へず、況や問を發せんや、阿難よ、假使人有りて足より頂に至るまで烱然熾焰なるとき、復た餘人有りて其の所に往詣して是の言を作さく、丈夫よ來る可し、此の熾然不滅の身に於て五欲ど合せしめ、意の所受に隨つて歌舞戲樂せよと。佛言はく、阿難よ、汝が意に於て云何、是の人熾然たる身火を滅せずして意の所受に隨つて歌舞戲笑し、五欲樂しむや不や。阿難佛に白して言く、不也世尊よ、佛言はく、阿難よ、是の人未だ身火を滅せずして或は能く五欲の樂を受け、歌舞喜戲す可きや。如來よ爾らず。往昔菩薩行を行ぜし時、三惡道の受苦の衆生及び諸の貧苦終に悅樂無きを見たり。阿難よ、若し過去に菩薩、菩薩行を行ぜし時、[一六]不缺戒・不穿戒・不尤戒・不雜戒・不取戒・不動戒・不濁戒・不壞戒・不淺戒・不現相戒・不相違戒・正直戒・如要誓戒・攝衆生戒を成就せり。阿難よ、是の如く諸戒を成就して菩薩摩訶薩菩薩行を行じ終に截手・刖足・割耳・劓鼻・斬首・挑目に逢遇せず、及び餘の身分も亦た種種の諸苦を受けず、速かに阿耨多羅三藐三菩提を得たり。阿難よ、乃往過去阿僧祇阿僧

【一二】蘭若。阿蘭若の略、靜處、空閑處と譯す、禪定に適する地を云ふ。

【一三】爾の時。以下梵本第三十五善花月法師品、(Supuṣpacandra.)

【一四】修伽多(Sugata)。好去、善逝等と譯す、如來十號の一なり。佛は敎行を修して果に趣きしが故に善逝と言ふ。善とは所謂初め道心を發せしを言ひ、逝とは心に由つて大涅槃を得しを云ふ。大乘義章第二十末を看よ。

【一五】婆伽婆。世尊、有德、具福智者等と譯す、佛十號の一なり、佛は衆德を備へて世の爲めに欽重せらるるが故に世尊と云ふ。

【一六】不缺戒不穿戒等。身罪を犯すを缺戒と云ひ口罪を犯すを破戒と云ふ、又大罪を犯すを缺戒と云ひ小罪を犯すを破戒と云ふ。不缺戒は是に依つて知れ。次に煩惱種々の惡尋伺を入れしめざるを不穿戒と云ふ。智度論第二十二卷を見よ。

上敬し、我れ法師に於いて已に恭敬す。其の佛世界恒沙の如く、中に滿つる寶物を如來に奉るも、餘の淨心有つて足指を施すに、此の福彼に於て最も勝と爲す。是の如く女人死滅して後、便ち千億佛に見ゆることを得、悉く彼の佛に於て出家することを得て、是の如き勝三昧を受持す。諸の兩足尊佛所、及び般涅槃最後時に於いて、是の如く一切常に出家す、佛子清淨にして穢染無し。亦た燈明如來所に於て、彼の佛法中に梵行を修し、我れ時に女身を轉ずることを得て、大法師と爲つて勝法を說かん。智力王は彌勒是なり、恒常に勇猛にして法を護持す、法師は卽ち是れ然燈佛にして、昔の王女は我が身是なり。能く身肉を捨して顧恪無く、功德自在者を供養し、恒常に諂曲心を遠離するは、是の如き三昧を求めんが爲めの故なり。彼の比丘病苦逼まるを見て、爾の時所有啼泣者、一切皆不退地を獲、畢竟諸の惡趣を永離す。彼の人復た衆惱逼まること無く、亦た謗法及び病苦を離れ、五根[九]具足して殘缺せず、心亦た諸の憂刺有ること無し。一切端嚴にして皆殊妙なり、功德威神常に熾盛にして、百福莊嚴三十二、皆病者を供養するに由るが故なり。彼れ我が法に於いて悉く出家し、其の後代末世時に於て、若し能く我が正法藏を持たば、彼當に千億佛に見ゆることを得べし。我が法を受持恭敬する者、是を菩提の種[一〇]を攝持すと爲す、廣く能く諸の衆生を利益す、當に阿閦佛に見ゆることを得べし。我れ勝菩提行を行せば、便ち聖に愛せらるることを得獲と聞き、一切本生の莊嚴の事もて、諸の如來を勝供養し奉る。比丘多聞にして禁戒を持ち、見已つて淨心にして事へ奉り、復た能く諸の恚慢を遠離するは、恒に最勝大福の爲めの故なり。速かに一切の瞋慢を離れ已つて、我子護法者を供養す、無量億劫闇冥を離れ、終に惡道の苦に墜ちず。諍心は畢定して惡趣に墮つ、禁戒[一一]を持ち及び多聞にして、諸佛を供養し廣く施を行

【九】五根とは、眼根・耳根・鼻根・舌根・身根の五根を云ふ。是に勝義根と扶塵根の差別あり、勝義根は四大所造の淨色にして珠寶光の如く、扶塵根とは四大所成の粗色を云ふ。

【一〇】菩提の種とは、正覺の種子の意味卽ち無漏の種子なり。後ち現行する時佛果を成ず。

【一一】禁戒。第二句の禁戒を持つ以後最後まで諍心の句はかゝるなり、卽ち諍心もて禁戒を持ち乃至禪を修する意なり。

師も亦是の如く、閻浮提中時に一たび見はる、猶し閻浮金の聚光、若し觀ること有る者厭足無きが如し。法師實意も亦た是の如く、天人瞻仰して厭くこと有ること無し。喩へば若し清冷水を飲まば、熱時に能く燋渴の患を去るが如し。比丘法師も亦た是の如く、能く衆生の諸の渇愛を除く、我れ股肉を捨して法師に奉り、幷に己身の新しき淨血を施せり。彼の法師の四大の苦を除く、佛の歎ずる所の者我れ已に作せり。聖者の成就せる相應の德、及び此の如き勝れたる實定を持つて、我れ已に彼の比丘を供養せり、願はくば斯の福善をもて佛を成ずることを得ん。香の芬馥として甚だ樂ふ可きに、隨順する時香して勝れたる栴檀の、妙香普く熏じて遍ねからざる無きが如く、戒定を持つ者も亦た是の如し。猶し須彌の最も端嚴にして、遍く十方を照らして殊に愛す可く、地上及び虛空を光耀するが如く、持戒の法師も亦た是の如し。若し人清淨にして深く信樂し、最勝なる妙寶塔を建立し、復た餘人有つて來つて敬養せば、轉た造者に增して最勝の福[を得ん]。法師說者も亦た是の如く、我れ淨心を以て安隱ならしむ、自身の新しき肉血を割いて捨す、我れ今已に正法の塔を造れり。若し塔廟有つて倒れんと欲するに垂とするに、智者扶けて傾動せざらしめ、復た人有り來つて塔を供養せんに、能く扶者をして勝福を獲しむ。比丘法塔を知るも亦た然なり、我れ良藥を以て彼の患を除く、此能く勝妙の法を演說し、衆生を無上道に安置す。法師比丘若し殞歿せば、斯の法云何が聞くことを得ん、父王當に知るべし比丘喪なはば、即便是の三摩提を失はん。法師は亦淨妙なる燈の如く、衆生の煩惱の闇を療治し、廣大なる三摩提に安住し、惡道の諸の群生を救濟す。比丘の所行は測る可らず、恒常に大心に安住し、決定句義已に善く學び、諸惡異論壞すること能はず。其の無量億劫中に於て、永く復た女人の身を受けず、佛の所說の如く法を

【八】三摩提。心散亂せざる定のことゞに第一卷に三昧と言ひしに同じ。

りか得んと、我れ時に聞き已つて心歡喜し、父の尊重にして勝妙なる言を聞いて、其の心勇猛にして怯弱ならず。智意童女父に報へて曰く、願はくば父淨心にて聽くことを垂れ賜へ、已が自身に於いて愛戀せず、亦た我想に計著せず。能く勇猛「心」を以て自身を捨したり、無上菩提を求めんが爲めの故なり、惟願はくば父王よ更に聽くことを賜へ、人肉を訪ね求めて了に得ず、是の故に便ち自「身」の髀肉を割いて、調ふるに衆味を以てして法師に奉れり、他人を殺さず死肉に非ず、身を割けるは廣く利益を作さんが爲めなり。比丘既に患苦を免るることを得て、我も亦た當に無量の福を獲たり、王卽ち問ふ汝身を割きし時、甚だ苦逼惱せざるや。汝速かに備さに藥を自ら瘡に塗り、身をして將に大苦を受けしむること勿れと。其の父王の慇念の言を聞く、惟願はくば大王よ聽き賜へ。聞き已つて正法行を深思し玉へ、業果是の如く不思議なり、我れ父より天の言へる所を聞いて、已が身命に於いて顧戀せず。信敬心を以て施し奉れり、是の故に自ら新しき肉血を捨せり、已が身分を以て利益を作し、比丘の毒惡なる病を除くことを得たり。我れ今既に無量の福を爲し、[六]不堅身を以て堅身に易へたり、其の女復た是の如き言を作さく、惟願はくば父王よ更に少しく聽け。實法を聞いて願はくば受持し、彼の業果不思議を觀るに、往昔不善業を造り、衆生癡に由つて惡道に墮せり。身肉銷盡して還た復た合す、是の故に業報思議し難し、初時惟だ形骨鎖のみあり、念頃に身肉還更に合す。況や復た善業を造作する者、心の所欲に隨て寧ぞ得ざらんや、身肉を割くと雖も初より痛まず、其の瘡血流るるも亦た苦無し。若し一切身分を割く時、法を思念するが故に[七]痛處無し、我れ正法を深く愛樂す、是の故に肉を割いて施し奉る。一切有爲は猶し幻の如し、身瘡還合して亦た本の如し、譬へば優曇鉢羅花の、無量劫を經て或は能く現ずるが如し。比丘法

【六】不堅身とは、前卷に詳說されたる色身のこと、五蘊假和合の身體を云ふ。堅身とは法身のこと先に言ふ不形の身無相の身を云ふ。法身には生滅なく不生不滅なるが故に堅身と云ふ。

【七】痛。底本瘠に作る、今は三本、宮本に依る。

三菩提心を發さしめき。爾の時智力王、即便ち偈を說いて其の女に問ふて曰く、
汝何れの處に於て此の、新しき好き人肉及び血の、能く病者の爲めに美饍と作り、是の比丘をして安樂を得しむるものを獲しや。誰を何れの處に遣はし何人を殺さしめ、乃ち斯の勝れたる好肉を獲得し、諸の異味を以て共に和合し、復た淨血を得て洗ひ塗りし。法師此の食を食せし時、、幷に新血を用て瘡を洗塗し、能く是の如き大惡患を除き、彼の尊者をして喜樂を獲しめしや。本親屬たりし天神所に於いて、我れ夢中より是の言を聞けり、若し能く是の如き藥を得ば、乃ち彼の比丘の病を除くべしと。要ず人身の新しき出血を以て、法師の毒惡瘡を塗洗し、人肉に調和して香らしめ已つて、彼の食の爲の故に獻じ奉る。比丘但だ此の方を用てせば、即時に病患必ず消除せん、惟斯の藥のみ有つて救療するに堪えたり、餘法を假らず王速かに辦ぜよと。我れ覺悟し已つて臥より起ち、即ち後宮に入つて是の言を說くに、一切の宮人此の語を聞き、悉く皆默住して堪ゆる者なし。吾時に復た宮人に告げて言はく、頗し能く此の如き事を爲すありて、己が身分の新しき血肉を捨てて、和するに種種の餘の美味を以てし、斯の藥食を用て彼に奉施し、復た淨血を以て洗塗せば、法師比丘の黑惡瘡、此の方によつて乃ち痊愈することを得可し。若し是の如き藥を以て、比丘の惡瘡を療治せざれば、法師は必ず當に便ち死歿せん、正に此の方を闕くを以ての故なり。是の時宮人斯の語を聞いて、咸く皆默然として復た言はず、能く此の惠施、是の如き血肉の方藥を爲すもの有ること無し。乃至一切三界の人、都て能く自身の肉を捨するもの無し、宮中一一普遍告ぐるに、寂然として一の言ふに堪へたるもの有ること無し。我心に是の比丘を敬重す、衆人咸く各自身を愛し、己身に戀著するを以ての故に、自の肉血を割き捨すること能はず。善哉語や我れ何れの處よ

守門防邏及び奴婢、親從左右并に餘の大衆、此の比丘を見て悉皆啼泣せり。童子よ、時に智力王に先に親屬の命終して生天せるありて、王の夢中に於て現じて面のあたり勸化し、而も是の言を作す、「此の比丘の病、要ず未交の童女の新血をもて之を洗ふことを須つ、亦用つて瘡に塗るべし、復た其の肉を取り之を煮羹と爲し、種種の味を以て之に調和し、飯と共に食せば乃ち除え差ゆ可し、若し此の藥を得ざれば定で起つ可きこと難し」と。爾の時智力王是の如き夢を見、覺め已つて明に至つて卽ち臥より起きて後宮に入り、諸の宮人を集めて具に斯の夢を說き、「我れ是の事を見たり、誰か能く此の病比丘の藥を施し、我が善知識善道を說く者をして除差を得しむるや」と。童子よ、爾の時一切內外の宮人婇女都て堪ゆる者無し、童子よ、爾の時智意、父王所に於て是の語を聞き已つて、病比丘の是の如き藥を須つことを知り、聞き已つて歡喜し身心踊悅し、是の思惟を作す、「父の言ふ所の如くならば我れ今此の身未だ曾て交合せず、其の尊者に新しき血肉等を施さん、我は宮內に於て最も幼年たり、此の法師[三]阿闍梨に於いて深く敬重を生ぜる所なり、身口意淨うして無染智を求む、身の血肉を以て無著法師に施さん、己が身肉を持つて種種の味を以て之に調和し、我れ應に此の病める比丘の藥とせん、我が大師の病苦をして消除して起て平復せしめん」と。爾の時智意、卽ち利刀を持つて深心法に住し、身の股肉を割くに其の瘡より血流る、此の新しき肉を持つて種種の味を調へて羹[四]臛を作り、金椀を以て身上の流血を[五]承け取り、卽ち王に奉る、勅して病める比丘を喚び來りて宮內に入れ父王前に於て席を置いて坐せしむ、血もて瘡を洗ひ已つて又用て之を塗り、復た此の肉を持つて調ふるに種種の其の餘の勝味を以てして美食を作り、福を獲んが爲めの故に法師に奉施す、時に彼の比丘過有りと知らず覺えず疑はず、卽便ち之を食す、此の病める比丘此の食を食せし時患苦卽ち除きたり、爾の時法師病苦除き已つて身安く快樂にして智力王の爲めに勝妙の法を說けり、是の三昧を求めしが爲めの故に此の宮內の一萬三千の諸の婇女等をして阿耨多羅三藐

【三】阿闍梨(Ācārya)。軌範、教授等と譯す、自ら正行を行ひ、善法中に於て弟子を教授し知らしむる人に對する尊稱なり。

【四】臛。肉のあつものを云ふ。

【五】承。底本盛に作る、今は三本、宮本、聖本に依る。

菩提において不退轉を得たり、是の不思議願勝起王如來、即ち此の日に於て壽盡きて無餘涅槃に入り玉ひ、正法住世八萬四千億那由他百千歳なり、童子よ、是の不可思議願勝起王佛、正法滅後、末世時に於いて、乃ち無量の執見の比丘有り、彼の諸比丘、是の如き等の修多羅中に於て愛せず樂はず、信心を生ぜず、誹謗毀訾し、若し能く此等の經を持する者あらば彼の惡侶の爲めに其の身を逼惱せらる、口に呵毀を言ひ乃至命を奪ふ、彼の惡比丘、利養及び恭敬を貪らんが爲めの故に二萬の此の經を受持する諸比丘等を殺す。童子よ、彼の時斯の閻浮提中に於て一國王あり、名を智力と曰ふ、正法を受持し、正法を護持し、本願成就して曾て先佛に於て衆の善根を殖えたり。童子よ、昔時此の閻浮提内に於て一法師あり、名を實意といふ、是の如き三昧經典を受持し、王宮に入つて善知識と爲り、大悲有るが故に能く救濟利益憐愍を爲す、彼の王喜樂して此の比丘を見、厭足有ること無く法を聽き語論し、往詣して奉事し、親近し、供養し、諮請し、問難し、聞說し、能く持し、善能く酬答せり、時に彼の比丘、善く廣略相收の義を解し、威儀諸行悉皆具足せり、善能く陰界諸入に通達し、善く一切衆生の和會し分離し、離し已つて復た合することを知り、亦た衆生の威儀諸行樂欲性習を知り、善く衆生の根力精進を知り、善く差別智慧性習を知り、善く諦相應及び不相應酬答の語言義に於ける決定せる辯才深妙なるを知り、亦た能善く衆生を調伏することを知り、笑を含むで先づ語り、見る者愛樂す、嚬蹙を遠離して其の心廣大なり、是の如く四無量心に安住して大悲相應し、一切の異論壞すること能はざる所なり。童子よ、爾の時智力王に女有り、名を智意と曰ふ、年始めて十六、顏貌端正にして形色殊妙、姿容充滿して備さに具はらざる無し。彼の實意比丘以て師導たり、時に彼の比丘[二]四大不調にして右髀上に惡黑瘡生じて療治すべきこと難し、一切の醫師之を捨てて去る、時に彼の智力王、是の比丘の病篤く困苦なるを見、其の死沒せんことを恐れて號泣し涙を墮す、及び諸の妃后八萬の婇女、並に國土城邑の人民、太子、諸の官軍の衆の將帥、

【二】 四大不調。四大とは地大・水大・火大・風大なり、凡ての色法は全部四大より成る所にして、人間の色身亦然なり、今は病氣のこと。

卷の第八

[一]童子よ、是を以て菩薩摩訶薩は是の三昧を欲樂し求むるが爲めに應に善根を修し、法施を行じ、或は財施を行ずべし、此の檀度を以て、四種廻向を以て而も之に廻向す。何等を四と爲すや。一には過去の諸佛善巧方便もて阿耨多羅三藐三菩提を得玉へり、願はくば我も亦た是の善方便を得、此の善根を以て菩提に廻向せん、是を第一廻向と名づく。二には善知識所に於て、是の如き善巧方便を説くを聞いて、受持讀誦して之を修學す、此の方便を以て我をして無上菩提を成ずることを得しめ、願はくば我長夜に値遇することを得んことを、斯の善根を以て之に廻向す、是を第二廻向と名づく。三には願はくば我が所得の資財、一切衆生と共に受用せん、此の善根を以て之に廻向す、是を第三廻向と名づく。四には願はくば我が己身一切生處財を得、法を得、一切衆生を攝護し利益せん、願はくば我常に是の如きの身を得て此の善根を以て之に廻向せん、是を第四廻向と名づく。童子よ、此の四種の廻向を以てし、應に一切の善根を以て之に廻向すべし。復た次に童子よ、菩薩摩訶薩は是の三昧を求むるが故に、若しは在家、若しは出家、不諂曲心を以て持戒の人に奉事す。若し能く是の三昧を持つ者ありて若しは出家、若しは在家、是の人若し病に遇ひて苦しみ困しむに、垂とするとき、若し能く己が身分肉血を以て彼の患を除き若しは信心を成就し增上すること有らば、菩薩不動心及び清淨心を以て應當に[己が身分血肉を]給施すべし、童子よ、乃往過去阿僧祇阿僧祇無量無邊不可稱不可量廣大不可思議劫を過ぎて、爾の時に佛有り、號して不可思議願勝起王佛如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と曰ふ、彼の佛如來應正遍知、卽ち是の日に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得、無量無邊の應化の諸佛を變作して爲めに說法し、善能く無量の衆生を調伏し、無漏の阿羅漢道に安置し、亦復無量の衆生を建立し、阿耨多羅三藐三

【一】童子よ。以下宋本、元本、明本、宮本、聖本は第九卷なり。梵本第三十四　具智者品、(Jñānāvatī.)

安隱德を來集す。一切供養の具をもて、此の刹を莊嚴す。其の地を眞珠にて滿たし、安隱德を供養す。一切の衆の寶花もて、此の刹を莊嚴す、龍妙なる眞珠を雨らし、安隱德を供養す。復た一切寶を以て、此の刹を嚴飾し、龍寶莊嚴を雨らし、安隱德に供せんが爲めにす。最勝なる釋師子、耆闍山に住し、諸比丘の前に於て、而も師子吼を作す。安隱德は我れ是なり、德音は是れ彌陀、彼の千億劫に於いて、共に菩提行を修せり。時に持戒者、安隱德智慧を見て、無量の諸の女人、悉く變じて男子と爲れり。諸佛悉く授記し玉ふ、終に疑惑あること無し、彼速かに成就することを得て、世の自然智を證す。此の經を聞き已つて、決定せる功德を說き、已に於て著を生ぜず、應に是の如き法を學ぶべし。

幷に及び此の衆會、一切我が言を聽け。若し我れ審かに決定して、無上を成ずることを得ること、此の如く實にして虛ならずば、地をして六種に動ぜしめん。此の語を說く時、大地便ち震動し、希有の事見はれ、諸の天大いに歡喜せり。人天歡喜し已つて、菩提心を發し、無量難思の衆、皆無上智に趣けり。安隱德比丘、一切衆の利益し、億の衆生を安處せしめ、無上智に置けり。此の實の法言を以て、體を推すに皆實無し、此の語審にして不虛なり、臂をして故の如く還らしむ。此の法の審實なるが若く、安隱の名も亦無し、十方悉く推求するに、空の故に不可得なり。諸法は猶響の如く、聲其の中より出づ、聲を求むるに不可得なり、是の如く諸法を知る。畢竟了達せば、空に於いて畏るる所無し、彼の人眞實相を語る、火も燒くこと能はず。所有世の衆生、天人夜叉龍、一切智の威力、悉く寂定を悟らしむ。若し人と及び天との、所有世の苦難、不退轉の威德、一切速かに能く壞す。此の語を說く時に、身臂還た本の如く、安隱德比丘、身相具[足]して莊嚴なり。諸の天千億數、淨虛空中に住し、信心[五九]曼陀を以て、彼の比丘身に散ぜり。此れ皆人花に過ぎ、遍く閻浮界に滿ちたり、天女億那由、伎樂諸の歌詠もてす。安隱德比丘、大師子吼を作し、牟尼如來尊、餘の億の佛土をして、各各己が剎に於いて、彼の清淨の大士、安隱德比丘の、其の名號を傳へ說かしむ。比丘比丘尼、清信士男女、天龍及び夜叉、乾闥緊那等、彼[等]決定して業に、安隱[德菩薩]離垢を得たるを聞いて、信心求道する者、其の數恒沙の如し。安隱德比丘、聰慧にして自在を得、佛智の爲めの故に、然臂を憂とせず。彼の人千の剎に於て、身を變ずること恒沙の如く、臂光遍く照曜すること、猶し[六〇]劫盡の火の如し。雨ふらすに衆香末を以てし、遍く一切土に滿たし、下大地に至り、上天悉く

【五九】曼陀。先に註せる曼陀羅の略なり。

【六〇】劫盡の火。此の世界二十中劫住し終つて有情の業力によつて大火災起りて世界を焚き、七度び火災起りて次に大水災あり、斯の如く七度び繰り返して世界を燒き盡し、最後に風災起りて極微に至るまでも壞し盡し、全く世界を破壞し終る。此の壞劫の五十六度の火災を劫盡の火と云ふ。先きの劫盡災壞の時と言へる項參照のこと。

く、臂復た纖長にして象王の鼻の如くなるを見るを以て、一切の衆人見る者奇歎し、呼嗟悲泣涙を雨らさざるは莫し、爾の時安隱德比丘、此の大王及び諸人衆皆悉く悲泣懊惱するを見て、王に問ふて言はく、大王よ、何が故に悲號し涙を墮すや、及び諸の大衆の悲啼するも乃ち爾なり、時に德音王、偈を以て答へて曰く、

大智安隱德は、聰慧なる勝れたる法師なり、汝身分を然を見る、是を以ての故に哀泣するなり。汝が顏は端妙なること、猶し熾ゆる火聚の如し、汝の身分を毀つを見る、故に我憂惱を增すなり。汝右臂を然す時、光十方界を耀し、諸燈を映蔽して、星月復た現ぜず。大地悉く震動するも、汝が心傾搖無し、我が心敬を起し、汝は凡夫に非ざるを知る。其の千肘殿より、八萬の宮人と共に、我が身投下するも、身竟に諸の患無し。善哉汝が淨智、善哉意無上、善哉精進士、善哉大信を成ぜしことや。汝身臂を然せし時、其の心動異無く、歡喜心を發し、兼ねて復た妙法を說く。猶し圓滿月の若く、復た淨空の日の如く、須彌山王の如く、端妙なること亦是の如し。我れ是の如き願を作す、大精進を滿足せんがための故に、愛する所の身を捐て、衆生を利益せん。法を愛するが故に悲啼す、廣く無垢を喜樂す、汝已に身分を毀てり、故に我極めて憂惱なり。天人の所供者、無邊の勝れたる辯才ある、安隱德[菩薩]王に報えて、便ち是の偈を說いて言はく、身手無きを以ての故に、身分を闕くとは名づけず、若し戒を持たざる者、是を身分を缺くと名づく。此の臭穢身を以て、我れ已に如來、難思議の[五七]福田、一切世間の塔に供せり。若し人三千界の、中に滿つる七寶の沙、佛世尊所に於いて、菩提の爲めの故に施さんに、此の[五八]施供有りと雖も、餘の供復た此に勝る、若し能く法空を知り、便ち能く身命を捨す。我今實語を說かん、大王願はくば諦かに聽け、

【五七】福田とは、佛法僧三寶又は貧窮等を云ふ。卽ち是等に供養を爲し置くときは、其の善行の結果として善き報を得ること恰かも農夫の田畑に種子を蒔くが如くなるが故なり。

【五八】施供。底本施此供に作れり、今は三本、宮本、聖本による。

て遍ねく照らすを見、大衆會を觀て卽ち是の念を作さく、我も亦大乘を行じ、一切諸法體性平等無戲論三昧を樂求せん、若し我是の三昧を獲得せんと欲せば、應當に此の佛の廟塔を供養すべし、我今當に斯の如き供養をなして、諸の天人阿修羅等をして奇特の想を生じ、歡喜踊躍して法の光明を得しむべし、我が供具をして彼の王の所有供具に映蔽せしめ、德音王及び宮人眷屬をして我が供養を見て皆悉く歡喜せしめん。爾の時安隱德菩薩は大衆の塔前に在るを見、法を聽かんが爲めの故に、卽ち其の夜佛塔前に在つて衣を右の臂に纒ひ油を以て之に塗り佛を供養せんが爲めの故に熾んに之を然す、時に安隱德菩薩增上信に住し、阿耨多羅三藐三菩提を求め、右臂を然し已つて其の心異無く顏色を變ぜず、童子よ、爾の時安隱德比丘臂を然す時、大地震動し、其の明映蔽して無量百千行の燈悉く光照無し、此臂光十方を遍照するを以てなり。爾の時安隱德菩薩歡喜充滿し、一切諸法體性平等無戲論三昧に於て、和雅美妙の辯、正しき言音辭句を以て而も歌頌を作し、諸の大衆をして悉皆普く聞かしむ。爾の時衆中の萬二千の忉利天子、心歡喜を生じ、種種の供養を設け、皆法の爲めの故に而も此に來り會す。爾の時德音王高樓上に在り、幷に後宮眷屬妃后婇女「と共に」安隱德比丘其の右臂を然し烱然たる紅焰遍く諸方を照すを見、見已つて心に是の念を作す、「此の比丘必ず神足を獲て乃ち斯の如き希有なる變現を作し、其の身命に於いて悋惜有ること無きなり」と。爾の時德音王、安隱德比丘の希有なる神變を見て心に愛樂を生じ淨信心及び自の善根力の熏資する所を以て、諸后妃八萬の婇女と與に、千肘の高殿より身を放つて投下す、此の菩薩比丘を見んと欲するが爲めなり。恭敬善根の力によつて[五六]現の果報を得、天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅摩睺羅伽の爲めに護持せられて墮落せしめず。天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅摩睺羅伽護持力を以ての故に、是の德音王及び后妃婇女高殿より墮すと雖も而も身心傷損する所無く疲れず怖れず。爾の時德音王、兩手に臂を抱き大號泣す、一切の大衆皆亦是の如し、安隱德比丘其の臂髆を然し瞻波花鬘の如

【五六】現の果報とは、順現受業の果報の意なり。順生受業、順後受業、不定受業等に擇べる語なり、卽ち順現受業とは現世になしたる善惡業の果報を現身に受くるを云ふ。

能く一切佛、過去の諸佛及び現在、及び未來の最勝尊に供[養]し、若し惡世に有つて禁戒を持たば、十方諸佛是の人を見ん、菩薩若し後の惡世に於て、清禁を持たば佛に歎ぜらる、是は爲れ我が子にして能く法を護ると。

〔五三〕爾の時佛、月光童子に告げ玉はく、乃往過去無數不可思議曠大阿僧祇劫、時に佛あり、號して聲德如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と曰ふ、童子よ。彼の聲德如來、無量不可思議數の衆生を阿耨多羅三藐三菩提に安置し諸の人天をして佛業を修せしめ已つて、然る後無餘涅槃に入り玉ふ。童子よ、是の時王有り、名づけて德音と曰ふ。彼の王、佛如來正遍知涅槃の後に於いて、聲德如來を供養せんが爲めの故に八十四千萬億の塔を起て、一一の塔の前に百千萬那由他の燈明を然し、一切伎樂香花寶鬘塗香末香を以てす、復た一切衣服寶蓋幢幡を以て皆諸佛如來を供養せんが爲めに塔所に置く、時に德音王、如來舍利塔所に於て獻じ供養し已る、會する滿八十百千萬億那由他大菩薩衆集まり已るや、一切の樂具を供給す、是の諸菩薩皆大法師たり、善能く說法し無量の辯才を得、善能く無量の諸法の眞實の功德を顯示す、童子よ、爾の時衆中に比丘あり、名を安隱德といふ、彼の會坐に在つて、年弱冠に在り、顏艷にして髮黑く、童眞賢妙の行に住し、曾つて色欲の樂を受けず、始め〔五四〕具戒を受けし〔五五〕初夏の時なり、・童子よ、爾の時德音王大菩薩衆を請じ、六波羅蜜菩薩藏大陀羅尼善巧方便自在無礙を滿足せんと欲するが爲めに、是の故に其の夜中に大菩薩衆を請じ佛前に在つて而も法會を爲す、時に百千萬那由他の燈皆悉く熾明にして、堂宇を掃灑し種種の花を散じ種種の妙衣を散ず、時に德音王、其の後宮妃后婇女と、及び輔相城邑の人民諸の眷屬と與に、衆くの伎樂を以てし、塗香末香花鬘衣服、寶蓋幢幡を執持し、悉く皆出し已つて佛塔を供養し已訖て、八萬の宮人と共に法を聽かんが爲めの故に皆高殿に昇る、爾の時無量の天人法を聞かんが爲めの故に悉く來りて集會す、爾の時安隱德比丘、百千億那由他の燈熾然とし

〔五三〕爾の時。以下梵本第三十三安隱德品、(Kṣemadatta.)

〔五四〕具戒とは、具足戒の略、比丘比丘尼の受くべき至極の戒なり、比丘は二百五十戒なり、即四波羅、十三僧殘二不定、三十捨墮、一百七十八波逸提、八提捨尼百衆學、七滅諍なり、二百五十とは暫らく大數を示せるのみ。

〔五五〕初夏とは具足戒を受けて始めて九十日の安居を爲す期間を云ふ。

良に愛欲に由るが故に、戒をして漏缺有らしむ、欲想[四九]を斷除し、不逸にして定を得。常に寂滅定を行じ、定味に著せず、著無うして放逸無く、世の所染とならず。世間を出過し、能く佛國に往詣[五〇]して、所謂安樂土において、彌陀佛に見ゆることを得。復た諸菩薩の、相を具足し莊嚴なるに見へ、彼の神通の岸、究竟總持門に到る。億の世界に往き遊び、頭面に佛足を禮し、復た能く照明と作る。無量の諸佛刹において。一切の患を遣除し、及び諸の煩惱を壞す、諸の結縛を斷除し、一生に佛處を補す。諸の衆生を安樂ならしめ、永く惡趣に墮せず、彼の國の諸衆生諸惡道を斷除す。彌陀救護者、佛世界を修治す、本不放逸を習ふこと、不可思議劫なり。汝等疑を懷くこと勿れ、彼の佛の自在力、(に就いて)能く增上信を生ぜば、速かに彼の刹に生ずることを得ん。女人聞いて國を歎じ、能く增上信を生ぜば、男子身と爲ることを得て、能く億の佛刹に往かん。那由他億刹の、所有諸の供具、悉く一切佛に供するも、慈の一切に及ばず。常に戒定、無量の禪解脱を修し、三解脱門[五一]を修して、速かに人中上と成る。末法惡世界中において、菩薩若し戒を持し、佛常悲身に供せば、此の供を最勝と爲す。是の人諸佛、過去及び現在、未來最勝尊を供し、惡世の持戒者なり。十方佛悉く見玉ふ、菩薩末法中において、佛の禁戒を護持し、善子能く護法す。女人聞いて彼の寶國を讃じ、若し增上の信樂意を生ぜば、便ち男子聰慧身を獲て、能く億の佛刹に往いて遊ぶ。那由他億佛刹中の、所有種種の供佛の具、悉く以て諸佛に供養するも、慈心の一少分に及ばず。禁戒及び三昧を修持し、幷びに諸禪[五二]、四無量を習ひ、亦た三種解脱門を修して、速に世の無上と成ることを得。諸佛常悲身を供養す、此の如く佛に供することは世に無比なり、若し菩薩有つて戒を捨せず、彼の末代惡世時に於て、是の人

【四九】想。底本相に作る、今は三本、宮、聖本による。

【五〇】詣。底本諸に作る今は三本幷に宮本に依る。

【五一】三解脱門。空三昧、無相三昧、無願三昧の三三昧を所得の果に約して三解脱門と云ふ。

【五二】四無量とは、一に慈無量、二には悲無量、三には喜無量、四には捨無量なり。無量に三義あり、卽ち、無量の有情を所緣となすが故に、從つて無量の福を引くが故に無量の果を感ずるが故なり、衆生を敎化するの心は無量なりと雖も四心を以て皆く一門を示すなり。

に能く渇愛を離れ、世の【四六】支提と爲ることを得。復餘の世界あり、大士悉く來集し、佛の功德、導師釋師子を讃歎す。若し音を聞くことを得ることある者は、能く世の【四七】導師となり、彼不思議を得、此の經能く顯示す。妙色の金蓮花、億葉にして稠密なり、最尊なる【四八】妙覺寶、此の蓮花臺に處し玉ふ。琉璃を莖葉となし、眞金を花鬚となす、德藏摩尼の間、衆億花を變作す。所出の諸の妙香、聞く者皆欣樂す、一切の病を滅除し、六根悉く悅に充つ。貪愛及び瞋癡、悉く皆一時に盡き、諸の煩惱を除き已つて、決定して成佛することを得。此の花妙音を出し、佛の功德を讃歎す、法と僧とにおいても亦た復た然なり、聲十方界に滿つ。空門と無相と、及び無願法、那由衆聞き已つて、皆不退を得。出す所の諸の音聲、遍ねく億の世界に往き、無量衆聞き已つて、菩提心を發す。鴻鵠及び孔雀、鸚鵡鴛鴦等、出ず所の諸の妙音[のうちにて]佛音を最も上となす。勝妙なる寶樹を以て、此の土に變現す、端嚴最第一たり、珠鬘以て垂布す。所有莊嚴具、一切諸佛刹、中に於て最も勝と爲す、而も此の刹に現ず。妙衣瓔珞具、樹に諸の樂音を懸け、妙花心を怡悅せしむるもの、一切恒に垂布す。是の諸の妙なる莊嚴、衆生安樂を得、釋迦住持し玉ふ所なり、聖神力に由るが故に。是の如き要略說、釋師子の功德、菩薩大名稱は、此の智に於て疑無し。若し能く此に於て信ぜば、其の行不思議なり、智慧を增長すること、川の海に赴くが如し。若し大海を量らんと欲するも、能く數を知ること無し、我菩薩の法を說くも、是れ皆不思議なり。難思の諸菩薩、此の如き際に安住し、美妙語を演說す、猶し恒河沙の如し。無量諸劫中、菩薩常に取[著]無し、若し取相を斷ぜば、菩提に近づくことを得るなり。假令法滅盡すれども、終に淨戒を毀らず、行に於いて殘缺無し、菩薩は衆の首なり。

【四六】支提(Caitya)。制多、制底等と譯す、中に舍利あるを塔婆と名づけ、舍利なきを支提と名づくとの說あり。又舍利の有無を問ふこと莫く支提と名づくとも言ふ。寶物、石等を積集して高く顯はし、以て佛の衆德を想はしむるなり。

【四七】導。底本は道に作る、今は三本及び宮本による。

【四八】妙覺とは、十信十住十行十地の四十位の階位を過ぎ、等覺を超へたる佛を云ふ。

に度すべき者を已に度しをはる。然る後能く變化し、無邊佛を化作して、往いて諸の世界に遊び、衆生を利益す。諸佛能く安立して、無量の諸の億衆のために、應化の諸如來、爲めに最勝の法を說く。此を眞の大乘と爲し、名づけて如來智と爲す、能く衆生の信を起すを、而も佛因を得と作す。此は是れ眞の大乘、〔四〇〕如來最妙乘なり、如來を恭敬し敬を菩薩に加ふ。佛に於て深く敬を加ふ、法と僧とにおいても亦た復た然なり、勝れたる菩提を證せんと欲す其の心下劣ならず。菩薩を敬奉し、勇猛者を尊重せば、速かに皆正覺に登り、久しからずして如來を成ぜん。千世界中に、菩薩悉く往詣して、牟尼尊に見え、菩薩畏るる所無し。諸の勝れたる寶〔四一〕物を以て、遍く大雄に散ず、糅ふるに〔四二〕蔓陀羅を以てす、菩提を樂求するが故なり。此の界を莊嚴す、佛の功德を求めんが爲めに、寶網羅を以て覆ひ、遍く十方に至る。諸の勝妙なる幡を懸け、億の寶幢蓋を建て、無量種の莊嚴もて、世界を光飾す。勝れたる臺閣、及び妙宮殿を變作す、廊廡盡く端麗にして、衆寶相ひ間錯せり。樓窓及び宮室、皆半月形に作る、幷びに雜香瓶等、皆妙寶飾を用つてせり。種種の諸馨物、悉く妙雲臺より出で、千世界中に於いて、香薰甚だ樂しむ可し。彼の普ねき香雲より、香花の雨を雨らす、若し之を嗅ぐ者あらば、佛大〔四三〕導師と成るなり。便ち愛の刺を去り、亦た復た瞋惱を除き、癡網を碎壞して、諸の闇冥を遠離す。勝れたる神通、及び〔四四〕根力覺、諸禪と解脫を獲得して、應に信施を受くべし。億の床座を敷置し、布くに衆くの妙衣を以てし、寶網羅をもて上を覆ひ、花鬘にて莊嚴す。無畏の諸菩薩、勇猛の大士坐せり、相を具せる莊嚴身、諸の隨形好を備へたり。諸の妙寶〔四五〕林を以て、此の界を莊嚴し、諸の花池を變作し、八功德水を滿たす。若し彼の水を飮む者は、一切の患を遠離し、速か

【四〇】乘。底本衆に作る、恐らくは乘なるべし。
【四一】物。底本末に作る今は元、明本に依る。
【四二】蔓陀羅(Mandārava)。悅意華、大白團華等と譯す。花の名なり。
【四三】導。底本道に作る、今は三本及宮本に依る。
【四四】根力覺とは、五根、五力、七覺のことなり、五根とは信根、精進根、念根、定根、慧根を云ふ。根とは能生の義にして信よく無漏の道を生ずる因となるが故に信根と云ふ、他の四根の根義是に準じて知るべし。五力とは信力、精進力、念力、定力、慧力なり。五根と五力を修行の位次に配すれば五根は忍位を云ふ心住して退かざるが故に世第一法を五力と爲す、深く煩惱を伏して親しく無漏道を生ずるが故なり。七覺支とは、一、擇法覺支、二、精進覺支、三、喜覺支、四、輕安覺支、五、念覺支、六、定覺支、七、行捨覺支なり。此の七覺支を修道に修して無學果を證す、以上の三皆三十七道品中に納めらる。
【四五】林。底本床に作る、今は三本及び宮本、聖本に依る。

又過去の諸の衆生を知る、　未來現在「の衆生に於ても」亦た復た爾なり。　含識の諸の生死を曉らめ悟り、　亦た復た未來を了達するに、　此より彼に向ふ者有ること無し、　其を推すに少分も不可得なり。　業既に彼に至らず、　之を求むるも亦た得難し、　菩薩大名稱、　能く之を解了す。　最勝なる淨心者、　空寂に安住し、　無上大乘を以て、　群品を運載す。　彼思惟し念ぜず、　衆生想存有することを、　彼の大名譽者、　能く無生法を悟る。　彼所說有りと雖も、　衆生想を取せず、　彼の境界は空なりと悟つて、　堅固智に住す。　此の三昧、佛法の所住を顯說して、　思想を起さず、　謂はく諸の男女等と、　諸女を觀察して、　道場に坐し、　道場に坐し已つて、　諸の魔軍を摧壞す。　魔に於て所見無く、　諸の魔衆を降伏して、　魔女の來りて、　而も我が所に至るを見ず。　道場に坐する時、　一切の想を遣除し、　諸想を斷ずるを以ての故に、　一切の大地動ず。　須彌及び大海、　十方も亦た復た然なり、　彼の十方界に於て、　悉く彼の衆生を知る。　菩薩つ神通力、　大地を震動す、[37]六種に震動す、　時に菩提道を證するを以てなり。[38]一切の有爲法、　及び無爲法、　是法悉く了達す、　但た說法の音のみ有りと。　能知者有ることなし、　此は是れ諸[39]佛の道なり、若し此の道を知る者を、　名づけて世間解と爲す。　因緣の故に法生ず、　因緣の故に法滅す、　因緣の體性、　如實に悉く了達す。　若し一切法を學び、　空法能く究竟せば、　便ち諸法の道を知り、　一切法を窮盡するなり。　彼の所行の法道、　菩薩求むれども得ず、　其の此の道を知ること有るもの、　正に不思議を覺る。　若し一切道を知れば、　便ち能く究竟を獲、　惡道を遠離し、　能く諸法の相を知る。　道場に坐し已つて、　大師子吼を作し、無邊億世界に、　言音悉く充滿す。　復た能く彼の刹を動ず、　世雄大名稱、　善く衆生を度する者を、　聖調御士と謂ふ。　已に上菩提を證し、　菩提樹を起つて、　無量諸億衆、　應

【三七】六種に震動とは、東涌西沒、西涌東沒、南涌北沒、北涌南沒等にして本文に前に說かれしが如し。六種震動は佛の入胎、出胎、出家、成道、轉法輪、入涅槃時の六緣によつて生ず。

【三八】一切の有爲法。一切諸法を大別して有爲法幷に無爲法となす。有部は七十二の有爲法、三の無爲法を立て、唯識教學にては、九十四の有爲法と、六無爲法を立てて萬法を攝す。

【三九】佛。底本法に作る今は三本幷に宮本に依る。

は、斯の定を得此の利を獲るに由るなり。不淨觀を以て愛欲を除き、慈心もて瞋を除きて餘あること無く、智慧もて無明の網を除斷し　此の妙定を獲て世間を照らす、睡眠及び懈怠有ること無く、煩惱を起すことを離れ及び地[を離る]、永く解脫を得て雜穢無し、斯の三昧を得て此の利を獲るなり。慳貪の爲めに逼られず、心常に人に惠施することを樂ひ、一切皆捨し悉く與へて樂しむは、彼の人能く三昧を持するが故なり。威勢を具足すること與に等しきもの無し、一切常に大身力有りて、一切世間に倫匹無し、菩薩勝定を持するに由るが故なり。亦た復た能く轉輪王と爲つて、七寶を具足して空に乘じて行き、彼の時一切悉く歸奉するは、是の智慧者此の報を獲しによる。最勝賢善豪貴の家、資生眷屬悉く豊かに備はり、象馬車乘及び輦輿、豐饒なる金銀あり衆寶を具ふ。恒に貴族豪富の家に生れ、是の如く展轉して勝處に生れ、佛法僧に深く信樂し、彼の處に生じて衆人に敬せらる。閻浮提內の不信の家も、悉く皆能く正信を生ぜしめ、能く菩提心を建立せしめ、亦た復た彼をして道果を得しむ。彼無上菩提を得已つて、無上妙法輪を轉ず、若し人彼の所說の法を知らば、悉く皆無生忍を獲得せん。菩薩常に慈を樂つて愛育し、悉く能く衆生を長養し、恒に無量の勝利益を爲し、衆生の眼を開いて闇冥を除く。若佛一りの菩薩を敎導せんに、無量百千億の衆生、彼悉く中に於いて善本を殖ゆ、聞き已つて卽ち菩提心を發すべし。彼の時刹土空虛ならず、智者佛法を奉持するが故に、佛子菩薩隨所に住し、廣く無量の衆生を利す。戒を護り無等に梵行を持ち、無量劫に於いて淨三昧[を修す]、禪解脫に於いて常に決定す、是の如き菩薩を佛子と名づく。彼常に勝神通を修習し、能く無量の諸佛刹に往き、如來所に於いて正法を聞き、隨所に聞き已つて悉く憶念す、若し總持に住する菩薩は、能く無量の修多羅を說く、

つが故なり。人の諸の彩色執持して、虚空に畫かんと欲するも得可からざるが如く、彼の人の心淨きことも亦た空の如くなるは、此の離垢寂定を持つが故なり。譬へば風の十方に行いて、遍く諸方に遊んで所著無きが如く、其の心流注すること猶し風の如く、世間に染まずして解脱を得。風行くこと速疾にして見る可らず、羂網もて繫縛すべからず、彼の人の志意深うして知り難し、此(ハ)離垢寂定を持つが故なり。壁上の光影は取る可らず、水中の像を指すも執る可きこと難し、三昧を得て身に在る時、能く彼の人の心を知ること有ることなし。十方世界の諸の衆生の、所有語言は猶算ふ可くとも、此の三昧を得て身に在る時、能く彼の人の心を知ることを得ることなし。是の如き寂滅定を得ば、其の心垢無く染著無うして、三界の衆生與に等しきものなし、惟だ諸佛三界尊を除く。貪愛の欲を離れて色に染せず、愚心を以て女人に著せず、是の如き勝れたる定を得たる時、勝れたる寂滅を獲て所染なし。彼の男女に於て戀情無く、妻妾及び眷屬に染せず、寂滅勝定を得る時、善寂の行にして所染無し。其の貨賄に於て寶とする所無く、天果を希はず財に著せず、其の心清淨にして妄想無きは、此の定を得勝益を獲るに由るなり。生天の爲めに梵行を修せず、智者は[三三]檀を行じて報を求めず、菩提の因の爲めに梵行を修するは、離垢寂定を得るが故なり。王位を求めず戒行を修し、多人爲此の梵行を修し、衆生を利せんが爲めに菩提を求む、專ら此の定を成就せんと欲するが故なり。[三四]諸欲已に棄て身惱まず、永く婬欲の事を悕求せず、婬欲及び慢高を斷除するは、是の如き寂定を得るに由るが故なり。[三五]彼常に瞋恚の爲めに惱まされず、瞋惱の穢心永く生ぜず、常に慈心を以て瞋怒を除くは、是の如き勝れたる寂定を獲るに由るなり。[三六]彼常に愚[癡]の爲めに心を蔽はれず、斯れ智慧もて無明を斷ずるに由る、無量無閡智を獲得する

【三三】檀は、檀波羅蜜の略布施のこと。
【三四】諸欲已に棄てとは、不淨觀なり。自身又は他身の不淨なるを觀じて諸欲を起さず。
【三五】彼れ常に瞋恚とは、慈悲觀を云ふ、一切有情を緣じて苦を拔き樂を與ふる想を爲すを云ふ。
【三六】彼常に愚云々とは、因緣觀なり。十二因緣を分別觀察して無明の生死の根元なることを明め、無明を斷破するをいふ。

王位を棄捨すること涕唾の如く、而も最上なる勝梵行を修す。勝れたる佛法に於いて出家し、此の寂滅離垢定を得、勝善なる美妙語を得、演說不斷にして多億を經。[二七]空無相願微細法、寂勝離垢にして諸漏無し、自性空寂にして語言を斷へたり、定を出でて能く多人の爲めに說く。甚深なる智慧常に無量なり、廣大なる智慧無邊の義、此の甚深三昧を得已つて、能く世間の爲めに照明とたる。常に梵行を修し恒に皎潔にして、諸の腥臊及び鄙穢無く、無量の衆生をして安住せしめ、寂定を得て諸垢を離れしむ。常に聰利にして捷速なる辯を得、多聞にして海の如き無量慧あり、語言善妙にして諸法に達するは、此の寂定なる勝經を持するが故なり。[二八]諸業及び工巧を了知し、[二九]因論及び醫方を曉め、彼れ一切勇健の岸に到るは、此の離垢寂定を持するが故なり。[三〇]諸の偈論及び戲笑に於いて、歌舞を善くし皆究竟し、常に世間の爲めに[三一]法師と作るは、此の離垢寂定を持つが故なり。常に上妙なる諸の眷屬有り、恒に一切上供養を得て、能く勝妙なる菩提行を修するは、此の離垢寂定を持つが故なり。憂惱毒箭心に逼切するも、彼の智慧者には此の患無し、恒に病疾無く常に安穩なるは、此の離垢寂定を持つが故なり。世間の所有諸の病患、一切の身患及び心患、彼の人には常に此の如き患無きは、此の離垢寂定を持つが故なり。所有身痛及び心痛、若しは有るは牙痛、及び頭痛、智者は常に是の痛惱無し、此の離垢寂定を持つが故なり。心に無量の餘の痛惱有り、其の意より起きて其の身を燒くも、彼れ一切の煩惱を起すこと無きは、此の離垢寂定を持つが故なり。猶し虛空の所染無く、自性無垢にして常に淸淨なるが如く、彼の人の心淨きことも亦た是の如くなるは、此の離垢寂定を持つが故なり。亦た日月の光明、其の光[三二]暗を破して常に淸淨なるが如く、彼の心淸虛なることも亦た是の如くなるは、此の離垢寂定を持

【二七】空無相願とは、空と無相と無願との三にして是を三三昧、又は三解脫門、三空等と稱す。多くの解釋あれども暫らく生死涅槃に就て記せば生死は虛無なるが故に之を名づけて空となし、涅槃の法は色相、聲相、香相、味相、觸相、生相、住相、滅相、男相、女相等の十相を離るるが故に無相と爲し、生死取捨の願心を遠離するが故に無願と云ふ。大乘義章第二卷を看よ。

【二八】諸業及び工巧とは、工巧明を云ふ。

【二九】因論とは、因明論のこと印度の論理學のこと。

【三〇】諸の偈論云々とは、聲明を明す。卽ち茲に記されたる工巧明、因明、醫方明、聲明、內明（佛教者は三藏十二分敎を、婆羅門は四吠陀を學ぶ）を五明と稱し、印度の學者必ず學修すべき所となせり。

【三一】法師。底本は師法に作る、今は三本宮本に依る。

【三二】暗を破す。底本は顚執と作る、今は宮本による。

種、彼の人に記を授く、及び後の末代に於いて、能く佛の菩提を護るなり。妙色皆具足し、相好自ら莊嚴し、神力もて速かに能く往いて、悉く無量佛に見ゆ。神力もて花を化作す、端妙にして甚だ芬馥たり、常に銀水精、及び諸の琉璃等を以てす。一切の諸の寶貨を、彼悉く掌中より出し、菩提を求めんが爲めの故に、一切佛を供養す。無量の諸の供養、音樂及び歌讃、自身の毛孔より出す、猶し恒河の沙の如し。億類の衆生等、若し是の音を聞くことを得ば、便ち不退轉を得、無上佛智慧を得ん。佛の爲めに讃歎せられ、普く其の名號を聞く、諸方其の名を傳へ、自ら亦た聞見することを得。若し其の名を聞く者は、一切想を滅することを得、既に其の想を滅し已つて、無量佛に見ゆることを得ん。是の如きの智慧、菩提行を行ず、諸の衆生を利せんが爲めに、故に菩提の德を求むるなり。彼智慧を行ずる者、是の如き利を得、復た餘の利益を得、能く此の經を持つが故なり。若し諸の婦女有つて、此の經を聞持するが故に、即ち[二六]女身を轉じて、能く甘露法を說かん。彼れ更に復た、是の如き女人の身を受けず、諸の妙色を具足し、相莊嚴を成就す。若し此の勝れたる經において、其の功德を顯示せば、悉く是の妙果を獲て、速かに菩提を證せん。常に一切生に於いて、無所畏を成就す、若し人此の經に於いて、菩薩の境界、無盡の勝れたる三昧は、一切菩薩の母なり、速かに菩提を證せんとする者は、應當に此の經を持すべし。彼れ佛に親近することを得、亦た佛菩提に近づき、久しからずして此の經に於いて、勝妙なる寂滅を獲べし。此の地は勇健者たる、菩薩の安住する所なり、見に世の燈明となつて照すこと、猶し恒河の沙の如し。能く大力轉輪王と作つて、佛十力寂定心に見え、無量百偈もて讃歎し、離垢地勝三昧を得。彼れ設し無等に佛を供養せば、大名號人中の上たらん、

【二六】女身を轉ずとは、女身轉じて男身となるを云ふ。女身は五障ありて佛道の器にあらざるが故に轉身するなり。法華經提婆品を見よ。

く、晝夜に恒に、百億の修多羅を演說す。一切の諸の煩惱、悉く習氣を斷じ、一切衆生所において常に平等心を起こす。百千三昧に於いて、無垢にして自在を得、大智慧を修習して、他の爲めに演說す。男女二根等、一切想を遠離し、非有想に安住し、能く眞決定を說く。淸淨智慧を以て、如實法を演說し、隨順法を稱ふ、定慧の境界なり。彼の諸定を修する者、爲れ滯る所有らず、常に眞實語を以て、說法して益せざること無し。彼れ善く人身を得て、一切の難を遠離し、能く諸佛の恩に報ふ、常に此の經を樂ふが故なり。彼れ無量劫に於いて、世間を棄捨し、若しは此の經典に於て、乃至一偈を持す。已に曾て諸佛に見え、數數供養を致す、此の經を愛づるを以ての故に、速やかに佛菩提を悟る。彼れ即ち諸佛に見ゆ、恒に耆闍山に在つて、悉く彼の人に記を授く、當に彌勒佛に見ゆべしと。彼れ彌勒佛に見え、若し末世時に於て、此の經を持する者は、上の愛樂心を得るなり。實際中に安住し、不思議を成就して、不思議際に於いて、諸の疑惑有ること無し。彼の人疑有ること無く、亦た微少の惑無く、佛語に於いて決定し、菩提得難きにあらず。末代怖畏の時、修行し得べきこと難し、若し此の經を聞くことを得ば、便ち無盡の辯を得るなり。此の經を愛樂する者、無上なる佛の法藏と、佛及び諸の聲聞を、彼れ便ち已に供養するなり。此の經を[二四]轉讀する人は、即ち是の法藏を持つ、一切供養中に於て、法供[養]を最も上と爲すなり。若し能く此の經を持せば、難思の佛菩提、謂はく佛の無上智、彼智も得ること難からず。若し先の佛世に於て、曾て此の經典を持たば、乃ち後の末代の時に、身還た此の經に遇はん。諸佛刹に詣り、彼れ便ち能く震吼し、大師子吼を作す、佛吼不思議なり。彼の億の佛所に於いて、釋師子の所作、能く無量辯を以て、無所畏を演說す。[二五]甘蔗功德

【二四】轉讀。經典を讀誦すること。即ち眞讀の意なり、高僧傳に『經を詠ずを則ち稱して轉讀と爲す云々』とあり。又經の初中後のみを數行讀みて經本を轉廻するを轉讀と云ふ。今は前者の意なり。

【二五】甘蔗功德種とは、釋尊のことなり。釋迦種族は甘蔗の苗裔なりと言はる。

に億劫中に於いて、無相法を顯現するが故に。一切有を觀察し、非有中に安住す、未だ嘗て異あることを見ず、亦た異無きことを見ず。假名と言說あつて、有無に非らざることを顯示す、然も彼の一切佛、有無の所見無し。〔一〇〕一切有爲法、非有を顯示す、若し能く此の法を見ば、便ち能く非有を見ん。常に所證有ること無し、畢竟有無きが故に、若し證すべき有らば、便ち名けて世間と爲す。若し是の如き心を作さば、我れ世に於いて成佛せん、此の有想を存することを作さば、終に菩提を悟らず。菩薩無畏者、法に於いて求むる所無し、自然にして煩惱無く、是を名づけて菩提と爲す。衆人是の言を作す、我れ菩提に趣くと、〔而も〕此の道を知らざるを以て、彼れ佛菩提に遠ざかる。音聲を以て說法す、一切〔一一〕諸行は空なり、音聲の體の自性、精微にして見る可らず。大神通を示す者、此の修多羅を說きて、諸の菩薩を利益す、諸佛の明す所なり。

彼の諸の對治を斷ず、謂はく諸の煩惱等なり、彼れ大神通に住して、善く四神足を修す。尸羅を獲得して、空に於いて則ち究竟し、神通に安住して、神足不思議なり。〔一二〕無願智に安住し、智を修すること善く清潔にして、智を求めて厭足無く、無量不思議なり。神通三昧中、〔一三〕任運無功用なり、是の報恒に空無にして、一切常に寂滅なり。是の報神足力もて、億の世界に往き遊び、佛に見えて世の燈明となること、猶し恒河の沙の如し。彼の人生滅に於て、心に隨つて自在なり、心自在になり已るを以て、其の身清淨なることを得。佛諸弟子中、若し神通力を修す、此の報に於て通する者に〔比して〕、十六〔分〕の一に及ばず。一切の諸天衆、彼の身を見ること能はず、惟だ佛世尊、及び其の同じく〔佛を〕得し者とを除く。彼の身諸の疾無く、亦髮白く皺、〔生すると〕及び羸れ虛しく老ゆること無く、臨終に苦切無し。彼れ疑滯及び、諸の迷惑有ること無

〔一〇〕一切有爲法。生滅變化する凡ての心法色法を指す。是等の心法色法は自性無きが故に次の句に非有と言へるなり。

〔一一〕諸行。行とは遷流の義なり、因緣より生ぜし一切の諸法は一刻も止ることとなく行捨遷流するが故に、其の相に從つて行と云ふ、先に註せる一切有爲法と云ふに同じ。

〔一二〕無願智。一切三界六道の生死法中に於て願求することなき正智をいふ。

〔一三〕任運無功用。特に意志にて努力すること無くとも、自然に自ら運ぶを云ふ。造作を假らざるなり。

得。能く前後際、及び現在とを見、是の如き義を演說し、中に於いて所說無し。假名和合の言、菩薩は是の如く知る、[一八]含識を利益すること、無量にして思議し難し。想者は義を測知す、能取を顯示するが故に、其の相取るべき無きは、便ち寂滅の義を示す。不寂は是れ想なり、寂滅は是れ智なり、若し想の自性を知れば、便ち諸想を離る。若し想の遣る可き有るは、是れ則ち還て有想なり、彼れ想の戲論を行じて、是の人想を離れず。若し人あつて是の心を作す、是の想は誰が造る所ぞ、是の想誰か能く證し、誰か能く是の想を滅すと。想を起すの法は、諸佛能く得ること莫し、即ち此の處有に於いて、我無く取著を離る。若し心不生ならば、何に由つてか想を起すことを得ん、若し心解脫を得ば、彼れ則ち起るに由なし。若し解脫を證すれば、心則ち不思議なり、心不思議の故に、不思議を成就す。我れ本是の念を作す、心地に安住し已つて、一切心を棄捨し、願ふて不思議を成ず。白淨法の果報、無爲を覩見す。一念に能く、一切衆生の念を了知す。[一九]衆生即ち是れ心、心即ち是れ如來、諸佛不思議、此の心を顯了す。若し人是の念を作す、云何んが捨心を得、無心を思惟し、能く一切の心を離れんと。若し死滅する時に於いて、心は想に隨つて轉ず、是の人思心を起さば、心をして解脫せさらしむ。愚は女想を存し、則便愛欲を起す、若し能く想を滅除せば、便ち能く愛欲無けん。若し無上法を思はば、是の思は最大の思なり、諸法を思ふを以ての故に、眞實心を獲得するなり。憶念すること窮はまり已むこと無く、長夜恒に攀緣し、諸の邪異憶想、思心極はむ可らず。心盡法者と名づけ、盡中本無智なり、
　智慧盡地に非らず、法無盡なるを以ての故に。假名語言の道、言を亡じて演說す、此の法差異無し、智慧盡くること有ること無し。不生亦不滅、相無く狀貌なし、常

本によりて本文に附せず。

【一八】含識。心識を有する者との意にして、六道の有情を總稱せる語なり。

【一九】衆生云々。の半偈華嚴經夜摩天宮品の心佛及衆生是三無差別と云へる天台の所謂三法妙の文と同一趣なり。

を震動して、勸めて菩提を修せしむ。諸の異論を降伏し、諸の外道に勝出し、大地、大海及び衆山を震動せしむ。變現して多身、種種の諸の雜類となりて、大智能く、百千の諸神變を顯示す。無量刹、猶し恒河沙の如きを震動して、彼の魔の輩を降伏して、便ち無上道を悟らしむ。復た妙なる樹、種種の寶嚴飾を化作し、花果奇にして茂盛し、芬芬として甚だ愛すべし。或は化して臺榭、樓觀及び宮閣を爲り、勇健爲めに變化し花池甚だ精明なり。[一二]八功德水を滿て、清冷にして穢濁無し、若し此の水を飮むこと有らば、悉く[一三]不退を得ん。能く無上智を得、世の導師となるに堪ゆ、無上寂滅道、行者應當に知るべし。此の道に達せざる者は、所謂是れ外道なり、若人彼に親近し、言教を受行せば、大惡處阿鼻に墜ち、救拔し難し。大極苦惱を受くること、具に論說すべからず、唯我れ能く[一四]之を知る、及び大勝の菩薩のみ。[之を知る]甚深にして觀るべきこと難し、愚なる凡夫地[の知る所]に非らず、謂はく取著に住する者は、此の法に於いて疑を生ず。勝れたる莊嚴、無量種の可愛なるを變作し、一切[衆生]悉く、無上なる諸佛刹に往くことを得。一切諸佛の土、皆諸の異色を現じ、菩薩の大神力、一切悉く能く現ず。大力大勇猛、堅勝なる鎧を被て、大[一五]金剛杵を執り、[一六]空法を摧滅す。自身の放出する所の、無數の大光明、其の數恒沙の如く、彼の世間の闇を滅す。彼れ女色に染せず、亦た彼に隨順せず、當に此の想を離るべし、女想は甚だ[一七]訶むべし。佛土は常に不空なり、勇猛の住する所たり、惡魔波旬等、嬈亂を爲すこと能はず。惡見に住する者は、諸佛に遇ふことを得ず、忿怒に制せられ、慳貪に安住す。彼は爲れ魔波旬なり、生天及び解脫、其の與めに障礙と作る、是の故に惡道に墮す。一切想を觀察して、遠離の想に住し、彼の人能く、諸佛無上智を知ることを

【一二】八功德水。八功德水は左の八德を具ふ水を云ふ。一には甘、二には冷、三には輭、四には輕、五には清淨、六には臭からず、七には飮むとき喉を損せず、八には飮み已つて腸を傷らず。此の水は極樂の池、幷に八海中にあり。八海とは須彌山の周圍を初として鐵圍山に至るまでの七山の間にある大海を云ふこと前に略註せしが如し。

【一三】不退とは、道行益々進みて如何なる境遇に陷るも決して退かざるを云ふ。是れに次の三種あり。一、位不退、一度び修得せし位を退かず。二、行不退、修する所の行法を退かず。三、念不退、一度び修せし正念を退かず。諸大乘教修道の階位の立て方不同あるが故に是が配當に異說あり。

【一四】之。底本は足に作る、今は三本、宮本、聖本に依る。

【一五】金剛杵(Vajra)。元と印度の兵器なり。金剛不壞の正智を以て煩惱の賊を破摧することを標す。

【一六】空法。玆に空法とは二乘の滯著する頑空を言ふ。本經の先に說く第一義空にはあらず。

【一七】訶。の下に底本烏故反とあるも、今は三本、宮本、聖

に非らず。是の法空處に於いて、愚者は妄分別す、分別を行ずる中、彼の人惡道に趣く。衆生は生老に遷され、流轉して窮り已むこと無し、生死中に沈沒して、苦惱量有ること無し。世間苦惱を生ずるは、愚の妄分別に由る、未だ彼の分別を斷ぜずんば、久しく生死に漂流するなり。初め樂ひ及び相應して、欲の果報に習著し、執取して未だ捨すること能はず、業煩惱に住するが故なり。衆生業盡きず、瀑流の欲に漂はされて、數數生を受けて、數數還て死滅す。無智にして魔の爲めに嬈ばれ、諸惡業を造作して、處處に生を受け、便ち諸の死報を感ず。凡夫は愚にして闇冥なり、而かも生死を獲て、貧窮にして楚を加ふること切にして、復た不善趣に向ふ。刀鞭杖等を以て、遞互に相加害し、此の惡事を造作して、諸の苦惱を增長す。我が子及び我が財と、凡夫は妄分別す、是の如く妄分別して、復た諸の有漏を增す。彼れ諸の生死を增す、是れを則ち凡夫となす、諸の〔一〇〕異趣に流轉す、故に名づけて凡夫と爲す。彼れ佛法を棄てて、諸の惡法を增長し、則ち解脫することを得ず、魔網に繫屬するが故なり。愚は愛欲に因るが故に、事に隨つて女色を穢がし、還て穢處に趣き、諸の惡道に墮す。欲染及び女色に近づくことは、佛の「讚」歎せざるところなり、此の怖畏の諸羂のうち、女羂最も畏るべし。菩薩は恒に遠離すること、猶し惡毒蛇の如く、常に女色に親しまず、是れ佛道に非らざることを知る。菩提道を修學すること、佛の本習せし所の如くし、佛道を修學し已つて、速かに無上道を成ず。彼れ最無上なることを得て、世の諸の廟塔と爲り、智慧過ぐる者無く、天中天と成る。他をして八戒に住せしむ、〔一一〕戒身垢染無く、無量の諸億衆を、勸めて菩提を修せしむ、衆の與めに利益をなし、一切悉く悲を起す、彼の健かなる智慧者、法鼓を擊つ。魔王宮と、及び魔の眷屬と、無量億の魔と

【一〇】異趣。六道のこと六道は前に註す。

【一一】戒身垢染無く云々とは、八齋戒なり、凡そ戒を受くる時は受戒と同時に防非止惡の功能卽ち無表色を發得するが故に戒身垢染無しと云ふなり。

と名づく、法身は卽ち正覺なり、是の如きを見佛と名づく。不得にして得を示し、不得にして得と說く、若し沙門を求めんと欲せば、應當に此の道を知るべし。我れ已に眞行を說けり、衆生の樂欲を知れり、若し祕密の教に入らば、彼れ便ち執著無けん。若し所證得ありと謂はば、彼れ便ち克る所無きなり、此は道果を得ず、故に沙門に非ずと名づく。斯法は甚だ深奧なり、此の說を作すも未だ達せず、彼の教甚だ淵玄なり、以て宣示す可きこと難し。五衆の事皆無なり、悉く虛妄より起る、能起者と、及び五衆法とは有ること無し。五衆の法の相は、卽ち一切法の相なり、佛は是の如き相は、其の相不可得なりと說けり。虛空には物無きが如く、諸法も亦た是の如し、前後及び現在、三際を如實に觀ず。言說は虛空の如し、空中に取無きが故に、是の如く法の體性、取無きこと虛空の如し。是の如き法を演說し、曾て所說あることなく、法に於いて所見無し、是れ乃ち不思議なり。此の法自性無く、法體不可得なり、佛菩提を會[得]すれば、定んで[八]滅の境界なり。若し能く是の如く知らば、法に於いて便ち著すること無し、若し能く法に著せずんば、彼の人法[九]相を了す。菩薩は一切時において、一切想を棄捨す、若し人想を棄てなば、佛法則ち無著なり。其の際取る可らず、是を名づけて實際と爲す、際を了達せば、億劫にも能く著せず。本際を妄分別して、愚癡は生死に輪[廻]す、十方遍く推求するに、本際は不可得なり。一切法は空なるが故に、菩薩は著する所無し、行を興すは菩提の爲めなるも、其の行は不可得なり。鳥虛空を飛びて、足跡不可得なるが如く、正覺性も是の如し、菩薩能く解了す。人の善く幻[術]を學んで、種種の物を幻作し、諸の色像を示現するも、而も實には不可得なるが如し。若し得と失とを取せば、彼れは便ち所得無し、其の智猶し幻の如く、卽ち其の幻に同じき

【七】五衆とは、五蘊卽ち色受想行識のことなり。舊譯にては五陰五衆等と云ふ。

【八】滅の境界。滅とは寂滅のこと涅槃を云ふ、卽ち證悟の境界、佛果を云ふ。

【九】相。麗宋本は想に作る今は元・明・宮本に依る。

を知らば、能く佛菩提を解するなり。彼れ若し此の法を悟らば、便ち[四]法輪を轉ずるなり、法輪を轉ずる時、則ち勝れたる甘露を暢ぶ。菩薩能く、無上佛菩提を解了し、無等尊たることを得て、他をして佛智を悟らしむ。無修及び無願、無相と謂はく空と、斯の如き四種の門、佛說いて解脫と爲す。眼耳及び鼻舌、身意諸根等、此皆體性空なり、[五]憍陳最初に見たり。若し能く此の法に於いて、如實に體性を知らば、諍論彼に便無けん、法相に了達するが故なり。謂く勇猛の境界なる、菩薩救護者には、悉く疑惑有ること無し、法の體[性]は空なりと了せるが故に。能く諸法の性に達す、故に名づけて佛と爲すことを得、量り難き法界を以て、應度者を覺悟せしむ。[六]諸佛の業を得るは、皆戒身に由つて造るなり、佛言と及び戒聲とは、皆同じく平等の相なり。已に諸の音聲を說けり、謂はく下中上音、平等にして悉く一相なり、佛能く法教を示せり。佛法は無所住なり、亦た諸方にあらず、不生亦不滅、是の故に無漏と名づく。新に非らず亦た故に非らず、散に非らず亦た合に非らず、青に非らず亦た黃に非らず、白に非らず亦た黑に非らず、說き難く取す可らず、言を藉つて乃ち昭暢するも、此は音聲地に非らず、諸佛の巧智通ず。彼は是れ無漏法なり、是を無所依と說く、十方所に在らず、是法佛の所說なり。佛の滅度後に於いて、佛の身相を思念し、卽便佛身を覩る、佛の神力を以ての故なり。竟に衆生の、寂滅を證する者有ること無けれども、此の法を說く時に、無量の衆[生]滅度を得。譬へば彼の日月の、影を百川に現ずるが如し、皆其の像貌を覩る、諸の法相も是の如し。若し諸法性を知れば、猶し諸の影像の若く、終に色身を以て、眞佛を觀ることを得ず。諸法は無形相なり、狀を求むるに不可得なり、是の如き無形の法、卽ち是れ佛の法身なり。若し人法身を見ば、是を導師を見る

【四】法輪を轉ず。印度にては聖王世に出現せば空中に自ら輪寶現じて轉ずと信ぜらる。佛の出世し說法さるることは希有なるが故に是に因みて佛の說法さるるを法輪を轉ずと云ふ。

【五】憍陳(Kauṇḍinya)。釋迦菩薩出家の初め父王の命によつて外護の任に當らしめんとして遣はされし五人の隨一なり。釋尊成道後鹿野園の最初の說法に於いて空理を悟りしは實に彼れにして、從つて多數の佛弟子中最先の契證者なるが故に今此の語あり。

【六】諸佛の業とは、諸の佛が衆生教化の爲めに垂れらるゝ身口意の三業をいふ。

巻の第七

[1]童子よ、菩薩摩訶薩の若きは、應に常に樂つて神通本業を修すべし。云何が菩薩摩訶薩の大神通本業なりや。謂はく一切善法を攝し、[2]戒聚に取せず、定聚に著せず、智慧聚に於ても亦戲論ならず、解脫、解脫知見の聚にも亦た取著せざるなり。童子よ、是を菩薩摩訶薩の大神通本業となす、若し神通本業を成就して、大神通を得たる菩薩摩訶薩は、一切に於いて變現自在にして、便ち能く一切の衆生の爲めに法を說き、攝大乘となるが故に、是の菩薩大神通本業に於いて應に常に修學すべし。爾の時に世尊、偈を說いて言はく、

神通本勝業は、　果報無きことを顯示す、　果を悕ふて諸行を修するものは、　我想を取して除かず。　言ふ所の神通とは、　佛智の不思議なり、　若し取著に住すれば、　彼の人智慧無きなり。　不思議の諸法は、　音聲にて顯示す、　若し音聲を執すれば、　方便說に違せざるなり。　方便教を曉めざれば、　方便說を知ること靡し、　法說に非らざるを法と爲す、　法に於いて寧ぞ覺了せんや。　三千世界中、　我れ時に　[3]諸經を說く、　義は一にして種種味なり、　彼れ悉く不可說なり。　所有十方佛、　無量の法を顯說し、　一句義を諦思して、　便則一切解をなす。　一切法は無我なり、　若し人此の義を學び、　彼れ時に一句を習はば、　佛法を悟ること難からず。　諸の法は是れ佛法なり、　若し人此の法を學び、　如法に解了せば、　便ち空法に順ぜん。　諸語は是れ佛語なり、　一切聲事無し、　遍く十方に求むるに、　佛語は不可得なり。　佛語は最第一なり。　佛語は無過上なり、　微細の事悉く無し、　是を語の最上となす。　彼の法は最無上なり、　顯現して斷絕せず、　微塵許りも得ること無しとは、　諸佛の所說なり。　諸法は不可得なり、　法の證すべきあることなし、　是の如く法

【一】童子よ。宋・元・明三本は以下第八巻なり、梵本は第三十二經受持利益品、(Sūtradhāraṇānuśaṃsā.)

【二】戒聚に取せず。戒、定、慧、解脫、解脫知見の五を五分法身と云ふ。今は五分法身に取著せざるを菩薩の神通本業なりと說く。

【三】諸經を說く。宋・元・明三本幷に宮本、聖本には此の次に諦思一切義以下二頌八句あれども、今は底本によりて是を省く。

久しからずして人中の勝とならん。　我れ寂なる境界を求めて、　千億僧祇劫、　勤精進を捨てず、　[七〇]然燈[佛]の授記の爲めなり。　智[者]は應に是の經を行じ、　勝れたる諸の佛法を說くべし、　外道愚癡の失は、　命終して地獄に煮らる。　苦を受くること最尤劇し、　那由劫にして乃ち盡きん、　多劫にして畢く罪已つて、　甘露の因を爲すことを得て、　末代怖る可き時に、　無上道に近づき、　我が法藏を護持す、　彼是の經を持することを記す。

【七〇】 然燈(Dipaṅkara)。然燈佛は生まるる時、一切の身邊明かなること燈の如くなりし故、此の名あり。釋迦菩薩、且つて五莖の花を求めて然燈佛に獻ぜしに、佛授記して曰く、汝九十一劫の後佛と作りて釋迦如來となるべしと云々。と瑞應經上卷に記さる。

を顯はす、畏るること無うして法を學ぶが故なり。事に於いて想を取らず、愛憎悉く取せず、法は常に空寂なることを知れり、勝れたる寂滅を得るが故に。若し此の勝れたる定を說かば、久しからずして菩提を見、聖境に善く了達し、是を施して多報を獲ん。億の修多羅を說きて、演ぶる所滯礙無く、辯才斷絕せず、法を知ること廣大なるが故に。若し人不思劫、定慧猶雲の如く、法を說きて窮盡無きは、此の寂定を知るが故なり。辯才不思議、道を求むれば必ず能く得、無邊億の經を說いて、法の相名を知ること遍し。佛無上の法を說き、聞持して充滿せしめ、中に於いて疑惑無く、法は悉く非有なりと知らしむ。愛語にして常に施を行ひ、善く捨して貧を拯ひ、樂つて「貧者をして」資生「の具」を悉に充足せしむ、世間を悲愍するが故なり。當に閻浮王と作るべく、衆を愍んで瞋恚無し、衆人慈敬を起す、空法を知るを以ての故なり。端正の妻も男も女も、王位と身と皆な捨し、決定して悋悔無きは、空寂を知るを以ての故なり。若し人支節を割くことあるも、夢寤にも都て瞋無し、曾て無量の佛を供「養」す、空法を持するを以ての故なり。牟尼日を供養して、三世にわたりて疲倦無し、大信心不動なるは、是れ空法を知るが故なり。善く佛の法藏を持ち、勝れたる陀羅尼に住して、久しからずして成佛することを得るは、勝れたる經を持するを以ての故なり。世世に聾盲とならず、曠劫に諸根を具し、八難常に遠離するは、心を係けて此の經を說くによる。福を爲して惡道を離れ、端正の相莊嚴す、心淨くして神通に住す、斯を以て佛現前するなり。種種の[六九]應化の身もて、諸刹に衆生を度す、若し彼に見ゆることを得ば、菩提の意決定せん。智念憂無き者、精進の勢力起きなば、勝法中において究竟することを得ん、末世に經を持するが故に。身千億光を出し、其の光日月を蔽ふ、若し空定を修習せば、

【六九】應化身。佛が所化の有情に應同して身を現じ度生さるるを云ふ。卽ち、法華經觀音普門品に於ける三十三應身の如し。

滿せしめ、自ら食することを欣ばずして他に施すことを喜ぶは、善業の人[六六]寂定を持するが故なり。多くの百千の諸天に愛され、夜叉・修羅・龍恭敬す、獨り林中に處するを守護するは、勇猛に是の勝定を持するが故なり。樂つて寂靜[處]に在つて音聲を離れ、龍阿修羅恒に親覲し、一切能く怖畏する者無きは、不放逸にして定を持つを以ての故なり。其の聲猶し梵天の音の如く、又衆鵜の樂む可き聲の如く、亦た五百の美妙の音の如く、名聞遍く諸世間に彰はる。大地の所有諸の微塵、功德は彼の微塵數に過ぎたり、衆生を利益する功德藏は、是の如き寂定を修するを以ての故なり。

[六七]童子よ、菩薩摩訶薩心に樂欲を生ず、我れ一切法の自性云何んが知ることを得んと。童子よ、菩薩摩訶薩は此の三昧に於いて應當に受持し讀誦し他の爲めに廣說し修習し方便相應すべし、一切衆生を攝せんが爲めの故に。爾の時に世尊即ち偈を說いて言はく、

智者は恚愛無く、又愚癡を起さず、煩惱悉く微薄なり、勝れたる寂法を知るが故に。佛の戒を缺犯せず、女色において縱逸ならず、堅心に是の定を求むるは、法を知り塵垢を離るればなり。智慧及び神足をえ、佛を觀て多刹に詣し、總持ありて彼岸に到る、寂定を知るを以ての故なり。速かに兩足尊と成り、寂として煩惱を治せんが爲めに、善く惡毒の箭を拔き、無垢寂句を說く。若し人良醫とならば、善く病の起由を知る、此を學んで智決定すれば、衆生を害より解脫せしむ。理を學んで自在を得、著無うして供養に堪へ、衆[生]を無悕望[の境]に安く、淨法を解知するが故なり。人師子は忍辱なり、打ち罵らるるも瞋恚無く、屠割せらるるも惱まず、能く陰は空なることを知るが故なり。忍力須彌の如くなるも、都て忍を計する想無く、乃し佛に至るまで[計想]存せず、[六八]有は常に空なりと知るが故なり。三界無量の想、三世悉く了知し、能く理の無量

【六六】寂。底本直に作る、今は三本に依る。

【六七】童子よ。以下梵本第三十一、說示一切法自性品、(Sarvadharmasvabhāva-nirdeśa.)

【六八】有とは、三界のこと。三界の諸法悉く因緣によつて成れるものなるが故に、諸法現存せるままにて空なるが故に斯く云ふ。自性なきを空と云ふこと先に本文に說かれたるが如し。

し、決定して彼の安樂國に生ずるは、是の如き三昧を持するを以ての故なり。假令一切衆生類、一時に成佛し盡して邊有り、其の中の一人[をも漏すなく]咸く供養し、復た恒河沙數劫を過ぐるも、若し後世末代時に於て、是の定を聞くことを得し無諂の人、能く是の定に於いて隨喜を起さば、前の功德に過ぐること非分の數なり。童子當に知るべし寂滅道は、是れ第一義空三昧なり、若し書し讀誦し受持せば、是の人を名づけて法藏を持つと爲すなり。

〔六四〕童子よ、是の義を以ての故に菩薩摩訶薩、若し一切衆生の言音を知り、及び一切衆生の諸根差別を知りて、前後同じからず應に說法すべきことを欲せば、童子よ、彼の人此の三昧に於いて應當に受持し讀誦し廣く人の爲めに說くべし、又一切衆生を攝せんが爲めの故に應當に修習し方便相應すべし。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言はく、

若し人曾つて無量佛に見え、亦た曾つて是の三昧を諮問せば、是の勝智の人此の定を持して、第一善に住して動ぜず。人天の上妙樂を得、常に他人の勝れたる供養を得、又禪定涅槃の樂を得、是れ不放逸にして定を持するが故なり。他の讚ずることを聞き已つて欣を生ぜず、若し罵辱を被むるも亦た恚無く、〔六五〕八法に動ぜられざること猶し山の如くなるは、解脫を樂求して定を持するが故なり。口初より無義の語を說かず、瞋と傲慢と及び諍論を離れ、忍辱にして心を調伏して歡喜するは、不放逸にして定を持するに由るが故なり。其の言柔軟にして諦らかに審實なり、舒顏和悅して先づ慰問し、諸の衆生を見るに常に笑を含むは、勝淨なる三昧を持するを以ての故なり。心常に調伏して他を惱まさず、善く五根を攝して戒を持すること淨く、實に住し少言もなほ利あり可愛なるは、淨勝なる三昧を持するを以ての故なり。常に捨し廣く施して悋心無く、飢渴の衆生をして飽

【六四】童子よ。以下梵本第三十利益品、(Anuśaṃsā.)

【六五】八法。前に註す。

か故なり。能く自身に於いて高擧ならず、他人の所に於て輕毀せず、心常に柔軟にして禪定を樂ふは、是の如き三昧を持するに由るが故なり。常に自ら己が所行を觀察し、他人の闕失せる所を見ず、衆と和顏にして違諍すること無きは、是の如き三昧を持するに由るが故なり。悲心恩潤にして清淨慧なり、邪を離れ正直にして諂曲無く、意恒に柔軟にして解脫を樂ふは、是の如き三昧を持するに由るが故なり。心常に布施行を行ふことを樂ひ、慳悋の結染すること能はず、境界の爲めに攝錄せられざるは、是の如き三昧を持するを以ての故なり。端正殊特にして人喜樂し、其身の皮膚眞金色にして、三十二相（六三）以て莊嚴するは、是の如き三昧を持するを以ての故なり。色相功德悉く端妙にして、多くの人愛敬して恒に守護し、男女大小觀て厭くこと無きは、是の如き三昧を持するを以ての故なり。諸天龍神夜叉衆、是の人に於て悉く歡喜する所なり、家家に往詣するに皆讃歎するは、是の如き三昧を持するを以ての故なり。梵王帝釋自在天、并に餘の一切來つて供養す、其の心都て我慢を起すこと無きは、是の如き三昧を持するを以ての故なり。彼れ一切の諸の嶮徑を離れ、障難惡道の畏有ること無く、一切恐怖の事を解脫するは、是の如き三昧を持するに由るが故なり。能く佛の微妙の法を說くを聞いて、復た一切の諸の疑惑無く、甚深の法に隨順趣入するは、是の如き三昧を持するを以ての故なり。若し賢聖の微細の法を聞いて、悉く能く解了し究竟を得るは、過去の因緣力に由る、是の如き三昧を持するを以ての故なり。如來是の如き言を說くに、善く利養を得心擧ならず、是の因緣を以て總持を得、斯は是の三昧を得るに由るが故なり。是の人命終せんと欲する時に臨んで、悲慧雄猛の彌陀佛、是の佛爲めに現に其の前に住するは、是の如き三昧を持するを以ての故なり。十力に見ゆることを得て求むる所稱ひ、及び諸の聲聞其の前に住

【六三】三十二相は法身の衆德圓極して、外相に現はれしものなり、卽ち一、足安平相、二、千輻輪相、三、手指纖長相、四、手足柔軟相、五、手足縵網相、六、足跟滿足相、七、足趺高好相、八、腨如鹿王相、九、手過膝相、十、馬陰藏相、十一、身縱廣相、十二、毛孔生青色相、十三、身毛上靡相、十四、身金色相、十五、常光一丈相、十六、皮膚細滑相、十七、七處平滿相、十八、兩腋滿相、十九、身如獅子相、二十、身端直相、二十一、肩圓滿相、二十二、四十齒相、二十三、齒白齊密相、二十四、四牙白淨相、二十五、頰車如師子相、二十六、得味中上味相、二十七、廣長舌相、二十八、梵音深遠相、二十九、眼色如紺青相、三十、眼睫如牛王相、三十一、眉間白毫相、三十二、頂成肉髻相。

護衛せらるるは、是の如き三昧を持するを以の故なり。火と毒[等]の爲めに傷られず、一切の刀杖も能く害すこと莫し、大水中に入るも漂溺されざるは、斯れ是の三昧を持するに由るが故なり。是の人恒に山林中に住して、諸天等の爲めに給侍せられ、夜叉無量來つて供養するは、是の如き三昧を受持するが故なり。智慧廣大にして巨海の如く、佛の功德を說いて障礙無く、諸佛の眞實の德を演暢するは、是の如き勝れたる定を持するを以ての故なり。是の人の所聞窮り盡くること無きは、猶し虛空の邊有ること無きが如し、智慧の炬を執つて闇冥を除くは、是の人是の三昧を持するが故なり。柔軟美妙なる應義の語、衆に處して演說するに智者に愛でらる、說くこと泉河の澍いで竭くること無きが如くなるは、是の如き三昧を持するを以ての故なり。猶し醫王の良藥を施すが如く、又衆生の與めに歸舍となり、能く世間の爲めに光明となるは、是の如き三昧を持するを以ての故なり。是の人愛欲心の爲めにせず、寂滅を樂つて禪の樂を得、寂靜なる美妙の言を說くは、是の如き三昧を持するを以ての故なり。是の人相を離れて意染せず、一切相に於いて悉く簡擇せず、心常に寂靜にして經行するは、是の如き三昧を持するを以ての故なり。彼れ無垢なる離垢眼を得、能く無量の諸如來に見え、丈夫眼廣くして無邊なるを得しは、是の如き三昧を持するに由るが故なり。孔雀の美音寂靜に應じ、迦陵頻伽悅意の聲、諸樂合和して妙響を出すは、是の如き三昧を持するに由るが故なり。雷霆の聲遠く震ふこと成就し、衆の鵝鐘鼓の美妙なる音、美く百種の勝伎樂に合するは、是の如き三昧を持するを以ての故なり。無量無數僧祇劫、是の如き和雅の音を成就し、說く所の語言甘露の如くなるは、斯れ是の勝れたる三昧を持するに由る。餚饌飲食を貪嗜せず、衣鉢中に於いて著を生ぜず、少欲知足にして善く調柔なるは、是の如き三昧を持するに由る

ん、備に無量の諸の苦事を經たるは、是の如き三昧を求めんが爲めの故なり。我れ今汝童子に勸進す、汝我が言に於いて重信を生ぜよ、善逝終に實說せざるなし、大悲は實語す佛は最勝なり。其の餘の苦事百千種、我れ昔具に受けて身、乾き竭くすまでせり、云何が能く是の三昧を得るやとならば、若し得るときは人の百千の苦を脫することを得るなり。刹那中に此の定を證せば、便ち眞實なる智慧道を獲るなり、我れ時に佛、那由他十方恒沙數に過ぎたるを見ん。如意勝神足を獲致め、能く百千の諸の佛刹に往いて、彼に詣して最勝尊に請問し、論難莊嚴すること百千種す。時に佛我が宣說する所の爲めに、向きに問難せし所の如に酬答す、我れ悉く能く具に領し納受し、乃至一字句をも忘れず。旣に是の眞實法を聞くことを得て、廣く無量百種の難を設け、遠塵寂靜句を敷演し、無量衆を智慧道に安く。我れ是の如き勝れたる三昧に住して、無量劫に於いて此の法を學び、昔日無量の諸の衆生を、亦た無上最勝道に置けり。若し人本來佛を見ず、此の勝法を未だ曾て聞かずんば、彼れ終に、第一義空眞實定（六〇）に信樂を生ずること能はず。其れ智人能く解了すること有らば、甚深なる眞實の德を得て、第一義を聞いて驚怖せず、聞き已つて上歡喜心を生ぜん。彼彼に能く我が菩提を持するものは、即ち是れ如來の眞の佛子なり、希有にして猶優曇花（六一）の如く、我れは爲れ多劫に苦行を修せり。彼の人惡道に墮することを畏れず、常に八難（六二）を遠離することを得、當に無量那由の佛を見、亦た能く是の勝三昧を信ずべし。彼の彌勒獨りにして侶無く、衆生所に於いて淨智を得、是の三昧經彼の手に在るが如く、我れ爲めに授記すること彌勒の如くせん。是の人念智慧を成就し、聞持究竟して道增上し、辯才をえ寂を樂んで憂惱無きは、是の定彼の人の手に在るが故なり。是の人常に天の供養を得、又衆人の爲めに禮敬せられ、恒に鬼神の爲めに

【六〇】第一義空眞實定とは、此の經の眼目にして諸法體性平等無戲論三昧と云ふに同じ。即ち一切諸法は體性空寂にして如幻如夢なりと體得する禪定をいふ。

【六一】優曇花(Udumbara)。優曇波羅、靈瑞などと云ふ、三千年に一度び現じ此の花現ずる時は金輪聖王出世すと云ふ。

【六二】八難。道行を修するに障礙なる所を云ふ。一、地獄、二、餓鬼、三、畜生、四、盲聾瘖瘂、五、世智辯聰、六、佛前佛後、七、鬱單越國、八、長壽天。以上の八は四義あるが故に聖道を礙ふ一には苦甚しきが故に、二、樂多きが故に、三、惡增大なるが故に、四、善微少なるが故なり。地獄・餓鬼・畜生の三惡趣と盲聾瘖瘂とは苦に礙へらるる難所なり。鬱單越は樂に礙へらる、世智辯聰は惡增大によつて障へらる、佛前佛後に生を稟くる者は善微なるが故なり。以上を八難と云ふ。具には淨影大乘義章第八末を見よ。

きは、是の如き勝れたる定を求めんが爲めの故なり。奴婢財穀百數を過ぎ、種種の衣服及び飲食を、一切の來り求むる者に充滿す[る如く施すは]、是の如き勝れたる定を求めんが爲めの故なり。摩尼眞珠勝れたる金銀、琉璃金剛錢貝玉、所有一切悉く能く捨するは、是の如き勝れたる定を求めんが爲めの故なり。我れ珍寶嚴身の具、瓔珞臂印師子條、天冠寶網百種を過ぎたるを捨するは、是の如き勝れたる定を求めんが爲めの故なり。微妙なる上[五五]服多きこと百億を、我れ時に歡喜して施與す、[五六]劫貝[五七]鉢咄[五八]獨拘羅[を施すは]、是の如き勝れたる三昧を求めんが爲めなり。昔貧窮及び繫閉、役力と名けらるるものの求めて獲ざる苦に、我れ彼の所に於て能く廣く施すは、是の如き勝れたる三昧を求めんが爲めの故なり。象馬牛羊[五九]幷に屋宇、園苑車乘寶もて莊嚴せるを、我れ百千の貧なる乞者に施すは、是の如き勝れたる三昧を求めんが爲めなり。億那由他の林園苑を、衆寶もて莊嚴して施與し、施す時に歡喜して悲心を起すは、是の如き勝れたる定を求めんが爲めの故なり。王都城邑及び聚落、種種の土地悉く皆捨して、施し已つて能く增上の喜を生ずるは、是の如き勝藏を求むるが爲めの故なり。一一の寶聚須彌の如く、嚴身の上服も亦た是の如くなるを、我れ悉く貧しき乞者に施與するは、是の如き勝れたる定を求めんが爲めの故なり。無量の諸の貧窮を富足せしめ、我れに歸趣する者の救護を爲し、苦惱の衆生をして樂を得しむるは、是の如き勝れたる定を求めんが爲の故なり。昔大地[上]に於いて我れ最も富めり、諸の世間の極めて苦惱せるを見て、王位と諸の所有せるものを棄捨し、悲心を盡して彼に樂を與へんことを願へり。童子よ我れ昔希事をなせり、無量劫中難しとなせし所にして、言說の陳ぶる所にては能く盡すこと無し、億劫のあいだ我說くとも倘窮め難し。我れ若し說く所あらば衆迷惑し、佛の所行に於て能く信ずること無け

[五五] 服。底本は勝に作る、今は三本に依る。
[五六] 劫貝(Karpāsa)。時分樹と譯す。此の樹の絮を以て白氎を作る。梵僧の用ふる白氎を云ふなり。
[五七] 鉢咄(Paṭṭu)。絹の大幅にて條相なきもの、裙に用ふ。
[五八] 獨拘羅。紵布を云ふ。
[五九] 幷。底本白に作る、今は三本に依る。

ては、增長加說すること百千種なり。童子よ汝今我が說を聞いて、此の人輩に親近すること勿れ、若し菩提道を求め證せんと欲せば、乃し夢中に至るまでも往返すること莫れ。頭陀行中の無量の德を、無邊劫に於いて演說すとも、是の如き德に安住せずんば、終に勝菩提を得ること能はず。其の心清淨にして恒に善語し、戒淨にして心柔に言美妙、諸の尊長の所において常に淨心ならば、久しからずして便ち是の三昧を得ん。我慢に從つて穢惡を生ぜず、其の心清淨恒に成就し、憍恣及び瞋恚を棄捨すれば、能く是の如き勝三昧を得るなり。常に諸佛の功德聚と、皮膚金色無量の德と、佛身の諸相自ら莊嚴し、秋夜靜かにして衆星の列るが如くなるを念ず。勝れたる蓋幢幡及び帳幕、塗香末香并に花鬘をもて、衆く勝れたる[是の如きもて]無等像を供養せば、久しからずして能く此の三昧を得べし。栴檀沈水及び末香、勝れたる蘇油燈無量種を、持つて恒沙の佛の[五二]塔廟を供[養]すれば、久しからずして便ち是の三昧を得ん。琵琶箜篌鼓の妙音、簫笛鐃吹及び讚歎、種種の美音百千萬もて、離惡最勝尊を供養し、無量の佛の形像を造作し、衆寶を善巧に彫飾し、[五三]殊妙端正最勝上にせば、久しからずして便ち是の三昧を得ん。常に林藪に處して寂靜を樂ひ、聚落を棄捨して著心を離れ、獨りにして無二なること猶し劍のごとくなれば、久しからずして便ち是の三昧を得ん。我れ法王と作つて汝を子となす、隨順して我が三昧行を學べ、我昔彼の大名稱を得て、其の名を號して堅固王と曰へり。我れ本無量の佛を供養し、恒に願ふて清淨戒を護持し、十力所に於いて恭敬を起したるは、是の如き勝定を求めんが爲めの故なり。我れ本昔妻子を棄て、頭手足及び眼耳を捨て、未だ曾つて彼の下劣の心を起さざりしは、勝れたる寂なる三昧を求めんが爲めの故なり。[五四]象馬車步無量種、珍寶宅舍一切を施して、其の心初より悔恨有ること無

【五二】塔廟(Stupa)。塔婆又は廟、方墳等と譯す。佛の遺骨、佛の遺物等を奉安して、其の德を顯はさんが爲めに高く築く、故に高顯とも云ふ。

【五三】殊。底本は姝に作る、今は三本に依る。

【五四】象馬。象兵、馬兵、車兵、步兵は四兵と稱して諸王の常に備ふる所なり。

八十億那由衆とともに、歡喜信敬して佛所に詣れり。時に王は人中の雄を頂禮し、大信心を以て佛を恭敬し、敎を受けて退き一面に住在し、瞻仰敬心して指掌を合せり。佛は彼の王の淳淨なる行と、根識自在にして【四八】彼岸に到るを知つて、世尊應に其の心の樂欲に應じて、爲めに是の如き勝れたる三昧を說き給へり。是の王第一義を說くを聞いて、廣く歡を發して善く聖を信樂し、一切四天下を棄捨して、【四九】五欲の樂を離れて出家せり。彼の王是に因つて出家し已つて、佛に於いて決定して深く愛樂せり、時に閻浮提の一切の人、咸く皆欲を捨てて出家せり。比丘及び尼樂つて定を習ひ、如來の徒衆廣く無量なり、粳糧自然に地より出で、諸天悉く來つて給侍せり。【五〇】袈裟法服樹より生じ、無垢清淨にして甚だ可愛なり、割截縫治量法に依る、彼の佛の功德威力の故なり。童子よ汝當に彼の王を觀ずべし、捨家出家して天下を棄て、彼の三界は機關の如しと觀ぜしは、廣大なる菩提の樂を求めんが爲めなり。來世法末の時に當つては、彼の貧賤の家すら捨すること能はず、杻械枷鎖に困苦する者、此の勝法に於いて信を生ぜず。枷繫杖策の罰、罵詈毀辱百千種を被むり、王力多く迫ると雖も悉く能く忍び、困苦にして貧極まれども家を捨てず。【五一】資財乏少にして壽短促、徒勞に辛苦して福報無く、愚癡にして諸の伎能を學ばず、是の人常に凡俗の地に居せり。迫り脅かして無義に頑に暴惡[を行じ]、貪惜にして自ら富んで人の財を奪ひ、調戲笑弄して善人を毀り、自ら已に菩提心を發せりと稱す。他人の妻を愛して資產を奪ひ、慳嫉狡猾にして多く縱逸なり、悲愍の心を離れて惡道に趣き、亦た自ら我れ作佛すと稱言す。他の苦惱を見て欣悅を生じ、戒を破り暴虐にして惡心を懷き、報恩を念とせず、他の大德の我が爲めに法行を說くを破壞す。他彼の菩提行を說くを聞いて、反つて其の人に於いて瞋恚を生じ、若し法師の少かなる過失を見

【四八】彼岸とは、迷の此の岸に對して悟の果を彼岸といふ。

【四九】五欲とは、眼・耳・鼻・舌・身の五根の色・聲・香・味・觸に對する欲望を云ふ。

【五〇】袈裟(Kāṣāya)。法衣不正色・染色衣等と譯す。諸の草木の皮葉、花等の食す可らざるものを採りて染料として衣を染むるが故に不正色又は染色衣と言ふ、是に五條衣・七條衣・大衣等の別あり、先の註三衣を參照せよ。行事鈔下一に委し。

【五一】資財乏少。有情の惡業力に依つて生活の資財愈よ乏しく人壽漸次短促して十歲となること。倶舍論第十一卷幷に第十二卷に詳說さる。就て看よ。

無し、曾て作りし所の業は失壞せず、三[四四]界黑白の報は亡びず。斷常の諸行等、業を集めず有に住せず、自作の業を還つて自受するに非ずと云ふこと有ることなく、亦た自作は他人受くるに非らざるなり。去者有ること無く亦た來[者]無く、衆生は有に非ず亦た無に非ず、[四五]見取等の惡見聚無く、亦た衆生及び淨行無し。無生寂滅無相の句は、如來の功德にして佛の境界たり、是の陀羅尼十力才は、是れ佛如來の勝れたる行處なり。純白淨法功德聚、智德總持力最勝なり、神足變現勢無邊にして、六通辯才は斯に由つて起る。其の自性に於いては曾て滅無く、無行の行非法行、是れ法界中所去無し、是の行行に非らず眞の法行なり。音聲の性に非らず自性に入り、趣の自性所住無し、無住無依の自性行は、塵を遠かり寂滅にして佛の境界なり。定行勝定、勝最定、行の自性所住有るに非らず、[四六]常に自性有つて常に隨順す、微細難見の不動の句なり。彼れ常に安住して動ぜず、無所住に住し法性に住す、自性に住することを說くこと得べからず、是の行不動にして法に住す。音聲を以て說くに聲道に非らず、音聲の體道是れ法道なり、別の聲聚の所在有ること無し、是の如きの性行は是れ法行なり。所說の行音生行に非らず、其の法の體性は眞義の行なり、音聲を以て衆生行を說くに、音聲の衆生行俱に無し。中に於て文字所入無く、智慧廣大にして義も亦た然なり、是の道佛讃じて修行せり、光明の法理微細行なり。廣く塵垢を離れたる智慧藏、若し能く無等等に住すること有らば、常に勝妙なる法施の雨を[四七]澍ぐ、謂はく第一空眞義道なり。塵を遠かりし淸淨第一句は、寂滅勝寂にして垢染を離れ、分別取及び戲論無し、是れ佛所說の寂滅句なり。初に非らず中に非ず後住に非ず、有に非ず無に非ず方所に非ず、已に是の如き自性行を知る、是の無等の法は佛の所說なり。堅固德王爾の時に、兩足世尊の是の定を說くを聞いて、

【四四】界。底本は者に作る縮藏を檢せしに界に作れり、底本の誤植なること知るべし。

【四五】見取。斷見、常見等誤まれる見解を正しとし、劣れる見解を勝れたりと執する見を、見取見と云ふ五見の一なり。

【四六】常。底本於に作る、今は三本聖本による。

【四七】澍ぐ。底本霔に作る今は三本に依る。

や一切の外道異論をや。
[三五]爾の時に世尊偈を說いて言はく、
我れ過去無量劫を念ずるに、佛如來の大名稱なる有り、號して威德衆王佛と曰ふ、諸の人天の爲めに供養せらる。比丘十億ありて神通を具し、辯才自在の岸に達し到り、頭陀行に住して心調伏し、彼の佛爾所衆を具足せり。城七億六千萬ありて、其の城の廣長二千里なり、彼の時の世界閻浮提は、最勝なる[三六]七寶にて成ぜられし所なりき。其の城殊妙にして甚だ奇麗、百の園勝れたる家而かも莊嚴され、其の園苑林は密雲の如く、常に種種の諸の花果あり。所生の異種の諸林樹、[三七]菴羅閻浮芭蕉等、[三八]迦尼瞻波畢落叉、[三九]尼拘[四〇]畢鉢に衆鳥集まり、頻伽拘翅孔雀等、鵞王舍利甚だ歡樂せり、種種の衆鳥の音、百の園裏に臻湊し遊戲せり。[四一]提頭賴勝鵠王の如き、那羅拘蜂鶴鳥の聲、其の身種種の毛羽色、蓮花の處に在りて妙なる音を出せり。所有卵生諸の異類、和雅の音を出して人に樂を生ぜしめ、園苑に遊行するもの自ら娛樂し、歡樂して遞に相ひ命し呼ぶ聲きこゆ。[四二]目多婆師[四三]輸迦花、波利耶多拘羅婆、婆呵迦樹雲の布けるが如く、鉢頭芬陀拘牟頭、水中の種種の衆くの異花、其の池を莊嚴して甚だ端妙なり、諸の雜香花共に嚴飾し、時に彼の園林殊に樂しむ可し。時に閻浮提に一王あり、堅固德と號して人主たり、彼の王五百の子を具足す、調柔端正にして伎能を學べり。其の國豐熟にして甚だ安隱、諸の過有ることなく常に勝樂なり、地に皆諸の香花を布散して、彼の天宮と差別無し。牟尼法王彼の時に於いて、是の如き寂滅定を宣暢す、諸有道は猶し夢の如く、初生及び終沒有ること無しと說く。衆生壽人不可得なり、一切諸法は悉く虛妄にして、譬へば虛空電幻化の如く、又野馬水中の月の如し。此世に生滅の法有ること無く、亦た他世に趣向する者

【三五】爾の時。以下梵本第二十九威德衆王品、(Tejogunarāja.)
【三六】七寶。金・銀・瑠璃・玻瓈・珊瑚・碼碯・硨磲を云ふ。諸經論によつて多少同異あり。
【三七】菴羅、閻浮。瞻波等と共に先に註せり。
【三八】迦尼(Kapika)。印度諸處に林をなして生じ、蔓を生じて繁茂し、花は金色なり。
【三九】尼拘(Nyagrodha)。榕樹のこと。
【四〇】畢鉢(Pippala)。佛此の樹間に於て正覺を成ぜられしが故に菩提樹の名あり。高數百尺ありしと云ふ、樹の盛衰西域記卷八に詳記さる。
【四一】提頭賴(Dhrtarāṣtra)。
【四二】目多婆師(Mucilinda-varsika)。
【四三】輸迦(Aśoka)。悉多太子此の樹下に生れ給ふ、無憂樹と云ふ。

なす。親と名利とを求めず、聖種中に安住し、柔直にして諂慢ならず、是れ頭陀を樂ふの利なり。自ら譽め他を毀らず、譽を得て欣喜せず、毀るを聞いて恚惱無し、是れ頭陀を樂ふ利なり。法施をなすは食の爲めならず、恭敬を求めざるが故に、言ふ所を人信受す、〔三三〕是れ頭陀を樂ふの利なり。

童子よ、菩薩摩訶薩、是の如き等の功德利益に住し、空閑に在つて佛藏を見ることを得、法藏を得、彼の智藏を得、過去未來現在の智慧の藏を得、童子いはく、云何が佛藏を得るや。童子よ、菩薩摩訶薩遠離の行を樂ひ、空閑に住して五神通を獲。何等をか五となすや。一には天眼、二には天耳、三には能く他心を知り、四には善く宿命を知り、五には神通境界なり。是の菩薩は天眼界清淨なること人に過ぐるを以て、東方に於いて無量無數の諸佛世尊を見、是の如く南西北方においても亦た復た是の如し、四維上下にも亦た無量無數の諸佛を見、常に覩矚することを得て未だ曾つて捨離せず。童子よ、是を菩薩佛藏を見ることを得となす。童子いはく、云何が菩薩摩訶薩法藏を得るや。童子よ、是の佛如來の有所說法を、彼の菩薩は天耳界清淨なること人に過ぐるを以て悉く皆聞くことを得るなり、是の菩薩常に法を聞くことを得て遠離せず、童子よ、是を菩薩法藏を得と爲す。童子いはく、云何が菩薩は智藏を得るや。童子よ、是の智慧能く諸法を持す、一切衆生に於いて大悲を首となす、不癡心を以て爲めに說法し、彼に法義を知らしむ、童子よ、是を菩薩摩訶薩智藏を得と爲すなり。童子いはく、云何が菩薩摩訶薩は過去未來現在の智藏を得るや。童子よ、是の菩薩は如實に、一切衆生の心行を自の心行次第に起きる所に〔三四〕准じて知るなり。自の心法を觀じ、亂想無きを以て修習方便して自の心行の如く、他を類するも亦た爾なり。所見の色、聞聲有愛無愛の心皆如實に知るなり、童子よ、是を菩薩過去未來現在の智藏を得たりと名づく。童子よ、我れ今略說せり、是の如き德に住せる菩薩摩訶薩は一切佛法を得、諸の聲聞辟支佛地には非らず何に況ん

【三三】是れ頭陀云々。先公譯は此の頌を以つて終りとせり。

【三四】准。底本は惟に作る今は三本に從ふ。

には鬪訟を起さず、七には靜默に安住し、八には解脫に隨順し相續し、九には速かに解脫を證し、十には功を施して三昧を得、童子よ、是を菩薩空閑を愛樂する十種の利益と爲す。爾の時世尊、即ち偈を說いて言はく、

事務を少くことを成就し、　衆の憒閙を遠離し、　彼れ違諍無きことを成[就]す、　靜かに空閑に獨[處]する利なり。　其の心瞋惱無く、　有漏を增長せず、　常に和して諍訟無し、是れ空閑に住する利なり。　心を安じて寂滅に住し、　常に遠離の行を樂ひ、　無累智に隨順し、　速かに解脫道を證す。　林に處して禪定を習ひ、　衆の鬧過を棄捨し、　復た違諍を起さず、　閑を樂つて是の利を獲たり。　常に有爲を厭離し、　世間欣慕すること無く、　諸漏增長せず、　林に住して是の利を得るなり。　鬪諍の過を起さず、　心常に寂靜を樂ひ、善く身口意を禁る、　空に住すれば是の利あり。　解脫に隨順して、　速かに無障累に至る、常に住すること樂にして恬靜なり、　是は空閑に住する利なり。

童子よ、菩薩摩訶薩頭陀を樂つて常に乞食を行ふに十種の利あり。何等をか十となすや。一には我慢の幢を摧き、二には親愛を求めず、三には名聞の爲めにせず、四には聖種に住在す、五には諂ならず誑ならず異相を現ぜず又激切ならず、六には自ら高擧せず、七には他人を毀らず、八には愛恚を斷除し、九には若し人家に入りては飮食の爲めならずして法施を行ふ、十には頭陀行に住する有所說法人の爲めに信受せらる、童子よ、是を菩薩摩訶薩の頭陀行を樂ふ乞食に於ける十種の利益と名づく。爾の時に世尊、即ち偈を說いて言はく、

彼の人我慢無く、　親友を求託せず、　利と衰とにおいて心平等なるは、　頭陀に住するを以ての故なり。　聖種を壞せず、　諂無く亦た誑無く、　自身高擧せず、　亦他を輕毀せず。愛と恚との心を棄捨し、　法を說くに悕ふ所無し、　若し說かば人信受す、　是を乞食の利と

り。善く法の自性を知り、諸の煩惱に依らず、佛勝人を信樂して、曾て取著の心無し。彼常に鬪諍無く、事を觀じて離行を修し、正覺道に安住して、能く如來の法を持つ。

童子よ、菩薩摩訶薩〔三〇〕宴坐に住するに十種の利益あり。何等をか十と爲すや。一には其の心濁らず、二には不放逸に住す、三には諸佛愛念し、四には正覺行を信じ、五には佛智を疑はず、六には恩を知り、七には正法を謗らず、八には善能く禁を防ぎ、九には調伏地に到り、十には〔三一〕四無礙を證す。童子よ、是を菩薩摩訶薩の宴坐に住する十種の利益と爲す。爾の時に世尊、即ち偈を說いて言はく、

其の心濁亂無く、諸の放逸を遠離し、不放逸行に住するは、宴坐の境界なり。世の燈明となることを念とし、彼の信樂を增長す、佛智は不思議なり、方便［を施す］に疑惑無し。能く諸佛の恩を知り、正法を誹謗せず、善律儀に安住し、調伏地に到る。無礙辯才を得、樂て林中に獨處し、恭敬利養を捨するは、宴坐の境界なり。彼心濁亂せず、曾て放逸あること無く、智者は常に謹愼す、是れを寂靜の利と爲す。無畏にして常に、佛の所行を愛念し信じ、佛智を疑はず、是を寂靜の利となす。恒に如來の恩を念じ、正法を誹謗せず、律儀方便に住す、是を寂靜の利となす。彼は調伏地に到つて、速やかに無礙辯を證す、百千經を演說して、恒常に滯住せず。速かに佛の菩提を攝し、諸の佛法を護持し、諸の異論を降伏して、廣く佛菩提をなす。〔三二〕菩薩此に終つて、安樂國に往生するや、彌陀爲めに說法して、無生忍を逮得せしむ。

童子よ、菩薩摩訶薩空閑を愛樂するに十種の利あり。何等をか十と爲すや。一には世の事務を省き、二には衆鬧を遠離し、三には違諍あること無く、四には無惱處に住し、五には有漏增さず、六

【三〇】宴坐に住す。先公譯は獨處行となす、即ち靜處にありて禪を修するを云ふ。

【三一】四無礙とは、法無礙・義無礙・辭無礙・樂說無礙を云ふ。

【三二】菩薩此に云々。此の偈先公譯に相當する文無し。

す。一切の事を捨離し、法王を修學し、諸の煩惱を降伏す、彼道を得ること難からず。慈心もて衆生に施し、一切の福德分において、嫉妬の結を起さず、勝れたる人樂に過ぎたるを獲。智者は惡作を離れ、勇猛にして善事を爲し、善丈夫の法に住するは、法施者の得る所なり。[二三]彼れ佛國土を淨め、助道の善法を起し、道場に趣き近づく、是を法施の利と爲す。事に於いて慳嫉無く、能く事の自相を了し、諸の取著を解脫して、事の無障礙を愛す。智者是の心を發し、衆をして福分有らしむ、慈を得て嫉妬無く、善法中に樂を得。

童子よ、菩薩摩訶薩は空に安住して十種の利を得るなり。何等をか十と爲すや。一には佛の所住に住し、二には[二四]禪を修して依無く、三には一切受生を樂はず、四には[二五]戒を取せず、五には[二六]賢聖を謗らず、六には一切衆生に於いて不違諍に住し、七には[二七]衆生の事を得ず、八には遠離一切惡事に住し、九には諸佛を謗らず、十には一切白淨の法を攝取す、童子よ、是を菩薩摩訶薩の空に安住する十種の利益となす。爾の時に世尊即ち偈を說いて言はく、

天人尊の所住、謂はく世親導師、勇猛に能く安住す、謂はく壽命等無きなり。彼れ禪定の樂を得、世間に所依無く、[二八]心生を受くることを悕はず、法性を知るを以ての故なり。戒に於いて若しは取せず、[二九]無漏戒を成就すればなり、惡道中に生ぜず、常に聖種に安住すればなり。無闘諍に住す、世間において最も柔軟なり、一切の事を了知して、如實に體性に稱ふ。乃し身命を捨するに至るまで、如來を誹謗せず、空法に於いて決定し、身無所畏を證す。一切世間の親、佛道は不思議なり、能く佛道を持ち、空法疑あること無し。人尊の住する所は、諸の外道地に非らず、禪定の樂に依らず、衆生壽命無し。彼曾て所止無く、禪樂に依らず、壽命の法無きを知つて、恒に無願心有

【二三】彼れ佛國土。以下の三偈先公譯と少異あり。

【二四】禪を修して云々。先公譯「所著の行無し」となす。

【二五】戒を取ぜず。先公譯「戒法を犯さず」となす。

【二六】賢聖。賢とは三賢の行者、聖とは十聖の菩薩を云ふ。

【二七】衆生の事云々。先公譯「無所得なり」と譯す。

【二八】生とは、三界六道に受生することを云ふ。

【二九】無漏戒。行者見道以上に進みて一分にても眞如に契證し、眞智即ち無漏智を發得すれば、自ら防非止惡の戒體を得るなり。是を道共戒又は無漏戒と云ふ。

童子よ、菩薩の多聞に十種の利益あり。何等をか十と爲すや。一には煩惱の資助を知り、二には清淨の助を知り、三には疑惑を遠離し、四には正直の見を作し、五には〔二〇〕非道を遠離し、六には正路に安住し、七には甘露門を開らき、八には佛の菩提に近づき、九には一切衆生のために光明となり、十には惡道を畏れず。童子よ、是を十種の多聞の利益と爲す。爾の時世尊、即ち偈を說いて言はく、

童子よ是の十利は、　多聞を顯示す、　是れ諸佛世尊、　如實に了知し給ふ。　煩惱及び清淨、　二助皆實に知り、　能く煩惱を棄捨して、　清淨の中に安住するなり。　智慧もて疑惑を除き、　正直に他心を見、　常に惡道を遠離し、〔二一〕正眞路に止住す。　甘露門を開闡し、　佛の菩提に近づき、　衆生の光明となりて、　惡道を畏れず。　諸の煩惱の資を知り、　又淸淨の助に達し、　勇健に煩惑を離れ、　淸淨法に栖〔二二〕泊す。　衆くの種種の疑を除き、　能く他人の見を正し、　險惡道を棄捨して、　多聞にして善徑に住す。〔二三〕　能く甘露門を開らき、　堅固にして菩提に近づき、　衆に於て光明の如く、　終に惡道を畏れず。

童子よ、菩薩摩訶薩法施を行ふに十種の利益有り。何等をか十となすや。一には惡事を棄捨し、二には能く善事を作し、三には善人の法に住し、四には佛國土を淨よめ、五には道場に趣き詣り、六には愛する所の事を捨し、七には煩惱を降伏し、八には諸の衆生に福德分を施し、九には諸の衆生に於いて慈心を修習し、十には法を見て喜樂を得、童子よ、是を菩薩法施を行ふ十種の利益となす。爾の時に世尊、即ち偈を說いて言はく、

最勝の施を行ふて、　法に於て悋惜すること無し、　彼に十種の利あり、　導師已に顯說せり。　世の惡事を棄捨し、　常に能く善業を行ない、　善人の法に安住し、　布施心を修行す。　能く諸佛の土を淨め、　佛の所說の如く、　道場所に趣詣す、　是れを法施の果とな

【二〇】非道。先公譯惡道となす。即ち三惡道なり。

【二二】泊。底本は薄に作れども今は三本に從ふ。

【二三】能く甘露門云々。の句先公譯に曰く。常に爲めに甘露門に住在し、坐して無量佛樹に在ることを得、無量億人の爲めに現に明となり、其の人終に惡道を畏れず。

惱を生ぜず、無食の聖樂を證し、身心恒に清涼なるは、是れ禪と相應する利なり。空に處して根寂靜に、其の心雜亂を離れ、人に過ぎたる喜を獲得す、方便もて欲を離れしが故なり。心欲染を離へず、常に魔境界を遠ざかり、佛の行處に安止して、彼解脱を成熟す。

[一七]童子よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずるに十種の利益有り。何等をか十と爲すや、一には一切悉く捨して施想を取せず、二には[一八]戒を持つこと缺けずして而も戒に依らず、三には忍力に住して衆生想に住せず、四には精進を行じて身心を離れ、五には禪を修して而かも所住無く、六には魔王波旬擾亂すること能はず、七には他の言論に於いて其の心動ぜず、八には能く生死の海底に達し、九には諸の衆生に於いて增上の悲を起し、十には[一九]聲聞辟支佛道を樂はず、童子よ、是を菩薩の般若波羅蜜を行じて成就せる是の如き十種の利益と爲す。爾の時世尊、即ち偈を說いて言はく、

勇健に一切を捨し、而も施想を取らず、戒を護持して缺かず、亦た所依有ること無し。智慧忍辱を修し、而かも衆生を見ず、勇猛に勤精進し、身心を遠離す、勝れたる禪定を修習し、三界に依らず、諸魔も能く制するなきは、信に慧の功能なり。彼の諸の外道に於いて、其の心傾動せず、生死の底に到るは、信に慧の功能なり。諸の衆生所に於いて、大悲心を得、聲聞緣覺地に於いては、曾つて愛樂を生ぜず。捨に於いて取を仔せず、戒を持ちて亦た無依なり、忍辱にして生想を離る、是れ信に慧の功能なり。精進して遠離し、禪を修して所依無く、魔の爲めに制せられず、是れ信に慧の功能なり。他の言論によつて動ぜず、生死の底に達し到り、生に於いて上の悲を起す、是れ信に慧の功能なり。聲聞緣覺道に於いて、愛樂心を起さず、佛の功德を學ばんが爲めにす、是れ信に慧の功能なり。

【一七】童子よ。以下六度中第六智波羅蜜の十種の利益を說く。

【一八】戒を持つ云々。先公譯曰く。復た戒を犯かさず、戒を以て自ら縛せず云々と。

【一九】聲聞辟支佛道云々とは、小乘二乘の悟果を樂はず、大乘佛果を究竟の果となすことを示す。

る所の諸の飲食、腹に入つて能く消化し、優鉢の水に在るが如く、漸漸に增長す。是の如き所聞の法、聞き已つて能く增長し、晝夜恒に思念して、終に空しく過ごすこと有ること無し。如來は勇猛にして勤め、積劫進鎧を被て、魔及び[魔の]軍衆を降し、道を證して憂怖を除く。菩薩は諸趣を救ふに、身命を顧戀せず、精進して法藏を起つ、我れ已に彼の德を顯はせり。精進[者は魔も]伏す可きこと難し、諸佛に攝受せらる、若し能く是の利を獲れば、久しからずして速かに道を證せん。聞く所を忘失せずして、未だ聞かざるは聞くことを得、辯才力を增長す、是を精進の利と名づく。速かに此の三昧を逮ふれば、諸の病惱あること無く、其の噉食する所に隨つて、消化して安樂を得。晝夜白法を增し、常に勤めて懈退せずば、久しからずして菩提を得ん、堅心に精進するが故に。

[14]童子よ、菩薩摩訶薩[15]禪と相應するに十種の利益有り。何等をか十と爲すや。一には儀式に安住し、二には慈の境界を行じ、三には諸の熱惱無く、四には諸根を守護し、五には食無うして喜樂を得、六には愛欲を遠離し、七には禪を修して空しからず、八には魔羂を解脫し、九には佛境に安住し、十には解脫成熟す。童子よ、是を菩薩の禪定と相應する十種の利益と爲す。爾の時に世尊[16]即偈を說いて言はく、

彼は非法に住せず、儀式に安住し、方便の境に遊行し、非なる境界を遠離す。其の心惱熱無く、善く諸根を調伏し、勝れたる禪定の樂を受け、宴坐して諸緣を離る。渴愛の欲を遠離し、禪定味を貪食ひ、魔境界を解脫し、佛の行處に安止す。獨り林樹間を樂ふ、是を勝方便となし、眞實の解脫を修して、諸の苦惱を滅除す。清淨法に安住し、非儀式を遠離し、境に住して非境に遠ざかる、禪によつて是の利を獲べし。心熱

【一四】童子よ。以下六度中の第五禪波羅蜜の十種の利益を明す。
【一五】禪と相應の語先公譯は單に坐禪とせり。
【一六】即。底本念に作れども恐らくは誤なるべし。

こと定まれり、是を淨戒の利と爲す。

【二】童子よ、菩薩摩訶薩慈忍に住するに十種の利益有り。何等をか十と爲すや。一には火も燒くこと能はず、二には刀も割くこと能はず、三には毒も中たること能はず、四には水も漂はすこと能はず、五には非人の爲めに護られ、六には身相莊嚴をえ、七には諸の惡道を閉ぢ、八には其の樂ふ所に隨つて梵天に生れ、九には晝夜常に安らけく、十には其の身喜樂を離れざるなり、童子よ、是を菩薩の成就せる十種の慈忍の利益と爲す、爾の時世尊、即ち偈を說いて言はく。

是の人火も燒かず、　刀杖も能く傷ふこと莫し、　毒藥に中てられず、　暴水も能く漂はすことなし。　常に非人の爲めに護られ、　三十二相を具す、　諸の惡道を關閉す、　皆是れ慈忍の利なり。　帝釋及び梵天たることを、　得んと欲すれば則ち難からず、　恒に安樂處に住し、　不思議を喜悅す。　刀杖火も害せず、　水毒もまた傷なはず、　天龍夜叉に護らる、　忍に住して此の益を獲るなり。　身相三十二[を具し]、　惡道に墮するを畏れず、　死すれば則ち梵天に生ず、　是れ慈忍に住する利なり。　晝夜常に安隱にして、　喜悅身に充遍し、　衆くの清淨身に於いて、　諸の過障有ること無し。

【三】童子よ、菩薩の精進に十種の利益あり。何等をか十となすや。一には他に拆伏されず、二には佛に攝せらるることを得、三には非人の爲めに護られ、四には法を聞いて忘れず、五には未だ聞かざるを能く聞き、六には辯才を增長し、七には三昧性を得、八には少病少惱たり、九には隨所に食を得て食し已つて能く消[化]す、　十には【三】優鉢羅花の杵に同じからざるが如し、童子よ、是を十種の精進の利益と爲す。爾の時に世尊、即ち偈を說いて言はく、

拆伏し難きを成就して、　其の心悔熱無し、　非人の爲めに護られ、　常に諸佛を覩見す。　食す
勝れたる辯才を增長し、　無盡智に到り、　三昧性を獲得して、　復た諸の病惱無し。

【二】童子よ。以下梵本第二十八、十種利益品、(Daśānuśaṃsā) 以下第三忍辱波羅蜜の十種の利益を明す。

【三】童子よ。以下六度中第四に精進波羅蜜の十種の利益を說く。

【三】優鉢羅花云云。先公譯文殊十事行經は柔軟を得ること優鉢の剛ならざるが如しとあり先公譯意分明なり。優鉢羅花は青蓮華なること前に註せる如し。

を菩薩の布施を信樂する十種の利益と爲す。爾の時に世尊、卽ち偈を說いて言はく、

慳悋を降伏し、　布施心を增長し、　施を攝受すること堅固なるがゆへに、　豪富の家に生在するなり。　其の所生の處に於いて、　能く捨心を起し、　在家と出家との、　諸の衆生の爲めに愛樂せらる。　若し大衆中に入るも、　畏無く怯弱ならず、　勝れたる名聲遠く布き、　城邑聚落に遍ねからん。　手足恒に柔軟にして、　具足相を成就し、　善知識たる、　聲聞佛菩薩に値遇することを得。　常に惠施の心を懷き、　未だ曾て恪惜あらず、　億の衆生の爲めに愛さる、　是れ慳利を捨するが爲めなり。　豪富の家に生在し、　心常に布施を樂ひ、　捨を攝受すること堅固なり、　是れ施の利を樂ふが爲めなり。　大衆數に處在して、　勝名諸方に遍ねく、　手足柔軟にして好し、　是れ施の利を樂ふがためなり。　善知識、　謂はく佛菩薩等に遭遇し、　見え已つて競ひ來つて供[養]す、　是れ施の利を樂ふがためなり。

一〇童子よ、菩薩の淨戒に十種の利益あり。何等をか十と爲すや。一には一切智を滿足し、二には佛の所學の如くに學び、三には智者毀てず、四には誓願を退かず、五には行に安住し、六には生死を棄捨し、七には涅槃を慕ひ樂ひ、八には無纏心を得、九には勝れたる三昧を得、十には信財に乏しからず、童子よ、是を十種の淨戒の利益となす、爾の時に世尊、卽ち偈を說いて言はく、

一切智を滿足し、　佛の如くに修學す、　智慧者毀てず、　常に怖畏有ることなし。　誓願して退轉せず、　能く勝行に安住し、　生死處を逃避し、　涅槃に趣くことを欣慕す。　纏障無きに安住し、　速かに勝三昧を得、　淨戒聚に住して、　諸の貧窮を遠離す。　其の智恒に清淨にして、　佛の所學を修習し、　聖者の爲めに毀てられず、　戒淸淨なるを以ての故なり。　智者は誓つて退かず、　勇健にして善く住し行じ、　世の種種の過を見て、　之を避けて滅道に趣く。　彼の心障礙無し、　淨戒力に住するを以て、　速かに惱を離るること得る

【一〇】童子よ。以下梵本第二十七說示戒品、(Śīlanirdeśa.) 以下六波羅蜜中第二戒波羅蜜の十種の利益を明す。

惡を識る者に隨喜し、常に一切諍論の事を離れ、空閑林樹下に趣き詣りて、聖解脫を求むるは眞の佛子なり。常に空閑に在る者に隨喜し、自ら稱譽し他を輕毀せず、功德者を隨喜し愛樂し、佛法に住して不放逸なり。所有[三]助道の諸の功德、是れ不放逸を根本と爲す、若し菩薩有つて放逸を離るれば、此の三昧を得ること則ち難からず。佛法に値ふことを得るを一藏と爲し、又出家を得ることを第二藏となし、淨信にして濁らざるを第三藏となし、此の三昧を得るを第四藏とす。大空なる佛の境界を聞き、聞いて謗らざるを勝藏となす、若し辯才を得るを藏を得たりと爲す、此の三昧を得るは亦た勝藏なり。我れ已に彼の諸の善法を說く、謂はく戒聞捨及び忍辱、是れ不放逸をもて根本と爲す、佛說いて名づけて最勝藏と爲し給ふ。若し菩薩有つて放逸ならざれば、即便ち諸の辯才を具足し、佛智慧に於いて疑惑無きこと、此の三昧を得るときは則ち難からず。

[四]童子よ、是の義を以ての故に、汝應に不放逸行に住すべし、是の諸菩薩の所において應に修學すべし。何を以ての故に。不放逸は[五]能く阿耨多羅三藐三菩提を得、何に況や此の三昧をや。童子よ、云何んが菩薩不放逸に住するやとならば、童子よ、是の菩薩は善く淨戒聚を成就す、童子よ、是の菩薩は一切智を捨てず、心[六]六波羅蜜を學ぶ、童子よ、若し菩薩一切智を捨てず、心六波羅蜜を行ずる所有利益、汝當に諦かに聽くべし、當に汝が爲めに說くべし。[七]童子よ、菩薩檀波羅蜜を信樂すれば、十種の利益あり。何等をか十と爲すや。一には慳悋の煩惱を降伏す、二には捨心を修習し相續す、三には共に諸の衆生と其の資產を同うし、攝受すること堅固にして滅度に至る、四には豪富の家に生まる、五には所生の處に在つて施心現前す、六には常に[八]四衆の爲めに愛樂せらる、七には四衆に處して怯れず畏れず、八には勝れたる名[聲]諸方に流布す、九には手足柔軟にして足掌安平なり、十には乃し[九]道樹に至るまで善知識に離れず、謂はく佛菩薩聲聞の弟子たり。童子よ、是

【三】助道。諸種の道品能く無漏の果德を資助するが故に助道と名づく。又諸行相互に資助するが故に名づけて助道となす。

【四】童子よ。以下梵本第二十六布施功德品。(Dānānuśaṃsā.)

【五】能く。麗本は何に作る、今は三本に依る。

【六】六波羅蜜。譯して六度と云ふ、前に註せるが如し。

【七】童子よ。以下先公譯月燈三昧經(文殊十事行經)四行目よりと合致す。但し本經にありては童子とあるは月光童子を指せるも文殊十事行經にありては文殊を指す。

【八】四衆とは、比丘・比丘尼・信士・信女を云ふ。

【九】道樹に至るとは、釋尊畢鉢羅樹下に正覺を成ぜられしが故に是に因みて畢鉢羅樹を爾來菩提樹と呼ぶに至れり、無上道を成ぜし意にて道樹と云ふ、今は正覺を成ずるに至るまでの意なり。

卷の第六

[1]爾の時に世尊、復た月光童子に告げて言はく、菩薩摩訶薩は應當に善巧方便を成就すべし。童子よ、云何が菩薩摩訶薩、善巧方便を成就するや。童子よ、是の菩薩摩訶薩は一切衆生所に於いて、親たる想を起すなり、是の諸の衆生の所有善聚に隨喜を生じ、晝夜六時彼の福德に於いて隨喜を生じ一切智を緣ず、一切智を緣ずるを以て心一切衆生所に於いて福德を生ずるなり。是の菩薩此の善根を以て速かに此の三昧を得、阿耨多羅三藐三菩提を成ず、爾の時に世尊是の時に於いて、偈を說いて言はく、

諸の衆生に於て爲れ已れ親たり、所有一切の福德聚、晝夜六時此の善に於いて常に能く彼の隨喜の欲を起す。我れ彼れの淨く戒を持つことを隨喜し、乃し命を盡すに至るまで惡を爲さず、菩薩は清淨信を具足して、所有福德に悉く隨喜す。諸佛を信樂する者に隨喜す。其の法僧を信ずる者においても亦た然り、能く如來を敬し奉るものに隨喜す、無上菩提を求むるが爲めの故に。彼我の見無き者、衆生等及び壽命無き者に隨喜す、能く諸の惡見無く、勝れたる空法を聞いて深く愛樂する者に隨喜す。佛法中に於いて隨喜を起し、出家することを得已つて具戒を受く、少欲知足にして林間に住し、慈愍心を懷くこと猶し劍の如し。獨一にして侶者無き者に隨喜す、林に處すること猶し刀の匣の入るが如し、[2]淨命にして常に能く少かに欲求し、諂僞有ること無うして親友に託す。靜を隨喜し樂つて憒鬧を離れ、家親屬に於いて愛戀すること無く、三界中に於いて常に怖畏し、世間に遊行して染著無し。彼の戲論を離れし者に隨喜し、一切の生死を受くる者を厭惡す、違諍有ること無うして寂靜を行ふこと、此の三昧を得るときは則ち難からず。能く善

【一】爾の時。以下宋、元、明三本及び宮本、聖本は第七卷梵本第二十五隨喜品、(Anumodanā.)

【二】淨命。邪命に對して淨命と云ふ、僧侶の乞食を行じて生命を維持するをいふなり。

し、戒は最勝なりと謂ふこと莫れ。淨戒聚に住し已つて、能く集め多聞にして持し、是の三昧を求めんがための故に、常に佛[四六]舍利を供[養]せよ。能く蓋・幢・幡、花鬘・塗[香]末香を以て、是の寂定を求めんが爲めに、諸佛を供養せよ。勝上なる伎樂を以て、妙なる歌相和雅して、佛舍利を供[養]せんが爲めにし、勇健にして不劣の心をもてせよ。所有諸の花鬘、一切の香と衣服、悉く持つて佛を供養せよ、佛智を求めんが爲めの故に。衆生は諸の福分を、平等に施して偏なく、無礙智を求めんが爲めにせよ、謂はく諸佛無上なり。我れ曾つて先佛の所に於いて、不思の供を施設するに、無偏心を以てせり、此の寂靜を求めしが故に。佛の出[世]に遇ふこと難し、人身を得ることも亦た難し、佛法を信ずることも亦た難く、出家して戒を具すること難し。汝今佛に値ふことを得て、菩提心を發せり、捨すること勿うして堅く誓願して、其の善行に安住せよ。若し此の經を受持せば、後の末世時に於いて、速かに無礙辯を得ん、受持して忘失せざれ。若し能く一偈を持するも、福聚思議し難し、況や復た悉く能く領し、義の如く具足して受けんをや。衆生盡く佛を得るまで、勇猛にして悉く供養し、恭敬して尊重すること、衆生數の劫を盡すも、若し此の三昧に於いて、能く一偈を受持せんに、彼に於て前の功德は、十六[分]の一に及ばず。我れ佛の智慧、不思議の利益を知れり、此の三昧を受持することは、一切佛の所行なり。

【四六】舍利。生身舍利は佛滅後の身骨、法身舍利は一切の大小乘の經卷を云ふ。今は前者を指す。

當に知るべし、彼の惡として造らざる無きものと、後の末世の時に於て、愼んで親友となること勿れ。不亂濁の心を以て、接引し共に語言し、承事し供給せよ、佛道を求めんが爲めの故に。當に其の[四四]夏臘を問ふべし、若し是れ[四五]耆宿ならば、應に供養恭敬し、頭面を足に接して禮すべし。他の過失を觀ること勿れ、彼れ必ず道場に至らん、瞋怒の意を生ずること莫く、常に慈悲心を起せ。若し彼の過咎を見るも、其の德を對說せず、常に所作の業を念ぜば、必ず是の如き果を獲べし。若し老少の所に於いて、語言常に笑を含み、言を發して先づ慰問して、己が慠慢を滅除せよ。衣服及び飮食、常に以て供養し奉れ、是の如く心施を作さば、是等悉く成佛すべし。若し法施を求めんが爲めの故に、長宿に請問する時は、應に先づ是の言を作すべし、我が學習廣からずと。

又復た是の言を作すべし、汝等甚だ黠慧なり、汝大人の前に於いて、豈に敢て輒ち宣說[すること我れにあらんや]。說く時倉卒なること勿れ、當に器と非器とを簡ぶべし、其の機器を觀じ已つて、請はざるも亦た爲めに說け。若し大衆中に於いて、他の禁を毀るものを見ば、持戒の德を歎ずること勿れ、當に施等の行を歎ずべし。若し少欲者と、持戒と相應するものを見ば、大慈心を起して、少欲持戒を讃ずべし。若し禁戒を毀ること少なく、淨戒を持つこと多ければ、彼の勝れたる伴黨たることを得て、便ち持戒を歎ずべし。初め大衆を觀察して、悉く諸の善法を樂しまば、所有善法者、一切悉く讃歎せん。施戒多聞忍、精進及び少欲、知足遠離の行、是の如き法を顯示す。是の如き法を讃歎し、盡く他世道を說く、諸の悲愍の事なきも、慈心もて忿怒すること勿れ。空[閑處]に在つて禪樂に住し、憒閙の衆を遠離し、汝當に彼の德を歎ずべし、此を總持門と名づく。常に空閑處を樂ひ、專ら施行のみを行ふこと勿れ、一心に宴坐を修

[四四] 夏臘。法臘とも云ふ、僧侶は每歲一夏九旬の安居を爲す、安居の數によつて長幼を定む。其の經たる數を夏臘と云ふなり。
[四五] 耆宿。老成し德望ある僧侶。

慧無く調へ難き者、更互に相ひ敬せず。美はしき名譽を悕求し、［而も］善く禁戒に住せず、恒に念ずと雖も、何時か名聞普く週遍することを得んや。利養を求めんが爲めの故に、廣く衆多の人を集め、慠慢にして放逸を縱まにし、專ら利を求覓する心なり。樂つて［四三］白衣舍に在り、恭敬利養の爲めに、寺及び塔廟を造る、斯は是れ名利の爲めなり。取著の心に依止し、常に渴愛の欲を求め、專ら世俗の業を營なみ、魔の境界に止住す。彼の白衣に向つて說く、愛欲は火焰の如しと、若し俗人の家に入らば、當に他女を汚すべし。白衣是の人に於いて、恒に大師の想を作し、伺候の男夫行かんに、婦女と相ひ染合す。彼の家美膳を以て、是の比丘に供給す、反つて彼の妻の所に於いて、自己の婦の如き想をなす。白衣婦所に於いて、尙ほ嫉妬を起さず。而も出家の比丘、他の妻に嫉忌を生ず。俗人は居家に處して、善く五戒を護持す、況や出家することを得已つて、一切の禁を棄捨することを得んや。鼓貝諸の音樂、以て我を供養するは、供養を行ふ最勝たり、末世能く成すこと莫し。自ら諸の禁戒を毀り、他の持律者を見て、世間に向つて說［いて曰く］彼と我とは異なることなしと。持戒者を讃ずるを聞き、戒を毀ぶり惡を行ずる境［は非なりとする］、眞の佛法を說くを聞いて、佛の說ける所に非ずと云ふ、心に慚愧あること無く、沙門財を喪失し、若し眞實語を勸むることあらば、我が說く所を誹謗す。戒を完具せざる者は、我が道敎を棄捨し、正法を毀謗して、阿鼻地獄を家とするなり。我れ未だ曾つて、是の如き行を修習して、愚癡にして惡に住する者の、能く佛智を獲ることを見聞せず。彼の諸の諛諂者、及び多くの曲僞のもの、我れ悉く是の人、智矚恒に絕へざるを知る。我れ若し一劫中、彼の諸の過失を說かんに、自ら菩薩と謂へる者［の過失の］但だ能く少分を說きうるのみ。童子よ汝

【四三】白衣舍。白衣とは在家俗人のこと、印度にては婆羅門及び俗人は多く鮮白の衣を用ふるが故に俗人のことを白衣と云ふ今は在家の意味なり。是に對して出家のことを染衣又は緇衣といふ。

色を以て菩提を顯はし、菩提を以て色を顯はす、是の不相似の者、最勝以て顯說す。所說の色相は麁なり、色性は甚だ深奥なり、色と菩提等との、差別得べからず。如涅槃は甚深なり、聲を以て故に宣說す、涅槃は不可得なり、聲說も亦た復た然なり。音聲及び所說、彼の二不可得なり、是の空法中の如く、涅槃も不可得なり。涅槃寂滅を說く、寂滅不可得なり、一切法は無生なり、前の如く後も亦た然なり。一切の體性と、涅槃等と相似すと知らば、眞の出家なり、佛法と相應す。若し佛の色身を覩て、已に如來を見たりと說かば、我が身は色像に非らず、能く見る者有ること無し。色の自性を知り、是の色相是の如く、能く色性を知らば、大身を顯示すと爲すなり。是の如く諸の五陰、我れ已に相貌を知れり、法の自體性に達し、法身に安住するなり。法身に安住し已つて、衆生の爲めに說法す、如來の微妙の法、言を以て宣ぶべからず、理深うして知る可らず、正覺の說を聞いて、但だ音聲語言[を聞くことをえて]我れ已に初果を得たり。若し一切想を除き、戲論の事を遠離せば、想を存すること有ること無く、世の大師を見ん。若し人能く空を知らば、卽便色相を知らん、空に異にして、別に色の自性有りと說くこと有ること無し。若し能く色を知らば、是れ則ち能く空を知るなり、若し能く空を悟らば、是れ則ち寂滅を知るなり。若し人能く是の色を知り、是の色相是の如し[と知らば]億の魔の爲めに撓ばるゝことありとも、彼の菩提を退動せず。此の道を知ること能はざれば、取著して則ち失を成ず、非物に取[著]して物想をなし、物を非物なりと取[著]す。財利に親しんで諍を爲し、法の中に於いて失有り、非果を取して果想をなし、沙門財を亡失す。懈怠にして精進を少き、戒聚に任せざる、不應行法の人を、此を佛說に非ずと云ふ。或は復た有人言はく、我れ菩提を行ふと、

り。所有諸佛智、聲の施設も亦た然なり、是の施設の事の如く、聲光明も亦然なり。是の聲光明の如く、戒名も亦た是の如し、是の戒の名字の如く、佛名も亦た復た然なり。是の佛の名號の如く、佛の功德も亦た爾なり、我れ一の衆生を知り、悉く爾許の名を知れり。佛の無量の語言、我れ先に已に宣說せり、戒名と佛名と、衆生名も亦た等し。有爲は過患多し、涅槃の德も亦た然なり、佛の利益是の如し、譬喩以て顯示す。所有諸の衆生、發心し已つて顯示す、導師の一毛孔、光を出すこと亦た是の如し。一切諸の衆生、名號及び信欲、如來は彼に過ぐ、聲身を以て說法す。一切衆生の名、一衆生を顯示す、是の一人の名の如く、諸の衆生を顯示す。一切平等入、此は是れ正覺の說なり、無量の名を說くは、諸の菩薩の爲めの故なり。我れ今云何が能く、億不思の經を說かん、是の經典を受持せば、不怯弱を顯示するなり。衆に處して無礙辯をえ、億の經典演說すること、虛空の如く無邊なり、辯才も亦た是の如し。是の菩薩の功德、清淨にして衆生を導き、是の經典を受持して、無盡智を成ず。數數法を顯示し說き、能く信受せしむ、彼の增長の智慧は、猶し雪山の樹の如し。

[四一]童子は、是の菩薩法無礙を行じ、法に於いて法を見て安住を得るなり。童子よ、云何が菩薩摩訶薩法無礙を行じ、法に於いて法を見て安住を得るや。童子よ、是の菩薩摩訶薩[四二]色に非ず色に異ならずと知つて法を說き、色に非ず、色に異ならずと知つて能く修行し、色に非ず色に異ならずと知つて菩提を求め、色に非ず色に異ならずと知つて衆生を敎化し、色にあらず色に異ならずと知つて如來を見る、但だ色を壞せずして如來を見る、色に異るに非らず、色性に異なるに非ずして如來を見るなり、色と及び色性と及び如來とは、等うして二有ること無し、若し能く是の如く諸法を見ば、是を法無礙を行ずと名づく、識想受行も亦た復た是の如し。爾の時に世尊、即ち偈を說いて言く、

【四一】童子よ。以下梵本第二十四入無礙解品。(Pratisamvidavatāra.)

【四二】色に非らず云々の下五蘊に就て法を說き佛身を見ることを說く、先づ五蘊中色蘊に就て說いて、他の四蘊は色に例同して知るべき旨を示す。

び、其の演說も亦た不可思議と名づく、說くとも盡すこと能はざるなり。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種相應の陀羅尼あり。何等をか四となすや。謂はく、不可思議諸行相應、彼の中に於ける智、是を初陀羅尼と名づく、不可思議呵責有爲相應、彼の中に於ける智、是を第二陀羅尼と名づく、不可思議煩惱相應、彼の中に於ける智、是を第三陀羅尼と名づく、不可思議清淨相應、彼の中に於ける智、是を第四陀羅尼と名づく。童子よ、是を四種陀羅尼不可思議及び其の演說不可思議と名づく、說くとも盡すこと能はず。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の陀羅尼門あり。何等をか四となすや。謂はく、不可思議諸行門、彼の中に於ける智、是を初陀羅尼と名づく、不可思議呵責有爲門、彼の中に於ける智、是を第二陀羅尼と名づく、不可思議煩惱門、彼の中に於ける智、是を第三陀羅尼と名づく、不可思議清淨門、彼の中に於ける智、是を第四陀羅尼と名づく。童子よ、是を四種陀羅尼門、及び其の演說も亦た不可思議と爲す、說くとも盡すこと能はず、乃至、無明を斷除せる智、皆四種陀羅尼不可思議及び其の演說も亦た不可思議あり、說くとも盡すこと能はざること皆上に說けるが如し。

童子よ、是の陀羅尼は卽ち是れ智慧なり、是の如き智慧は則ち能く一切諸法を了知す、但だ名字のみ有るを是を則ち名づけて[四〇]法無礙智と爲す、是の如く法智能く義に達するを是を義無礙と名づく、是の如き法智、能く諸法の言辭差別を知る、是を辭無礙と名づく、若しは彼の文字を說き、若しは顯示し、若しは施設し、若しは次第して斷ぜず、若しは開曉し、若しは廣うし、若しは分別し、若しは開示して淺からしめ、若しは平等に普示して言吃澁ならず、瘖瘂ならず、怯訥ならず、說くこと滯著せず、言辭任放にして、任放中勝れたる是を樂說無礙と名づく。爾の時、世尊卽ち偈を說いて言はく、

言音は所施設なり、　出聲も亦た復た爾なり、　所出の音聲の如く、　佛智も亦た復た然な

【四〇】法無礙。以下義無礙、辭無礙、樂說無礙の四を意業に約して四無礙解と云ひ。口業に約して四無礙辯と云ふ。

四には清淨事智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の〔三九〕富伽羅智あり。何等をか四となすや。一には諸行富伽羅智不可思議、二には呵責有爲富伽羅智不可思議、三には煩惱富伽羅智不可思議、四には清淨富伽羅智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の取著智あり。何等をか四となすや。一には諸行取著智不可思議、二には呵責有爲取著智不可思議、三には煩惱取著智不可思議、四には清淨取著智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、是の菩薩の四種の取著智は不可思議なり及び其の演說も亦た不可思議にして說くとも盡すこと能はず。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の離惡道智あり。何等をか四となすや。一には諸行離惡道智不可思議、二には呵責有爲離惡道智不可思議、三には煩惱離惡道智不可思議、四には清淨離惡道智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の斷無明智あり。何等をか四となすや。一には諸行斷無明智不可思議、二には呵責有爲斷無明智不可思議、三には煩惱斷無明智不可思議、四には清淨斷無明智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の陀羅尼不可思議及び、其の演說も亦た不可思議にして說くとも盡すこと能はざるあり。何等をか四となすや。謂はく、不可思議諸行言說、彼の中に於ける智、是を初陀羅尼と名づく。不可思議呵責有爲言說、彼の中に於ける智、是を第二陀羅尼と名づく。不可思議清淨資助言說、彼の中に於ける智、是を第三陀羅尼と名づく。不可思議煩惱資助言說、彼の中に於ける智、是を第四陀羅尼と名づく。是の如き四種の不可思議、及び其の演說も亦た不可思議にして、說とも盡すこと能はず。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の法陀羅尼あり。何等をか四となすや。謂はく、不可思議諸行の法、彼の中に於ける智、是を初陀羅尼と名づく。不可思議呵責有爲法、彼の中に於ける智、是を第二陀羅尼と名づく、不可思議煩惱法、彼の中に於ける智、是を第三陀羅尼と名づく。不可思議清淨法、彼の中に於ける智、是を第四陀羅尼と名づく。童子よ、是を菩薩の四種陀羅尼不可思議及

【三九】富伽羅(Pudgala)。補特伽羅と新譯には音譯さる。舊譯にては人又は衆生と意譯す、新譯にては數取趣と譯せり。數數諸趣に生死往來して息まざるが故に此の名あり。

となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の憂智あり、一には諸行憂智不可思議、二には呵責有爲憂智不可思議、三には煩惱憂智不可思議、四には清淨憂智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の貧智あり、何等をか四となすや。一には諸行貧智不可思議、二には呵責有爲貧智不可思議、三には煩惱貧智不可思議、四には清淨貧智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の生智不可思議あり。何等をか四となすや。一には諸行生智不可思議、二には呵責有爲生智不可思議、三には煩惱生智不可思議、四には清淨生智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の內智あり。何等をか四となすや。一には諸行內智不可思議、二には呵責有爲內智不可思議、三には煩惱內智不可思議、四には清淨內智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の外智あり。何等をか四となすや。一には諸行外智不可思議、二には呵責有爲外智不可思議、三には煩惱外智不可思議、四には清淨外智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の慚智あり。何等をか四となすや。一には諸行慚智不可思議、二には呵責有爲慚智不可思議、三には煩惱慚智不可思議、四には清淨慚智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の愧智あり。何等をか四となすや。一には諸行愧智不可思議、二には呵責有爲愧智不可思議、三には煩惱愧智不可思議、四には清淨愧智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の實智不可思議あり。何等を四となすや。一には諸行實智不可思議、二には呵責有爲實智不可思議、三には煩惱實智不可思議、四には清淨實智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の修習智あり。何等をか四となすや。一には諸行修習智不可思議、二には呵責有爲修習智不可思議、三には煩惱修習智不可思議、四には清淨修習智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の事智あり、一には諸行事智不可思議、二には呵責有爲事智不可思議、三には煩惱事智不可思議、

可思議、二には呵責有爲修多羅不可思議、三には煩惱修多羅不可思議、四には清淨修多羅不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の修多羅あり。何等をか四となすや。一には諸行修多羅聚不可思議、二には呵責有爲修多羅聚不可思議、三には煩惱修多羅聚不可思議、四には清淨修多羅聚不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の多聞あり。何等をか四となすや。一には諸行多聞不可思議、二には呵責有爲聚多聞不可思議、三には煩惱多聞不可思議、四には清淨多聞不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の財あり。何等をか四となすや。一には諸行財不可思議、二には呵責有爲財不可思議、三には煩惱財不可思議、四には清淨財不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の學あり。何等をか四となすや。一には諸行學不可思議、二には呵責有爲學不可思議、三には煩惱學不可思議、四には清淨學不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の境界あり。何等をか四となすや。一には諸行境界不可思議、二には呵責有爲境界不可思議、三には煩惱境界不可思議、四には清淨境界不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の畢定智あり。何等をか四となすや。一には諸行畢定智不可思議、二には呵責有爲畢定智不可思議、三には煩惱畢定智不可思議、四には清淨畢定智不可思議なり、是を四となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の無差失智あり。何等をか四となすや。一には諸行無差失智不可思議、二には呵責有爲無差失智不可思議、三には煩惱無差失智不可思議、四には清淨無差失智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の無明智あり。何等をか四となすや。一には諸行無明智不可思議、二には呵責有爲無明智不可思議、三には煩惱無明智不可思議、四には清淨無明智不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の苦智あり。一には諸行苦智不可思議、二には呵責有爲苦智不可思議、三には煩惱苦智不可思議、四には清淨苦智不可思議なり、是を四種

等をか四となすや。一には諸行不可稱句不可思議、二には呵責有爲不可稱句不可思議、三には煩惱不可稱句不可思議、四には清淨不可稱句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の阿僧祇句あり。何等をか四となすや。一には諸行阿僧祇句不可思議、二には呵責有爲阿僧祇句不可思議、三には煩惱阿僧祇句不可思議、四には清淨阿僧祇句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の無量句あり。何等をか四となすや。一には諸行無量句不可思議、二には呵責有爲無量句不可思議、三には煩惱無量句不可思議、四には清淨無量句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の不可測量句あり。何等をか四となすや。一には諸行不可測量句不可思議、二には呵責有爲不可測量句不可思議、三には煩惱不可測量句不可思議、四には清淨不可測量句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の不行句あり。何等をか四となすや。一には諸行不行句不可思議、二には呵責有爲不行句不可思議、三には煩惱不行句不可思議、四には清淨不行句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の智聚あり。何等をか四となすや。一には諸行智聚不可思議、二には呵責有爲智聚不可思議、三には煩惱智聚不可思議、四には清淨智聚不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の智性あり。何等をか四となすや。一には諸行智性不可思議、二には呵責有爲智性不可思議、三には煩惱智性不可思議、四には清淨智性不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の辯聚あり。何等をか四となすや。一には諸行辯聚不可思議、二には呵責有爲辯聚不可思議、三には煩惱辯聚不可思議、四には清淨辯聚不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の辯性あり。何等をか四となすや。一には諸行辯性不可思議、二には呵責有爲辯性不可思議、三には煩惱辯性不可思議、四には清淨辯性不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の修多羅あり。何等をか四となすや。一には諸行修多羅不

す。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の辭句あり。何等をか四と爲すや。一には諸行辭句不可思議、二には呵責有爲辭句不可思議、三には煩惱辭句不可思議、四には清淨辭句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の施設句あり。何等をか四となすや。一には諸行施設句不可思議、二には呵責有爲施設句不可思議、三には煩惱施設句不可思議、四には清淨施設句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の明句あり。何等をか四となすや。一には諸行明句不可思議、二には呵責有爲明句不可思議、三には煩惱明句不可思議、四には清淨明句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の信義句あり。何等をか四となすや。一には諸行信義句不可思議、二には呵責有爲信義句不可思議、三には煩惱信義句不可思議、四には清淨信義句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の行句あり。何等をか四と爲すや。一には諸行行句不可思議、二には呵責有爲行句不可思議、三には煩惱行句不可思議、四には清淨行句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の不思議句あり。何等をか四となすや。一には諸行不思議句不可思議、二には呵責有爲不思議句不可思議、三には煩惱不思議句不可思議、四には清淨不思議句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の無邊句あり。何等をか四となすや。一には諸行無邊句不可思議、二には呵責有爲無邊句不可思議、三には煩惱無邊句不可思議、四には清淨無邊句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の無限量句あり。何等をか四となすや。一には諸行無限量句不可思議、二には呵責有爲無限量句不可思議、三には煩惱無限量句不可思議、四には清淨無限量句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に四種の無窮句あり。何等をか四と爲すや。一には諸行無窮句不可思議、二には呵責有爲無窮句不可思議、三には煩惱無窮句不可思議、四には清淨無窮句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の不可稱句あり。何

には諸行知人不可思議、二には呵責有爲知人不可思議、三には煩惱知人不可思議、四には清淨知人不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の知名字あり。何等をか四と爲すや。一には諸行知名字不可思議、二には呵責有爲知名字不可思議、三には煩惱知名字不可思議、四には清淨知名字不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の辯才あり。何等をか四となすや。一には諸行辯才不可思議、二には呵責有爲辯才不可思議、三には煩惱辯才不可思議、四には清淨辯才不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の決定あり。何等をか四となすや。一には諸行決定不可思議、二には呵責有爲決定不可思議、三には煩惱決定不可思議、四には清淨決定不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種入あり。何等をか四となすや。一には諸行入不可思議、二には呵責有爲入不可思議、三には煩惱入不可思議、四には清淨入不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の度有り。何等をか四となすや。一には諸行度不可思議、二には呵責有爲度不可思議、三には煩惱度不可思議、四には清淨度不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の金剛句あり。何等をか四と爲すや。一には諸行金剛句不可思議、二には呵責有爲金剛句不可思議、三には煩惱金剛句不可思議、四には清淨金剛句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の呪術句あり。何等をか四となすや。一には諸行呪術句不可思議、二には呵責有爲呪術句不可思議、三には煩惱呪術句不可思議、四には清淨呪術句不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種出あり。何等をか四となすや。一には諸行出不可思議、二には呵責有爲出不可思議、三には煩惱出不可思議、四には清淨出不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た[三八]四種の修多羅句あり。何等をか四となすや。一には諸行修多羅句不可思議、二には呵責有爲修多羅句不可思議、三には煩惱修多羅句不可思議、四には清淨修多羅句不可思議なり、是を四種とな

【三八】四種の修多羅句。天台智顗の法華玄義に下の四句を次の如く藏通別圓の四教に配釋せり。而も法華玄義中に此の文を引用せるは天台の援引にあらずして章安大師が文を會釋せんが爲めに引けるものなりとの說あり。同書第十下を見よ。

及び其の演說亦た不可思議にして邊を盡すべきこと難しと爲す。童子よ、菩薩摩訶薩に復た四種の法有り。何等をか四と爲すや。一には諸行法不可思議、二には呵責有爲法不可思議、三には煩惱法不可思議、四には清淨法不可思議、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の相應あり。何等をか四と爲すや。一には諸行相應不可思議、二には呵責有爲相應不可思議、三には煩惱相應不可思議、四には清淨相應不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種門あり。何等をか四となすや。一には諸行門不可思議、二には呵責有爲門不可思議、三には煩惱門不可思議、四には清淨門不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の行說あり。何等をか四となすや。一には諸行行說不可思議、二には呵責有爲行說不可思議、三には煩惱行說不可思議、四には清淨行說不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の音聲あり、何等をか四となすや。一には諸行音聲不可思議、二には呵責有爲音聲不可思議、三には煩惱音聲不可思議、四には清淨音聲不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種語あり。何等をか四と爲すや。一には諸行語不可思議、二には呵責有爲語不可思議、三には煩惱語不可思議、四には清淨語不可思議なり、是を四種と爲す。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の語言道あり。何等をか四と爲すや。一には諸行語言道不可思議、二には呵責有爲語言道不可思議、三には煩惱語言道不可思議、四には清淨語言道不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の權密說あり。何等をか四となすや。一には諸行權密說不可思議、二には呵責有爲權密說不可思議、三には煩惱權密說不可思議、四には清淨權密說不可思議なり、是を四種となす。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の諸天を知るあり。何等をか四と爲すや。一には諸行知於諸天不可思議、二には呵責有爲知於諸天不可思議、三には煩惱知於諸天不可思議、四には清淨知於諸天不可思議なり、是を四種と爲す。童子よ、菩薩摩訶薩復た四種の人を見知することあり。何等をか四となすや。一

く、

一切世界中の、所有諸の微塵、并びに泉池の源、大海の所有水。設ひ巧みに算術すること有るも、其の邊を知ること有ること無し、亦た塵の數と、及び水の渧とを知らず。如來導師、斯の譬喩を引き已つて、其の水の渧限り無く、微塵も亦た復た然たり。我れ一切生を觀ずるに、彼の塵の數よりも多し、發心及び信を起すもの、一時に悉く知るなり。若し我れ自身に於いて、外皮の色を顯現することあらば、諸の衆生の信欲、譬へ知る者有ること無し。若しは相と及び業と、其の色像是の如く、能く佛を知る者なし、我が相正に是の如し。佛は相を遠離して、法身を顯示す、甚深にして無限量なり、是の佛不思議なり。正覺は不思議なり、如來の身も亦た然なり、是れ不思[議]の法身、法身を顯はすを以ての故に。心業知ること能はず、能く此の身と、及び其の身相を思ふこと無く、都て測量する者無し。彼の法は無限量なり、億劫に修習せし所、此の難思の身を得て、淨き大光明を發す。衆生能く取るもの無く、之を取るに不可得なり、是の故に如來の身は、量り難く思ふ可らず。諸の無量法に於いて、而かも「凡愚は」限量を取る、無分別法中において、佛は分別あること無し。分別限量において、無分別を說く、離念無分別、是れ佛の不思議なり。限無きこと虛空の如く、能く度量する者莫し、佛身も亦た復た爾なり、猶し太虛空の如し。若し諸の佛子有りて、如實に我が身を知らば、彼れ佛を成ずることを得、世[三五]親は不思議なり。

[三六]童子よ、[三七]菩薩摩訶薩は四種の言論の不可思議と及び其の演說亦不可思議にして盡邊すべきこと難きとあり。何等をか四と爲すや。一には諸行言論不可思議、二には呵責有爲言論不可思議、三には煩惱資助言論不可思議、四には清淨言論不可思議なり。童子よ、是を菩薩の四種言論不可思議、

【三五】親。底本は覩に作る今は三本、宮本、聖本による。
【三六】童子よ。以下三本及び宮本は第六卷なり、梵本第二十三顯示如來不思議品、(Tathāgatācintyanirdeśa.)
【三七】菩薩、以下七十三句の四種法門を說く。

す。我が心解脱することを得、一切種物中において、能く其の性を體り知り、而かも智慧を起す。千億佛刹に於いて、我れ中に於いて化を現じ、衆生の爲めに說法す、是の故に見る可らず。[三四]相無く狀貌無く、猶し虛空の如し、我が身不可說なり、語言の道斷するが故に、法身は大雄猛なり、其の身は法より生じ、曾つて色身有ること無く、之を說いて以て佛と爲す。若し此の身を說くに、聞き已つて欣樂を生ぜば、彼の諸の魔波旬、其の便を得ること能はず。是の深妙の法を聞いて、驚怖を生ぜず、活命のための故に、佛菩提を誹謗せず。千億修多羅を、如實智もて演說し、衆生の爲に、彼彼所至の處を照明す。

童子よ、是の如來應正遍知、若し如來の色身相業を知らんと欲せば終に知ること能はず、若しは青、若しは青色、若しは青の相似、若しは青の相貌、若しは黃、若しは黃色、若しは黃の相似、若しは黃の相貌、若しは赤、若しは赤色、若しは赤の相似、若しは赤の相貌、若しは白、若しは白色、若しは白の相似、若しは白の相貌、若しは紅紫、若しは紅紫色、若しは紅紫の相似、若しは紅紫の相貌、若しは頗梨、若しは頗梨色、若しは頗梨の相似、若しは頗梨の相貌、若しは火、若しは火色、若しは火の相似、若しは火の相貌、若しは金、若しは金色、若しは金の相似、若しは金の相貌、若しは電、若しは電色、若しは電の相似、若しは電の相貌、若しは蘇、若しは蘇色、若しは蘇の相似、若しは蘇の相貌、若しは毘琉璃、若しは毘琉璃色、若しは毘琉璃の相似、若しは毘琉璃の相貌、若しは天、若しは天色、若しは天の相似、若しは天の相貌、若しは梵、若しは梵色、若しは梵の相似、若しは梵の相貌、童子よ、是を如來の身と爲す、如來の一切の身相は量るべからず、思議すべからざるが故に亦た說く可らず、成就する所の色身、諸天世人能く測量することなし、是の如き長短廣狹一切種、限齊有ること無く、思議す可らず、是の如き等數ふ可らず。爾の時世尊頌を說いて曰

【三四】相無く狀貌無く。此の法身を釋する下、僧肇の法身の釋によれば解了し易し。僧肇法身を解して曰く、法身は虛空身なり、無生にして生ならざる無く、形無して形あらざる無し、三界の表に超へ、有心の境を絕す、陰入に攝せざる所、稱讚の及ばざる所、寒暑も其の患を爲すこと能はず、生死以て其の體を化すること無し云々と。

にして甚だ光曜、其の相平等にして虚空の如し、種種の差別不可得なり。諸佛菩提既に是の如し、其の相狀貌も亦た復た然なり、其の相狀貌不可得なるがごとく、如來の身相亦た是の如し。菩提の相貌及び身、諸佛世界亦た復た爾なり、諸力諸禪諸解脫、是の如く悉く其に同じく一相なり。諸佛の體性正に此の如く、如來世親亦た復た然なり、能く佛を見ることを得る者有ること無し、肉眼何ぞ能く正覺に見んや。無量の多人是の說を作す、我れ曾て諸佛に見ゆることを得たりと、金色にして微妙なる無比身、一切世間皆顯照す。諸佛如來の加ふる所、其の力能く神通有るを以て、便ち能く彼の身を見ることを得、種種の妙相自ら莊嚴せり。[三二]廣長の相に隨つて能く現ず、世間能く其の相を見るものなし、若し能く身相を知ること有らば、佛と世間と別有ること無し。若し能く其の身量を知ること有らば、所謂一切諸如來、佛身と無身と差異無く、人と修羅とも亦た復た然なり。一切諸心悉く空寂にして、諸の[三三]果報を受くる相も亦た爾なり、名色相貌既に是の如く、清淨具足して光明有り。能く知る者有ること無き、此の寂滅定を修すること、惟世間親のみ有つて、不思億劫に修し給へり。無量の白淨なる法は、此の三昧より出づ、定報力を以ての故に、他我が身を見ず。若し是の如き心有らば、名色も亦た復た然なり、心の類は各同じからず、名色の相も亦た爾なり。若し麁大の想を以てせば、名色彼れに來り隨ふ、名色の若しは麁細は、悉く憶想より起るなり。若し人の想微細ならば、名色も亦た此の如し、名色若し不著ならば、其の心身光照なり。我れ過去生、七十阿僧祇を念ずるに、此の三種の惡想、本より未だ曾つて起らず。其の無漏心を以て、不思議億劫、衆生を利益するが故に、他我が身を見ず。若し此の物を以てすること有らば、心意棄捨することを得て、是の人彼の物に於いて、更に共に和合せ

【三二】廣長の相云々。の下の佛身の說明註維摩方便品の僧肇の釋を見よ。

【三三】果報。底本は異報に作る。今は宋元明三本及び宮本聖本による。

の智を求めんと欲し、如來の身を知らんと欲し、如來の智を知らんと欲せば、此の三昧經典に於いて應に受持し讀誦し、他の爲めに廣說し修習相應すべし。童子よ、彼の如來の身は無量の福德の出生する所なり、如來は一義を說けり、所謂諸法は因より生ずるが故に、是れ諸相を離れ甚深なるを以ての故に、法は限量無く分齊無きを以ての故に、法は相有ること無し、相性無きを以ての故に、法は相有ること無し諸相を離るるが故に、法は動搖無し善く安住するが故に、法は二有ること無し惟一相なるが故に、法は見る可らず眼境を過ぎたるが故に、法は思ふ可らず心地を過ぎたるが故に、法は動轉無し戲論を離れたるが故に、法は說く可らず音聲を過ぎたるが故に、法は居處無し窟宅を離れたるが故に、法は窟宅無し言音を離れたるが故に、法は所依無し諸見を過ぎたるが故に、法は諸漏無し諸報を過ぎたるが故に、心堅固なる以て諸の欲を離るるが故に、不壞心を以て諸の瞋を離るるが故に、堅き正智を以て諸の癡を過ぐるが故に、所說有り諸法空と說くが故に、生有ること無し諸の生を斷ずるが故に、無常は但だ言說なるを以ての故に、聲地を出離す聲を寂滅するが故に、音聲有り思想を以ての故に、思想を同うす和會するを以ての故に、世俗を離る第一義諦を以ての故に、清涼なるを以て熱惱を離るるが故に、第一義諦は如實語なるを以ての故に、熱惱無し、涅槃を以ての故に、壞有ること無し、能く勝るるもの無きが故に、取著無し、戲論義を滅するが故に、戲論無し攀緣を離るるが故に、邊際有ること無し、福を說くを以ての故に、微塵有ること無し微細を說くを以ての故に、次第に大神通あり本業出生の故に、自由を得、自在力の故に、破壞なし堅實なるを以ての故に、邊際有ること無し名號無盡なるを以ての故に、廣大なり大悲の本業の故に、是を如來の身と爲す、爾の時に世尊偈を說いて言はく。

　若し世間の親を見、　及び佛身を知らんと欲するもの有らば云何せんや、　此の三昧を修習し已らば、　即ち能く如來の身を知るなり。　佛は福德より出生する所にして、　其の身清淨

しく修行するも、我れをして涅槃を求めしめんと欲せず。大王よ汝が兄は甚だ愚惡なり、都て汝をして活きしめんと欲せず、二比丘有り爲れ惡師なり、神通力を以て遊んで空を行く。我れ知るを以ての故に此に來至せり、今悉具に大王に向つて說かん、汝速やかに二りの呪師を殺すべし、必ず時に及んで後悔すること勿れと。王弟尋いで時に鉀仗を被て、惡人の言に從ふが故に彼に往く、幷に一切の諸軍衆、彼の林中の比丘所に詣れり。林に依れる所有龍夜叉、彼の王弟の惡心にて來れるを知つて、沙礫石を雨らして大いに畏る可く、王及び軍衆悉く摧滅せり。今當に惡知識の言を觀ずべし、是の如き大王衆をも摧滅す、法師の所に於いて恚心を起さば、六十生に於いて[二七]阿鼻に墮するなり。時に彼の取著の惡比丘、是の如く刹利王を勸化せしによつて、後に於いて十億生を滿足して、無量の地獄の苦を受けたり。彼の天彼の王者を勸め導き、及び法師を擁護せしをもて、恒河沙數の佛に見え、佛に覲ふて供養し及び修行せり。是の王の眷屬六億に滿ち、皆王と共に去つて法を聽く者、其の道心を發せし所の者、各別の世界において成佛することを得たり。彼の佛の壽命多億歲にして、智慧無等にして不思議なり、彼の人悉く此の三昧を修し、說き已つて皆當に[二八]般涅槃すべし。是の如き勝れたる妙智を聞くことを得て、能く尸羅の功德法を集め、勇猛精進にして不放逸なり、常に一切惡知識を遠ざかれり。

[二九]童子よ、菩薩摩訶薩は應に身に著せず能く命を棄つべし、何を以ての故とならば、童子よ、若し身に著する者は不善法をなす、是を以て菩薩應に[三〇]色身及び[三一]法身を知るべし、何を以ての故にとならば、諸佛は法身の所攝にして色身に非らざるなり、佛は法身を以て顯現す、色身には非らざるなり。童子よ、是の故に菩薩摩訶薩、佛の行ぜし所を行はんと欲し、如來身を求めんと欲し、如來

【二七】阿鼻(Avīci)。無間と譯す、無間大地獄は所在大いさは前に註せるが如し、其の中に墮するときは苦間斷無く身に逼まるが故に此の名あり。

【二八】般涅槃。圓寂、入滅等と譯す、前に註せる涅槃の項を參照せよ。

【二九】童子よ。以下梵本第二十二顯示如來身品、Tathāgatakāyanirdeśa.)

【三〇】色身とは、色受想行識の五蘊假和合の身なり、色は四大によつて成りたるものにして、五蘊中特に色を標して有情身を色身と云ふ。

【三一】法身は、不生不滅の眞如の理身なり。

離し、惟願はくば大王よ放逸なること勿れ。壽命は迅速にして久しく停らず、山瀑の水激川の流の如し、老病死の爲めに纒逼せられ、能く己が業の如く救ふもの有ること無し。惟だ願はくば大王よ正法を護り、諸佛十力の法を建立し、後の惡世末代の時に於いて、應に如法に住して法の朋となるべし。是の如き無量の聰慧者、慈心を以ての故に王に向つて說けり、王及び六億の諸の眷屬、咸無上菩提心を發せり。時に王是の淨法句、調柔寂滅の妙語言を聞いて、善心踊躍して愛樂し、頭面に禮敬して辭去せり。時に無量の餘の比丘あり、利養の爲めの故に王宮に入る、王彼の衆の行の端しからざるを知つて、幷びに有德に於いても恭敬せず、過去の導師の法已に盡き、未來惡世增長の時、德器の人甚だ尠少にして、放逸者は多有無量なり。剛强慳慢の諸の比丘、利養を求めんが爲めに諸見に著す、佛法中に於いて正解せず、諸の非法を以て王に向つて說く。應當に彼の法師を殺害すべし、本王の爲めに空斷を說く者、王及び我れに空斷を修することを勸め、都て王に眞の涅槃を示さず。其の業報は悉く散壞す〔と說き〕、諂者は陰は空無なりと說く、若し能く彼の法師を殺害せば、必ず大法をして久住することを得しむと。爾の時に常に王を護る神有り、是は王の過去の善知識なり、長夜に王を護つて惡を離れしむ、彼の天〔神〕王に是の如き言を告ぐ。〔曰く〕願はくば王よ愼で是の心を起すこと勿れ、惡知識の言は甚だ畏る可きなり、聰慧の法師の所に於いて、惡人の言を用ひて殺害を興すこと莫れ。大王憶念せざるべきや、林間の比丘に說ける所を、後の末代惡世時に於て、王應に安住して如法なる朋となるべしと。天彼の王の爲めに實語を說き、諸佛の法に於いて捨離すること莫からしむ、時に王に更に餘の惡弟あり、邊方に在つて國境を鎭む。時に惡比丘往いて敎化し、法師を殺さしめんとして空斷を說き、勸めていはく我れ昔より來久

諸法も亦た水中の月の如し。衆生の壽命は不可得なり、此の界に沒して他世に生じ、[22]所作の業は失壞無し、[23]黑白の業報は亦た亡びず。因果相應の勝れたる法門は、微細にして見難く佛のみの境界なり、文字句義不可得なり、是の妙なる菩提は佛の所說なり。總持大智慧を積聚し、億那由の經定より出づ、那由他佛の所行の道にして、此の如き三昧は佛の所說なり。善能く諸の病患を滅し、衆くの菩薩の功德財を集め、一切諸佛咸稱讚し、億那由の天供養する所なり。諸の凡夫に於いて實語を說き、常に一切の[24]外道の法を遠ざけ、諸佛所讚の勝れたる戒財は、空中の電の執る可きこと難きが如し。過去無量億佛所において、智者は戒と施とを修行す、久遠に惡知識を遠離し、無上なる父の資財を得るなり。彼に比丘あり是れ法師なり、梵行を修行する慧日の子なり、此の法を聞いて而かも隨順し、最上の菩提心を發せり。彼の因陀羅幡幢佛、彼の法師比丘に告げて言く、比丘よ比丘の第一難は、彼の菩提に於ける發心難なり。戒を護ることは猶し摩尼珠の如く、善友に習近して菩提に順じ、惡知識に於て恒に遠離せば、速かに無上菩提の果を得べし。[25]往昔此の閻浮提に於いて、二りの放逸ならざる長者子ありて、佛法中に於て出家し、猶し犀牛の山林に依るが如くなりき。[26]四禪を得て神通を有し、諸の偈論に善くして畏るる所無く、地及び虛空の相悉く知り、空中を行くこと鳥の飛ぶが如し。寒林中に安住する時、林花繁茂して甚だ奇特なり、一切異鳥悉く來歸し、二長者子と共に語言せり。爾の時有る王出でゝ遊獵せり、其の語音を聞いて其の所に至る、時に王恭敬して法を聽き、彼の法師を深く愛敬せり。時に王共に相ひ慰め問言し、是の語を發し已つて前に在つて坐せり、時に王多くの眷屬を具有し、王に從つて行く者六億に滿てり。二の中の有一の是の法師、王に見え告げて言はく善く諦かに聽け、諸佛の出世には甚だ値ふこと

【二二】所作の業。身三口四意三にて作れる業は斷惑證理するまで永恒に持續され、善業因には善果を感じ、惡の業因には惡果を感ずるを云ふ。

【二三】黑白の業報とは、黑とは惡、白とは善の意。卽ち地獄餓鬼畜生の三趣を黑業報と言ひ、人間天上の兩趣を白業報と稱す。

【二四】外道とは、涅槃の悟りの道以外に常に心を運ぶが故に外道と云ふ。

【二五】往昔。以下梵本第二十一本生修行品、(Pūrvayoga)。

【二六】四禪とは、色界の四禪天に生ずべき四種の禪定。

と不愛とに於いて取る所なし。不愛者と共に住することは難く、親愛者に於いては遠離し難きも、此の如き二種の朋を棄捨して、專ら正法を求むるは是の人の樂とするところ。若し有[人]聲を聞いて貪愛を起さば、是の人必ず瞋恚を起し、愚癡憍慢に纏縛せられて、慢力を以ての故に苦惱を得るなり。若し能く平等に住し、善能く謙下して高慢無きこと有らば、愛と不愛とを善く脫することを得、彼れ能く常に欣喜行に住するなり。戒に安住して善清淨なり、無垢心を以て心禪定を樂ひ、恒常に樂つて山林中に住す、是の人永く諸の疑網を離るるなり。若し人惑を懷き顚倒あらば、愚癡にして恒に諸欲を樂ふこと、猶鷲鳥の尸肉を貪るが如くならん、是の人必ず自ら魔力に隨ふ。

此の偈を說く時、月光童子は、不思議甚深佛法中に於いて一心安住することを得、堪能に修多羅を演說せり。爾の時に般遮尸棄乾闥婆等、隨順音聲忍を得、無量無邊の衆生、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無量の衆生人天中に於いて安樂利益を得たり。

〔二〕爾の時佛、月光童子に告げて言はく、菩薩摩訶薩、諸の善根功德法利に於いて應に善く決定すべく、應に多事ならざるべく、應に惡知識を離るべく、應に善知識に依るべく、善知識所において應に常に諮問し、法を樂がひ聞きて厭足有ること無かるべく、應に欣喜すべく、常に應に法を求めて常に法を攝し、應に正法を說くべく、應に善巧にして菩薩に諮問すべく、菩薩の所に於て師の想を起し、法師の所に於いて應に尊重して己が師の想をなすべし。童子よ、若し菩薩有つて能く此の法を受行せば、是の人不思議を得、辯才を具足し、信を得て深く不可思議佛法の海に入り、不思議甚深佛法に於いて心決定を得、人天中に於いて能く照明とならん。爾の時に世尊偈を說いて言はく。

過去世多億劫、不可稱量不思議に於いて、爾の時に佛兩足尊あり、因陀羅幡幢王と號す。彼の時に佛此の三昧を說く、謂はく衆生無く壽命無く、猶し泡沫及び炎電の如く、

【二】爾の時。以下梵本第二十因陀羅幡幢王品、(Indraketudhvajarāja.)

鬼と天と人と等なり、皆悉く清涼にして逼窄なし。彼の毛道處に海池、幷に諸の河流及び井泉を現じて、皆悉く逼らず復た窄らず、是を佛法の不思議と謂ふなり。彼の一毛頭に諸山、[15]斫迦婆羅及び須彌、[16]目眞隣陀[17]大目眞を現ず、是を佛法の不思議と曰ふ。彼の一毛頭に[18]地獄、燋熱寒氷糞屎等を現じ、諸の衆生有つて彼に生ぜし者、無量なる極苦惱を受くるなり。彼の一毛頭に天宮を現ず、妙宮廣大にして十六[19]旬あり、毛處の諸天無量數なり、具さに諸天の極快樂を受く。彼の毛頭處に佛出世し、其の中佛法極めて熾盛なり、彼の無智なる者は能く覩ること莫し、是の如きは宿業に不淨を行ぜしなり。毛頭處において佛の涅槃を聞き、或る時は復た法の滅盡を聞き、彼の毛頭處において或は復た、佛今現在法を演說し給ふを聞く。或は復た人有りて毛端に於いて、己が壽命は窮極無しと謂ひ、或は復た毛處において短命にして、生じ已つて卽ち滅して久しく停らずと聞く。或は復た毛道是の想を作す、我れ佛に見ゆることを得て供養を設くと、佛亦出でず供養せずと、直に自ら想ふて心而かも欣喜するなり。譬へば人有りて夢中に於いて、[20]五欲に耽著して快樂を受け、覺め已つて其の欲事を見ず、但だ夢なるを以ての故に妄りに此を見るが如し。所見所聞憶念の法、猶し夢想の如くにして眞實無し、若し此の三昧を得ること有らば、悉く能く是の如き法を了知するなり。其は世間に於いて恒に愛樂す、謂はく愛と無愛とに貪著せず、常に能く山林を愛樂し、恒に此の如き沙門の樂を受くるなり。若し人諸の取著あること無ければ、一切諸の我所を遠離し、世間に遊行すること猶し犀牛のごとく、風の空を行いて障礙無きが如し。道を修習して實智を起し、一切諸法空にして無我なり、若し能く是の如き法を修すること有らば、彼の人の辯才は邊有ること無し。此の人恒に快樂を受け、其の心世間に著せず、其の心猶し空中の風の如く、愛

[15] 斫迦婆羅(Cakravāḍa)。

[16] 目眞隣陀(Mucilinda)。摩揭陀國にある山。

[17] 大目眞隣陀(Mahā-mucilinda)。

[18] 地獄。贍部洲の下四萬踰膳那より二萬踰膳那の間に廣さ是に等しき無間地獄あり、其の上に燋熱・寒氷・糞屎の地獄あり。詳くは俱舍論第十一卷を見よ。

[19] 旬とは、由旬の略、一由旬は或は四十里と云ひ、或は三十里なりと云ふ。

[20] 五欲とは、色・聲・香・味・觸に對して起る欲。

是の如き勝れたる經典を聞くことを得るなり。若し後の未來世に於いて、是の如き修多羅を聽聞し、聞き已つて悲泣して涙を落さば、我れ已に彼の人を供養す。我れ今汝[等]一切に勸め語る、我が前に所有現在せる者、此に由るが故に菩提道を得ん、是れ此の經典を付囑するを以てなり。

[一]是を以て童子よ、菩薩摩訶薩、若し是の如き三昧を樂求せんと欲せば、不可思議諸佛の所説の法を應に善巧に知るべし。不思議佛法に於いて應さに諮請すべし、應に善巧に不思議佛法を求むべし、不思議佛法を聞いて驚怖を懷くこと勿れ、怖畏を增すこと勿れ、恒に怖畏すること勿れ。爾の時に月光童子佛に白して言さく、世尊よ、云何んが菩薩不思議佛法に於いて應に善巧に知るべき。云何んが不思議佛法應さに求めて請問すべき、云何んが不思議佛法深く信じ清淨なる、云何んが不思議佛法を聞いて驚怖を生ぜず、怖畏を增さず、恒に怖畏せざるや。爾の時に乾闥婆子有り、名を般遮尸棄と曰ふ、共に餘の乾闥婆子五百の同類と倶なり、音樂種種の樂器を持ち、佛の後に隨從して佛を供養せんと欲す、爾の時般遮尸棄是の如き念を作す、如我れ帝釋[二]憍尸迦及び[三]三十三天前所に於いて供養を設け、今此の歌詠樂音を以て、如來天中の天應供正遍知を供養せん。爾の時に般遮尸棄乾闥婆子、餘の五百の乾闥婆子と共に、皆各同時に琉璃琴を撃ち、妙なる歌音を出せり。爾の時に世尊是の如き念を作し給ふ、我れ無作遊戲神力を以て、彼の月光童子をして不思議佛法中に於いて一心に住することを得しめ、復た般遮尸棄乾闥婆子等の樂器の歌音をして現ずること殊妙ならしめんと。爾の時に佛、神力を以ての故に、彼の五百の音樂をして善稱和雅にして、無欲の音を發し、法に順ずる音を發し、法に應ずる音を發せしめ給ふ。所謂不思議佛法に應ずる偈に言はく。

一[四]毛道に於いて多佛を現ず、　其の數猶し恒河沙の如く、　佛刹國土も亦た然なり、　彼の佛刹體空にし無相なり。　一毛端に於いて五趣を現ず、　所謂地獄　諸の畜生、　及び諸の餓

【一】 是を以て童子よ。以下梵本第十九顯示不思議佛法品、(Acintyabuddhadharmanir-deśa.)

【二】 憍尸迦。帝釋天の姓なり。昔摩訶陀國に婆羅門ありて名を摩訶と云ひ姓を憍尸迦と言ふ。知友三十二人と共に福德を修して、須彌山頂第二天に生れ摩訶婆羅門天主となり三十二人は補臣となれり。故に帝釋天を本姓に從ひ憍尸迦と云ふ。

【三】 三十三天。欲界の第二天にして須彌山の頂上にあり。中央は帝釋天にして、四方に各々八天あり以て三十三天を成ず。今は其の天に住する天人を指す。

【四】 毛道とは、凡夫のこと、愚異生、愚生、小兒別生等と云ふ。愚癡なること小兒の如くにして、毛の風に隨つて東西に轉ずるが如くに輪廻轉生するが故に此の名あり。

大威德、我れ今正當に汝を加護すべし、末代惡世時に在つて、汝をして諸の障難、命難梵行の諸の障礙有らしめず。更に餘の者有りて一時に起ち、法を持つ比丘八百人、自ら言はく我れ末世中に於いて、必ず當さに是の經典を護持すべしと。爾の時多億の夜叉龍、即時に坐より起立し、更に餘の八那由他有りて、世尊に是の如き言を啓請せり。我等此の比丘所、謂はく向きに坐より起ちし者を、惡世末代時に在つて、我れ必ず彼の比丘を擁護せん。當に是の如き經典を說く時、佛神力を以て加護するを以ての故に、所有恒河沙數の界、無量の佛刹悉く震動せり。其の動ぜられし諸の世界に隨つて、界に隨つて應化して多佛となる、悉く是れ釋迦の所變にして、是の如き修多羅を演說するなり。一切の所有諸の佛刹、不可思議億の衆生、悉く是の勝法を聽聞することを得て、諸佛如來智に安住するなり。此の世界佛刹中に於いて、數九億の諸天衆あり、一切悉く菩提心を發し、即ち佛所に於いて妙花を散ぜり。所有比丘比丘尼、[八]優婆塞及び優婆夷、其の數七億六千萬あり、悉く是の修多羅を聞くことを得たり。牟尼王尊彼れに記を授け給ふ、必ず當に彼の兩足尊を見ゆべし、其の數猶し恒河沙の如し、皆菩提行を修習することを得ん。彼の諸佛を供養し恭敬するは、如來の智慧を求めんが爲めの故なり、悉く能く彼の諸佛の所に於いて、是の如き妙經典を聞くことを得。八億劫數を過ぐる中に、皆當に如來尊と成ることを得べく、彼の福德者は一劫において、衆生を度脫して安樂ならしめ、其の彌勒如來所に於いて、無上なる勝供養を施設し、善く彼の佛の眞妙なる法を持ち、悉く[九]安養國に往生することを得るなり。彼の垢穢を離れたる如來尊、其の佛を號して[一〇]阿彌陀と曰ふ、彼に於いて廣く勝れたる供養を設く、無上菩提を求めんが爲めの故なり、其の七十阿僧祇に於いて、是の如き劫數を滿足せる中、一切の諸惡趣に墮せず、

【八】優婆塞。底本は優波婆塞に作れり。今は宋元本による。

【九】安養(Sukhāvatī)。

【一〇】阿彌陀(Amitābha)。無量光と譯す。

梵行を修行し、其の心に諸の穢濁あることなきときは、常に諸佛の爲めに加護せられて、此の經當に彼の人の手に入るべし。若し人諸の無量佛に於いて、給侍し恭敬して供養を修せば、是の人當に末世中に生れて、此の經彼の人の手に墮在すべし。若し人過去世に在りて、外道中に於いて惡行を行ぜんに、彼の人是の修多羅を聞いて、・其の心喜ばず嫌惡を起さん。佛法中に於いて出家することを得、涅槃の爲めならずして活命を求め、慳嫉妬を以て自ら纒ひ、彼れ必ず佛の經典を誹謗せん。他家に貪著して慳悋を起し、魔波旬の爲めに加護せられ、專ら利養を求めて禁戒を破し、佛法中に於いて必ず信ぜず。往昔善根を殖えず、未だ智慧を得ずして高慢を起し、我見に依止せる愚なる凡夫は、亦た末世に於いて心に信無し。其の[三]世間の禪定中に於て、便ち已に果證を得たりと謂ふ想をなし、自[四]ら羅漢なりと謂て他の供を食し、彼れ必ず佛の勝れたる菩提を謗らん。所有一切の閻浮處に於ける、一切の佛の塔廟を毀壞し、若しは佛の菩提を毀謗することあらば、其の罪廣大にして彼より多からん。若し[五]阿羅漢を殺害すること有らば、其の罪無量無邊際なり、若し修多羅を誹謗するあらば、其の罪報を獲ること彼よりも多し。誰か能く此に於いて勇猛を起し、末代惡世中に在りて、正戒正法毀壞する時、是の如き修多羅を顯說するや。童子悲號して起立し、[六]叉手合掌して是の言を發す、我れ今朝の師子吼に於いて、最勝なる法王の前に在り。我れ如來滅度の後、末代惡世時に於いて、身命を棄捨して悋惜せず、廣く是の如き修多羅を弘めん。能く愚夫の語言道、不實なる誹謗極損辱、罵詈輕毀及び恐怖を忍び、勇猛精進して忍受せん。一切の諸惡業、過去世に造れるものを除去し、內を懷めて瞋恚を生ぜず、必ず當さに佛法中に安住すべし。淨妙なる[七]閻浮金色の手、彼の月光童子の頂を摩で、如來和雅の音を發し、月光童子

【三】世間の禪定とは、四禪四無色定等の有漏の禪定を云ふ。見道以上の聖淸淨三昧、寂滅妙離三昧等に簡ぶ。今正しくは諸法體性平等無戲論三昧に簡ぶなり。

【四】羅漢。阿羅漢は聲聞緣覺等二乘の求むる悟果にして、譯して應供と云ふ。卽ち人天の供養を受くるに足るべき位なるが故なり。依つて本文に他の供を食し云々とあるなり。

【五】阿羅漢を殺害云々とは、五無間業の一なり、然るに此の三昧經を誹謗する者の罪は更に彼に勝ることを說く。

【六】叉手合掌。兩掌と十指を各合し、中指のみを交叉するをいふ。

【七】閻浮金（Jambunada-suvarṇa）。閻浮檀金の略稱なり、又鬱金とも云ふ。其の色赤黃にして紫色を帶ぶ、南閻浮洲の上地に樹林ありて、林中に河流れ、其の河中より砂金を產す、此の砂金を閻浮檀金と云ふ。

するを以ての故なり。　佛前に住して讃歎し、　喜心にて妙なる多百の偈を説き、　其の智慧に於いて損せざるは、　是の如き寂定を説くを以ての故なり。　十力の世尊前に在つて坐し、相好莊嚴にして可愛の身、　無垢鮮淨にして金山の如くなるは、　是の如き勝れたる定を修するを以ての故なり。　彼の智曾つて損減あること無く、　多聞にして智慧亦た豐足せり、最勝なる大法藏を成就せるは、　是の如き三昧を説くを以ての故なり。　智慧廣大にして量有ることなく、　多百劫説くも而も盡きざるは、　是の如き深き寂定を聞きて、　佛の所説の如く安住するが故なり。　[二]一切諸難處に生まれず、　是の如く佛子恒に王となり、　如法に國を治めて常に安隱なるは、　是の如き勝れたる定を持するを以ての故なり。　無量無邊億劫數、十力彼の功徳利を説き、　其の少分を説くも盡すこと能はず、　猶し大海の一滴水の如し。是の時に童子甚だ欣悦し、　忽然として坐より服を整へて起ち、　十爪掌を合して面を佛に向け、　大欣喜を生じて讃じて言はく、　世尊大雄甚だ奇特なり、　能く世の親となり光明と作り、　大牟尼尊功徳を説き、　是の如き勝れたる利益を顯示し給へり。　大聖世雄我が爲めに、　願はくば憐愍を垂れて救護するが故に、　何人か能く末代時に於いて、　是の如き修多羅を聽聞するかを説き給へ。　迦陵頻伽の妙音聲、　深遠雷震悦樂の聲、　無量の勝れたる智慧を具足し、　月光童子に告げて是の言を作さく、　汝今諦かに聽け我れ當に説くべし、　無上最勝微妙なる行をもて、　若し法を護持せんと欲せば、　是の如き三昧經を聽受すべし。　虔心にて一切佛を供養し、　清淨心を以て佛智を求め、　復た應に慈愍心を修習して、　是の如き修多羅を聽受すべし。　頭陀を成就して過行を離れ、　寂靜功徳林を修行し、大勝上妙智に安住し、　是の如き三昧經を聽受せよ。　惡行を行ずる諸の衆生、　及び禁戒を毀破する者、　是の如き諸の惡比丘の輩は、　是の三昧經を聞くこと能はず。　勇猛に諸の

【二】一切諸難處とは、八難處のこと。見佛聞法等の道業を修するに障りとなる三途等のことなり。八難處に就ては後に註す。

卷の第五

[一]佛復た月光童子に告げて言はく、若し菩薩摩訶薩、此の三昧經典に於いて、受持し讀誦し他の爲めに解說し、說の如く修行せば四の功德を得ん。何者をか四となすや。一には福德を成就し滿足す、二には怨家の爲めに壞せられず、三には無邊の智慧を成就し、四には無量の辯才を成就するなり。童子よ、若し菩薩摩訶薩有り、能く此の三昧經典に於いて、受持し讀誦し繫念し思惟し廣く人の爲めに說くこと有らば、是の如き四種の功德を獲得するなり。爾の時世尊、偈を說いて言はく、

福德成就して恒に滿足せり、一切時に於いて常に斷ぜず、是の如き三昧を受持するが故に、諸の如來の境界を得るなり。勇健の功德に守護せらる、一切時に於いて常に成就し、是の如き勝寂定を修行して、必ず無上なる勝菩提を獲ん。彼れに一切の諸怨敵無く、常に怨の所害とは爲らず、智慧成就して悉く滿足し、一切時に於いて恒に斷ぜず。彼の人無量の智を成就し、亦た復た無邊の慧を具足し、無量無邊の勝れたる辯才は、是の如き勝定を持するを以ての故なり。福德聚を成就し滿足し、亦た最妙なる菩薩行を成じ、彼れに一切の諸の怨敵無きは、寂滅なる勝定を持せるを以ての故なり。彼の智は廣大にして邊有ること無く、亦た無邊の勝れたる辯才を成[就]せり、其の音美妙にして甚だ樂しむ可きは、是の如き勝定を說くを以ての故なり。善友智者に愛樂せらるるは、謂はく能く自ら義を宣說するが故なり、諸人皆是の福藏を知るは、是の如き勝れたる定を宣說するが故なり。勝れたる利養妙なる衣服を得、亦た勝妙なる上甘膳を獲、顏貌端正にして甚だ愛すべきは、是の如き寂定を持つを以ての故なり。多く諸佛世間の親に見え、無等の供を以て佛を供養し、一切の諸の障難有ること無きは、是の如き勝定を持

【一】佛復た。以下梵本第十八不失受持三昧品、Samādhyanuparindanā.

通を獲得し具足し、神足力を以て亦た佛に詣し、諸の眷屬億萬衆と與なりき。倶共に如來尊に往詣し、頂禮し足に接して佛前に住せり、佛時に王の心に樂欲せるところを知りて、即ち王の爲めに此の三昧を說けり。是の王此の三昧を聞き已つて、王位を棄捨して出家し、其出家し已つて此の定に於いて、受持し讀誦し他の爲めに說けり。後時に六千劫を過ぎて、佛たることを得て號して蓮華上と曰ふ。王に眷屬六百億有り、倶に時に王に從つて佛に詣せり。彼[等]是の如き勝三昧を聞き、欣喜踊躍して亦た出家せり、其[等]の出家者此の定に於いて、受持し讀誦し他の爲めに說けり。劫過ぐること六十那由他にして、同一劫中悉く成佛せり、善調伏智上佛と號し、無量の人天供養を興せり。一一の諸佛大名稱にして、恒河沙數の衆[生]を度脫せり。[時の]堅固力王とは我が身是なり、勝妙なる菩提行を修行せし、昔時の我が子五百人は、是れ彼の最後の護法者なり。我れ是の如き千億劫に於いて、勇猛精進にして懈怠を離れ、專心に此の勝三昧を求めしは、正に無上菩提の爲めの故なりき。童子よ若し諸菩薩有つて、此の如き勝定を得んと欲せば、精進勇猛にして命を顧みず、應に我が勤精進を學ぶべし。

て多佛に見えしむ。我れ過去世劫時を念ずるに、佛有り號して妙聲身と曰ふ、彼の佛前に於いて弘誓を發し、恒に忍力に安んじて傾動せじ。本是の如き要誓を作せし時より、歳八億四千萬を經たり、時に魔魅毀し來つて罵辱するも、我が心初より變動有ること無し。爾の時魔官を降伏し已るや、我が慈忍の堅固力を知り、清淨心を以て足に接して禮し、五百衆菩提心を發せり。我れ往昔慳悋無うして、恒常に布施を行ふことを讃歎し、大富豐財にして譽聲有りしをもて、飢饉時に於いて施主となれり。若し比丘有つて是の定を持ち、或は能く修習して他の爲めに說くものあらば、卽ち自ら恒常に彼を供養し、是の心を作す者をして佛を得しめん。我れ時に彼の無上業ありて、佛世尊人中上に見え、生生恒に具足戒を受け、比丘と爲つて法師に聽くことを得たり。我れ常に頭陀行を樂しみ、亦空寂なる蘭若林に住し、飲食の爲めの故に諂曲ならず、少分の所得にて皆知足せり。我れ一切時に嫉妬無く、亦た常に居家に著せず、既に家に著せず憎妬せず、蘭若を欣樂して退失すること無し。我れ時に恒に慈行に住し、設ひ毀罵さるること有るとも瞋恚せず、慈悲心を以て善く調柔し、名聞花鬘十方に滿てり。常に少欲を習うて足ることを知り、苦行を樂うて蘭若を修し、亦恒に分衞して厭倦せず、要誓堅固にして動ぜず。信心を習ひ行じて常に清淨にして、如來所に於いて信增上し、良に佛を信ずるに由つて勝利あり、諸根缺けずして恒に端正なり。佛の所說の如く卽ち能く行じ、是の如き堅固行を成就す、是の堅固行に何の利有るや、諸天供養し喜んで勸請するなり。我が演說する所の功德は、世間の上德及び餘德なり、其の有智の人應さに修學すべし、菩提を求むる道行者の爲めなり。我れ今難行行を憶念するに、本往昔に於いて常に修行せり、若し今時節久しきことを演說せん、汝と共に相隨つて佛所に向はん。彼の大利智勝菩薩、[一五]五神

【一五】五神通。一、天眼通、二、天耳通、三、他心通、四、宿命通、五、如意通。右の五通にして不思議なるを神と云ひ、自在なるを通と云ふ。六神通の中漏神通を缺く。

一劫中に於いて悉く供養し、具足して此の寂定を諮問せり。已に九十四劫中に於いて、常に宿命智を了知することを得て、此より胞胎中に生れず、正に此の三昧力を修するに由るなり。彼の佛所に於いて恒に法を聽き、聞き已つて深く信じて修習し、我れ常に堅固に此の信を起せり、必ず菩提を證すべし疑あることなしと。三昧を受持し讀誦する時、若し人あり來つて我れに問ふも、乃至夢中に於いても疑網有ること無し、要必ず無上道を成ぜんと。我れ貪愛無きことを得てより、自ら決定して必ず成佛すべきことを知り、亦た常に是の如き欲樂を起せり、「然かも」何時菩提を得るやを知らず。勝三昧を學び受持せんが爲めに、若し比丘有つて我れを敎ふる者有らば、我れは彼れに於いて恭敬を生じ、亦た諸佛を恭敬するが如くせん。我れ彼の人の一偈を敎ふるに於て、菩薩順忍を修行する時、好心に瞻仰すること善師におけるが如く、卑形恭敬して而かも供養せん。老少中年の比丘所において、慚愧謙下して恭敬を生じ、彼れ現に稱と福德とを得、後世に名增長することをえしを恭敬す。相ひ違諍することに於いては忻樂せず、我れ時に少事に安住して、能く惡業は惡道に趣むくことを知り、能く善業は善道に趣むくことを知る。法を放逸者に說くべからず、彼れ不愛語を聞かんに、亦た自ら己が惡業を思念す、凡そ作業は失壞なし。我れ時に瞋らず亦た慢せず、佛忍力を說き修行を勸め給ふ、諸佛恒常に忍を讚說す、忍を修すれば菩提道を得ること易しと。我れ本戒を持つこと恒に清淨にして、亦た衆生をして淨戒に住せしむ、恒常に戒は最上なることを讚歎す、淨戒に住するに由るが故に人信受するなり。恒常に蘭若處を讚歎し、亦た自ら淨持戒に安住し、人に八戒齋を修行することを勸め、亦た復た彼をして菩提を學ばしむ。人に淨梵行を修習することを勸め、亦た復た彼をして法義に住せしめ、他の爲めに菩提道を顯示し、命終の後に於い

根、最勝なる十八不共法は、斯の三昧に由つて是の法を得。十力の求むる者の實法、諸佛勝智の本因、佛大丈夫の所說の法は、世間を憐愍し救護するが故なり。最勝なる佛子の攝受する所、解脫を求むる者の欲樂する所、是の寂靜なる見難き定を聞くは、爲れ諸の佛子の愛する所なり。諸佛滿足の智慧處、智慧の菩薩求心を起し、其の心淸淨にして煩惱なし、應に是の如き寂滅定を修すべし。身業淸淨にして口亦淨し、如來爲めに解脫門を示せり、雜穢愛欲の縛有ること無し、應に是の三昧を勤修すべし。貪愛瞋恚地に生ぜず、速かに大智慧を獲得し、能く明を起して無明を滅す、是の故に應に寂滅定を修すべし。解脫を求むる者に滿[足]を得しめ、三昧を求むる者必ず剋獲し、譏毀を離れて如來眼を譽むものは、應に是の三昧を修習すべし。通力もて多くの佛刹に遊行し、神足もて能く諸佛の德を見、陀羅尼門得ること難からず、應に是の如き勝寂定を修すべし。念根を[一四]加持して菩提を得、亦た能く加持して多佛に見え、微細智を以て無生を說くこと、是の三昧を修すれば得ること難からず。法に應ぜざる者は覺悟し難し、一切の文字を遠離せるが故に、音聲を以て能く了解せず、曾つて定を聞かざるが故に知らず。智慧の菩薩已に解了し、法王の說の如く而かも能く知り、寂滅無毀にして能く測量す、但だ世間を救度せんが爲めの故なり。勇猛精進にして能善く持し、堅固に護念して恒に失せず、盡苦智慧及び滅智、佛猶是の三昧を說くや不や。一切法無生を演說し、亦一切諸有の生を說く、諸佛如來妙智最たり、佛猶是の三昧を說くや不や。是の法童子の顯示する所なり、八十億千那由他、勝れたる隨順音聲忍を得て、勝菩提を退轉せず。堅固力王子に報じて言く、是の佛世尊今猶在り、王童子に問ふ是の如きの言、汝何れの處に於て是の法を聞きたるや。子言はく我れ刹利王に聽けり、我れ曾つて十億佛に見え、

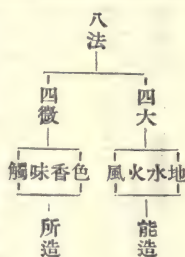
【一四】加持。卽身成佛義に釋して曰く。加持とは如來の大悲と衆生の信心とを表はす。佛日の影衆生の心水に現ずるを加と曰ひ、行者の心水能く佛日を感ずるを持と曰ふと。

說に於いて隨順忍し、彼の忍に安住して諸の過を離れ、非智を遠離して智に住す、是れを如來最勝の敎と爲す。智を以て方便地に住し、菩薩善巧の行を修習し、善丈夫と爲つて修行する所、是を諸佛の最勝の敎と爲す。常に不應方便者を離る、如來此を說いて佛地と爲す、若し智を與つて佛の隨喜を知るを、是を如來の最勝なる敎と名づく。佛地は廣大にして二乘「の所知」に非ず、凡愚は智なくして毀謗を生ず、智者は諸佛の攝受する所なり、是を如來の最勝の敎と名づく。如來善く此の法門を知り、諸天恭敬し供養する所なり、千億の梵衆恒に隨喜す、如來猶ほ三昧を說くや不や。無量千の龍恒に禮拜し、緊那金翅常に讚歎す、菩提樹下の所得者、如來猶三昧を說くや不や。常に智人の爲めに求めらるゝ者、是れ善勝法の資財なり、財施を無上の樂と爲すに非らず、如來猶三昧を說くや不や。智慧府藏し辯無盡なり、能く億の妙なる修多羅を出し、善く三界如實智を知る、如來猶三昧を說くや不や。船筏を說いて彼岸に渡らしめ、[一三]四瀑の爲めに漂はされず、名聞譽をして增長せしむ、是れ此の三昧定を說くを以てなり。十種の最勝力を讚歎し、及び人中の大牛王を讚ず、菩薩功德勝るゝこと無盡なるは、正に是の三昧を得るに由るが故なり。慈心瞋恚を除くことを說き、大悲人大喜捨を行じ、大乘に於いて穌息を得るは、正に此の勝れたる三昧を說くに由るなり。師子吼を爲して勝行を說く、此は是れ佛智の勝阿含なり、一切諸法の體性印、是の如き三昧は佛の所說なり。能く一切種智智を招き、菩提を求むる者の園苑となる、此は能く魔軍衆を破壞す、謂く是は佛說の勝寂定なり。能く正覺の功德を生ず、是れ一切法の自性印、無生寂滅の妙法印は、導師の說ける勝三昧なり。法に住する者に於いては明術たり、怨讎中に在つては現ぜず、如法に諸の魔官を降伏す、導師是の勝三昧を說き給ふ。無礙辯才地を顯示し、諸力解脫及び諸

【一三】四瀑とは、四瀑流の略、一、欲瀑流、二、有瀑流、三、見瀑流、四、無明瀑流のこと。

を護る、是の法は大智の說きし所なり。少かに言へば美妙にして善と相應し、他、人處に於て能く軟語し、如法に諸の怨敵を降伏す、大智慧日の敎法なり。時節を知り諸の飮食を量り、愼で凡夫の法を委信すること勿れ、若し苦緣に遇ふとも心感へず、是は爲れ如來善勝の敎なり。若し貧人を見ては財を得せしめ、若し破戒[者]を見ては悲救[の心]を起し、悲愍心を以て爲めに開曉す、是の如き勝れたる法は如來の敎なり。常に法を以て諸の衆生を攝し、及び一切の諸の財物を捨し、諸の〔一〇〕八法に於いて貯畜することなきは、如來大聖の說き給ひし所の敎なり。持戒を讃歎して破戒を訶し、淨戒を堅持して詐僞せず、資財を積まずして能く棄捨す、此は是れ如來最勝の敎なり。深心に諸の師長に啓請し、言說する所に隨つて悉く能く行じ、常に能く諸の法師に親近す、是の如きは如來最勝の敎なり。心常に愛樂し恒に恭敬し、亦た恒に正見に安住し、諸の善業に於いて能く決定す、是の如きは如來最勝の敎なり。諸善を造す行を上首となす、善巧方便棄捨の相、想と及び事相を遠離する、是を如來の無上なる敎と爲す。修多羅に於いて能く解知し、〔一一〕實諦句義を善く修學し、解脫智を證すること常に善巧なる、是を如來の最勝なる敎と爲す。言を發するに楷正の語を出し、心境相稱ふて詞決定し、宣說する所有らば疑有ること無き、是を如來最勝の敎と爲す。常に應さに諸法空を修習し、戒力に安住して畏るゝ所無し、一切寂定處に遊行す、是を如來最勝の敎と爲す。親愛及び利養を求めず、其の心に諸の諂曲あることなく、一切の諸惡見を遠離す、是は爲れ如來最勝の敎なり。陀羅尼に於いて勝れたる辯を得、智慧照明にして廣きこと邊無し、說法不斷にして辯才淨し、是は爲れ如來最勝の敎なり。〔一二〕四法門に於いて久しく修習し、能く行に入るを最も賢善となす、此の佛の敎に於いて修行し奉るを、是れを如來の最勝の敎と爲す。佛の所

〔一〇〕八法とは、又八有色とも云ふ、能造の四大と所造の四微とを云ふなり、左に圖示す。

八法
- 四大（地・水・火・風）―能造
- 四微（色・香・味・觸）―所造

〔一一〕實諦とは、眞諦、第一義諦と云ふに同じ。本經に於ては、諸法體性平等無戲論三昧を云ふ。

〔一二〕四法門。數說あれども敎理行果の四法を云ふなるべし。

論を滅し、能く非違と非諍地とを説く、兩足牟尼是の法を説くなり。忍辱を受けて瞋恚無く、諸の問答に於いて能く善巧なり、諸法句を知る差別智、大悲世尊是の法を説けり。過去未來際を知り、能く三世佛の法性を知り、[七]三世の分段を知る智、自然に世尊是の法を説けり。常に能く心を一處に係け、常に能く身を聖地に安き、諸の威儀に於いて常に改めざれと、人中の牛王是の法を説けり。[八]慚有り愧有りて自ら莊嚴し、世間時に應ずる語を知り、一切常に布施の手を舒べよと、無上の世親是の法を説けり。常に能く心を攝さめて慚愧あり、亦た常に惡不善を厭離し、頭陀に隨順して常に[九]分衞せよと、牟尼王尊勝法を説けり。常に慚愧を懷いて恒に欣喜し、尊に於いて供養し恒に恭敬し、憍慢を遠離して禮拜を修せよと、如來は是の勝妙の法を説けり。下劣の心を策まして其をして安からしめ、自ら能く智の分齊を測量し、諸の障礙を知ること無きことを遠離せよと、是の如きの勝人是の法を説けり。能く心智語言智に入り、決定して能く諸の言辭を知り、一切無利の事を遠離せよと、法王如來是の法を説く。常に善知識に親近することを得て、一切の不善者を遠離し、常に佛を信じて不放逸なることを得よと、牟尼是の無上法を説けり。世の假名は但だ言説のみなることを知り、常に一切世間の苦を厭はば、利に於ける得と失とに憂喜無しと、牟尼是の最勝なる法を説けり。若し恭敬を得ることあるも心高ぶらず、恭敬を得ざるも心放捨し、實を稱し歎ぜらるゝことを得るも心喜ばざれと、是の世間の師是の法を説けり。常に一切諸惡道を捨し、俗の流と相ひ交通せず、出家衆に於いても亦た參らざれと、自然智者是の法を説けり。勇者は非行の處を遠離し、佛の所行に於いて常に安住せば、威儀具足し心善く調ふ、是の如き法母は佛の説き給ひし所なり。常に一切凡愚の法を遠ざけ、亦た一切汚家の法を遠ざけ、常に一切諸佛の法

【七】三世の分段とは、有情は過去世、現在世、未來世と生死に輪廻し、分々段々の生死を續くるが故に是を分段生死と云ふ。佛は卽ち有情の宿生、未來生を知るが故に三世の分段身を知る意味にて此く言ふなり。

【八】慚愧。淨影釋して曰く、惡に於いて自ら厭ふを慚と名づけ、過に於いて他に羞づるを愧となすと。

【九】分衞(Piṇḍapāta)。譯して乞食又は團墮と云ふ。印度にて乞食する時、食を摶り團めて鉢中に墮すが故なり。又僧祇律によれば是は譯語にあらず漢語にして、乞食の僧尼に分施して衞護して道業を修せしむるが故に分衞と云ふとあり。今尚叢林にては托鉢のことを分衞と稱しつゝあり。

味を說くや。能く諸の陰界は平等なることを知り、一切諸入の相を遠離し、無生寂滅忍を證す、是の佛猶三昧を說くや。無礙辯才にして寂智に入り、文字を達解する差別智にて、能く一切取著の事を過ぐ、是の佛猶三昧を說くや。諸の音聲を知つて欣喜を得、諸佛に見え已つて深き樂を起こし、聖趣柔軟直を得たり、佛猶是の三昧を說くや。瞋怒を起さず恒に調善なり、發言美好にして常に笑を含み、諸の衆生を見て先づ語もて慰む、佛猶是の三昧を說くや不や。尊長を恭敬して懈倦無く、禮拜供養して恒に瞻視し、其の身清淨にして白法を具す、法王猶三昧を說くや不や。諸の白法に於いて常に厭ふこと無く、空閑に住して邪命を離れ、諸地を憶念して忘失せず、法王猶三昧を說くや不や。陰に於いて善巧にして智神通をえ、煩惱を遠離し調伏地[に住し]、能く凡夫の語言道を斷ず、法王猶三昧を說くや。常に能く諸の勝行を修し進め、犯戒を遠離して持犯を知り、及び一切諸の親愛を離る、法王猶三昧を說くや。一切諸有の生を出過し、自ら宿命を識つて諸の疑を離れ、其の心法を敬ひ總持を聞く、佛今猶三昧を說くや。深くして利勝なる智慧を出生し、信樂不動なること山王の如し、總持門を得て退轉せず、世親猶三昧を說くや不や。常に一切白淨の法を求め、惡法中に於いて恒に遠離し、心煩惱の朋に遊入せず、如來猶是の法を說くや不や。諸學究竟して自在を得、諸の禪定に於いて已に窮はめ盡し、智慧能く信じ欣喜せしむ、說法の牟尼猶在りや不や。勝智增長し生を知る智、無量の智慧平等智、諸趣を知り生に隨ふ智、牟尼王是の勝法を說けり。信心出家して俗地を捨て、三界に著せず無所依なり、其の心を制伏して欣喜せしむ、是の佛是の勝菩提を說けり。諸法中に於いて執著無く、常に能く一切法を攝受し、諸の業果に於いて信動ぜざれど、最勝なる世尊は是の法を說く。戒律持犯果報智、一切の諸の諍

彼れを讃歎して餘間無し、我れ今但だ其の少分を說けり、猶し大海水の一滯の如し。彼の時に善勝音王佛、此の寂滅最勝なる定を說くに、是の時三千大千界、諸天及び人悉く充滿せり。彼の佛此の寂定を說く時、爾の時大地六種に動き、天人衆の數恒沙の如く、不退菩提道に安住せり。王有り最上にして人中の尊たり、功德力大威神と號す、五百子を具足し有せり、顏貌端正にして甚だ壞麗なり。妙なる夫人有りて［その］數八億、悉く是れ王宮內の眷屬にして、彼の功德王の生みし所の女、合して一千四百億あり。是の王八月[五]十五日に、方に八戒齊を善く受けんと欲し、八億那由人と共に、倶時に如來の所に往詣せり。無上兩足尊を稽首し、即ち佛前に於いて一面に坐す、如來彼の心に樂ふ所を知つて、即便爲めに勝三昧を說き給へり。是の王斯の三昧を聞き已つて、王位を棄捨すること涕唾の如く、幷びに一切の親愛する所を捨て、彼の佛所に於いて而かも出家せり。夫人後宮調順の子、及び諸女等皆出家し、後宮眷屬及び親衆、七十萬那由他なり。彼の王妻子出家せる者、安住勇猛にして常に精進し、經行して住せざること滿八年、經行時に便ち命終せり。此の大聖王命終し已つて、本處なる王宮中に還生するに、忽然として化生して胎染無し、是の時に如來猶世に在ませり。其の父を號して堅固力と曰ふ、其の母を號して大智慧と曰ふ、其の王生れ已つて父母に白さく、勝音王佛世に住し給ふや否なやと。時に彼の勝音王如來、曾て我が爲めに勝三昧を說き給へり、是れ因緣に非ず緣無きに非ず、諸有中に於て唯だ一を說く。一切諸法體性印、千萬億修多羅を出す、是れ諸菩薩の無上財なり、今佛猶三昧を說くや否や。法を說いて因果を壞せず、能く最勝なる[六]八聖道を修し、如來の智慧世間を見。諸法を了知して眞諦に入る。身業口業皆清淨にして、意業また清淨にして知見淨く、一切諸の攀緣を出過す、是の佛猶三

【五】十五日。八戒齊のことは前に註するが如し。此の八戒齊は每月、八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日の未明に師に隨つて受け一晝夜持つを常とす依つて是を六齊日と云ふなり、故に今八月十五日と指す。

【六】八聖道。先に註せる四聖諦の道諦に當る、普通三十七科の菩提分法を說く七科中の第七なり、委くは後に註すべし。

の牟尼王、彼の佛の次後に餘佛有り、不可思議無數劫、佛號して善勝音王佛といふ。彼の善勝王如來尊、壽命七萬六千歳なりき、是の如來尊の初會の時、羅漢衆三十億有り。六通三明「をえ諸」根調伏し、大威德【三】四神足を具し、【四】最後身に住して諸漏盡き、八法の爲めに染せられず。爾の時復た菩薩衆有り、其の數合して萬萬億有り、六神通を得辯才を具し、諸法空に於いて學ぶこと究竟せり。神通力を以て億刹に遊び、展轉敎化すること恒沙に過ぐ、諸の如來の所行の道を問ひ、還復つて本世界に住す。博く一切修多羅に通じ、世間に遊んで燈明と作る、是れを佛子の大神力と謂ふ、衆生を利せんが爲めに諸國に遊ぶなり。醜穢行を遠離して梵行なり、故に諸惡を造ることを欲することを爲さず、常に諸天の爲めに喜樂せられ、諸有中に於いて所依無し。空閑處に於いて常に乞食し、空寂に住して頭陀を行じ、多聞巧言にして大福德あり、能く三界に於いて著する所無し。禪定を樂んで畏るゝ所無く、義に於いて決定して辯才を獲、辭句義に於いて已でに善く學び、佛子一たび問ふて悉く究竟す。一切諸の善業を攝護し、無量劫に於いて修行滿ち、常に諸佛の爲めに讃ぜられ、解脱道の句義を演說す。持戒清淨にして穢汚無く、花の水に處して著く所無きが如く、三界中に於いて常に厭を起こし、世法の所染とならず。其の心清淨にして業善淨なり、少欲知足にして威德を具し、當來の聖德中に安住し、亦た三明殊勝道に住す。要らず行を修するに在つて口言に非らず、自ら法に安んじて他の爲めに說く、諸の如來の爲めに善く攝受せられ、一切佛法藏を委付さる。三界中に於いて怖畏を起こし、寂靜心を以つて常に定を修し、常に諸佛の爲めに加護せられ、千億種の修多羅を說く。若し億種の修多羅を說くに、一切世間の敎を遠離し、空寂を信じて深義を說き、無量の名稱德海の如し。童子よ我れ無量劫に於いて、常に

【三】四神足。四如意足とも云ふ。三十七科の道品中四正勤に次いで修する加行なり。爾前の四念處、四正勤にも定あれども、定慧均等ならざるが故に行者如意の願を果すこと能はず。然るに四神足は能く定慧均等にして願を果すことを得るなり。一、欲神足、欲を主として定を得。二、勤神足、精進を主として定を得。三、心神足、心を主となして定を得。四、觀神足、思惟を主となして定を得。

【四】最後身とは、見惑を斷盡し、思惑を斷じ盡したるも、倘の苦果の依身存するありて、然も三界の見思の惑を殘さざるが故に、更に生を受くることなき故に最後身と稱す。菩薩の等覺に進めるも亦た最後身なれども今は前記の羅漢を指す。

婆、壽命滿足すること千萬歳なりき。彼の佛の次前に復た佛有り、號して聲上爲世燈と曰ふ、彼の聲上佛世導師、壽命一萬四千歳なりき。彼の佛の次前に復た佛有り、號して滿月面普名稱といふ、彼の滿月面普名稱、世に住せし壽命一日夜なりき。彼の佛の次前に復た佛有り、其の佛號して日面滿と曰ふ、彼の日面佛無比尊、壽命一萬八千歳なりき。彼の佛の次前に復た佛有り、其の佛號して梵面親と曰ふ、彼の梵面親兩足尊、壽命二萬三千歳なりき。彼の佛の次前に復た佛有り、其の佛號して梵婆藪と曰ふ、彼の梵婆藪天人師、壽命一萬八千歳なりき。是の如き等の佛同一劫にいで給ひ、其の數二百にして世の導師たり、汝我れ今佛名を說くを聽けり、皆是れ三界世間の親たり。無毀身佛・普音佛、遍威德佛・遍聲佛、聲供養佛・名聲佛、聲身勇佛・聲身佛、智起智知善聰佛、智光映蔽智等起智焰聚佛、智勇佛、梵上梵命梵善佛、善梵天佛、勝梵聲梵音梵天梵施佛、威力威主善威佛、威德自在起威佛、威德眼佛・善勝佛、怖上怖慧善可怖可怖面佛、怖起佛、可怖怖上見實佛、善眼月上勝導師深遠音佛、無邊音淨音自在淨音佛、無量音佛、善現聲魔力音壞善眼佛、善眼淨面淨眼佛、無量眼佛・普眼佛、善普眼佛・勝眼佛、眼映蔽佛・不毀佛、調伏上佛・調伏佛、善調心佛・善調佛、寂根寂意寂上佛、寂德極寂到定岸寂心無上如來尊、住邊寂佛、善調心善調寂根定意佛、寂上寂德熾盛佛、度寂彼岸定勇佛、衆因陀羅王衆佛、衆自在佛、映蔽衆衆勝淨智大衆主衆主勇健大衆佛、勝衆解脫正遍知、見法法幢法起佛、法體性起法力佛、法佛妙法勇健佛、自性法起決定佛。此の如き自性法起佛、合して八億有りて皆同號なり。是の佛第二劫に出で給ふ、斯等の如來に我曾つて供しき。自性法起決定佛、若し其の名を聞くことを得ること有る者、聞き已つて淨業を受持する人は、速やかに能く是の三昧を獲得せん。我れ今說く所

[を持つ]童子よ是を第二と爲す、菩薩是の法を具足して、能く一切諸法體性平等無戲論三昧を得るなり。復た次ぎに童子よ、菩薩摩訶薩は深く三界を怖れて驚畏の心を起し、三界を厭離して不染心を起し、三界に著して逼惱の心を起こさず、三界の苦の衆生を脫せしめんが爲めの故に大悲心を起こし、阿耨多羅三藐三菩提に趣向し、大精進心を發こす、童子よ、是を第三と爲す。菩薩是の如きを成就して、能く一切諸法體性平等無戲論三昧を得るなり。復た次ぎに童子よ、菩薩摩訶薩は、多聞を求めて厭足あること無く、法を重ぜんが爲めにして財利を求めず、智を重んぜんが爲めにして名聞を求めず、聞に隨つて受持し他の爲めに其の義を廣說し顯示し、悲愍を以ての故にして親屬の爲めならず、菩薩復た是の念を作さく、云何んが能く前きに法を聽ける衆生をして、無上菩提に於いて速かに不退轉を得しめんと。是を第四と爲す、菩薩是の如きを成就して、能く一切諸法平等無戲論三昧を得るなり、童子よ、當に知るべし、此の三昧の法門は無量の諸佛の演說する所、無量諸佛の讃歎する所、無量諸佛の諮嗟する所、無量諸佛の顯示する所、無量諸佛の修習する所なり。爾の時世尊、偈を說いて言はく、

我れ不思那由劫を念ずるに、　佛有りき號して音聲身と曰ふ、　彼の音聲身如來尊、　在世壽命六千歲なりき。　彼の佛の次前に復た佛有り、　智自在世所愛と號す、　彼の智自在正遍知、　壽命一萬二千歲なりき。　彼の佛の次前に佛有り、　威德自在大勢力と號す、　彼の威德佛人中尊、　壽命七萬六千歲なりき。　彼の佛の次前に復た佛有り、　大自在自然智と號す、　彼の大自在天人師、　壽命滿足すること千萬歲なりき。　彼の佛の次前に復た佛有り、　其の佛號して梵聲師と曰ふ、　彼の梵聲佛兩足尊、　壽命滿足すること一億歲なりき。　彼の佛の次前に復た佛有り、　衆自在最勝離と號す、　彼の衆自在無比尊、　壽命滿足すること六億歲なりき。　彼の佛の次前に復た佛有り、　其の佛號して聲自在と曰ふ、　彼の聲自在婆伽

巻の第四

[1]爾の時婆伽婆、大衆中に在つて示教利喜し已つて、即ち坐より起つて王舍城を出で、耆闍崛山に詣でて、座を敷いて坐し給ふ、諸の比丘衆、及び諸の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽前後を圍遶し奉れり。爾の時月光童子、八百億人、幷びに天龍八部諸鬼神等、及び餘の世界の十那由他の諸菩薩衆は、諸の寶鬘・塗香・末香・衣服・幡・花・種種なる音樂を持ち、幢蓋を建立して諸の繒幡を懸け、王舍城を出てて耆闍崛山に向ひ、如來の所に詣でて頭面に足を禮し、遶ぐること無量匝し、[2]已が持てる所の花・香・衣服・寶蓋・幢幡を以てし、諸の音樂を擊ち、大供養を設く。供養を設け已つて、躬を曲め恭敬し、法を問はんが爲めの故に却つて一面に坐せり。

爾の時月光童子是の如き言を作す、我れ如來應供正遍知に於いて、問ひ奉る所有らん欲す、惟だ願はくは聽許し給へ。爾の時世尊、童子に告げて言はく、如來應正遍知、汝の欲する所に隨つて恣ままに汝之を問へ、汝の問ふ所は則ち能く無量の衆生を利益せん、吾れ當さに汝が爲めに分別解說し汝の心をして喜ばしめん。爾の時に月光童子既に聽許を蒙りて、即ち佛に白して言さく、菩薩摩訶薩は幾ばくの法をか滿足して、能く是の如き一切諸法體性平等無戲論三昧を得たるや。爾の時佛、月光童子に告げて言はく、菩薩摩訶薩は四法を成就して能く是の如き一切諸法體性平等無戲論三昧を得たり。何等をか四と爲すや。一には善く柔軟を學んで同じく安隱に住し、調伏地に到つて能く毀辱を忍んで法を見て慢を除く、是を初法と爲す、菩薩若し能く是の如く成就すれば、便ち能く是の一切諸法體性平等無戲論三昧を得るなり。復た次に童子よ、菩薩摩訶薩は善戒清淨戒第一善清淨戒を成就して、濁戒ならず、缺戒ならず、穿戒ならず、雜戒ならず、定色戒自在戒無く、呵すべからざる戒、退落せざる戒、無所依戒、無所取戒、無所得戒、聖に讃ぜらるゝ戒、智に讃ぜらるゝ戒、

【一】爾の時。以下梵本第十七品、無量諸佛成三昧喜悅品、Bahubuddhanirhārasamādhisukha. 丹本は出城品第一之二となす。

【二】已。大正藏經已に作る誤なる可し。

し、我慢自ら擧して相陵蔑し、自ら己は是なりと稱して他の非を説き、常に不善を行ひて妄りに歡喜す。淨戒諸の功德を成就し、慈心に安住して忍辱を行じ、調伏柔軟淳善なる者、是等の善人彼が爲めに欺かる。若し當來惡心を起すこと有らば、極めて甚だ抵突にして不善と爲す、鬪諍を喜び樂しみて非法を行じ、是等爾の時に供養を得るなり。我れ今善く汝に相ひ勸告す、汝當に我に於いて淨信を生ずべし、此の如來の所説の敎に於いて、彼の惡人の輩親近すること勿れ。極貪愛及び重瞋、多く愚癡の人惛慢なる者、無慚無愧にして行調はざるものに於いて、汝彼[等]に於いて速かに忍力を起せ。我が今所説の無量の德、比丘此に於いて安住せず、但だ口に言ふのみなるは菩提を得るに非らず、

要ず堅固に行ふ者は得べし。

若しは聚落に入つて異相を現ず。是の如き不應儀式の人、晝夜に心を繫くること童女に在り、彼の色聲に於いて常に愛著し、村邑に遊行して是の儀を現ず。心常に美食を貪嗜し、戯笑歌舞及び音樂、販賣貿易恒に利を窺ひ、喜樂飲醼し及び乘騎す。廣く貯へ積聚し飲食し已つて、命終して三惡道に墜墮す、專ら墾殖及び耕田を事とし、自己の所住の處を保翫す。他の敎命を受けて書信を傳へ、禁戒及び威儀を棄捨し、[三二]白衣に親近して佛敎に違し、禁戒を毀破して惡道に住す。常に佛の讃歎せざる業を作す、所謂斗秤諸の欺誑、是の如き諸の惡行を作し、此の惡行を以て惡道に墮す。多饒なる財寶珠金貝と、親愛を棄捨して而も出家し、淨戒聚に安住すること能はずして、還つて販肆を爲し鄙業を作す。牛馬雄雌相ひ[三三]孚乳し、惟に財穀を恃んで勝想を爲す、何すれぞ出家して鬚髮を除き、而も戒及び儀式を護らざる、我れ過去に於いて菩提を行じ、千劫中に於いて苦行を修し、是の如き寂滅定を求むることを爲すに、愚人は之を聞いて嗤笑を生ず。非梵行を行じて妄語を憙び、常に利養を貪つて惡道に趣むく、梵行服を披て標式と爲し、戒を毀ぶり定を謗つて非法を言ふ。彼此遞互に相ひ破壞し、法に應じて利養を求むること能はず、各共に短失を相ひ求めんと欲し、命終して三惡道に墮す。百千人中に一りを得ること難し、謂はく能く忍辱に住する者は、黨を朋ない鬪諍をなすもの無量人にして、忍辱を棄捨して恒に忿り競ふ。咸自ら是れ菩薩なりと稱歎し、望聲遍く諸國に流れんことを欲す、若し虛名を得れば自ら欣び慶び、倘ほ善行無し何かに況んや道をや。我れ曾つて、淨行欲樂有ること無き者、此の法を誹謗して欣慕無くして、而も能く菩提道を獲得すること有るを見ず聞かず。活き[ること能は]ざるが爲めの故に出家し、一切佛菩提を求めず、愚人は我見中に安住して、無我と說くを聞いて便ち驚怖す。彼此更互に恒に諍論

【三二】白衣とは、在家のこと。出家は緇衣を身に纒ふが故に是に簡びて白衣と云ふなり。

【三三】孚乳。やしなひそだてること。

悉く斷除し、善く道を修して所依無く、他の爲めに壞せられず他に違せず。又た三界に於いて所依無く、諸結を斷除して所行淨よし、愛縛の枝蔓悉く捨離し、諸有相續皆な盡く滅す。自體性有るに非らざることを悟解し、離言說の法を悉く了知し、其の顚倒無智者に於いて、師子吼して野干を摧くが如し。佛今爲めに妙法藏を現はせり、我れ今妙寶聚を獲得せり、一切諸惡趣を斷除し、我れ今佛を得ること定んで疑なし。百福金色の莊嚴手、願はくば此の寶掌我が頂を摩せよ、天人大衆に對する前にて、惟だ願はくば人尊我が頂に灌げ。[三〇]我れ過去修行せし時を念ずるに、[三一]師子幢佛法中に於いて、時に比丘ありて甚だ聰叡なり、名を賢施と曰ひ法師たり。我れ王子となりて黠慧と名づく、身病苦に遇ふて甚だ困篤なりき、時に彼の賢施我が師と爲り、柔軟淳直にして儒德を備へたり。

五百の良醫減少なく、咸皆盡く來つて我が爲めに治せんとせしも、彼れ悉く我が病を除くこと能はず、親戚眷屬憂惱を懷く。是の時大師我が患を聞き、便ち我が所に至つて慰問し、賢施即ち悲愍の心を生じ、而も我が爲めに是の三昧を說けり。我れ此の三昧を聞くことを得已つて、財寶を顧みず心に愛樂して、諸法の體性を了知せるが故に、其の時病苦即ち除愈せり。比丘菩提行を行じ、佛道を成ずることを得て然燈と號す、我れ昔黠慧王子たりし時、此の三昧を以て苦惱を除けり。是の因緣を以ての故に童子よ、我れ是の事を憶ふて今汝に付す、能く罵詈毀辱等を忍び、是の如き定を受持し讀誦せよ。末世の比丘無量有つて、放逸にして禁を毀り多く慳悋なり、衣鉢に堅く著して樂つて惡を爲し、是の三昧に於いて誹謗を起す。嫉妬輕躁にして諸根を縱まゝにし、俗家に止住して貪利を爲す、常に出入の息利に依つて活く、是等當に此の三昧を謗るべし。手を舒べ足を展べて奢縱に誕り、趨步し言笑して自ら影を顧み、黨を伴ひ臂を挑つて路に隨つて行き、

【三〇】我れ過去修行云々。以下梵本第十六過去修行品、Pūrvayoga.

【三一】師子幢佛 (Siṃhadhvaja)。

靜にして何に縁てか而も笑を現じ給ひし、一切三有の群生類、悉く能く彼の所行を了知せり、過去現在及び未來の、人尊願はくば爲めに笑の緣を說き給へ。所有如來大悲者、諸力中に於いて究竟を得給へり、如來淨月の圓滿なる面、終に緣無うして而も笑を現ずるに非らず。

二七 爾の時世尊、即ち是の時に於いて、其の偈頌を以て、彌勒菩薩摩訶薩に答へて曰く、是の如く月光童子は、如來の愛は比無きことを讃歎す、是の如く如來を讃歎し已つて、後に還つて世の爲めに稱美せらる。昔日此の王舍城に於いて、已に曾つて多億佛を覩見し、彼の佛所に於いて常に、是の如き勝妙なる寂滅定を請問せり。菩提の道行を修行せる時、一切世に於いて我が子たり、常に能く無礙辯を具足し、恒常に梵行に安住せり。彼の人末代怖る可き時、惟是の彌勒に證知せらる、一切時中梵行に住し、能く廣く是の三昧を分別す。若し是の勝れたる三昧を欲求せんに道に稱ふ所行は則ち能く得るなり。無量億佛の攝受する所にして、最勝の大導師を供養するなり。我れ智中に住するが故に、此の月光の勝妙行を記說す、末代世時、其の梵行及び壽命に障礙無し。千億の諸の如來を知ること、掌中の二八菴羅果を觀るが如し、又た復た彼の恒沙數を過ぎ[たる佛に]、能く未來に於いて供養を修す。諸天及び龍八億有り、夜叉衆七千億有りて、未來に兩足尊を供養するとき、是等悉く能く相ひ佐助す。是の如き授記を聞くことを得已つて、歡喜愛樂而も充滿せり、月光身を踊すこと七多樹、空に住して希有の言を發せり。嗚呼佛說は最にして無上なり、解脫智神通に安住し、決定勝智に安住せるが故に、一切の異論能く壞することなし。二九二邊を遠離して解脫を證し、事を觀察して事に著せず、三界中に於いて智無礙なり、悉く一切の諸の戲論無し。一切の戲論に染まず、諸見覺觀

【二七】爾の時世尊。以下梵本第十五笑授記品、Smitavyākaraṇa.

【二八】菴羅果(Āmara)。桃に似て而も桃に非ず、諸經中隨所に譬喩として引用さる。

【二九】二邊とは、斷常、空有等の一邊に偏するを云ふ。

行を修行して、百千種の福にて而も莊嚴さる、百千の諸天咸讃歎す、百千の諸梵亦た復然なり。夜叉羅刹等も心を淨め、摩睺金翅龍も欣喜し、口に常に宣說して滯礙無し、淨妙なる業の果の所起なり。所有諸佛滅度者、及び今現在未來世、一切了知して障礙無し、諸の功德より生ぜし所なり。大海大地及び諸山、一切咸皆六種に動じ、諸天修羅龍摩睺、諸の上妙にして勝れたる香花を散ず。貪瞋及び惛慢を斷除し、尸羅[二四]心意悉く清淨なり、寂靜の音聲無想に稱ふ、大聖是の如く師子吼す。辯才を具足して廣く名稱かふ、眼に於いて法に於いて善く平等なり、世間に等しきもの無く亦た過ぎたるものなし、惟願はくは大悲笑の義を說き給へ。拘翅頻伽及び孔雀、[二五]命命等の鳥の妙なる音聲、一時に共に發して甚だ愛すべきも、佛の少音に於いて譬と爲すべきに非らず。大鼓金鉦及び諸の鼙、螺貝簫笛琴箜篌、千種の音樂俱時に作すも、佛の少音に於いて譬と爲るべきに非らず。諸天の千種の美なる音樂、及び諸天女の妙なる歌聲、衆く集まりて相和し人の愛を生ぜんも、佛の少音に於いて譬と爲すべきに非らず。救世導師[二六]一音を以て、信に隨つて種種に異解を發せしむ、一切皆佛は己が爲め[に說き給ふ]と謂へり、願はくは大沙門よ笑の緣を說き給へ。諸天及び龍の妙なる音聲も、迦樓・乾闥・毘舍闍も、是等煩惱を滅すること能はず、唯だ佛の音聲は能く[煩惱を]斷除す。復た愛心を起すと雖も無染なり、慈を行じて便ち能く瞋の過を離れ、能く智慧を生じて愚癡を離る、能く是の如くなる者諸の垢を離るるなり。佛音は衆外に出でず、能く百種の諸の疑ふ所を斷じ、其の音聲に於いて高下無し、牟尼の妙聲は寂として平等なり。假使三千界散壞し、大海一念に盡く枯れ涸るるも、日月地に墜落せしむべくとも、世雄は終に實語せざる無し。語言清淨の六十種、吼音深美にして畏るる所無し、如來梵言もて願はくは爲めに說き給へ、寂

[二四] 尸羅(Sīla)。清涼、性善、律等と譯す。身口意の三業の非業は行人を焚燒すること熱の如し、戒は能く是を防息するが故に清涼と名づく。清涼と言ふは尸羅の正しき翻語にして、能く防禁するを以て義翻して戒と云ふ。

[二五] 命命鳥(Jīvajīvaka)。一身兩頭の鳥なりと云ふ。

[二六] 一音。維摩經に「佛一音を以て法を演說するに衆生類に隨つて各解を得」と言へる有名なる語あり、今の所說全く維摩に同じ、此の句の意諸經に散見さる。

にして最無上なり。一切法に於いて彼岸に到り、諸有所學已に究竟し、導師大悲愍を起發し、微妙なる第一音を宣暢し給へり。過去無量僧祇劫、亦た曾て是の如き義を問へり、救世の親尊たることを得、今既に果を證せり我が爲めに說き給へ。夜叉羅刹龍槃茶、兩足最勝尊を瞻仰し、一切恭敬し合掌して住す、咸世尊何の緣によつて笑ひしかを疑ふ。多くの菩薩衆悉く雲集し、神通を具足して多億刹「より來る」、如來心に最長子を生ぜり、一切恭敬して合掌す。世尊導師緣無きに非らず、最勝の丈夫而も笑を現ぜり、微妙の語言鼓の音聲、何の因緣を以て笑を現ぜしや。香象菩薩は東方、彼の阿閦佛世界より來り、那由の菩薩衆に圍遶せられて、釋迦に問はんが爲めの故に此に來れり。又復安樂妙世界の、觀音菩薩大勢至、那由菩薩衆に圍遶せられて、兩足釋師子に來り問ひ奉る。過去無量億の佛所にて、無邊の諸如來を供養せること、猶し大海中の沙の數の如し、無上なる勝菩提を行ぜんが爲めなり。一切諸佛に嗟歎せらる、菩薩の德已に究竟せり、十方世界悉く聞知し、文殊師利住して合掌す。那由他佛刹に遊行するも、是の如く勝れたる徒は見る可きこと難し、佛子功德已に善く學べり、一切合掌して恭敬して住す。根器最勝にして餘に更に無し、是の如き調伏柔軟者、能く一切の佛法藏を持す、願はくは爲めに和潤の語を宣說し給へ。世尊導師は緣無きに非らず、最勝丈夫而も笑を現ぜり、微妙の鼓音もて願はくは演說せられよ、何の因緣を以て而かも笑を現じ給ひしや。拘翅鴝鵒鵝孔雀、雷霆牛王の聲震吼す、願はくは天樂の美妙の音を出せ、惟願はくは增樂語を演說し給へ。善く慈悲を集めて諸の過を離れ、智慧現前して愚癡を斷じ、眞實義離文字を顯はし、百千劫に於いて已に修持せり。決定空寂にして諸有を知り、苦滅の諸句義を顯示し、能く一切の外道の智を壞し、空にして衆生及び壽命無し。諸佛は百千

き給へ、誰か曾て人中の尊を供養し、誰か復た今廣大の利を成じ、誰か能く佛の所行を受行せん、誰が爲めに而も能く此の笑を現じ給ひしや。其の地時に六種に動き、億の妙なる蓮花地より出で、其の花光耀して億の葉を具せり、金色熾盛にして甚だ愛すべし。佛子彼の蓮花上に處し、菩薩第一大神足、無量の法師而も雲集せり、是を以て我れ是の如き問を作す。鼓を擊ち鐃を鳴らし貝を吹く音、伎樂億數恒沙の如し、是の如き輩の諸の音樂、佛の聲は中に於いて最も殊妙なり。拘翅頻伽・鷲・鶴等、衆鳥一時に而かも雲集し、倶時に各美妙の音を出す、佛の音聲に於ては其の比に非らず。誰か往し檀を行じ禁戒を持ち、無量億劫而も修習せし、誰か復た人中尊を供養し、牟尼誰が爲めにか而かも笑を現じ給へる。誰か昔大恭敬心を起こし、已に曾て兩足尊に請問せしや、何の因緣の故に菩提を得、而も今便ち是の笑を現じ給ひしや。所有過去の十力尊、及び今現在未來世の、天人導師悉く了知せり、是の故に我れ人中の塔に問ひ奉る。能く衆生の心次第を知り、其の神足に於いて而かも減ぜず、又衆生心の樂ふ所を知る、是の故に我れ牟尼師に問ひ奉る。無上最勝なる行を修行し、因相應の法已に善く學べり、佛菩提の道云何んが得ん、是の故に我れ兩足尊に問ひ奉る。諸法は微細にして見る可きこと難し、空寂にして難稱不思議なり、十力の行ぜる所を修行せん、是を以て我れ世の大師に問ひ奉る。若し能善く慈悲心を修せば、不思議衆生所に於いて、常に諸の衆生想を起さず、是の故に我れ兩足尊に問ひ奉る。所行の境界思議し難し、其の邊底不可得なり、已に能く心の境界を度れり、是の故に我れ兩足尊に問ひ奉る。布施持戒已に究竟せり、智者明淨に三世を了し、一切の諸の過惡を遠離せり、何の義の爲めの故に是の笑を現じ給ひしや。舍利目連[三三]居律多、及び諸の如來の餘の弟子、是れ彼等の所行の地に非ず、惟佛の境界

【三三】居律多。拘鄰又は倶鄰等とも記さる、佛に最初の化度を受けし五比丘の隨一阿若憍陳如のこと。

飾するを以て、福果甚だ清淨なるを出生し、光明十方を顯照す。鼙鼙鼛鼓箜篌の音、銅鈸笙簫の美妙の聲、是の如き諸音相ひ和合するも、佛一音の百分「の一にも」及ばず。乾闥修羅摩睺等、夜叉の所有美妙の聲、幷びに及び三界の諸の妙音、佛の百分の一にも及ばず。梵天の所有諸の光明、及び諸の[二〇]有頂天の身光も、世尊若し一光明を放たば、餘光は百分の一にも及ばず。身口意業皆清淨にして、布施淨きが故に世に染まず、功德寶聚人中の王たり、自然の功德等しく等しきもの無し。十力の實語を讃歎し已つて、

童子歡喜して是の言を作さく、我れ佛法王を供養するを以て、願はくば此の福「を以て」釋迦文とならん。佛彼の勝最なる淨行を知つて、善逝時に微笑を起し給ふ、彌勒笑を覩て而も請問すらく、惟願はくば人尊よ笑み給ふ緣を說き給へ。其の時大地[二一]六種に動き、

天龍歡喜して虛空に住し、兩足尊を瞻仰することを欣悅し、我が爲めに笑の因緣を說き給へと請ふ。諸佛の智慧了知する所は、佛弟子聲聞地「の及ぶところ」に非らず、今安んぞ誰か最勝道を欲せざらんや、惟願はくは憐愍して我が爲めに說き給へ。惟だ慈悲牟尼尊を除いて、一切世間に「說くに」堪ゆる者無し、能く法王の位を授くるに堪へたる、願はくは爲めに菩提の記を授け給へ。我れ今善く世の導師、釋迦牛王大威德に問ふ、已に智慧光明の岸に度り、貪瞋癡の穢過を除斷し給へり。不可思議恒沙億、導師爾所劫修行し給ひしは、勝妙なる菩提の行を求めんが爲めなりき、何の因緣の爲めに而も笑を現じ給ひしや。能く自身の手足等、妻子眷屬餘の親愛を捨てて、常に能く是の勝行を修行せり、

是の故に我れ牟尼尊に問ふなり。象馬車乘及び牛羊、奴婢・摩尼・眞珠・金、所有諸の珍物を見ず、菩提を行ずる時捨せざるは[二二]無し。其の智最勝にして悉く顯現し、諸の衆生の所行を知り給へり、心信性欲已に善く知れり、願はくは何の緣にて笑を現ぜしかを說

【二〇】有頂天とは、色界の色究竟天のこと。此の天は形ある世界の中にて最高の天なるが故有頂天と稱す。今は其の天に住する天人を指す。

【二一】六種に動く。大地六種に動くとは動、遍動、等遍動等の六種にして第一卷本文中にあり。

【二二】無の字底本は而に作る恐くは無の誤ならん。

た能善く調御し、能く成就して善友とならしめ、安住して堅固にして不壞なり。彼の苦惱の諸の衆生を見るに、」最も[其の原因を]極はむるに我見に依止せり、其が爲めに無我の法を演暢し、貪愛及び不愛有ること無し。不學の愚癡凡夫人は、嶮難なる不善の徑に依止せり、彼が爲めに眞實の道を顯示す、所謂涅槃の路に趣向せしむるなり。若し我想に取著する者有らば、彼は卽ち極苦惱に住するなり、其は無我の法を解せざるを以て、能く苦惱處を滅除せんと謂ふなり。不可思議劫數中、大智久しく已に曾て修習せり、取著を遠離することを修學し已る、是の故に諸の過惡有ること無し。過を離るる諸の法句を演說す、世尊は諸の過を遠離し、善く眞實微妙語を說き給ふ、口能く百種の畏を解脫し給へり。無量那由百千億の、天龍夜叉虛空に住し、無上最聖の法を愛樂す、聞者眞義に合せざるなし。如來善美の歡喜語、溫潤にして合する時悅意を稱す、和合せる無量の微妙の音は、無數の人を憐愍して解脫せしむ。伎樂音聲百千種ありて、一時に奏擊して相ひ和合す、悉く是れ天中悅樂の聲なるも、如來の一音能く[是等を]映蔽す。[一八]迦陵頻伽諸鳥衆、同時に共に微妙の聲を發し、能く他人をして欣樂を生ぜしむるも[而も]、佛の音聲[に比すれば]の少分にも非らず。歡喜を觸發する音樂、善く一切の諸の管絃合し、吹貝鼓笛琴箜篌も、佛の音聲に於いては悉く現ぜず。緊那羅王歌舞の音、已に曾て善く百千の樂を學び、若し聞くことを得る者咸歡喜せんも、佛の音聲に於ては悉く現ぜず。拘翅・鸚鵡・[一九]舍利の聲、孔雀哀鸞鴛鴦等、所有一切の美音の鳥、佛の音聲に於ては悉く現ぜず。可愛悅樂美妙の音、世間の所有善歌詠、悉く來り集聚して同時に發するも、佛の聲は最も勝殊にして彼に過ぎたり。諸天夜叉修羅王、三界の所有群生類、其の中の最勝なる上妙の身も、佛一光を放たば悉く映蔽す。如來の色身は花敷の如く、一切の相好映

【一八】迦陵頻伽(Kalaviṅka)。好聲鳥、美聲鳥、美音鳥等と譯さる、微妙の音を出す鳥なるが故に此の名あり。

【一九】舍利(Śāri)。鳥の名。

諸の異趣を救濟し利益し給ふ。已に一切法の體空なりと知り、諸の世間悉く虛妄なるを見て、道を悟つて性無我に契會し、彼の解脫を知つて所脫無し。煩惱及び放逸を遠離し、魔力及び軍衆を降伏し、道を知り無垢にして無礙智をえ、寂にして無礙なる清淨法を說き給ふ。假使虛空の星宿落ち、地海城邑悉く壞滅し、虛空無爲性變異することあるも、如來には終に實語ならざること無し。苦惱の諸の衆生、分別中に於いて安住し取著せるを見て、彼れが爲めに取著を離るべきことを顯示す、所謂甚深寂滅空なり。不可思議無數劫のあいだ、大雄は勇猛に久しく已に學び、一切無著を修學し已れり、是の故に佛には諸の過失あること無し。佛の修學せる所の一切法、所得の法の如く他の爲めに說き給ふ、此は愚癡凡夫地に非らず、又一切諸の外道にもあらず。心常に我想に安住すれば、是を過失の諸の凡夫と名づく、若し能善く無我の法を知れば、一切の諸の過失有ること無し。大雄の出し給ふ所の眞實語は、恒常に實法に安住せり、是の如く實法に安住し已つて、復た能く實語を演說す。過去に曾て眞實行を修し、乃ち能く本願を稱述し、眞實の妙果報を獲得せり、是を以て能く眞實語を說き給ふなり。所行の眞實行を具足し、善能く眞實際を覺り、是の如き眞實行修する所の、人尊大智慧に歸命し奉る。其の智最勝にして倫匹無く、智慧具足して甚だ光明あり、究竟して勝智慧に到る、智慧言說者に歸命し奉る。能く衆生の與めに親友と作り、久遠に慈悲を修習し、善能く安住して而も動ぜず、動ぜざること猶し須彌山の如し。天人の師とする所にして廣德を備へ、大衆群生類を敎誡す、善逝は甚深の勝れたる智慧あるをもて、衆に處して畏無く而も震吼し給ふ。是の如き無畏の師子吼、師子王の如くにして威雄猛なり、一切の諸の外道を降伏すること猶し師子の野干を摧くが如し。大雄善能く不調を降し、調ふ所は「更に」復

し、無戲論の法を樂しむ。文字能く入ること無し、諸法は無相なるが故に、智［者］は唯だ音聲のみなりと知る、是の故に定者と名づく。無盡の勝れたる寂滅は、無功用にして見へず、一切佛の境界にして、實際は家宅無し。諸佛に從つて、一切法の自性を修學す、是の佛の功德を學んで、功德の彼岸に到る。此に非ず亦た彼に非ず、本際は無分別なり、是の故に一切佛、功德の彼岸に到る。未來に於いて不去なり、已に法性を知るが故に、功用戲論あること無き、功德の彼岸に到る。

【一六】爾の時月光童子、佛に白して言さく、希有なり世尊如來應供正遍知、快く善く一切諸法の體性平等を說き給へり、此の一切諸法體性平等、菩薩の所學を說くに、若し菩薩所說の三昧に於いて能く修學せば、速かに阿耨多羅三藐三菩提を得ん、世尊よ、我れ復た說くことを樂ふ、如來よ、我れ復た說くことを樂ふ、善逝よ、我少しく說く所あらんと欲すと。佛言はく、童子よ、「說かんと樂はば便ち說け」と。爾の時月光童子佛前に在つて、十指爪掌を合せ佛に向つて住立し、佛の實德を稱し、偈を說いて讚じて曰く、

生は老病死の爲めに逼まられ、貪瞋癡等常に迷惑せるを見て、佛本爲めに菩提心を發して、願はくは、正覺を成じて衆縛を解かんと。【一七】善きかな無量劫修行し、檀に住して諸の過を調柔し護り、持戒忍辱にして勤精進し、善く禪定及び智慧を修す。悕望無きを以て、王位・妻・子・寶貨を棄て、悉く能く頭・目・手・足及び壽命を捨して、其の心初より疲厭あること無し。禁戒皎然として淨うして垢無く、身命を捐棄するも常に［禁戒］を護持し、善能く身口意を禁制し給ふ、善逝調身者に歸命し奉る。智礦忍力中に安住し、設使身を剜らるるも忿怒無く、慈を以てのゆへに血變じて乳を流出す、如來甚だ奇特なるに歸命し奉る。力を成就して十力に住し、無量智を以て諸法を擇み、佛世間を悲愍するを以て、

【一六】爾の時月光童子。以下梵本第十四現笑品、(Smitasandarśana.)

【一七】善きかな。以下六度行を無量劫修せしことを明す。始めに總說し王位妻子等以下別して說く。

文字の能く、是の深き義趣に入る所に非ず、諸の語言の事を捨して、定を得て所取無し。此の定を得たる菩薩は、說の如く相應し住し、設ひ火世界を焚くことありとも、中に於いて燒かれず。無量の【一五】劫火起らんに、空本然えざるが如く、若し法は空の如くなることを知れば、是の人を火燒かず。若し佛刹を燒く時、定に在つて是の願を作さく、彼の火を滅して餘り無く、人及び地毀れざれと。彼の神足は無邊なり、空に遊んで罣礙あることなし、定を隨學して住す、菩薩は是の德を獲るなり。若しは生若しは退沒において、起無く亦た滅無し、若し能く是の如く知らば、此の定を得ること難からず。世間に生滅有りとは、如來の說き給へる所なり、若し能く此の定を知れば、當に知るべし是れ世親なり。世間に於いて染せず、世法も礙うること能はず、身若し無礙なる者、能く諸佛の刹に往かん。常に淨土を見、及び世の導師に見え、彼れ正法を聞くことを得て、諸刹に在つて演說す。彼れ無知を起さず、法性を說く時、能く諸法に通達して、法性に隨ふが如くす。億劫に於いて演說するも、辯才而かも不斷なり、能く多身、其の餘の諸菩薩を變作す。變化の諸菩薩、往いて諸の佛刹に遊び、千葉の蓮花上に、加趺して安坐す。佛菩薩の、總持修多羅、幷びに餘の億「數の」諸經を顯示す、寂定を修習するが故に。唯だ不退轉と、餘の不思議の人を除いて、能く其の辯、佛の菩提を顯示し盡すもの莫し。重閣に乘じて去り、種種の寶にて嚴飾し、諸の妙花を布散す、氛馥甚だ樂しむ可し。諸の末香を散布し、幷びに勝妙なる香を燒き、或は無量の寶を散ず、菩提の爲めの故なり。菩薩救濟者、是の如き無量の德、諸の煩惱を斷除して、勝神通を獲得せり。煩惱を起さず、淸淨にして甚だ光耀たり、無爲にして壞すべからず、是れ菩薩の境界なり。寂靜深く寂靜なり、惱を離れて煩惱無く、戲論を超過

【一五】劫火とは、世界を壞する二十中劫に亘る五十六回の火災を云ふ。先の劫盡滅壞の註參照のこと。

て、應に善く修習して人の爲めに顯示すべし、童子よ、云何んが顯示せんとならば、所謂一切法に於いて平等心を起して、彼此有ること無く、分別有ること無く、無分別無く、造無く、起無く、生無く、滅無く、一切の妄想・分別・憶想・起想・皆な悉く斷除し、心の攀緣する所、意の思作する所、及諸の假名皆亦た斷除し、亦た一切の諸の惡[一三]覺觀を斷じ、[一四]陰界入に於いて自性有ること無く、貪瞋癡を斷ず謂く念慧解脫し、慚愧堅固なり、修行の儀式、所應の行處、謂く空閑の地、智慧地、去來を絕ちて、一切菩薩の所學、一切如來の行處、一切の功德成就す、童子よ、是を是の如き三昧を顯說すと謂ふなり、若し能く是の如き三昧を顯說せば、便ち諸定を離れず、其の心一切の三昧を失はず、迷惑有ること無く、大悲心を起して無量無邊の衆生を利益せん。爾の時世尊即ち是の時に於て偈を說いて言はく。

平等にして嶮地にあらず、微寂にして見る可きこと難し、一切の想を斷除す、故に名づけて三昧と爲す。妄想分別に非らず、見を離れて不可取なり、其の心不可得、是を名づけて三昧と爲す。正しく如實の定に住し、一切法を取らず、如實に取らざるが故に故に寂滅定と說くなり。法は少塵許も無く、亦少かの得可きものなし、少かの得可き無きが故に、故に名づけて三昧と爲す。有得と無得とは、此を名づけて妄想と爲す、法に於いて分別を離る、故に名づけて三昧と爲す。聲を以ての故に義を說く、是聲事有に非らず、猶し響呼の聲の如く、又亦た虛空の如くなり。衆生は無所住なり、住處不可得なり、得と不得との音、自性不可得なり。若しは去若しは墮落、去道不可得なり、去と不去との音、道に於いて是の如く知る。有を存するの定は是れ取なり、無を存するの定も亦た然なり、著無うして菩提を行ず、聖道を證するも亦た爾なり。嶮を離れたる平等の地たる、是の定慧は無相なり、佛子此を修習して、善く定を修すること相應せり。

【一三】覺觀とは、舊譯なり新譯に尋伺と云ふ。
【一四】陰界入とは、五蘊、十八界十二處のこと。

諸法を知り已らば、彼れを便ち清淨眼と名づくることを得。是の人諸の障礙あること無く、大智にして出離道を悟解し、二種の因を充滿具足し、一切の諸の願樂有ること無し。眞實處に於いて如實に見、一切の非實語有ることなし、是の人の所有諸の言論は、一切儀式の法に隨順す。智者は欲界を出過し、色無色の煩惱地を超え、能く三界に於いて染著を超え、行いて世間に在つて衆生を利す。一切名字の地を超過し、及び音聲を過ぎて體性空なり、久時を經て法を演說すと雖も、彼の言說に於いて所依無し。諸想及び戲論を遠離し、顚倒諸の惡見を斷除し、其の智慧に於いて善く決定す、是の人勇健にして行くこと空の如し。若し魔多く億那由他ありて、彼の意を亂さんが爲めに是の言を作す、悉く能く映蔽するは是れ魔衆なりと、魔力に從はず自在の攝なり。一切諸の魔業を棄捨して、戒行清淨にして熱惱無し、若し能く深く禪樂を樂ふ者、彼れ則ち能く世間空なりと知るなり。若し五陰是れ世間なりと說くに、已に彼の法體空寂なるを知る、既に其の滅なく亦た無生にして、一切諸法は虛空の如し。寧ろ當に自の身命を棄捨すべくとも、終に如來の敎を毀犯せず、戒を護持して彼岸に到り、其の願ふ所に隨つて悉く往生するなり。無量の諸の佛刹に遊行し、多くの那由他億佛に見え、終に天上に生ぜんことを悕欲せず、一切諸の願樂を遠離せり。是の人勤精進を捨てず、少かなる時間に於いても法行を行じ、其の十方諸佛の所に於いて、善能く讚詠して稱歎するなり。爾の時月光童子の身、是の如き寂滅定を聞くことを得て、一切利養の事を棄捨し、諸佛の歎ぜらるる法を修行す。若し自然智を得んと欲することあらば、我は一切世間の上たり、應當に是の勝三昧を學ぶべし、若し是の如く學ばば人天の最たらん。

二三 爾の時世尊、月光童子に告げて言はく、童子よ、是の菩薩摩訶薩、是の顯說せる三昧智に於い

【二三】爾の時世尊。以下梵本第十三、顯示三昧品、Samādhinirdeśa.

ず。童子よ、是の如き心の體性は、即ち是れ佛の功德の體性なり、是の如き佛の功德の體性は、即ち是れ一切諸法の體性なり、是の義を以ての故に、童子よ、若し菩薩一切法の體性一義なることを說くに、如實知者を名づけて菩薩、心を寂滅し、善く三界出離の善根を解すと爲すなり。如實了知、如實知見、如實說、異說有ること無し、說に隨つて無所執著を行じ、一切の諸の煩惱地を出過し、欲界色界を過ぎ、無色界を解脫し、名地を過ぎ、聲地を過ぎ、善く離文字の法を解し、善く分別字智を解し、善く離語言の法を解し、文字を知り、文字を善くし、善く字差別智に於て廣く字智を知り、善く一切法を解する差別智、善く一切法に於ける廣差別智、善く一切處を分別する法智、不可思議佛法と相應し、魔王波旬及び諸の魔民の壞することと能はざるところなり。是の法門を說く時、八億那由他の諸天人等、無障法忍を修することを得て、一切皆諸佛の爲めに阿耨多羅三藐三菩提の記を授けらる、四百八十萬阿僧祇劫を過ぎて阿耨多羅三藐三菩提を得、種種の名號にして國土差別するも壽命齊等なり。爾の時世尊、偈を說いて言はく、

若し智慧を有せる諸菩薩、　勝妙なる菩提道に趣向せば、　法義諸の言說を善くし、　能く一切法の體性を行ず。　口に常に眞實語を宣說し、　佛の實德を稱して演說し、　能く一切諸佛の法を知り、　三界尊に於いて疑あること無し。　一切諸法は同一義なり、　空を修するを以ての故に如實に知る、　彼れに種種別異の相無し、　此の一義に於いて已に修學す。　[九]無分別想分別想、　衆生・壽命・我・人の想、　盡と無盡と是の如き[諸]想、　此の諸想を斷じて悉く無餘なり。　如來に其の色有るを見ず、　諸法は自性無なりと知るを以てのゆへに、　亦た諸相隨形好に非らず、　一切の顚倒を斷ずるを以ての故に。　一切諸佛は不思議なり、　心體を遠離して寂滅なりと、　若し人能く是の如く知ることを得ば、　眞に無上なる　[一〇]兩足尊に見ゆるなり。　若し能く　[一一]神我の想を知ることありて、　中に於いて勝智慧を發起す、　是の如く

【九】無分別想の下金剛般若經の說相と同趣なり。同經正信希有分に曰く。如來は是の諸の衆生の是の如き無量の福德を得ることを悉く知り、悉く見給ふ。何を以ての故とならば、是の諸の衆生、復た我相、人相、衆生相、壽者相無く、法相無く、亦た非法相無し。云云

【一〇】兩足尊とは、佛のこと。佛は內には戒と定とを以て兩足となし、福と慧とを以て兩足となし、或は解と行とを以て兩足と爲し、外には天と人とを以て二足と爲し給ふ。佛は天と人との二足の尊なり。

【一一】神我。外道の妄執せる實我のこと、數論外道は第二十五諦に神我諦を立て是を究竟の境界なりと執せり。

を護持するなり。便ち爲めに已に一切佛、過去未來の諸世尊、及び現在十方に住する者、能く寂定を宣說するを以ての故に。若し人福德を樂はんが爲めの故に、十力大悲者を供養するに、無量無數億の諸佛、時に大海の諸の沙の數〔の如き佛〕逕る。更に餘人有つて福を樂ふ者、此の勝義に於いて一偈を持せんに、彼の劫盡惡世時に於いては、是の如き福德を最も勝れたりと爲す。若し能く一偈を聽くこと有る者、是の人は便ち一切佛を供〔養〕するなり、此の[四]末世惡世時に於いて、斯れを最勝上なる供養と爲す。是の人便ち最大なる利を得、世間の敬し奉る所を受くるに堪えたり、諸の十力最上の子を生じ給へり、共に於いて長夜に已に供養せり。彼れ我れ耆闍山に在るときに見ゆ。我れ卽ち爲めに菩提の記を授く、我れ已に彌勒尊に付囑せり、彼の佛亦た爲めに記莂を授けん。是の人復た[五]彌陀佛の爲めに、無量の勝利益を說くことを爲す、或は復た[六]安樂國に往詣し、又[七]阿閦佛に見えんことを欲樂す。無量無邊百千劫、是の人諸の惡道に墮せず、此の菩提行勝行に於いて、無量の諸の快樂を成就す。無量の功德勝れたる利益、是の如きを我れ今已に宣說せり。若し我の如き功德を欲する者は、應に末世中において正しく經を持すべし。

[八]童子よ、此の義を以ての故に、菩薩摩訶薩能く是の如く不可思議なる諸法の體性を知る者は、是の如き功德の利を得るなり、如來眞實の功德を讃說して如來の言は非眞實なりと謗らざるなり。何を以ての故とならば、如來已に諸法を得たること世の爲めに知らる、是の人如實に彼の法を知り、亦た無量の如來の功德を知り、能く如實に不思議なる佛法を知る。何を以ての故に。童子よ、佛は無量無邊の功德有り、不可思議にして心を遠離せり、是の義を以ての故に、餘、思ふこと能はず、稱量すること能はず。何を以ての故に。童子よ、其の心無性にして、又形色無く、覩見すべから

【四】末世。一佛出世すれば其の佛の敎化の及ぶ程度に就いて正法、像法、末法の三時を說く。正法の時は佛の敎行證の三共にあり。像法の時には敎と行のみありて證無く。末法には敎のみありて行と證を缺くと云ふ。年數に就ては異說あれども大悲經によれば正法千年、像法千年、末法萬年間なりと言ふ。

【五】彌陀佛(Amitāyus)。無量光と譯す。

【六】安樂國(Sukāvatī)。三惡道の苦有ることなく但だ自然快樂のみあるが故に其の國を安樂國と云ふ。

【七】阿閦佛(Akṣobhya)。無動、不動等と譯す。往昔、阿比羅提國に出現せし大日如來の處に於て發願し、修行の後成佛し東方善快國に於て今現に說法す。

【八】童子。以下梵本第十二、隨學三昧品、Samādhyanuśikṣaṇam.

紹いて斷絶せず、能く光耀精妙の身を得、三十二種相を成就せん。其の餘の無量種の利益、勝れたる菩提當に能く得べし、大力を成就して動ずべからず、威德諸王も抗するに堪ゆる無し。福德を具足して甚だ端嚴なり、福と功德と威光耀やき、諸天威を覩て面のあたり對せず、謂つて佛法を行ずる智慧者なりといふ。堅固なる菩提心に住し、諸の衆生と善友と爲る、是の人復た諸の闇冥無し、勝妙なる菩提道を顯示するなり。語言の道を離れて欲する所無く、諸法は寂滅にして虛空の如し、其の能く是の如き業を知ることあるもの、無量の勝れたる辯才を成就す。百千の修多羅を演說し、能く彼の法の微妙の義を示す、智者は恒に無礙の慧を成じ、能く微細の法の體性を知るなり。常に善く彼の衆生の信を知り、一切語言の音を學習し、人の爲めに因果の理を顯示し、能く如上の勝妙の事を獲るなり。力能を具持して減少あること無し、衆に入るも無畏なる梵行者は、恒に憶し念持して忘失せず、善能く法性を悟解するが故なり。耳に初より非愛の語を聞かず、恒常に樂しむ可き音を聽覽き、口に常に悅意の言を宣說す、是の人善く法性を知るが故なり。念慧法智悉く成就す、其の心淸淨にして穢濁無し、百千の經を說くも滯著無く、若し演ぶる所あれば虛設ならず。字句差別已に修學し、善く千億の諸の語言を解し。名味義趣皆な善く解せり。法性を悟るに由つて斯の德有るなり。夜叉・羅刹・天・修羅、迦樓・緊那摩睺荼、彼の八部の爲めに常に愛敬さる、斯れ法性を悟解せるに由るが故なり。惡心の神衆毘舍闍[三]、血を飮み肉を食ふ極めて毒害をなすものも、是の寂定を持つこと有る者を、是等常に能く衞護を作す。智者の廣大なる言を聞き、心喜び踊悅して身毛竪つ、彼の菩提に於いて深く愛樂し、能く廣大なる難思の福を獲。是の如き福報知る可きこと難し、百千劫に於いて說とも盡きず、善逝の法寶藏、無量無邊無限數なる

【三】毘舍闍(Piśāca)。顚狂鬼、噉精鬼等と譯す、餓鬼中の最も勝れたる者と云ひ、又持國天の部下の鬼なりと云ふ。

は妄分別す、是の故に億劫に於いて、數生死に流轉す。能く妄想を知らず、猶し大導師の如きは、彼れ惡業を作さず、又惡道に墮せず、是の諸の凡夫等、此の義を知ること能はず、便ち誹謗の心を起す、是の如く苦法を滅せば、諸法は不可得なり、諸法の想無きに非らず、若し能く是の如く知れば、彼の想も亦た見ず。我れ是の如き想を知る、凡夫は妄りに分別す、離分別の法に於いて、智者は迷惑せず。此を智者地となす、是れ愚の境界に非ず、是れ菩薩の所行なり、謂く空にして無分別なり。此は是れ菩薩地にして、佛子の所行、佛法の妙莊嚴なり、說いて寂滅空なりと謂ふ。[二]是の諸の菩薩等、諸の有習を斷除し、色の爲めに壞せられず、佛性に安住す。一切法は無住なり、無住處を以ての故に、若し能く是の如く知らば、菩提を得ること難からず。施戒聞忍を修し、善知識に習近し、若し能く是の業を知れば、速かに菩提道を證せん。是の人常に諸天に敬せらる、乾闥・夜叉・摩睺等、龍・鬼・羅刹・緊那羅、是等常に來つて菩薩を供養せん。恒に諸佛の爲めに稱歎せられ、諸の世間の與めに利益を興こし、智慧相續して寂滅を樂ふ、勝妙なる菩薩悲愍身なり。若し菩薩有つて能く空を知れば、無量億の衆生を利益し、柔和にして衆に處して法を演說す、聞く者欣樂して愛敬す。廣大なる智慧轉た明を增し、是の智慧を以て能く佛を見、亦た莊嚴にして淨妙なる刹を覩、諸佛の說く所の法を聽受す。一切の法は幻化の如く、猶し虛空の如く、自性空なりと知り、能く體性是れ空無なりと知り、能く是の如く行ずれば所染無し。其の菩提行を修行することあるもの、諸事中に於いて著を生ぜず、一切の法は變化の如しと知りて、而も諸の刹に變化を示す。能く諸佛所作の事を爲し、幻法の體性去來無し、前の求むる所に隨つて利益を得、謂く能く菩提に安住する者なり。恒に一切如來の恩を念じ、願はくば佛種を

【二】是の諸の菩薩等云云とは、修行の力によつて本來具有せる佛性を引發することを示す。

巻の第三

爾の時世尊、月光童子心に默念する所を知り、而も「彼」偈を作して問へり。「故に」月光童子に告げて言まはく、若し菩薩、一法と相應すれば皆悉く能く最勝なる功德を獲、速かに阿耨多羅三藐三菩提を成ずるなり。童子よ。如何が一切法の體性を如實に了知するやとならば、所謂、一切法は名を遠離し、音聲を離れ、語言を離れ、文字を離れ、生滅の因相、緣相、攀緣の相を離る、所謂無相にして相を遠離し、非心にして心を遠離して而も諸法を知るなり。爾の時世尊即ち偈を說いて曰はく、

諸法但だ一を說く、所謂法は無相なり、是れ智者の所說なり、如實に而かも了知せよ。

若し是の如き法を說きて、菩薩了知せば、彼れ無礙辯を得て億修多羅を說かん。導師に加護せられて、實際を顯示し、假名を分別せず、曾て所說あること無けん。一を以て一切を知り、一切を以て一を知る、種種に說くこと有りと雖も、而も慢を起さず。其の心能く、一切法は無名なることを了知して、隨順して諸名を學んで、眞實を演說するなり。諸の聞く所の音聲、其の聲本を了知し、聲本を了知し已つて、聲の爲めに染せられず。音聲の本際を知る、諸法の相も亦た然なり、若し能く一法を解すれば、復た〔一〕胞胎に處せざるなり。一切法は無生なり、能く此の無生を了し、生を知つて生者を說くは、則ち能く宿命を知るなり。若し宿命を得、能く所作の業を知り、若し常に作業を知れば、堅固なる眷屬を得るなり。若し是の空法に於いて、菩薩能く解了し、知らざること有ること無くんば、此は煩惱際に非ず。非煩惱際に於いて、凡愚

〔一〕胞胎に處す云云とは、四生中の胎生を云ふ。即ち生死に輪廻して出離あることなきを意味す、今は生死を脫して無生の理を證得するを示す。觀無量壽經に胞胎に處せず、常に諸佛淨妙の國土に遊ぶ云云とあり。

如く願はくは[九八]解說し給へ。諸の衆生の心所行を知り、一切法に於いて疑あること無し、佛一切法の體性を知り、言語を離れし法を言說を以てす。師子吼野干を摧くが如く、佛の異道を降すも亦た是の如し。諸の衆生の所行を知り、諸法に通達して彼岸に到る、無礙なる智慧淨境界、惟願はくは法王我が爲めに說き給へ。過去未來世を知り、及び今現在亦た悉く了し、三世無礙智堪能なり、是の故に我れ釋師子に問ひ奉る。一切三世諸佛の法、法王世尊悉く能く知り、法の體性に於いて善く覺悟し給へり、是の故に我れ大智海に問ひ奉る。能く一切諸法の過を離れ、已に能く心穢を斷ずるが故に、一切癡穢の結を剪除し給ふ、願はくば佛爲めに菩提行を說き給へ。佛所得の諸法相、所得の相の如く我が爲めに說け、我れ是の如き法相を聞き已つて、所聞の相に依つて菩提を行ぜん。衆生の行相多く差別せり、我れ何の行をか作して能く解入せんや、願はくば我が爲めに入行の法を說き給へ、我れ聞くことを得已つて則ち能く知らん。一切諸法各差別せり、其の體空寂にして性遠離せり、菩薩云何が能く現證するや、願はくば我が爲めに是の法母を說き給へ。一切法に於いて彼岸に到り、言說法句已に修學せり、已れ自ら疑無く他の疑を除かん、我が爲めに佛[九九]菩提を顯示し給へ。

尊の從弟、阿難尊者の兄なり。

【八六】金毘羅(Kimpila)。

【八七】灰毛針夜叉(Sucíloma)。

【八八】阿吒婆(Aṭavak)。

【八九】雪山(Haimavata)。

【九〇】婆多山(Satagiri)。

【九一】驢(Gardabha)。

【九二】世間解。如來十號の一なり。

【九三】富單那(Putana)。臭穢と譯す。慧琳音義に身形臭穢なりと雖も、是れ餓鬼中の福の最勝なる者なり云々と記せり。

【九四】佛。底本曾に作る。今は三本による。

【九五】爾時。以下梵本第十一持經品、Sūtradhāra.

【九六】佉禪尼蒲禪尼、Khādaniyabhojaniya.

【九七】梨呵那(Lohyena)。

【九八】解說。底本記說に作る、今は宮本による。

【九九】菩提。底本菩薩に作る、今は三本并に宮本聖本による。

入るを見て、之を觀て厭足なし。菩薩行を過修し、〔九四〕佛世尊を供養し奉る。彼れ是の淨業を作す、衆生觀て厭くこと無し。須彌輪山等、及び閻浮の諸山、障蔽となること能はず、諸佛刹を照らし光らす。此の娑婆の諸海、土地悉く平正にして、佛刹普く皆遍く、衆花を散じて悉く滿てり。百千種の光明を、法王の足下より放つ、地獄盡く淸涼にして、苦を除いて安樂なることを獲たり。十力爲めに說法し給ふや、天人眼淨なることを得、無量百千衆、佛道に於て決定せり。無等等城に入り、現に是の神變を作す、無量百千劫、佛說き給ふも尙盡し難し。是の如き勝れたる德聚なる、牛王は彼岸に渡れり、一切の德を究竟せる、佛福田を頂禮す。

〔九五〕爾の時世尊、諸比丘の與めに前後圍遶せられて、月光童子の住處に往詣し坐所に敷て坐し給ふ、諸比丘僧次第に坐す。

爾の時月光童子、佛・菩薩・比丘の坐し已るを知つて自ら手に多種の美食を齎持せり、所謂、〔九六〕佉禪尼蒲禪尼・〔九七〕梨呵那・諸沙尼等なり、又漿飮を持し、百味食を以て如來及以大衆を充足し奉り、既に充足し已つて歡喜し踊躍して深く自ら慶び過せり、佛及び大衆、飯食し訖已つて、鉢を却け手を澡ぐや、萬億價の寶衣を以て如來に奉上つり、比丘衆の上中下の次第に隨つて各上中下の三衣を以て次第に之を施せり。

爾の時月光童子、佛及び僧に衣物を施し已つて、偏に右の肩を袒ぬぎ右膝を地に著け、合掌作禮して佛前に住し默然たり、偈を說いて而も世尊に問ひ奉る。

菩薩智者は何の行を行ずるや、常に能く諸法性を解知し、云何が能く所作の業に入るや、
惟願くは導師よ我が爲めに說き給へ。云何が能く宿命を得、云何が復胞胎に處せず、
云何が能く不壞衆を得、何が故に無量辯を得給へるや。無上の定慧兩足尊、我が所問の

【七一】羅睺毘摩質は、阿修羅王の名、舍脂夫人の父、卽ち帝釋の舅なり。
【七二】阿耨大龍王とは、八大龍王の一、阿耨達池に住すと云ふ。
【七三】供。底本は共に作る、今は三本、宮本、聖本による。
【七四】阿波羅龍王(Apalāla)。阿育王經に出づる阿波羅龍王なるべし。
【七五】目眞陀龍王(Mucilinda)。解脫と譯す、法を聞いて龍苦を脫せしが故に此の名あり。西域記八に出づ。
【七六】衣。底本果に作る、今は三本及び宮本による。
【七七】難陀(Nanda)。
【七八】跋難陀(Upananda)。
【七九】德叉(Takṣaka)。右の三は八大龍王中に數へらる。
【八〇】黑瞿曇(Kṛṣṇagantama)。
【八一】伊羅鉢龍王。(Elapanna)。次の因緣は佛本行集經第三十一卷に出づ就て看よ。
【八二】迦葉佛。過去七佛中の第六佛。
【八三】梼蘭(Erāvaṇa)。樹の名なり。花は愛すべきも惡臭甚だしく四十里に及ぶと云ふ。
【八四】摩那斯(Manasvati)。龍王の名、大身。慈心等と譯す。
【八五】調達(Devadatta)。釋

らす。過無量の羅刹、多衆にて圍遶し、各諸の妙花を持ち、恭敬して佛に散じ奉る。[七二]阿耨大龍王女、善く音樂を學べる、百種の妙聲を擧ちて、誠心に佛を供養し奉る。阿耨龍の五百子、廣く菩提智を求めて、親屬と與に圍遶して、咸無上尊を[七三]供[養]し奉る。[七四]阿波羅龍王、佛に向つて合掌し、龍の勝れたる眞珠を持ち、空に在つて佛を供養し奉る。[七五]目眞陀龍王、踊躍して悉く歡喜し、諸の妙寶[七六]衣を散じて、淨心に供養し奉る。彼れ勝れたる敬心を起こし、佛の種種の徳を念じ、諸の親屬に圍遶せられて、皆來つて佛を讃歎し奉る。[七七]難陀・[七八]跋難陀、[七九]徳叉・[八〇]黒瞿曇、眷屬と與に佛を詣し、膝を屈して善逝を禮す。[八一]伊羅鉢龍王、百の眷屬と號泣し、[八二]迦葉佛を憶念して、此の受生を厭惡せり。我れ昔疑惑を懷き、小[八三]伊蘭葉を壞れり、是の故に難處に生れ、佛法を知ること能はず。深く此の蛇身を厭ふ、願はくは速かに龍趣を捨し、能く清涼の法、道場所得者を知らんことを。餘多の千龍王、海龍[八四]摩那斯、上妙の龍衣を持ち、來つて人中尊に奉る。[八五]調達佛に石を擲ちしに、夜叉空に住して接せり、其の名を[八六]金毘羅といふ、恭敬して佛前にあり。阿吒夜叉城、空無大夜叉、誠しめ約して悉く集まらしめ、大仙尊を供養し奉る。[八七]灰毛針夜叉、[八八]阿吒婆可畏、[八九]雪山[九〇]婆多山、[九一]驢夜叉佛に歸し奉る。種種異類の身、被服甚だ畏る可き、多那由他の鬼、吉物を持つて佛に奉る。食海金翅鳥、婆羅門に變形して、寶冠にて自ら莊嚴し、空に住して佛を禮す。閻浮の所有城、一切大林天、城神と倶に來つて、[九二]世間解を供養し奉る。無量林天至り、幷に諸の樹神等、及び一切の河神、集まりて法王所に詣せり。山峯巖嶺神、堆阜天も亦た至り、泉池沼神等、海神と共に喜びて到る。天人修羅鬼、迦樓鳩槃等、餓鬼[九三]富單那、悉く來つて佛を供養し奉る。諸天修羅衆、慢を離れて咸供養し奉る、佛の王城に

色界
- 初禪天：梵衆天、梵輔天、大梵天
- 二禪天：少光天、無量光天、光音天
- 三禪天：少淨天、無量淨天、徧淨天
- 四禪天：無雲天、福生天、廣果天
- 淨梵地：無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究竟天、和音天、大自在天

無色界
- 空無邊處、識無邊處、無所有處、非想非々想處

【六六】他化天　以下六欲天の來集することを示す。

【六七】毘樓勒(Virūḍhaka)。六欲天中の四天王の隨一なる增長天王なるべし。

【六八】提頼吒(Dhritarāṣṭra)。前記四天王中の隨一なる持國天王なるべし。

【六九】婆稚(Bhandhi)。阿修羅王の名。

【七〇】睒婆利。鬼神の名譯して英雄德といふ。

の宅に入り給ふ。城郭悉く莊嚴され、百千億の幢幡、栴檀もて其の地に塗り、散花して莊嚴す。佛道に在つて行く時、廣く悲愍の心を發し、口に無量光を出し、香を吐いて說法し給ふ。佛身を覩て樂を生じ、喜を得ること不思議なり、我等何時、法王を供養するに勝ゆることを得るや。無量の人發心して、我れ明[旦]亦た佛を請じ奉らんと、憐愍救濟者、久遠に値遇すること難し。或は巷城却敵、勝妙なる自[己]の莊嚴[具]、辦具たる諸の花瓔を、佛に散じて菩提の爲めにす。或は勝れたる六一瞻波鬘、婆師目多伽、或は復た繒綵を散じて、勝純至心を發す。或は在家の心淨きもの、勝衣をもて自ら莊嚴し、繒綵諸花を以て、大比丘衆に散ず。優鉢羅花等、復た妙なる金花、種種なる摩尼寶を散じ、或は栴檀末を散ず。諸の希有の事を現ずること、稱て計數べからず、佛城門に入り給ふ時、多くの人道心を發せり。煩熱無うして見諦し、六二善現・善見天、六三阿迦尼離欲、一切來つて佛を觀奉る。密身及び六四廣果、百那由他の衆、摩尼光の曜くが如く、悉く來て尊を瞻仰し奉る。淨天子無數、及び諸の六五少淨天、無量の淨天子、悉く來つて大仙を觀奉る。其の少光天子、及び無量光天、光音天子等、咸く共に來つて佛を觀奉る。其の梵輔天子、幷に及び梵衆天、定藏大梵等、皆來つて世尊を觀奉る。六六他化天歡喜、化樂天善心、兜率炎摩衆、三十三天王、四方四天王、財主心、幷に親族空に在りて、諸天の妙花を雨らす。恒醉持鬘天、種種の花鬘を執り、六七毘樓勒、惡眼六八提賴吒、故らに來つて佛を禮敬し奉る。大力夜叉王、及び眷屬の淨幷に眷屬心に喜び、勝丈夫を供養す。百器足夜叉、幷に妻及び眷屬、自ら美なる音樂を擊ち、如來を供養し奉る。喜悅耽美の歌、謂く緊那羅王、香山頂に居在せる、踊躍して悉く來集す。六九婆稚七〇睒婆利、七一羅睺毘摩質、幷に餘の大威德、而も諸の寶物を雨

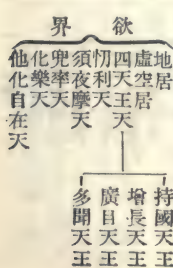
【六一】瞻波(Campaka)。印度に多く產す。金色花樹と譯す、其の花金色にして香亦た高し。

【六二】善現・善見。共に色界の五淨居天の一なり。以下色界欲界の諸天來集を明す。

【六三】阿迦尼は色界十八天中の最上に位する有頂天のことなり。今は有頂天に住する色界の天人のことなり。

【六四】廣果は色界十八天の隨一。

【六五】少淨天。少光天光音天梵輔梵衆等皆色界の十八天の來集するを示し他は影略せり。次に三界諸天を圖示す。

欲界
- 地居
- 虛空居
  - 四天王天
    - 持國天王
    - 增長天王
    - 廣目天王
    - 多聞天王
  - 忉利天
  - 須夜摩天
  - 兜率天
  - 化樂天
  - 他化自在天

散じ、及び衆寶網を散ず、佛城門に至り給ふが故なり。若人病苦逼まり、種種なる憂箭に射せらるるも、一切咸樂を具するなり、導師の威徳を以ての故に。拘翅羅鸚鵡、孔雀頻伽等、諸の鳥空中に住し、和雅の妙音を出す。衆鳥心に歡喜し、是の妙音を出すとき、能く修行者の、貪・瞋・癡の煩惱を滅す。無量億の衆生、聲を聞いて順忍を得、聖爲めに彼に記を授け給ふ、未來咸く作佛すと。佛の十力身を見、衆生佛智を樂ふ、我れ云何が此を得んと、佛知りて授記し給はんことを欲す。佛一一の毛孔、百千種光を放ち、諸佛刹を遍照し給ふ、普眼城に入るが故に。日明を障蔽し、摩尼寶天火、餘光悉く現ぜず、佛城門に入り給ふが故なり。百千の蓮花敷き、地を出でし千葉淨し、十力尊上を踏みて、衆と與に城巷に遊び給ふ。道路穢汚無く、純ら香泥を以て塗り、遍城妙香を燒き、馨流れて甚だ樂しむべし。巷陌甚だ嚴麗にして、諸の瓦礫を除去す、十力の功徳の故に、種種の花香を具せり。百千の惡夜叉、佛の金色身を見て、大悲愍の意を起し、淨心にして[五九]牟尼に歸す。諸天宮悉く空し、皆共に來つて佛を觀奉る、空に在つて衆花を雨ふらす、佛勝城に入り給ふを以ての[六〇]故なり。若し人散花を以て、人天の師所佛の上に於て、花蓋莊嚴を成ずることあらば、身端好ならん。人天修羅等、佛十力尊を覩て、心歡喜踊躍して、未だ曾て厭足あらず。右に百千の梵有り、左に帝釋あること亦然り、無數の天空に在りて、三界尊を恭敬し奉る。時に佛現變し已つて、勝妙の法を開示し、百千衆の聞者、大菩提心を發せり。相好花を身と爲す、猶し虚空に滿つる星のごとく、佛王御の路に處して、淨空の圓月の如し。淨摩尼寶の、垢を離れて瑕穢無く、十方に光明を放つが如く、佛の刹を照らすも亦然なり。諸天衆圍遶し奉りて、人尊は王城に入り給ふ、足地を履み給へば晝の如し、來つて月光

【五九】牟尼(Muni)。仁、仙、寂默等と譯す、身口意の三業の煩惱悉く滅して寂默なるが故なり。即ち佛を指す。

【六〇】故。底本時に作る。今は三本及び宮本による。

めの故に王舍城に入り給ふ。佛は久集の無量の善根を以て「足に千輻輪相あり」、右の千輻輪足を以て城の門閫を蹈み給ふ、時に種種の神變未曾有の事を現ず、諸佛如來若し城に入る時、法として皆是の如く其の神變を現じ給ふなり、汝今善く聽け、當に汝が爲めに說くべし、佛城に入り給ふ時、所有神德、偈頌を說いて曰く、

大仙王城に入り、輪足もて門閫を蹈み給ふ、威力大地を動かし、衆生咸歡喜す。諸の飮食に乏しき者は、飢渴の患を遠離し、其の身皆飽滿するなり、佛の閫を履み給ふに由るが故なり。聾・盲・瘖・瘂の輩、貧窮薄福等、諸根悉く[56]具せしむ、佛の閫を履み給ふに由るが故なり。[57]閻羅界餓鬼、膿唾屎尿を食するもの、悉く天味食を得るは、佛の閫を履み給ふに由るが故なり。諸山及び寶山、種種の林花果、躬を曲げて悉く廻向するは、佛の閫を履み給ふに由るが故なり。大海と城邑聚、地皆六種に動き、衆生を逼惱せざるは、佛の閫を履み給ふに由るが故なり。人天鳩槃等、歡喜して空中に住し、佛の爲めに寶蓋を持し、大菩提心を發す。諸の音樂擊たざるに、自然に妙なる聲を出す、衆人皆歡喜するは、佛の閫を履み給ふに由るが故なり。百千萬億の樹、佛に向つて花果を具し、無量の天空に住し、設くる所人供に非ず。百千の諸の牛王、獸王師子吼し、象馬悉く歸禮するは、佛の閫を履み給ふに由るなり。國中の諸の大王、十力の世尊、導師の勝妙色を見て、歡喜して頂禮す。餘人心に喜び讃じ、或は諸の妙なる花を散じ、十指爪掌を合せて、佛を稱して大悲と爲す。或は諸の瓔珞を散じ、金鎖環臂印、或は[58]師子條を散じ、大菩提心を發す。女人は金鬘を奉り、又女は面花を散じ、或は金の瓔珞、乳面手の嚴具を解き、或は有るは金花、及び諸の嚴身の具を散じ、捨して無に至ると雖も、一心に諸佛の道を悕求す。城人は妙衣を布き、或は復た頂珠を

【五六】具。底本全具とあり、今は三本、及び宮本の合具とあるによる。

【五七】閻羅界。琰魔王の國のこと。南閻浮提の下五百由旬の所にありて縱横各五百由旬ありと云ふ。琰魔王地獄を總司し、平等に善惡を決斷して治罰すと云ふ。

【五八】師子條。師子の筋を以て作れる樂器の絃なり。

比丘僧、默然として許受し給ふ。月光童子明日食に請し奉る、彼を護らんが爲めの故に、[五一]爾時月光童子、既に如來の供を受くることを許し給ふことを蒙り已つて、歡喜踊躍して深く自ら慶幸し、即ち坐より起つて、偏へに[五二]右肩を袒ぎ、佛足を頂禮し、右に遶ぐること三匝して辭退して去る。

爾の時、月光童子、王舍城に向つて家中に還り至り、到り已つて即ち其の夜に於いて、種種無量無數の勝味飲食を嚴辦し、王舍大城一切諸處に於いて悉く繒綵を懸け、種種の花を散じ、幢幡蓋を竪て、衆の名香を燒き、諸の帳幕を施し、街巷を掃治し、瓦礫を除却し、四衢道を灑ぎて清淨ならしめ、栴檀末雜寶を散じて遍く布き、復た種種の花種種の寶花を散じ、其の地を間錯せること猶し彩畫の如し、又無量種種の莊嚴を以て城巷を彫飾し其の城一切周遍し已れり。[五三]優鉢羅花、[五四]拘物陀花、[五五]鉢頭摩花、分陀利花有り。其の家内に於いては純ら牛頭栴檀を以て用つて其の宅に塗り、種種の莊嚴を以て諸の寶帳を張り、佛世尊の爲めに上味食を設けたり。是の時童子是の如き等を作して城郭街巷舍宅を莊嚴し、諸の供具を辦じ、一夜の中に悉く備足し已れり、明淸旦に至つて、八十那由他の菩薩、阿逸多菩薩を以て上首と爲す、其の名を觀世音菩薩、大勢至菩薩、香象菩薩、寶幢菩薩、難勝菩薩、文殊師利童子菩薩、勇健軍菩薩、妙臂菩薩、寶花菩薩、不虛現菩薩と曰ふ、是の如き等の菩薩摩訶薩、餘の菩薩に於て上首たり、是の如き等の大菩薩衆の與めに前後圍遶せられて、王舍大城を出でて如來所に往いて、更に衣服を整へ、頭面作禮して右に遶ぐること三匝、佛に白して言さく、「世尊よ、食時既に至れり、設くる所已に辦ぜり、願はくば臨顧を垂れて王舍城に入り、我が室内に至つて我が供を哀受し給へ」と。爾の時世尊、中前時に於いて衣を著け鉢を持ち、大比丘衆滿百千人、菩薩摩訶薩無量百千億那由他天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等無量百千と與なり、而も供養を設けて佛の大威力、佛の大神足、佛の大變現、佛の大威儀を恭敬讚歎し、百千萬億那由他の光を放ち、百千種の伎樂を作し、種種の天花を雨らし、月光童子の供を受けんが爲

【五一】爾時。底本時爾に作る、今は聖本による。
【五二】右肩。底本脅に作る、今は明本による。
【五三】優鉢羅花(Utpala)。青蓮華又は紅蓮華なりと云ふ。
【五四】拘物陀花(Kumuda)。赤蓮華と云ひ、又白蓮華と云ふ。
【五五】鉢頭摩花(Padma)。紅蓮華のこと。

に向つて說く、自ら己が瑕疵を覆ふ、深く是れ愚癡の相なり。愚者は食を貪り嗜み、節量を知ること能はず、佛に因つて飮食を得て、都て反報の心無し。上妙なる甘饍を得て、其の法に應ぜず、反つて食の爲めに害せらる、象の泥藕を食するが如し。種種上味の饌、智者は之を食すと雖も、根寂靜にして貪ること無し、如法に簡擇して飡ふ。聰智の人有りて、愚を慰さめ問從し來ると雖も、彼に於いて親戀すること無く、但だ悲愍の心を起す。智者は恒に愚[者]を利す、愚[者]反つて爲めに衰損す、我れ是の過を見已つて、獨り空[處]に處すること鹿の如し。智者是の過を見て、愚[者]と共倶ならず、若し與に往來すれば、天を失す況んや菩提をや。智者恒に悲に住し、慈に住して喜と合す、常に一切有を捨し、定を修して菩提を證す。道を悟つて憂怖を除き、人の老死逼るを見て、彼に於いて悲愍を起こし、發言するに眞義に合す。若し人佛法の、離言說の聖諦を知り、若し是の法を聞けば、離食の聖愛を得ん。

[48]童子よ、是の義を以ての故に堅固行を成就することを得んと欲せば、菩薩は應に是の如く學ぶべし。何を以ての故とならば、童子よ、堅固行の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を得ること、則ち難からずと爲す、何に況や此の三昧をや。爾の時、月光童子、佛に白して言さく、希有なり世尊如來應正遍知、善能く此の堅固の行を說き、此の三昧法に入らんが爲めに、一切菩薩の所學を善く說き、善く建立し給ふ、乃ち是れ一切如來の行處なり、尙ほ聲聞、辟支佛地に非らず、何や外道ならんや。世尊よ、我れ今當に是の堅固行に住すべし。何を以ての故とならば、我れ佛の所學の如くならんと欲す、我れ今學ばんと欲す、我れ彼の阿耨多羅三藐三菩提を知らんと欲するが故に、我れ魔[49]波旬及び其の眷屬を破せんと欲するが故に、我れ一切衆生の苦を脫かんと欲す。唯願はくば、如來及び比丘僧幷に諸の眷屬、明かに我が請を受け給へ、我れを悲愍せんが爲めの故に。[50]爾の時、如來及び

【四八】童子。以下梵本第十八城品、(Purapraveśa)

【四九】波旬(Pāpīman)。惡魔、惡者と譯す。今は梵漢並べ擧げたるなり。

【五〇】爾の時。底本如來爾時とあれども恐らくは爾時如來を倒置されしなるべし。

方を劫掠し害するが如く、煩惱も亦た是の如く、衆生の善根を害す。多くの人[四五]陰の空なることを説けども、陰の無我なることを知らず、若し陰の有無を問はば、顰蹙し瞋言もて對す。若し陰無我なることを知らば、罵ることを聞けども心瞋らず、惑有れば魔に繋屬す、空を悟れば忿怒無し。人身痛を患ひ、多年苦逼惱す、是の病時を經ること久しく、醫を求めて治療せんと欲し、是の人數推訪して、便ち良師に遇ひ得たり、醫愍んで好藥を授け、汝服するときは則ち差えしめんと。是の人妙藥を得るも、服せずんば病愈えず、是れ醫藥の咎にあらず、當に知るべし病者の過なることを。此の法に於いて出家し、道品敎を讀誦するも、行修相應せざれば、何ぞ能く解脱することを得んや。

諸法の體性は空なり、佛子は是の事を觀ぜよ、一切有は悉く空なり、外道の空は少分なるのみ。智は愚と競はず、勇猛に應に捨離すべし、若し罵らるることあるも報いんことを念ぜざれ、愚法汝嫌ふこと勿れ。智[者]は愚[者]と往返せず、善く其の性習を知る、復た共に相親しむと雖も、後ち必ず怨嫉を成ぜん。智[者]は愚[者]と密ならず、其の志の堅からず、體性自ら破壞するを知る、凡愚は則ち友無きなり。若し如法語を[四六]聞くことを、毀戒者は欣ばず、因無うして瞋覆を起こす、當に知るべし是れ愚人なりと。愚者は愚[者]と合す、糞と糞と和するが如し、智と智と同一處なり、猶し二の醍醐合するがごとし。世間の過を觀ず、因果信入せず、佛語に於いて信無くば、世に在つて離壞せらる。貧窮にして財物無く、[四七]不活のゆへに求めて出家し、我が法に出家し已つて、衣鉢に極めて慳著す。彼れ惡知識に近づき、我が禁戒を毀破し、自ら己が行を觀ぜず、其の心安住すること無し。晝夜非宜に住し、惡を作して厭ふことあること無く、身心恒に放逸にして、口に常に麁鄙を說く。恒に他の愆過を伺ひ、覓めて便ち人

【四五】陰は舊譯なり新譯に蘊と云ふ、色受想行識の五蘊のこと。

【四六】聞。底本問に作る、今は三本及び宮本による。

【四七】不活云々とは、在家にては生活し能はざるが故に衣食の爲めに出家するをいふ。

如く、諸法も亦た復た然なり。人の酒を飲みて醉ひ、地悉く迴轉すと見るも、其の實未だ曾て動ぜざるが如く、諸法も亦た復た然なり。緣起の法は無有なり、無有更に有ならず、有無と分別せば、是れ則ち苦滅せず。有無分別に於いて、淨不淨と諍論をなす、是の二邊を遠離して、智者は中道に住す。彼の先際の身を觀ずるに、身に於いて身想無し、若し能く是の如く知らば、即ち是れ無爲性なり。眼耳鼻無限、舌身意も亦た然なり。根に於いて分別せば、聖道則ち無用なり。諸根無限、體頌空無記なり、涅槃の樂を希はんと欲すれば、應に聖道業を修すべし。四念處を演說するに、愚は身に證せりと謂ふて慢せり、身に證あるときは則ち慢無し、能く諸の慢を離るるが故に。[四二]四禪を演說するに、愚は禪行を得たりと謂へり、滅惑の人は慢無し、慧觀慢を斷ずるが故に。[四三]四眞諦を演說するに、愚者は見諦せりと謂へり、實を見れば則ち慢無し、世尊是の如く說き給ふ。廣く衆經を讀むと雖も、多聞を恃むは禁を毀つなり、多聞能く救ふに非らず、破戒は地獄の苦なり。自ら持戒を恃んで慢し、而も多聞を學ばざれば、持戒の報盡き已つて、還つて復た諸の苦を受けん。多聞と持戒と、二俱に自ら恃まざれ、恃慢薄福の人、是に由つて衆苦を起こす。慢は衆苦の本たり、諸の導師の所說、慢有れば苦增長す、之を離るるときは則ち苦滅す。世の三昧を修すと雖も、而も我想を離れず、其の過還つて復た起る、猶し優埵迦[四四]の如し。若し彼の無我を修すれば、中に於いて欣樂を生ず、是れ涅槃の樂因なり、世間の法を感ずるに非らず。衆くの賊に圍まれて、命を爲つて逃避せんと欲するに、足無ければ走ること能はずして、便ち賊の爲めに殺さるるが如く、是の如く癡にして禁[戒を]毀るものは、世間を出離せんと欲するも、戒無うして去るに堪えず、老病死の爲めに殺さる。壯[者]にして刃を執れる賊の、諸

【四二】四禪。四禪定のことなり、色界の四禪天に生ぜんが爲めに修する禪定にして、佛敎、外道共に是を修す、初禪には尋の粗なる心所無けれども伺の心所は尙ほ存せり。二禪以上には伺の心所も存せず。俱舍論第二十八、智度論第十七止觀九之一等に詳說さる就て見よ。

【四三】四眞諦。苦集滅道の四諦の道理なり。苦とは三界六道の苦の當相を云ふ。集とは是が原因、滅は悟果を言ひ、道とは悟果に至る修道を言ふ。前の二は迷界流轉門の果と因にして、後の二は悟界還滅門の果と因なり。

【四四】優埵迦(Udaka)。玄應音義に水の一異名なりと言へり。

け、兩足中上と名づけ、盡智邊と名づけ、多聞中勝と名づけ、已修梵行と名づけ、所作究竟と名づけ、一切惡不染と名づく。爾の時世尊偈頌を說いて曰はく、

[四〇]劫盡災壞時には、世界蕩然として空なり、前の如く後も亦爾なり、諸法を喩ふるに亦然なり。世間の起作を觀ずるに、悉く水上に住す、下の如く上も亦た爾なり、諸法も亦た復た然なり。虛空に雲無きに、忽然として陰曀起るが如く、何れよりの所出と知らんや、諸法も亦復然なり。如來涅槃の後、思想して佛形を覩るに、初の如く後も亦た爾なり、諸法も亦復た然なり。猶し水の聚沫の、暴流に漂はされ、之を觀るに堅實無きが如く、諸法も亦た復た然なり。天水上に雨らして、各各泡有つて起るが如く、生ずるに隨つて尋いで散滅す、諸法も亦た復た然なり。譬へば春の日中の如し、暉光焚炙せられて、陽焰の狀水の如し、諸法も亦た復た然なり。濕へる芭蕉樹、人折つて其の堅を求むるに、內外[堅]實を得ざるが如く、諸法も亦た復た然なり。多くの身、謂はく男、女、象、馬を幻作せんに、是の相眞實に非らざるが如く、諸法も亦た復た然なり。譬へば童女ありて、夜臥して夢に子を產み、生を欣び死を憂慼せるが如し、諸法も亦た復た然なり。人の夢に婬を行じて、寤め已つて所見無きが如く、愚愛終に得ること無し、諸法も亦た復た然なり。淨虛空の月の影、淸池に現じて、月形水に入るに非らざるが如く、諸法も亦た復た然なり。人の自ら好憙して、鏡を執つて其の面を照らすに、鏡像得べからざるが如く、諸法も亦た復た然なり。[四一]野馬水の如くなるを見て、愚者趣いて飮まんと欲するに、實の渴を救ふ可き[水]無きが如く、諸法も亦た復た然なり。人の山谷に在つて、歌哭言笑する響、聲を聞くも[體]不可得なるが如く、諸法も亦た復た然なり。牓して諸國に敎ゆるに、善惡之に由つて行ふも、言敎彼に至るに非らざるが

[四〇] 劫盡災壞時とは、有情の住する器世間は二十中劫を經て成じ、二十中劫住し二十中劫にに壞し二十中劫空となる。卽ち二十中劫住劫の終りに世界に七日現じ火災盪然として起り全世界を焚燎す。斯かる火災七度の後水災起りて世界を壞し、八七五十六回の中間に七度び火災の後ちに水災起ること七度にして其の後風災生じて世界を散壞し、極微に至るまでも存せざるに至る。此の三種の災の生ずる所の二十中劫を劫盡災壞の時と云ふ。俱舍論第十二卷を見よ。

[四一] 野馬とは、春日野に現ずる陽炎なり野馬是を見て水なるべしと思ふて近づくに、何の得る所無し今は能見の野馬を所見の陽炎の名に用ひたり。

の如く、虚空性の如しと觀ずれば、是を菩薩摩訶薩深忍に安住すと名づく。若し深忍を成就せる菩薩は、染法に染せず、瞋法に瞋らず、癡法に癡ならず。何を以ての故に。是の菩薩法を見ず、亦た無所得なり、染を見ずとは、染事を見ず染業を見ざるなり、瞋を見ずとは、瞋事を見ず瞋業を見ざるなり。癡を見ずとは癡事を見ず癡業を見ざるなり。菩薩摩訶薩是の如き法に於て、悉く所見無く亦た所得無し、謂く若しは染、若しは瞋、若しは癡なり、是の菩薩所見無きを以ての故に、即ち所染無く瞋無く癡無し、是の菩薩如實に無染、無瞋、無癡、無顚倒心なるが故に、名づけて定と爲し、無戲論と名づけ、到彼岸と名づけ、名づけて陸地と爲し、到安穩と名づけ、到無畏と名づけ、名づけて清涼と爲し、名づけて持戒と爲し、名づけて智者と爲し、名づけて慧者と爲し、名づけて福德と爲し、名づけて神足と爲し、名づけて憶念と爲し、名づけて持者と爲し、名づけて黠慧者と爲し、名づけて去者と爲し、慚愧者と名づけ、信義者と名づけ、頭陀功德者と名づけ、不著女色者と名づけ、無染著者と名づけ、應供者と名づけ、漏盡者と名づけ、無煩惱自在者と名づけ、心解脫者と名づけ、慧解脫者と名づけ、調伏者と名づけ、名づけて大龍と曰ひ、所作已辦と名づけ、更無所作と名づけ、捨重擔と名づけ、逮得己利と名づけ、盡諸有結と名づけ、依正教心善解脫と名づけ、到一切心自在岸と名づけ、名づけて沙門と爲し、婆羅門と名づけ、沐浴者と名づけ、已渡者と名づけ、明了者と名づけ、名づけて聞者と爲し、名づけて佛子と爲し、名づけて釋子と爲し、除棘刺者と名づけ、度坑塹者と名づけ、拔毒箭者と名づけ、無熱者と名づけ、無塵埃者と名づけ、名づけて比丘無覆纒者と爲し、名づけて丈夫と爲し、善丈夫と名づけ、勝丈夫と名づけ、大丈夫と名づけ、師子丈夫と名づけ、大龍丈夫と名づけ、牛王丈夫と名づけ、善調丈夫と名づけ、勇健丈夫と名づけ、荷負丈夫と名づけ、精進丈夫と名づけ、兕丈夫と名づけ、如花丈夫と名づけ、蓮花丈夫と名づけ、分陀利[三九]丈夫と名づけ、調御丈夫と名づけ、月丈夫と名づけ、日丈夫と名づけ、作業丈夫と名づ

【三九】分陀利。印度にては正しく開敷せる白色の蓮華を分陀利と云ふ。未敷、開、落に各異なる名あり。

空に上昇すること高さ七[三四]多羅樹、七歩を行いて是の言を作さく、「一切諸法悉く無所有なり」と。其の音三千大千世界に遍滿せり。是の時地神展轉して相告げて[三五]梵天に至り、而も是の言を作さく、「是の世界中に佛有りて出世し給ふ、號して無所有起如來應正遍知と曰ふ、其の初生の時、虛空中に於いて七歩を行き、而も是の言を作し給ふ、「一切諸法悉く無所有なり」と。童子よ、是の因緣を以て其の佛を號して無所有起と曰ふ。彼の佛正覺を成ずる時、所有樹木叢林藥草皆聲を出して言はく、「一切諸法悉く無所有なり」と。童子よ、時に彼の世界出す所の諸の聲皆亦說いて言はく、「一切諸法悉く無所有なり」と。童子よ、爾の時無所有起如來所にて法を說き給ふ時、一王子あり、思惟大悲と名づく、形貌端正にして人に愛樂せらる、心行調柔なり。童子よ、爾の時王子無所有起如來所に詣でゝ佛足を頂禮して右に遶ぐること三匝して退いて一面に坐す。爾の時無所有起如來、思惟大悲王子の深心に樂ふ所を知つて、即ち爲めに是の一切諸法體性平等無戲論三昧を說き給ふ。王子聞き已つて淨信心を得、家は家に非らざるをもて出家を道と爲し、鬚髮を剃除して袈裟を被服し、既に出家し已つて此の三昧に於いて讀誦し受持し、廣く他人の爲めに分別顯示す、此の善根を以て二十劫に於いて惡道に墮せず、一一劫中二億佛に値ひ二十劫を過ぎ已つて佛道を成ずることを得、號して[三六]善思義如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と曰ふ、世に出現し給ふ。

[三七]童子よ、汝當に此の三昧、是の威力有ることを觀ずべし、能く菩薩をして阿耨多羅三藐三菩提を招致せしむ。童子よ、菩薩摩訶薩當に深忍法中に安住すべし。云何が菩薩摩訶薩能く深忍に安住するや。童子よ、菩薩摩訶薩應當に如實に一切法は猶し[三八]幻化の如く、夢の如く、野馬の如く、響の如く、光影の如く、水中の月の如く、虛空性の如しと觀ずべし。應に是の如く知るべし、童子よ、菩薩摩訶薩若し如實に一切法幻化の如く、夢の如く、野馬の如く、響の如く、光影の如く、水中の月

【三四】多羅樹(Tāla)。樹名なり極めて高きものは七八十尺ありと云ふ。今は其の七倍の意。
【三五】梵天。底本梵世に作れども、今は三本幷に宮本による。
【三六】善思義(Suvicintatārtha)。
【三七】童子。以下梵本第九深法忍品、Gambhīradharma kṣānti.
【三八】幻化。一切法は幻化の如し云々とは諸經中に頗る廣く用ひられ阿含諸經、近くは維摩經、金剛般若經等に見ゆ。多小說相に相違あるも古來六喩の金文と稱せらる。

に於て、菩薩其の能く得る者あらば、已に老ひ今老ふること悉く見ず、法中に安住して是の如くなることを得。菩薩種種の法を了知するに、體性空寂にして猶し幻の如く、是の空亦復生滅に非ず、諸法の體空寂なるを以ての故に。若し衆生有つて來つて恭敬し、禮拜し尊重し供養を與さんに、菩薩彼に於いて偏愛なし、深く世間の體性に達せるが故なり。若し衆生有つて來りて打ち罵らんに、菩薩彼に於いて嫌慢無く、轉其の人に於いて悲心を起す、其をして解脱せしめんと欲するが爲めの故に。若し刀杖及び瓦石を加ふるも、其の心彼に於いて忿怒無し、無我忍法中に安住す、菩薩「他の」瞋覆を起すを畏れず。菩薩種種の法は、體性空寂にして猶し幻の如しと了知す。若し能く是の法中に安住すれば、諸の人天の爲めに供養せらる。有人手に利剛なる刀を執つて、一一の身支節に割截せんに、心能く忍受して恚恨無し、悲憐増廣して初より壞せず。刀を以て支節を屠膾する時、菩薩卽便ち是の念を生ず、汝若し未だ菩提の處を得ざれば、願はくは我れ涅槃を證すること莫からん。是の如く忍力最無上たり、無我忍に安住するが故に、是の諸菩薩の大名稱、無量那由劫修習さる。復た是の數を過ぐること恒沙の如くなるも、猶未だ能く菩提を證することを得ず、爾所時に於いて佛行を修す、況んや復た覺智何ぞ說くべけんや。不可思議億劫說くとも、彼の諸の德號窮盡あることなけん、無我忍に於いて善く安住するは、是れ大名稱の諸菩薩なり。若し能く菩提を知らんと欲せば、要ず當に妙智衆に住すべし、若し諸佛所說忍を修すれば、勝菩提を得ること則ち難からず。

〔三〕爾の時に佛、月光童子に告げて言はく、過去廣大久遠無量無數不可思議過阿僧祇劫に於いて、爾の時に佛あり、無所有起如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と名づく。世に出現し給ふ。云何が名づけて無所有起如來應正遍知と爲すや。童子よ、是の佛、生れ給ひし時虛

【三】爾の時。以下梵本第八無所有起如來品、(Abhāvasamudgata)。

獲、多の佛刹に往いて說法し、智者神足勢減ずること無き、是を第三勝忍の相と名づく。若し是の如き寂定を修する時、諸の餘の一切の群生類、彼の心の分齊を知ること能はず、是を第三勝忍の相と名づく。假使世界諸の衆生、一時に作佛して法を演說するも、是の人悉く能く具に領受す、是を第三勝忍の相と名づく。東西南北及び四維、上下二方も亦是の如く、諸方中に於いて悉く佛に見ゆる、是を名づけて第三勝忍の相と名づく。悉く能く無量の身を變現し、一切皆眞金色と作し、無量刹に往いて說法する、是を第三勝忍の相と名づく。此の佛世界諸閻浮に於いて、一切皆菩薩形を覩、諸天及び人咸識知する、是を第三勝忍の相と名づく。諸佛の法佛の行處、導師の所有諸威儀、智者悉く能善く修學する、是を第三勝忍の相と名づく。世界の所有諸の衆生、悉く來つて是の菩薩を讚歎するに、菩薩彼に於いて欣悅すれば、則ち佛智に於いて未だ修學せざるなり。世界の所有諸の衆生、是の菩薩を罵詈毀謗せんに、此に於いて若し瞋恨心を起さば、當に知るべし佛智未だ修學せざることを。若し利養を得て心喜ばず、違失せる時に於いて憂慼なく、其の心安住せること猶し山の如くなるを、是を第三勝忍の相と名づく。一を隨順音聲忍と名づけ、二を思惟隨順忍と名づけ、三を修習無生忍と名づく、是の三忍を學んで菩提を得るなり。若し是の如き三勝忍に於いて、菩薩其の能く得る者あらば、善逝彼の菩薩を見る時、即ち無上菩提の記を授け給ふ。若し此の【三二】授記莂を聞くこと有らんに、不思議數億の衆生、咸無上菩提心を發し、我要當に人中の尊と作るべしと。是の如く授記の音を說くを聞くに、即ち時に大地六種に動き、光明普く十方界を照らし、無量種の勝妙なる花を雨らす。若し是の如き三勝忍に於いて、其の菩薩能く得る者あらば、悉く復た生死あるを見ず、彼の起滅に於ても亦復然り。若し是の如き三種忍

を以て事理を觀察するを云ふなり。

【三一】三摩は三摩地の略なり。舊譯には三昧と云ふ、第一卷註(六一)を見よ。

【三二】授記莂とは、佛より當來作佛すべきことを豫言さるるをいふ。

何を以ての故とならば、若し菩薩摩訶薩忍智中に於いて善巧に知らば、彼の菩薩摩訶薩速かに阿耨多羅三藐三菩提を得ん、是の故に童子よ、菩薩摩訶薩、若し速かに阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲せば、此の三忍の法門に於いて應當に受持すべし、持し已つて他の爲めに廣く分別し說かば、無量の衆生を利益し安樂ならしめ、世間を救濟し、諸天及び人を利益し安樂ならしむ。爾の時世尊、彼の月光童子の爲めに、卽ち偈句を以て、此の入三忍法門を頌し給ふ。

諸の衆生に於いて違諍無く、口に非益の言を宣說せず、常に能く饒益の法に安住するを、是を則ち說いて名づけて初忍と爲す。一切法は猶し幻の如しと知りて、卽ち此の相に於いて取著せず、能く智中に於いて增減無し、是の故に名づけて初勝忍と爲す。諸の修多羅已に修學し、智と善說と恒に相應し、佛の無量智に於いて疑はざる、是を則ち名づけて初勝忍となす。若し一切の善說法を聞き、猶し佛說の如くに疑あること無く、能く一切諸佛の法を信ずるを、是を則ち名づけて初勝忍となす。[二七]了義經を常に宣暢し、佛の所說の如くに演說し、若し我人及び衆生を說くに、卽ち方便を知つて引接を爲す。種種の外道諸の異見、菩薩彼に於いて心擾くこと無く、轉彼の人に於いて深く悲愍す、是を名づけて第二勝忍の相と名づく。諸の陀羅尼來つて現前し、總持門に於いて疑惑無く、所說の語言皆眞實なる、是を名づけて第二勝忍の相と名づく。假使[二八]四大相ひ轉變することあるも、所謂地水火風等、佛菩提に於いて永く不退なるを、是を第二勝忍の相と名づく。世間の所有諸の工巧、菩薩悉く能善く修學し、更に已に勝ること有る者を見ず、是を第三勝忍の相と名づく。[二九]奢摩他の力調伏を得、[三〇]毘婆舍那の山動ぜず、一切衆生能く欺くこと莫き、是を第三勝忍の相と名づく。所有言說常に定に在り、行住坐臥恒に三昧なり、[三一]三摩堅固にして彼岸に到る、是を第三勝忍の相と名づく。正定に住して神通を

捨し定心を以て禪に入り。若し行者の心沈む時は精進と擇と喜とを以て引き立て、以て無學果を證するなり。念覺支は兩處に通ずるなり。

【二五】童子よ。以下梵本第七入忍法品、Kṣāntyavatāra.

【二六】三法忍。次の頌の中に詳說さる。卽ち一、隨順音聲忍、音聲を聞いて眞理を悟解すること。二、思惟隨順忍、思惟によつて眞理を悟ること。三、修習無生忍、諸法無生の空理を修習し悟ること。

【二七】了義經。未了義經に對する語なり、衆生を佛の本懷の教に入らしむるまで方便を垂れて誘引する間の教說を未了義經と稱し、本懷を直爾に說かれたるを了義經と云ふ。

【二八】四大とは次に記されたる地大、水大、火大、風大なる此の四は一切の色に悉く遍在するが故に大と云ふ。世間に所謂火と云ふは假の火大にして此の假の火大中に前記の實の四大悉く存す他の三大に於ても亦た然り。

【二九】奢摩他(Samatha)。止、止息、寂靜等と譯す。心の外緣に走るを止め住せしむるを云ふ。

【三〇】毘婆舍那(Vipaśyanā)。觀又は種種觀察と譯す。正慧

可得なり、當に知るべし此の字來るに所無く、立てて菩薩と爲す、是の如く菩薩と名づくるも諸方に求むべからず、乃至實際求むるに得べからず。是の如く知る者を菩薩と名づく、假使海中にても熾火然ゆるうちにても、菩薩は終に[二〇]身見を起さず、菩薩初發心に住することを得。悉く惡見煩惱を斷じ盡し、其の生滅法有りと見ず、所謂衆生及び壽命、諸法體卒なること猶し幻の如し。彼の外道の能く知る所に非ず、若し飲食に於いて貪著を生じ、衣鉢中に於いて愛悋を起し、及び其の掉戲輕躁なる者。是れ則ち佛[二一]菩提を知らず、多く睡眠及び懈怠を憙び、姦僞兇暴にして攝斂ならず、諸佛所に於いて淨信無し。是れ則ち佛菩提を知らず、禁戒を毀破して慚愧無し。[二二]佛法中に於いて歸信無く、同修の梵行者を敬せざるは、是れ則ち佛菩提を知らざるなり、淨戒を毀たずして具さに慚愧す。佛法中に於いて深く愛樂し、同梵行者を能く恭敬するは、是れ則ち能く勝菩提を知り、[二三]念處以て聖の境界と爲す。喜悅を而も床臥具と作し、禪を以て食と爲し定を漿と爲すは、是れ則ち能く佛菩提を知り、無我忍を經行處と爲す。空林中を以て正念を行じ、[二四]七覺の香花甚だ樂ふ可く、嗅ぎ已つて無上道を成ずることを得、菩薩道を體つて修行する所なり。是れ餘人の所行の地に非ず、所謂聲聞及び緣覺「の能くする所に非ず」、唯だ智者のみ有つて貪樂せず。設し我が壽命極めて長遠にして、恒河沙の如き無量劫のあいだ、佛の一毛の德を說くも盡きず、如來の智慧は無邊なるが故なり。若し是の如き大利益、無畏世尊の所說を聞いて、速かに自ら人に敎へて是の定を持せしめば、無上菩提を得ること難からず。

[二五]童子よ、是の故に菩薩摩訶薩應に善巧に知つて[二六]三法忍に入るべし、謂く、彼の第一忍、第二忍、第三忍を知る、是の忍中に於いて應に善巧に知るべし、復た其の智に於いても亦た善巧に知るべし。

【二〇】身見。五見の一なり。實我ありと執する妄見にして、有部宗にては有身見と云ふ。
【二一】菩提(Bodhi)。舊譯にては道と譯し、新譯にては覺と譯す。智度論卷四に菩提とは諸佛の道なりと云ひ、慈恩は菩提とは翻譯して覺と云ふ、法性を覺するが故なり云々と言へり。
【二二】佛法中。以下四句聖本は缺く。
【二三】念處とは、四念處觀のこと。一に身念處、身は不淨なりと觀ず、父母所生の肉身は外に便利涕唾を出し、內に血膿物等を盛りて淨處あること無しと觀ず。二、受念處、受は苦なりと觀ず、暫らく樂受喜受あるが如くなるも、皆生滅變化の當相にして常樂なく苦なりと觀ずるなり。三、心念處、心は念念生滅して常住にあらず無常なりと觀ず。四、法念處、森羅萬象は因緣生にして無我なりと觀ず。
【二四】七覺とは、七菩提分又は七覺支と云ふ。七科道品中の第六なり。一、擇法覺支、二、精進覺支、三、喜覺支、四、輕安覺支、五、念覺支、六、定覺支、七、行捨覺支、の七を云ふ。行者の心浮動する時は輕安を以て身口の麁重を斷除し、行捨を以て觀智を

に迴向す、此の善根を以て不思議の功德、不思議の果報を得、是の三昧を得て速かに阿耨多羅三藐三菩提を成ずるなり。爾の時に世尊、卽ち偈を說いて言はく、

若し人香を無邊智に奉らば、　能く無量香の果報を得て、　千萬劫に於いて惡趣を離れ、　永く一切諸の臭穢無からん。　千萬劫中勝行を行じ、　百萬億の如來を供養し、　成佛して勝戒香を獲得す、　若しは復た衆生無しと了知す。　施香受香二倶に無く、　若し能く心を起すこと是の如くにして施せば、　則ち柔軟勝順忍を得るなり、　若し人增上に此の忍を修すれば、　他の爲めに身を割くこと猶し錢の如く、　千萬億恒［河］沙劫に於いて、　其の心堅固にして退轉せず、　云何んが忍と爲すと名づくることを得るや。　云何んが復た名づけて隨順と爲し、　云何んが不退轉と名づくることを得、　云何んが復た名づけて菩薩となし、　自性無我法を欣樂するや。　我想無く煩惱無く、　能く諸法悉く盡滅なることを知るを以て、　此の因緣の故に名づけて忍と爲す、　諸佛の所學を隨順して學ぶ。　智者如法に常に修行し、　諸佛の法を知つて疑惑無し、　是の故に名づけて隨順と爲すことを得、　若し修行する時世魔ありて、　佛身を現作して是の言を說く、　佛道は得難し　[一七]聲聞と作れと、　信受することを肯はざるを不退と名づく、　惡見の諸の衆生を覺悟す。　[一八]此能く甘露道を證するに非ず、　惡道を捨て、善趣に住することを勸む、　是の故に名づけて菩薩と爲すことを得、　忍者は隨順道に住し、　無我の法を以て開悟せしむ、　乃至夢中にも念を起さず。　衆生壽命の想を存有すれば、　若しは魔無量にして恒沙の如き、　佛身を化作して其の所に到り、　咸身內に[一九]神我有りと說き、　卽ち無我と語るは汝佛に非ずと、　智を以て諸法空と了達するに、　知り已れば煩惱と倶ならず、　戲論を以ての故に言つて有と說くなり。　見已つて寂滅にして世間を行ず、　譬へば世人所生の子の如し、　隨つて卽ち其が爲めに名字を立つ、　諸方名を推すに不

【一七】聲聞。佛に隨つて四諦の法を聞き小乘の果なる阿羅漢果を證する聖者を云ふ、大乘の佛果を志す者は小乘の果を地獄に墮する以上に忌み嫌ふが故に上の語あり。

【一八】此とは、菩薩を指す、菩薩は聲聞緣覺の如く自度を以て滿足せず、一切衆生を濟度せんとする願心を有するが故に、自ら甘露道卽ち菩提を證して足れりとなすに非らず、先づ他を敎化することを示す。

【一九】神我とは、常一主宰の自我なり、數論は神我諦と名づけて有我論を說く。

も最勝法を供養せんが爲めに。　即ち王位を捨すること洟唾の如くせん、　并に八萬の諸眷屬と、一時に倶に佛所に往到し、　頭面作禮して尊前に住せり。　佛此等の樂欲を知り給ひ、爲めに難見の寂滅定を說き給ふ、　彼聞いて愛敬し悅樂して、　一切歡喜して即ち出家せり。　既に出家し已つて此の定に於いて、　讀誦し受持し廣く分別せり、　次第に二億劫數中において、　未だ曾つて三惡道に墜墮せず。　是の人此の諸の善業を以て、　百億の諸如來に見ゆることを得、　彼の佛法に於いて恒に出家し、　無量億の衆生を利益し、　是等後に於いて成佛することを得て、　同じく堅固大精進と號し、　是の如き勝三昧を宣說せり。　後に涅槃に入ること猶し火滅のごとし。　時に彼の往昔の大力王、　久しく佛道を成じて智勇と號し、　無量百億衆を利益し、　菩提に置き已つて涅槃に入る。　既に是の如き勝利益を聞き、末世に經を持すれば佛に讃ぜらる、　若し能く佛の法藏を奉持すれば、　是等速かに人中上と成るべし。

[一五]童子よ、是の故に菩薩摩訶薩是の定を愛樂する者は、應當に最初の所行を修習すべし。云何んが菩薩[一六]此の三昧に於ける最初の所行なる。童子よ、若し菩薩摩訶薩大悲心を以て首と爲す、若しは佛の在世、若しは佛の滅後、常に勤めて供養すべし、所謂花鬘、末香、塗香、寶幢、幡蓋、音聲、歌舞、作倡、伎樂、衣服、飮食、病瘦醫藥なり。此の善根を以て悉く是の如く三昧に迴向するを以て、更に其の餘の諸法を志求せず、而も佛を供養して妙色を求めず、資財を求めず、生天の爲めにせず、眷屬を求めず、唯だ此の法を念ずるのみ。是の菩薩尙ほ法中に於いて佛有るを見ず、況や復た法外に佛を見ざるなり。是の故に童子よ、是を眞に佛を供養すと爲すなり、而も亦た佛の得可きありと見ず、我想を取らず、果報を求めず、是の菩薩三輪清淨にして、花鬘、末香、塗香、寶幢、幡蓋、音聲、歌舞、作倡、伎樂、飮食、衣服、病瘦醫藥を以て如來を供養し、阿耨多羅三藐三菩提

【一五】童子よ。以下梵本第六三昧品、Samādhi.

【一六】此の三昧。以下「大悲心を以て首と爲す」に至るまでの數語は聖語藏に無し。

にして出家し、鬚髮を剃除して法衣を被服せり。是の出家の輩此の三昧を聞いて、讀誦し、受持し、分別解說し、修行相應せり、此の善根を以て二億劫惡道に墮せず、一一劫中千萬佛に値ふて、彼の佛所に於いて常に出家することを得、既に出家し已つて此の三昧を聞き、讀誦し、受持し、應に修行すべきに住す、此の善根を以て後滿百千劫において、各異なる世界において佛道を成ずることを得、同じく、堅固勇健堪能如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と號す。無量の諸の衆生を利益し已つて、然る後乃ち〔一四〕無餘涅槃に入る。童子よ、是の如く三昧に大威力あり、能く菩薩をして阿耨多羅三藐三菩提を招致せしむ、爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、

我れ過去久遠世、　不思議劫を念ふに佛ありて出で給ふ、　能く衆生の爲めに利益を作し、號して聲德大仙尊と曰ふ。　初會衆集まること八億に滿つ、　悉く是れ聲聞の諸弟子なり、第二會集まること七億數、　第三は六億の阿羅漢なり。　一切漏盡きて煩惱無く、　諸の神通力によつて彼岸に到る、　其の佛壽命四萬歲、　國土世界甚だ嚴淨なり。　時に閻浮提に二王あり、　號して大力と堅固力と曰ふ、　是等の二王所居の土、　一一各半閻浮を領す。　佛大力王國中に出で給ふや、　諸の勝れたる人天供養し奉る、　其の王佛に於いて淨信を得、　恭敬供養すること千年に滿つ。　國人無量是の王に學んで、　種種に如來を供養し奉る、　但だ世財を以てせり法供に非らず、　佛及び聲聞悉く豐足せり。　爾の時に世尊是の念を作し給ふ、　我れ是の法を說いて欲を捨てしめ、　必ず彼の王をして厭離を生じ、　我が法中に於いて出家せしめん。　彼の時人尊偈を說いて言はく、　惡法を棄捨するは是れ佛敎なり、　在家は過多くして諸の苦を具す、　如法に修行するを眞の供佛といふなり。　時に王是の如き偈を說くを聞いて、　獨り空閑に趣いて是の念を作さく、　我れ今家纏に處すること能はず、　而

〔一四〕無餘涅槃とは、生死の原因たる惑業を斷ずるも、未だ苦果の依身の存するを有餘涅槃と稱し、苦果の依身をも捨し盡すを無餘涅槃と云ふ。

是の如き等の事をもて佛を供養するは、　能く出家して法を奉行するに如くに非らず。　若し菩提を樂求することある者、能く衆生を利して世間を厭ひ、　空閑に趣向して七歩を行かば、是の如き福報を最も上と爲す。

童子よ、時に大力王、聲德如來應正遍知の、是の如き等の出家修行の義利と名を說き給ふを聞き已つて、復た是の念を作さく、我が佛所說の義を解する如きは、如來、[一]檀波羅蜜を說いて以つて究竟清淨、究竟吉祥、究竟梵行、究竟窮盡、究竟最後、究竟涅槃と爲すに非らずと。彼の大力王復た是の念を作さく、在家住は能く無上修得、無上修行義利を得るものに非らず、而も我れ今是の行を遠離せん、我れ今要らず當に鬚髮を剃除して袈裟を被服し、家は家に非らざるをもて出家を道と爲すと。童子よ、時に大力王、其の眷屬八萬人と倶に前後を圍遶せられて、聲德佛所に往いて佛足を頂禮し、[二]右に遶ぐること三匝して坐の一面に退ぞけり。童子よ、爾の時聲德如來、大力王及び其の眷屬の心に欲樂する所を知つて、卽ち爲めに一切諸法體性平等無戲論三昧を宣說し分別顯示し給ふ。童子よ、時に大力王是の三昧を聞いて歡喜し踊躍し、深心に愛樂して、卽ち聲德佛所に於いて、王位を棄捨して正信に出家し、鬚髮を剃除して　[三]三法衣を服せり。旣に出家し已つて此の三昧に於いて廣く能く聽受し、讀誦し、憶持し、其の義を分別して修行相應せり、此の善根を以て二億劫惡道に墮せず、次第に復二億の諸佛に値ふて、彼の佛法中において常に出家することを得、一一の佛所にて此の三昧を聽受し、讀誦し、其の義を分別して修行相應せり。此の善根を以て次第に百億劫に滿ち、佛道を成ずることを得て號して智勇如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と曰ふ。無量無邊の衆生を利益し、然して後に乃ち當に般涅槃に入るべし。童子よ、汝當に此の三昧是の神力あることを觀ずべし、能く菩薩をして佛智に招感せしむ。童子よ、彼の大力王の將ゆる所の眷屬八萬人、等しく是の三昧を聞いて歡喜し踊躍し、心甚だ愛樂し、亦皆王に隨つて正信

【一】檀波羅蜜（Dānapāramita）。布施到彼岸と譯す。布施行によつて迷の此の岸より、悟の彼の岸に到るを云ふなり。布施の一行に六度の他の五度を攝することは大品般若六度相攝品に委し。就て看よ。

【二】右に遶ぐる三匝とは、印度の最も鄭重なる敬禮なり、或は七匝と言ひ、又は千匝など記さるることあり。

【三】三法衣とは、五條（中着衣）、七條（上衣）、九條（大衣）の袈裟を云ふ。僧侶は右の三衣を一具として蓄ふることを許さるるも其れ以上の餘衣は許されず。

但だ世財を以て我を供養す、是れ諸の衆生但だ小樂を希がうて爲れ至樂なりと謂へり、是の諸の衆生、但だ現法及び後世の法を重んじて、究竟の善根を愛重すること能はず。如何んが現法を重んずと名づくるや。五欲を樂しむを謂ふなり。云何が後世の善根を重んずと名づくるや。生天を樂ふを謂なり、云何んが名づけて究竟の善根と爲すや。謂く、究竟清淨、究竟吉祥、究竟梵行、究竟窮盡、究竟最後、究竟涅槃なり。我れ今是の如き法を說けり、今此の衆生其の〔一〇〕檀行に於いて究竟最勝の供養を爲さず、但だ無上行を以て我れを供養せよ。童子よ、爾の時に聲德如來、彼の大力王、及び諸の長者婆羅門等を覺悟せしめんと欲して、偈を說いて言はく、

若し人財食施を行ずるは、彼れ此れを相尊敬すとは名づけず、是の如き所行は歎ずべからず、諸佛智者已に遠離せり。若し無我と說く智慧者、是の如き勝人應に奉事すべし、彼れ聖諦に於いて信動ぜず、是の者を敬し奉るは佛に歎ぜらるなり。若し人財食を施し奉るは、但だ現近の少利益を獲るのみ、若し能く是の如き施を遠離すれば、是の人出家行を成就す。若し能く無財心を起こすことあり、又能く無財法を顯示し、亦た能く淨く無財者を信ぜば、是の人速かに無上道を成ぜん。五欲の中に於いて、妻子等に於いて愛著を生じ、凡愚恒に居家に在る者、是の人の能く漏盡を得ること處有ること無し。五欲を厭離すること火坑の如く、能く妻子に於いて愛染を離れ、居家を怖畏して出離を求めば、

勝れたる菩提を獲ること則ち難からず。過去の諸の如來、及び其の現在〔幷びに〕未來者、常に居家に在つて欲地に住するもの、能く勝妙道を獲ること有ることなし。王位を棄捨すること涕唾の如く、遠離せる空閑處に住し、煩惱を斷除して諸魔を降し、離垢無爲道を悟解す。若し恒沙世雄猛ありて、千萬億歲而も供養を爲し、能く在家を厭患する者あらば、是の如き功德を最も上と爲す。是れ飲食及び衣服、諸の妙花香及び塗香、

要期せし期間は設令夫婦間と雖も交はらず、四、不妄語、うそを言はぬこと、五、不飲諸酒、諸種の酒を飲まざること、六、不塗飾香鬘歌舞觀聽、七、不眠坐高廣嚴麗牀座、八、食非時食、一定の時間を過ぐれば食を攝らず、此の八條項を守るを近住戒とも稱し、一日一夜持つ通常は日出時に師に從つて受くるを常とす。

【九】具足戒とは、比丘は二百五十戒を持ち、比丘尼は五百戒を持つを云ふ。

【一〇】檀行とは、布施行のこと、六波羅蜜の一なり。布施行を法施・財施・無畏施の三に分つ。

卷の第二

[一]爾の時に世尊月光童子に告げて言はく、過去久遠無量無邊不可思議[二]阿僧祇劫を過ぎて、爾の時に佛有り、號して[三]聲德如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と曰ふ。世に出現し給へり。童子よ。爾の時聲德如來應正遍知、初會に於いて衆集八億聲聞ありて皆[四]阿羅漢なり。諸漏已に盡き、[五]己利を逮得せり、諸の有結を盡すは正敎に依つてなり。心善く解脫し能く一切心自在の岸に到れり。第二會集七億衆あり。第三會集六億衆あり。一切亦是れ大阿羅漢にして、諸漏已に盡き已利を逮得せり、諸の有結を盡すは正敎に依つてなり。心善く解脫し、能く一切心自在の岸に到れり。童子よ、爾の時彼の佛壽四萬歲なり。時に[六]閻浮提安樂豐樂にして、人民熾盛普遍充滿せり。童子よ、時に閻浮提に二大王有り。一を堅固力と名づけ、二を大力と名づく。此の二大王、一一半閻浮提を統領せり。二王の境土安隱豐樂にして人民熾盛普遍充滿せり。時に聲德如來、大力王の國に在つて世に出現し給へり。童子よ、是の時大力王、聲德如來及び比丘僧を請じ奉りて千年を滿足す。一切隨順せる淸淨無過の衣服、飲食、臥具、湯藥を以て供養を爲す、童子よ、彼の聲德如來及び聲聞僧を多饒に利養し恭敬し讃歎し奉る。時に淨信の長者諸婆羅門あり。聲德如來及び聲聞所に於いて勇猛の意を發し、大力王に學んで而も供養を設け、世財を以て勝れたる供養なりと謂へり、彼人[等]行供養を知らざるなり。云何が行供養なりや。所謂[七]五戒、[八]八戒を受持し、出家は佛に詣して親覲請問して深法忍を見るを云ふなり。童子よ、時に聲德如來是の如き念を作し給はく、「是の諸の衆生、志意下劣にして五戒、八戒を受持し、出家して佛に詣して親覲し請問して深法忍を見、梵行を修して寂靜遠離なることを得、[九]具足戒を受けて比丘分を得、及以究竟の善根を受行すること能はず、是の如き寂滅の樂は無上の妙樂を具し、悉く皆[惡不善を]遠離す、[然るに]

【一】爾の時。以下梵本第五、聲德品。(Ghosdatta.)
【二】阿僧祇劫。無數時と譯す。
【三】聲德 Ghosdatta.
【四】阿羅漢(Arhān)。殺賊、應供、不生等と譯す。旣に煩惱の賊を斷じ盡せるが故に殺賊と言ひ、人天の供養に應ずるに足るが故に應供と稱し、後有を受けざるが故に不生と言ふなり。卽ち三界の見惑並に九十一品の修惑を斷盡せる聖者を指す。
【五】己利を逮得。諸の善法を行ふを己利と名づけ非法を行ずるを非己利と云ふ。又今世に樂を得後世に樂及び涅槃の常樂を得るを己利と名づけ是に反するを非己利と云ふ。智度論第三卷を見よ。
【六】閻浮提とは、須彌山の四方に各一洲宛あり。其の南方に存するを南閻浮提と云ふ。卽ち我れ等の住せる國土なり。
【七】五戒とは、不殺生・不偸盗・不邪婬・不妄語・不飲酒を云ふ。在家の佛教信者の悉くが持つべき所なり。
【八】八戒とは、具さに八齋戒と云ふ。一には不殺生有情の生命を害せざること、二には不與取、他の與ふる所に非ざる物を取らず、三、非梵行、

得、一切端妙にして世親たらん。是の如きを緣じて心安住すれば、乃ち得定の菩薩と名づく、此く佛相を緣ずるは是れ有相なり、能く一切有相想を除き、然る後ち無相に安住して、乃ち能く諸法空に達するなり。能く法身に安住することを得ば、(八七)一切有而も無有なることを知る、無有の相修習し已つて、然る後佛は色身に非ずと觀ず。我れ今汝が爲めに之を善說す、彼彼にして如是の處に趣き、所謂諸緣事を覺知し、無量の思量常に斷ぜず。若し能く是の如き心を生ずること有りて、佛の相好及び智慧を念じ、彼の人能く是の如き念を修し、一心に趣向して退轉なく、若しは行若しは坐若しは經行すれば、諸佛智に於いて疑惑無けん。疑無きことを得已つて是の願を作さく、我をして佛三界の尊たることを得しめ、必ず當に諸如來を見ることを得、佛法中に入つて能く選擇すべし。此の三昧より而も起ち已つて、十方佛を稽首し禮し、身と口と及び意と皆清淨にして、諸佛を讚歎すること常に斷たず。常に是の如く佛相を念ずることを修して、日夜に恒に諸如來を見たてまつる　若し死に垂として最も重疾にして、痛惱逼迫して極めて無聊なるも

　念佛三昧常に捨せずば、苦切をして此の心を奪はしめず。彼の人自ら是の法を解するが故に、則ち一切諸法空を知る、是の如く諸の敎門に住するを以て、菩薩行に於いて厭惡せず。是の如き利益を聞くことを得已つて、如來無等智を求め、後に於いて追悔の心を生ぜず、最上の菩提は得難きが故に。我れ今汝が爲めに無量に說けり、汝此の法に於いて若し行ぜずんば、人の良妙藥を持つと雖も、自の身病を治すること能はざるが如し。

　是の故に應當に知るべし選擇して、所謂勝三昧を求め、戒聞布施常に修習すべし、是の三昧を得るときは則ち難からず。

【八七】一切有云々とは、一切諸法悉く因緣所生の法なるが故に自性存することなし、因緣假有なるがゆへに常有にあらず、空に即する有なれば茲に無有と云ふ。

し、三十四には善知識を護り、三十五には密語を護持し、三十六には諸の衆生に於いて害心を生ぜず、三十七には持戒[者]を惱まさず、三十八には恒に柔軟語[を用ひ]、三十九には三界に依らず、四十には一切智に於いて順忍を得るなり。爾の時世尊、偈を說ひて言はく、

我れ已に甘露門を開けり、我れ已に諸法の自性を說けり、我れ已に生死の過を示せり、我れ已に涅槃の利を開顯せり。我れ已に惡知識に離れ、常に當に善知識に親近すべきことを教へたり。諸の憒衆を離れて寂靜に住し、常に慈心を修して絕たず。清淨戒を常に護持し、頭陀行を歡喜し樂しむ、若し能く常に捨慧を習ふこと、是の三昧を得るときは則ち難からず。此に能く寂滅地を得て、終に[八六]聲聞地に墮在せず、必ず當に佛智慧を證し、諸佛無量の德を剋獲すべし。諸の衆生智器有るを見て、爲めに佛慧を說いて以て之に示す、若し能く無上智を發求すること、是の三昧を得るときは則ち難からず。若し食の爲めに嫉妬心を起さば、當に食已に淨あること無しと觀ずべし。功を用ふること無量なれば乃ち成ずることを得ん、若し深く此れを觀ずれば能く定を得ん。物の能く此の定を將ち來る無し、必ず淨戒の所起に由るなり、諸法の體性は常に寂然たり、凡夫無智にして會すること能はず。若し能く心寂定に住すれば、是の人一切常に佛有り、人尊恒に諸の衆生を見て、常に是の如き寂滅定を修す。佛の相好及び德行を念ずれば、能く諸根をして亂動せざらしめ、心迷惑無く法と合し、聞を得智を得ること大海の如くならん。智者此の三昧に住し、念を攝して經行所を行かば、能く千億の諸如來を見、亦無量恒沙の佛に値はん。若し人心に迷惑有らば、佛法中に於いて限量を取る、無量中に於いて量有ること無く、如來の諸德は不思議なり。一切世間與に比すべき無し、何に況んや能く過ぐる者あらんや。諸智諸德皆相應せり、此に於いて疑はずんば定で成佛し、如來身紫金色を

【八六】聲聞地云々とは、聲聞緣覺等の小乘の悟果に甘じ、空空寂寂たる鬼窟裡に墮在するを警ましむるなり。

とを得と雖も、能く自ら知見の法を行ぜず。譬へば貧賤他を欺くことを爲すも、後時には富貴の人敬せらるるが如し、人、天、龍、鬼、鳩槃茶[八二]、終に定なき者を供養せず。若し三昧微妙地を得ば、智者便ち廣智城を得[たるが如く]、彼の人天の爲めに敬せらる、能く上施を以て衆生に施す。我れ聞く是の如きの利益、最も勝上となし佛の所演にして、親屬資財皆悉く捨せしは、是の三昧を說き給ふを聞かんが爲めなり。月光童子心歡喜し、合掌して佛に向つて是の言を說かく、我れ佛仙滅後の後に於いて、當に此の佛の勝法を護持すべし。自らの身命、及び諸の世間の種種の樂を能く棄捨し、後の惡世怖畏の時に於いて、當に是の勝妙定を護持すべし。我れ世間の無量の苦を見、大悲心を興こして拔かんと欲す、彼れに於いて復大慈心を起こし而も爲めに此の勝れたる三昧を說かん。童子よ彼に於いて上首と爲り、亦共に此の勝れたる三昧を持せよ。

[八三]爾の時、月光童子佛に白して言さく、世尊よ、言ふ所の三昧とは何者か是なりや。佛言はく、童子よ、諦かに聽け、諦かに聽け、當に汝が爲めに說くべし、謂く、一には能く心を寂滅にし、二には所起無く、三には和合智無く、四には重擔を棄捨し、五には如來智を得、六には佛の威力を成[就]じ、七には其の欲著を治し、八には瞋恚を滅除し、九には愚癡を斷離し、十には心相應に住し、十一には不住心を捨し、十二には善法を樂欲し、十三には有爲を欲奪し、十四には正信に安住し、十五には夜常に覺悟し、十六には禪定を捨てず、十七には已生の善を增し、十八には生を樂はず、十九には諸業を造らず、二十には[八四]內入を計せず、二十一には[八五]外入を計せず、二十二には自身を讚せず、二十三には他人を毀たず、二十四には俗家にあらず、二十五には戒行を淳熟し、二十六には能く輕じ欺くこと無く、二十七には大福德有り、二十八には自知し、二十九には輕躁ならず、三十には威儀に安住し、三十一には麁惡言を捨し、三十二には怒恚心無く、三十三には彼を救護

【八二】鳩槃茶(Kumbhāṇḍa)。厭眉鬼、陰囊等と譯す。其の形體頗る醜なる鬼なり。人の精氣を噉ふと言ふ。

【八三】爾の時。以下梵本第四三昧品。(Samādhi.)

【八四】內入とは、眼耳鼻舌身意の六處のこと。

【八五】外入とは、色聲香味觸法の六境のこと。

童子よ、此の義を以ての故に、菩薩摩訶薩是の三昧に於いて應に至心に受持讀誦し、他の爲めに演說し、分別し、顯示すべし、廣く衆生を化し是の三昧を修せよ。爾の時に世尊、卽ち偈を說いて言はく、

彼の佛所に於いて是の如き、無上勝妙の利益を聞けり、是の故に我れ今汝が爲めに、諸佛所說の勝れたる三昧を說かん。七億三千萬佛所、我れ過去に於いて曾て供養せり、彼の諸の一切如來、等しく亦是の如き(七九)修多羅を說き給ふ。此に由つて能く大悲心に入る。是の故に此の三昧を顯說す、若し習學し多聞の者有らば、如來智を得ること則ち難からず。若し能く彼の末世時に於いて、世間の導師滅度の後、諸の毀法の惡比丘ありて、彼の多聞に於いて悕樂せず。(八〇)戒法を說いて(八一)活きることを得と雖も、自ら戒法を行ずることを樂はず。禪定を說いて活きることを得と雖も、自ら禪定を行ずることを樂はず、智慧を說いて活きることを得と雖も、自ら智慧を行ずることを樂はず。解脫を說いて活きることを得と雖も、自ら解脫を行ずることを樂はず。知見を說いて活きることを得と雖も、自ら知見を行ずることを樂はず。人の口に栴檀香は、諸香中最も上と爲すと說く、有人彼の香を說く者に、汝の說く所の香自ら「聞くこと」有りやいなやと問ふに、答へて云く我れ實には香を聞がず、但た香を說くに由つて活きることを得といふが如し。佛、滅後末の惡世に於いて、戒しむ可らざる諸比丘あり、定法を說いて活きることを得と雖も、能く自ら定法を行ぜず。佛滅後末の惡世に於いて、戒しむべからざる諸比丘あり、慧法を說いて活きることを得と雖も、能く自ら慧法を行ぜず。佛滅後の末の惡世に於いて、戒しむべからざる諸比丘あり、解脫を說いて活きることを得と雖も、能く自ら解脫の法を行ぜず。佛滅後の末の惡世に於いて、戒しむべからざる諸比丘あり、知見を說いて活きるこ

を生ずるが故に此の名あり。中印度の北、北印度の南に位し、二界の中間に在り。底本師に作れども玄應音義第三には乾陀婆那に作れり。底本誤りに非らざるが音よりすれば西域記の如く遲を當れりとす。

【七九】修多羅(Sūtra)。經、法本、契經、綫等と譯す。諸匠の解釋多けれども賢首大師の釋によれば、諸法の理に契ひ、所被の機根に合するが故に契と言ひ、法相を貫穿し、所化の衆生を攝持すること恰も經の緯に於けるが如くなるが故に經と言ふと。

【八〇】戒法云々。以下五分法身を說きて、生活の爲めにすれども、自ら修行せざるを云ふ。

【八一】活きること云々とは、活命の爲め、卽ち生活の爲めなるをいふ。

の財、及び僮僕、(七六)摩尼大寶金銀とを捨し、勝上心を以て彼に施すは、是の如き三昧を求めんが爲めの故なり。摩尼・寶珠・瓔珞、天冠、(七七)臂印、及び金縄を以て昔曾て諸の尊師に施し奉りしは、是の如き勝定を求めんが爲めの故なり。諸の妙なる香花、無量の果、皆是れ(七八)犍陀婆師の香なり、我れ此の花を以て佛塔に散ずるに、增上淳至勝妙の心をもつてす。我れ無量の諸法施を以て、諸の衆生を歡喜せしめ開導す、諸の名聞及び利養に於いて、我れ初より是の如き心を起こさず。我れ本より頭陀の德を集め、獨り樹下にあつて默して言なく、無量の慈悲もて衆生を愍むは、無上菩提の果を求めんが爲めなり。共に住して戒を同うし違諍なく、愛語常に流れ潤澤の音あり、言詞柔軟にして人聞くことを樂い、一切之を見て厭捨することなし。他に住して家慳を舍て離れ、無量億生嫉妬せず、歡喜して常に自ら乞食を行じ、諸の請召に於いて棄捨す。若し此の三昧四句の偈に於いて、多聞にして受持するものあらば、是の如きを便ち我れを供養し、勝上心を以て尊敬すと爲す。我れ昔種種の施を行じ、長夜に戒に於いて犯さず、無量種を以て佛を供養するは、是の如き寂定を求めんが爲めの故なり。我れ無量世界中に、中に滿つる摩尼をもて廣く施さんに、是の三昧を聞いて一偈を持せんに、此の福彼れに過ぐること量る可らず。一切所有種種の花、及び諸の妙香甚だ希有なるをもつてし、一切諸如來を供養し、善根を樂修すること無量劫なり。世間所有諸の伎樂、勝妙の飲食及び寶衣、無量劫中增上心もて、常に諸の十力を供養せんに、若し人菩提の願を興さば、當に無上大法王を獲べし、若し人、此の三昧經に於いて、一偈を説くを聞くの福彼に過ぐ。恒河中の所有沙に於ける、爾所の劫數其の利を説くも、彼の德を敷演し盡すこと能はず、無量福定を持するを以ての故に。

ろが故に寂滅と云ふなり。古來諸家の義釋頗る多き語なり。今は暫らく淨影の釋に依る。涅槃玄義上、大乘義章十八、婆沙論第二十八等を見よ。

【七一】無爲とは、爲作造作なき常住なるを云ふ。

【七二】童子よ。以下梵本第三念佛品、(Buddhānusmṛti.)

【七三】如來。以下を佛の十號と云ふ佛の勝德を各表顯せる名稱なり。

【七四】賢聖。賢とは未だ眞如の理を契證せざる凡夫位にある善行を修する修行者を言ひ、聖とは見道以後の人、即ち眞如の理を證得し、無漏智を發し、凡夫の性を捨てたるを云ふ。有部宗にては七賢七聖を説き、仁王經には三賢十聖を説く。倶舍論第二十二卷大乘義章第十七卷、義林章五本等を見よ。

【七五】實際とは、眞如、實相、中道、法性等と言ふに同じ、不生不滅の眞理を云ふ。

【七六】摩尼(Mani)。譯して寶、如意、離垢等と云ふ寶の總稱なり。

【七七】臂印。手臂に懸くる珠索。

【七八】犍陀婆師(Gandhāra)。香遍國、香林國、香淨國等と譯さる、國内に多くの香氣の花

此の三昧を聞持すべし。我れ今汝に付囑することあり、我れ人中尊たり自ら汝に勸む、我れ涅槃[七〇]の後末世時、應に是の三昧を聞持すべし。十方所有一切の佛、過去世中及び現在、彼の佛皆是の三昧を學び、無爲[七一]なる佛菩提に到ることを得たり。

[七二]童子よ、此の義を以ての故に、若し菩薩摩訶薩ありて、如來眞實の功德を開示辯說せんと欲せば、義味名號窮盡あること無し、一切の所說は爲れ佛の所說なり、汝今應に讀誦受持し、他の爲めに是の如き三昧を說くべし。童子よ、何者か如來の實德名號なる。若し菩薩摩訶薩は、阿蘭若樹下空閑に住し、靜默にして獨坐し、當に是の如く學ぶべし、謂く、如來應供[七三]正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊、如來勝妙の功德を積集し、諸の善根を修して壞失せず、大忍力を以て諸相花及び、隨形好を得て自ら莊嚴し、可愛の色中最も增上と爲す、覩る者厭くこと無く、敬信愛樂す、諸の智慧に於いて能く奪ふ者無く、不可壞の力もて諸の衆生を化し、菩薩の父たり、賢聖[七四]の王たり、涅槃に向ふ導師たり、無邊の智慧、無量の辯才、梵音淸雅にして言聲辯暢、相好希奇にして目あつて瞻仰するもの、所觀の處に隨つて捨せんと欲するも能はず、無比身を得、欲に染せられず、色に染せられず、無色界を過ぎて諸苦を遠離して諸法を棄捨し、諸界を解脫して相應に入るに非ず、諸結を斷除して諸の渴愛を盡し、四流を渡つて智慧を滿足し、涅槃に安處して實際[七五]に住す、童子よ、此に如來眞實の功德を顯はせり、是を菩薩摩訶薩彼の三昧に住し、能く如來眞實の功德を獲と名づく、名義窮盡あることなく、一切所說諸佛の所記を開說せり。爾の時、世尊、偈を說ひて言はく、[illegible]

無量數千劫中に於いても、如來の德を說き盡すこと能はず、久しく一切の妙善根を集めしは、是の如き勝定を求めんが爲めの故なり。莊嚴美女姝妙身　最上希奇の可樂色、我れ本より施さんことを決して悔心無きは、是の如き勝定を求めんが爲めの故なり。重ずる所

一、神境通、二、天眼通、三、天耳通、四、他心通、五、宿命通、六、漏盡通。

【六〇】惡趣とは、地獄趣、餓鬼趣、畜生趣の三惡趣を云ふ。

【六一】三昧(Samādhi)。正定受等と譯す。心一境に住して散ぜざるを云ふ。定は有漏、無漏、有心定、無心定に通ずる名なり。

【六二】羅睺羅(Rāhula)。釋尊の一子なる羅睺羅尊者のこと。

【六三】歡喜は、釋尊常隨の侍者阿難(Ānanda)のこと。

【六四】雙。底本に隻に作れども誤なるべし。

【六五】目連(Maudgalyāyana)は十大弟子中の神通第一。

【六六】舍利弗(Śāriputra)は十大弟子中智慧第一なり。

【六七】諸相好とは、三十二相八十種好等を云ふ。

【六八】力とは、十力のこと。一、是處非處力、二、業智力、三、定力、四、根力、五、欲力、六、性力、七、至處力、八、宿命力、九、天眼力、十、漏盡力の十を指す。

【六九】無畏とは、前に註せる四無畏のこと。四無畏と十力の關係は智度論第二十五卷を見よ。

【七〇】涅槃(Nirvāṇa)。寂滅不生、無爲、安樂、圓寂等と譯す。煩惱を滅し、生死を滅す

喜と爲し、王城を同じく迦毘羅と號す。最第一[六四]雙の世智者を、同じく、[六五]目連、[六六]舍利弗と目づく、世界を同じく名づけて娑婆と爲し、彼の佛俱に濁惡世に出で給ふ。我れ諸供を以つて人尊に奉り、菩提行を行ぜんと欲するが爲めに、諸の供養の具皆奉上せり、此の定を誦持せんと欲するが爲めに。勝行を發修して此の定を得たり、斯の定を得て行ずること無量種なり、一切の德行に安住すること、是の三昧を得るときは則ち難からず。諸味に著せず躁擾を離れ、世俗に涉らず嫉妬無く、大悲に安住して瞋恚を離るること、是の三昧を得るときは則ち難からず。俗に遠ざかり世利、邪命[に離ることを]怖れず、清淨にして煩惱なく、戒に於いて皎然にして所畏無きこと、是の三昧を得るときは則ち難からず。勇猛精進にして常に息まず、閑寂を愛樂して頭陀を行じ、無我妙法忍に安住すること、是の三昧を得るときは則ち難からず。善く心を調伏して戲論無く、威儀諸行等に安住し、捨施を樂行して慳悋無きこと、是の三昧を得るときは則ち難からず。如來所有の[六七]諸相好、及以十八不共法、[六八]力、[六九]無畏等も得ること難からず、能く此の定を受持するを以ての故に。佛眼所見の諸の衆生、假使一時に俱に成佛するも、彼の佛一一各の壽命、千萬億數にして難思劫なり。彼の佛各無量頭有り、猶し大海の諸の沙の數の如し、一頭に各無量の舌あり、其の數も亦た大海の沙[の數]の如し。彼の一一の舌各稱揚するも、定を持てる一偈の功德は、其の少分を說くも盡すこと能はず、何に況や書寫及び受持せんをや。若し定に順ずる頭陀の德あらば、天、修羅、鬼に愛護せられ、諸王等の爲めに常に順從せらる、難見の寂定を受持するが故なり。彼に無邊の無礙辯あり、無量百千經を宣說し、一切時に於いて常に斷ぜず、此の經聞持藏を以持のゆへに、若し彌陀佛、及び彼の安樂世界等を見ることを得んと欲せば、後の大怖畏惡世時において、應に

大千世界は一佛によつて敎化せらると云ふ。

【五三】阿鼻地獄。阿鼻(Avīci)無間と譯す、此の地獄に生を受けたる者は、間斷無く苦身に逼まるが故に無間地獄と云ふ。

【五四】是の時。以上梵品第一因緣品、(Nidāna.)
以下梵本第二沙羅樹王佛本生修行品、Sārendrarājapūrvayoga.

【五五】鐵圍とは、須彌山の周圍に七山八海ありて交互に是を取り圍む、最も外郭を取圍むを鐵圍山と云ふ。

【五六】劫(Kalpa)。分別時節、長時等と譯す。世親の法華論には五種の劫を擧げたり、曰く一に夜、二に晝、三に月、四に時、五に年、今は第四義を取りて往時と見るを佳とす。

【五七】娑羅樹王佛、(Sālendrarāja Buddha)。

【五八】三明とは、一に宿命明、自己並に他人の前世の宿命の事を明瞭に知ること、二に天眼明、自身他身の未來生のことを明かに知り、三に漏盡明、現世の苦相を知りて漏卽ち煩惱を斷盡する智を發得するなり。

【五九】六通とは、作用自在にして無礙なる六つの力用なり、

[54]是の時世界、[55]鐵圍の間の黑闇の衆生更に相ひ瞻覩し、咸各驚いて言はく、何ぞ『此に在りて斯の人輩あるや』と。爾の時世尊偈を說いて言はく、

我れ往[56]劫を念ふに六億佛いまし、　本生皆耆闍山に在り、　我れ過去に於いて道を求めし時、　彼の諸尊より此の定を聞けり。　時に彼の六億の最後佛、　世間の爲めに親しく光明となり、　號して[57]娑羅樹王佛と曰ふ、　我れ彼の尊に從つて是の定を問ふ。　我れ時に生れて刹[帝]利種に在り、　諸王中に於いて最も尊勝たりき、　子有りて五百數に滿ち、　一切諸の技能を具足せり。　我れ時に彼の無上尊の爲めに、　建立せし伽藍一億に滿つ、　純ら勝妙なる大栴檀を用てし、　糅ふるに金銀及び衆寶を以てせり。　我れ時に王と爲りしに人[民]に愛樂さる、　號して毘沙謨達王と曰へり、　佛の爲めに廣く諸の供養を設け、　萬八百億歲を滿足せり。　彼の時に最勝　兩　足尊、　號して娑羅樹王と曰へり、　其の七億六千年に於いて、　住壽世間道を弘め化し給ふ。　八十億の諸聲聞有りて、　[58]三明　[59]六通[を得]常に定に在り、　漏盡の最後身に住す、　是の如きの聖衆譏毀すべき無し。　我れ種種の勝供具を備へて、　諸の[60]惡趣を渡りし者を供養す、　諸の人天を利益せんと欲するが爲めなり、　是れ此の[61]三昧を求むるを以て。　我妻子と倶に出家して、　彼の佛の敎を持つこと與に比ぶるにものなし、　千四百萬億歲中に於いて、　我常に是の三昧を諮問し、　八萬那由偈もて稱讃せり、　異異の偈頌八億兆なりき、　彼の佛此を以つて他の爲めに說き給ふ、　惟だ此の定の一品を論ぜるのみなり。　頭目手足幷に妻子、　種種なる珍寶及び飮食、　一切財貨捨せざるなきは、　是の如きの三昧を求めんが爲めの故なり。　昔百億の諸如來、　復恒河沙數の佛有ること[を]憶念するに、　是等[の諸佛]皆耆闍山に住し、　是の如き勝寂定を宣說し給へり。　皆同じく釋迦の一名號にして、　佛子を同じく[62]羅睺羅と字づく、　給侍を同じく名づけて[63]歡

法理を忍可決定し體れること。

【四七】有漏。迷界の諸法は悉く煩惱の隨增する所なるが故に有漏と云ふ。漏とは煩惱のことなり。

【四八】優婆塞(Upāsaka)。淸信士、近事男、近善男と譯す。佛法僧の三寶に親しみ近づき五戒を持つものを指す。

【四九】阿那含(Anāgāmin)。不來、不還等と譯す、見惑を斷盡し思惑の九十一品中欲界の九品を斷じ盡して、再び欲界の人天に來生することなくして、遂に阿羅漢果を證すべきこと確定せるが故に不還と云ふ。

【五〇】優婆夷(Upāsikā)。淸信女、近事女、近善女等と譯す。三寶に歸依し五戒を持つ女人を云ふ。

【五一】斯陀含果(Sakadāgāmi-phala)。一來果と譯す。三界の見惑を斷じ、思惑九十一品の中にて欲界の九品の前六品のみを斷ぜるを以て、更に欲界の人と天とに一往來の生を受くべきが故に一來果の聖者と稱す。

【五二】三千大千世界。須彌山を中心とし鐵圍山を外郭とせるを一小世界となす、是を千箇寄せたるを中千世界と稱し、中千世界を千箇合せたるを三千大千世界と云ふ。此の三千

爲し、名づけて諸行威勢と爲し、名づけて莊嚴佛慧と爲し、名づけて諸の愛著を棄つと爲し、名づけて佛を悅ばすの長子なりと爲し、名づけて佛智を滿足すと爲し、名づけて[四三]辟支佛地に非ずと爲し、名づけて清淨心と爲し、名づけて清淨身と爲し、名づけて解脫を成就すと爲し、名づけて諸の雜欲無しと爲し、名づけて諸の雜恚無しと爲し、名づけて愚癡地に非ずと爲し、名づけて[四四]阿含智と爲し、名づけて能く諸術を起すと爲し、名づけて諸の無明を除くと爲し、名づけて解脫を滿足すと爲し、名づけて踊悅禪人と爲し、名づけて須見者眼と爲し、名づけて遊戲神通と爲し、名づけて能く神足を現ずと爲し、名づけて聞持陀羅尼と爲し、名づけて念持不忘と爲し、名づけて諸佛所加と爲し、名づけて導師方便と爲し、名づけて微細にして知り難く相應する者無しと名づけ、名づけて文字を捨すと爲し、名づけて深く義を知る智と爲し、名づけて知見者と爲し、名づけて分別智と爲し、名づけて不可言說智と爲し、名づけて能く非智を調ふと爲し、名づけて質直者智と爲し、名づけて少欲者智と爲し、名づけて攝持精進と爲し、名づけて能持不忘と爲し、名づけて能く諸苦を銷すと爲し、名づけて諸法無生と爲し、名づけて一言の演說能く所有生滅の[四五]諸趣を知らしむと爲す。是を一切法體性平等無戲論三昧と爲す。是の法門を說き給ひし時、會中に八十那由他の人天ありて、[四六]無生法忍を得、九十二那由他の人天、隨音聲忍を得、七十六那由他の人天順忍を得、六萬の人天、遠塵離垢して法眼淨を得、一千の比丘諸の[四七]有漏を盡して心解脫を得、二百五十の比丘尼、諸の有漏を盡して心解脫を得、五百の[四八]優婆塞、[四九]阿那含果を得、八百の[五〇]優婆夷[五一]斯陀含果を得たり。是の時に[五二]三千大千世界六種に震動せり、所謂、動、遍動、等遍動、踊、遍踊、等遍踊、起、遍起、等遍起、吼、遍吼、等遍吼、震、遍震、等遍震、覺、遍覺、等遍覺、東踊西沒、西踊東沒、南踊北沒、北踊南沒、中踊邊沒、邊踊中沒なり。法力を以ての故に欻然として未曾有の光を起す、[其の光]悉く能く幽冥邊遠を暉照し、乃、[五三]阿鼻地獄に至るまで大いに明かならざるなし。

今は宮本に依る。
【四二】十八不共法。獨り佛のみ具有して聲聞緣覺等の具せざる力用、一には諸佛身不失、二には口不失、三には念不失、四には無異想、五には無不定心、六には無不知已捨、七には欲無滅、八には精進無滅、九には念無滅、十には慧無滅、十一には解脫無滅、十二には解脫知見無滅、十三には一切身業隨智慧行、十四には一切口業隨智慧行、十五には一切意業隨智慧行、十六には智慧知過去世無礙、十七には智慧知未來世無礙、十八には智慧知現在世無礙なり。智度論第二十六卷を見よ。
【四三】辟支佛。舊譯に緣覺と云ひ、新譯に獨覺と言ふ。身無佛の世に出でゝ性寂靜を好み、師友の敎なくして獨悟するが故に獨覺と云ひ、又外飛花落葉を觀內に十二緣起支の理を觀じて開悟するが故に辟支佛又は緣覺と稱す。
【四四】阿含智。阿含(Āgama)は法歸、敎、無比法等と譯す。無比法無類の妙法を悟れる智を云ふ。
【四五】諸趣とは、五趣又は六趣のこと、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上なり、五趣の時は修羅を別開せず。
【四六】無生法忍。卽空無生の

の如き三昧を名づけて因と爲し、名づけて相應と爲し、名づけて教と爲し、名づけて門と爲し、名づけて道行と爲し、名づけて無礙と爲し、名づけて師導と爲し、名づけて行順忍と爲し、名づけて忍地と爲し、名づけて不忍を除去すと爲し、名づけて智地と爲し、名づけて無智を遠離すと爲し、名づけて智を建立すと爲し、名づけて方便地と爲し、名づけて菩薩遊行と爲し、名づけて勝丈夫に親近すと爲し、名づけて惡丈夫を遠離すと爲し、名づけて如來の說き給へる所の佛地と爲し、名づけて智者隨喜と爲し、名づけて愚者の所棄と爲し、名づけて聲聞知り難しと爲し、名づけて外道地に非ずと爲し、名づけて如來所攝と爲し、名づけて[三九]十力所知と爲し、名づけて諸天供養と爲し、名づけて梵王禮拜と爲し、名づけて帝釋後へに隨つて行くと爲し、名づけて龍神曲躬と爲し、名づけて夜叉隨喜と爲し、名づけて緊陀羅所讃と爲し、名づけて摩睺羅伽歎美と爲し、名づけて菩薩の所修と爲し、名づけて智者の所求と爲し、名づけて無上道を得る物と爲し、名づけて非財食施と爲し、名づけて諸の衆生の煩惱の病を除く藥と爲し、名づけて智藏と爲し、名づけて無盡の辯才と爲し、名づけて諸教を出生すと爲し、名づけて諸の痛苦を除くと爲し、名づけて三界を知ると爲し、名づけて渡筏と爲し、名づけて[四〇]四流を渡る船と爲し、名づけて名譽を出生すと爲し、名づけて如來を讃顯すと爲し、名づけて如來の利益と爲し、名づけて十力を光讃すと爲し、名づけて菩薩道德を出生すと爲し、名づけて慈恚怒を滅すと爲し、名づけて悲惱害を除くと爲し、名づけて心を歡喜し寂靜せしむと爲し、名づけて捨所悲人と爲し、名づけて穌息大乘人と爲し、名づけて能く師子吼すと爲し、名づけて一切法印と爲し、名づけて一切智を引導すと爲し、名づけて菩薩遊戲園苑と爲し、名づけて散壞魔軍と爲し、名づけて善逝[四一]衢街と爲し、名づけて諸の吉義を成ずと爲し、名づけて讐敵を防捍すと爲し、名づけて法を以つて怨を降すと爲し、名づけて眞實無畏と爲し、名づけて如實にして妄りに力を求めずと爲し、名づけて[四二]十八不共法の根本と爲し、名づけて莊嚴法身と

抖擻し、諸の滯著を離るゝに最も應はしき行なればなり。

【三五】諦とは、四諦のこと、苦集滅道の迷界悟界の因果の諦理を云ふ。

【三六】四無畏に二種あり、一は佛の四無畏一は菩薩の四無畏なり。佛の四無畏とは一には正等覺無畏、二には漏永盡無畏、三には說障法無畏、四には說出道無畏なり。菩薩の四無畏とは、一には總持不忘說法無畏、二には盡知法藥及知衆生根性心說法無畏、三には善能問答說法無畏、四には能斷物疑說法無畏なり。總じて佛菩薩共に他を教化して心に怯るゝ所なきを名づけて無畏と爲す。智度論第五、第四十八卷、俱舍論第二十七卷、大乘義章第十一卷等を參看せよ。

【三七】諸見とは、身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見等を云ふ。

【三八】陀羅尼(Dhāraṇī)。持、能持、能遮、總持等と譯す、能く善法を持ちて失はず、能く惡法を遮して起らざらしむる力用に名づくるなり。

【三九】十力。十力具足者のこと、茲にては佛を指す。

【四〇】四流。先の有流に同じ。註(一九)を參照せよ。

【四一】衢街。底本衢術に作る

衰に逢ふて感へず、三には稱められて而も悦ばず、四には譏られて而も憂えず、五には之を譽むるも增さず、六には之を毀るも減ぜず、七には苦ならず、八には樂ならず、九には在家に親しまず、十には僧衆に在らず。復十法あり、一には不恭敬を捨て、二には恭敬を行じ、三には禮儀具足し、四には無禮儀を捨て、五には俗家を汚さず、六には佛法を守護し、七には宴默少言、八には言行麁ならず、九には彼と言談して善能く方便し、十には諸怨を降伏するなり。復十法あり、一には善く時節を知り、二には諸の凡夫に於いて知想すべからず、三には諸の貧賤に於いて輕心を起さず、四には乞あらば卽ち施し、五には諸の貧者に於いて乞ふに任せて障へず、六には諸の破戒〔者〕に於いて嫌心を起さず、七には彼を救はんと念欲し、八には善く所作を知り九には正法を攝受し、十には財食を捨す。復十法あり、一には積聚することを營まず、二には持戒を讃歎し、三には犯戒を訶責し、四には持戒を敬奉して諂心あること無く、五には一切の所有を悉皆能く施し、六には誠心に勸請し、七には說の如く行じ、八には智人に承事し、九には諸法に於いて決定して深く修行を樂ひ、十には譬喩智を得るなり。復十法あり、一には前際に於いて方便あり、二には善を修するを首と爲し、三には諸の方便あり、四には諸相を斷除し、五には諸の想を棄捨し、六には善く事相を知り、七には能く諸經を演べ、八には諸の違順に於いて善く方便を得、九には[三五]諦〔理〕に於いて決定し、十には解脫を證するなり。復十法あり、一には言ふ所眞直なり。二には自性を顯はす智、三には言說疑無く、四には想を空に繫け、五には無相を修し、六には無願性を知り、七には[三六]四無畏を得、八には戒に於いて堅固なり、九には正具足に入り、十には智慧を得るなり。復十法あり、一には想を一緣に繫け、二には少結をも親しく知り、三には濁心を起さず、四には[三七]諸見を棄捨し、五には[三八]陀羅尼を得、六には智を得、七には明を得、八には安住、九には住持、十には正勤なり。童子よ、是を菩薩摩訶薩彼の諸法體性平等無戲論三昧に從つて、是の如き諸の功德利を成就すと名づく。童子よ、是

る生活法なり、比丘は乞食して衣食を得べきなれども、是の外の貿易、占相等を以て資を得るを邪命と云ふ。

〔二八〕 習氣とは、種子のこと、諸法一度び現行すれば、必ず同時俱時に將來其の法の生ずべき種子を第八識中に熏ず、茲にては煩惱の種子のこと。

〔二九〕 有流。有とは欲界・色界・無色界の三界の果報をさす、四種の惑にて有情を三界の生死海に漂溺せしむるが故に四流といふ、四流とは、見流・欲流・有流・無明流なり。

〔三〇〕 諸有とは、前に註せる三界のこと。

〔三一〕 諸諍とは、一切の煩惱のこと。

〔三二〕 三輪とは、佛の身口意の三業を云ふ。佛の神通輪は能く衆生をして正信を起さしめ、起心輪は佛の意業にして他の心行の差別を分別し、敎誡輪卽ち佛の口業は衆生を敎誡して解脫の正路に向はしむ。此の三、轉じて止まざれば輪と稱するなり。

〔三三〕 義。底本誼に作る、今は三本宮本による。

〔三四〕 頭陀(Dhūta)。抖擻、浣洗、抖捒等と譯す。頭陀の行者の守るべき十二種の條項あれども重に其の中の乞食を以つて頭陀行と云ふ、煩惱を

想分別せず、三には輕躁あること無し、四には不退相に住す、五には善法を出生す、六には惡法を厭離し、七には煩惱を行ぜず、八には學を捨てず、九には諸禪を分別し、十には一切衆生樂欲の智を得。復十法あり、一には善く生處を分別し、二には盡智を得、三には善く語言を知る智、四には俗緣を棄捨し、五には三界を厭離し、六には下心を起さず、七には諸法に著せず、八には正法を攝受し、九には正法を守護し、十には律方便を知る。復十法あり、一には、[三一]諸諍を滅し、二には相違せず、三には鬪訟せず、四には忍平等、五には得忍地、六には自ら忍を攝し、七には善く諸法を擇び、八には心具戒を樂ひ、九には方便を決定して問答を善くす、十には善く句義を分別する智なり。復十法あり、一には法に於いて方便智を出生し、二には善く義非義を知る出生智、三には前際智、四には後際智、五には現在智、六には三世平等智、七には善く[三二]三輪を解する智、八には心安住し、九には身安住し、十には善く威儀を護るなり。復十法あり、威儀を壞せず、二には威儀を分別し、三には威儀端雅、四には善く[三三]義を解說し、五には世智を得、六には施を好んで慳ならず、七には恒に施手を舒べ、八には常に施して絕えず、九には物として施さざるなく、十には慚あるなり。復十法あり、一には愧あり、二には惡心を棄捨し、三には[三四]頭陀を捨てず、四には信に於いて爽ふこと無く、五には常に喜行を行じ、六には所坐處を捨して諸の尊長に施し、七には憍慢を捨て、八には善く心を攝し、九には善く心相應を知り、十には善く心起るを知る。復十法あり、一には善く義を知る智、二には善く法を知る智、三には無智を遠離し、四には善く微細心に入り、五には心の自性を識り、八には善く詞無礙差別を得、九には義決定方便智を得、十には非義を棄捨するなり。復十法あり、一には善人に親近し、二には之れと同事し、三には其の敎を聽受し、四には惡人を遠離し、五には禪を修し通を起し、六には禪味に著せず、七には神通に遊戲し、八には世智を得、九には施設假名を遠離し、十には有爲を厭はず。復十法あり、一には利を得て忻ばず、二には

なるが故に斯く云ふ。

【一八】 阿蘭若(Araṇya)。空閑處、無諍聲、空寂、無諍等と譯す、人里を離れ空寂にして坐禪觀法に適したる地。

【一九】 有爲性とは、生滅變化爲作造作あるを云ふ、卽ち無爲に對する語なり。

【二〇】 三業淨とは、身・口・意の三業、卽ち身に於ては不殺生・不偸盜・不邪婬、口に於ては不惡口・不兩舌・不綺語・不妄語、意に於ては不貪欲・不瞋恚・不愚癡の十善業を守るを云ふ。

【二一】 阿耨多羅三藐三菩提(Anuttara-samyak-saṃbodhi)。無上正徧智、無上正遍道等と譯す、佛智のことなり。

【二二】 足下安平相とは、佛の三十二相中の第一なり。

【二三】 諸陰とは、新譯に五蘊と云ふ、色受想行識のこと。

【二四】 界とは、十八界のこと。次の註に言へる十二處に更に眼耳鼻舌身意の六識を加へたるを云ふ。

【二五】 諸入とは、入は新譯に處と云ふ。十二處を諸入といへるなり、眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根の六根と、色・聲・香・味・觸・法の六境を指す。

【二六】 修習。底本は修集に作る今は宋元明三本による。

【二七】 邪命とは、正しからざ

を除く、是の因緣を以て足下平かなり、故に足下に蓮花色を獲。彼能く獨り十方を顯はし、福德光明佛土に遍うして、既に寂滅地に登ることを得、無量の諸の衆生を調伏せん。

童子よ、菩薩摩訶薩は、一切衆生に於いて平等心、救護心、無礙心、無毒心を起して世間眼となり、三昧を證得す、名づけて諸法體性平等無戲論三昧と爲す。彼の三昧によつて十法を成就す。何をか十となすや。一には身戒、二には口戒、三には意戒、四には業淸淨、五には渡諸因緣、六には[二三]諸陰を悟解す、七には[二四]界平等を得、八には、[二五]諸入相を除き、九には諸愛を斷滅し、十には無生を證するなり。復十法あり、一には諸法性に入り、二には諸因を顯示し、三には果を壞せず、四には諸法を現見し、五には道を[二六]修習し、六には佛と俱生し、七には智慧明利、八には諸の衆生の樂欲の智に入り、九には法智を得、十には無礙辯智に入る。復十法あり、一には善く文字を知る智、二には已に諸事を渡り、三には音聲智を得、四には界に於いて平等、五には界平等を得て心踊悅を生じ、六には喜分を得、七には不曲心を得、八に威儀調伏、九には質直心を得、十には色瞋變無し。復十法あり、一には面常に怡悅、二には言詞和雅、三には恒に先づ慰問し、四には常に懈怠ならず、五には尊長を恭敬し、六には尊長を供養し、七には生處に知足し、八には善を修して厭くこと無く、九には[二七]邪命淸淨、十には阿蘭若に安住す。復十法あり、一には地地安住智、二には正念を忘れず、三には陰方便智を得、四には界方便智、五には入方便智、六には諸の神通を證し、七には諸の煩惱を滅し、八には[二八]習氣を斷除し、九には心常に勇猛、十には不淨觀に住す。復十法あり、一には犯方便を知り、二には諸の[二九]有流を滅し、三には諸の結使を斷じ、四には已に[三〇]諸有を渡り、五には善く宿命を識り、六には業果に於いて疑ひなく、七には法に於いて思惟し、八には多聞を求め、九には利智を得、十には調伏地を得るなり。復十法あり、一には持戒を恃まず、二には安

の主なり。

【二四】餘の增上福德の諸天。上の四天王以下八部衆を擧ぐるなり、八部衆とは一に天衆、欲界の六天、色界の四禪天、無色界の四空處天を云ふ。二阿修羅王、又非天とも云ふ因に在る時五常を行ずれども常に他に勝れんことをのみ欲するなり。三、龍王、天の宮殿を守り地に雨を注ぐ龍衆。四、夜叉、勇健と譯す、空を飛んで飛行し天の城池門閤等を守る鬼神なり。五、乾闥婆、香陰と譯す、酒肉を喫はず唯香のみを食となす樂神なり。六、緊陀羅、人非人と譯す、人に似て頭に角あるが故に人非人と云ふ、是亦た天の伎神なり。七、摩睺羅伽、大腹行と譯す、卽ち上の天龍に對して地龍なり、八、人非人は緊陀羅の譯語なること今記せるが如し、卽ち茲には迦樓羅（金翅鳥）を缺き人非人を重出せり。

【二五】月光童子。本經の對告衆なり。

【二六】大乘(Mahāyāna)の譯語、大とは小を簡ぶ語なり乘とは運載の義にして、卽ち諸佛大人の乘物の意、上乘、妙乘、勝乘等と云ふ皆意を取つて譯せるものなり。

【二七】釋種師子とは、釋迦牟尼如來を云ふ、釋迦種族の出

を以ての故に諮問し、眞實にして諂曲心有ること無し、餘に更に能く我れに證知せしむるものなし、唯是の人尊のみ照見し給ふ所なり。我れに廣大なる勝樂心有り、[一七]釋種師子我が行を知り、我が心語言の爲めの故にあらず、唯願はくば我が爲めに助道を說き給へ。何の法か能く諸佛を將ち來り、而も無邊智を增長することを得るや、一切法に於いて彼に到れる者よ、唯願はくば我が爲めに善く宣說し給へ。願はくば我が行を長養する法を說き、修して明利智を成ずることを得しめ、深心に戒を持ちて毀犯せず、一切の諸の怖畏を遠離せしめ給へ。云何が戒に於いて棄てず、云何が慧に於いて滅ぜず、云何が、[一八]阿蘭若に安住し、云何が智慧を增すことを得、云何が能く勝妙法に入り、樂んで禁戒を護りて悔恨無く、云何が戒に於いて缺けず、云何が能く[一九]有爲性を知り、云何が斯の[二〇]三業淨を得、染穢心無うして佛道に趣く。云何が能く身業淨を得、云何が能く口意の惡を除き、云何が雜染心を離るることを得るや、唯願はくば世尊問に隨つて說き給はんことを。

爾の時佛、月光童子に告げたまはく、菩薩摩訶薩若し一法と相應すれば、速かに[二一]阿耨多羅三藐三菩提を得、是の如き諸法悉く皆な剋く獲ん。云何が一法なりや。若し菩薩摩訶薩、衆生所に於いて、平等心、救護心、無礙心、無毒心を起す、是を一法相應となす、速かに阿耨多羅三藐三菩提を成じ能く是の如き功德の利を獲ん。爾の時世尊偈を說いて言はく、

若し是の一法を受持すること有らば、能く菩薩の正修行に順ぜん、此の一法の功德に因るが故に、速かに無上道を成ずることを得ん。一切處に於いて心無礙なるは、勇猛の菩薩の能く行ずる所なり、初より憎愛の想を起さず、是の如くなるときは則ち妙功德を獲。若し能く是の如く等心を修すれば、則ち平等の果を證することを得ん、是の如く法行俱に平等ならば、則ち[二二]足下安平相を得べし。平等を修して瞋心を離れ、能く一切煩惱の覆

云ふ。

【七】那由他(Nayuta)。十萬、又は數千萬と譯す。

【八】一生補處。佛に先だちて入滅し、次の生に佛位を紹ぎ、衆生化度の任に當る菩薩のこと。今は十方佛土の一生補處を擧ぐ。

【九】阿氏多菩薩。彌勒菩薩のこと。佛に先だちて入滅し兜率の內院に生じ、五十六億七千萬歲を經て人間に下生し、龍華樹の下に於て三會の說法を爲し一切の人天を化し了る。

【一〇】四天王。須彌の四方の半腹に各一山ありて四王ありて各分擔して一天下を護る、六欲天の第一にして帝釋天の外將なり。東は持國天王、南は增長天王、西は廣目天王、北は多聞天王なり。

【一一】釋天王とは、帝釋天王のこと。須彌山頂の喜見城に居を占め、三十三天の主なり。

【一二】娑婆世界(Saha)。忍土と譯す。其の土の衆生十惡に安じて出離することを肯ぜず故に所住の人に從つて世界の名となせるなり。悲華經には是の諸の衆生三毒及び諸の煩惱を忍受するが故に忍土と名づく云々と釋せり。即ち現に我等の住せる三千大千世界を云ふ。

【一三】大梵天王。色界初禪天

月燈三昧經

[一]高齊、天竺三藏、[二]那連提耶舍譯

卷の第一

是の如く我聞けり。一時、[三]婆伽婆、王舍城、[四]耆闍崛山に住し給ひ、[五]大比丘衆百千人と倶なりき。[六]菩薩八十[七]那由他、皆[八]一生補處なり、[九]阿氏多菩薩摩訶薩を[其の]上首となす。[一〇]四天王、[一一][帝]釋天王、[一二]娑婆世界主[一三]大梵天王、及び[一四]餘の增上福德の諸天、增上威勢の阿修羅王、龍王、夜叉、乾闥婆、緊陀羅摩睺羅伽、人非人等、前後に圍遶して如來を瞻仰し奉れり。時に此の衆中に菩薩あり。[一五]月光童子と名づく。已に過去に於いて諸佛を供養し、衆くの善根を殖え自ら宿命を識り、[一六]大乘を信樂し、大乘に安住し、大悲相應せり。坐より起ちて、偏に右の肩を袒ぬぎ、右膝を地に著けて佛に白して言さく、「世尊、我れ今佛に問ふ所有らんと欲す、惟願はくば聽許し、我が疑結を除き給へ」と。佛言はく、「童子よ、汝の所樂に隨つて、彼彼の問に於いて、當に汝が爲めに說いて歡喜を得しむべし、我れは一切智[者なり]一切知見[者なり]一切法に於いて有力無畏にして自在を得、無障礙解脫知見と相應せり、童子よ、如來は知らざる所無く、見ざる所無く、證せざる所無く、選擇せざる所無し、無量無邊世界を覺知せり、童子よ、諸佛世尊は彼彼の問に於いて悉く能く隨つて答へ、皆心をして喜ばしむ」と。爾の時童子偈を以て問ふて曰く、

諸佛は何等の行をか行じて、　能く世の爲めに親しく光明となり、　能く不可思議智を得給ひしや、
惟願はくば救護し之を解說し給へ。　何んの行によつて斯の說法上を得、　人中の牛
王天に敬奉さる、　不可稱量の最上智、　惟願はくば我が爲めに善く分別し給へ。　我れ深信

【一】高齊とは、北齊のこと、高氏鄴に都せしを以て此の名あり。
【二】那連提耶舍。開題を見よ。
【三】婆伽婆(Bhagavat)の音譯なり、自在、熾盛、端嚴、名稱、吉祥、尊貴の六義ありと云ふ、卽ち有德者に對する尊稱にして諸經中多く單に世尊と譯す。
【四】耆闍崛山。中印度摩揭陀國の王舍城の東北にあり。漢譯して靈鷲山、鷲頭山等と云ふ。是の山の頂鷲に似たるを以て此の名ありと言ひ、又鷲鳥棲むが故に此の名ありと云ふ。釋尊在世五十年多く此の山に居して廣く妙法を說かる。
【五】比丘(Bhikṣu)。乞士、勤息等と譯す。出家し具足戒を受けたる者を云ふ。上如來に從つて法を乞ひ以て心を練り。下俗人に就て食を乞ふて以つて身を資くるが故に乞士と名づくるなり。
【六】菩薩(Bodhisattva)。舊譯には大道心の衆生、道衆生等と譯し、新譯には大覺有情、覺有情等といふ。佛道を求め自利利他兼濟の行をなす大心の人なるが故に大道心の衆生、又は道衆生と云ひ、大覺を求むるが故に大覺有情と

に値遇せず、後佛道を修して成佛し釋迦牟尼如來となりし本生譚を擧げ、此の三昧を修する功德は、他の如何なる布施行にも勝ることを示せり。

[第十卷]　菩薩身戒を具足せば一切法に於て無礙智を得、三十二相、十力、十八不共法、三解脫門、三十七菩提法を得、又六神通を得て十二因緣の流轉還滅を如實に知る、又口戒淸淨、意戒淸淨の德を擧げ、次に諸聖典中より將し來れりと思惟さるる三百餘句を問答體を以て解說を與へ、終りに現前の衆生佛の如上の說法を蒙りて無上菩提心を發し、當來の衆生のために上福田たらんことを契ひて各々證果を得、佛、阿難に此の法門を付囑し給ふや、月光童子を始め諸菩薩衆等歡喜奉行せることを記して一經を結べり。

昭和五年十二月八日佛成道之聖辰

譯者　林　岱　雲　識

體性平等無戯論三昧を修して煩惱を斷除し、離垢無爲道を悟解するを眞の佛の供養なり。」と教示し給ふや、大力王其の教に從つて出家し、此の三昧に住し、生々世々惡道に墮せず、遂に諸法は如幻如夢なることを悟りて佛道を成じ智勇如來となり、無數の眷屬又王の化を受けて眞の布施を行じ、此の三昧に住して王の如く諸法の體性を悟解して佛と成れり、而も諸法の體性を知るは佛のみにして聲聞、緣覺の及ぶ所に非ざることを示せり。

[第三卷]　一切法の體性を如實に了知せば、無上菩提を證得し、最勝の功德を得ん、此の功德は設令劫火と雖も燒くこと能はず、一度び菩提を證する時は、一切法に於いて平等心を起し、諸の人天の爲めに恭敬せられ、無量の衆生を利益し、聞く者をして歡喜を生ぜしめ厭足あること無からしむることを得ん、然も後の末世に於ては、諸人此の法を輕ずれども月光童子ありて善く此の法を弘通せんと。

[第四卷]　月光童子佛に對して「幾何の法を成就すれば一切諸法體性平等無戯論三昧を得るや」と問へるに答へて、四法を成就せば此の三昧を得、而も此の三昧は今佛の始めて說く所に非ずして、過去無量の諸佛の讃歎し、修習せられたる所なることを示し、堅固力王の本生譚を引けり。

[第五卷]　此の三昧經典を受持し讀誦し、他の爲めに解說し、如實に修行せば四種の功德を得ることを示し、四種の功德の內容を詳說し、佛身は色身にあらずして法身なることを說き、次に七十餘法に就て四種法門を建立せり。

[第六卷]　一切の菩薩は不放逸にして六波羅蜜を學び行ず、各々の波羅蜜に十種の利益有ることを記し、六度の外の五種の法門に就ても各々十種の利益を擧げたり、此の卷の同本異譯たる先公譯は對告衆が文殊なるが故に、十種の利益に因みて文殊師利菩薩十事行經と名づけたるものなるべし。

[第七卷]　五分法身に取著せざるを菩薩の神通本業なりと說き、安穩德比丘、一切諸法體性平等無戯論三昧を樂求して右臂を燃して佛を供養せしに、其の臂光十方を遍照し、此の比丘の希有の神變を見て隨喜せしものは女は變じて男子と成る等の種々の現報の果を感ぜし本生譚を記せり。

[第八卷]　菩薩は是の三昧を樂求するが故に法施財施を行ず、而も菩薩の檀度には四種廻向あることを說き、其の實例として智意王女の本生譚幷びに勇健得王の本生譚を引用せり。

[第九卷]　前卷の後を受けて、勇健得王、善花月法師を殺せしことを懺悔し、堅く禁戒を持ち、法師を供養せしも、因果歷然として無量劫の間無間地獄に墮し、佛

忍を獲得すべきこと、三昧の諸功德を詳說せり、一切諸法の體性を說明して、

一切諸法は悉く無所有なり。一切法は幻化の如く、夢の如く、野馬の如く、響の如く、光影の如く、水中の月の如く、虛空性の如しと觀ずれば是を菩薩深忍に安住すと名づく……(是を)名づけて定(一切諸法體性平等無戲論三昧)と名づけ、調御丈夫と名づく。云々

等と云ひ諸法性と法身との關係を述べて

若し諸法性を知れば、猶し諸の影像の如く、總に色身を以て、眞佛を觀ることを得ず。諸法は無形相なり、狀を求むるに不可得なり、是の如き無形の法、卽ち是れ佛の法身なり。若し人法身を見ば、是を導師と名づく、法身は卽ち正覺なり、是の如きを見佛と名づく。

と云ひ、又、

是の菩薩摩訶薩は、色に非らず色に異ならずと知つて菩提を求め、色に非ず色に異ならずと知つて衆生を教化し、色に非ず色に異ならずと知つて如來を見る、但だ色を壞せずして如來を見る、色に異るに非ず、色性に異るに非ずして如來を見るなり、色と及び色性と及び如來とは等うして二有ること無し、若し能く是の如く諸法を見ば、是を法無礙を行ずと名づく。云々

等と言へるもの卽ち本經を貫く根本思想にして、右の引文によりて知らるゝ如く、人法二空の理を拆空觀によらず體空觀によつて說ける點は、天台の所謂方等部經典中に納めらるゝ所以なりとす。次に各卷の梗概を抄記せん。

[第一卷] 佛、王舍城耆闍崛山に於て、大比丘衆、菩薩衆、諸天八部衆中に於て、本經の對告衆たる月光童子の「佛は何が故に一切智々にして有力無畏、解脫智見を具し給へるや」と問へるに對して、佛は一切衆生に於て、平等心、救護心、無礙心、無毒心を起して世間眼となり、一切諸法體性平等無戲論三昧を成就せるが故に所問の果を得たることを答へ、此の三昧を得る者は、身口意の三業淸淨を得、無生の理を證得して解脫を得る等、二十種の十法の功德を成就すべきことを說きて、一切衆生亦た此の三昧を修すべく、一切の布施中、此の三昧を修するに勝るものなきことを說き給ふや、會中の衆各々果を得し、月光童子佛說を聽いて佛滅後、此の法を護持し布衍せんことを契ふ。

[第二卷] 過去久遠無量劫に聲德如來ありて、大力王の、佛に對して財施を行じ、未來生天の果を得るは無上なる布施行なりと思惟せるに對し、佛是に示して曰く、「財食施は佛を尊敬する究竟の供養にあらず、具足戒を持ち、諸の財寶珍寶及び王位を棄捨し、空閑處に住して一切諸法

し、故に本經の印度流傳に關しては的確なる事實を知るに由なし。

是を譯出年次より研究すれば第三經麗本後記の言へるが如く、第三經を後漢安世高譯なりとせば、安世高の譯業は開元錄によれば後漢桓帝建和二年（西紀一四八年）より靈帝建寧三年（西紀一七〇年）（東來年時に就て異說あり）に至る二十餘年なるが故に、三藏の安息國出發以前なる西紀一百年前後に第三經の成立を認むべきなれども、第三經は序分流通分を缺き、卒爾に「童子よ」云々と說きて對告衆の何人なるや明かならず、本文よりする時は經名の依つて來る所以をも知るべからず、是は恐らくは同名の大本より抄譯されしものか、或は本經より抄出されて別に流行し居りしものなるべきを以て、第三經の譯出年時は直ちに以て本經流行年時となすことを得ず。第二經の譯者先公は劉宋代の人なること歷代三寶紀以下諸錄の一致する所にして費長房は、

月燈三昧經一卷。右一經一卷宋世不ㇾ顯ㇾ年。未ㇾ詳ニ何帝譯一。群錄直註云沙門先公出。見ニ趙錄一。及法上錄亦載。

と記し、諸錄、就中趙錄、法上錄によつて宋世先公譯出なりとせり、劉宋は西紀四二〇年より、西紀四七九年に至る五十七年間なるが故に、玆に始めて的確なる年時を知ることを得。

本經の支那に傳譯さるゝに當りては、續高僧傳に記せるが如く、帝王の勅を奉じて、一世の碩德學匠擧て飜譯を助けしが故に、本經の譯文の頗る流麗なるは偶然のことに非らず、又流布に際して、彥琮の制序するありて一層流布の範圍の廣汎に亘りしこと想像に難からず、彼の月藏經の五箇の五百年の末法思想が後世永く教界の先達を强く刺戟し、人口に膾炙せるが如きは特異の例なりとするも、前記の如く本經が當時の教界に廣く傳播せしことは否むべからざる事實なるべし。然も本經は他の諸宗の正所依の聖典の如く盛んに讃歎されたることは認め難く、淨影・天台・嘉祥・慈恩・賢首等の諸家の撰著中に於て本經の名を見ること稀にして、義天錄・幷に傳教・弘法・慈覺・智證等の諸家の求法目錄、永超の東域傳燈目錄等を檢するも本經の章疏ありしことを記さず、續藏經中にも亦た一本の疏存するなし、以て後世流布の一般を推知すべし。

五、内容一汎

本經一部十卷麗本は品名を揭げず、宋元明三本幷に宮本は第九卷以後に數品名を擧げ、梵本は初頭より終りに至る間を因緣品以下四十品に分つ。佛金口自說の形式により長行重頌によるを常とし間孤起頌あり。所說の内容は一切諸法體性平等無戲論三昧を成就する加行、幷に此の三昧によつて諸法の體性を證し、無生法

て東來し盛に飜譯に從事し居りしを以て姓名類似せるが故に彼此混同して誤を生ぜしむのなるべし。

更に彥琮錄は大方等月藏經十卷、齊世那連提、法智等重譯と記し、月藏經に前後兩譯あることを記し居れども、他の諸錄是を認むるものなし、歷代三寶紀撰者費長房は那連提耶舍三藏の大方等日藏經十五卷、幷に力莊嚴三昧經三卷の譯出に際して自ら筆受の任に當りし事を自己の撰述中に明記し居るが故に、三藏の譯出聖典に關する記事は他の諸錄に比し最も權威あること多言を要せざる所なれども、彥琮亦學頗る廣く、勅を奉じて衆經目錄を撰し、梵語に精通し、三藏の諸譯經に制序し、又三藏の本傳の作者なるが故に、月藏經重譯に關する記事は一概に根據なしと斷ず可からず。

其の外譯場、年時、調卷、筆受者等に就て多少の相違無きに非らざれども、今は本經に關する直接の問題に非らざるが故に是を省略す。

尙一言附加すべきは、現に麗藏中に大集經十方菩薩品、那連提耶舍三藏譯として收錄され居れども、宋元明三本幷に宮本、聖本は共に是に名づくるに佛說五十校計經の名を以てし、後漢安世高譯となせり、前表に示すが如く諸經錄中一も那連提耶舍三藏に此の譯出あるを記さず、是は麗本の誤ならん。

四、本經の流傳

本經の內容は次項に記するが如く、一切諸法體性平等無戲論三昧を修し、二乘の果を覓めず、究竟の佛果に到達すべきことを極說せるものにして、維摩經に見るが如き小乘の聖者を彈斥せるが如き事實を記さず、又法華經に於けるが如き開會の思想無し、又如來藏思想、阿賴耶識思想等更に無く、佛身論に於ては法身應身の二身を說けども報身思想なく、龍樹の八不中道觀の思想の影響を受けたる跡無し、中心思想は金剛般若、維摩經等に類する點あり。思ふに是等の諸經典と同じく大乘經典初期に屬する成立なるべし。此の經の別名を入於大悲大方等大集說と言へるが如く、第十卷に諸經中より摘出せる名詞、幷に難解なる句に對して問答體を以て解釋をなし居れども、其の中に後世の發達せる諸大乘經典に見る如き諸思想無きは、自ら此の經典の成立年時の古きことを示すものと言ふべし。

龍樹の大智度論、十住毘婆沙論には幾多の大小乘經典を引用し、又訶梨跋摩の成實論にも頗る多くの聖典名を引用すれども、共に本經の名を見ず、然るに彼の唯識十大論師の隨一なる最勝子著瑜伽師地論釋には、月燈經の名見え、兩度に亘り引文をなし居れども三昧の字を缺き、其の引文本經に該當することを認め難

那連提耶舍譯出目錄

歴代三寶紀		法經錄		彥琮錄		靜泰錄		內典錄		開元錄	
菩薩見實三昧經	十四卷	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
月燈三昧經	十一卷	同	同	同	十卷	同	同	同	十卷	同	同
大悲經	五卷	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
施燈功德經	一卷	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
月藏經	十二卷	同	十卷	同	十卷	同	十卷	同	同	同	十卷
須彌藏經	二卷	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
法勝阿毘曇論	七卷	同	同	同	同	同	六卷	同	同	同	同
大方等日藏分	十五卷	／	／	同	同	同	同	同	同	同	同
大莊嚴法門經	二卷	／	／	／	／	同	同	同	同	同	同
德護長者經	二卷	／	／	同	同	同	同	同	同	同	同
大雲輪請雨經	二卷	／	／	同	同	同	同	同	同	同	同
百佛名經	一卷	／	／	同	同	同	同	同	同	同	同
力莊嚴三昧經	三卷	／	／	同	同	同	同	同	同	同	同
蓮華面經	二卷	／	／	同	同	同	同	同	同	同	同
牢固女經	一卷	／	／	同	同	同	同	同	同	同	同
大世三十論	一卷	／	／	大方等月藏經十卷重譯		／	／	／	／	／	／

（右表の斜線は缺失を示す、同は最上欄と同なるの意味なり、書名卷數二以上のものは一を上ぐるに止む。）

右表中歴代三寶紀は菩薩見實三昧經以下、法勝阿毘曇論に至る七部幷に大世三十論を齊代の譯出とし、其の他を隋代出となせり、其の中本經の譯出に關し、「天保八年天平寺に於て出す、法智傳語」と記して譯出年時場所等を明示し法經錄が、「齊天統年沙門耶舍法智と共に相州に於て譯す」と記せるを訂正す、爾後の諸錄皆是に倣ふに至れり。玆に注意すべきは、歴代三寶紀に彥琮錄以下の記さゞる大世三十論一卷を擧ぐる事實なり、麗本には書名の下に見唐內典錄の五字の夾註あるも、元明二本は竺本無此論の五字に作り、梵本に是を缺くことを指摘せるに徵し、是は三藏の支那に於ける撰述と見るを妥當と爲すに非ざるか。

次に彥琮錄は大莊嚴法門經二卷を崛多譯と爲し居れども、是は當時恰かも時を同うして摩訶陀國の三藏闍那耶舍の弟子闍那崛多幷に耶舍崛多の兩人、師に隨つ

今闕二此經一云々と稱して失譯缺本と斷定せり、然るに內典錄は、後漢の安世高に月燈三昧經一卷の有譯缺本を認むるに至り、夾註に「大月燈三昧經より出づ」と記し、出三藏記集幷に高僧傳が、安世高譯出部數を三十餘部と言へるを百七十餘部に增加し、理由を記し居れども右の夾註の誤れることは大經と第三經と比較せば一目にして知らるゝ所なりとす。恐らくは印度の地に那連提耶舍三藏譯の十卷本の原本の外に、此の經を含む同名經の大本ありしものなるべく、然らざれば、耶舍三藏の原本は現在四法品のみを存すれども、六法品なる第三經に相當する部分のみ、抄出されて別に流行せしものか。

尙ほ本經は梵本は Samādhirāja-pradīpa-sūtra の名を以て、西藏藏にては、Hphags-pa chos thams-cad kyi raṅ-bshin mñam-pa-ñid rnam-par-spros-pa tin-ṅe ḥdsin gyi rgyal-po shes-bya-ba theg-pa chen pohi mdo の名を以て現存す。

三、那連提耶舍の譯出に就て

本經の譯者那連提耶舍は譯して尊稱と云ふ、北天竺烏場國の人にして、出家の後名師を訪ねて聖教を學び、遍ねく佛陀の聖跡を拜し、意を決して北齊文宣帝天保七年（西紀五五六年）に鄴都に來る、時に年六十餘歲、帝篤く是を尊信し、勅して翻經に從事せしめ、昭玄大統沙門法上等二十餘人をして翻譯を監掌せしむ、即ち法智、萬天懿等傳語の任に當る、間もなく三藏を昭玄統となす、三藏帝より獲し所の資を以て慈惠の業を起し所有救濟の業に携はる、後戰亂に會ひしも孜々として聖業に倦むこと無く、隋の佛教を尊崇するに至るや、開皇の始め再び勅を奉じて大興善寺に住し翻譯に從ふ、昭玄統沙門曇延等三十餘人是を助く、爾來開皇九年（西紀五八九年）に至るまで約四十年間或は翻經に或は慈惠救濟の業に身を委ね、京師廣濟寺に於て百歲の長壽を全して奄然として逝けり。

（三藏の寂年に就いて、費長房は九十餘歲と記し、開元錄・續高僧傳等は百歲にて開元九年に寂せりと傳ふ。然るに三書共に東來時天保七年四十歲なりと記し居れども若し入滅時百歲なりしとせば、六十七歲ならざる可らず。今は彥琮撰三藏本傳を見ること能はざるが故に暫く推定說を揭げ後の研究に讓る。）

三藏の譯出聖典に關しては諸經錄必ずしも說を一にせず、法經錄は菩薩見實三昧經以下本經を含む七部五十卷を擧ぐ、是れ三藏の譯出が齊隋の二代に亘る中、但だ齊代の譯出を記すのみにして隋代に及ばず。然るに費長房は歷代三寶紀に本經以下十六部八十一卷を擧げ、彥琮撰衆經目錄は十五部八十七卷を、靜泰撰衆經目錄は十五部七十七卷を、內典錄、開元錄は略靜泰錄と同じ部數を揭げたり、次に是を圖示せん。

月燈三昧經解題

一、月燈三昧經の諸經

本經は費長房が其の撰、歷代三寶紀に、月燈三昧經十一卷、高齊那連提耶舍、天保八年（西紀五五七年）天平寺に於いて出す。と言へるもの即ち是なり。現存漢譯藏經中に三部の同名經あり、試に揭ぐれば左の如し。

一、月燈三昧經十卷　高齊　那連提耶舍譯
二、佛說月燈三昧經一卷　劉宋　先公譯
三、佛說月燈三昧經一卷　劉宋　先公譯

二、諸經の同異

右三本中に於いて完譯は那連提耶舍譯十卷本にして、第二經は十卷本即ち大本の第六卷（宋元明三本は大本を十一卷に分つが故に第七卷）に相當せるものにして、第三經は强いて大本に相似點を求むれば、第五卷に稍や說相、類するも、寧ろ別經と見るを穩當とすべし。卽ち第二經は、大本第六卷の本文に序分流通分を附して獨立せる一經の體裁を整へし同本異譯なること疑ふ餘地なし、大本の對告衆は月光童子なるも、第二經のそれは文殊菩薩となせるを相違となすのみ。卽ち第三經の後記に言へるが如く、第二經は法經錄以下諸錄の

月燈三昧經一卷（一名文殊師利菩薩十事行　一名逮慧三昧經先公譯）

と言へるものなり。而も後記が、開元錄に「大月燈經第七卷異譯」と言へるを批評し、古今分卷の相違か、或は七は六の寫誤なるべし云々と論ずれども、宋元明三本系なるときは大本第七卷に相當すること前記の如し。

次に第三經に就いて一言せば、此の經は、三界、諸行、乃至、道識等、九十餘法に就て、一經の終始六法の建立をなし、大本第五卷の後半稍其の趣を同ふすれども大本は言論、乃至陀羅尼門に至る七十三法に就て四種法門を建立し、全然內容を異にす。且つ第三經は獨り麗本にのみ存して宋元明三本に缺ける事實は、最も注意を要する所にして、後記に言へるが如く、後漢安世高の譯出せしものが、譯者名を失して永く世に現はれず、偶々發見されて麗藏に編入さるるに當り、內容を問はずして名を月燈三昧經と言ひ、而も一卷本なるの故を以つて先公譯なりと斷定されたるものを、後記を附して收錄せりとの說は當を得たるものなるべし。抑も僧祐が出三藏記集を撰するに際し、月燈三昧經一卷を失譯中に編入し、其の總に

詳二校群錄一名數已定並未レ見二其本一。

目次

經集部 一

林岱雲
平等通昭 譯

國譯一切經

大東出版社藏版